

赤い林檎を蹴飛ばした  
ら

d1199

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは「冬木市シスコン奮闘記」の続編です。

再投稿です、よろしくお願いします。



帰国旅費を稼ぐ為、オリ主「遠坂真也」が時計塔の依頼を受けて調査・解決するエピソードの様な話です。魔術ネタ、悪魔召喚ネタが多いです。

最初の依頼は魔術師と名乗る婦女暴行容疑者の調査。ルヴィアと共に現地に赴けば、

その容疑者は魂を喰われていた……。登場人物はグレイ、ルヴィア、エルメロイ2世、真也の4名です。凜とキャスターが後からやってきます。一部の月姫キャラが登場します。

【人物紹介＋3行あらすじ】があります。多少ですがネタバレを含みます。

#### ■ご注意

・これは「冬木市シスコン奮闘記」の続編です。

・当然の事ながらオリ話です。オリキャラも相応に出てきます。

・タイトルの林檎ですが、これは魔術媒体でもありますのでそれに掛けています。白雪姫とかエデンの知恵の実とか。蹴飛ばす↓サッカー↓玉を扱う者↓その玉が魔術媒体なら転がすのは魔術師だろ、みたいな。

#### ■前作のあらすじ

その冬木市は無数に広がる平行世界ひとつ。『聖杯が欲しい』と義理の妹である桜が言うので、オリ主蒼月真也は聖杯戦争に参加します。桜はブラコンですけれど士郎も好き、ところが士郎は凜が好き、それでは桜が困ると真也は凜に告白を……。最初は些細な綻びでした。その綻びは徐々に歪み、振れ、神秘を求める戦争は何時しか生死を賭けた愛憎劇に発展します。セイバー、桜、凜、士郎、真也たちが織りなす相関図は、昼ト

ラ真つ青の複雑怪奇（ドロドロ）。血反吐を吐いて、サーヴァント（大人）たちの協力のもと聖杯戦争は無事終結。桜共ども彼は遠坂家に養子入りしました。遠坂桜と遠坂真也の一丁上がりです。

その3年後、アイルランドを訪れ世話になったランサーへの挨拶を済ませます。その旅路は陸路。巡礼と言わんばかりの2年間でした。

「さて帰ろうか。けれどお金が無い」

彼は帰国路銀とお土産代を稼ぎに、仕事を求めて時計塔を訪れます。話はここから始まりです。

#### ■キーワード

独自解釈、ご都合主義、性格改変、捏造設定、演出優先、チート、ハーレム、原作崩壊、キャラ崩壊、キーワードは念のため、



十五話	反撃	863
十四話	再会	842
十三話	突入	823
十二話		793
十一話		756
十話		733
九話		715
八話		673
七話		635
六話		603
五話		571
四話		543
三話		502

エピソード	死者との別れ	899	882
-------	--------	-----	-----

プロローグ

プロローグ

《良い？ 皆は承認したけれど一人旅なんて私はまだ早すぎるって思ってる。いくらサーヴァントと張り合う存在でも、真也は「やり直して」まだ一歳なんだから。しかも陸路でアイルランドに行くなんて、酔狂を通り越してただの馬鹿だわ。計画・旅程に不満はあるけれどランサーは恩人で、なにより真也の熱意に折れたから渋々認めるの。でもこれだけは肝に銘じなさい。定期連絡は怠るな。ちゃんと一年で帰る事。予算の追加は認めない。家を頼るな。それともう一つ。勝手に死んだら今度は許さないから》

それは第五次聖杯戦争が終結した一年後の事。出発直前に義姉が彼に贈った言葉だった。新しい家の門で、新しい家族に見送られる中、彼女のみ家の中に居た。二階の窓から見える彼女に表情は無かった。行って来ますと、窓越しに一言告げて彼は出発した。彼女は最後まで厳しい姉という態度を貫き通したのである。ただ姿が見えなくなるまで、見えなくなっても氣遣われていた事だけは彼にも理解出来た。二人が十八歳の時の事であった。

それから二年経ち真也は二〇歳となっていた。彼が歩くのは英国の地方都市だ。ア

イルランドからロンドンへと石畳の道路がずっと続く。この国では道も家も石だ。石造りの家は、白い壁、煉瓦色の壁色々だが、重く締め切った物言わぬ感覚は変わらない。石の文明は木の文明と違って残りやすく、一般住宅でも平気で一〇〇年越しはざらにある。一世紀前に作られた建築物が身近にある感覚は日本人にはとても新鮮味に映るだろう。だが真也にとってそれは何処か懐かしさを感じる空気だった。

(そういうえば小さい頃ここに居たっけな)

真也にとつて英国は初めてではなかった。記憶を遡ればこの石造りの町並みがあったのである。四歳まで居たこの国は生まれ故郷でもあるのだ。従つて十六年ぶりの帰郷とも言えよう。

(なんでお袋は英国に居たんだか)

少し前に再会した母とは和解はしたものの、結局父親については聞けずじまいである。彼の記憶に父親のビジョンはないが、よく抱きかかえられた事だけは臍氣に覚えている。当時は眼鏡形状の魔眼封じがまだ無く、包帯形状の魔術礼装で代用していた為、世界の色などもろん見える筈がなかった。千歳はそれを外す事を許さず、相当難儀したが、生まれてからそうなのであれば、彼にとつて見える事がおかしかったのである。お陰で気配の察知はお手の物となったが、逆に目で物を見る能力を取り戻すのには相応の年月を要した。実のところ、義妹の姿をビジュアル的な意味で正しく視認したのは、



二人が出会つて3年後の事であつた。

「Chinc!」

突如罵り言葉と共に飛んできた物は小石である。英国では人種差別がそれなりにあるのだつた。ただ英国に限つた話ではなく、移民政策をとつてゐる欧州諸国はだいたい同じようなモノだろう。真也は右へ一歩ずれて、背後から飛んできた石を避けた。見る必要など無い、彼はそう言う人種なのだつた。石を投げた数名の子供たちの、息を呑む声がある。己の肩越しに見せる彼の表情は笑顔と憤りが混じつた、良く分からない表情だつた。

「Chincじゃないやい。日本人だい」

「NINJA?!」

「違いますよ」

呆然とする子供たちに振り返る事なく、ピースサインを見せると、彼はスタスタと立ち去つた。石を投げられた事など、早々に忘れてしまつたようだ。



そしてその町はあつた。ロンドンから西へ三〇キロ、ヒースロー空港が近くにあり、

テムズ川沿い。女王が居を構えるウインザー城を見る事が出来るその場所に時計塔はあった。ロンドン郊外に位置する中世と近代の入り混じった街、四〇を超える学生寮（カレッジ）と百を超える学術棟と、そこに住む人々を潤す商業で成り立つ巨大な学園都市である。

この都市は大きく分けて二つに区切られる。一つは立ち入り制限のない区域でスーパー・スポーツジム・ダイナー・カフェ・一般生徒寮などがある。つまり許可を受けた一般人が存在する。もう一つは魔術師のみが許される区域である。学術棟、大規模実験場、図書館、特別生徒寮、公園。そして極秘の地下施設を有していた。一言で例えるならその規模はTDLクラスである。

「（りやす）い」

右を向き左を向けば目新しいモノばかり。キョロキョロと目移り激しいその様は、殆どお上りさん状態であった。真也は大学どころか高校中退の身なのだ、無理もなからう。時計塔の生徒であろう若者のグループが真也の横を胡散臭そうに通り過ぎた。

「Hello w♪」

彼は手を掲げて陽気に挨拶したが無視された。

「世知辛いね」

黒い長袖シャツに、黒い長ズボン、黒いブーツ。そして赤い外套、彼の恰好は殆どコ

スプレに近い。普通の感覚を持つ人物であれば、警戒は免れない恰好である。派手すぎる事は真也も承知していたが、生憎と義理の姉に強く申しつけられているので何ともならなかった。注目を浴びても恥ずかしくない言動をしろ、という意味だ。

浴びせられる奇異の視線をもともせず、真也は正面ゲートに向かった。ここから先が管理区域、つまり魔術師のみに立ち入りが許される場所である。門は中世欧州の城にありがちな、バロック建築の門であったが、そちらは使われていなかった。ゲートはその隣りに設けられた関所のような出入り口である。石と魔術で構成されているとは言え、そのイメージは電車の改札口だ。門の上方にガーゴイルの象が侵入者を見張っていた。いざとなればガーディアンに変化するのである。

警備員であろう守衛室の男が真也を胡散臭そうな目で見ていた。その警備員もまた魔術師であった。真也はポケットからクレジットカードサイズのパス（礼装）を取り出した。それはかつて義姉から手渡されたものである。石の改札機に宛がいそれに魔力を通せば門が開く。つまり彼は時計塔に登録されている魔術師だと言う事だ。

何か言いたそうな警備員を尻目に門を通り過ぎれば広大な公園に出迎えられた。正面に見える建物は中世の寺院の様だ。公園を囲むようにして群生する木々の向こうには学術棟と思わしき建物や、巨大な塔も見えた。公園を中心に塔の反対方向には天文観測所と思わしきドームも見える。いずれの建築物も、中世ヨーロッパを彷彿させる、ゴ

シック建築だ。生徒たちが現代衣装でないならば、タイムスリップして仕舞ったと勘違いしてしまうだろう。あちらこちらには一本足のテールとチエアーが置いてあり生徒たちが談笑していた。広大な敷地を自転車で移動する生徒も見かけられた。もはやキャンパスなのか、町なのか分らない。彼の印象は次の一言に尽きる。

「スゲー」

だがそれらはあくまで付随物だ。至る所にある濃密な魔力の波動に背負うバックパックも肩からずれ落ちた。

「冬木も凄かったけれど、ここの歪み具合は半端じゃないな」

毎晩何があってもおかしくない、実際に起こっている、それが当たり前前の場所なのだった。



彼が求めるものは事務・庶務の窓口だ。時計塔は魔術師に仕事の斡旋を行っているのである。生徒は報奨金得て、尚且つ経験と実績を作る事が出来る。時計塔は些末な問題を片付ける事が出来る。Win—Winの関係だ。ただその依頼地が遠方であった場合、少々扱いが面倒となる。生徒が遠く離れた地に赴く事は難しい。その為外部の魔術

師にも斡旋しているのだった。

なのだがその窓口が見つからない。手近の赤煉瓦造りの建物に赴けば、"ore a dipiscin g"と書かれていた。鉱石学部という意味だ。ラテン語というのがいやらしい。降霊学部、呪詛、考古学……ここはどうかと手当たり次第に当たれば見当違い。その建築物はアクセスの良いところにある、彼はそう踏んだのだが見つからない。生憎とその学園都市に街頭地図などなかった。

「むう」

そうこうしていると一人の男性と対面した。三〇歳前後で細身。背は高く、長く黒い髪を流していた。スーツ姿であったが全身黒一色。正確に言うならば、ジャケットは焦げ茶色に近いトープカラーであったが、大して変わらないだろう。唯一首から下げるマフラーは赤だが、オックスブラッドカラー、つまりどす黒い赤だ。西洋では家畜の血を門口に塗って魔除けにしたが、その意味も込められていた。英国のクラシックスタイルはシックだが、幾ら何でも重苦し過ぎではないか、と真也は考えた。注目するべきはその表情である。眉を寄せ、終始何かに苛立っている様であった。細面のハンサム顔が勿体ない、真也はそんな事も考えた。丁度良い、道を聞こうと話しかければ、その人物は一瞥を投げたのみで無言で通り過ぎた。真也の掲げた手のひらが虚しさを物語る。作った笑顔も、歪に痙攣する。

「ど、どいつもこいつも。礼節がなっていない……」

その人物はロードエルメロイ二世。言わずと知れた現代魔術論のロードである。彼は立場上、三年前の第五次聖杯戦争の事を知っていた。つまりは真也を知っているのである。だが真也は彼を知らない。エルメロイが関わるまいと決めたならば自然、二人はすれ違うのみである。

建前上、人種差別はない時計塔だが日本人は別だった。贗作だろうと聖杯が有ると言うだけで、でかい顔をしている連中、というのが時計塔に住まう者の共通認識である。なぜ極東の島国に赴かねばならぬのか、欧州を拠点とする名門も悉く、苦渋を味わってきた事も一因である。三年前に破壊されたのだが、一度付いたイメージの払拭は難しい。

彼は東洋人らしからぬ容貌なのだが、それでも赤い外套など目立ちすぎた。バックバックなど背負っているのは見るからに余所者である。加えて同年代、生徒によつては歳下になるだろう。従つて。生徒に因縁を付けられたところでやむを得ないのである。

「やあ君。さつきから見てるけど、難儀してるじゃないか」

その声の主は若い学生だった。青い髪は天然パーマ。歳は若く、真也は同い年だろうと察しを付けた。三名の女学生を侍らせて、人を見下し、嘲笑めいた態度が気になったが、わざわざ腹を立てる事も無い。そう真也は気にも止めなかった。やっかいなのは、

親切そうな悪人である。二年の旅で散々煮え湯を飲まされた真也にとつて、目の前の少年は随分と素直に見えたのだつた。ただ優越感に浸りたい。ただ権力を誇示したいとは随分と可愛らしい。もちろん、この境地に到達する為に、散々尻を叩かれた事は言うまでも無い。もちろんランサーの幻に、である。だもので真也は慇懃へいんぎん〜に申し出た。

「ええ。実はそうなんですよ。仕事の斡旋窓口を探しているんです。教えて頂けると助かるのですが」

「へえ。外の魔術師の割には身の程を弁えているじゃないか。追いだしてやろうと思つたけれど、気が変わった。見ての通り女の子には困つてないんだけどさ、荷物を持たせる訳にはいかないだろう？ 俺の小間使いになるなら、骨を折つてやつても良いぜ。もちろん、期間限定で良い」

さて困つた。前の家名であれば散々へりくだり、用が済んでしまえば、無視して立ち去る事も出来た。だが今の家名は例え一瞬であろうとも、そう言う事が出来ないのである。命が掛かっているなら話は別だが、そういう状況でもない。よつて彼はスタスタと立ち去つた。つまりは無視だ。

「待てよ！ 話は終わつてない！」

「付き合う義理はありませんので」

「待てて言ってるだろー！」

渋々振り向けば、怒り出す寸前の体である。ただ辛うじて笑みのようなモノは浮かべていた。その男子生徒は自分の襟を摘み、強調させる。いやらしい手つきであった。「この恰好を見て分らないのか？ 俺は上級生として罰則を与える権限を持っているんだぜ？」

その同い年であろう男子生徒は赤いチョッキとグレーのスラックスを穿いていた。真也は少しうんざりしこう告げた。

「その権限を持つ者は『監督生』で、金のボタンがついたグレーのチョッキとグレーのスラックスを纏う。でも君は赤いチョッキとグレーのスラックスだ。つまり君は生徒会役員の『ポップ』でしょ？」

「よ、よく知ってるじゃないか」

臍（へすね）を突かれ、引きつっていた。真也は義姉から聞いていたのだった。

「ポップでも監督生でも良いけれど、そもそも俺は生徒じゃない。優越感に浸りたいなら、余所を当たったってくれ」

「外部の魔術師が対等だとも思っているのか！」

「君たちが時計塔というステータスを持っている事は知っている。ある程度は尊重もしよう。けれど、そういう態度なら『王の生徒』だろうと『監督生』だろうと『ポップ』」



だろうと、従う義理はないね」

真也が多少威圧を籠めて見下ろせば、その男子生徒も引つ込みが付かなくなった。「いいぞ。そこまで言うなら覚悟はあるんだろう？ お前の魔術の腕前試してやるよ」

その男子学生の首筋にある魔術刻印が唸り始めれば、付き添いの少女たちは小さく悲鳴を上げると、慌てて退いた。

「公衆の面前でか」

「知らないようだから教えてやるよ。本質的において俺ら魔術師は極める為なら、己の命すら省みない存在なんだぜ？ なら血なまぐさくて当然だろ？ ここはそんな俺らが集まる時計塔だ。こういういざこざは良くある。けどまあ手加減はしてやるから、安心しろよ」

気がつけば時計塔の学生と外部の魔術師の決闘だと野次馬が集まっていた。血なまぐさい見世物はどこでも人気なのだ、真也は溜息を付くばかりなり。



その男子学生の属性は水だった。空気中の水分が男子学生の回りを走り出したのである。水の刃を持って、切り裂くか、貫くか、或いは気化させて熱を奪う。現象は幾ら

か考えられたが、目の前の男子学生は態度に見合う相応な腕を持つているらしい。真也は躊躇いを籠めて髪をかき上げると、覚悟を決めて背負っていた荷物を足下に置いた。向き直り、こう告げた。

「俺は不出来だがこれでも家名を背負ってるんだ。そこまで言うなら受けて立つ。けれど、よく考えろよ。大口叩いて大負けしたら、失脚だ」

「その余裕ぶつた顔、切り刻んでやる」

一触即発の緊張を破つた声があつた。

「そこまでだ」

野次馬を割つて現れたのはエルメロイだった。騒ぎを聞きつけ戻ってきたのである。最高潮の怒りに水を差されたとその男子学生は、憤りを隠さない。

「現代魔術論学部のロード様が何か様でしょうか？ 俺は動物学部の生徒ですよ？」

「その発言は若気の至りと見逃そう。だが二度目は反逆罪を覚悟する事だ」

敵かな物言いに、その男子学生は嫌みつたらしく舌打ちすると立ち去つた。エルメロイが一瞥を投げると、野次馬達は一齐に散つていった。まきぞいを喰らつてはたまらない、と言う事だ。そして彼は真也を見据えれば、一步一步静かに歩み寄る。

「時計塔の名譽の為に言つておく。確かに決闘紛いの事はままにあるが、それは真理を得る為に必要な場合にのみ、罰則を前提に認められるケースがあると言う事だ。今のよ

うに虚栄心を満たす場合は、それに当たらない」

「理解していません」

「結構だ。なら早々に立ち去ると良い」

「旅費とお土産代を稼ぎに来ました」

「騒動は御免だと言っている」

「仕事の斡旋を受けに来たんです。それもまた時計塔のシステムとして成り立つものです」

エルメロイは葉巻を取り出すと火をつけた。彼は周囲に人が居ない事を確認すると、幾分声のトーンを落としてこう告げた。

「君は立場が分っているのか。第五次聖杯戦争に関わった魔術師は時計塔では厄介事だ。タブーと言っても良い」

「知る者は殆ど居ない筈です」

「確かにそうだが噂は尽きない。その当事者が時計塔に存在するだけで争い事のタネとなる。治める者としてそれは看過出来ない。旅費を貸そう、それで手を打て」

「申し出はありがたいのですがお受け出来ません。借金はならぬと義姉に厳命されています故」

彼はふと義理の姉の姿を思い出した。あれから二年たったのだ。さぞ美しくなった

だろう、そんな事を考えた。

(もう二〇歳だ。流石にあの髪型(ヘツーサイドアップ)は変えたか?)

想いを馳せる真也に対し、エルメロイは深々と煙を吐いた。それは溜息に他ならない。その煙も苛立ちを示すように、わだかまっていた。

「君はトオサカⅡシンヤだったな」

「はい」

「君について聞かない、聞いてはならない事になっている。例え君が魔眼殺しを付けている事実を時計塔に隠していたとしてもな」

「お気遣い感謝します」

「だがこれは確認する必要がある。何故時計塔に来た。招かれざるとは思わなかったのか」

「実は、」

かくかくしかじか丸々。真也の説明を聞いたエルメロイは呆れを隠さない。

「世話になったサーヴァントへの挨拶のためアイルランドか。随分と熱を入れたものだ。ヒッチハイクで地球を半周とは」

「かく言う自分でも驚いています」

「男か、女か」

「男です。師でもあり戦友でもありました。樂をして会つてはならない、そう考えまして」

「君はその人物の有り様に感銘を受けた、と言う訳だな」

「いえ、説教されただけです。言いたいだけ言つて、見返す機会も与えず、去つて行つた腹の立つ英霊でした。もうそれが叶わないなら、無事終わつたと、せめて文句を言に行かないと、そう思いました」

エルメロイの表情が緩んだ。真也の意見に共感してしまつたのだ。彼もまた、同じだつた為である。彼の脳裏に豪快な騎兵の姿が克明に蘇れば、彼は葉巻を一つ吹かすと、こう告げた。

「来たまえ。私が旅費を稼ぐまでの身元引受人となろう」

一転、融和な態度に戸惑いつつも真也は従う事にした。この人物の親切は本物だと、経験上そう感じ取つたのだつた。



エルメロイに連れてこられたその部屋は、現代魔術論学部学術棟の最上階にある、彼のオフィスだった。びっしりと詰まつた本棚が並んでいるが、それでも尚その部屋は広

かった。彼が向かう執務机は、教皇か或いは王が使いそうなウオールナット製の重厚な物だったが、広い部屋に、ぼつねんと置かれれば、どことなく滑稽さを感じさせた。

真也は胸を張り、足は肩幅に開き、組んだ両手は腰に添え、姿勢正しくエルメロイに向かった。彼はその机に両肘を置き、鼻先に組んだ拳を軽く宛がっていた。俗に言う司令官〈碓ゲンドウ〉のポーズである。彼は厳かに目の前の少年に告げた。

「私には金を贈呈する義務はない」

「そうでしよう」

「だから私が仕事の都合を付けよう」

しづしづの物言いだ。

「ありがとうございます」

「だが勘違いをするな。彷徨へうろつゝかれると困るだけだ」

「感謝感激です」

「君は外部の魔術師だが、君の身元は保証されている。これの意味は分るな？」

「十分に」

「だから私は君の保証人を引き受ける。君の振るまい如何によつて私だけでなく君の家にも迷惑が掛かる。ゆめゆめ忘れない事だ」

「はい」

「ここに宿泊先と連絡先を書いてくれ」

彼はわら半紙と万年人を差し出した。真也はあつけらかんところ言った。

「まだありません」

沈黙が訪れた。そしてエルメロイは目頭を押さえた。頭が痛い、と言っていた。どれ程この人物は手間を掛けるのか、とも語っている。

「何処に泊まるつもりだ」

「これから探します」

「あと二時間で本日の業務が終わる。隣部屋で待っている」

「都合を付けて頂けると?」

「温和しく待てないなら即刻追い出す」

「恩を仇で返す様な真似は致しません。いやもう、何から何まで、なんとお礼を言つて良

いのやら」

「宿泊費と迷惑料は報酬金から手数料として引かせて貰う、感謝する必要は無いな」

「感激のあまり泣いてしまいそうです」

エルメロイは机の上の電話のボタンを押すところ言った。

「レディ、済まないが来てくれないか。二時間ほど君の時間を貸して欲しい」



真也はエルメロイ教室に所属する生徒たちの研究室に居た。ありふれた長方形の部屋で扉を開けるとパーティッションと、応接用のソファーとローテーブルに出迎えられる。パーティッションの向こうが、生徒たちの研究区画だ。真也はその手前のソファーに腰掛けていた。

「……どうぞで」

「ありがとうございます」

彼に紅茶を差し出したのは「グレイ」という名の少女だった。ロードエルメロイの内弟子というその少女は、師匠によく似てとてもシックな装いだっただ。ファアの付いたシヨートコートは黒、タートルネックのニットも黒、チエツクのプリーツスカートはアツシユグレイ、だがニーソックスも黒、ブーツも黒だ。シックといえば聞こえは良いが、この様に徹底されると喪服といったも過言では無かろうに、彼はそんな事を考えた。加えてフードを目深に被り、表情が伺えない。長い沈黙に、いたたまれなくなつた真也は話しかけてみた。

「グレイさんはもう長いんですか？」

何年弟子をしているのか、と言う意味である。



「……」

彼女は俯いたままである。人見知りが激しいのか、それとも警戒しているのか、彼は良く分からない。

「(イ)出身はどこらっ？」

「……」

取り付く島がない。気まずい空気を誤魔化すように、彼はずっと紅茶を啜った。義姉のイメージカラーはルビーレッド、義妹のイメージカラーはパールピンク、色々な意味で色が違えば、諸々の差が大きすぎ、接し方が分からない。

「……俺、ドーナッツが好きなんですけれど、近くに店とか知りませんか？」

「……」

(だめか)

落胆を飲込もうと、ティーカップを近づければ。

「CrossTownという店が近くにありますが」

真也は意思疎通が図れたと内心ガッツポーズ。しつとりとした声に喜びも2倍だ。

「俺はオールドフアッシュンとかシンプルな奴が好きなんです、グレイさんは？」

「Rocky Roadという賑やかなのが好きです。中に入ったラズベリージャムが秀逸なんです」

魔術に関わらない適当な話、それは概ね真也の旅の話であったが、グレイは反応が鈍くも興味深そうに聞いていた。そうこうしている間に、何名かの生徒たちが現れた。ある生徒は胡散臭そうに真也を見るのみである。またある生徒はグレイに説明を求めた。そして、ある生徒は真也を称賛した。真也が決闘紛いをした男子生徒と、対立している生徒だった。噂を聞きつけたのである。そして最後に現れた少年は礼儀正しかった。

「ジヨナサン＝スコットです」

プラチナブロンドの髪で赤と碧のオッドアイ。真也の一つ上の二一歳。男にしては背が低めで、華奢。ベイビーフェイスと相まって幼く見える。美少年、とはかくあるべきなのだろう、真也はそんな事を考えた。デニムパンツに襟付シャツ、そしてツイードジャケットを纏い、大人っぽさを演出しているのだろうが、ちぐはぐさを感じさせては台無しだろう。真也が丁寧な挨拶を返すと、彼もまた丁寧な挨拶で部屋の奥に引っ込んでいった。良いところのお坊ちゃんなのだと思つた。暫く話しているとグレイはこんな事を言い出した。少々だが、緊張が解けたらしく、それは個人的な事であつた。

「トオサカさんの出身はどちらですか？」

「出身国でしたら英国ですが、何処が故郷かと聞かれれば日本です」

「日本人ですか？」

「はい」

心の中で恐らくと付け加えた。その国名と民族名を聞いたグレイは、思わず部屋の時計を視た。

「トオサカさん、少し席を移動しましょう」

グレイのその表情を表現するならば懸念に尽きる。

「構いませんが、何故です」

「日本嫌いの方が居ますので念のためです。一階のロビーに移りましょう」

グレイの意外な強引さに戸惑いつつも、また騒ぎを起こすのもエルメロイに義理が立たない。彼女に従うまま、廊下へと続く扉を開けると、その日本嫌いの人物が立っていた。何の因果か鉢合わせである。真也が視線を下げると、こんじきの髪があった。琥珀の瞳もあつた。鼻、唇、顎、希に見る非常に整つた顔立ちだったが、目尻眉尻鋭く、意志の強さを感じさせた。纏うドレスはロイヤルブルー。立ち振る舞いも、力強さと優雅さと気品さを感じさせた。誰かの息を呑む音が聞こえた。その誰かとはグレイの物であり、何故こうも間が悪いのか、と嘆くかのようにもあつた。その人物こそエルメロイ教室の名物生徒、ルヴィアゼリツターエーデルフェルト、その人であつた。真也見上げるルヴィアの瞳は、宝石のように輝いていたが、とても鋭利であつた。これはまた滅法な美人さんだ、彼はそう思ったが、生憎と美人に慣れていた。

（ライダーより下、キャスターより下、桜より下は決まっている。葵さんもそう、凜には

敵うべくもないな、うん)

サーヴァントを除き、尚且つ客観的に評価するならば、遠坂の女性陣よりルヴィアの方が上であろう。それを認めなかったのは身内びいきである。もちろん口になど出さなかつた。一瞬の邂逅。ルヴィアの言葉と、彼が身を引いたのは同時であつた。

「退いて下さらない?」

「失敬。どうぞ」

高級ホテルのボウイのような真也の促しに、颯爽と美しさを流すルヴィアは、どうしたとか彼の目の前でピタリと足を止めた。腕を組み、ジロリと睨み上げた。彼女は真也の真紅の外套が気に入らなかつたのである。あの苛立たい女と同じ色だ。これが私だと言わんばかりの、忌々しい赤。それは彼女の尊厳をいたく揺さぶつたのである。よつてその言葉が刺々しくとも無理はない。

「部外者が何用かしら」

「私は確かに部外者ですが、ロードIIエルメロイ二世に許可を頂いています」

傍に立つグレイをみれば、彼女は無言で肯定した。だがルヴィアの態度はそれがどうしたと言わんばかりであつた。

「ここは私の所属する教室です、騒動を起こされては堪りませんわ。早々に立ち去りなさい。無法者など冗談ではありませんから」

ルヴィアは真也の容貌から、決闘騒ぎの片棒だと察しを付けたのである。

「その様です。ミス・グレイの忠告に従って撤退するとします。失礼」

真也はバックパックを担ぎ上げると、彼女の目の前を堂々と通り過ぎた。だがどういふ事だろう。彼の背に投げた彼女の声は一転、鈴の音の様だった

「貴方のお名前は？」

「お嬢様がお気に掛ける存在ではありませんから」

「それは私が決めます。名乗りなさい」

実際の所、ルヴィアに興味など無かった。ただ尊大な物言いをしたにも関わらず、目の前の人物は礼儀を徹した。名前ぐらい聞いてやろう、そう思ったのである。だが当の真也はそれどころではなかった。エルメロイにあそこまで突つかかれた事実を垣間見るに、家名を出して良いのか非常に躊躇った。誤魔化せば後々問題になるかもしれない、だが誤魔化す方がここでは賢明だ。だがしかし、結局彼は名を告げる事にした。そもそも誤魔化す理由など、やましい事は無いのだ。第一その様な真似をすれば義理の姉に怒られる。その為の真紅の外套だ。一拍。彼は振り返り、ルヴィアを見据え、こう告げた。

「トオサカ シンヤです」

そう彼は言ってしまったのだった。

「ト・オ・サ・カ？」

案の定、その端正な顔に影が差した。

「なにか、ご不満な点でも？」

「あのトオサカですか？」

「どのトオサカを仰っているか存じませんが、同じ家名は人の数だけあるでしょう」

「トオサカ||リンとはどのような関係かしら」

退路は断たれた。重い唇から紡がれた真世の言葉は、始まりの呪文となったのである。

「……姉です」

空気の変わる音がした。地雷を踏んだ音かもしれないし、逆鱗に触れた音かもしれない。どちらでも構わないが、日本にいてであろう義理の姉は、目の前のお嬢様に一体何をしたのか、彼はそう恨み言を言いたくなった。

## 依頼その一　リバプール編

## 一話

「呼び出しておいて待たせるとは何事か、そうは思いませんか、スコットさん」

真也が腰掛けるのはエルメロイ教室の、既に慣れたソファである。エルメロイより仕事の紹介だと意気込んでくれば、出鼻をくじかれたのであった。既にかれこれ一時間待ちぼうけである。手に持つティーカップの水面は、隠す苛立ちが漏れ出すように波立っていた。彼の真正面に座るジョナサンはぶーたれる真也を宥めるのみだ。

「しがらみですよ。第四階位にしてロードとなった師匠は、方々から突き上げられていますから」

真也は目の前の、愛想の良い一歳上の青年をちらと一瞥した。ジョナサンはスコット。エルメロイ教室に所属する生徒の一人で、礼儀正しく人当たりが良い。二一歳という年齢にもかかわらず、十代半ばに見える容姿、神細工見まごうばかりの整った顔立ち、小鳥のような澄んだ声、一人で歩けば補導される事もしばしばだ。

（オッドアイの美少年か。実は女の子だった展開、本当に男だった展開で、意見が分かれるだろうけど）

真也はごくりと紅茶を飲んだ。

「それなんてラノベ？」

「ラノ？」

「こちらの話です。気にしないで下さい」

「はあ」

彼を称するならば、良い人に尽きる。ただ真也は良く分からない。『違いのようなモノ』をジョナサンに感じていた。それはとても弱く警戒するべきモノなのかどうか分からない。だがよくよく考えてみれば、魔術師など大なり小なり皆おなじだ。士郎と同じように特異な魔術師なのだろう、彼はそう考える事にした。

（人柄が良い、か。教授も見習えば良いのに）

真也はエルメロイを教授と呼ぶ事にしたのである。ジョナサンはコーヒーを啜りつつも仏頂面の真也に愛想笑いをむけつつ、世間話をする事にした。実に甲斐甲斐しい。時計塔ではお嫁さんにしたいたい男の子投票第一位だ。男女ともにである。

（二二歳でお嫁さん扱いの、男の子呼ばわりか。スコットさんも大変だな）

「ところでトオサカさん。師匠の家は凄いでしょ」

真也はエルメロイの自宅に居候しているのであった。もちろん家賃の支払いはこれからの予定。その家賃とはこれから稼ぐ予定。予定、予定、実にさもしいものである。



借金では無いが、彼の義姉に知らなければいい顔はしないだろう。知られた状況を想像した真也は思わず苦虫を噛んだ顔。だものでその声はどことなく、おどおどしていた。

「生徒の皆さんは知ってるようですね」

「有名ですから。師匠は清貧のロードと揶揄されています」

エルメロイの家は一〇〇年越しの集合住宅で、壁を這う鳶は哀愁を感じさせる程に伸びまくり、壁面の煉瓦を走る亀裂は悲壮そのものだ。実際の築年数以上に古さを感じさせた。更に酷いのが部屋である。コストを最優先に作られたその生活空間は相応の年期を経た状態となっていた。端的に言うところポロイ。上に立つ者は、手本、羨望、憧れ、といった物が必要になる。それが無ければただの雇われ上司だ。豪邸に住めば良いというものでも無いが、最低限の体裁は必要だろうに、真也はそんな事を考えた。もつとも、それで回っているのだから、人望によるものというより他は無い。

もつとも。その人望を持つ人は気難しいから世の中は不思議だ。寝床を作るために、簡単な後片付けをしたら勝手に動かすなど怒られたのは先日の事である。どう見ても、整理整頓・維持管理などどこ吹く風の、適当に積み上げた書籍の山であったというのに、まったくもって理不尽だ。それを思い出した、真也は一層ふてくされた。

「古さよりは散らかり具合の方が驚きです」

その真也の発言にジョンナサンは乾いた笑いを見せた。何分彼の師匠の事である、発言

には注意しなければならぬのだ。

「寝るところはありましたか？」

「ご心配なく。俺は何処でも寝られますから」

良く分からないという表情のジヨナサンに真也はこう繋げた。

「雨風を凌げる屋根と壁があれば、それだけで十分です」

「そういえば旅行をされていたとか」

「ええ、俗に言うバックパッカーって奴です」

「それは凄い。私はキャンプすらした事が無くて」

「そんなお上品じゃないですよ。野宿って奴です。地べたに寝たり、木の上に寝たり。

義姉が予算を絞ったので、地理的お財布的に問題がある場合、よくしていました」

「その、大丈夫だったのですか？ 保安や健康的に」

「もちろん、慣れるまでは大変でしたよ。相応にね。地べたに寝ると野生動物に襲われたり、虫に塗れたり。木の上に寝ると、蛇と一緒だったり、寝ぼけて木から落ちて石に頭をぶつけて悶絶したり、雷雨に追い立てられ無人の家に駆け込めば、土砂崩れで死にかれました。ある遺跡を今晩の宿に、と思ったらそこは原住民の聖域で、死ぬ程追いかけられた事もありました。まあ安宿、つまり相部屋も窃盗とかそれなりに大変なんですけれど」

「……それはさぞ大変だったでしょう」

ジョナサンは心底同情していた。ご不幸をお悔やみ申し上げます、と言わんばかりである。真也は慌ててフオーローした。

「あ、いえ。真に受けられると困ります。ジョークの一つだと思って、気にしないで下さい。なにより自分が選んだ事ですので」

「……」

突然黙り込んだジョナサンは、それこそ身内の不幸を告げられたかの様だ。

「あの、俺は何か気に触る事でも言いましたか？」

「いえ、自分の道を歩ける人が羨ましいと」

「スコットさんは魔術師という道を嫌悪していらつしやる？」

「いえ、受け入れています。魔道を拒否をするという考えすら浮かびませんでした。父の子に生まれたのであれば、そうするのが当然だと、私はそれがおかしいとは思いつつ、抗う事が出来ないのです。例えば私が二流でも、継ぐ事など不可能だと分つていても」

眉目秀麗な顔に影が差す。ジョナサンの視線は手にあるティーカップに注がれていたが、その視線は過去を向いていた。

「スコットさん？」

「トオサカさん、私は二流で家の再興を願う者。私は師匠と同じ境遇だからこの教室に

居られるのです。師匠の同情に付け入った卑怯者です」

自嘲的な笑みに真也は、気の利いた受け答えが出来なかった。持つ者と持たざる者、それはかつて綺礼が遺した言葉だ。

「トオサカシンヤ、入りたまえ」

エルメロイの呼び声に席を立つ。真也はジョンナサンを氣遣う事が出来なかった。彼もまた、セイバーや士郎と同じように、持つ者の側なのである。

「待たせてしまったか」

「いえ。問題ありません」

彼がエルメロイの執務室に入るのはこれで二度目であった。自室とはうって変わって、徹底的に管理された部屋だ。その落差に少々呆れつつも、手渡された依頼書に目を通せば、顔写真が添付されている事に気がついた。

白人男性。推定四五歳。細身の身体。黒い髪を刈り上げていたが、前髪は長く、オイで調えられていた。鼻筋高く、分厚い唇。一見剛胆そうな顔だが、寄った眉と何処か虚ろな瞳は神経質そうな印象を与えていた。その写真にはトーマスⅡニルセンと手書きで記されていた。依頼書にさっと目を通した真也は眉を寄せた。

「婦女暴行で警察が捕まえた人物の調査？」

「そうだ」

執務机に向かうエルメロイは背もたれの付いた椅子にふんぞり返っていた。くるりと回れば、背後のガラス窓からは、時計塔正面ゲートと大きな花壇を一望する事が出来た。そこには学生達がのんびりと歩いていた。エルメロイの態度は尊大。つまりは偉そうと言う事だが、上に立つ者は偉そうにしないといけないのである。権威とはそういうものだ。それを信条とする真也は気にせずこう聞いた。

「それは警察の仕事では？」

「地元の警察からの情報によると、自首した犯人は自分が魔術師だと証言している」

「神秘の漏洩防止であれば、封印指定の執行者が行うべきでしょうに」

「彼らが動く程の証拠がない。同じ英国を舞台にした魔法使いの児童文学が大ヒットして、騙りは意外と多い。一つ一つ調べる程暇でも無い、手も足りない」

なんとかと賢者の石というシリーズである。

「現地の警察官は時計塔の関係者なのですね？」

「その警官は魔術師では無いが、時計塔を知っているそうだ。本人は知り合いに魔術師が居たと言っている。それで知ったそうだが、その知り合いも不明。つまり登録が無い」

「つまりその警官も調査対象と」

「依頼書には我々が持っている情報の全てが書いてある。不明点は現地で調べる事だ

な。質問はあるか?」

「ありません」

「話は以上だ。これを持っていくといい」

エルメロイは引き出しから携帯と支度金を取り出した。

「必要経費ですよね?」

「もちろん天引きさせて貰う」

「あくま」

「トオサカのお手並み拝見と行こう。迅速かつ正確な処理を期待する」



真也は時計塔から目的地であるリバプールまで交通機関で行く事にした。時計塔からヒースロー航空までは時計塔が所有するバスを使う。ヒースロー空港からは電車だ。ロンドンを経由し、リバプールへ向かうのである。乗り換えが上手くいけば大凡四時間の小旅行だ。

時計塔が持つバスは真つ赤なバスだった。知る人ぞ知る正式名称“ACEルートマスター”ロンドンのバスと聞けば誰もが思い浮かべる、真つ赤な二階建てのクラシカル

バスである。二〇〇五年まで実際に路線バスとして使用されていたが引退し、どのような経緯かは知らないが、時計塔とヒースロー空港を結ぶ定時バスとして利用されているのだった。そのバスに、真也がちょっととした感動を覚えているとルヴィアがこう言った。

「トオサカシンヤ、荷物を持ちなさい」

「はいはい」

彼はルヴィアの荷物を持つと、後を追うように乗り込んだ。車内は二人きり、貸し切り状態だ。そのバスは最新型バスより、振動もある、機密性も悪い、シートも堅い、エンジン音も五月蠅い。だがどうしてか、それが気にならなかつた。二階建ての二階から見ると景色は、時計塔周囲の緑の多さと相まって随分良かった。少々不謹慎だが小旅行だと真也はご満悦である。流れる光景を堪能し、ハイウェイに乗った頃誰に言うともなくこう告げた。

「ルヴィアゼリツターエーデルフェルト、貴女が何故ここに居る」

バス二階の中央通路を挟んで反対側の席に彼女が居た。幸か不幸か、二人きりである。

「当然ですわ。この様な低レベルの仕事を失敗した、無様なトオサカの姿が見られればとても充実した時間を得られるでしょうから」

「レディ―エーデルフェルト。貴女様はとても有機的な曲線を描く性質をお持ちのよう  
だ」

「曲がついていると言いたいのかしら。姉が姉なら弟も弟ですわね。礼儀を知らない田舎  
者ですわ」

どちらが礼儀知らずなのだろう、彼にはその基準が何処にあるのか分らなかつた。

「貴女と姉の『馴れ初め』は聞いたよ」

第五次聖杯戦争以降、凜が時計塔を訪れたのは計三回。最初の一回目は終結直後の一  
週間後であつた。報告のため時計塔を訪れた凜はその時ルヴィアと遭遇したのである。

「目と眼が合つた瞬間に争い始めました」とはグレイ談。最初は礼儀正しくも刺々し  
い侮蔑の応酬、その後は格闘戦に発展し、凜はバックドロップでKOされた。その後凜  
は年一回時計塔に赴き、その都度喧嘩をしているのである。勝敗はルヴィアの二勝一  
敗、次回凜が勝てばイーブんだ。真也はまず凜が勝つだろうと確信を持った。溜息も出  
た。

（俺と士郎も仲が悪いけれど、手を出した事は無いつてのに。いい加減仲良くなれば  
?」とかよく言うもんだ。あのお義姉様は）

真也は内に溜つた鬱憤を飲込んで。

「でも俺は姉じゃない」



「知っています。トオサカの人間と言うだけで理由は十分です」

「それって八つ当たり？」

「ええもちろん」

「明瞭な意見を言う人は俺にとって好ましいよ。例え罵りであろうともね」

バスの窓からはテムズ川が見えた。太陽の光を浴びて、キラキラと水面が光る。彼の視界もキラキラと星が散る。

(どうしてこう成った)

ルヴィアの参加をエルメロイが認めたのだ。正確に言えば、関知しない。好きにする和良好的」と黙認したのである。

(これ幸いと厄介事を押しつけたんじゃ無いだろうな、あのムツツリ教授。短いバカンスだーとか。いえふー、とか)

概ね正解であつた。



ヒースローエクスプレスはヒースロー空港からロンドンを結ぶ電車である。白と黄色のツートンカラーで、アクセントでオレンジのラインも入っている。丸みを帯びたトイ風味の電車だ。車窓から外を覗けば、英国の歴史が流れていた。郊外から都心へ。古

風さを感じさせる町の作りから、現代都市へ。まるでタイムマシンの乗っているかのよ  
うな感覚である。ちよつとした感傷に浸っている真也であったが、生憎とお嬢様は虫の  
居所が悪かった。

「トオサカシンヤ」

「何でございましょうか」

「私が貴方のとなりの席に腰掛け、肩を並べている理由を言いなさい」

「片側ツーシートで中央通路を挟んで、二ラインの計四シート。お嬢様が一人で腰掛  
けると、見知らぬ誰かがお嬢様の隣りに腰掛けるからだよ。それは嫌だと言つたのはお  
嬢様だ。荷物で席取りしても良いけれど非常識だしね。ご不便をおかけしますが、しば  
らくのご辛抱をお願いしますよー」

「ですからブラックキャブへロンドンのタクシーを使うべきだと」

「無茶を言うな。二〇八マイルへ三三四キロもあるんだ。一体幾ら掛かるやら」

「私が出すと言つたでしょう」

「借金は出来ないって言つたら」

「タクシー代を躊躇へためらうような私だと?」

「お嬢様なら、その時に私めに何をさせる? 土下座とか、縋り付くような事を要求する  
だろ?」

ルヴィアは溜息を付いた。心底沈痛な面持ちだ。

「この様な事ならクラウンを呼ぶべきでした」

（否定しろよ。土下座させるつもりだったのかよ）

気配を察知した見知らぬ男性が刺々しい二人に声を掛けた。その通りすがりの男性は、痴話喧嘩にしてはちぐはぐな二人であったので不審に思ったのだった。見かけ上深窓のご令嬢とコスプレ紛いの一般人である。

「何か問題でも？」

「なにも有りませんわ」

「ないです」

ヒースローエクスプレスの乗車時間は二〇分程だ。あつという間に景色が都会の様相を帯びてきた。重苦しい沈黙に耐えきれず、地雷だと思いつつ真也はこう聞いた。

「クラウンって何？ トヨタ？」

「日本車は嫌いです」

「そうでありましょうとも」

「クラウンとは私の従者です、貴方より上等で有能な」

〃いつから従者になったんだっけか、俺〃彼は口に出さなかつた。

お嬢様は沈黙を保っていたが、じわりじわりと悪化しているのが見て取れた。これは

マズイと真也は鞆から缶コーヒーを二本取り出した。一五〇〇Cの小型缶で、自分の為に調達したのだが、この道具はここが使い所だと差し出した。食事や煙草を共にすると打ち解けやすくなる、と言う事だ。

「お嬢様。これ（カフェイン）でも飲んで気をお鎮めなさい。出発したばかりなのに、意気込んで”は途中で失速します”

ルヴィアは真也の皮肉に気がつかなかつた。

「なんですの、これ」

「エスプレッソ。このプルを引いて、」

「この私が缶の扱いを知らないとでも？」

「庶民的なのか高貴な方なのか良く分からないね」

そういうルヴィアの缶を握る手には躊躇いがあった。未知への恐怖である。知ってはいたが実物は初めてであった。恐る恐る口に含めば、慌てて口元を抑えた。細い眉を寄せ、顔をしかめていた。

「……」

「お口に合わない？ 美味だと思っただけだ」

真也は平然と飲んでた。

「苦いというか、雑というか、下品じゃない。一体どのような食生活を送っていらしたの

かしら」

「大した話じゃないです」

「言いなさい」

「ご令嬢の知らなくていい世界って事」

旅の途中、飢えた彼は野生動物を捌いて食べた。イノシシ、リス、クマである。野草も食べた。フキ、ユキノシタ、ハナイカダ。そして昆虫。クワガタ、ナメクジ、カミキリの幼虫。もちろんサバイバル的に保証されてはいる、必要な調理を加えた上での、食材たちである。もちろん彼とて非常に強い抵抗を感じた事は言うまでも無い。それ程切羽詰まっていた、と言う事だ。その様な事情は露知らずなルヴィアの不満は急上昇である。そのカナリアの様な声に怒気が混じれば、その瞳は危険域だ。帯びる魔力も荒れ狂う波のよう。

「無礼も程々にしないと私にも考えがあります」

「下々の話と言う事だよ。貴女は下を見る必要は無いお方だからな。気に障ったのなら謝る」

一転。素直な謝罪にルヴィアは怒りを引つ込めた。躊躇いの後、もう一度啜った。

「苦……」

接しにくいお嬢様は小さく舌を出していた。



ジェット旅客機も収まりそうな、巨大なかまぼこ形状のドーム内には、幾筋ものプラットフォームが平行に走っていた。英国人、外国人、白人、黒人、中年、未成年、家族連れ。それなりに賑わうその場所を、軽快に歩くのは真也であった。

「ロンドン橋落ちる〜♪ ロンドン橋落ちる〜♪」

道行く人に失笑されるも彼は全く気にしていなかった。ロンドン橋には水の神に捧げるため、人間が贄として供えられた、という伝承がある。それは日本の錦帯橋も同じだ。童謡もそうだが、思いも知らないところに怖い真実が隠れていたりするのがこの世の中である。それを知ってか知らずか、ロンドン橋と口ずさむ真也は上機嫌だった。ここはヒースローエクスプレスの終の場所であるパディントン駅、世界有数の大都市倫敦シティのど真ん中である。かの文豪、夏目漱石も滞在していた都市だ。気分が高揚するのも無理は無い。

二人分の切符を手にも真也がルヴィアの元に戻れば、彼女はナンパの真っ最中だった。もちろん受動形であり、案の定イタリア男であった。その人物は、背が高くすらりとした肢体で、無地のスラックスにTシャツとジャケット、シンプルなコーデイネイトだと

いうのに、安っぽさを感じさせない着こなした。顔の堀が深く、眉と鼻立ちが強い線を描いていた。全体的にしつかりした顔立ちだが、目元は涼しくも優しい。ツーブロマツシユウルフの黒い髪は艶々と輝き、薄目の褐色肌と相まって、エキゾチック〈異国情緒〉感たっぷりだ。太陽の香りがする、駿才男子へアンテロー。イケメンなのが腹が立つ。嫌みが無いのがまた腹立たしい。

このままルヴィアがお持ち帰りされれば、お役御免で万々歳と真也は期待したが、生憎と彼女は軽い御仁では無かったようだ。だが敵も然る者。手強かった。逃げ道を塞ぎつつも、紳士さを損なわない。身振り、視線、耳をくすぐる低くも甘い声。優しくも荒々しい、誘惑。その間合いはルヴィアの反応に応じて、近づいては離れ、また近づいて。端から見ればいつの間にか随分と距離が近い。なんとという見事な手管だろう。公衆の面前が原因か、魔術の行使〈強硬手段〉に出られず、流石のルヴィアも手を焼いていた。眼が合った。『早く何とかしなさい』そう物語っていた。『苦手だ』彼はそう毒気尽くと二人に割り込んだ。

「お嬢様は人気者ですね。私としても鼻が高い」

当然そのイタリアの彼は不愉快そうな顔をする。君は誰だというイケメンに、真也は一計を打つ事にした。無論平和的に解決するためだ。彼は左手の人差し指と中指を交差させ、突きつけた。

「ラブ&ピースっ!」

赤い外套、黒い長袖、黒い長ズボン、そして黒いブーツ。金髪トンガリ頭なら、どこぞのガンマンのコスプレである。沈黙が訪れた。目の前のイタリア人は、呆気にとられていた。

「……だめか、フランスだとバカウケだったんだけど」

コホンと一つ咳払い。一転、彼の放つ雰囲気は魔獣の様。

「俺の連れが何かしましたか?」

一分一秒を争う、と言うわけでも無いが、ナンパなどで時間を費やしたくない。だもので彼は、詰め寄りそのイケメンを見下ろした。運の悪い事に真也の方が背が高かった。イタリア人は欧州でも比較的身長が低い方なのである。睨まれた途端、良くないモノを感じたそのイタリア人は、名残惜しそうに、戸惑いっつも去って行った。

「何をしましたの?」

「これから殺しちゃうZe、の三步手前の指向性を持った意思。彼はきつと嫌な予感を感じたに違いない。プチ殺意と言ったところ」

「魔術師らしくありませんわね。暗示を掛ければ良いでしょうに」

その程度であれば、一般人という条件付で、一工程へシングルアクションで済む。

「使えない」



「……今何と？ 一般人への暗示ができない？ 必修の全体基礎で学ぶ術が？」  
「デキが悪くてね。俺が使うのは身体強化のみなんだ」

それは正確な表現では無いが、現象だけに注目すれば同じような物である。

「姉と比べると随分、その、慎ましやかですのね」

「そうね」

「なるほど。その不憫なまでの特化された特性で、家督を姉に奪われたと」

「お嬢様のそこはかとない、お気遣い感謝しますよ」

ルヴィアのその物言いは「随分とシケていらっしやるのね」という意味だ。

「それよりその恰好に問題があると思うんだが、そうは思わない？」

「どこに問題があると言うのかしら？」

己の着飾りを問題視され怒り笑いの表情である。

「目立ちすぎ」

ルヴィアは何時もの青いドレスの上に、ロイヤルブルーのショールを羽織っていた。重苦しさを感じさせないように、肩から腰を覆う短いタイプだ。その出で立ちを例えるなら、正にお姫様。颯爽と歩けば、柵引くこんじきの髪とショールが相まって天使の翼である。流石の彼も、ルヴィアの身ごしらえは認めざるを得なかった。先ほどのイタリア男が声を掛けたのも無理はない。シスコンで無ければ彼も例外では無かつただろう。

彼女の美貌は今後トラブルを呼び起こすかもしれない、それを憂慮した彼はその気にさせるよう慇懃に申し出た。

「お嬢様はただでさえ人目を惹く容姿をお持ちです。トラブルを考慮しシックな装いにしませんか？」

「毒々しい赤を纏う貴方に言われたくありません。そもそも私にとって、美しくある事は至上命題なのですから」

「着飾りが無くともお嬢様は十分お美しいですよ」

「その様な、見え透いたおだてには乗りません。従者なら、主の意向に従いなさい」  
「だから、いつ従者になったのかと」彼はもはや達観の域である。

「だいたい。お嬢様こそ暗示を掛ければ良かったでしょうに。一睨みで済む筈です。何故わざわざ彼に応じたのですか」

痛いところを付かれたルヴィアは、おどおどしい。

「だって、気が引けるといふか、失礼に当たるのではないかと、」  
「なるほど。彼のお誘いは満更でもなかったと」

真也は含みの無い至って真顔であったが、侮辱されたと鋭い表情のルヴィアである。だが羞恥に染まっついては説得力が無い、凶星であった。

「勘違いの無いように申しつけておきます。貴方が私の連れ、です。間違えないように」

彼女は誤魔化す様に歩いて行つた。その背を追えば、揺れる金の髪と青いリボンが可愛らしく見えた。

「分つておりますとも」

彼女の手荷物を持つと彼はその後を追つた。彼は珍道中ヘルヴィアを受け入れる事にしたのであつた。彼もまた満更でもない、と感じていたのである。二人がリバプールに着いたのはその三時間後であつた。

つづく！

## 【人物紹介十三行あらすじ】

## ■三行あらすじ

## ・ 依頼その1 リバプール編

難癖を付けられルヴィアと組んだ真也は一路リバプールへ。婦女暴行で捕まった魔術師の調査に訪れればその容疑者は魂を喰われていた。

## ・ 時計塔の魔女編

ルヴィアに彼氏が居ると噂を聞いた真也は、ドロドロは御免だと先手を打てばやっばりドロドロに。ご婦人を賭けた男同士の争い、といえば聞こえは良い。

## ・ 依頼その2 マリアIIアジャヤー二編

真也と同じ様に時計塔の依頼をこなす生徒が行方不明に。ルヴィアと真也はその調査に向かえば、探し当てたモノはバケモノだった。

## ・ 最後の依頼 リバースIIチャリス編

ルヴィアの元に届けられた一通の招待状は、天使の知識を求め争奪戦に招く物だった。天使の知識とは神の知識、ならば魔術師にとっては聖杯に他なるまい。7人の魔術師たちがフランスに集結するが……

## 【登場人物】

## ■魔術協会側

・遠坂真也（力を持つ者）

旧姓蒼月。帰国する路銀をせつせと稼ぎますが、右から左へ流れていく毎日に悩む主人公。2年の旅の影響で、前作奮闘記から性格が変わっています。前作の最後で凜に精神を再構築され、人生のやり直し中。とある理由でサーヴァント級の肉体スペックを持ちますが、生憎と精神が追い付いていません。愚知る、やさぐれる、拗ねる。誰もが持つてであろう格好悪い側面を描写しているのは仕様です。第5次聖杯戦争時に面倒を見て貰った経緯からクー＝フリーン大好き野郎に。

「ルヴィアゼリツタ＝エーデルフェルト、俺は貴女を気に入ってる。マスターにするなら貴女のような人が良い」

・ルヴィアゼリツタ＝エーデルフェルト

（力を持つ者、実力・資産・才能・家柄、全てが満たされた者）

お金持ちのお嬢様。寮の最上階を占拠する、という横暴ぶりはありません。性格は事件簿よりですが、凜とはやはり犬猿の仲。凜の弟である真也に難癖を付けますが、それを切っ掛けに期間限定の主従契約を結びます。お金って大事よね。

「この様な低レベルの仕事を失敗した、無様なトオサカの姿が見られればとても充実した時間を得られるでしょうから」

・ロードⅡエルメロイ2世（力を持たない者、克服した者）

事件簿より渋めに設定しています。イメージはチャイルドマン教師。初め真也を嫌煙していましたが似た者同士だと知り、時計塔での保証人を引き受けます。イスカンドルでありクーⅡフリーンという意味です。ツンデレ性格も加味する必要があるでしょう。

「随分と子供じみているが英霊との絆なら私も持つている」

・グレイ（力を持つ者）

事件簿では明言されていませんがこのSSではセイバーの血筋で、サーヴァント級の身体能力を持ちます。事件簿一卷より3年経っています、慕うエルメロイとの進展は無くご不満の様子。温和しめキャラにありがちで、酒が入るとはっちゃける。

「レディⅡエーデルフェルト！ 料理好きの擬人化された犬が、いざという時は身を挺して守ってくれる騎士になるなんていい年して夢見過ぎです！ ……ういひつく」

く以下オリキャラく

・ジヨナサンⅡスコット（力を持たない者、それを渴望する者）

真也の一歳上で21歳。見目麗しく、愛想良し、気配り良し、家庭的。碧と朱のオツドアイそして、眩いばかりのプラチナブロードを持つ美少年。時計塔では男女ともに、お嫁さんになりたい男の子投票第1位。本当に男だ、実は女だ、諸説あり。外観は15、6歳。身長は150センチに届かず、ある意味お約束キャラ。エルメロイと同じで2流、そして家の再興を願う者。ファザコンの毛があり、エルメロイが父に似ているとか。真也のアドバイザー的な立ち位置ですが……。皮膚が弱く日光を避けているとか、夜型で陽が落ちると強気になるとか、色々伏線を張っている人。

「私は二流で家の再興を願う者。私は師匠と同じ境遇だからこの教室に居られるのです。師匠の同情に付け入った卑怯者です」

・ヘルメスⅡトリスメギストス（力を持つ者、実力・資産・才能・家柄、全てが満たされた者）

時計塔の魔女編で登場します。占星術、錬金術、降霊術に秀でる、あの錬金術師の末裔です。ルヴィアの彼氏、と言うのが時計塔生徒たちの一般認識。宝具級のアイテムを持つているとか。アトラス院ではなく何故か時計塔に居ます。

「そのルヴィアに俺は拒絶され、君はルヴィアの隣りに居る。許してくれトオサカシンヤ。俺は君に嫉妬している」

・マリアⅡアジャーニ（力を持たない者、才能はあるが財力も実力も乏しい者）

依頼その2で登場します。考古学部に所属する地理学専攻で、自然信仰神と人間の自然改造（開墾、埋め立て）というテーマに詳しい。金髪ガリーリー三つ編みの眼鏡娘。財政難で、素は良いがあまり着飾らない。衣類は弟のお下がりも多く、良く言えばボーイツシュ、悪く言えば野暮つたい。だがリーゼリットに勝るとも劣らないおっぱいを持つ。何故か関西弁。

「その、東洋人を相手にするのは私も初めてなん。依頼料はそれで手を打ってくれへんか。健康状態や呪いの類いは心配せんでええから」

#### ■冬木市側

・遠坂凜

真也の義姉。

・キャスター

前作において受肉済み。真也の従者。

・衛宮士郎

真也の天敵にして最大の理解者。今までいがみ合い続けてきましたが、成長と共に落着きつつあります。

・セイバー



前作において受肉済み。 士郎の嫁。

・イリヤ

前作にて延命済み。 士郎の義姉。

・衛宮一郎

???

### ■ 聖堂教会側

・シエル

ヴァチカンから呼び出され何かを探している様子。 “彼” が心配で早く三咲町に帰りたいが、泣く泣く従事。 このSSでは真也のカウンター的存在。 戦闘能力的な意味です。 月姫は2000年で、この時彼女は24歳(ネットの情報より)。 この設定を採用し、赤い林檎は2008年なので彼女は32歳となります。

「その黒縁眼鏡少し気になります」

### ■ 悪魔崇拜結社ラヴオワーク側 (オリジナル)

第2次世界大戦末期に聖堂教会の手によって壊滅させられるものの、復活し暗躍している組織。

## 【ラヴォワザン】

本名カトリーヌIIモンヴォワザン。17世紀のフランスでブイブイ言わせた魔女。Webの絵に基づき中年おばちゃん設定。2000人以上の赤子を生け贄に殺したとか。このSSでは魔術師上がりの死徒です。固有結界はありませんが、その代わりサーヴァント並みの身体能力を有します。真アサシン型。

- ・ 攻撃方法：短剣、投擲、魔術
- ・ クラス：アサシン

「代行者ならともかく、埋葬機関が動くとは厄介だ。私は大戦末期に殺されかかったんだからね。思い出しただけでも、木槌で潰された足の甲が疼くよ。まったく、嫌みな連中さ」

## （ステータス）

筋力B	／	耐久C	／	敏捷B	／	魔力A	／	幸運E	／	宝具NC
筋力A	／	耐久B	／	敏捷A	／	魔力A	／	幸運E	／	宝具NC（狂化時）

## （スキル）

- ・ 投擲（短剣）
- ・ 魔術：黒ミサ（悪魔召喚）／ 毒薬の呪／ 媚薬の呪／ 墮胎の呪／ 針

金拘束の呪（金縛りor重圧）

- ・気配遮断
- ・戦闘続行
- ・狂化

〔エリーザベト||バートリ〕（Extra—CCCとは一切無関係）

見た目20代半ばの中世貴族風の女性。その実体は悪魔を崇拝する魔術師上がりの死徒。魔術攻撃型で身体能力は低ランク。一般人を上回るがサーヴァントより大きく劣る。絞首台の縄や鉄の処女（アイアンメイデン）を模した魔術を好んで使う。貴婦人らしく物腰丁寧だが性器や膣を取り出し、それを見て性的に興奮する。拷問を好み苦痛な表情を見て笑う、という困った人。固有結界“チエイテの釜”をもつ。その効果は、女性で、若くて、そして処女ほど効果を発する吸収の結界。さっちゃんの“枯渴庭園”の類似品。イベントキャラの為ステータスはありません。

「まあ。何処のどなたですか？ 私の友人だなんて、もうこの世に居ないのに」

### ■時計塔

時計塔の設定は大英博物館の地下都市ではなく学園都市設定を採用しています。

ヒースロー空港の西にとある学校がモデル。

### ■ソロモンの悪魔

とある話で登場します。

### 【サブノック】

“ソロモン72柱の魔神の1柱にして地獄の侯爵である。50の悪霊軍団を従え、衝動、機敏、狭量、制約を司る。サブノックの意図は召喚者の能力を伸ばすことではなく、召喚者を取り巻く状況を好転させる事にある”

- ・ 外観：目玉の無い角馬に乗ったアマゾネス
- ・ 性格：勇壮と高慢
- ・ 攻撃方法：馬の角もしくは蹄で、手持ち武器はありません。
- ・ クラス：ライダー

「なにそれ。女の攻略を他の女に頼むなんてサイテー。しかも悪趣味だわ。ヘカテーなんて助産婦のババアじゃない」

(ステータス)

・ 筋力：C / 耐久：E / 敏捷：B / 魔力：C / 幸運：F / 宝具：

NC

(スキル)

・騎乗

・築城(独自)：重圧の効果、幸運判定。但し有効範囲が存在する。

・呪詛(独自)：棺桶(hoarse)という名前を持つ。ダメージを受けると呪いが掛かり、治癒が出来ないが、本体が死ぬと解呪される。幸運判定で即死。

・カリスマ

・変化(独自)：召還者(他人の)姿を本人が望む様に変える。

・気配遮断

【オセ】

〃ソロモン72柱の魔神の1柱にして、3ないし30の悪霊軍団を従える地獄の長官である。善と豊潤、安楽、豊富を司る。オセは獰猛な戦士であり、召喚されると威厳のある豹の姿で現れる〃

・外観：豹頭の中世冒険家

・性格：善と威厳

・攻撃方法：二刀流

・クラス：セイバー

「我々が与えた戦う術とは己を磨くための競争だった。それを欲望という殺戮に変えたのは人間だ。勘違いなどしてくれるな愚かな人間よ」

(ステータス)

・筋力：B / 耐久：C / 敏捷：C / 魔力：B / 幸運：A / 宝具：

NC

(スキル)

・変化(独自)：召還者(他人の)姿を本人が望む様に変える。

・精神干涉(独自)：幻覚をみせる。

・騎乗

・神性

・勇猛

・ルーン(魔術)

## 二話

ロンドンからリバプールまで電車に揺られる事約二時間半。二人はライムストリート駅に降り立った。リバプールはイギリス北西部にある海商都市で、ピートルズの出身地であり、有名サッカーチームの本拠地でもある。かまぼこ型ドームの屋根を持つ駅を出ると、石造りの建物の目立つが、近代鉄筋コンクリートの建築物も相応に混じっていた。駅前だというのに、背の高い建築物はなく、建物間の距離も大きく、圧迫感が薄い。日本とは町の作り方が根本的に異なるのだろう、真也はそんな事を考えた。地方都市に過ぎない冬木市ですら過密で高層建築物ですら存在するのだった。

その証拠に古式の建築物が駅の鼻先にあった。セントジョージホールと言い、ネオクラシック様式の建築物で、イギリスの遺産建築物でもある。それを知らない真也は「教会だろうか。教会にしちや石の柱が多いな。ギリシャ建築物に似ているし」と、適当な事を考えていた。駅前という一等地にその施設を置く余裕があるというお国柄、という意味だ。

見上げればあいにくの曇り空であった。この季節の欧州は天気次第で気温ががらりと変わる。つまり、もうじき四月だということにとっても寒い。シヨール一枚では寒い

か、彼の左に居る、扱いに難しい同僚は、僅かにだが身を縮こませていた。//それに気がついた。真也は仕方が無いとこう告げた。

「レディ―エーデルフェルト。一度ホテルに向かきましょう」

「直接、警察署に向かいます」

「お疲れでは？」

「何を言うのやら。時は金なり、ですわよ」

ルヴィアのその反応は真也にとって予想範囲内だった。

「では昼食に付き合ってくださいませんか。長く揺られて疲れてもいますし、腹も減っています」

「私の話を聞いていないのかしら。直接警察署に向かうと、言ったのだけれど」

「急いては事をし損じる、とも言いました。お嬢様も長旅で気が立っておられる様子。ささ、どうぞこちらへ」

真也はルヴィアの手を取ると強引に引つ張った。真也のその反応はルヴィアにとって予想範囲外だった。手を取るという意味であり、強引にと言う意味だ。

「な、なにを、」

「ですから食事です」

「ちよ、な、」



「あすこにしましょう」

真也の差し指の先には、煉瓦色の小さい店があった。白い看板を掲げていた。小さなカフェ レストランである。

「旅行に来たものではありませんわ!」

「ビジネスでも食事は重要ですよ。腹が減ってはままなりませんから。一息つくべきです。バーにしたいのですが、開いている店は流石に無いようですね」

「トオサカシンヤ!」

「冗談ですよ。昼からと言うよりは仕事の前にアルコールは常識が無いですから」

その握り手は随分強く抗う事は出来なかった。何故だろうか、術を行使しても拘束を解く事が出来ない、彼女はそれを感じ取った。

「分ったから、その手をお離しなさい!」

頬染め、慌てふためくルヴィアに真也はニヤケを隠さない。

「可愛らしいお嬢様で助かりま、失言でした謝ります。ですからその呪いの右手仕舞つて下さい」

青い長袖に隠されたルヴィアの右腕には、魔術刻印が唸りを上げていたのであった。  
(ガンド使うのか、この人)

心に浮かんだ義理の姉は怒っていた。同類扱いするな、と言う意味である。



窓側の席が良いと主張するルヴィアは強引に奥の部屋の席へ押し込まれた。自然、真也に相對する彼女は不満ありありの顔である。彼女は無視してメニユーを捲っていた。真也は構わず続けた。それどころでは無いのだ。

「そのまま聞いて下さい」

ルヴィアは無言でメニユーを一枚捲った。不愉快だから話しかけるな、と言わんばかりである。

「監視されています」

ルヴィアの指がピタリと止まった。メニユーの文字を追っていた、ルヴィアの琥珀色の瞳が上向けば、真也の打って変わった真剣な眼差しに流石の彼女も戸惑った。この目の前の人物は相応の実験経験がある、彼女はそれを悟ったのだった。

「位置までは追えませんが、確実です。恐らく一人」

「その為の屋内であり、奥の席であり、窓から唇が読めない席、と言う事かしら」

「はい」

付け加えるならば、駅を出た直後それに気が付いた真也は、ホテルに向かおうとした

のである。その目的は同じだ。

「何を言い出すかと思えば……それがどうかしましたの？」　多少実践経験があるようにですけれど、

「俺は第五次聖杯戦争に参加しました」

ルヴィアの態度が硬化した。　「このお嬢様ともここまでか」と彼は腹を括った。

「手前味噌ですが俺は気配の察知に心得があります。サーヴァントと相対し何度か死にかけてましたが、今生きているのはその気配読み、と言うスキルに因るところが大きい。そして俺はその誰かの存在を関知するものの位置を追う事が出来ない。つまり、その誰かはサーヴァント級の、そうでなくともそれに近い実力を持つ、手練れと言う事ですよ。この依頼は想定以上に根が深そうです。時計塔にお戻り下さい。危険すぎます」

「私の二つ銘をご存じかしら」

「地上でもっとも優美なハイエナ」

「価値があるものは危険な所にあるものですわ。低レベルの依頼かと思えば、随分と楽しめそうです」

「レディ||エーデルフェルト。冗談を言っているわけではありません。俺は危険だと言っています。貴女はエーデルフェルト家の当主で、後継者は貴女一人。死ぬ事は許されていない筈だ」

ルヴィアは疑いの目でメニューを捲った。写真の中の料理は立派だが、実物はそれなりだろう。味は望むべくもない。彼女は真也の警告を取り合っていないなかったのである。食事のほう重要だ、と言う事だ。

「トオサカシンヤ、貴方はどうなさるのかしら」

「これは俺が引き受けた依頼ですから、当然遂行します」

「危険すぎるのでしょうか？」

「家名が掛かっていますから。気配を感じたから断念しました、なんて言える訳が無い」  
「貴方が聖杯戦争に参加した魔術師だというなら、尚更退けませんわ。貴方より、私が上だと証明しなくてはなりませんもの」

何という、恐ろしくも美しい笑みだろう。それは獲物に狙いを付ける狩人そのものである。ただ野獣と言うよりは幻想種を想起させた。

「エーデルフェルトの当主として、トオサカに負ける訳にはいきませんから」

「もう、貴女の気高さは思い知っていますよ。ですからお帰り下さい」

「トオサカはエーデルフェルトより劣る、私に言っただけご覧下さい。そうすれば時計塔に帰りますわ」

言える筈が無かった。

「他に、ご意見、有りまして？」

「どうぞ自由に」

ほら、ご覧なさいと言わんばかりの上から目線。艶のある表情が真也の混乱に拍車を掛ける。人をコケ下ろせば色気を帯びる性質など、将来の花婿様は苦勞するだろう。

(Sか)のお嬢様は)

だもんで真也は説得を断念した。梃子でも動かない頑固さだと理解したのである。透明硝子の容器に収まった水をぐいと飲むと、彼はインドカレーを注文した。羊肉へマトン、カレーとチキンマサラである。カレーの色は香辛料の色と言わんばかりの、なんとも食欲をそそる色だ。真也はナンを手で千切りカレーに浸して食べ始めた。ルヴィアは目を白黒させていた。

「この料理は手づかみなんですよ」

彼は先手を打った。カフェレストランにナンカレーがある理由は不明である。

「エスニックな料理がお好みなのかしら」

「旅では暑い地方をルートにしましたから」

「どのような意味？」

「香辛料の利いていない料理は不安で食べられない、と言う事です。衛生的な意味ですよ」

ルヴィアは追求はしない事にした。目の前の人物は己と有り様が違いすぎる、そう判

断したのであった。理解しても意味が無いし、理解したところで納得は出来まい。ホリアテキサラタ……フエタチーズ、トマト、キュウリ、オリーブなどをオリーブオイルで和えた物を品良くついばんでいるルヴィアを見て真也は心中で溜息を付いた。

（頑固というか、何というか。物腰丁寧だけれど義姉とそっくりだな、この人）

「しかし、当主ではなく出来損ないの長男がマスター選ばれるとは。トオサカリンの悔しそうな顔が目には浮かびますわね。もっと早く知っていれば、あの邂逅もより輝いたでしょうに」

思い描くルヴィアは恍惚とした表情だ。罵倒し高笑いするルヴィアと、悔しそうに地団駄を踏む凛を思い浮かべていた。

「まあ次回のカードにしましょうか。実に楽しみですよ」

ルヴィアは勘違いをしていたが、真也は御家事情なので敢えて言わない事にした。当主である凛に一任する、と言う事だ。

「もう少し気遣いのある呼び方を希望します。ご令嬢に出来損ないとか言われると色々困りますから」

「お忘れかしら。『デキが悪い』そう言ったのは貴方自身でしょう?」

そう言えばそうだったと真也は苦渋の顔である。

「……一つだけ。姉の敵は俺の敵ですから。その時は覚悟して下さい」

「構いせんわ。全力で応じる事は変わりませんもの。二人共々打ち砕くまで」  
(もつともあの義姉は手出し無用と言うに違いないけどな)

二人はランチを食べてその店を後にした。雑だの品が無いだの、ルヴィアは苦情を忘  
れなかった。申立先はもちろん真也であった。



リバプールのライムストリート駅から、コーペラスⅡヒル通りを南西に向かい、リ  
バーストリート沿いにその警察署はあった。それはリバプールを南北に流れるマー  
ジー川の東側に位置する、つまりは湾岸警察署と言う訳だ。煉瓦造り風ではあったが、  
近代建築であった。周囲をぐるりと見渡すと、近代的な町の作りだと言う事が良く分か  
る。計画的、と言つても良い。建物と建物の距離があり、緑が少なく、民家も見当たら  
ない。町というのは多少不便でも、不均一、つまりごった返していた方が、風情があつ  
て良いと思う真也であった。霏が掛かっている事も、良くない印象に一役買っていた。  
だもので。そこかしこに建つ、どこぞのお偉いデザイナーが設計したであろう、有機的  
なフォルムを持つ建物を見たルヴィアが、溢した呆れに諸手を挙げて同意する真也で  
あった。

「洗練さがないというか、工業意趣的というか。斬新であれば良い、という浅はかさが見透けますわね。趣きに欠けますわ」

署内の受付窓口に腰掛けるのは白人で、赤毛の中年女性だった。警官であろうその人の、指や頬に走る皺は彼女の人生を表していた。

（そうだよな。中年女性って普通こういう感じだよな）

どのように悪く見ても三〇前後に見える舞弥と葵の方がおかしいのだ。職業柄処女の血を啜ってる、と言われた方が納得がいく若作りである。ただ、どうした事か。目の前の女性警官の様子がおかしい。濃紺の制服はパリっとしており、規律と威圧を醸し出していると言うのに酷く顔色が悪い。緊張している、と言うよりは悪いモノでも見たかのような青ざめた顔をしていた。何かが起こった、ルヴィアは直感で感じ取った。知って知らずか、真也は平然としたものである。カウンターに手を置いてこう告げた。

「テリー＝シモンズ 巡査部長に取り次いで頂きたいのですが」

「ご用件を教えてください？」

「塔の人間だといえれば分ります」

「塔（Tower）、ですか？」

「はい」

その婦人警官は名乗らない事に不審さを感じつつも、隙を見せない真也の態度に戸



感った。そして、見るからに偉そうなルヴィアの雰囲気丸め込まれた。その女性警官が内線を掛けると、二人はカウンターに沿って突き当たりの部屋に案内された。ホワイトボードと、長机、そしてパイプ椅子が置いてあった。会議室であった。二人は促されるまま腰掛けた。暫く待つと恰幅の良い背広姿の男がやってきた。真也は立ち上がり右手を差し出した。

「初めまして。時計塔のトオサカシンヤです」

「テリー＝シモンズです。巡査部長、刑事をしています。お待ちしておりました」

二人は営業スマイルで握手を交わした。おや、とルヴィアは違和感を感じた。真也の、その刑事への接し方は完全にビジネス的だ。それも良い意味である。異端児が集まるエルメロイ教室、エルメロイ本人を筆頭に、オツドアイのジョナサン＝スコット、グレイ、そして真也。彼らは冷徹・合理的を信条とする魔術師らしくない。人道性を重んじる傾向がある者たちだ。故に、この警官が塔を知っていることに、彼女は不審がったのである。真也の対応に違和感を感じないのか、という意味だ。もつとも、刑事の知り合いと言う魔術師が強い人道性を持っているもおかしくは無いのだが。この刑事も調査対象だがルヴィアは踏み込むのを止めた。暗示を掛ける事も可能だが、万が一この人物が魔術師で、術に抵抗された場合は厄介な展開となる。事を荒立て態度を硬化させても面白くない。暫くは友好的に接した方が賢明だろう。その刑事は、どうみても場違

いな令嬢を無視する事が出来なかつた。無論ルヴィアの事である。

「……お一人と伺つていましたか？」

「彼女はルヴィアゼリツタⅡエーデルフェルト。同僚です」

正確には違うが、事細かに説明して警官を混乱させる事も無い。時計塔という枠で見れば、似たようなモノだ。

「早い話援軍です」

「援軍が主力なのですけれど」

真也はルヴィアに微笑んだ。

「レディⅡエーデルフェルト。この刑事さんと話していただきますので、お静かに願います」

刑事が混乱するから黙つてると、と言う言い方は避けた。真也は笑つていたが威圧があつた。真也の命令口調な物言いにルヴィアは不満を覚えたが、スムーズな展開は彼女も望むところだ。渋々従つた。何よりこの調査は真也が責任者なのである。方やその刑事は不安になつた。この塔から来た二人は意思統一がとれているのか、と言う事である。だが追い返せば次が来るかどうか分らない、その刑事は笑顔を崩す事なく二人を席へ促した。

「長旅お疲れでしょう。どうぞおかけ下さい。紅茶で宜しいですか？」

三人が席に付くと刑事と真也は雑談を始めた。出身は何処か、リバプールは初めて

か、サッカーの試合はどうかの、リバプールの郷土料理である「スカウス」は肉じゃががそっくりだ……等々。ビジネス上必要だとは分つていても、今のルヴィアは魔術師としての立場を取っている。

「どうでも良いでしょうに、そんな事」

うんざりしつつも展開を待っていた。そしてシモンズという刑事はこう切り出した。「お伝えしましたが私は魔術師ではありません。ですから塔の方にお越し頂いたのです。この地は霊地ではありませんから管理者もおりません」

「地〈霊脈〉に根付く術者ではない、と言う事。ならば大した事ありませんわ。せいぜい二流の術師でしょう」

シモンズ刑事とルヴィアの会話を聞いた真也は黙っていた。

（士郎の一件もあるからな、何とも言えない）

かく言う真也本人もその口だと言う事に気がついてない。その真也はこう言った。

「シモンズ刑事。早速ですがトーマスⅡニルセンと面会させてください」

「トーマスⅡニルセンは自殺しました」

恐れを僅かに含む刑事の物言いに、ルヴィアと真也は思わず見つめ合った。



ルヴィアと真也の二人がトマス・ニルセンと対面した部屋は「彼ら」専用の、寝心地など全く考慮されていないベッドのある部屋だ。別命遺体安置室である。冷蔵が効いており、吐く息も白い。その冷たい空気は、ある種の臭いを帯びており霊廟を想起させた。刑事が手を伸ばし、彼が収まっている袋のジッパーを下ろした。恐る恐る、というよりは爆弾に触れるかのような手つきである。

二人が見る、魔術師だと言いつ張った、その彼はその堅いベッドの上で、なり果てていた。神経質そうな印象を与えた彼は、見知らぬ他人に気を使いすぎてしまった様に、瘦せかけていた。干からびていた、ミイラそのモノである。その刑事は、自分の半分も生きていないだろう二人の若い魔術師が、変死体を目の前にして、動揺すら見せない事に、頼もしさと恐ろしさを感じていた。

「トオサカシンヤ、貴方は初めてかしら」

「いえ、生憎と経験者です。フレツシユクラツシユを見た日の夜よりはマシでしょう」  
「結構」

刑事の吐く息は、白くわだかまりエクトプラズムの様だった。そう思ってしまう程に、その刑事は青ざめていた。

「検死はこれからですが、気味悪がってまだ手を付けていません」

「逆に好都合ですわ。現代科学にかき回されては困りますから」

そう言うのとルヴィアはポケットから鉙石を取り出した。それは透明度を持った立方体の結晶だった。真也が言う。

「カルサイトですか？」

「あら。流石に詳しいのですわね。姉に教わったのかしら」

「ええ、予備知識程度ですが」

「それは何ですかな」

刑事の問いに答えたのは真也であった。

「カルサイト。魔術で使う鉙石の一つで、複屈折という概念を持ちます。知覚外にあるモノをあぶり出す特性があります」

「呼び出すと言いなさいな。品が無いですわよ」

「失敬。隠れたモノを見つげるのにもっとも適した鉙石です。ただ壊れやすく、水に弱い。使い勝手の割には管理が難しい——」

「正解ですわ。ですがトオサカシンヤ。余計な事を言わないように。お喋りな殿方は嫌われましてよ」

ぺらぺらと話すな、とルヴィアは釘を刺したのである。彼は肩を竦めるより他は無  
い。

『Cairi』

ルヴィアはその石に魔力を籠め、発動の言葉を唱えた。魔力という燃料を供給された結晶は供える特性を顕現させた。その透明結晶越しにみる遺体の胸には、術式が刻まれていた。

「停止、拘束、流転、転送、ラベル、」

ルヴィアの読み上げを聞いた真也は警戒を隠さない。

「その場所は何処ですか？」

「左胸、心臓ですわ」

「レディⅡエーデルフェルト」

「分っています」

ルヴィアもその表情に影を落としていた。二人の魔術師が態度を急変させた事実には、刑事は気が気では無い。

「どういう事ですか」

「このトーマスⅡニルセンという人物は、己の魂を魔力に変換しどこかに送った、つまり自分自身を生け贄にした、と言う事ですわ」

「継いだのは真也である。」

「魔術師は本質的な意味において、とある真理を求める為なら自分の命を省みない。た

だそれは自身を危険に晒すという意味であり、実際に死ぬかは別です。それに到達する前に死んでしまえば意味が無いですから。トーマスⅡニルセンに刻まれた符陣は――」

・ 停止：生命活動を止めると魂は身体から解放される

・ 拘束：その魂を術式に捕らえ

・ 流転：魔力に変換し

・ 転送：文字通り魔力を送る

・ ラベル：転送先の場合を司る、住所のようなもの

「という意味を持ちます。つまり彼は、とち狂ったのか、それとも自分の魂を対価にするだけの理由を持っていて、と言う事です。どちらにせよ、まともじゃない。自分の魂を魔力に変換する事は完全消滅を意味しますから。これは魂食いの術式です」

「魂を喰うなど、その様な恐ろしい行為が可能なのですか」

刑事の声は震えていた。

「現実問題として被術者が抗うとその成功率は極端に落ちます。それを無視し強制的に喰おうとするならば相応の規模、つまり“ある意味”高度な術となります。現代ではもろもろの事情で行使する術者は居ません。安心してください……と言いたいのですが。潰えた筈の術式を知る者が居たとすると頭が痛い」

「昔はあったと?」

「ええ、暗黒史と言う奴です」

ルヴィアが継いだ。

「その魔力を何に使うか、も気になりますけれど。彼は何故わざわざ警察署で儀式をしたのかしら」

真也が答えた。

「それはもちろん、彼にとって予定外の事が起きたのでしよう。どうやら符陣をとつさに刻んだようです」

「どういう事ですか?」

「これを見て下さい。左人差し指の爪が剥がれています。これは拷問の跡です。誰かの襲来を察したトーマスニルセンは己の身体に符陣を刻んだ。拷問を受け、もうダメだと思った彼は術を発動させた、そんなところでしょうね」

刑事が真也に聞いた。

「つまり自殺では無いと?」

「自殺は自殺でしょう、この拷問が直接の死因ではないのですから。侵入者の確認はしていますか?」

「少なくとも私は知りませんな。監視カメラの映像を確認しましょう」  
ルヴィアが刑事に問うた。



「自首して来た時の状況を教えて下さる？」

「こいつは婦女暴行をやらかした後、署に駆け込んできた様ですな。ただ何かに怯えているようでした」

「怯える？」

「ええ。今思えばそれだったのでしようが」

「被害者の方は？」

「病院に搬送され治療を受けています」

「彼の自宅を調べます、宜しいですわね？」

「構いませんが荒らされています。こいつがが出頭して来たと同時に、家宅捜査に向かったのですが既に荒らされた後でした。人影はあつたのですが逃げられています」

「どのような人物かしら」

「分かりません。目撃した警官によると、影のようだったと。トーマスⅡニルセンを追い詰めた人物と同じでしょうか」

「確証はありませんわね。とにかく調べますわ」

「手配をしておきましょう」

「ミスターⅡシモンズ、現場を拝見させて下さらない？」

「ご令嬢に相応しい場所ではありませんぞ」

「お氣遣いなく。だって、ここもそうでしょう?」

「ここにぶち込まれている連中(死人)は何もませんが、地下にぶち込まれている連中は生きています。まあ止めても聞かない方の様ですな」

「ご理解頂けて何よりですわ」

「どうぞこちらへ」

(影のような人物、か。駅前で感じたあの監視者か? 今監視されていない事も気になるけれど)

「トオサカシンヤ、行きますわよ」

ルヴィアの声で我に返った真也はつい地が出てしまった。

「ああ、今行く」

「……意外と粗野な方、と言う事かしら」

「はい?」

彼女は何も言わなかった。色々隠している人物を一片剥く事が出来たからだ。



拘置室は警察署の地下にあった。鉄格子のゲートを二つ通り抜け、階段を降りれば、

真つ直ぐ走る通路があった。天井には細長い蛍光灯が申し訳程度に点いていた。お前らにはこの程度で十分だ、そう語っていた。通路を挟んだ左右に、鉄格子で蓋をされた部屋があった。光が届かない薄暗い部屋には人間たちが蠢いていた。悪態を付く事が当然と言わんばかりのいかにもガラの悪そうな者、手違いで放り込まれたような苦惱に満ちる者、無神経なのか慣れているのか寛いでいる者も居た。当然、貴人であるルヴィアを見た途端一部が騒ぎ始め、それにつられて、また一人、また一人、その騒ぎに加わった。良く言えばお祭り状態、悪く言えば暴動一步前だ。シモンズ刑事は刑事棒で、その鉄格子を激しく叩き威嚇していた。ガンガンガンと耳に痛い程の暴力的な音だ。ルヴィアは無表情だったが、不愉快そうなのはありありと理解出来た。

「はいです」

刑事が開けた拘置室は偶然か最も奥の部屋だった。四角い殺風景な部屋である。天井には換気扇、簡素なベッド、剥き出しの便器、洗面台、柵とおぼしき物もあった。

「俺が入ります。わざわざ汚れる事も無いでしょう」

鉄格子を前に戸惑うルヴィアに気遣い、彼は躊躇いもなくその部屋に入った。

「トオサカシンヤ、貴方はこの手の部屋に経験があるのかしら」

「それは秘密です」

人差し指を唇に沿え内緒のポーズ。戸惑う二人。古すぎか、と真也は打ち拉がれるの

み。もちろん新しい古いという問題では無い。気を取り直した真也はベッドの下、便器の中、棚の上を手で探り始めた。彼の手が床のある場所を触れた時、彼はピタリとその手を止めた。

「そこですか?」

「ええ、ここです。ここでトーマス・ニルセンは死んだ。レイニー・エーデルフェルト。残留思念を読めませんか?」

「それは専門外です」

「そうですね」

真也のあからさまな落胆に、ルヴィアは苛立ちを隠せない。ご立派な当主様なら可能でしょう? そういう皮肉に聞こえたのだった。

「ご存じないのかしら。それが行使できる術者など塔でも極僅か。そもそも、無機物に宿った思念を読み取る事など最高難易度ですわ。無機物と有機物の違いは存在という意味において本質的に異なる、つまり記録方法が異なる。無気質に宿る思念を読み取る事がどれ程困難か知らないのかしら?」

「知ってますって。別に馬鹿にした訳じゃありません。念のため聞いてみただけです」

真也は噴火直前のルヴィアに慌てて謝った。そして内心毒気付いた。

(くっそー。キャスターが居れば死体や部屋から色々楽々読み取れるのに)

日本にいる己の従者が如何に規格外か思い知らされたのであった。もつともルヴィアにキャスターを紹介する事など出来る筈も無い。因みに彼が出発時装備していた真紅の礼装もキャスターが誂えたものだ。現代であれば値が付かない程の非常に優れた物だったが、とある一件で破損し、彼の手元に残るのはその切れっ端のみである。

「その部屋の事を知ってるぜ？」

その声は、はず向かいの部屋の主だった。制止しようとした刑事と真也の声を振り切り、ルヴィアはその部屋に近づいた。

「あら、ご親切に聞かせて下さると言う事かしら」

ルヴィアは微笑んでいたが、その琥珀色の瞳は危険なまでに光っていた。どのような経緯でこの部屋に居るのか彼女は知らなかったが、その男の態度を見れば、どのような人物か一目瞭然だ。彼女の表情は侮蔑のみである。その声を聞く、その姿を見るだけで嫌悪がわき上がる。その囚われの男は不愉快な笑みを浮かべていた。彼女は確信した。真也の軽薄な笑みなど、これに比べれば天使の微笑みだ。

「ああ、教えてやっても良い。あんた次第だな」

「取引するつもりはありませんの。話すなら聞いて差し上げても構わない。ですが良くお考えなさい。次の発言で全てが決まりますわ」

ルヴィアのカードは暗示だ。目の前の男は為す術もなく囚われるだろう。だがそれ

は「目の前の男は無力」という彼女の慢心でもあった。囚われの男が薄ら笑みでふらりと立ち上がる事と、ルヴィアの眼の前に真也の右手の甲があった事は同時だった。何をと言う前に、彼女は気がついた。真也の手の平にはその男の精液が付着していたのである。ルヴィアは精子を投げられたのだった。真也の声は冷え冷えとしていた。

「お生憎、アンタの悪戯は失敗だ」

その男は忌々しそうに舌を打った。生臭い匂いが鼻を突く。知識としては知っていたが、初めて知覚するそれにルヴィアは目を白黒させていた。それは檻の中に居た。魔力の欠片も持ち合せていなかった。ルヴィアに何かを出来ようはずが無い。だから呼びかけに応じた。だが。人に精液を投げつける人間が居ようとは、まさか自分自身が投げつけられるとは、その状態だったとは、それに気がつかなかったとは。それは彼女にとって完全に予想外の事であった。足が震えていた。怒りなのか、恐怖なのか、己の不甲斐なさなのか、彼女にも分らなかつた。

「先に戻つて下さい、お嬢様。俺は彼に話を付けておきますから」

「な、なにを、」

「落とし前ですよ、お任せ下さい」

真也の声は酷く落ち着いていて、彼女はその落ち着きに引き上げられた。

「程々になさいな」

「ええ、程々にします」

彼女はそう言うのと足早に立ち去った。居合わせた刑事は商売柄、真也が本気で怒っている事に気がついた。

「トオサカシンヤ、貴方の怒りはもつともだが、この国には人権と言う物があつてな。私は立場上見逃す事ができない」

「シモンズ刑事、貴方は立派な方だ。人として尊敬しますよ。ですからこう言います。手は出しませんし、足も出しません。汚い言葉も発しません。アレ〈魔術〉も使いませんから」

「なら何をするのかね」

「もつと単純で、古い、本能的なものです。何でしたら、そこで見ていらつしやつても構いませんよ。俺はただ突つ立っているだけですけれどね」

真也がその鉄格子の中を覗けばその男は悪態をついていた。真也に何かが出来るはずが無い、その男はそう確信していた。だが相手が悪かった。

「何か様か、ナイト様風情、が？」

真也は眼を見開いていたのである。それを例えるなら、この世界を覗き込む、別世界に住まう何か。手も伸ばせない、けして辿り着く事が出来ない、厚さ薄さと言う概念の無い、絶望的なまでに叶わない壁。その向こう側から、何かに見られている感覚……少

なくともその男にはそう見えた。ごくりと唾を飲んだ、それが始まりだった。



生物は基本的に己と似た存在に親近感を覚える。その逆も然り。人間は人型で無い異形には、嫌悪感を覚える、それは本能に基づくものである。人とは大きく異なる虫は、本来人間にとって嫌悪以外の何物でも無い。虫は地球外生物だという説も唱えられる程だ。子供の知的好奇心はその嫌悪感を凌駕するが、大人になるにつれ苦手になる。その男もまたそうだった。その男が、その虫という存在にトラウマへ幼少の禁忌を持つていたならば、その嫌悪は相当な物になる事は必然であろう。

腕に感じた妙な感覚は気味が悪かった。針よりは太く、指よりは細い何かに、腕を押されていた。一本？ 二本？ いやもつと多い。三本、四本、まだまだある。知覚できない程あった。細かい大量の足が波のように動き、あたかも這っているような感覚となっていた。何事かと己の腕を見れば全長二〇センチもある一匹の百足へムカデが腕を這っていた。膨れあがった嫌悪感は爆発した。慌てて振り払い壁に叩き付けければ、それは動かなくなつた。濡れ雑巾を壁に叩き付けた様な音だった。

「どろろいうった、ごりゃあ」



管理がなっていない、弁護士を使って訴えてやる。その直後ベッドの下から別の百足が現れた。古式の船のオールのように、足を波打たせ近寄ってくる。

「っー」

恐怖に顔を歪ませたその男は、百足を踏みつけた。何度も踏みつけた。薄い甲羅が割れ、その中身が飛び出す音がした。革靴越しだというのに百足を噛んだ様な感覚に襲われた。飛び出したぬるつとした感触が唞内にみたまされた。

「どうなってやがる……おい、お前！ 警官を連れてこい！」

だが鉄格子越しに立って居たはずの、若造は居なかつた。その代わり、鉄格子越しの廊下には夥へおびただしい数の虫がいた。

- ・ 足の沢山ある虫、ムカゲ、ヤスデ、ゲジゲジ。
- ・ 数の沢山ある虫、ウマバエ、コイムシ
- ・ 軟体の虫、ユムシ、ウミケムシ。
- ・ 寄生する虫、タノニエ、ギニアワーム。

動けない。眼の無い虫、眼の有る虫たちが、否。その群が床を敷き詰め、壁に這いつくばり、天井にはぶら下がる。虫たちに凝視されていた。もはやその男は蛇に似睨まれたカエルだ。

「ひっー」

その身体のルールを折り曲げたような、呼吸が生み出した悲鳴を合図に、その群は一つの生き物であるかのように、一斉になだれ込んできた。ガラスを引つ掻いたような鳴き声、牙を打ち鳴らす声、粘液めいたのたうつような足の声、一匹一匹がそれぞれの鳴き声を立てながら、鉄格子をすり抜けるその様は、悪夢そのものである。

その男は悲鳴を上げた。慌てて部屋の奥へ逃げるが、当然の如く逃げられない。その部屋はそういう部屋だった。壁に手を突けば何かを潰した様な感触があった。虫だった。慌てて下がれば何かを踏みつぶした。虫だった。足に這う感触があった。虫だった。狂った様に振り払えば何かを踏みつぶした。虫だった。足を滑らせ転んだ。目の前の虫と眼が合った。触觉を有機的に動かしていた。風に靡く草のようであったし、風に靡くモビールの様でもあった。動けない。その頭の無い乳白色の芋虫、そうとしか形容出来ないそれは、威嚇するかののように身を起こすと口を開いた。口の中の小さな牙は湯気に煽られる鯉節のように蠢いていた。それはゴムのおもちやのように飛び跳ねると、その男の鼻の穴に潜り込んだ。男は絶叫を上げた。

床はもちろん、壁、天井、ベッドの上、柵に虫たちが敷き詰まっていた。天井からポロポロと落ちる。壁から飛び跳ねる。洗面台の下水口からムカデが遡ってきた。便器の蓋が開いたと思えば、ウマバエの大群が口を開けて待っていた。今やその部屋は虫箱だった。

いやだ、虫は嫌だ。

ムカデは見るからに異形である。連なった甲羅状の節は赤さび色で、各節から伸びるエビのような足は黄丹色。通常二〇〜三〇センチ、最大で四〇センチを超える。その巨大さは既に毒蛇。首をもたげ、威嚇するその牙はプラスチックすら砕く。鳥、ネズミすら喰らう肉食動物だ。体中を喰い千切られた。

虫に這われるのは嫌だ。

ウマバエは数で攻める。成虫に卵を産み付けられた蚊は人間を吸血し、その血を吸った穴から、侵入し寄生する。体長五ミリほど。ミミズを蛇腹の要領で潰した様な姿で乳白色。アルビノのように表面直下が薄く透けて見える。違和感を感じてシャツを捲れば、その乳白色の軟体の「壺」が、腹部にびっしり生えていた。口がパクパクと開いては閉じている。視線が合った。強いて言うなら、ミツバチの六角形の巣に居る幼虫全てに凝視されている感覚だ。

喰われるのは嫌だ。

ウミケムシは軟体だ。乳白色だが全身を構成する節の根元が桃色で、その色合いが嫌悪感を増加させる。その形を強いて表現するなら、頭部の代わりに口蓋が付いている芋虫だ。アグレッシブに食い付く肉食性と毒針の毛を持ち、刺されると赤く腫れて水疱になる。その芋虫が体内を這っていた。先ほど鼻の穴から侵入した奴だ。体内を喰らい

ながら、皮膚の下を蠢いていた。布団の中を蠢く何かのようだった。狂った様に脇の皮膚を指で切り裂けば、その皮膚の裂け目から次から次へと幼虫が溢れだした。

死ぬのは嫌だ、こんな死に方は、嫌だ。

タイノエは寄生虫。それは魚類の口蓋に寄生する、乳白色へアルビノの多足甲虫である。魚の口を開ければ同居するオスとメスが見える。魚の舌を溶かし養分を吸収する、ダンゴムシに似た寄生虫だ。嫌悪虫の代表である百足が可愛く見えてくる程の、おぞましきだった。正しく宇宙生物に他ならないだろう。その虫が魚類ではなく、自分の口の中に居たら、それを考えるだけで身の毛がよだつだつ……程度では収まるまい。口の中に違和感を感じ、指を突っ込み取り出せば、不釣り合いな程可愛らしい瞳をしていた。複数の足と触覚を、有機的に蠢かしていた。男は悲鳴を上げる事が出来なかった。なぜなら、タイノエに舌を喰われてしまったから。

彼は虫に塗れていった。彼は虫に纏われ、這われ、肉と骨を食い尽くされ、死んだ。だって、目玉しか残っていないんだから。生きているはずが無い。その残った目玉も蹴られるサッカーボールのように、ムカデに転がされてどこかに行ってしまったけれど。

「あ、かつ?!」

全ては己が生み出した幻。帰ったその男は拘置室の中だった。狭く、暗く、汚れ、臭う、何一つ変わっていない住み慣れたその男の部屋だ。真也は魔眼殺しを付けたまま

だった。真也はただ能動的な死という強い思念を叩き付けただけ。それは男の自我という結界を突き破り侵入した。その死念は彼の悪夢を呼び起こした。それはその男にとって最も死に近いイメージに他ならない。その男は幼い頃毒虫に噛まれ、虫にトラウマを持っていたのである。

「ひっ！・ひあああああ!!!」

その男はなにもかも忘れて、転げ落ちるかのように部屋の隅に蹲った。端で見ていた刑事には、その男が真也に睨まれると突然怯え始めた、その様に見えた。その様にしか見えなかった。

「……何をした」

その刑事は生まれて初めてホラー映画を見た頃のような顔をしていた。真也は笑いもせず、ただ静かにこう言った。

「だから言ったでしょ？　ただ見てるだけだって。ちよつと怒気を籠めましたけれどね。経験上この手の輩は、恐怖つて警戒心が希薄ですからこれが有効なんです。自分に怖い物がないと錯覚して傍若無人になる。人によっては刃物だったり、動物だったり、事故だったりするんですが彼は虫を見たようです。また暴れるようなら百足のいっぴきでも放り込んであげて下さい。温和しくなりますから」

「君にその権利があるのか」

「当然ありますよ。俺の連れにあんな事をしようとしたんですから。一滴でも付着していたら、コイツのをちよん切るつもりでした」

その刑事は知れず冷や汗を掻いていた。

「ちよん切るとはナニか。それとも首か」

「冗談です。冗談ですよ」

「君には怖い物があるのかね」

「ええ。家に居ます。怖いけれど愛する人達が、ね」

その刑事は立ち去る真也を追う事も、留める事も出来なかった。目の前の人型は人間では無い、そう直感的に悟っていたのである。



そこは警察署のメインフロアである。見渡せばオフィスデスクと積み上げられた書類が見えた。他にはノートPC、制服を纏った警官に私服警官、ルーキーにベテラン刑事、カウンターには苦情を申し立てる一般人。そして捕まったばかりであろう容疑者が、小突かれながらどこかへ連れ去られていく。つまり整然とごった返していた。その一面にパーティションで隔離された、ミーティングスペースにルヴィアが居た。オイ

スターホワイトのデスクに向かい、インディアンイエローの背もたれを持つチェアに腰掛けていた。その配色は心を落ち着かせる効果がある、彼女はそれを思い出した。

「失礼」

そう断り入ってきたのは、二人を時計塔から招き寄せた刑事、テリー・シモンズであった。彼は恰幅の良い腹を揺らしながら、ルヴィアに紙コップを差し出した。それはホットココアだった。

「どうぞ。安物で申し訳ないですが」

ルヴィアは素直に受け取った。例えインスタントであろうと、この状況でココアとはありがたい。カカオの香りが心身に染み渡った。

「大変な失態をしました。何とお詫びして良いのか。我々の落ち度です、ご容赦下さい」  
「いえ、あの場所に趣いたのは、私の選択です。お気になさらないで下さいな。未遂で済みましたし」

「これからどうされますか？」

「予定通りトーマス・ニルセンの家を調べます。ミスター・シモンズ、お持ちの関連資料をホテルに届けて下さらない？」

「女性を賞するには不適當な言葉ですがタフですな」

「良いですわね、その賛辞」

窓を見れば既に陽が落ちていた。

「本来なら色々問題がある行為ですが……ま、我々の手に負えないようだ。今晚にでも届けさせましょう」

「感謝しますわ」

「レディ―エーデルフェルト。僭越ながら助言を」

「何かしら」

「貴女の連れですが、御交友をお持ちならよく考えなすった方が良い」

「それは、どういう意味ですか？」

「警官になって三〇年。私は職業柄色々な人間を見てきましたがね、あれ程ドギツイのはお目に掛かった事が無い。あの手の輩は厄介事を招き寄せる、疫病神と言っても良い。いつか今日以上の不幸を貴女にもたらしますぞ」

「ご忠告は感謝いたしますわ。でもそれは無用の心配と言うもの。魔術師とは万物の歪みを扱う存在なのですから。なによりそれは私が決める事、指図は受けません」

その刑事は笑い出した。

「本当に気が強いお方だ。なるほど。だから彼は貴女の連れをやっているのでしょうか」

「それは、どのような意味かしら」





トイレットペーパーで、手のひらに付着した粘りけのある白濁液をつまみ落とし、水洗いし、石けんで洗い、消毒薬を手につけた。また水であらい、それを繰り返す事既に五回。半ベそでゴシゴシと洗う様は、派手に転んだ子供そのものである。

「汚れちやつた、汚れちやつたよう……さくらー、お兄ちゃん汚れちやつたよう」  
洗えども洗えども、右手に宿る生暖かい感触は消えざり、ちつと手を見る。

「うええええええ!!」

つづく!

## 三話

警察署を後にした二人はトーマス・ニルセンの家を調べたあと、今日はここまでホテルに向かった。真也は相部屋のユースホテルを予定していたのだが、ルヴィアが強行に拒否をした。豪華ではないという意味である。予算が無い、我慢ならない、我が儘だ、馬鹿にしているのか、壮大な一悶着のあと、ルヴィアはリバプールの高級ホテルに向かった。真也はご自由にとユースホテルに戻ろうとしたが、ルヴィアが「招く」という良く分からない理由で真也の分も立て替える事にし、豪華なシングルルームを二つ借り、今に至る。

それはそれは立派な部屋だった。とにかく広い。キングサイズのベッドにソファとテーブルが置いてあった、それでも広い。このホテルの宿泊費は幾らなのだろう、真也はそれを考えた。絨毯、カーテン、ベッド、クローゼット、設備自体はありふれた物だが、材質といい、作りといい、質感といい、安宿と根本が異なる。高級品とはこういう物を言うのだ。バルコニーに出れば夜のアルバートドックを望む事が出来る。海商都市リバプール、それは世界遺産リスト登録物件である。真也は胃の痛みを覚えた。クレジットカードの請求書を思い出したのである。それは第五次聖杯戦争終結後のこと、

見覚えの無いそれが遠坂家に届けられた。宛先の住所は蒼月の家だった。転送されたのであった。その請求はかつて、真也が指示しキャスターが使った高級ホテル代であった。真也は普通のビジネスホテルのつもりであった。従者の責は主が追う、姉と妹に散々怒られた事はもはや三年も前の事。半年間小遣い無しという沙汰であり、いまや懐かしい思い出である。

「いててて」

堪らず胃を抑えた。

「……どうかしまして？」

「価値観が異なる人との意思疎通は難しい、と言う事です。いてて」

「何を言っていますの。その様な事当然でしょう？」

ルヴィアを見てしみじみ思う。

「仰せの通りでありますな」

ローテールブル越しのソファアに腰掛けるルヴィアはドレス姿だった。ロイヤルブルーのイブニングドレスは見るからに高級品である。オフショルダーネックで肩を大胆に見せていた。フリルは無いが、ふわりとした仕立て。ロングスカートだが、薄手の生地で肢体の線が浮き上がっていた。晚餐会に立てば、誰も彼も見惚れるだろう。少し離れた位置から見てみたい、と考えたりもした。近すぎでは踊りも分りにくい。

「なんですの？」

「舞踏会は引つ張りだこでしょう」

「その場に来る殿方は刺激に欠けるので滅多に出かけませんわ」

「あー」

「なんですの？」

「何でもありませんよ」

その状況がなんとなく分つたのである。真也はライトグレーのスウェットだった。ルヴィアはそれが物珍しそうだ。

「真紅の外套はどうしましたの」

「始終着ている訳ではありませんから」

「そのガントレットは？」

左の一の腕の半分を覆うタイプであつた。表面はざらつとしており、黒色で樹脂に見えた。そのデザインはミリタリー風である。

「秘密です」

「そう。非常時に供えていると言う事。限定武装かしら」

「秘密ですつたら。あ、でも。一晩付き合つて頂ければお教え、冗談ですつてば。鉱石を二つも三つも持ち出さないで下さい。ええ、分つています。単なる力押しでは無くて、

特性の組み合わせによる、相乗効果ですよ。アンバーは電撃、アポファイライトは浄化、ヘタマイトは勝利。雷を以て浄化し勝利するですか。ええ、良く存じております。その組み合わせを察するに、発動されるとこの部屋が壊れます。俺も壊れちゃいます。でもだからといって頬を引っ張るのだけはやめて下さい。苦手なんです。家族の一人が怒るとそれをしてくるんです。とても痛いんです。思い出すだけで痛いんです。あ、いひや  
いいいいいい……」

そして二人は面を付き合わせ、シモンズ刑事より届けられた情報を検討し始めた。目の前のローテーブルには、グラスが二つ置いてあった。透明なシンプルなグラスにはゴルヴィアのような整った形の氷が浮かんでいた。つまり酒である。真也はスコッチ、イギリスでは十八歳から飲酒が可能となる。フィンランドでは条件付きだがやはり十八歳からだ。経験者であっても、おかしくは無いのだがその姿は堂に入っていた。(何やつても様になるね、このお嬢様は)

多少の嫉妬を感じつつ真也はスコッチをグビリと飲んだ。そしてルヴィアがブランドーを小さく嗜んだ時、真也が読み上げ始めた。

「トーマスニルセン。四五歳、白人男性。ノリスグリーン地区にあるおんぼろ一軒家に在住だった。住民登録無し不法滞在者で、何度か役所の人間が訪問しているそうで

すが『問題なし』」

「暗示かしら」

「恐らく。そして職無しです」

「資金の提供元は？」

「家に相応の現金がありました。蓄えがあつたのか、それとも他の誰かから資金提供を受けていたのか、までは分かりません。近所づきあいはなく、頻繁に出かけていたそうです。目撃情報はリバプール全域に散らばっています。ゴルフ場であつたり、公園であつたり、学校であつたり。そして教会であつたり」

「魔術師が教会に近づいた？」

「はい」

「何か意味があるのかしら」

「教会の目撃回数が多い、この報告書はそう語っていますが、アテになるかどうかは分かりません。リバプールメトロポリタン大聖堂、リバプール大聖堂、等々。この町には教会が十カ所もありますから。単に施設を見て回った、と考えればこのデータはその様に解釈する事も可能、という意味しか持ちません。図書館で郷土資料を見ていたという情報もあります。何かを探していたのかもしれない」

「情報が少ないですわね。判断するには難しいですわ」

「今刑事さんに調べて貰っています。取り調べる前に不審死してしまい後回しにしていたそうですよ。それがどういうわけか、突然、婦女暴行をしでかし自首をした。自分は魔術師だと訴え、刑事さんが俺らに通達した。その後拘置中に死亡。その情報だけを考慮するならば、誰かに追われて、犯行に至り、露呈した、とも考えられます。魔術回路の切り替えに性的興奮を使う者も居ますから。己の内でも済ませるより、行動に及んだ方が確実……と後追いで、こじつける事も出来ませんが、やはり確証はありません。今となつては調べる事はできませんし。ただ明確なのは魂を魔力に変換出来る術式を知っていた事です。誰もが知っている事ではありませんから、これは手がかりになるでしょう」

「被害にあった方は？」

「意識薄弱、つまり虚ろで事情聴取はできていません。無理も無いでしょうが」

「どのような方？」

「エディンバラ在住の十四歳。捜索願が出されていました。家出だそうです。保安カメラの映像は消去されていたそうです。警察署は大騒ぎだそうですよ」

「そうでしょうね。内通者が居る、と言っているようなものですから」

アルコールが回ったのか、ルヴィアの頬はほんのり赤かった。初めて見る可愛らしい表情に、役得役得と真也は小動物と戯れる心境である。



「ミスター・シモンズ〈刑事〉に着手しますわよ。暗示を掛け、情報を引き出します」  
「レディ・エーデルフェルト。その前にトーマス・ニルセンの家をもう一度調べるべきです」

「私が調べたじゃない。見ていなかったのかしら？」

彼女は既に、探知の術を使ったが、それらしいモノは発見出来なかったのである。

「トーマス・ニルセンが魔術師であった事は確実で、彼は自分の魂を代償に術を使った、それは余程の事です。魔術師が何かするのであれば自宅という拠点しかない。我々は何か見落としている。レディ・エーデルフェルト。それは貴女も疑問に思っている筈です」

事実その通りであった。だが彼女は疑問に思いつつも、それを認める事が出来ないのだった。

「トオサカシンヤ、貴方は何を言っているのか理解している？ 私がミスをしたのではないか、そう言っているのだけれど」

「ミスは誰にでもあります。魔術師であるが故に死角がある。優秀な術者ほど、その死角は大きい。神代の魔術師であれ、その限りでは無い」

「聖杯戦争を勝ち抜いた者の感かしら」

「聖杯戦争から時計塔に至る三年間の感ですよ。解釈は如何様に」

「良いでしょう。別行動をすれば貴方の失敗した顔が見られませんか」

「ご理解感謝します」

「明日、私に謝罪する時が楽しみですわ」

「……するんですか？」

「当然でしょう？ 私を侮辱したのですから」

「大げさな。それに無理強いはしていません。ホテルでお待ち頂いても、嘘です、是非、一緒に下さい。前言撤回します。ですからその魔力をしまってください」

アルコールのせいか何時しか音楽の話になった。ルヴィアがロック、ポップを聞くという事実は意外な事であった。ブリトニー・スピアーズ、アヴリル・ラヴィーン、若い女性がステージで熱唱し、観客を湧かせている姿が痛快なのだそうだ。何となく腑に落ちた真也であった。気がつけば午後十一時であった。

「レディ・エーデルフェルト。今晩はここまでにしましょう。明日八時に伺います」

彼はすつくと立ち上がった。その彼女の物言いは、その日の最後の別れの挨拶である。

「トオサカシンヤ」

「はい？」

「礼を言っておきます」

扉とその隙間に佇むご令嬢は目を伏せ、躊躇へためらいがちにそう告げた。

「その、卑しい輩から守って頂いた事には感謝いたしますわ」

「あ、ああ。あの程度お安いご用です」

そう格好は付けたものの二度目は避けたいと思う真也であった。

「おやすみ」

「おやすみなさいませ」

パタンと扉は閉り、彼は隣の自分の部屋に戻った。歯を磨きながらハタと気づく。

「……あれ？ ふ、ふん。お嬢様の機嫌を損ねて、仕事に支障が出たら困るだけだ。それだけだ」

徐々に従者らしく、染まっている自分への言い訳である。

「俺、自分への良い訳上手くなったよ……寝よ寝よ」

ベッドに向かった彼は、毛布を引つpegすと、ソファーに腰掛け、毛布を包まり、覚醒と睡眠の合間の状態になった。彼は座し安静となる、決して横にならない。これが彼の寝方だ。遠坂の家を出発し一年と十ヶ月こうしているのだった。こうせねば生きて来られなかったのである。



翌日二人はトーマス・ニルセンの家に向かった。二階建ての煉瓦造りの家と言えは聞こえは良いが、その傷みは一世紀分だ。昨夜訪れた時は夜も更けており気がつかなかったが、陽の光の下で見ると凄惨さが良く分かる。煉瓦はひび割れ、欠け落ち、蔦は我が物顔で壁を這っている。木製の窓枠も腐りかけだ。エルメロイ宅と同程度かそれより酷い。

ただどういう訳か芝生の手入れはされていた。窓硝子も割れていない。落ち葉、砂、石ころ、汚れも無く、清掃は丁寧にされていた。庭の木々は丁寧に刈り込まれ形が整えられていた。煉瓦の塀を、菌糸類の様に喰らい付くす腐海のようにあまりセンスは無いが丁寧だった。写真の通りここの家の持ち主は神経質な性格だった。

Keepoutというテープをくぐり抜け扉を開けて奥に入ればそこは映画の世界である。木の床、煉瓦の壁、暖炉に、ラグ、木製テーブル、ソファが置いてあった。雨戸は上げられているが、日光は余り差し込まない。調度品の旧さと痛み具合がまた良い雰囲気醸し出していた。サスペンス、ホラー的な意味である。それらは薄暗い空間に浮かび上がっていた。少なくとも一階だけを見るなら魔術師の家には見えない。昨夜調べた二階も同様だ。実に静かな物である。お隣さんとは相応に距離があり、その間には相当数の年代物の樹木が並び、隔離状態だ。人目を憚るにはうってつけであった。真

也が家の照明を点けると、ルヴィアが一步踏み出した。板の間がギシリと音を立てた。

「ミスター―シモンズ〈刑事〉に連絡しましたの？」

「してないです。理由はシモンズ刑事がトーマス―ニルセンの死亡を自殺と断定して、と言う事です。引つ掛かります」

「気にしすぎではないかしら、単なる言い違いの可能性もあるでしょうに」

「今はまだ慎重になるべきでしょう」

「トオサカシンヤ」

「はい」

「あの刑事を初めから信用していなかった、と言う事かしら」

「ええ、そうです……なんです、そんな怒った顔して。お美しい顔が台無しですよ」

「信用してないあの刑事にあんな愛想を振りまいて、仮にとは言え共闘関係にある私にその態度ですの？ 性格に問題があるのではなくって？」

癩癩を起こし、魔術を使われた方が誤魔化しやすいのだが、こうくると話は変わってくる。非難めいたルヴィアに耐えきれず、真也は渋々釈明する事にした。

「まあ俺自身善人だとは思っていませんが」

そう前置きしこう続けた。

「お嬢様は違いますが、信用してない赤の他人には仮面を被りますよ、俺はね」

意外な告白にルヴィアは少し面食らった。共同歩調を取っている以上、ある程度信用しないとままならない。だがルヴィアは散々敵視した発言をしているのだ。

「それは私を信頼している、と解釈して良いのかしら」

「ええ、それなりに」

「完全にはない？」

「ゼロかイチかで、分けられる程世の中単純でもないでしょう。そうですね、この際だ。伝えておくのも悪くない」

真也は彼女を見据えた。

「ルヴィアゼリツタⅡエーデルフェルト、俺は貴女を気に入ってる。何処が、と言うと。気が強いところとか、それを地でやっているところとか、後は美学を持ってそれを貫こうとしているところ。マスターにするなら貴女のような人が良い」

「マスターにする」など妙な言い方だ、ルヴィアはそう思った。

「ですから尊重もしますし危ない時は守りもします。ただし条件付です。信条に背く行為には反発しますし、俺は死ねないし帰らないといけない。そして、」

「トオサカの益となる行動を取る、かしら？」

「その通りです。お察しの通り、俺は貴女に幾つか隠し事をしている。けれど教える事は出来ない。なぜなら貴女はトオサカの間人ではないから。この身体に課せられた役

割と貴女への好意、それを踏まえた上での貴女との距離、と考えて下さい」

いざという時はルヴィアを見捨てて己の命を選択する、と言う意味だ。ただ真也にとつての緊急時は、一般的魔術師とは大きく異なる事は言うまでも無い。

「要するに、私への態度は地が混じっている、と事」

「そんなところですよ」

「まあ、明瞭に言われた方が私としても、やりやすいですから不問としましょうか。ですが、あの程度で私を守るなど自惚れにも程がありますわ」

「そういう貴女だから身体の張り甲斐があるんですよ」

「気づいていらっしやるのかしら。貴方が宣言した事は当然すぎる事ですわ。当たり前すぎて胸を張って言うには滑稽ですよ」

「俺が気に入っている、そう言った事も？」

「当然」

さも当然だと言わんばかりの物言いに彼は苦笑するより他はない。ルヴィアのその指には、返答次第では叩き付けようとした宝石があった。毒気を抜かれてしまった。

「もう良いですから。さっさとなさいな。そのクローラーボックスなのでしょう？」

「流石お嬢様、目の付け所が違う」

白と青の、典型的なそれを真也は手に持っていた。秘密兵器とまでは行かなくとも意

味ありげなのはあからさまだ。台所に向かった真也が戻ってくると、そのクーラーボックスから白い煙が溢れていた。中を覗けば、ゴポリゴポリと溶岩のように泡吹いている。水を入れたのだった。

「ドライアイス？」

「はい」

「何をやるおつもり？」

「俺の勘が正しいならば、なんですけれど」

真也は最初にキッチンにおいた。そのクーラーボックスからはドライアイスに触れた液体が微小な固体粉末になり、煙のように溢れだしていた。真也は流れる雲のようなそれをじっと見ているとリビングに移動した。ルヴィアには訳が分からない。リビングでも同じである。客間、階段の下、彼は同じ事を繰り返した。時折懐中電灯の光で煙を追っていた。

「何をしていますの？」

真也の奇行に我慢出来なくなったルヴィアであった。

「んー」

真也の態度が変わったのはクローゼットの中だった。そのクローゼットのある部屋は構造上リビングに面していたが、その仕切りは壁と称するには厚かった。ゴンゴン、



それは彼がクローゼットの奥の壁を叩く音である。ゴンゴン、続けた叩いた。コンコン、ルヴィアは察しが付いた。ドライアイスの煙が壁と床の間にある、僅かな隙間に吸い込まれていたのである。人が一人入れる程度の奥行きの、クローゼットの奥の壁を弄る真也はナイフを取り出した。それは真紅のコートの右袖の中にあり、いざとなれば即座に投擲できるタイプのナイフであった。

「呆れましたわ。その様なモノを隠し持っているとは」

「内緒ですよ」

「荒んだ旅だったようですね」

「ええ、とても」

「トオサカリンは知っているのかしら」

「知りませんよ。知ったら連れ戻されますから」

「その外套、他に何を隠していらっしやるのかしらね」

「それは秘密です」

クローゼット内の柱と壁の隙間にナイフを突き立てるとカチリと音がした。奥の壁は引き戸であった。開いた扉の向こうには地下に降りる階段があったのである。

「ゴン」

真也のその物言いは、宝を掘り当てたような心境だ。

「そりやそうだ。魔術師なら魔術で隠すと思うよな、フツ」

「トオサカシンヤ、なぜ調べ直すべきだと?」

「仮定の根拠は二つ。一つは貴女がトーマスⅡニルセンは二流だと言った事です。二流であれば魔術回路の切り替えに難儀するでしょう。平時であれば問題なくとも別口の誰かに追い詰められた彼は精神が制御出来ず、魔術回路の切り替えが出来なくなった。そこで実際に暴行をして性的興奮を用い切り替えた。これは魂食いの術式に繋がります。そして二流だろうと家という本拠地がある以上工房の様な部屋はある筈。この二つです。それでも隠したいならどうするか。彼は俺らの盲点を付く事にした。欺瞞、人よけ、そう言った類の術を使わず、ただ建築構造に隠した。優れた術者ほど魔術を過信しますから。俺らとは別口の誰かも、引つかかり見落としました。婦女暴行容疑であれば警察の捜査もそこそこでしょう」

「二つ聞きたいのだけれど」

「何でしょう」

「トオサカシンヤ、貴方は魔術使いなのかしら。身体強化のみとはいえ、それなりに根源を求めている、求めようとしている、そう思ったのだけれど」

「魔術師は魔術を過信するべき者なのだ。魔術を使わずに済む、魔術より優れた他の方法があるかもしれない。それを考える事は己へ魔術師への背信行為だ。彼の返答は体

裁であつた。

「さて。どうなのでしょう。俺は遠坂という魔道の家の人間ですが、家督を継いでいい。継いでいい以上、根源を追う理由はありません。俺個人という範疇で見れば魔術使いなのでしょうね。ですが当主である姉は根源を追っています。この旅が終われば姉の助手になる予定です。そういう意味では根源を求めているとも言えるでしょう」

「自分の手で掴みたい、と思わないのかしら。その身体に流れる血は嘔かない？」

「ウチの家は少々複雑でして。他人様に話せないような、きょうだい喧嘩をしたんです。それこそ命がけの」

「お家騒動、と言う事」

家督を求めて争つたのだろう、ルヴィアはそう思った。真也の口調は、ルヴィアのよりも更に重かつた。

「内に溜つた鬱憤を吐き出して、皆の手を借りてどうにか収まつて、三人でやっていこう、そう決めました。魔術師として姉が一番優秀でしたから、自然の成り行きでもあります」

「三人？」

「妹が居ます」

「ま、話半分に聞いておきましょうか。嘘と真が混じっているようですし」

「納得頂けるとは意外です」

「信じる事は私が見る、貴方の行動のみとしますわ」

「レディⅡエーデルフェルト。貴女の聡明さと寛大さには感服するのみです」

階段を降りると真つ暗闇だ。夜目の利く彼は照明のスイッチを入れたが、生憎と明かりが点かない。電球が切れていたのである。ルヴィアは手短に詠唱すると、手の平に光の球を生み出した。

「魔術も便利でしよう?」

「魔術そのものは否定していませんってば」

その光の玉が手の平を離れ、地下室の天井に取り憑くと、一面を照らし上げた。一階の床面積に等しい空間を持つ地下室の床に魔法陣が描かれていた。その地下室はトーマスⅡニルセンの隠し工房であった。

「トオサカシンヤ。見事、と言っておきましょうか」

「お褒めにあずかりまして、光栄です」

二人の眼下には、魔術の光で照らされ浮かび上がる魔法陣があった。それを凝視していた真也はこう告げた。

「この魔法陣はエノク文字です」

「そのようですわね。天使を召喚しようとしたのかしら。それにしても粗末な魔法陣だ

こと」

「ですね。基板となるアウターリング〈最外円〉の大きさ、それぞれの意味を表すシンボルの比が正しくない。スカスカだ」

「この術式は相応の霊地を前提としたもの。ここが並みの地ならば、大きくしないと足りなかったでしょう。いずれにせよ大した霊は呼び出せませんわね」

ルヴィアは真也の様子がおかしい事に気がついた。

「どうかしまして?」

「レディ||エーデルフェルト。この魔法陣にはトーマス||ニルセンの身体にあつた転送先のラベル、それに対する受け取りを意味するシンボルが無い。トーマス||ニルセンは魔力を何処に送った?」

「この魔法陣とは、別の目的と言う事かしら」

真也はそれを解説し始めた。

「定義、接触……」

その魔法陣は次のように作られていた。

### 1. 宣言

- ・ 定義：魔法陣だと定義する
- ・ 接触：地脈にアクセスする

- ・吸収：地脈から魔力を吸い上げる

## 2. 召喚

- ・交信：霊体呼びかける

- ・転送：こちら側の世界に招き寄せる

## 3. 憑依

- ・抑制：憑依体の意識を抑制し、憑依しやすくする

- ・転送：霊体を憑依体に送り込む

- ・拘束：霊体を憑依体に固定

- ・令呪：指示に従わせる

「これ、霊体を憑依させ使役する召喚式ですよ」

「天使を呼び出して憑依、お告げでも聞くんもりだったのかしら」

真也の口調か堅かった。

「違います。この魔法陣に書かれている、天使名（力のシンボル）は、アザゼル、サタナ

キア、アマイモン……ルシファー。墮天使です」

流石のルヴィアも態度を硬化させた。

「トーマスニルセンは悪魔崇拝者？」

真也は少しは慣れたところに置いてあった机を漁り始めた。引き出しを一つ漁り、二

つひつくり返し、そして三つ目。

「レディ―エーデルフェルト。これを見て下さい」

それはペンダントだ。五芒星に黒山羊が細工されていた。

「悪魔崇拜結社『ラヴオワーク』の紋章です」

「納得ですわね。トーマス―ニルセンが魂食いの術式を知っていてもおかしくないですわ。何せ彼らが一大勢力でしたから」

「ですが変です。この組織は第二次世界大戦前後で、聖堂教会に滅ぼされた筈だ」

「残党。もしくは、再興したのかしら」

真也は三枚の写真を見つけた。

「槍と牙、これは教会？」

古い写真でよく見えないが鍔へやじりゝのみが写っていた。装飾らしい装飾もなく質素な槍の鍔だ。教会の写真は新しく、鮮明に見えた。

「何処の教会かしら」

「牙も気になります。何かの触媒かもしれません。一気にきな臭くなりましたね」

「逆に核心へと近づいた、そう考えなさいな」

真也は腕を組んで呆れた眼差しだ。

「前向きというか、タフというか。こちとら先ほどから寒気が止まらないってのに」

「だから私を気に入ったのではなくて？」

「分つてますよ。恥ずかしいので何度も言わないで下さい」

「照れるなんて意外と可愛らしいですこと」

「それ以上言うなら怒りますから」

「それは残念ですわ。それにしてもトーマスⅡニルセンは何に憑依させようとしたのかしら」

「そりゃ、人でしょう。動物なら意識抑制のシンボルなど、使わない……」

二人は顔を見合わせた。継いだのは真也であった。

「暴行された少女は、依り代でもあった？」

「しかしその娘は屋外で、その、されたのでしょうか？」

「違う、逆だ。別口の誰かを思い出して下さい。地下室で憑依の儀式を済ませた後、身の危険を悟ったトーマスⅡニルセンは彼女を連れ出した。家においておけば、その娘が俺らとは別口の誰かに見つかる可能性があったから。ところがある誰かが予想以上の手練れだった。その手練れ具合と、振り切れない事を悟った彼は暴行に及んだ。その後出頭すればつじつまは合います。時計塔に連絡したのは、その別口に対するカウンセラーを狙った。結局は間に合わなかったのですが、ですが、彼は魂食いを何に使った？」



「詰めが甘いですわね、トオサカシンヤ。人の身体は結界でもありませんよ。悪霊も人間という結界を纏えば、教会と言う禁忌の場所も出入り出来る」

ルヴィアは教会の写真を、ピツと持ち出した。ならばトーマスⅡニルセンの最後の術は。

「憑依体の強化」

病院に被害者少女の安否を確認したが、一足遅かった。被害者の少女が失踪したのである。

つづく！

## 四話

リバプール中心街から南東へ三キロの位置に古い町があった。そこは静閑な町で、右も左も煉瓦作りの建物ばかりである。煉瓦らしい赤茶色の建物が続く中、歴史を感じさせる黒ずんだ煉瓦色の建物が一つあった。地域住民の生活に密着した相応の規模の教会である。もちろん、彼らが美德とする清貧さ、と言う意味だ。そして二人は教会から道路一本挟んだ三階建て建築物の最上階に居た。もちろん許可など取っておらず、ルヴィアの暗示で強制的に間借りしたのだった。ルヴィアは遠目の術、真也はモノアイの望遠鏡で教会を監視していた。

「トオサカシンヤ」

「なんでしよう」

「身体強化と言いつつ、なぜ視力の強化が出来ないのかしら」

「ひ・み・つ」

魔眼が施術を喰らってしまふからである。窓から差し込む朝日を浴びて、カーテンの隙間から覗く古い教会は沈黙していた。缶コーヒーを啜へすすめる。スナックを食べる。目の前の通りをトラックが走っていった。気がつけば太陽は南中である。つまり昼だ。

つまりは待ちぼうけだ。徐々に悪くなるルヴィアの機嫌をどうにかしようと思はばつりと呟いた。

「あの神父さん頭固くて取り付く島がないですね」

「そうですね」

宗教文化と美術を専攻する学生だと見学を申し込んだら追い返されたのである。

「やっぱり信者とか、洗礼を受けているとか、嘘ついた方が良かったでしょうか」

「その様な化けの皮、すぐ剥がされますわよ」

「でしょうね、その為の神父さんですしね」

「それはそれとして、こうしているのもらちが明きませんわね」

「強い信仰を持つている神父さんに暗示など使えませんよ、使ったら大事になりますよ」

「ですわね」

「神父さんは聖堂教会ですよ、俺らは魔術協会ですよ」

「分っていますつたら。仕方ありませんわ。不本意ですけど待つ事にします」

「待つのは良いけれど、待たされるのは苦手？」

「あら、良く分かりましたわね」

（義姉そっくり）

実は血縁関係にある、と言われても驚くまい、そう腹を括った真也であった。

「しかし、レディニエルフェルト。トーマスニルセンは魂喰いを使ってまで強化して、何をしようとしたんでしょか」

「単純に考えれば、その別口の方への対抗策でしょうけれど、その憑依体を見つけたら引つ捕らえて吐かせるだけですわ」

（冗談だろうけれど、このお嬢様ならやりかねないな）

真也は望遠鏡をテーブルに置くとすつくと立ち上がった。

「憑依していようと日中は奴らの時間ではありません。動くのは日没後でしょうから、何か食べるものを買ってきます。ルヴィアゼリツタニエルフェルト、単独先行はくれぐれも自重して下さい」

「私の身を案じて頂いている、と解釈して良いのかしら」

「本気で言ってるなら怒りますよ」

「サンドウィッチと、エスプレッソをお願いしますわ。スナックはもう飽き飽き」

真也は睨んだつもりであったが、微笑まれては脱力するより他はない。あの宣告はやぶ蛇だったかもしれない、と後悔し始める真也であった。

（いや、蛇足かなー）

日が傾き、空が青から紅へ、そして藍に染まった頃である。強化された二人の耳がそれを捕らえた。何かが倒れる音、何かが割れる音、それは教会を破戒する音である。

「動いた」

「行きますわよ」

教会内は酷い有様だった。祭壇は碎かれ、整然と並べられていた長机は部屋のあちこちに、積み木の要領で積み上げられていた。床は暴かれていた。壁は崩れていた。荒らされまくっていた。まるで家捜しの様である。何より異様なのが、ほんの短時間でここまで荒らされた事だ。並大抵の力では無い。ただ一つ、正面の壁に掲げられた「彼」を表す十字架は手つかずだった。流石に触れる事は叶わなかつたのである。「究極の概念武装だしな」真也はそう呟いた。二人が歩みを進めるその荒れ果てた礼拝堂は静かだった。

「トオサカシンヤ」

「上です」

見上げる天井に居る少女は、ブリッジの姿勢で天井に張り付いていた。その姿は異様そのもの。蜘蛛の様な言えばまだ可愛げがあるだろう。白い入院服を着て、金髪の髪を垂らし、眼を赤く光らせていた。

“  
”

その口から迸る言語は蛇の鳴き声のようであった。鋭利な牙も見えた。

（古代バビロニアの言葉？）

“何処だ” って何かを探してる？

真也の延髄部にある符陣が唸りを上げていた。それはキャスターが刻んだ多言語翻訳の施術である。威嚇のつもりか、あざ笑っているのか、少女に取り憑いた悪魔はブリッジ姿勢のまま天井を歩き回っていた。真也のそれは率直な感想だった。

「映画のエクソシストのあの娘みたいですね」

「あちらの方が上等ではなくって？」

「ご存じで」

「幼少の頃観ましたから」

どんな幼少だったのか、真也は敢えて聞かなかつた。ルヴィアの魔術刻印が唸りを上げる。

「私を見下ろすとは……礼儀を教えて差し上げますわ」

何を、と真也が言う前に彼女の右手が吠えた。フィンの一撃によって砕かれた其所には何も無かつた。ただ穴が開いていたのみである。どこへ逃げたのか、ルヴィアがそう思った瞬間であつた。彼女の右舷にある積み上げられた長机が、砕けて宙に舞つた。まるで猛スピードでトラックが突っ込んだかのような振動と激しい音があつた。それ以上に不可解な事が、ルヴィアの左隣に居た筈の真也が目の前に居る事である。瞬間移動でもしたかの様だつた。真紅の外套が彼女の瞳の中で揺らいでいた。

「な、」

「強襲されました」

ガラリと立った音は、長机のなれの果てが崩れた音だ。慌てて、その方を見れば雪崩た布団から這い出るように憑依された少女が現れた。牙を立て忌々しそうに真也を睨んでいた。ルヴィアの驚愕は3つ。1つ、幾ら不意を突かれたとは言え、憑依体の身体能力に追従できなかった事。2つ、目の前のトオサカシンヤがそれに対応した事。3つ、身体強化の魔術を使うとは聞いていたが、この男は何時魔術を発動させたのか。

「レディ＝エーデルフェルト下がってください。力加減が難しい、難儀しそうです」

混乱しかかった中、その一言が彼女を静かな泉に呼び戻した。冷静になったと言う意味だ。

「まさかとは思うのだけれど、あの少女を助けるつもりなのかしら」

「そのまさかですよ。小突いて、弱らせて拘束します。その後、聖堂教会に通知してエクスシストに祓って貰いましょう」

「正気かしら。何を言っているのか、理解しているのかしら」

「俺らの仕事は依頼人の調査。ところが当の本人は死んでいますし、あの娘の中にいる奴の言葉なんてアテにならない。連中は嘘を付きますからね。尋問は無駄でしょう。ならば、被害者の救助をするまでです」

「倒す事と捕らえる事、この難易度の差を分っていますの？」

「もちろん」

「私たちが聖堂教会に頼る？」

「俺らが頼らなくても、救いを求める手は払えない筈です。彼らのはそういう教義ですから」

「それは問題のすり替えですわ。私たちがアテにする事が問題なのではなくて？」

「人の命が一つ掛かっています。この際棚上げしても良いでしょう」

「不要な危険を招き入れ、よりにもよって聖堂教会を頼る？ 本気で言っていますの？」

「もちろんです」

「ならば、勝手にしなさいな。付き合いきれませんか」

「もちろん、貴女に強いるつもりはありません」

「勝手に果てると良いですわ、その自惚れの良い授業料となりましたよ」

踵を返し、扉の向こうに消えていったルヴィアを確認すると真也は薄ら寒い笑みを浮かべた。

“——っ！”

「俺が誰かだなんてどうでも良いだろ。そんな事よりあのお嬢様と物別れしてまで助けるんだ。温和しくお縄について貰うぞ」

憑依体の内包する魔力が意味を持ち力となる。それは真也の得体の知れ無さを警戒



したのであった。か細い少女の身体が膨張する。背が伸び、筋肉が膨れあがり、白い皮膚が、ゆで卵のように割れるとねずみ色の皮膚が現れた。冷える。、四月だというのに、とても寒い。吐く息が白くなる程だ。それは冷気を吹き出していたのだった。少女の額から二本の角が生えた。指先の爪は鉤爪になった。目がつり上がり鼻と顎がでっぱる。そして、背中に生えた物はコウモリの翼。悪魔が正体を顕した。対峙する真也が紡ぐは解放の呪文である。詠唱開始。

「守護神ヘカテーに願ひ奉る。その慈悲を以て戒めをを今ここに解く。その戒めは御柱二つ也。戒める古の名は……」  
 「災厄なる翼へ c l a d i s a l a 〱」

抑制されていた真也の魔力回路が段階解放された。キヤスターによるものだ。エルメロイが真也の内包するそれに気がつかなかつた事もこの術式に起因する。

『拘束術式限定解除』

「災厄なる翼」だなんて、あの義姉のネーミングセンスはどうにかならないのか、唱える度にこっぴどかしい。真也のそのぼやきが、第二ラウンド開始の合図であった。その悪魔は吠えた。少女を依り代に、人間一人分の魔力を費やし、一時的に実体化したそれは、羽ばたき飛翔すると眼下に獲物を見据えた。

「忌々しい人間め」

その悪魔が召喚主ヘトーマスニルセンと結んだ契約は、ある物の捜査である。見

つけた場合は指定の場所に運ぶこと。見つからなければ報告のみだ。召喚主は死んでしまったが契約は続行だ。幸運にも相応の魔力を与えられ、契約後もこの世で「有意義に過ごす」予定だったが水の泡となった。魔力を使いすぎた以上数刻持つまい。ならばせめて、その魂を喰らうてくれる。多少は出来るようだが、喰った人間一人分の魔力は半端ではない。ヒグマを一撃で砕く右手を、真紅の外套を纏う魔術師に打ち込んだ。その爪は切り裂いた筈だった。

だが、どうした事か。手応えがあるどころか、それは平衡感覚を失っていた。上を向いているようでもあったし、逆立ちしているかのようでもあった。それどころか、左頬を殴られた感覚がある。殴打と共に大量の魔力を打ち込まれ体中が痺れていた。見上げれば眼鏡を掛けた一介の魔術師が天井を背景に、それを睨み下ろしていた。その魔術師の左手は、その首を掴んでいた。床を構成していた板材が、宙に舞っている。その身体は床に食い込み埋まっていた。

「何故俺は、このひ弱な人間に、捕らえられ、殴られ、そして組み拉がれている。こいつは本当に人間か、いや、現代人か。これではまるで――」

「悪い。ちよつとクるかも知れないけれど我慢してくれ。今君を支配しているのは、その悪霊だ。それほど衝撃は無い筈だから」

何を言っている、そのその疑問はその絶叫に掻き消された。その魔術師に掴まれて

いる左手を基点に体内の魔力が乱されたのである。ありえない。何故そんな事が出来る。霞む視界の中に浮き上がるその魔術師の目は蒼く光っていた。先程まで付けていた筈の眼鏡が無かった。その瞳は死その物だった。

「呼び出されて、折角お越し頂いて申し訳ないけれど消えて貰う。ま、アンタの場合、自分の意思で召喚に応じたのだから、あの〈アンリマユ〉時ほど罪悪感は無いな」

“太古に消えた筈の、力を持つ者たち〈英霊〉ではないか”



ルヴィアが教会に戻った時、真也は見知らぬ誰かを拘束していた。

「レディ―エーデルフェルト。なぜ？」

振り返る直前、取り繕うように眼鏡を付けたのは気のせいか。この人物は一体幾つ何を隠しているのか。ルヴィアは溜息を付くと、真也がふん縛っているそれに気がついた。予想は付いていたが敢えて聞いた。

「その見るからに、怪しいそれは何かしら」

「憑依体です。トーマス―ニルセンの魔力を費やし、一時的に半実体化したようです。つまりサーヴァントのような状態です」

(まったく、どうやって拘束したのやら。こんな事ならせめて居残り見届けるべきでしたわね)

エースストライカーのゴール瞬間を見逃した心境だ。彼女は小さく溜息を付くと、一歩踏み出した。

「結構。そのまま拘束しておきなさい」

「何をするつもりですか」

「決まっているでしょう？　これから悪魔祓いをします」

ルヴィアは荒れ果てた礼拝堂の中において、数少ない無事である床に魔法陣を描き始めた。真也は赤い外套から手品のようにロープを取り出すと、憑依体を拘束した。

「聞き間違いだと大変ですので、確認させて下さい。レディ＝エーデルフェルト、今なんて言いましたか？」

「その悪魔を祓う、と言いました」

「その意味を理解していますか？　聖堂教会の教えでは悪魔も神が生み出した存在。人は悪魔を斃す権限を持たない。それが許されるのは、その悪魔を作った神と、ごり押し解釈で教会が許した極一部。ここは教会で、俺らは魔術師。この意味分っていますか？　できる出来ないは別にしてバレれば大事になります。教会はこの有様、あの神父さんはこの悪魔憑きを見たはずだ。俺らと面識がある以上疑われるかもしれない。教授

にもどうやって言い訳しますか？ 越権行為以前に、重大な挑発行為ですよ、これ。下手すると時計塔を追い出されますよ。部外者の俺はともかくお嬢様の経歴に――」

「殿方の割にはお喋りなこと。お聞きなさい」

床に魔法陣を描く、ルヴィアは手を止めて、見返り、自分の肩越しにこう宣言した。

「出来損ないの貴方、だけ」に見せ場を奪われては叶いませんもの。主役は私ですから」

組んだ以上共に責は追う、そこまで恰好付けられては止められるはずが無い。ルヴィアの不遜の姿に真也は悪態を付くのみだ。

「あーくそ、貴女に会ったのが運の尽きだ」

「私をここまで巻き込んだ貴方に言われるのであれば、痛快ですわ」

「……どうするつもりですか」

「簡易の儀式を構築します。鉱石の特性を用い、憑依している霊体に干渉して追い出す、良いかしら？」

「俺は追い立てた霊体を仕留める役と、わかりました」

「展開へinstruere」真也がそう唱えるとガントレットが変形し霊刀となった。その手にあるのは聖杯戦争を共に乗り越えた霊刀だった。欺瞞へぎまんはキャスターの拵えである。

「そう、やはり限定武装だったという訳」

「籠める魔力で切れ味と強度を増す、ありふれた霊刀ですけれど、ね」

「日本刀を選んだ理由は何故なのかしら」

「俺の習った剣術はこれが一番向いているんです」

「貴方は気配読みが優れる……回避と技が主体の戦い方と言う事かしら？」

一枚一枚剥かれる、と真也は諦め顔だ。ルヴィアは描いた六芒星の頂点に鉾石を置き始めた。

- ・ アダマタイト：成功率の上昇を司る。この場合はもちろん術式の成功率だ。
- ・ トルマリン：精神の強化と防御を司る。離れた悪霊が再び取り憑くのを防ぐ。
- ・ ハウライト：精神と身体を浄化する。これが悪魔祓いの基点となる。
- ・ ブラックオニキス：依り代の潜在能力を発現させ、祓い易くする。
- ・ ブラッドストーン：困難や苦難を克服する。
- ・ ローズクォーツ：恐怖に対抗する。

真也が呟いた。

「依り代に効果を与える石が多いですね」

「この方法を持って祓う場合、憑依された方ご自身が追い出す、これが基本となる。覚えておきなさいな」

「なるほど。憑依体に直接干渉するエクソシストのやり方とは、コンセプトが異なるという訳ですか」

ルヴィアは鉱石同士の相性と、星の位置と時刻を考慮し、石の配置を数度置き直した。多数の鉱石を使えば使う程安定させる事が難しくなる、その為の六芒星と言う事だ。そのシンボルは安定を意味するのである。彼女は立ち上がると、肩に掛かった髪を背に梳き流した。魔法陣の中に捕らえられたその悪魔は、魔牛のような呼吸を繰り返していた。

「トオサカシンヤ、」

「何時でも」

真也の手にある霊刀が魔力を帯び蒼く光れば、ルヴィアの紡ぐ言葉は力となった。

『Call』

その教会は強い光（魔力）で満たされた。



二人が夜の町を歩けば救急車とパトカーが、けたたましい音を立て通り過ぎていった。二人が通報したのであった。助かった少女は、再度病院に搬送された。今度こそ助

かるだろう。教会の神父は残念な事に殺されて仕舞っていた。諸般の後始末はこれから会うテリー・シモンズ刑事が取りはからう手筈となつてゐる。リバプールの町はもう眠りの時間だ。開いている店もなく、明かりの灯つてい民家も少ない。サイレンの音が小さくなれば、カツコツとルヴィアのブーツが音を立てていた。左隣を歩く真也にこう聞いた。

「貴方の言葉では無いのだけれど、危険だと思わなかつたのかしら？ 死ねない、そう言つたのは貴方でしょように」

真也は足を止めなかつた。

「念を押しておくけれど、あの少女を殺そうとした貴女の考え、選択は間違つていない。かつて俺もその口だったから良く分かる。敵ならば速やかに討つ、つてね。そうすれば味方も安全、自分の身も安全。けれど俺の経験上それは誤りなんだ」

1stバーサーカー戦の折イリヤを殺しかけた事を言つていた。

「命は人が持つ最後の財産、簡単に決めて良いものじゃない」

「その結果、自分の身を危険にさらしても？」

「それは勘違いだ。俺だつて自分の命を引き替えになんて、しない。ただ、出来るならすべきだろ。俺は助けられると思つたから、それを選択した。俺はそれ程ヤワじゃないから。それだけ」



「魔術師らしくありませんわね。それは無駄な行為に他ならない、他人なんてどうでも良いでしょうに」

「言つただろ。俺はデキが悪いんだ。だからいつも、姉にも妹にも叱られる」

「少し前から疑問に思つていたのですけれど、姉といい妹といい、貴方の発言にはいかがわしい違和感を感じますわ」

「そんな事ありません。ただ仲が良いだけですよー」

真也は不審めいたルヴィアの視線を誤魔化しつつ。

「どうやって教授に言い訳しましょうか」

「そうですね。二人で洗礼を受けるといふのは如何かしら？」

「そうですねー、二人で代行者にでもなりま——」

突然真也はピタリと足を止めた。

「トオサカシンヤ？」

真也の鋭い視線の先に人影があつた。その人影を認めたルヴィアが息を呑んだ。彼女はその人影を知つていた。こぎつぱりに切つた藍の髪、ショートカットだがもみあげは長めだ。黒色の修道服を纏うが足下はブーツだった。歳は二〇代半ばだろうが、同い年にも見えた。二人と一人の距離は自動車五台分。真也は警戒を隠さない。

「幾ら殺意が無いとはいへここまで近づかれるとは思わなかつた」

その人物の周囲に聖典の切れっ端が舞っていた。

「そう、そういう術なんだ。納得」

「見つけましたか？」

その人物の声は淡々としていた。答えたのはルヴィアである。

「聖堂教会のシスターに言うべき事はありませんわ」

「見つけた物を渡して下さい。そうでないと強硬手段に訴えないといけなくなります。なにより。魔術師が悪魔祓いの真似事をするなんて、見過ごせませんから」

ルヴィアが宝石を掲げた時と、ルヴィアを狙った七本の黒鍵が叩き落とされた時は同じだった。真也は霊刀を構え、ルヴィアを守るかのように構えていた。実際に守っていた。

「シスターの割には過激だ」

何時取り出したのか、そのシスターの右手には四本の黒鍵が握られていた。左手に三本。両手で計七本である。一本減らしたのは、七と言う数字に意味があるのかもしれない、真也はそんな事を考えた。

「また投擲するなら覚悟を決めてくれ。今度は仕留めに掛かる」

そのシスターは真也を見ると、困ったような表情を見せた。

「これは困りました。ルヴィアゼリツタールエーデルフェルト、貴方のナイトは随分強そ

うです」

そのシスターの表情は泣き止まない子供に手を焼く幼稚園の先生のようなだった。

「この町に着いた時、俺らを見張っていたのはシスターですね？」

真也の発言は彼女の表情を鋭いものにした。

「何者ですか？ 私の黒鍵を見切り叩き落したことといい、その感覚といい、バレるようなヘマはしていないつもりです」

「トオサカシンヤ、」

「そうです。レディ＝エーデルフェルト。この感覚間違いありません。このシスターさんは黒幕ですよ。トーマス＝ニルセンを追っていた彼女は彼を追い詰めたは良いものの、何かを聞き出す前に自害された。彼の家を調べても何も見つからない。時計塔に連絡を入れた事を知ったこのシスターは俺らを追跡する事にした。魔術師なら魔術師が隠した物を見つけられるだろう、そう踏んだ。ところが、」

継いだのはシスターであった。

「ええそうです。レディ＝エーデルフェルト。貴方のナイトは用心深かった。折角あの刑事さんを使って途中までは上手くいっていたのに、一度目の家宅踏査の時、貴女のナイトは意図的に地下室を見逃した。刑事さんが立ち会っていましたからね」

「シモンズ刑事に暗示を掛けていた、と言う事かしら」

「そうです。私を出し抜いた二度目の家宅捜査で、だいたい把握したあなた方は刑事さん以内緒で行動を始めた。お陰でまた出し抜かれました。このタイミングで現れたのはあなた方が刑事さんに連絡を入れたからです」

真也が言った。

「シスターの目的は知らないけれど、少なくとも俺らは見つけていない。それで退いてもらえないか」

「そうでしょうね。見つけていたらなら、そんな冷静でいられないでしょうから」

「ついでに悪魔祓いにも目も瞑って貰えると助かる」

「殺さない取引、と言うことですか。私とてむぎむぎやられるつもりはありません。断っておきますが先程の投擲は手加減していました」

「お願い、だよ。シスターに殺されるのも殺すのも、寝覚めが悪い」

一拍。緊迫した応酬の後、緩めたのはそのシスターだった。

「……遠坂真也さん、でしたか。日本人ですか？」

「それが何か？」

「その黒縁眼鏡少し気になります」

そのシスターは親しい誰かに会ったかのような、穏やかな笑みを見せると、そのまま闇夜に消えた。サーヴァントのような身のこなしで、真夜中のリパールに消えていっ

た。真也は「ちん」と納刀。霊刀は形を変え左腕のガントレットに形を変えた。ルヴィアはその消えた闇夜を凝視し続けていた。真也も同様だ。

「誰です、あの美人さんは」

「埋葬機関第七位の代行者。弓の称号を持つシスター＝シエル」

「……流石、本場ヨーロッパ。おつかない人が沢山居ます」



エルメロイの執務室で、その部屋の主が目を通すのは真也の作成した報告書だ。それには顛末が書かれ、証拠も添えられていた。証拠とは地下工房で発見した写真とペンダントであった。

「時計塔に通報した刑事、警察署の署員、拘置室の人達、署内に居た全員が覚えていませんでした」

「暗示か」

「恐らく」

「胡散臭いな」

「同意見です。悪魔崇拝者に、埋葬機関が動いている……何か裏があると見るべきで

しよう」

「だが、情報が少なすぎて何とも言えない」

エルメロイの手には二枚の写真があった。鏝と牙である。

「トーマス＝ニルセンは恐らくそれを探していた、と推測されますが確証には至っておりません。状況判断です」

「下手に手をつ突つ込めば、引つかかれる程度では済まないだろう。ご苦労だったな。以降はこちらが引き継ぐ。これはもう君の手に余る」

「分りました。ところで、」

「焦るな」

エルメロイは封筒を引き出しから取り出すと真也の目の前に丁寧にした。

「今回の報奨金だ」

「ありがとうございます！」

「君の労働の対価だ、礼を言う必要は無い」

「そこは人間関係の潤滑油ですよ。確認させて頂いても？」

「好きにするといい」

嬉々と封筒を開ければ、彼は固まった。

「……これだけ？」

エルメロイは平然としたものだ。

「元々学生向けの安全な依頼だ。その他諸々を引いてその額、おかしくは無いだらう」

「あの、五〇ポンドしかないんですが。食費とか雑費抜くと無くなります」

英国から日本までの飛行機代は大凡五万円。大凡三〇〇ポンドだ。ところがその三〇〇を

日々の生活費をさつ引いた額で、稼がなくてはならないのである。幾つの依頼を熟さねばならぬのか。

「てゆーか、全く足りません」

「契約は契約だ。不憫だと思ひ個人的に色を付けた、不満があるか？」

エルメロイはいけしゃあしゃあと言い放った。真也の身体は怒りと憤りで震えるのみ。一つ深呼吸。

「次もよろしくお願いいたします、教授。出来ればもう少し割の良い物を」

「任せておけ」

ボタンとその部屋のその扉はけたたましい音を立てた。真也の鬱憤が籠もっているのだ、当然であろう。

「あの錢ゲバ陰険ロン毛野郎ーっ！」

その声は現代魔術論の学術棟に響き渡った。

「ふ、ふ、ふ、ふ、ふ」

底冷えする薄ら笑いも響き渡った。

「好都合にもこれから暖かくなる。つまり野生動物たちの季節だ。時計塔の周りの森には、ウサギが居るからそれを狩る。鹿が捕れれば好都合、鴨、渡り鳥も食べられる。野草は沢山、ハーブも見つけた、野生の木イチゴもある。テムズ川で魚も捕れる。よし、こうなったら、こんなはした金使い切つてやる。景気づけに最初の一回だけ、贅沢にディナーと洒落込もう……」

「最初の一回だけ」言うまでも無く、それは一番やつてはいけないパターンである。「おやめなさい。野蛮人の如きその振る舞い、時計塔の品格を貶めるなど、許される事ではありませんわ」

真也の行く手の先、廊下の曲がり角にルヴィアが立っていた。何時ものようにロイヤルブルーのドレスであった。腕を組んで、不遜な眼差しだ。

「衣食足りて礼節を知る、食足りず、荒れているこの卑しい私めに何か用ですか、お嬢様」  
「あら。拗ねるだなんて子供っぽいこと。この私に説教を解いた方とはまるで別人ですわね」

「放つておいてくれ。メリハリは付けるタイプでね。申し訳ないけれど、レディ―エーデルフェルト、ご覧の通り俺は虫の居所が悪い。貴女の気高い嫌みを受け止めるほど余



裕は無いんだ。失礼する」

ツカツカとルヴィアの前を通り過ぎた。

「聞きましたたわよ。帰国の路銀とお土産代を稼ぐ為、指導役へチューターから借金をしているとか」

「借金なんてしてない。例えしていても天引きされた時点でチャラだ」

「それは結構。なら私と契約なさいな」

真也はヒタリと足を止めた。

「なぜ？」

「実績を積む為に依頼を率先的に受ける事にした、といえはおわかり頂けるかしら。入学前から同じ事をしていて、もう十分だと思つたのですが、十分などと決められるモノではありませんから」

「高度な依頼を狙い実績とし修練にもすると。お嬢様の向上心には感服するけれど、俺にメリツトが無い」

「僅か三日でこの騒動。トオサカシンヤ、私の見立てでは貴方は禍根の渦です」

「俺の傍に居ればタネに困らないと、言う事か」

「私の手元に置く、ですわ」

「どちらでも良いけれど、そんな撒餌みたいな扱いはお断り。余所当たってくれ」

付き合いきれないと再び歩き出す。彼の背中を見るルヴィアは、絶対的優位な表情であつた。異なる言い方をすれば勝利を確信していた。

「少なくとも必要経費と給金は別にします」

真也の足がまたピタリと止まった。彼が恐る恐る振り向けば、ちよろいとルヴィアはほくそ笑んだ。追撃開始である。彼女は指折り数えてこう言った。

「怪我をした場合の治療費、住宅補助、対物対人の保険、不測の事態に陥った時のエーデルフェルトの後ろ盾。他に必要なモノはあるかしら？」

髪を手漉きで流し、流し目で不遜な笑みである。

「……給料はいか程？」

「これで如何？」

ルヴィアが立てた指は五本だ。真也は唾を呑んだ。

「五〇〇〇?」

「五〇〇〇〇」

「ポンド? ユーロ? 円?」

「ユーロ」

真也はコホンと一つ咳払い。

「これからなんとお呼びいたしましょうか。お嬢様」

「特別に愛称で呼ぶ事を許可します」

「ではルヴィア様と」

こうして彼は一ヶ月という期間限定で従僕になったのである。エーデルフェルト家の、ではなくルヴィア個人の、という苦しい自己弁護はもちろん忘れなかった。

“遅くなったけれどランサーへの挨拶は済ませた。いまロンドンに居てもう少し滞在したら飛行機で帰る。親切な人が居てさ、宿と良い仕事を紹介してくれて、それで旅費とお土産代を稼ぐつもり。帰国は一ヶ月後の予定。P・S・桜へ、お袋と和解した”  
というエアメールを出したのはこの直後の事である。



エルメロイの執務室にある窓硝子から見下ろす公園は平和だった。生徒たちは日光浴に、フリーデイスカッションにと勤しんでいた。真也の報告書に添付された写真を見る、エルメロイの表情は優れない。陰鬱と言っても良い。その写真とはトーマスⅡニルセンの工房で見つけた鏃と牙の写真であった。彼はその写真を机に放り投げた。椅子に深くもたれ掛かれれば、それはギシリと悲鳴を上げた。

「七〇年前の亡霊か、また厄介な物を引き当てたな。私は厄介な者を引き込んだのかも

しれないな」

それは真也が持ち込んだ報告という意味でもあり、真也という意味でもあった。彼の机に置いてある悪魔崇拜結社のペンダントは哄笑を上げているかの様だった。

つづく！

## 依頼その二 時計塔の魔女編

## 一話

埃の匂いがするエルメロイの散らかった部屋で、真也は手荷物を背負い鞆に詰めていた。最初はサバイバルナイフだった。続けて裁縫道具に火打ち石を詰め込んだ。手回し発電のライト&ラジオ、濾過器、着替え、トイレットペーパー。保温アルミシートに携帯ガスコンロ&コップフェル。筆記用具や盗難防止用の南京錠にキーチェーン。パスポートに国際キャッシュカード。インドのルピーやイランのトマル、使い切れず残った諸外国の貨幣、エトセトラ。余り使わない物も入っている。荷物検査を受けた時に、それらしく見せるためだ。

文字通りパツクした時、エルメロイは黒いソファアに寝転がっていた。その手には魔道書が握られていた。彼の家に滞在したのは四泊五日。うち二泊三日はリバプールだ。その短い滞在時間でさえエルメロイは努力を怠っていないかった、真也にはそれが良く分かった。努力が実を結ばない、いや。才能に見合わない努力をしている事もだ。

教え子たちが、自分の横を駆け抜けていく事をどう思っているのだろう。自分を遙かに上回る才能をどう思っているのだろう。一流を望みながらも、他者育成に特化してい

る己をどう思っているのだろうか。その様な事は聞ける訳が無い。そもそも二〇年に達したばかりの真也が、口を挟むなどおこがましいにも程がある。同じ二流だと自嘲したジョナサンⅡスコットもこのエルメロイと同じ道を歩むのか、真也はそんな事を考えた。

「教授。僅か四日ですがお世話になりました。これより一般寮へ向かいます。綺麗すぎないと良いんですが」

「部屋など片付けなければ自然に散らかる、そういう場所だ」

「エントロピー理論を、片付けに適用するんですか？」

「昔から良くある言い訳だ」

「程々にしておくべきでしょう、」

片付けに来るグレイさんが気の毒だ、そう言いかけて止めた。気の毒かどうかなど彼女にしか分るまい。エルメロイは魔道書を僅かにズラすと、視線のみ動かし真也を見た。真也のバックパックを見たエルメロイはこう言った。

「早いな、荷造りはもう済んだのか」

「撤収は手早く迅速に、が重要ですから」

エルメロイは漸く起き上がった。ゆっくりと緩慢に、いかにも気怠そうだ。起き上がったのは煙草を吹かしたいただけだった。真也は気にも止めない。そういう人物だと

はもう分つていた。

「一時的な滞在なら問題ないが一ヶ月出入りするととなると話は別だ。後日書類を送るから、提出するように。君は期間限定で時計塔の人間になる。エーデルフェルト家の従者であろうと、だ。関係が無いからな。それはそれ、こちらはこちらだ」

（エーデルフェルト家の従者か。やっぱり、そう思われるか。個人的になんて、思われな  
いか。義姉になんて説明すつかなー、バレなければ良いけれど）

「トオサカシンヤ、君の扱いはエルメロイ教室の非常勤講師扱いだ」

「非常勤生徒なんて居ませんからね」

「この教室名だけはくれぐれも忘れてくれるなよ」

「重々承知しております」

エルメロイの吐いた煙はたゆたっていた。窓から差し込む陽の光を浴びて、浮かび上がるそれは苛立ちである。迷いもあった。

「ふん。これで気がせいせいする、と言いたいが年長者として指導者として、助言はしておこう。あの寝方は直した方が良い。寿命を縮める」

「覚えておきます」

「熟睡してしまう事がどうしても怖いなら、君の主に警戒の術式を頼む事だ。従者となった今なら二つ返事で受け付けるだろう。レディⅡエーデルフェルトはそういう人

物だ」

「ルヴィア様には関わりが無い事です。従者の都合ですから」

「余計なお世話だが。別れは誰にも訪れる、だから親密にはならない、と言うのは誤りだ。どうせ死ぬからと、生きる事を放棄する馬鹿者と同等の所行だと思わないか」

「教授の心遣いには感激するより他はありません。身に余る光栄です。ただ緊張の糸を切る訳にはいかない、それだけですよ」

「その中身の無い笑顔も改める事だ。見ていて不愉快になる」

真也は愛想笑いをするより他は無かった。エルメロイの眼力には舌を巻くより他は無い。



魔術師というのは基本的に利己的である。一人で居る分にはそれで問題は無いが、組織に身を置くとそう言う訳にも行かなくなる。我こそが優れている、と主張する人物が二人居たとしよう。当然それを証明しようとするだろう。それを証明するには勝利のみだ。そして競争・勝敗とは優劣を示す。その結果順位が生まれ、負けた者はその屈辱を原動力に己を磨く。リベンジを果たせば当然その立場が逆転する。勝者は敗者に、敗



者は勝者に。新たな敗者は己を磨き、新たな勝者に挑む。切磋琢磨というプラスの循環、これが理想である。

時計塔はそう言った緊張を内包する場所でもあった。苦勞して成り上がり、屈辱を舐め頭を下げる。この様な状況において余所者が堂々と時計塔の敷地を歩けば面白いはずが無い。『俺たちがどれ程苦勞して、この居場所を作っていると思っている』 真也が如何に異分子であるか分るうものだ。真也が時計塔に来て早々ふっかけられたのも無理は無い。

であるからして。その監督役であり、更にそのエリートを意味する奨学生『王の学徒へキングズスカラー』の位を頂くルヴィアゼリツタールフェルトが余所者である真也を従者にした、という事実は波紋を呼んだ。もちろん良い意味では無かった。とある女生徒が聞いた『何故真也を従者にしたのか』ルヴィアは答えた。『時計塔に入って二年、繰り返す日常に飽きてきた』

だがルヴィアは良くも悪くも、目立ち過ぎるのである。そのため真也が現れてからと言うもの、時計塔はある種の緊張感に満たされていた。エースオブエースのルヴィアの従者となった以上、彼を非難する事は、そのエーデルフェルト家を非難する事に他ならない。従って遠回しに呪うのみだ。

最初は降霊学部生徒たち。悪霊を呼び出し取り憑かせようとすれば、追い返され、

術者が逆に呪われた。複数名の生徒が「眼がつ！ 眼があ！」と叫びながら逃げていった。デユラハンの姿を見た物は眼を潰される、視力を奪われるのである。真也は手を振りながら彼らを見送った。

「ムスカ大佐乙ー」

次は動物学部である。モーゼ張りに大量のイナゴを遣わせれば、良く分からない理由で全滅させられた。真也の生み出した魔力の衝撃波であった。時計塔の周囲でかき集めた苦勞を、一瞬で台無しにされた生徒たちは、怒りが収まらない。

「これだけ集めるのにどれだけ苦勞したと！」

「佃煮にして売れ」

三つ目は植物学部だった。椅子に仕込まれた茨に刺されれば全身麻痺だ。その毒の名はウパス。その名を持つ樹木から精製される呪いである。ジャワの王が不誠実であった十三人の妾を殺してしまったという曰く付きだ。真也に見透かされ、棘はつまんで捨てられた。そしてゴミ箱行きである。

「ああ！ 酷い！」

「どつちがだ！」

四つめは呪詛学部だ。真也に向けられた呪いは、弾かれ反呪となった。生徒たちは悶え苦しんだ。

「うおおお、音が見えるうゝ 光が聞こえるうゝ」

「視覚と聴覚の反転だなんて、地味に高度だな」

最後は天体学部、つまりは占星術だ。彼ら詠えは地味であった。その日は奇しくも四月七日の月曜日。白羊宮で支配惑星は火星だ。一人が眩いた。

「俺らはツいている」

攻撃するには火星へ「マーズ」が適当なのだ。月曜日なら午前四時、十一時、午後六時が照応となる。彼らはずらつと並ぶ椅子の一つを、その日の、悪い位置、悪い方向に向けた。さて、困った。ここまで準備したは良いが。どうやって座らせようか。そこは憩い、雑談の場でもある。真也がそれをピンポイントで選ばせる方法など思いつかない。だが真也はそれに座った。椅子の脚が折れた。転んだ。ゴチンと頭を打った。火星の照応は頭なのだ。

「「ぎゃああー！」」

概ね学生がする事だ、呪いの強度などたかが知れている。それ以前にサーヴァント並みの抗魔力を持つ彼には効きはしないのだが、運に関する呪いには弱かった。

「むかつくー!!」

「「逃げろー!!」」

温和な「考古学」と一応の仲間である「現代魔術論」を除き、時計塔の「個体基礎」「降

「靈」「鉱石」「動物」「伝承」「植物」「天体」「創造」「呪詛」といった大半の学部から呪われていた。エルメロイを筆頭に各ロードたちも、生徒たちの憂さ晴らしに丁度良いと静観していた。もちろん本人にしてみれば堪ったものでは無いだろう。数年後、赤い悪魔を追いかけ、憂さを晴らす祭りが生まれるのだが、それはまた別の話である。時計塔版の「追儺の鬼」と言う訳だ。



時計塔は全寮制だ。そしてその寮は一般生徒向けと、エリート生徒向けの二つがある。ルヴィアはもちろん後者だった。柵にに囲まれるそこは真也はもちろん一般生徒は入る事すら叶わない。柵越しにハットフィールドハウスへHatfield Houseを彷彿させる豪邸のような寮を見るのみだ。だもその門の近くには大勢の生徒たちが居た。見渡せば真也と似た境遇のお付きたち。それぞれに思い思いの思惑があるのである。大半の者が金銭、もしくは人脈だ。当主を除けば、お興入れ先を目標んでいる者もいるだろう。皆が皆テキストを片手に主を待っていた。勉強熱心な者たちである。かく言う真也もパラパラと書物を捲るがタイトルは「犯罪心理学」だった。魔術の魔の字もありはしない。

白い椅子に腰掛ける真也の足下をリスが走っていった。英国には多いが、それ故ドブネズミなどと同じ害獣扱いである。そして何の因果かオッドアイの美少年、ジヨナサン  
Ⅱスコットの登場だ。

「おはようございます。トオサカさん」

「おはようございます。スコットさん」

彼は何時もの様に好感度の高い、爽やかな微笑みだった。スニーカーにデニムパンツに白いシャツ、タートルネックのシャツは黒色。男らしさを演出しているのか、シンプルな配色でシャツのボタンは開いていた。シャツの裾も出しラフさを演出していたが、華奢で小柄なので似合っていない。どう見ても男装のご令嬢である。

(一五〇センチ無いんじゃないか、この人。と言うか、十五、六歳で成長というか老化が止まってないか？ 解剖されなきゃ良いけれど)

真也はその様な失礼千萬な事を思いつつ。

「随分と朝早いね」

「散歩ですよ」

「どこまで？」

「ウインザー城まで行って来ました。ハイストリートから、キングⅡエドワードⅥⅠⅠ  
アベニユーを介しスロウロードで帰ってきました」

「結構距離が有るけれど、そんな早くから？」

「肌が弱くて日光が苦手なんです。今日は曇り空で助かりました」

（病弱設定の美少年か……ちよつちムカついた）

「勉強熱心ですね。何を読んでいるのですか？」

「犯罪心理学」

「……面白いですか？」

「ユニーク」

真也のその返答にどう返していいか分らず、ジョナサンは戸惑うのみである。

（だめかー、少し古いかー）

それはどこぞの宇宙人〈情報統合思念体〉によって作られた対有機生命体コンタクト用ヒューマノイド・インターフェース〈TFEI〉の真似だ。だが古い新しいという問題では無い。

「ご一緒させて頂いても、構いませんか」

「どうぞ。読書中なので『おぎなり』になるかも知れませんが。椅子を引きましたようか？」

「そういう冗談は嫌いです」

レディ扱いと言う事だ。

「それは失礼」

「どうですか、新しい住まいは」

「直ぐ入居できて、尚且つ家具が一式揃っていたので、大助かりと言ったところ」

真也は時計塔一般従事者向けの集合住宅へフラットへ入り込んだのだった。時計塔の敷地内ではあるが、壁の外にある。

「障つて、すぐ辞めてしまう人が多いですよ。それこそ着の身着のままです。給料がいいので今は持っていますが、いつまでこの悪循環が続くのか。時計塔執行部ものんびりしすぎです」

「そんなことよりスコットさん」

「はい。なんででしょう」

「〃僕男の子だよ？〃 っって言つて貰えませんか？」

「なんですか、それは」

「ちよつとした遊び？ 日本特有の」

「ぼくおとこのこだよ」

（よし、大丈夫）

真也はテーブルの下でガッツポーズだ。

「あの、なにか」

身の危険を感じたのか、おびえるその表情と仕草は男の嗜虐心をそそるに十分だった。だがおあいにく彼はシスコンである。

「不安には及ばないって。その不安を払拭する為の遊び、だってただだから」

ジョナサンのカナリアの様な声でその台詞、その衝撃は如何ほどのものか。ジョナサンの背後に居る誰とも知らない生徒が鼻血を出して倒れていた。深くは関わるまい、そうは思いつつ真也は忠告するのみである。

「でも、その握り手で胸元を隠すポーズは止めた方が良い。危険。とつても」



ジョナサンの脚を閉じて腰掛ける様は、まるでどこぞの育ちの良い息女の様である。方や脚を組みふんぞり返り、書物のページのペー지를捲る真也の足には、臍へすねの中程まで覆う無骨なブーツがあった。金属と機能性樹脂と機能性化学繊維で構成されていた。靴底は分厚く、滑り止めの形状は鋸へのごぎりゝのよう。GOREREXと刻印されていた。何キロ歩けばこう成るのか、手入れの後には有ったが、そろそろ寿命だろう。ジョナサンは興味津々だ。

「礼装ですか？」



「いや、ただのそういうブーツ」

「トレッキング用という意味ですね」

「戦闘用。蹴ったり、踏まれたり、場合によつては噛まれたりするから。丈夫くないと直ぐ壊れる」

「は？」

「冗談ですよー」

「私が言うのも何ですが、トオサカさんは随分と魔術師らしくない。貴方の世界には、魔術以外の物が多すぎる、そう感じます」

「そうだろうね」

「なぜレディⅡエーデルフェルトの従者を？ 魔術師然としている彼女とは、波長が合わないでしょう」

「お金の為つてのものもあるけれど、俺は彼女の様なタイプは嫌いじゃないらしい。気高く我を通す、彼女はそれを地でやつてる。だがこれは、本当はとても難しく危険な事だ。世の中悪人に都合良く出来てるからな。そういう人を、そういう道から、外れないようにする役、守る務めつてのは存外心地良い」

「好意ですか？」

「んー、そうだな。それに類するものだ。なぜ？」

「彼女には特別な相手がいいますから」

真也のページを捲る指が止まった。

「……カレシ？」

「ええ」

「へえ」

「冷静ですね、意外です」

「そりゃあ気になるけれど喜ぶべき事だろう。ルヴィア様のお眼鏡に適った人、つてどんな奴かつてさ。てゆーか、二〇歳でそういう人が居ない方がオカシイ」

「トオサカさんにもそういう人が？」

「俺は例外」

「作る気は？」

「当面無いな」

「どうしてですか？」

「俺には姉と妹が居るから。二人が嫁ぐへ片付くまで、そういう気は無くて」

「姉妹ですか？」

「そう」

「家族愛は立派ですが、程々にしておくべきですよ。きょうだいという血の繋がりは切

れませんが、いつかは別の生活を繰る関係です」

「ニーチェだつて妹に悩んでいたつて言うじや無いか」

「ニヒリズムを持ち出すとは、その苦悩はそれなりに深い様です。何故でしょうか。深淵の一端を覗いた感じがしました」

「放つておいてくれ」

「私で良ければ、悩みを聞きますが」

「そんな大げさじや無い」

「吐露すれば楽になります」

「なんでそこまで気にする？」

「トオサカさんが、特異だからですよ」

「それ、深読みしなくていいんだよな？」

「同性にも好意は存在しますよ。貴方は気にしすぎだ」

一拍。真也はこう切り出した。

「とある姉妹を好きになつて。その二人から好かれてる。さあどうしたらいい」

ジョナサンは笑い出した。

「恋の悩みにニーチェですか。おかしな方です」

「違う、取り繕いでその名前を出したただけだつてば」

「ジョナサンは端と気がついた。一転。神妙な顔である。宝くじが当たったと皆が騒ぐ中、実は外れだと知っている様な、気まずい顔をしていた。

「……まさか、その姉妹と言うのは」

「黙秘権を行使させて頂きます」

「随分と複雑な家庭事情の様です」

「もうなにも答えないからな」

「思い切つて、本当に仕えてみてはどうです」

「何が」

「レディ＝エーデルフェルトの従者ですよ。一ヶ月と言わず一年、いえ、一〇年ぐらいどうです。誇れますし上流社会を知る切っ掛けにもなるでしょう。姉妹離れの良い切っ掛けになる。なにより先ほどの貴方の物言い、姫君に使える騎士の誓いの様です。彼女も案外二つ返事で受け入れるかも知れません」

「止めてくれ、そんなお上品じゃ無い」

その声は唐突だった。

「それは名案ですわね。シンヤ、考えておきなさい」

話に熱中していた二人は、ルヴィアの接近に気がつかなかつた。従者失格だと、真也は渋い顔である。二人は同時に立ち上がった。座つたままの挨拶など非礼に他ならな

い。二人は小さく頭を下げた。真也からだった。

「おはようございます。ルヴィア様」

「おはよう」

「おはようございます、レディⅡエーデルフェルト」

「折角の朝だというのに、生憎の空模様ですわね、ミスターⅡスコット」

「全くです。アイテールも気まぐれの様です」

アイテールとはギリシャ神話の天空神で、天候を司る。ルヴィアは何時模様の不遜な笑みであつた。

「申し訳ありませんが、急ぎますので失礼させて頂きますわ」

「ご多忙さは存じておりますから。お気になさらずに」

「お気遣い感謝します。行きますわよ、シンヤ」

「はい」

冗談の様だと判断した真也は聞き流す事にした。真也はルヴィアの荷物を受け取る  
とジョンナサンに小さく会釈した。交わす言葉はアイコンタクトである。

(スコットさん、それじゃ)

(お気を付けて)

何を? とは聞けなかつた。



彼はルヴィアの直ぐ脇に付いた。通常はもつと下がるが連絡がある場合は別だ。彼はメモを片手に掲示板に張り出されていた連絡事項を読み上げた。

「本日の予定です。午前の授業ですが、鉱石科の実験場が変更されています」

「何か問題でもあったのかしら」

「はい。なんでも昨夜。天体と鉱石の照応実験に失敗したとか。その結果天体が鉱石に与える効果がデタラメになり、その歪みで一時的に魔界となったそうです。該当の生徒たちが夜通しで悪霊の調伏に辺り事なきを得たそうですが、復旧に一ヶ月掛かるそうです。実験場は半壊、暫くは旧実験場を使うとの事」

「その様な施設覚えが無いけれど」

「ここより三キロ西にある時計塔の最外殻、つまり辺境です」

「何処のどなた？ そのはた迷惑な方は」

「存じません。自転車を調達しておきましたので、それをお使い下さい」

「自転車？」

「はい」

ルヴィアのロングスカートが風に揺れていた。もちろんロイヤルブルーである。

「午後。13:15より奨学生の抜き打ち試験があります」

「当日告知とは相変わらず、陰険ですわね」

その表情は苦悩では無く呆れである。試験とは実力を測るモノだ。試験勉強など本末転倒だと、彼女は地で語る人物なのであった。当然パスするつもりでいたし事実その通りであった。

「以上かしら」

「17:00より、本棟の第三ラウンジで鉱石の入札があります。出物は『紅砒ニッケル鉱(デモン・ナイト)』、『テルル石』、『クリソベリル』だそうです」

「参加します。シンヤ、貴方も供をしなさい」

「かしこまりました」

そうこう話している内にレンタルサイクル置き場に到着だ。登録車両は『AA5』である。よつこらしよと、真也が駐輪場から自転車を取り出すと、それはT字ハンドルで、スポークタイヤとシルバーメタリックフレームを持ち、ギアは無かった。ありふれた自転車だった。外で待っていたルヴィアは腕を組んでいた。

「一つ聞きたい事があるのだけれど」

「何でしょうか」

「まさか、私に自転車を漕がせるつもりではないでしょうね」

自転車に乗れる乗れないの技能的な話ではなく、主への漕がせるのか、と言う意味だ。  
「……あれ？」

時計塔の設立は西暦元年と非常に歴史がある。もつとも、その広大な敷地は初めからそうだった訳ではなく、規模が大きくなるにつれて徐々に拡張されていった。その為、時計塔の施設には新しいところと古いところがある。二人の目的地はその古いところであつた。正面ゲートから本棟に伸びるメインストリート。その十字路から西へ向かうと徐々に古くなっていった。

その道は生活道路ほどの広さの小道であつた。左右には岩の塀があつた。それは苔むし、年月を感じさせる程に風雨にさらされていた。侵食されていた。積み上げただけの単純な作りで、背も低く、跳躍すれば向こうを除ける程度だ。その塀の向こうにはライラック、マロニエ、といった街路樹が枝を伸ばしていた。ライラックは綿菓子のような淡い紫の華を咲かせていた。その色はしつとりとしていて、とても落ち着いた。その花言葉は「青春の思い出」だつたとルヴィアは思い出した。マロニエは大型の落葉樹で、間近に見れば巨人そのモノである。離れてみれば童の巣へ低気圧が生む雲の渦へも見えるが、青空と純白の雲を背景にすれば、とてもゆつたりとした佇まいとなる。桜もあつた。



昨夜降った雨が空気を清めていた。春の柔らかい風と相まって、湿気が肌を撫でた。敷き詰まった雲が割れ、陽の光が差し込んだ。専門用語で「薄明光線」風情を混ぜれば天使のハシゴだ。アーチ形状の橋も見えた。今は使用されていない水道橋である。道端にブルーベルが咲いていた。その作りを例えれば、太古と中世が混じるブリテンの町が適当だろう。真也はふつと冬木市に居るであろうセイバーを思い出した。彼女がこの島国の出身だと聞かされたのは第五次聖杯戦争終結後であった。アーサー王の子孫が存在し、彼自身会っているとは夢にも思うまい。

ルヴィアにとって自転車で走るその感覚は、とにかく爽快感に尽きた。久しく忘れていたハイキングの感覚であった。自転車の後部荷台に、横座りで腰掛けるルヴィアは、自転車という、遠い実験場という、不便さが意外と良い、そんな事を考えた。なにより誰かが漕ぐ自転車の揺れも、案外悪くない。久しいのんびりした空気の彼女に対し、真也は余裕が無かった。

(な、なんだ。この嬉し恥ずかし、ハイスクール イベントは。もう二〇だぞ、俺)

少女と称して良いかどうかは難しいが、微妙な年齢の女性とチャリでタンデム、意外な事に彼は初経験だった。気恥ずかしさで戸惑うばかりなり、であった。両腰をルヴィアに掴まれる感覚は、何とも表現しにくい。くすぐったくもあり、適度な圧迫感に困惑もする。彼の心中どこ吹く風、期間限定の主は、風に靡く金色の髪を抑えながらハミン

グさえ奏でだした。

「〜♪」

ルヴィアは上機嫌であつた。



時計塔の建築物は時代が入り交じつており端に向かう程古くなる傾向がある。

・ ヴイクトリアン建築：19〜20世紀

・ ゴシックリバイバル建築：18〜19世紀

・ ジョージアン建築：18世紀

・ バロック建築：17〜18世紀。マリールアントワネットがこの時代である。

・ チューダーエリザベス朝建築：15〜17世紀

そして12〜16世紀ゴシック建築だ。旧実験棟はその建築様式だった。岩の色と形を活かした重くシックな前時代の建築様式から、純粹さを感じさせるホワイトとベージュを使った、優美なデザインと変遷するのである。窓にはステンドグラス、上部には尖塔があつた。宗教的な厳かさを醸し出していた。聖堂教会の影響が及んだと言うより、この時代の高級建築は皆こうだったのだ。

ところがどういふ事だろう。

ゴシック建築の教会の様な、厳かと重苦しさを漂わせるその門へと続く、石畳の階段は花が咲き乱れていた。違う。よくよく見れば、大量の花が添えられていたのだった。これでは厳かさも台無しだ。真也は面食らいつつも、花言葉を思い出した。その知識は「良いお兄ちゃんは女の子の扱いが上手くあるべき」という歪んだプログラムによる結果であった。

(真紅の薔薇はありがちだ。かりんの花は豊麗と優雅。ゆりは純潔、威厳、甘美、貴重、熱意。ゼラニウムは真の愛情。ふじは「貴方に夢中」で、ブーゲンビレアは情熱だったか)

この組み合わせはあからさまである。声を絞り出したのは三秒後だ。

「随分艶やかな実験場ですね」

「そんなわけ無いでしょうに」

(熱意は分るけれど、ちよつと節操が無い。入れ込みすぎって感じた。何処の誰が、誰に仕組んだ物だ? これ)

だが、華に溢れるその階段が絢爛華麗である事は間違いない。ガーデンングに精を出したロレダーナⅡマルチェッロⅡモチエニーゴも唸らせそうな、その場にその人物は立って居た。

年齢は真也と同じ二〇と言う年の頃。褐色肌に、短く整えられた黒い髭を持つていた。甘いマスクだが黒々とした濃い眉は意志の強さを感じさせた。優しい目の形だが、その人身は射る様に鋭い。さぞモテるだろう、真也はそう思った。

その人物は背が高かった。あれから三年が立ち、ランサーと同じ一八五センチとなった真也より高かった。一九二センチはあろう。人の上に立つ人物だと、真也は当りを付けた。

その人物は一風変わった出で立ちだった。白色の貫頭衣仕立てのワンピース。袖口と裾がやや広がって、風通しが良い。帯や腰紐は使わないガラビアと呼ばれるエジプトの民族衣装である。頭にはクーフィーヤを被っていた。装身具の一つで、帽子の一種だ。ターバンとは異なり、首の後ろまで布が垂れるタイプである。頭部全体を覆う、フードの様なその上にイカールと呼ばれる、山羊の毛で作った輪があった。その人物はイスリム圏の人間だった。

何故だろうか。ルヴィアは、困惑を隠さなかった。彼女は腕を組んで、階段の上のその人物を見上げていた。

「トリスメギストス様、困りますわ」

その物言いには呆れも含まれていた。

(トリス？ はーてな。どこかで聞いた、)

その人物はルヴィアの背後で控える真也を一瞥すると、耳をくすぐる声でその名を呼んだ。

「今日こそ良い返事を聞かせて貰うぞ、ルヴィア」

その人物は古代の錬金術師ヘルメスⅡトリスメギストスの血を引く末裔にして、その家の現当主であり、時計塔の生徒からルヴィアの今カレと呼ばれる人物である。真也は首を傾げた。

(その割には……)

ぎこちなくかみ合っていない。会話もおかしい。真也は二人の關係に頭を捻るのみだった。

つづく！

## 一話

そこはもう慣れたエルメロイ教室だ。黒皮のソファーに腰掛けて、ジヨナサンⅡスコットはこう言った。

「それはヘルメスⅡトリスメギストス様ですね」

ティーカップを口元に近づけ、紅茶を今正に飲むうとしていた真也の手がピタリと止まった。その名前の意味をようやく思い出したのであった。

「つて、あの『三重に偉大な者』？」

「そうです。二〇〇〇年以上の歴史を持つ、由緒正しい一族の末裔ですよ」

「神秘学の大御所じゃないか。て言うかなんで時計塔に居る。錬金術ならアトラス院だろ」

「噂ですが閉塞的な環境を嫌ったとか。お父上との確執とも。私も面識がありますが、開放的で気さくな方です」

「まいったね。その気さくな大御所に睨まれた」

「それはそうでしょう。レディⅡエーデルフェルトにご執心と聞きますから」

真也は渋い顔であった。

「つまり何か？ 俺は気になる女の子の傍に現れたお邪魔虫って事か」

「違います。恋人にちよつかいを出す不届き者、と言う事ですよ。あのお二方は交際している、という話ですから」

「俺はただの従者なんだけど」

「とても『ただの』には見えませんし、そうでなくともいい顔はしないでしよう。トリスメギストス様、閣下の立場になって考えてみる事です」

「……いてて」

「どうしましたか。突然胃を抑えて」

「色恋沙汰には良い思い出がなくて」

「姉妹発言といい、色々気になります。とにかく釈明しておいた方が良いのでは？」

「そーなんだけどき。なーんか、引つ掛かるんだよな、あの二人。手を突っ込んで良い物か」

「なんです？」

「やぶ蛇にならないか、って事だ。どうせ一ヶ月だし。のらりくらりと躲せる物なら躲した方が良い様な」

「私が思うにトオサカさん」

「言わなくていい。手遅れって言いたいんだろ？」

「自覚があるなら、と言いたいのですが。トオサカさんはそういう星の下に生まれてい  
る様です」

「いいんだ。そんな気はしてた」

翌日。ルヴィアの授業中、つまり待ち時間を利用して真也は紳士服店に駆け込んだ。  
身なりを整えるためだ。店内にずらりと並ぶのはビジネススーツである。予定外の出  
費だがやむを得ない。

（しゃーないか。赤はともかくボロボロだもんな。この恰好。偉い人に会う恰好じゃな  
いし）

正装。それは相応の心構えで会いに来ましたよ、というジェスチャーになるのだ。生  
憎とこの手の知識が無い真也は店員を捕まえた。

「何をお求めで？」

「偉い人に会うんです。一式下さい」

「社交界ですか？」

「そこまで仰々しくくないです。ビジネスシチュエーションで」

「では、こちらへどうぞ」

その店員は別のコーナーへ真也を連行していった。今の真也はカモそのものだ。

「このスーツじゃいけないんですか？」



「目上の方に会うならば相応の物が必要です。時計塔のお偉い方は身なりに拘りますよ」

「はあ」

そして薄暗いエルメロイの執務室である。エルメロイがノートパソコンに向かっていると扉が盛大な音を立てた。

「教授！」

現れたのはスーツ姿の真也であつた。彼の姿を一瞥したエルメロイは何事も無かつた様にタイピングを続けた。

「随分と張り込んだな」

「DUNHILLへダンヒルです。スーツと靴で一〇〇〇ポンド。前払い金を取り崩しました」

「随分と気合いが入っているが、レディIIエーデルフェルトとデートか？」

「違います」

「ほう。その長身痩躯な体格に物を言わせて、どこぞのご令嬢に唾を付けたか」

「何を言ってるんですか。偉い人と会うんですよ」

タイピングしている指がピタリと止まった。真也の発言を聞き咎めたのであつた。察した真也はこう言った。

「ご安心下さい同じ生徒です。身分のある方ですけれど」

「仏作つて魂入れず、君の国の格言だったな」

「なんです、それ」

「ネクタイはどうした」

「ええ、それです。教授。ネクタイの結び方教えて下さい」

真也が突き出したのは真つ黒なネクタイだ。たすきを渡すランナーの様にその手からぶら下がっていた。

「その偉い人は、棺桶の中か？」

「はい？」

英国でも葬儀は黒ネクタイが一般的だ。そもそもライトグレーのカジュアルスーツにブラックタイはそぐわない。スイートグレーかコチニールレッドが妥当だろう。

「トミー||リー||ジョーンズもウイル||スミスも黒いネクタイで、でかい顔してましたけれど」

真也は映画メインインブラックの事を言っていた。

「面会場所はエリア51か。なら急がないとな。アメリカまでは長旅だ」

「あの、何か間違ってます？」

穂群原の男子制服は詰め襟だ。蒼月姓時代は実母と義理の妹と三人暮らした。遠坂

になってからは言うまでも無く、男は彼一人。葬は知っていたがその機会は無かった。身近に年上の男性が居ない彼が、ネクタイの結び方を知っている訳が無い。エルメロイは深い、とても深い溜息を付いた後、引き出しからネクタイを取り出した。

「この色柄の方がまだマシだろう」

「ありがとうございます。で、縛り方なんですけれど」

「“結び”方だ。流石のトオサカリンもネクタイの結び方は知らない、とみえる」

「えーと、義父へちち〳〵は第四次聖杯戦争の時に、」

「“知って”いる」

エルメロイは渋々立ち上がるとこう言った。

「教え役になってそれなりに経つが、ネクタイの、結び方の指導は初めてだ」

彼はそう言うかと実演して見せた。

「恐れ入ります」



そこは時計塔の敷地内にあるオープンカフェだった。食堂の前にあり、食堂とオープンカフェの間には花壇があった。木製の、土器色へかわらけいろ〳〵の椅子と机が並んで

いた。ビーチパラソルの様なひさは紅色で、それらがずらっと並ぶ様はパリの町並みを連想させた。開放感と賑やかさ、華やかさもあつた。昼時もあつて相応の賑わいだ。街路樹から落ちる木漏れ日が、まだらの影となつて地に落ちる。それが風に吹かれて揺らいでいた。のんびりした物である。そこにヘルメスが座つていた。先日見た白色の民族衣装に身を包んでいた。脚を組み、書物を読んでいた。同伴者は一人の男子生徒だ。彼の従者であつた。

「トリスメギストス様」

真也はネクタイを締め直しながら、こう言つた。

「私はトオサカシンヤと言います。ご多忙の所申し訳ありませんがお時間を頂けないでしょうか」

真也を追い払おうと彼の従者が立ち上がるものの、ヘルメスは手を掲げ下がれと命じた。

「俺は君の事を知っている」

「私も閣下の事を知っています。ですからこうして立っています」

「エーデルフェルトの従者としてか？」

「いえ、個人ですよ」

「軽薄な笑みだな」

「笑顔は基本です」

「その笑みは仮面だ、違うかね」

「閣下の洞察力に私は感服するより他はありません。ですが、ご指導頂くために参ったのではありません」

「用件を聞こうか。俺は無駄な時間を費やしたくない」

「私たちを結びつける存在はただ一人です。不用意な諍いを避ける為に意見交換は必要かと思ひまして。もちろん今が難しいというのであれば、後日またお伺いします。ですが、早めの方が良いでしょう。何分扱いが難しい問題ですから」

「問題など無いな」

「それを聞いて安心しました。貴重なお時間を頂きありがとうございました。失礼」

「待ちたまえ」

振り返った真也は満面の笑み。それは引きのあつた浮きが当りだった、そう分つた釣り師の笑みだ。

「会場は何処に致しましょうか」

「俺はこれほど不愉快な笑みを見た事が無い」

ヘルメスは頬杖をつきながら、そう吐き捨てた。ヘルメスは真也の申し出を受けざるを得ないのだ。己の従者ならいざ知らず、交際相手の従者に噛み付くなど、出来ようは

ずが無い。

「だからこの程度の嫌みは言わせて貰おう。スーツを着慣れていないな」  
「高かったんですよ、これ」

ルヴィアの寮と対を成すエリート向けの男子棟、真也はその一面を締めるトリスメギストスの部屋に居た。一般生徒は入れないが彼は非常勤とはいえ講師、というのが二人の言い分である。

そして、それはそれは立派な大きな部屋だった。その部屋は西洋仕立てであつたがアラブ調に改装されていた。部屋の壁、柱は紅色を基調に金細工であしらわれていた。至る所に布があつた。屋根を伝う布、壁に掛けられた布、特に床に敷かれた布は複雑な刺繍がしてあり曼荼羅にも見えた。ソファアとテーブルもあつたが、大人数が向かい合う座敷もあつた。布も座敷もアラブ様式の一つである。

棚にはトロフィーや写真が並んでいた。乗馬、ゴルフ、ヨット、狩猟、舞踏、テニス。金の掛かる趣味の一覧であつた。アラブの伝統習俗である鷹狩りや駱駝競争の写真もある。どの写真のヘルメスも主人公の様に写っていた。

そして人形もあつた。それは五〇〇ミリペットボトル程の高さで、クリームイエローの身体に水色のシャツを着ていた。頭には申し訳程度の葉っぱが生えており、つぶらな瞳を持っていた。その人形がもつイメージは梨だ。真也は眩いた。

「……ふ〇っしー?」

ヘルメスは慌てて隠した。

「秘密だ」

「分っております。決して口外はいたしません。エジプトを発祥とする、由緒ある魔道の当主に懇意にされるのであれば、彼にとつてもこの上ない名誉となるでしょう」

「男なのかね」

「……存じません」

真也は座敷に通された。真也の手元にはシャイ〈紅茶〉とムルキーヤ〈スープ〉そしてケバブ〈肉料理〉が並んでいた。部屋の主であるヘルメスは真也の隣だ。二人は胡座を組み座っていた。ヘルメスの声は僅かに沈んでいた。

「済まない。客人を持って成すには余りにも貧弱だ。本来ならば、」

「あ、いえ。客人を手厚く持て成すイスリムの教えは存じております。アポ無しでしたし、お気遣いなく」

「中東に滞在した事があるのかね?」

「陸路でここまで来ましたから」

「ほう。それは興味深い事だな」

「日本から海路で中国に入り、ミャンマー、バングラディッシュ、インド、パキスタン、

イラン、トルコ。距離だけならイスリム圏が多いぐらいです。ですから礼拝もお構いなくなさって下さい」

一日五回、メッカに向かって祈るあの儀式である。

「心配にはあたらない。イスリムの教えは生活習慣というレベルで折り合いを付けている。偶像崇拜を禁じているからな。それに、根源という神を信じる魔術師に宗教はそぐわない。アッラーを根源と見立てる強引な者もいるが、君はどうだ」

「敢えて言うなら私はギリシャ信仰ですが、ご存じの通り多神教ですから。根源を神の一つと見立てる事も出来ませし、ガイアと見立てる事もできます。深くは考えていません。なにせ根源は誰も知りませんから」

「日本人なのにギリシャ信仰か」

「色々立て込んだ事情がありまして」

へカテーだ、などと言える訳が無い。キャスターが真也に刻んだへカテーのシンボルが疼いた。真也には堂々と名乗れと、言われている様な気分陥った。そして真也はシャイ〈紅茶〉の入ったコップを置くとこう切り出した。

「では閣下。自己紹介も済んだところで始めましょう。まず私の立場を明確にしておきます。私はエーデルフェルトの従者です。閣下がお気になさる必要はありません」

「それは君の立場の考えだ」



「仰りたい事は分ります。ですから、こう付け加えましょう。私は長くお側に居ません。来月には帰国します。これは主もご承知です」

「君はルヴィアをどう思う」

「仕えるに、申し分ないお方だと」

「それだけかね？」

「それだけです」

「君の事は調べさせて貰ったが、分った事は冬木市の聖杯を作った御三家の一つ、トオサカ家の人間である事。第五次聖杯戦争に関わった事だけだ。聞こえてくるのは噂ばかりで、とにかく謎が多い」

「語る事は許されていません」

「だろ。調べる事も許されていない。例えトオサカに男子が居たという記録が無くともな。君の保証は、君を知っているであろうロードⅡエルメロイ二世が立てている。本来であれば、口を挟む事ではないが。正直に言つて、例え一月でもルヴィアの傍に君が居るのは不安だ。叶うなら今すぐにでも排除したい」

「それはどのような立場で仰る？」

「もちろん、個人としてだ」

「その心中はお察しします。私は得体が知れないでしょうから。ですが、ルヴィア様と

交わした契約は正規のもので。それでご納得頂くより他は無い」

「決闘を申し込む、と言ったらどうするかね？」

「お受け出来ません。よくお考えください。暫定とはいえ私はエーデルフェルトの従者です。主の許しなく、主の交際相手と刃を交わすなど、出来よう筈が無いでしょう」

「個人で来ているのでは無かったのか」

「確かに。では、こう言い直します。決闘を受け入れ、私が閣下に敗北し、時計塔を立ち去るとします。その結果、主が閣下をどう思うか、それが分りますか？ 交際相手の従

者に喧嘩をふっかけた、それは閣下にとつていい話では無いでしょう。格下に勝つて当然、大人げない。なによりトリスメギストス家の当主が、エーデルフェルト家の当主を差し置いて無視して、その従者に決闘を申し込んだとなれば、主からしてみれば蔑ろにされたも同然。侮辱されたと怒るでしょう。それは閣下にとつても良い展開では無い」

「君は政治家向きだな。見事、私を封じてしまった」

「質問をしても良いでしょうか」

「構わない」

「当主同士、これは悲恋ですよ？」

「エーデルフェルトを背負う覚悟はある」

「閣下。無礼を承知で言います」

「分っている。言うは易し、行うは難し。証を立てよ、と言うのだろうか？　だが今の関係を解さねば話が進まない」

「なぜそこまで執着なさいます」

「ルヴィアと初めて会ったのは、時計塔に入学し一ヶ月後の事だ。時計塔内の有力者を集めた社交界があつた」

「一目惚れですか？」

「いや、違うな。私にとつてはルヴィアは数ある中の一つだった。エーデルフェルトはルネッサンス中期から始まっているが、その格は私にとつてそれなりだ。大した美貌だが珍しくは無かつた」

む、と内心不愉快になる真也であつた。だものでその発言は多少棘を持っていた。

「でしようね、トリスメギストス家の発祥は紀元前ですから」

「それはヘルメス文書が書かれた年代だ。我が祖神ヘルメスⅡトリスメギストスの発祥はBC三〇〇〇年にまで遡る。エジプト初期王朝時代だ。くだらない女に言い寄られ、辟易していた俺は交際する振りをしないか、そう申し入れた。くだらない男に言い寄られ難儀していたルヴィアは快諾した。俺たちは利害の一致を得た、と言う訳だ」

「であれば何故です」

「分るだろう。あの気性の荒さだ。俺を尊重などしはしない。偽りのデートの間ですら

言いたい放題であった」

「そうでしょうね」

「ある時だ。等々我慢出来ずに無礼なと対峙した。俺が差し向けた死を前にしてすら、ルヴィアは退かなかつた。一步たりともな。ルヴィアは寶石を片手にこう笑つたよ」

「殺すなら殺しなさいな。言う事を聞かない女に腹を立て殺した。この事実を背負う覚悟がおりなら。不敬か、不名誉かの判断は暇な歴史家に任せましょう？ もつとも、対価としてその片腕は頂きますが」

真也は表情を殺すより他は無い。ただ苦悩は十二分に見て取れた。

（何故だろ。その状況が克明に浮かぶ）

「俺は初めて負けたのだ。それからだ私が変わったのは。初めは小さな芽だった。そう、予兆のような物だった。それが弾けて恋の華となった。その時俺の世界は変わった。違う、俺は生まれ変わったのだ。それがルヴィアなのだよ。俺はルヴィアにモロモロだ」

「メモメモ」

「そう、その通りだ。俺は生まれて初めて恋という物を知った。これがルヴィアに執着している理由だ」

それは真つ直ぐな想いだつた。『めっちゃ好感が持てる』というのが真也の偽らざ

る感想である。自分が如何に汚れているか、見せ付けられている様だった。

「いて、いててて」

「どうかしたか？ 突然胃を抑えて」

「いえ、私は過去に過ちを犯しまして」

「過ち？」

「とある女性に酷い事を」

言うまでも無く虚偽の告白だ。

「彼女は許してくれたのか？」

「ええ、まあ」

「では何時までも、引つ張るべきでは無いだろう。彼女のためにも胸を張りたまえ」

「いてててててて」

真也がウンウン唸る事しばらく。ヘルメスは躊躇いの後こう切り出した。

「ものは相談だがトオサカシンヤ」

「はい」

「手を貸してくれないか」

真也は「えー」と言う不満を飲込んだ。

「お言葉ですが、閣下。私は従者、主の意向に沿わない行動はできません」

「分っている。そこを押しして頼みたい」

「何故です。私で無くとも良いでしょうに。そもそも女性の扱いが達者な閣下に助言など」

「見苦しい事は重々承知している。だが、ルヴィアは私に心を開いていない。君と違ってな」

考えすぎだと、真也は否定しようとしたが。でなければ例え従者であろうと懐に入れよう筈がない。真也は渋々こう切り出した。

「閣下ほどの程度、讓歩されますか？ 入り婿は候補になりますか？」

「それは男子のする事では無い！」

突然の雷に真也は謝った。失態である。

「尊位を持つお方なら当然の考え方です。無知をお許し下さい」

「……いや、俺こそ済まなかった。ルヴィアの事となると、冷静で居られないのだ。芸術は長く、人生は短い、わかるかね？」

「人生は短いから芸術（ルヴィア）を手に入れる事に励むべき、ですか？」

「うむ」

（元意のヒポクラテスを持ち出すのは良いけれど、苦しくないか。その用法）

「あの美しさは神細工。そう、まるでエリザベート皇后のようだ」

「ハプスブルクの、ですか？ 閣下。それは口にしてはなりません」

「何故だ。美女と名高いかの姫に例えたのだぞ」

「比較される事を主はとも嫌います。褒めるのであれば絶対基準ですべきです。主に相對基準は破滅です。例えばクレオパトラであろうとも、ヘレネであろうとも」

「経験があるのかね？」

「いえ、そうするという確信があります。自尊心が強いお方ですので」

「君は、やはり」

「いえ、〈ある意味〉特定の人が居ますから」

「そうか」

むう。真也は暫く考えた。

「よろしい。ここで突っぱねるのも情有りません。念を押しますが閣下。私はエーデルフェルトの従者、それに反しない限りという条件が付きますが、及ばずながら尽力を尽くしましょう」

「おお！ 頼もしいぞー！」

（『今日こそ良い返事を聞かせて貰うぞ』といい、『頼もしいぞ』といい、その手の劇調セリフを生で聞く事になろうとは……）

真也は気恥ずかしさで頬を掻いた。こう続けた。

「トリスメギストス様、見苦しいなど自嘲なさいますな。もし閣下を笑う者が居るなら、私が叱りつけましょう。射止めたい女性に必死になる、少なくとも私にとって閣下の純粋な想いは動機に十分です……いてててて」



計画目標は明確だ。ルヴィアとの関係を一步進める事である。であるならば、最初の一手は現状判断だ。真也は目の前の御曹司を失礼だとは思いつつ値踏みした。

- ・ 花束を贈る気遣いはある。
  - ・ 目下にも態度が丁寧だ。身分があるので横柄で無ければ良いだろう。
  - ・ 笑顔を絶やさないと、目を見ながら人の話をしっかり聞く。
  - ・ 言葉遣いや抑揚に威厳があり、笑顔に見える歯は真つ白で美しい。
  - ・ 身だしなみは申し分ない。
- そしてヘルメスの携帯が鳴った。

「済まない。失礼する」

「ごつて」

・ 携帯電話が鳴って出ててもいかと確認する。マナーも問題ない。



「パーフェクトです、閣下」

「当然だ」

（何が不満やねん。あのお嬢様）

水タバコを進められ、断るのも失礼だと、しびしび吸えばゴホゴホ咽せた。真也は涙目でこう言った。

「極論ですが、女性は特別扱いをされたい願望を持っています。それに関し閣下に隙はありません。ですから攻め方を変えましょう」

「具体的に言ってくれないか」

「男らしさ&ワイルドさを見せると言うのが定番かと。私の所感ですがルヴィア様は恋愛経験は少ない様です。知らない世界に案内し興味を惹きつつ、持て成すと言うのがベターだと。ですが閣下もルヴィア様も貴人でいらつしやる。豪邸も乗馬もテニスも大した効果を持たないでしょう。何かありませんか？ 主が知らなさそうで、閣下がお得意である事」

「トオサカシンヤ」

「何でしょうか」

「君は旅をしてきた、そう言ったな。バックパッカーか？」

「それがなにか？」

「ワイルドだな」

「閣下も十分にエキゾチックかと」

「強引にルヴィアの手を取り、レストランに引き入れ、異国の料理へナンカレーを手づかみで食べる所を見せたとか」

「……よくご存じで」

「ルヴィアから聞いた」

（お、お嬢さま。仮初めとはいえ交際相手になに言ってるんですか）

「依頼も機転を利かせ見事解決したとか」

「主の助力があつてこそその事でした」

「君は私の持たぬ物を持っている様だ」

「……私はそもそも土俵に乗っておりません」

真也はコホンと一つ咳払い。

「そもそもお二方は高名な魔道の家の当主、という立場があります。偽りの交際、という形で初め約二年。その枠組みで収まってしまっています。まずそれを壊しましょう。定番ですがギャップ。意外なところを見せる、というのはどうでしょうか」

「君の説明は具体性に欠けるな」

「えーと。可愛い動物に弱いとか如何ですか？」

「軟弱な物は好かない」

「お酒が弱いとか」

「イスリムでは御法度だ」

「映画を見て感激の余り涙する」

「俺のイメージに合わない」

「甘い物に目が無い」

「落としどころか」

「よろしい。次の定期デートはスイーツをテーマにしましょう。生憎と私は詳しくはありません。時間も余りありませんし、閣下の従者に聞かれるのが良いでしょう」

「上手くいくだろうか」

「弱気になつてはいけません」

「流石に門外漢だな」

「気合いを入れる為にも賭けましょうか」

「賭け事は嫌いでは無い。何を賭ける」

真也は「ペンス硬貨を取り出した。

「上手くいけば閣下の勝ちです」

「皮肉か？ その程度の価値しか無いと」

「とんでもありません。我々には十分で最も相応しいものです。他の者が見ればただの1ペンスですが、我々には重大な価値を持つ、痛快でしょう?」

「最も小さな貨幣が、俺の命運を分ける価値を持つか。これは俺にとって非常に重要な1ペンスだな」

ヘルメスは笑っていた。



真也が居を構える集合住宅へフラットへは人種のるつぼだ。

「ナマステー」

そのアフリカ人の若夫婦は真也をブツデイストへ仏教徒だと思っていた。否定すれば翌日には「Assalam Alaykum へアツサラムアレイクム」になっていた。ムスリムの挨拶である。宗教を持つと宣言する事は、どのような考え方を持っているのか言っている様な物だ。言い方を変えれば、無神論者は何を考えているか分らないと判断される。海外で無神論者の扱いはお世辞にも良くない。嘘でも答えて置いた方が無難だ。だもんで彼は神道と適当に答えた。白人男性のカップルも居た。フランス、ドイツもそうだがイギリスでもゲイは市民権を得つつある。

「Hello w♪」

人当たりが良いのが悩ましい。だが生憎と美少年とは限らない。中年でハゲていて、毛深い筋肉質というのが現実である。弁護士、医者、大学教授、とかくインテリ層に多い。閉鎖的な時計塔も例外では無いのだろう、真也はそんな事を考えた。ジョンサンⅡスコットはどうなのか、真也はそれを考えるのを止めた。アーチャーに無理矢理脱がされ、着せ変えられたのは忌まわしき記憶である。ただ。少女の様な容姿を持つジョンサンⅡスコットをゲイという枠組みに入れて良いのか、真也には分らなかつた。

真也の家は欧州でよく見られる、風呂、トイレ、洗面台が一つになったユニットバスである。風呂と言つても浴槽はなく、半透明のビニールカーテンで仕切られたシャワースペースのみだ。電気瞬間湯沸かし器式へエレクトリックシャワーと呼ばれる給湯器にて湯を浴びるのだが。水圧が弱くチョロチョロとしか出ない。

「あー、地中海はよかつたなー」

彼はトルコを抜けてからはギリシャに入り、そのまま北上するルートは避けて、ギリシャから海路でイタリアに入ったのであつた。北上すると、アルバニア、ボスニアⅡヘルツェゴビナ、クロアチア、スロベニアと小さい国が続くからである。単に、入出国の手続きが面倒だったのだ。イタリアに入つてしまえば、フランス、イギリスと一直線である。聖堂教会には絡まれなかつたが、マフィアに絡まれたのはここだけの話だ。ゴ

シゴシと濡れた頭をタオルで乱雑に拭えば、フローリングの床には髪から滴った雫が落ちていた。

「兄さんはだらしないです。ちゃんと拭かないと風邪引いちゃいますよ」

義理の妹との昔からのやりとりだ。今にして思えば、義理の妹との繋がりが欲しかったのか、単にだらしなかつたのか、甘えていたのか、良く分からない。ただ言える事は、一人なら一人でどうにでもなつた、と言う事だ。もちろん誰かに拭いて貰うという行為は、この上ない喜びだと分つた事でもある。

部屋のTVは保守党が第一党になつた、と報道していた。BBCであつた。時計塔上層部は表向き普通の貴族という者も多い。当然保守派である。これで時計塔も暫く安泰だろう、真也がそんな事を考えていると、ノックが四回なつた。ノック二回はトイレの合図なので注意しなくてはならない。正式は八回だが日常的には四回で済まされる。

誰だと、思った真也が鍵を開け、扉を開ければ見知つた女性二人が立っていた。グレイとルヴィアだつた。「おや、珍しい組み合わせですね」と言おうとした目の前の二人は固まっていた。これは一体どうした事か。その固まっていた二人の表情は歪み始めた。瞳も大きく開いていた。その視線は真也の下半身である。ライトグレーのボクサーパンツのみだ。

「あ、しまった」

頬を真っ赤に染め、怒りを堪えたルヴィアは、盛大に彼を引っぱたいた。余談だが今を遡る事三年前。彼の義姉が同じ状況に陥った時、彼女はガンドをぶつ放した。ただ、当時彼女は十七才。三年という年齢差は考慮するべきであろう。真也は暇を五分貰い、身繕いを整え、謝罪の後、改めて二人を招き入れた。

「インスタントですがどうぞ」

左頬をパンパンに腫らした真也が二人に出した物は、コーヒーの収まった白いマグカップであった。もちろん前の住人が置いていった物だ。洗浄済み、呪いも無い、問題ない。グレイとルヴィアの二人はダイニングテーブルに並んで腰掛けていた。相對し二人を見据える真也は對照的な二人だな、そんな事を考えた。先陣を切ったのはルヴィアであつた。

「外觀と違つて部屋の内装は割と作りの良い部屋ですけど、どうして七階建ての最上階に居てエレベーターがありませんの？」

「古い建物だからですよ。登り切つた後で買い忘れに気がつくつと凹むんです」

「何故新しい物件にしなかつたのか、そう聞いています」

「家賃が高いじゃないですか」

「住宅補助は出していませんでしよう？」

「来客つてのは全く想定していませんから」

「エーデルフェルト家の従者としての自覚が足りませんわね。シンヤ、もっと上等な家に越しなさい。私の顔に泥を塗るつもりかしら」

「分相応ですよ、ルヴィア様。それより何用ですか。グレイさんと一緒とは珍しい組み合わせです」

グレイは鞆を漁りだした。

「師匠から聞いています、」

彼女が差し出したのは書類とスキットルだ。スキットルとはアルコール濃度の高い蒸留酒を入れる金属缶だ。使用される材質はステンレスか銀、もしくはチタン。彼のはそのチタンを使っていた。真也はスキットルを嬉々として受け取った。書類は相応の表情だった。

「わざわざありがとうございます。言って頂ければ取りに行つたのに」

「理由は二つです。師匠が『明日中に提出しろ』と。そしてこの家に電話がありませんから」

「なっとく」

「その途中レディⅡエーデルフェルトに捕まって、同行という流れです」

「従者の生活態度を調査しに来ただけですわ」

「私めプライベートに関心を持って頂けるとは感謝感激ですよ、ルヴィア様」



「シンヤ、その自惚れは直すべき悪癖ですわね」  
妙なやりとりでグレイは首を傾げた。



ルヴィアはグレイが持つてきた真也のスキットルをじつと見る。

「日常的に吞んでいるのではないでしょうね」

「気付けですよ。消毒にも使いますが」

「なんですの、この槍で突いた様な凹みは」

「秘密です」

「それ位構わないのではなくて？」

「ルヴィア様は油断ならないお方ですから。一つ漏らすと芋づる的に見透かされます。その手は食いませんよー」

まったく、不満を隠さないルヴィアを見てグレイはこう言った。

「お二方はどのような関係ですか？」

「勘ぐる様なその様な関係ではありませんわ」

「主従関係ですよ」

「とても仲が良さそうに見えます」

「ミスIIグレイ。それ以上の発言は聞き咎めますわ」

「そうですよ。滅多な事を言う物では無いです」

ルヴィアの目が光った。少なくとも真也にはそう見えた。

「そう。トリスメギストス様に会った、と言う事かしら」

「いやですよ。何を仰いますやら」

「トリスメギストス様がシンヤを睨んでいる事は知っています。それに気がつかないシンヤでも無い。リバプールの時あれだけ慎重かつ用心深かったシンヤなら事前に手を打つ、そう考えるのが自然ですわね」

(鋭い)

「ここまで見透かされた以上、誤魔化すのも上策では無い。真也はしばし躊躇った後こう切り出した。

「分を弁えない行動だとは思いましたが誤解はトラブルの元です」

「何を話したのかしら」

「それは男同士の義理と言う事でご容赦のほどを」

「私との約束は尊重するべき価値は無いと?」

「そんな事言ってます。立場によって尊重する物は変わる、と言う事です。閣下とは

対等の男同士という立場で会いました。ルヴィア様の従者であるこの身に性別はありません。精神的な意味で。その違いです。ですが、ご心配なされますな。ルヴィア様の不益になる行動は、神に誓って……えーと。家名に誓って致しません。万が一、閣下が手を上げようものなら、その時は汚名を着ようともお守りいたしましょう」

「言いなさい」

「俺の話聞いていますか？」

「言いなさい」

「言えませんでしたら」

「言いなさい」

「ですから」

「言いなさい」

「あの、」

「言いなさい」

「……」

真也は考えた。別に口止めされている訳ではない。男同士の連帯的な価値観に基づきそう判断したまでだ。だがよく考えてみればヘルメスが悩んでいる事はルヴィアも知るべきであろう、そう考えた。

「個人の立場を取らせて頂く事になりますが、それでも宜しいですか？」

「言いなさい」

「レディ||エーデルフェルト。閣下の事をどう思ってる？」

グレイはごくりと唾を呑んだ。突然舞い込んだ恋愛事情に彼女は興味津々だった。

つづく！

## 三話

ルヴィアと真也の織りなすそれは、ちよつとした緊張だった。『恋愛事件へアフエール・デュ・クール』とはよく言つたものだ、グレイはその様な事を考えた。事実二人の応酬は刺々しかった。

「シンヤには関係の無い事です」

「なら話す事はできないね」

「主の命令が聞けないと？」

「今は個人の立場だ」

「その様な都合の良い事が通用すると思つていいのかしら」

「人によつて態度を変える、一般的なコミュニケーションだよ」

「シンヤだけでしよう。ダブルスタンダードなど軽蔑の対象だわ」

「貴女の気の強さが筋金入りなだけだ。閣下は笑つて俺を受け入れたけれど？」

「私よりトリスメギストス様の方が器が大きいと？」

「貴女がそう思つたなら、そうなんだろうな」

グレイは思つた、これは平行線に違いない。もしくは険悪になるかもしれない。それ

を憂慮した彼女は火花が散る中、すくつと立ち上がり、戸棚からグラスを取り出した。それは透明で円筒形ののっぺりした形状をしていた。シンプルなグラスだ。それに大きめの氷を入れると、スキットルを手に持って、ウイスキーを注いだ。

グレイは二人の前でその作業を行った。敢えて見せ付けた。その行為に意味があった。事実二人は言い合いを止めて、グレイの手慣れた手つきをじつと見ていた。グレイの、我関せずという彼女のペースに則った作業は、個人的感情を有しないルールの体現だと言つてもいい。ヒートアップしつあつた二人にとつて、それは意表であり、差された水そのものだ。グレイは二人の前にグラスを置いた。三つのオンザロックが完成である。

「どうぞ」

二人は躊躇いの後、見つめ合うとムツスリ顔で一口呑んだ。二人が感じた居心地の悪さは、見知らぬ子供に喧嘩を諭された男女のそれぞれのモノである。切り出したのは真也であつた。

「言い寄られる事を避けるため、互いの同意の下に付き合っている振りをした。この馴れ初めから考えれば、貴女が非難される謂われは無い。ただ。トリスメギストス様が本気になった、これに気づいてない訳ないよな？ レディ―エーデルフェルト。これの理由を教えてください、なんで曖昧な態度をとる？」

ルヴィアは手に持ったグラスをじつと見ていた。それに注がれた琥珀色の液体は、絶え間なく揺らぎ、彼女の心象を表しているようだ。

「ひよつとして、キープしているとか」

「違います」

「付き合う気は無いが他人に取られるのも面白くない、とか」

「違います」

「男よけに他のアテが無い」

「違いますったら」

「ならなんで」

「その、上手くお断りが出来なくて」

「どういう意味？」

「私とてその気は無いとお伝えていきます。ですが直接的に表現する事は品性が問われる、という事ですわ」

ルヴィアはチビリと一口舐めた。

「二人つきりはもつてのほか。祖国と家を捨てる気は無い、とお伝えしましたし、頼まれてもヘルメスと名で呼びませんでした。必ず“トリスメギストス様”と呼びましたわ。出会うのは日中のみで日没後は会わない。彼に熱い視線を送る女生徒を褒めてみたり、

「そう幾度となく伝えたのですけれど」

誰かを直接的に批判する事や、品のない言葉を使う事は品格を問われるのである。例えばAを貶めたい時はAのライバルであるBを褒めるのだ。Bより優れた者は居ない。ルヴィアの居る世界はこういう面倒な世界なのである。

「そういえば、そんな思想だったな。上流社会も困ったものだ。で、トリスメギストス様がそれに気がつかないと」

真也は呻いた。

（閣下。聞いてないです。これ重要です……違うか、諦めきれなかったって事か。それを認めたくなかった）

「どうするべきかしら」

「……俺に聞く？」

「二度は聞きませんから」

何故だろうか。彼には拗ねている様に見えた。

「一つだけ確認したい。本当に、その気は無いんだな？」

「ありませんわ」

「なんでさ。家の歴史、格、資金、才能、実力、ルックス。どれをとっても申し分ないのに」



「私はエーデルフェルトの当主、その責を背負っています。それを放棄するなど許され  
ない。まったく。シンヤはどちらの味方なのかしら」

「その質問は意地が悪い。閣下に義理はあるけれど、お嬢様の不安を解消するために敢  
えてこう言う。お嬢様の味方だ。だから悩んでる。ルヴィアゼリツタⅡエーデルフェ  
ルトにとって、閣下と上手くいく事が良い事なのか、悪い事なのか」

「良い方だとは分ります。私が当主でなかったならば、そう予想した事はありますわよ」  
「つまり個人より家を選ぶと」

「シンヤはトオサカを捨てられるかしら？」

(……トリスメギストス様。心中お察しします。俺としても非常に残念。でも主の決意  
には背けない)

一拍。真也はこう継いだ。

「これから言う事はあくまで俺の、個人的な意見だ。判断は貴女がしてくれ……本来な  
ら、交際という経験を積みあげ、と言いたいだけけれど。閣下は一緒にいる事を強く望ん  
でる。その気が無いのであれば、お互いの為にもここはもう明確に返答するべきだ。経  
験上語るけれど放置すればする程拗れる。潮時って事」

「……」

「ただ一つ頼みがある。返答は次の定期デートまで待ってくれないか。閣下は必死だ、

その想いだけは汲んで欲しい」

真也は己の言動が正當かどうか、その検証を心中で繰り返した。ルヴィアは答えが分かっていつつも悩んでいた。喪に服していると云っても過言では無い、二人の重い空気を破つたのはグレイである。

「もつたいないです！」

その余りの大きな声に、ルヴィアと真也はこの部屋に見知らぬ四人目が居るのでは、そう勘ぐつた程だった。透明な、シンプルなグラスを掴むグレイの両の指は、長い袖から申し訳程度に伸びていて、どことなくモグラを想起させる。可愛らしいと称して良いが、生憎とグレイは。

「ういひつく」

酔っていた。目深なフードから覗く双眸は碧色に潤んでいた。何故だろう、真也はセイバーを思いだした。グレイはグラスをしつかり持ちながらルヴィアに詰め寄った。

「ルヴィアゼリツタ！ エーデルフェルト！ あんな良い人手放すなんて、どうかしていません！ 好意を持たれるって幸せなんですよ！」

そして二人は度肝を抜かれた。シックな装い、フードで顔を隠し、性格までシックなグレイがなんとというビビッドな振る舞いだろうか。だが日頃物静かな人物ほど反動が大きいのは世の中の常だ。彼女の場合、自信の無さ、不安、などの理由で己を抑圧して

いるのだった。怒り上戸の一種か、真也はそんな事を考えた。そしてピンときた。「グレイさんはひよつとして片思い？」

「五月蠅いです！」

「あーやつぱり」

「さつきから聞いていれば、ここが気に入らない、これが合わない、ない、だめ、ばかり！ 人の良いところを見るのが、人間関係の第一歩なんですよ！」

「仰せの通りですな」

酔っ払いにまともな会話は期待出来ない、真也は適当に同意した。ルヴィアはもちろん応戦であった。手にあるグラスを華麗に揺らせばカランと氷が鳴った。彼女もまた相応に酔いが回っていたのである。ウイスキーのアルコール度数は四〇度、少量でも十分だ。

「そうですね。相手にされず三年を無駄にしたミスグレイが仰るなら言葉に重みも出ると言うものですわ」

ルヴィアはオホホと笑った。真也はルヴィアの言葉を咀嚼する。そして「ただ良いところを見て進展無しと言うこと？」とツツコミを入れた。するとグレイは「トオサカさん！ 男のクセに察しが良すぎです！」と噛み付いた。真也は「俺の家は女所帯なもんだから」と適当に流せば、ルヴィアは「そうなんですの？」と聞き咎めた。細い整った

眉を片方上げていた。真也が仕舞ったと内心ぼやいたが後の祭りである。嘘を付くと後で拗れる、仕方が無いと白状した。

「そう。その辺気にしないと大変なんだ」

「姉妹が二人、と言っていないかつたかしら」

「母と従者が二人いる。5：1で結構大変」

グレイの爆発は虎の咆哮そのものだ。ただし、虎は虎でも冬木の虎だった。

「レディⅡエーデルフェルト！ 料理好きの擬人化された犬が、いざという時は身を挺して守ってくれる騎士になるなんていい年して夢見過ぎです！」

「ミスⅡグレイ！」

ルヴィアは声を荒らげた。過去の汚点を指摘されてしまった為である。よりにもよって従者の前だ。それはかつて巻き込まれた事件の舞台。剥離城アドラでグレイが見知ったルヴィアの秘密だった。真也は黙ってウイスキーを飲んだ。

（閣下はそんな犬騎士に負けたのか。不憫すぎる……）

そしてルヴィアに睨まれていた。彼はこう答えた。

「俺は何も聞かなかつた」

「結構です。忘れるまでガンドを撃たなくてはならないところでしたから」

真也は両手を挙げて降参のポーズだ。

(料理好きで犬が騎士か。士郎を紹介したいけどセイバーが居るからな。いや、まあ、居たとしても良いんだけどさ。あの二人は今頃何やってるのかね)

「三年です!」

グレイは等々立ち上がった。彼女の両手にあるグラスは恐れ戦いていた。叩き付けられるか、砕かれるか、そういう意味だ。

「三年経っちゃいました! 出会った頃は十七歳だったのにもう二〇歳です! 貴重な拙の十代が何事もなく終わっちゃいました! この調子じゃ何も無いまま三〇歳のおばちゃんになっちゃいます! 師匠のバカー!」

真也はずっと酒を呑む。

「そう、そう言う事ね。教授は手強そうだよな」

そしてちらつとルヴィアを見た。

「気がついてないのは指導役(ヘクター)のみですわ」

(いや。教授は気づいてない振りだな。間違いない。立场上難しいけれど、三年も宙ぶらりんなんで、また罪作りなこった)

真也はふつと、とある娘を思い出した。かつて彼はその娘にこう告げた。

「俺は二人が嫁ぐまでその気は無い。他の誰かを探してくれ」

その娘は胸を張って言い切った。

「ならその時まで待つ」

その娘とは出会つてもう十三年目の幼なじみである。その娘とは綾子であつた。「いてててててててててて」

かつて彼は「なんで俺の周りはこう頑固な娘ばかりなんだ」とぼやいた事がある。そしたら彼の姉妹は斬り捨てた。「真也のせいでしょ」とは義姉談。「全部兄さんが悪い」とは義妹談だ。やはりグレイは荒れていた。

「トオサカさん！」

「なんでしょーか」

「拙も取り持つてください！」

「なんで」

「トオサカさんは師匠と仲が良いです！」

「そんな事は無いと」

「師匠がネクタイの指導だなんて初めて見ました！」

「ネクタイの結び方を知らない、マヌケな生徒が居なかつただけだろ」

「レディ―エーデルフェルトだけなんてずるいです！」

「話聞けよ」

「年上でしよう!?! 目下の面倒は見るべきです！」

「同い年だよ」

ピタリと二人が止まった。流石のルヴィアも目を剥いていた。

「シンヤは二〇歳？ それは本当なのかしら」

「幾つだと思つてた訳？」

「てつきり二五、六だと」

「それであの扱いか」

「同い年なら尚更面倒を見るべきです！」

「分つたから取りあえず落ち着け」

グレイはようやく腰掛けた。だがその表情は、目深に被つたフードの影に隠れていて

尚、不満を在り在りと見せていた。真也は投げやりだった。

「そんなに不安なら告つちやえば？」

「女の子からなんて出来ません」

「いいじゃん、今の時代」

「だめです」

「なぜに」

「後々優位に立てないです。お母さんからプロポーズしたなんて子供に言えないです」

「そこまで考えてるなら外堀を埋めるしか無いね。内弟子ならその立場を利用して、

もつと積極的に世話して、グレイさんが居ないと生活が成り立たなくなる位徹底的に。その後距離を置いてありがたみを思い知らせるとか」

「出来ないんです」

「なんで」

「お邪魔虫が居ます」

「恋のライバル？」

「違います。お邪魔虫なんです。その気も無いのに師匠にちよつかい出して、拙たちの邪魔をするんです」

「具体的に」

「掃除に来たり、食事を作りに来たり」

「その人、歳幾つ？」

「二〇代半ばかと」

「それって、それなりに本気なんじゃ」

「うるさいです！」

「へいへい」

「そうです！ 同じ日本人ですから連れて帰って下さい！」

「無茶言うし」



喚くグレイは泣き出しそうだ。泣き上戸は勘弁だと真也はこう助言した。

「そこまで必死なら術を使えばいい。媚薬〈恋愛成就〉の呪いは太古からある定番だ」  
それはルヴィアだった。

「名案ですわね、それ。ミスルグレイ、試しては如何かしら」

酔っ払いの相手は御免だと黙っていたが、これは楽しめそうだと合いの手を入れたのだった。真也が継いだ。

「植物学部行つて媚薬材料のコリアンダーとかマンドラゴラとかを入手する」

「マンドラゴラなんて現代では手に入りませんわよ」

科学技術の発展で生態系自然環境が影響を受け、それらの植物媒体は今や絶滅危惧種へレッドリストだ。植物学部はそれらの栽培も重要な研究テーマにしている。

「んー、なら。動物学部に行つて鳩の心臓や雀の肝臓とかを入手。それらも恋愛成就の魔術媒体だ」

「残酷です」

「魔術師のクセに」

ああ言えばこう言うグレイに、真也は辟易しつつ。

「なら自前だな。体液というのは魔術触媒として知られた一つだし」

それは感染という概念を使用した呪いの一つである。血、唾液、などがそれに類する。

唾を刃に付けて呪う、対象の唾をジャガイモに入れて燻り呪う、と言った物がある。恋愛関係も似た様な物だ。真也はグレイにこう言った。

「血液か唾液を使えば？」

「それ知ってます。経血が媚薬として飛びきり優しゅ、う、」

「気まずい発言に沈黙が訪れた。グレイは耳を真つ赤に染め硬直していた。ルヴィアは澄まし顔でウイスキーを呑んでいたが、顔は赤かった。真也は話題を変えねばとコホンと一つ咳を払った。」

「抵抗力が強い魔術師に呪いは効き難いから、塔では禁止が明文化されていない。それどころか掛かる方がバカ者扱いされる。格上が格下に掛ける場合は例外なんだけど、格下に惚れられても困るから当然意味が無い。かといって、格上は魔術師としても格上だからまず効かない。」

ところが教授は少々状況が異なる。教授は権力を持っているが魔術師としての能力はそんなに高くないから、やり方次第でいけると思う。ただバレるとヒンシユクを買うから注意すること」

グレイはガツクリと肩を落としていた。

「駄目なんです」

「なして」

「トオサカさんの言う通り、師匠は掛かってしまう可能性がありますから禁じられています」

「それはお気の毒」

「その為の拙たちでもあるんです」

「呪詛から守ってるって事？」

「はい。化野菱理へあだしの ひしり〜と共々」

「さっきのお邪魔虫のことね。ならもう、その化野菱理って人と話し合えば？」

顔を上げたグレイの目は据わっていた。思わず腰も引けた。

「トオサカさん、髪の毛頂けませんか？」

「なんだいきなり」

「化野菱理を呪います。感応魔術の練習です。爪でも良いです下さい」

「嫌です」

「予行練習を、」

「嫌です」

「酷いです！」

「嫌です」

「師匠のばか——！！」

気がつけば夜も更けていた。真也はグレイをベッドにそつと寝かした。相当ストレスが溜っていたのか彼女は泥酔状態だった。はき出せたなら楽になるだろう、真也はそんな事を考えた。そして振り返り、背後のルヴィアにこう言った。

「もう遅いので泊まっていつて下さい。グレイさんを一人にするのも不安ですし。ゲートも閉っていますから」

二人そろつて部屋を出る。パタンと扉を閉めたが、

『師匠のばかー』

扉越しすら聞こえてきた。

『イーッヒツヒ。二の足踏んでるお前が悪い!』

知らない声も聞こえてきたが、敵意は無さそうなので気にしない事にした。

「俺は教授の所に行きます」

「トリスメギストス様への配慮?」

「はい。最低限の義理は果たさないと。それでは戸締まりお願いします」

「シンヤ」

「はい?」

「その、経験はあるのかしら?」

その時の彼の態度を例えるなら浮気現場を見られた、これに尽きる。

「なんですか、突然」

「そう。有ると言う事」

「え、いや、まあ。それなりに」

ルヴィアは交際の事を言っていた。真也は性的な意味に捕らえたが、彼のそれは余りにも拗れていた。言える筈が無いのである。



エルメロイが目を覚ますと自室のソファアーの上だ、彼はそれに気がついた。顔の上には書籍があつた。途中で寝てしまったのだ。本を床に下ろし、時計を見れば直に日が変わる。ベッドに潜り込もうとのっそり起きれば、来客のノックである。無視するべきだ、彼はそう思った。アポ無しでこの家を訪れる人物に碌な者は居ない。この時間なら尚更だ。そう思いつつ、非常に気が進まない様相でエルメロイが扉を開ければ、実際に碌でもなかつた。

「教授、少し付き合ってくださいませんか」

エルメロイが見る真也は満面の笑み。彼の手にはツマミと酒瓶が有つた。エルメロイのそれは怒りよりも疲労困憊の体だ。

「いま何時だと思ってる」

「成り行きでミスグレイトと主が俺の家で寝ています。お二方とも未婚の女性、壁一枚挟んだ隣の部屋でも良くないでしょう？ その気遣いを評価して、泊めて貰えませんか？」

「トオサカシンヤ、君は軽薄な顔にしては堅いな」

「失礼ですね。俺はこれでも女性関係には人一倍気を使ってるんです」

「泣かせたのか」

「いててててて」

「入れ。四月とはいえ今晩は冷える」

「お心遣い、感謝感激です」

「私の部屋が冷える、という意味だ。感謝される謂われはない」

「でしようねー」

二人はそろってソファアに腰掛けた。真也がエルメロイに渡したグラスは小さめだった。グレイトが使っていたグラスより、一回り小さいそれを手渡し、ウイスキーを注いだ。自分のグラスにも注ぎ、二人はチンとグラスを鳴らした。ストレートである。二人がグレイトとルヴィアの状態を確認し合い、暫く経ったころ魔術談義となっていた。

「魔術というのは大きく二つに分けられる。一つ、己もしくは系譜に起因する体系だ。

祖先より連綿と連なる秘技、鉱石など概念という力を持つ触媒の顕現、魔術刻印がそれだ。

もう一つは、他の力を借りる体系だ。それは得てして天使と悪魔（墮天使）となる。天使と墮天使という概念は西暦元年、つまり聖堂教の設立と同時に一般化された。今存在する天使、墮天使は聖堂教のカテゴリ分けに過ぎない、と言う事だ。歴史を持つお偉方は、その新しい魔術概念を軽視する傾向があるが、そのお偉方もそれ以前の太古の神々、ギリシヤ神、ケルト神、フェニキアの神、それらのシンボルを使う。聖堂教の前身である教えにも天使の名前は出ているから、彼らの言い分は分類上正しくない」

エルメロイは身振りを交え教えを説く。その雄弁さを目の当たりにした真也は、エルメロイが教授なのだと思いついた。

「注意しなくてはならないのは聖堂教によつて古来の地方神が、墮天使に貶められたと言う事だ。フリギアの地母神キュベレーはサタンの祖母とされた。オーディーンもオセという墮天使に落とし込まれた。何故こんな事が起きたのか、というと聖堂教は一神教だからな。神が複数居てはこまる。かといって真つ向から否定してしまうと布教もままならない。だから親しみを持つ地方神を墮天使という枠に落とし込み、地域信仰者を改宗させやすくした。なぜ、そんな事が可能だったのか。

ギリシヤ神話、神道を初めとした多神教は精霊信仰、つまりアニミズムが発端だ。天

候、山などの自然が神格化され、神となつた存在は、嵐や遭難などが表す通り人に幸も苦難も与える。例えば地母神デーメーテール。大地は恵みを与えるが、飢饉により苦難も与える。そういつた大地という荒ぶる自然を神格化した存在と言えるだろう。ケルト神話の魔人バロールは嵐を呼ぶ、つまり嵐という天候を神格化した存在だ。彼らは崇めつつも恐れ、そして苦しんだ。その苦難に理由が無いからだ。聖堂教の成功は、善悪という回答を人々に与えた事に尽きる。彼らの言い分はこうだ。

「異教の神々は、お前達に苦しみを与える。実は悪魔だからだ。だから我らの神を崇めるがよい。それでも苦悩があるのはお前達に罪があるからだ。だが安心すると良い。教えに殉じれば解放の時は来る」

彼らが突きつけられたのは二択だ。多神教の神々に永遠に翻弄され続けるか、一神教の神にいつか救われるか。大多数の人々がどちらを選んだのか考えるまでも無いだろう。「直ぐに答えを求めたがる若者」と言うのが、たびたび社会問題として取り上げられるが、答えの無い状態というのは相応のストレスになるからな。ブツディズムも多神教だが「悟り」という概念が真髓なので扱いが異なるが」

「教授は天使、墮天使の行使を容認しておられる？」

「その答えはもちろんN oだ。聖堂教の天使は魔を扱う我々を容認していない、神秘は神の物だから、というのが彼らの言い分だ。そうすると我々に残されたのは墮天使だ



が、その扱いは非常に難しい。聖堂教で墮落させられた存在だとしても、荒々しい神々という事は変わらない。それらは善であり悪でもある。これを見落とすと酷い目にあう。魔術師でもあつたヨハン・ファウストは、メフィストフェレスという悪魔と契約したが結局根源には至らず、取り憑き殺された。彼は知識欲に取り憑かれ、結局あらゆる欲望に溺れてしまったそうだ。

話は変わるが、悪魔の力を行使するには「契約」と「儀式」の二つがある。契約とは己の魂を対価にした直接契約を意味する、ファウストは契約し死んだ、これに見る様に危険が多い。儀式は一級の魔術礼装が必要となるが、それ故に比較的安全とされる、だがその秘技は潰えてしまっている」

「魔道書、グリモワールですね」

「そうだ。有名所はソロモン王、他にはエノク、聖キプリアヌス。モーセの書もその一つか。色々あるが悪魔を使役するという意味において、現存する魔道書は全て贋作だ。リパールで君が見た様に、召喚式という形で「契約」が残っているに過ぎない。まあ、その召喚式が残っていた事自体驚くべき事だから、魔道書が残っている可能性はあるが。ただ魔道書とはいえ危険は相応にある」

「墮天使は知識と知識欲の暴走をもたらず」

「そうだ。魔道書による儀式だろうと、契約によるモノだろうと、暴走した知識欲は滅び

の原因だ。墮天使の知識は神の知識だ。知識を貪る我々魔術師にとって刹那の快樂、つまり人間社会が禁じている麻薬と同じだ。誰も彼もがフアウストになれば魔道の衰退は必須だからな。トオサカシンヤ。万が一見つけても馬鹿な事を考えるな。魔道書の所持が知られれば、冬木市の聖杯以上の血なまぐさい争いとなるだろう」

時計を見ると二五時を回っていた。エルメロイが手に持つ酒瓶は空だった。真也はスキットルをエルメロイに放り投げた。受け取った彼は黙ってグラスに注いだ。

「それにしてもウイスキーとはな。二〇歳の割に随分強いのを呑む」

「パワーズのゴールドラベル、四〇度。傷の消毒にも使えますから、結局それに落ち着きました。アイルランド語の u i s c e   b e a t h a へイシユケ・バーハ：命の水」が語源だそうですよ」

「またアイルランドか」

「良いじゃないですか。ジョンⅡFⅡケネディもアイルランド系ですし、アイリツシユシチューだつて悪くない」

「アルコールを覚えたのは何時だ」

「十八です」

「日本では二〇から、と記憶しているが」

「その時日本に居ませんでしたから。良いでしょう」

「呑む理由があつた、と言う訳か」

「……ただの愚痴になります。聞いても面白くも何ともない」

「人生の書とは魔道書に匹敵する、それが特異な者なら尚更だ」

「教授の魔術師としての一面を見た気がしますよ。ま、講義の代金としましょうか」

真也はグラスを飲み干すところ切り出した。

「ミヤンマーの都市を歩いていた時です。白人男性にホットドックのケチャップを付けられました。謝られて、お気になさらず、そう答えたんですけれど、気がついたら財布が無かつた。誰かが注意を引いて、その隙に別口が荷物を盗む、典型的すぎました。追いかけて取り返しましたけれど、その典型的に引つ掛かるんです。次はインド。町中で立っていて女生徒らしき集団に囲まれたと思つたら、鞆に手を突つ込まれていました。子供に塗れて、何事かと思えば集団スリでしたし。捕まえ問い詰めると泣き出し周囲の同情を誘う、厄介です。

同じくインド。安宿を紹介すると言われて、飲み物を渡されれば毒入りでした。店舗で売っている果物もそうでした。俺が選んで袋詰めする間に一服盛るんです。俺は毒の効き目が悪いので意識朦朧程度で済みましたが、もちろん荷物を取られました。毒入りのリンゴだなんて皮肉ですよ。

彼らは必死になままでに親切で、優しい親日家を演じている。人を疑う様になるまで、

時間は掛かりませんでした。男が数名で襲ってくるタイプが一番楽です。叩きのめすだけです。特に子供と女性があぶない。妹が近いうちに日本へ行くので日本のことを教えて欲しい、弟が病気で、おきまりです」

「警察に突き出さなかったのか」

「しましたよ。パターンは二つ。警官もグルのタイプ。適当に済ませてはいお仕舞い。もう一つは観光の為その国が外国人への窃盗を強く禁じているパターン。突き出した窃盗団の子供の悲鳴が聞こえてきました。警官に暴行されている、そう思った俺はやり過ぎではないか、そう言いました。でもそれが手口だったんです。警察署を離れると悲鳴も止まった。同情を誘い釈放を狙う。10かそこらの子供がそんな事をするんです。もう訳が分かりません。」

笑ってしまうのが警戒しすぎると逆効果だと言う事。イタリアだったかな。何度か盗まれ掛けて、結局盗まれて、追いかけて、叩きのめして奪い返した。その結果彼らの拠点がバテて警察に一網打尽にされた。面子を潰された、と思っただけでしょうね。いきなりズドン。撃たれましたよ。報復って奴です。スキットルの凹みはそれです。

中国のある田舎町です。迷って、困っていたところを親切にされて、泊めさせて貰ったんですけど、それも手口ですよ。寝ているところを襲われました。旅のし始めで、疲れてたんでしょうね。目が覚めたら、目の前に鉈がありました。気配読みにあれ

だけ自信があったのに気がつくのが遅れた。俺は悲鳴を上げてそいつを殴りつけた。白味の部屋が、鮮血と、弾けた肉と、砕けた骸骨でぐっちゃぐちゃ。木っ端微塵のスプラッタです。身体強化をとっさに使ってしまった。後はおきまり。石や道具を投げつけられながら、悪魔呼ばわりされて這々の体で逃げ出した。そいつの奥さんの金切り声は良く覚えてます。夜通し走り続けて、気がついたら別の町だった」

「それで寝る事が駄目になったのか」

「予算が少なかつたので野宿をよくしました。木の上、洞窟の中、崩れ掛けのビルの屋上、もしくは谷間。ここなら人は居ないだろう、と言うところに居るんです。五分経たずに、物取りが来ました。そういう、夜をずっと繰り返したんです。だからですよ。寝る事が怖くなったのは。今思い出しても俺は相当荒んでいましたね。その頃にはもう容赦しませんでした。骨折を負わせる位なら軽いものです。傷害容疑で、警察に捕まっただけで済んだら魔術を使い強行脱出です。パスポートの再発行方法を知りたかつたら言つてください。もう、慣れたものですから。パスポート番号を覚えておくと、手続きは楽ですよ。ああそうだ。極めつけが死徒でした。パキスタンに入って暫く経つた頃、乾いた山岳の上には月があった。そんな時に出くわしたんです。流星にあの時はもうダメかと思いました。もちろん逃げましたよ。尻尾巻いて」

「そこまでの目に遭って、なぜ旅を続けた」

真也はベルトの留め具を弄ると一つの石をエルメロイに手渡した。それには友情、保護を意味するエオローのルーンが刻まれた。それはかつてランサーが、真也の居場所をトレースする為に渡した物だ。暫く考えていたエルメロイは、得心がいった表情である。

「アイルランド、ルーン……そうか」

「ええ。クー・フーリンです。アイルランドの大英雄が直々に刻んだルーンのお守りです。俺の自慢ですよ、良いでしょう？」

「随分と子供じみているが英霊との絆なら私も持っている」

エルメロイは笑って言った。彼はイスカンドルの従者なのだ。二人が互いに縁のあるサーヴァントの事を語り合い始めると、時間は瞬く間に流れ、空は何時しか白んでいた。そして、真也の下に決闘を申し込む手紙が届けられたのは、その三日後の事であった。

つづく！

## 四話

そして数日が経ち、ルヴィアとヘルメスの定期デートの日となった。エルメロイ教室のソファアーに腰掛ける真也はそわそわして待つていた。窓から見える空は紅から藍に変わりつつある。じき日没だ。この時間にルヴィアが帰ってくれば破綻。遅くなるもしくは、万が一「今日は帰りません」という連絡があれば一発大逆転だ。ジョナサンはすつと紅茶を出した。

「気もそぞろですね。トオサカさんが急いても事態は何も変わりません。貴方はすべき事をした。後は結果を待つのみです。人事を尽くして天命を待つ、日本の格言でしたね」

「中国だよ」

そうしたら近くに居た 그레이 がこう言った。

「トオサカさんはレディII エーデルフェルトに入れ込みすぎな気がします」

「そう?」

「そうです。身内でもないのにオカシイです。金銭関係なんですよね?」

「また身も蓋もない事を言う。他人に注ぐ力の量は個人差があるって事で納めてくれ」

どこか刺々しいグレイを不可解に思いつつ、真也がルヴィアを待っていると、何の前触れもなく彼女が現れた。扉の取っ手を握る彼女は、既に見慣れたロイヤルブルーのドレスだったが、いつも以上に気合いを入れた事が良く分かった。何時もの不遜な表情だが、その漂わす気配に元気が無い。彼女にとつてもその結果は複雑であつたのだろう。  
(確定、か)

なんと言つていいのかわからない。真也は主を迎えんとゆつくりと立ち上がった。ルヴィアのその声は冷ややかだつた。

「暫く暇を与えます。おつて連絡するまで待機なさい」

真也は答えた。

「ゆつくり休んで下さい」

「その見透かした表情、不愉快ですわ」

そう言い残すと踵へきびすを返し、彼女は部屋を出て行った。真也は己の髪をクシャリと掻いた。やるせなささと憤りを、その指に籠めていた。もつと上手い方法はなかつたのか。と言う悔しさも混じつていた。空調機の音のみが響くエルメロイ教室の、その静寂を破つたのはジョナサンである。

「レディ―エーデルフェルトも混乱しているのでしょうか。だからあんな事を」

「分つてるよ。でも俺が終わらせた様な物だ」



「それは考えすぎです。二人とも魔道の当主である以上、いつかはこの日が来た。次を考えると早いほうが良い。早ければ早い程傷は浅いですから。トオサカさんは浅い内に終わらせる事が出来た、そう考えるべきでしょう。貴方は主を守った」

「スコットさんは良い人だね」

真也はそう言うのと鞆を手を取った。

「どちらへ？」

「もやもやするから、家に帰って酒飲んでふて寝する」

「付き合いますしょうか？」

「気持ちだけ貰っておく」

真也はルヴィアと同じ様にその部屋を出た。グレイがその様子をじっと見ていた。一通の手紙が真也の元に届いたのは、その翌日だった。『時計塔の最外殻、古城跡地に一人で来られたし』そう書かれていた。つまりは体育館裏に來い、という意味だ。真也はクシヤリとその手紙を握りつぶした。



そこには城があった。城と言えばノイシユヴァンシユタイン城の様な、王侯貴族が住

まう煌びやかきモノが一般的だ。だがそれには尖った屋根もなく、白い壁も無い。その城は中世において騎士たちが詰めた要塞だった。

石積みで作られたそれを例えるなら無骨。その無骨でさえ数百年という時の流れには勝てず瓦解していた。朽ちた門をくぐれば、中も朽ちていた。多目的用途の主塔（ペルクフリート）は崩れ形を成していない。在ったであろう居館（パラス）、礼拝堂（カペレ）は石壁が僅かに残るのみだ。ただ外殻塔は崩れながらもその機能を残していた。

敷地内に生える草は伸び放題だ。蜘蛛の巣もあつた。侵入者に気がつき、飛んでいったコウモリはきつと魔女の使い魔だろう。どこかの主に報告しに行つたに違いない。静かだった。風一つ無かつた。静かすぎて、朽ちた石たちの歌声が聞こえてきそうだ。見上げれば月があつた。あと数日で満ちるだろう、その月下にヘルメスが立っていた。従者だろうか、屈強な男が彼の背後に一人控えていた。真也は呟いた。

「どうしてこう成つたんかな。やつぱり手を出すべきではなかつたんだろうか。閣下はどう思いますか？」

「この行為に意味が無い事は分つている。だが、収まりがつかないのだ。ルヴィアの言っていることは本当かもしれない。だが俺は信じられない。君が峻したのではないか、そう考えずにはいられない。例えそうでないとしても、引つ込みは付かないのだ。はいそうですか、と引つ込める程俺は冷静では無い。俺はルヴィアに入れ込んでいます。」

自分でも驚いている程だ。これ程誰かを求めた事は今までに無い。そのルヴィアに俺は拒絶され、君はルヴィアの隣りに居る。許してくれトオサカシンヤ。俺は君に嫉妬している」

一拍。真也は静かに目を開けヘルメスを見定めた。

「閣下。仰つて下さい。私に何をお望みです」

「男子同士の決着方法と言えば古来より決まっている」

「決闘とは血の気が荒い」

「おかしくは無いだらう。我々魔術師は未来に向かって生きつつも過去を遡る者だ。作曲家のヘンデル、詩人バイロン、画家エドゥアール・マネ、彼ら芸術家もその定めには抗えなかつた」

「よろしい。その申し出お受けします。閣下もその兵士も我慢出来ないようですし」

「手加減はしない」

「当然です。でなくては閣下も収まりが付かないでしょうから。それでは始めましょうか」

ヘルメスの背後に控えていた人影が、消えたかと思うと真也の周囲の岩盤が鋭利に抉られた。まるで大きな金槌で殴つたかの様だ。その一回で終わらず、右が抉られ、左が抉られ。また右、今度は前だ。続けて抉られるそれは、埋め込まれた小規模の火薬が爆

発したかの様である。真也は黙って右を天高く掲げると、そのまま打ち下ろした。すると一際大きな音が炸裂した。大砲の玉が強固な巨石に衝突した音か、はたまた落雷音か。事実真也の右舷には飛竜が墜落したの様な鋭い土煙が昇っていた。見れば人影が埋まっていた。

その人影が右手に持っていただろうウアス丈は、ひん曲がり、空を舞い、岩の床に落ちた。カランと軽い音がした。左に持っていたケペシユという刃物は折れていた。真也に叩き落されたその人影は、東方風の刺繍（プリンジ）が付いた腰布を捲いていた。顔はマスクで覆われ見えなかった。そのマスクで覆われた顔は山犬の様だ。それはセト（嵐と暴風の神）の姿を模しただけの戦闘型ホムンクルスだった。空に舞い上がった、岩盤の破片や砂、小石がパラパラと落ちる。真也の右腕が軋みの音を立てていた。腕に籠められた力は破裂しかねない程だ。

「ですが閣下は準備が足りておりません。この程度では、聖杯戦争を勝ち抜けませんよ」ヘルメスの表情は驚愕と屈辱だ。だが一時も待たず笑みに変わった。それは獐猛な笑みだった。

「なるほど。ルヴィアが目を付けただけの事はある。こう来なくてはな。この程度で倒せる相手に、出し抜かれた事になってしまふ。よかろう。三日後の二二時。ロンドン北部にあるエンフィールドの邸宅にて最高の符陣で待ち受ける」

そう言うとヘルメスは闇夜に消えた。

「宣戦布告としては上々か。さてと。こちら準備しますかね」

ヘルメスの始祖、ヘルメスⅡトリスメギストスはヘルメースとも言う。それはギリシャ神話における十二柱の一柱だ。つまり彼は神の末裔。

「気を入れないと狩られる」



翌日。ルヴィアは妙な違和感を感じていた。ヘルメスが寮に戻っていないという話を聞いたのだ。何かがあつたに違いない、その何かとは己の従者以外心当たりが無い。昨日の今日で多少の気まずさを感じながらも、ルヴィアがエルメロイ教室の扉を開ければ、がらんとしていた。人の気配はあるものの希薄だ。何時もと異なる状況にルヴィアが戸惑っていると。

「おはようございます、レディⅡエーデルフェルト」

出迎えたのはグレイであつた。フードを目深に被り、いつも通り表情を隠す彼女は、ソファーに腰掛け書物を読んでいた。呪詛に関する書物だ。グレイの意図が気になつたがルヴィアは敢えて見過ごした。グレイが言う。

「どうしたんですか。カールが少し乱れています」

「つむじ風ですわ。全く、今朝の二時間が台無しです」

「宜しければ解きますが」

「お氣遣いだけ頂きますわ。それよりミス・グレイ。今日は随分と物静かですわね」

「トオサカさんとスコットさんが居ませんから」

「それがどのような理由になりますの」

「二人はムードメーカーだった、と言う事です」

グレイの無言の促しに、ルヴィアがパーティションの向こう側にある研究室を覗くと、生徒は居たが皆のテンションは低かった。皆が皆黙々と机に向かっている。存在感がとても薄い。真也はともかく少女めいた男性がムードメーカーとは、エルメロイも頭が痛いだろう。

「ミス・グレイ。シンヤの居場所を、ご存じないかしら」

「トオサカさんより預かっています」

グレイが差し出したカードには手書きでこう書かれていた。

「ルヴィア様へ。カルサイトお借りしました」

そのメッセージを頭の中で反芻する事四回。彼女は恐る恐る右手を髪の中に差し入れた。そして弄った。カールを捲いた髪の房、つまりクルクルドリルの右一番。その付

け根にある筈の鉱石が一個無い。

「い、いつの間に」

つむじ風は真世のしでかしたのである。かすめ取ったのである。

「トリスメギストス様も行方不明。また何か企んでいますね」

ルヴィアは踵を返す。

「どちらに行くのですか」

「シンヤの自宅に行きます」

「それなら居ませんよ。先程スコットさんと共に出かけましたから」

「何処へ向かうと?」

「秘密だそうです」

「主である私を蔑ろにするなど、罰を与えねば」

「レディⅡエーデルフェルトは、昨日暫く休暇を与えるとトオサカさんに伝えています。

それを忘れたんですか?」

「ミスⅡグレイ。本日は何時になく雄弁ですわね。言いたい事があるなら明瞭におつ

しやったら如何?」

グレイはすくつと立ち上がった。『それでは遠慮無く』と言っている様に見えた。

「仮初めでも交際している人が居るのに、男の人を手元に置いた浅慮さが発端です。あ

まつさえ最後まで味方だったトオサカさんに「その見透かした表情、不愉快ですわ」あんな事言うから逃げられたしまったのだと思います」

「ミス嬢グレイ。私たちの間には相互不理解の溝があるようですわ。お時間頂けるかしら」

グレイはほんの僅かに笑うと、背後の棚から茶葉の入った金物容器を取り出した。

「ライネスさんから頂いた『J I N G T e a へジン ティー：高級茶葉』です」  
「結構」

奥に居た生徒たちが一人、また一人と逃げる様に退室する中、二人は冷え冷えする笑みを浮かべていた。言うまでも無くグレイのそれは道義的な義侠的なものである。決してエルメロイに相手にされていないグレイが、二人の男を弄んだルヴィアに嫉妬した訳では無いのだ。もちろん交際相手とは別に尽くしてくれる男の子が欲しいと妬んだ事などあり得ないのである。



倫敦北部の町、エンフィールド。その市街地から少し離れた所にヘルメスの邸宅があった。広大な敷地の中に、ぽつねんと佇むそれは大豪邸である。その建物を真上から



見るとVの字形状で、左右対称だ。三階建てで各フロア毎に広大な広間があった。それは円形で、Vの字の付け根に位置する部屋だ。ヤジロベエをひっくり返した形状とも言えよう。その大豪邸から一〇〇メートル離れた森の中に人影が二つあった。言うまでも無くジョナサンと真也である。真也はモノアイの望遠鏡で邸宅を偵察していた。

「邸宅の周りは庭園、ていうか公園。一面芝生で煉瓦造りの道が走ってる。真つ直ぐだったたり、意味ありげに曲がっていたり。刈り込まれた植木と花壇が点在し、ガス灯の様な電灯が突っ立っている。釣れないと分りつつも、浮きを見つめる釣り師の様だ」

「意味が分りません」

「好きで無くなつてしまった趣味を無理矢理続けている虚しさを感じる」

「詩人の真似事は結構ですが、具体的にどうなんですか」

「近づいてみないと何とも言えない。まったく、生徒は寮住まいが規則なのにこんな邸宅を構えるなんて困ったお方だ」

周囲の塀から邸宅まで見通しが良く、遮蔽物らしい遮蔽物も無い。目視警戒できる地形だが、望遠鏡を下ろした真也の顔は、クライマックス直前でCMを挟まれた様な顔をしていた。

「警戒術式が有つても無くても意味ないな、これ。さーてと、どうするか。閣下が小細工を弄するとは思えないけれど」

真也は隣で同じ様に偵察するジョンナサンにこう聞いた。彼は視力を強化していた。

「スコットさん。この地に意味はあると思う?」

「霊地ではありませんが、昔ここには工廠がありましたから」

「工廠つて兵器工場つて事?」

「ええ。第二次世界大戦中ドイツ軍に空襲され、相応の死者を出したと聞きます」

「歪みの土地つて訳ね」

「それはそれとしてトオサカさん。私がおここに居る理由を教えてください」

「だって運転免許も、自動車も持っていないもん」

「貴方は人が良さそうに見えて自分勝手だ」

「三重の偉大な者を放っておく訳にも行かないだろ。晩ご飯奢るからそれで手を打ってくれ。てゆうか、スコットさんつて夜だと強気だね」

「夜型なんです」

「実は吸血鬼とか」

「お望みなら吸いますよ」

「男に吸われる趣味は無い」

「品がありません」

「あらいやだ、スコットさんのエッチ」

ジョナサンは深々と溜息を付いた。

「使い魔で探りを入れましょう」

「自分を二流って言うってたけれど。出来るのか？ そんな事」

「使い魔の使役は初歩です。トオサカさんはそれすらも出来ないんですか？」

「俺は身体強化特化なんだよ。って、その哀れんだ表情とても傷つく」

そして真也は呟いた。

「怪しいな」

ジョナサンは答えた。

「怪しいですね」

「企んでるだろうな」

「当然でしょう」

二人は邸宅の目の前に居た。玄関の扉は巨大で二メートルはあろうか。これでは玄関と言うより門である。使い魔の調査で罫は無い、と判断し二人はここまで来たのだが、実際に何の妨害も無いとあからさまである。事実真也の顔は優れない。

「……」

邸宅の周囲は舗装されていた。円形で、その作りはこの邸宅において際立っていた。邸宅と庭園が芸術家の作ったモノなら、この円のみどころかの技術者が後から追加したの

ではないか、そう疑う程に浮いていた。製作のコンセプトが一致してない、という意味だ。自動車を止める場所と考えればつじつまは合うのだが、真也はそれが気に入らない。

「トオサカさん、入りましょう……トオサカさん？」

真也はその舗装道路に右手の平を当てて、弄っていた。

「あの？」

「何か刻んである。この地の歪みで気がつかなかった」

真也はポケットを探ると鉱石を取り出した。それは透明でキューブ状だった。

「それはなんですか？」

「ルヴィア様からお借りした鉱石」

「よく許可が下りましたね」

「任意の許可」

「それは無断借用と言いませんか」

「この際堅い事は言いつこ無しだ」

真也はかつて義姉から教わった様に、その鉱石へいしゝ右手で優しく掴んだ。五つの右指の隙間から顔を覗かせるその石は、「おひなまき」そのものである。意識を集中させ念じ、魔力に形を持たせる容器を構築する。それは彼が先天的に有していたモノでは

無く、後天的に身につけたスキルであった。義姉が物は試しだと無理矢理仕込んだのであった。

「堅いが脆い、大胆の様に見えて繊細、ちゃんと構ってあげないと直ぐ機嫌が悪くなる。けれど正しく扱えば、その石はちゃんと応えるから。そうね、女の子の様に優しく扱う事。こう言えば真也には分りやすいんじゃない？」

彼の記憶にある義姉は笑っていた。真也は練った魔力を鉱石に注ぎ込む。ジョナサンは固唾を呑んで見守っていた。遠坂家は鉱石魔術の一門と言う事を聞き及んでいた。ルヴィアから真也は不出来だと言われていた。

(できるのかそれを。貴方は鉱石魔術を行使する事が出来るのか)

鉱石魔術は鉱石が持つ特性を活用する。異なる特性の鉱石を組み合わせる事により、更にその特性を広げる事が出来る。攻撃、防御、幸運を呼び込む、身体強化と多岐に渡り、実用という意味において他学部への追従を許さない。鉱石魔術の特性を持つこと自体、将来を約束された様なものだ。

身体強化と鉱石の特性を持つのか、私と同じ二流ではなかったのか、それでは話が違う。腹心の部下に裏切られた様な心持ちで、ジョナサンが凝視するその鉱石は沈黙していた。真也はこう呟いた。

「むう」

「……あの」

真也はカルサイトに満遍なく魔力を籠めてみた、発動しない。脈動的に籠めた、発動しない。強めに籠める、発動しない。その鉱石はウンともスンとも言わなかった。真也は、探し続けたジグソーパズルの、最後のピースをあきらめた様な顔だった。

「あの、トオサカさん？」

「やっぱり駄目か。鉱石魔術の属性無いもんな俺」

かつて真也は大量の魔力を籠めれば何とかなると、サファイヤを木つ端微塵にした事がある。もちろん怒られた。もちろん義姉にである。因みにサファイヤはダイヤモンドに継ぐ硬度をもっている。その籠めた魔力量は如何ほどのものか。

「あの」

「いいんです。某主人公みたく何の脈絡もなくレベルアップしないかな、とか。淡い期待を抱いただけです。現実って厳しいです」

「はあ」

「俺の同級生でバカシロって奴が居るんですけれど。そいつ素人から二週間で前線に立てる位になったんです。俺だって十年以上訓練したのにやってられないです」

「はあ」

真也は玄関に向かう階段を登ると玄関前に広がる床、つまりエントランスデスクに魔

法陣を描き始めた。グルリとアウターリングを描く。各シンボルの内訳は以下の通り。

- ・宣言：魔法陣である事を宣言する
- ・受容：術者からの魔力を受け入れる
- ・送力：指定した鉱石に魔力を籠める。
- ・概念：その鉱石から引き出す概念を指定する。この場合は隠れた魔をあぶり出す複雑折となる。

基点となるのは注いだ魔力を、鉱石に適合させる変換式だ。

「えーと、カルサイトだから炭酸塩鉱物〈carbonate〉のシンボルか」

炭酸塩鉱物にはカルサイトの他、アラゴナイト、パール、コーラル、ロードクロサイト、マカライトがこれに類する。真也が描いたのは適正が無い者でも、鉱石魔術を発動させる為の簡易的な術式だ。真也が発案し、キヤスターが組み立てた。ただし結晶構造、組成純度、カット形状、サイズなど。鉱石毎の個性、特性に対応出来ないで魔力効率はそれなりだ。無論、ルヴィアと凜には及ばない。

「あの、それは」

「カンペみたいなもの。トオサカ魔術の秘密でもあるから詳細はノーコメント」

お盆と同じ大きさの魔法陣の中心にカルサイトを置くと真也は「invocatio nemへ発動」と術式起動を意味する、音声振動と魔力をその魔法陣に与えた。鉱石が

ランタンと同程度の光を放つ。発動成功だ。彼は身を屈め、その手にある光で舗装された区域を照らすと、力を意味するシンボルが浮かび上がった。真也は魔法陣かと呟いた。応えたのは当然ジョナサンであった。

「このシンボルはホロスコープにも似ています」

「ホロスコープって占星術のあれか。にしても大きいな。この邸宅がすっぽり収まる程だ。閣下が勝敗を占っただなんて考えにくいけれど、気になる」

「このシンボルを見て下さい。セムヤザ、アザゼル、コカベル、サリエル、バラキヤル、人間に占星術をもたらした墮天使たちですよ。占星術とは元来天界魔術を意味します。天体が万物に影響を与える、これを司る術式でした。ですが万物に影響を与える力は神のみぞ持つ、これを前提とする聖堂教会がこれに噛み付いた。そこで彼らは敵対を避けるため運命を予測する、つまり占いの程度の存在となった。しかし、トオサカさん。これは潰えた筈の古式占星術だ」

真也は黙って聞いていた。

「それだけではありません。クロートー、ラケシス、アトロポス、運命の三女神。そしてペルセポネ、ヘルメス、"ハカテー"、これらは冥界の神々です。見えますが渡し守カロンシンボルもあるでしょう。これはエリクトの降霊術式です」

「つまり閣下は霊地では無いから占星術を使つて、星の魔力へ世界靈魂：アニマ・ムン



デイ〕を収集し、エリクトの降霊術にぶち込んだ。降霊術式と占星術式のハイブリッド魔法陣、か。三重に偉大な者のなせる技だな。そして何かを降霊したと。ペルセポネとか、クロートーとかのシンボルを見る限り、正直回れ右して帰りたい所だけど。それにしてもエリクトの術式にヘブライ語の術式が混じっているのが気になる。ま、霊体待ち受けている事だけは分った」

「それにしてもトオサカさんは運が無い。この時期は白羊宮つまり火星だ。火星は戦争や災害を表すマレフィック〔凶星〕。それが最大の力を発揮する季節です」

「この術式壊しちゃおうか」

「今日は金曜日、火星の照応時間は午後八時。現時刻は十時です」

「壊しても意味が無いって事ね」

「どうするんですか?」

「もちろん突っ込む」

「あのヘルメスⅡトリスメギストスの血を引く魔術師ですよ? 本当に戦うつもりですか」

「もちろん知ってる」

「もつと穏やかな性格だと思っていました」

「トオサカは実は武闘派だね。ここは攻め時だ」

「私はどうしましょうか」

「サポートを頼みたかったけれど危険だな。スコットさんは二時間後に迎えに来てくれ。その頃には決着は付いてるだろう」

「二人で戦うんですか」

「スコットさんが手伝ってくれたから、その表現は正しくない。ここからは俺の担当って事だ」

僅かな躊躇いのあと彼は。

「ゴ」武運を」

そう言い残し去って行った。友人では無いが人付き合いの良い知人が闇夜に消えた、真也はこう呟いた。

「スコットさん。男同士の連帯感つてのもあるんだけどさ。空にはまん丸お月様。月の化身である三重のヘカテーを仰ぐ者がここまでお膳立てされて、三重に偉大な者へヘルメース」相手に退く訳にはいかないだろう」

キャスターに刻まれた冥界神のシンボルが疼いた。

「そうしろと囁くだよ。私の守護神へヘカテー」が……なーんちて」

つづく！

## 五話

突入へ作戦実行である。フリントカラーの重苦しい扉を開ければそこは広間だった。この邸宅はVの字構造だ。その結合部分には円形の部屋があった。広さ自体は大規模プラネタリウムほど。天井までの高さは約三メートル。

「極力手の内を晒さずに済ませたいんだけど……instruerへ展開」

真也の開放の言葉と共に左腕のガントレットが霊刀となす。床一面には召喚の魔法陣が広がり光を帯びていた。つまりは稼働中と言う事だ。

その殺風景な石造りの間には人間が居なかった。それどころかネズミ一匹居はしない。だがどういふ事だろう。一つの黒いわだかまりが魔法陣の中心に浮かんでいた。刀の蒼い光を浴びたそれは怯んだ様に蠢いた。魔法陣の中に侵入し、一步、また一步、歩み寄る。そのわだかまりまで自家用車二台分となった時、そのわだかまりは突如人の顔を持った。恐れ、怒り、妬み、憎しみ、悲しみ、負の力を顕現したそれは真也に襲いかかり、そして一刀のもとに斬り捨てられた。真つ二つになったそれは崩れる様に消えた。燃えた紙片が灰となり、上昇気流に炙られ崩れるかの様だった。静まりかえったそ

の部屋で真也は油断無く視線を走らせた。

(妙だ。小手調べだとしても脆すぎる)

一般魔術師でも十分対応出来る仕掛けをあのヘルメスがするだろうか。その直後。真也は右舷に居たわだかまりを斬り捨てた。その次は左だ、斬り捨てた。続けて背後と右舷、腕の振りのみで斬り捨てた。更に右に一体、左に二体、前に一体、頭上に二体。同時に頭われた六体のわだかまりは一斉に襲いかかった。本能か、それとも使役によるモノか、それらは同時攻撃という手段を持っていた。

「……………」

真也は持ち前の敏捷性を活かし、最も離れたそれに肉薄した。彼の意図はそれらの攻撃からタイミングを奪う事、つまりは同時攻撃の無効化である。一刀目は、十時から四時の方向に打ち、二体を同時に斬り捨てた。ソフトウエイト、足運びと上肢の動きで腕の基点を決める。基点を中心に走る刃は、迫り来る四体を瞬く間に斬り捨てた。計六体調伏、殲滅完了。だが真也の目の前に十体のわだかまりが漂っていた。

「……………」

これは一体どうした事か。霊を召喚するのは良い。だが何故次から次へと頭われる。真也がその十体を屠った時、もう十体増えていた。その十体を屠る間に、更に十体増えていた。二〇体、三〇体、四〇、五〇、底が見えない。背中より強襲する気配がある。彼

はそれを気にせず前方のわだかまりを斬り捨てた。進路変更一八〇度。囲まれるのを防ぐ為、向かいくるわだかまりの群を飛び越し、着地した。結果は変わらず囲まれた。霊刀が唸りを上げる。鞘の重さでバランスを取りコマの様に回転すると、周囲のそれらを斬り捨てた。かつてキヤスターと対峙していた時、竜牙兵を殲滅させた技である。

わだかまりは怒濤の様に押し寄せた。真也は突入ボルトの様に突貫し撃破した。跳躍し、空中のそれを撃破した。着地し更に撃破。撃破、撃破、撃破、そして撃破。敏捷を活かし、剣技を活かし、気配読みを活かし、戦闘経験を活かし。一刀につき、一つである筈の斬撃という名の軌跡は、縦横無尽に宙を斬り裂いた。それは網目の様で陰陽道の九字切りに似ていた。ただ数は多く、平面ではなく曲面を描いていた。丁度プラネタリウムのドームに格子が映し出されている要領だ。

真也の神速の斬撃ですら、一刻の時間を稼いだのみだ。気がつけば魔法陣の内側には夥しい数のわだかまりがあった。数えるのも面倒なそれらは真也が攻撃し終わった瞬間に押し寄せた。四方八方から津波が押し寄せる感覚だ。真也は押し切られた。生きたかった、死にたくない、苦しい、俺の頭を返せ、お母さんどこ、ここは寒いよ。一つ一つのわだかまりが持つ思念に押し潰される。それは泥玉を叩き付けられ、身動きが取れなくなっていく感覚でもあり。もしくは浴びせられたゲルが固まり、身動きが取れなくなる感覚でもあった。

“お前の身体を寄越せ。暖かい血と肉の身体を寄越せ”

それらは未練を残し、苦しみもがき、絶望の中死んでいった人達の無念。そのわだかまりとは怨霊だった。

(違)

怨霊に塗れた真也はそれに気がついた。動物霊、人間霊、悪霊、或いは天使。魔法陣を用い霊体を呼び出すのはありふれた術だ。降霊学部では日常的に行っているだろう。リバプールで見た術式も同様。規模は異なるがサーヴァントの召喚も同じ。共通点は、魔法陣一つに霊一体が原則と言う事だ。

つまり、この魔法陣は召喚ではなく、この地に縛られた霊たちを追い立てている。肉体という彼らが無くしてしまったモノへの執念を利用してはいるだけだ。ならば、真也は魔力を練り、波という形を持たせた。彼を基点に迸るそれは衝撃波となり、直近の怨霊を滅ぼした。その他は弾き飛ばした。その隙に乗り真也は霊刀を逆手に持つと魔力を籠め床に突き立てた。硝子の割れた様な音がした。その部屋の床に刻まれた魔法陣は、真也の功性魔力の衝撃に抗えず崩壊した。魔法陣より供給されていた魔力が断られた彼らは掻き消えた。立ち上る煙が風にまかれ消えていく様だ。

あるべき姿に戻ったその部屋に、手の平同士を打ち鳴らす音があった。パチパチと滑稽さを感じさせつつも、賞賛を惜しまない拍手であった。真也が振り向けば、二階へと

続く扉の前にヘルメスが立っていた。

「いや、痛快痛快。身体強化を使うと聞いていたが、相応の魔力も持っている様だな。魔法陣を刻んだ床ごと強引に破壊する。その様な方法で無効化するとは、正直予想の斜め上だ」

真也は刀を納めた。

「招待しておいて罾を仕掛けるとは、困ったお方です」

「余興だと思ってくれ。俺の名（ヘトリス）が表す通り、この先あと二体の仇なす者が君を待ち受ける」

「閣下、それは今時少年漫画でも流行らない展開ですよ」

「言っただろう？ 我々魔術師は過去に向かうモノだと。俺は最上階の奥の間で君の到着を待つとしよう」



ヘルメスが消えた扉を開けると、上に向かう階段があった。登り切るとまた扉があった。建物の外観から構造を察するに、一階と同じ作りの部屋がその扉の向こうにある筈だ。



「確定。閣下はMANGAを読むに違いない」

ぼやきながらも真也が扉を開けると、四つの香炉が見えた。火鉢に似たそれはウォー  
ターサーバーほどの高さがあった。そしてそれはお世辞にも良い匂いではなかった。

「あやしこ」

香炉とは魔術儀式に用いる道具の一つだ。術者自身への効果を狙うものもあれば、召  
喚体への効果を狙うものもある。臭い匂いは臭い物呼び寄せる。二階の召喚体は、一  
階の怨霊と毛色が異なるらしい。真也がグルリと部屋を見渡すと、その部屋に刻まれた  
魔法陣が視認出来た。つまりは発動中という訳だ。魔法陣の内訳は次の通り。

・ 東南：Y H W H

・ 南西：A H I H

・ 西北：A L I V N

・ 北東：A L H

以上の四方に刻まれた力のシンボルの他に、アレフ、ベート、ギーマル、と言った古  
の神の言語、つまりヘブライ語が刻まれていた。解析する真也の表情は優れない。

(はてな。ヘルメス＝トリスメギストスといえは古代ギリシア語の筈。それに拘束、憑  
依、使役……憑依?)

待ち受ける敵は霊体、それが真也の見立てだった。なぜ憑依のシンボルがあるのか。

(トリスメギストス様、何か隠し球を持つてるな)

真也は抜刀すると魔法陣の中心で立ち止まった。そしてこう告げた。

「出てこいよ。居るんだろ」

返答は無かった。ただ冷たい石の間が広がるのみである。

「ハツタリだと思ってるならお生憎。そこだ。その香炉の左隣」

その時何かが蠢いた。

「あら。本当に気づいていたの。つまらない男の子ね」

光学迷彩を解いたかの様に顕われたそれは馬に乗った女だった。女は鼻筋鋭く、目尻はつり上がり、長い髪は獅子の縦髪。全体的に薄着で、申し分程度の衣類と鎧を纏っていた。馬には眼球がなく、その代わりに額から一角獣ばりの角が伸びていた。その姿を例えるなら、死んだユニコーンに乗ったアマゾネスである。当然、それが纏う雰囲気は真つ当では無かった。カポリと蹄の音が鳴った。真也は対峙するそれを見定め様としていた。

「召喚式にそんな要素は無かったのに、一体どうやって肉の身体を手に入れた。なににより受肉できる程の魔力をどうやって持ってってきた」

「なかなかの観察眼と言いたいけれどお生憎様。真実を知る者は召喚主だけ。早速だけれど、古の契約に基づき死んで貰うわ」

（古の契約？ 加持による召喚って事か）

その女は馬に腹に蹴りを入れると真也に向けて突進した。その速度は真也の予想を上回っていた。真也と同じ敏捷性だったのである。彼はとっさに左方向へ跳躍し、回避成功。躲せたのは心眼の恩恵だ。真也は全キヤパステイを回避に費やした為、姿勢制御はそれなりだった。目の前にある床に左手を宛がい支えとすれば、その床を激しく押し返した。左腕一本で跳躍すれば部屋の隅にすわやと着地した。その様は床上体操の如く。奇術師の様な回避であつたが、真也の表情は優れない。

（この速度、サーヴァント級だ。何者だコイツ）

手綱を引き、向き直つたその女は不愉快を隠さない。

「仕留め損なうなんて。あたしに気づいた事といい忌々しいわね。ただの人間のクセに」

「ま、人間では無いのは見た通りか」

真也が油断無く構えていると、時間のみが過ぎていった。その女は首を傾げ、見下した様な笑みを浮かべるのみだ。真也の立ち位置は魔法陣の一步外だった。

（そう、この魔法陣からは出られないのか。さてどうする。このヘンテコはライダーの劣化版と言つたところ。でも敏捷は侮りがたい。拘束術式を解除すれば楽に進めるが閣下に手の内をバラすのは極力避けたい……）



真也の殺意が迸り、女の唇が大きく歪んだ時だ。彼の身体が何の前触れもなく重くなつた。それは真也の間合い二歩外だった。

(重圧?!)

「お馬鹿さん♪」

真也のステータスが低下したのである。

・筋力：C↓D

・耐久：D↓E

・敏捷：B↓C

・魔力：C

・幸運：C

彼の目の前に馬の角が迫る。移動方向を変えるのはもう不可能だ。彼は意図的に足の力を抜き身体を捻った。馬の角は真也の左肩を抉り、その突進は彼の左半身を捕らえた。真也の身体は錐揉みしながら部屋壁に叩き付けられた。耳を切り裂く様な激突音が部屋に響き渡る。見れば壁に穴が開き、壁だった石財が崩れ山となっていた。女に高揚とした笑みが浮かぶ。性的絶頂へオルガスムスを感じていたのであった。数刻。崩れ落ちた石で作られた山がゴソリと動いた。真也である。石を払いのけつつこう言った。

「その重圧が距離に因るモノでなかったならヤバかったな」

一転、その女は不愉快さを隠さない。汚物でも見るかの様だ。

「ムカツク男の子だわ。一度ならず二度までもあたしを凌ぐなんて。アンタ、本当に人間？」

「運が良かったただけだ。多分」

真也の幸運はC。その女はFである。

「そうみたい。でなきや今頃死体よ」

真也の左肩は馬の角に抉られていた。力が入らず左腕がだらりとぶら下がっている。働く筈の治癒術が始まらない。

「そう、呪詛を帯びた攻撃か」

「特別に教えてあげるわ。棺桶(hoarse)って言うの。でもこれでお仕舞い。あたしに近づけばアンタの能力は落ちる。何度でも躲すと良いわ。右足、左足、右腕をゆつくりと確実に、愛撫する様に廻って扶る。そしてその心臓をえぐり出す。肉塊をあたしの前に晒しなさい。そして床に染みこむ程、踏みつぶしてあげる。理解出来る？ つまりはミンチって事よ」

だが真也は話を聞いていなかった。

「守護神へカテーに願ひ奉る——」

それは拘束術式を解放する呪文だ。馬上の女は不愉快そうな顔をした。これ以上無い程だ。

「なにそれ。女の攻略を他の女に頼むなんてサイテー。しかも悪趣味だわ。助産婦のバアじゃない」

「さてどうかな。案外ツインテのツンデレ美少女かもしれないぞ」

「ツインテとか、ツンデレとか。訳の分からないコトを言いつつニヤけるなんて、正直キモいわ」

「そういうニヤケじゃないんだけどな。ていうかさ、女の人同士の争いは人間でさえおっかないんだ。何処の誰か知らないけれど、キヤスターに刻まれたシンボルが痛い程に疼くから彼女を挑発するのは止める。今ひとつ。この左胸に収まる心臓は借り物だね、持ち主から勝手に捨てる事を禁じられてる。もちろん委譲も駄目だ。だからアンタの様なはずっぱ如きに渡す訳にはいかない」

「あーあ。キモイ。ブツブツくどいし、キモイしウザい。もう飽きちやつた。だからもう……死ね」

「今の顔が一番好ましいね」

それが合図だった。真也は床の石を砕く程に踏み込むと、女も悪鬼の形相で駆け出した。一瞬きに満たない時間の後、その女と馬の首が宙を舞っていた。その首は受け損

なつたお手玉の様に床に落ちた。二つの胸は数歩歩いた後「どう」とけたたましい音を立てて倒れた。骸となったそれは首の無い一体のヒトガタになっていた。一糸まともぬそれは整った容貌だが生物らしい汚さがなかった。呪詛の根源が消滅し傷の再生が始まった。彼がその左肩の傷を庇いながら、その骸を調べると。

「やってくれる」

そう呟いた。ヘルメスは魂の無いホムンクルスの身体に、降霊術で呼び出した魂を込めたのだつた。錬金術、占星術、神働術へ降霊術に精通する、三重に偉大な者の真骨頂と言えらるだろう。

（見事と言いたいが、一体何の霊を使った？）

女の霊圧は真也がリバプールで倒した、低級悪魔の比ではなかった。使役出来ない以上、天使の訳が無い。英霊かとも考えたが、真也はそれを否定した。冬木の英霊召喚システムは六〇年分の膨大な魔力を蓄積し、英霊の座に居る本体を複写して実体化させる半魔法の高度なシステムだ。如何にヘルメスと言えども再現は出来まい。では。

「まさか。閣下は悪魔と契約したのか」

真也は握り手に力を籠めた。真也は身体の再生が終わるのを辛抱強く待った後、最上階へと続く階段へ向かった。





最上階の間で待ち受けていたモノは豹頭のヒトガタだった。ただ二階の女と異なり真つ当な出で立ちだ。ロングコートはサンドベージュカラーで裾は深くおり曲がつていた。色を除けば古き良き英国の、海軍提督の仕立てだ。ホワイトの襟付きシャツは清潔感を出していた。茶系に染まる事を嫌ったのか、オリエンタルブルーのマフラーでアクセントを付けていた。ベージュのパンツは動きやすさを重視するゆつたりとしたモノだ。頑丈なブーツの丈は臍の中程を超えていた。褐色のベルトは、重い武器でもぶら下げられそうな程に幅広で分厚かった。事実、二振りの片手剣が両腰から釣り下げられていた。その姿を例えるなら正装した十九世紀の探検家である。インディー||ジョーズ、もしくはハムナプトラのリック||オコーネルだ。それ豹頭の余りにも洗練された出で立ちに、真也は少し嫉妬した。先の二つ映画やパイレーツ オブ カリビアンを初めとした、時代設定は彼の好きなジャンルなのである。だもので、その口調には少々棘があつた。

「堂々と待ち構えているとは思わなかつた」

真也は堂々と魔法陣に踏み行つた。

「騎士道とは我々堕天使が人間に伝えた概念だ。我々がそれに準じるのは当然だろう

？」

「そーだったな。エチオピアのエノク書じゃ墮天使が人間に争いを教えたって言う」

「我々が与えたのは自身を磨くための競争だった。それを欲望という殺戮に変えたのは人間だ。勘違いなどしてくれるな愚かな人間よ」

「へっ」

「何かおかしい事を言ったか？」

「いや、人間扱いされるのって珍しいから。いつもバケモノって言われる」

「なるほどな。壺の者、甕の者を倒したならば、君は人の形をした他の何か、と言う事か」

「早々に言い直すなよ。喜び損じゃないか」

「何者だ」

「さてね。名前は持つてるけれど、何者かについては答えられない。俺自身知らないから」

その豹頭は両腰の剣を抜いた。二刀流だった。その剣は幅広で切っ先は鋭利に尖っていた。形状はローマのグラディウスに近いが、その刀身は一メートル程もあった。人間が片手で振るうには難しい重量級の剣だった。

「英霊だろうが反英霊だろうが、墜ちるつもりなら勧めはしないがね。召還者に抜き使

われるだけの末路だ」

「ご忠告痛み入るが主は自分で決める。それが叶わないなら素直に消滅するさ」

真也も抜刀すると、「しやらん」と硝子の様な音がした。ネコ科特有の短い尖った耳がピクと動いた。真也が言う。

「退くつもりは？」

「古の契約に基づき不本意ながら召喚に応じた訳だが、戦わずして退くという趣味は持ち合せていないものでね。君はどうだか知らないが」

（騎士道精神に皮肉めいた口調、アーチャーの皮を被ったセイバーってところか）

二人は駆け出し間合いを詰めた。



二刀流と言っても、二振り同時に振るう事は無い。戦闘時に於ける身体の動きを考えれば簡単だ。二刀だろうと一刀だろうと、体重へ突進力、腕力、そして運動量。この三つを組み合わせて剣の威と成す。実際に二刀持つてみれば分るだろう。右手の剣に、肩と体重を載せて打てば、右腕と左腕が両肩で繋がる以上左手の剣は退かざるを得ない。つまり二刀流は、交互連撃に因る速力が基本となる。真也は拘束解除状態、ランサーと

ほぼ同等だ。豹頭の敏捷はC。真也はB。敏捷に勝る真也にとっては、対して意味を持たなかった。打ち込むのは一撃のみで良い。

豹頭まであと一歩という所だった。突然真也のステータスが一ランク落ちた。

「っ！」

それは重圧では無かった。その感覚を強いて言うなら、管理者権限で能力が落とされた、それが近いだろう。

豹頭

・筋力：B

・耐久：C

・敏捷：C

・魔力：B

・幸運：A

真也

・筋力：B ↓ C

・耐久：C ↓ D

・敏捷：A ↓ B

・魔力：A ↓ B

・幸運：C

である。突如能力が落ちた影響で彼の姿勢が乱れた。目の前に豹頭の刃が迫る。低下したものの敏捷は今なお真也が一ランク上だ。彼は一つ舌を打つと一ランク上の敏捷を活かし、豹頭の斬撃を身体捌きだけを以て躲した。予想外の状況に真也はやり過ぎしてしまった。この時、攻撃するべきだったのだ。攻撃出来る時には攻撃するべきだ、敢えて見逃す理由はない。だが余りにも不可解な現象に彼は囚われた。やり過ぎ姿勢を整えれば、切っ先を右下に、下段の構え。

(重圧? 固有結界? ……違う。なんだ?)

油断無く構えるものの、真也の表情は冴えない。一方、豹頭の悪魔は見定めようと目を細めた。当の真也自身が戸惑っている事に気がついたのである。豹頭はその上でその意味を己自身に問いかけた。

「これはどういう事か。君は私の影響を受け、能力を落とした。だが私に重圧など、他者の能力に影響を及ぼす能力は無い。フェイントかと思つたがそうでも無いらしい。つまりは、君と私の因果関係と言う事になる訳だが」

ネコ科特有の鋭い瞳は真也を舐める様だ。

「己の正体を知らない、そう言つたな。君は——」

「今更だ。今更知りたくなど無い。だから……黙れ」

真也は最大戦力で踏み込んだ。彼の次手は全力攻撃だった。真也が魔眼殺しを装備している以上、豹頭は魔眼を持っていない。外部からのプレッシャー、つまり重圧でも無い。忌々しくも思いながら、因果関係という豹頭の推察に真也は同意した。ただ言えることは近づくとも能力が落ちる事のみ。得体が知れない、余裕が無い。だが一ランクダウンならまだ余裕がある、そう判断したのであった。だがその影響は更に強くなった。豹頭がその効果を自覚した為である。ただそれは、豹頭自身が知らない己の存在を自覚しようとする事でもあった。真也の能力が更に落ちた。

(なっ!?)

豹頭

・筋力：B

・耐久：C

・敏捷：C

・魔力：B

・幸運：A

真也

・筋力：B ↓ C ↓ D

・耐久：C ↓ D ↓ E

・敏捷：A↓B↓C

・魔力：A↓B↓C

・幸運：C

二ランクダウン。それは戦闘限界だ。辛うじて敏捷で逼迫できる程度である。つまり、一発食らえば後がない。豹頭の打った右手の斬撃が真也を襲う。真也にとつて今や強大となった豹頭の一撃を霊刀を掲げ辛うじていなす。刃同士がぶつかり合い、擦れ合い火花が散った。『ぢゃりん』と耳障りな音を立てた。その一撃は『軽かった』（しまった！）

豹頭の右の一刀は攻撃ではなく、真也を床に押しつける一刀だった。『ぎちり』滑らした刃を途中で止め、その刃に力を籠めた。筋力Dとなった真也には豹頭の筋力Bに堪えきれず腰が落ちた。支えるが手一杯だ、これでは回避もままならない。豹頭の第一刀は真也の足を止める為のブラフだったのである。筋力も耐久も勝る以上、万が一攻撃を受けても立て直せると踏んだのだ。つまりは二撃目、左手が本命である。今の真也にそれを躲す事叶わず。この星の瞬きに満たない時間の後にやってくる結末は敗北という死である。

それは反射的行動だったのか、本能的だったのか。真也は腕の力を抜くと刃を滑らせた。豹頭の押さええを利用して真也は踏み込んだ。それに敏捷Cが加算される。間合い

を外された豹頭の斬撃は空を切った。だが、その筋力Bを誇る豹頭の左腕が直撃だ。ラリアットの要領である。真也のガードである右腕は一の腕つまり、橈骨・尺骨ごとへし折れた。その衝撃は肋骨に伝わり、右の八番九番をへし折った。その挙げ句真也は吹き飛ばされた。床に叩き付けられ、床を転がる様はパンクした自動車というよりは、四角い車輪で強引に走る自動車の様な激しさだった。転がりに転がり続け、最後は壁に叩き付けられた。大ダメージ発生。



数刻が過ぎた。終わったか、そう豹頭が剣を納刀しようとした時である。真也はふらりと立ち上がった。

「が、がはっ!」

そして血を吐いた。折れた肋骨が右肺に刺さっていた。その他の内蔵も損傷を負っていた。左腕に力が入らない。脱臼していた。右腕は言うまでも無く骨折していた。床に叩き付けられた衝撃で、肋骨も左の十番から十二番が折れていた。満身創痍の真也は左肩を壁に叩き付けた。

「ぐううううっ!」



肩関節を強引にはめ込んだのだ。豹頭から離れた事で能力が戻り、身体を強引に動かした。だが痛みは健在だ。全身を襲う痛みに苛まれる。十分程の悶絶は、彼にとつて無限とも思える時間だった。彼は壁を頭突き、その痛みを以て戦闘復帰の基点とした。のそりと立ち上がる。彼の魔術は「身体能力を超える現象の発生」だ。例え手足が折れていようが、戦う事が出来るのだった。但し、痛みは相応である。つまり治癒は後回しだ。額から流れた血が、真紅の外套を染め上げる。その真紅の外套は、己の血で染まり赤くなつたのか、豹頭はそんな事を考えた。

「見事な闘志と言いたいが、それは蛮勇と言うものだ」

「まだだ。まだ終わってない」

「敢えて苦しみを選ぶか。まあ良からう。死に所を選ぶのも戦士の権利だ」

「へっ」

「二度目だが、何かおかしい事を言つたか？」

「教えてやる。第五次聖杯戦争はこんなもんじゃなかった。実際俺は二度死んだからな」

脇腹を抉られたギルガメツシユースト戦と、士郎に心臓を貫かれた事を言っていた。「死にかけた事なんて数えた事すら無い」

だが何とする。霊体を拘束する魔法陣は殺せない。殺してしまえば、この豹頭を世に

放つ恐れがある。距離を取った事によつて能力は戻っているがダメージは健在だ。

「……」

仕方が無いと真也は眼鏡を取った。双眸が蒼く光る。真也は切り札は直死の魔眼。豹頭は目を細めた。

「ほう。魔眼か」

魔眼は大きく分けて二つある。後天的なモノを虹の魔眼と呼び、魅了、幻惑、吸収、透視などがある。先天的なモノを宝石の魔眼と呼ぶ。テレキネシスに似た無機物魅了、未来死、過去視、直死、そして隷属へ物質変換が列举される。豹頭は顎を己の指で撫でた。画展で新人の作品を評価する目つきだ。

「この邪気から察するに相当なモノだが。はてさて一体何の魔眼か。神の力とも言える隷属は有り得ないだろうから……石化、違うな。石化ならば見られている時点で影響を受ける筈だからな。過去を見たところで意味はあるまい。未来視は変えられる未来視と変えられない未来視があるが、召喚主の目を気にするならば、それを今更持ち出す理由は無い。ならば直死か？」

彼は骨折し内蔵を損傷している身体を、魔術を以て強引に動かした。踏み込んだ。全身に激痛が走る。

「痛うううっ！」

「愚か者め！」

豹頭は嘲笑した。刃が届かねば意味が無い。接近すれば真也の能力は落ちる。そこを仕留めれば終いだ。だがその豹頭の判断こそが真也の狙いだった。直死の魔眼という切り札を出せば、当然それを使うと考える。豹頭の影響下に入るその直前、真也は右手の霊刀を投擲した。筋力Bの生み出したその投擲は音速を超えた。豹頭は砲弾のようない撃を辛うじて凌いだが、意表を突かれた事もあり、その姿勢を大きく崩した。そしてそれは隙となる。真也は駆けるのではなく、床を滑る様に跳躍した。

豹頭の影響下に入り真也の能力が落ちるが、跳躍により踏み込み速度は維持していた。仕込みは最終段階だ。もたもたしていると、身体を動かす事すらままならなくなる。真也は右手の袖に隠したナイフを取り出した。二人の間合いは至近距離。豹頭は態勢を戻し切れておらず、僅かに上肢を逸らしていた。真也は姿勢を下げ、右手のナイフを下方から胸の中心に向かって突き立てた。ちょうど第四のチャクラと言われる部位だ。豹騎士の死の点を狙う。

命を賭けたその刹那。打ち込んだ真也のナイフは点を逸れていた。幸運の差が影響したのである。豹騎士はA、真也はCだ。激突、それはラグビーのタックルより激しかった。豹騎士は踏み堪えると、真也の身体を両手で持ち上げ、そのまま床に叩き付けた。その威力は強大で床の石が砕け身体がめり込んだ。真也は声すら出せない。ク

ロールの息継ぎの様に、めり込んだ岩の窪みから、顔を半分覗かせれば、霞む視界の中に豹頭が掲げる刀身が見えた。身体などもう動かない。

“済まない”

彼が主と家族に謝った時だ。

“これは驚いた”

薄れる意識と視界の中でさえその事実は真也をいたく驚かせた。豹頭の姿がブレ、誰かと重なっていた。それが紡いだ言葉は英語ではなくルーンの言葉だった。

『異教に魔神と貶められたこの際に、この様な若き戦士と相まみえようとは』

真也は息も絶え絶えだ。

「何を言っている。申し訳ないけれど悪魔に褒められたくはない。あくまにも、ない」

『若き戦士。我をよく見よ。その天晴たる知恵を持つてよく考えよ』

真也を縛っていた影響が消えた。戻った能力が彼の身体を再生していけば、唇程度なら苦も無く動かさせた。

「ルーンって事は北欧系か。誰だ」

『この獣の姿、この獣の名を見出すが良い。我は古の契約に基づき、真名を告げる事が出来ぬ』

「豹の戦士……」

真也はエルメロイが言っていた事を思いだした。ゆっくりと身を起こしたがそれが限界だった。立つ事は叶わず、尻餅をついた状態だ。身体に付着していた石の欠片がパラパラと落ちる。

「そうか、ソロモンの七二の悪魔の一柱にして三〇の悪霊軍団を率いる地獄の長官。オセ。なるほど。アンタは聖堂教会に堕とされたオーデーインだ。魔術に長け、知識欲の権化なら、すらすらと俺を暴いたのも納得がいく。豹へオセの姿にグングニルを持っていないって事は、相当霊格堕とされた状態で召喚されたつてのは分る。ソロモンの秘術にも括られているからな。だけどどうしてだ。何故、とどめを刺さない」

『若き戦士よ。其方に刻まれた縛め（拘束術式）の源は、我を召喚し括る力でもある。運が良いとみるか、必然とみるか』

真也はエリクトの降霊術式にヘカターのシンボルがあつた事を思い出した。

「あ」

『我はこの人造の肉に憑依はしているが、その霊という存在はこの召喚術式に括られている。力のシンボルが依り代と言う事だ。つまり、オセという形で召喚した術式が揺らげば、その存在が不安定になるのも道理であろう？』

「そうか。俺に刻まれたヘカターの術式が上位だった、と言う訳か。キャスターが刻んだモノだしな。衝突した衝撃で干渉し合った。だから、アンタはかつてのオーデーイン

という存在を断片的に取り戻した」

『真名を知られた以上契約は破棄となる。新たな主よ、一つだけ願いを聞こう』

「……あるべき所へ還れ」

『さらばだ。悠久なる刻の果てにヴァーラスキヤールヴで会おうぞ』

真也はゆっくりと仰向けになった。手と足を大の字に広げる。

「言いたいだけ言つて去つたか。隻眼のクサレ爺め」

少し休憩だ。と真也が寝つ転がっていると、その部屋の扉が開いた。真也は失礼かと思いつつも寝転がったままだ。

「来ましたよ閣下。占星術〈天体魔術〉で星から魔力を集め、エリクトの降霊術式で魔神を召喚、ソロモン王の魔道書で魔神を使役、ホムンクルスに憑依させた……流石に驚きました。ソロモン王の魔道書〈グリモワール〉を所持している事だけでも大事なのに。墮天使、悪魔を行使するなど、時計塔にバレれば一大事です」

ヘルメスは脇に抱えた大きな書物を掲げ真也に見せた。手品の種明かしでもするかの様な身振りだった。

「写本だ。本来なら古代ギリシャ語だがこれはヘブライ語で書かれている。辛うじてソロモンの秘術を再現出来る贋作。それでもこの一冊で召喚使役を司るのだが召喚式が欠損している。原典は永い刻の中で失われてしまった」

「なるほど。エリクトの召喚術式にヘブライ語が混じっていたのは、」

「そう。ソロモンの術式のみでは召喚がままならなくてね、エリクトの術式と組み合わせた」

「あの二体に理由があるんですか？」

「言っただろう。欠けていると。この写本には七二体揃っていない。幾つかの中から使える魔神〈デーモン〉を選択したまでだ。召喚した魔神はサブノックとオセダ」

「無茶苦茶です。それを一つの魔法陣として構築するなんて常識の外だ」

「効率は悪いが基本を理解していれば難しい事では無い。だがその常識から外れているのは俺だけではない様だ。一応伝えておこう。魔法陣一つで魔神一柱が原則だ。それ故一体一体、順繰りに当てざるをえなかった訳だが、それでも噂に聞くサーヴァントに近い力を持っている筈だ。君はそれを突破しここに辿り着いた。君は何者だ。直死の魔眼を持ち、オーディーンに戦士と呼ばれた」

「生憎と私も知りません。ただ言える事はトオサカの術者つて事だけ」

「突飛な仮説だが君は、」

「それ以上仰いますな。俺は今の俺で居る事を望みます」

「そうだったな。俺たちは互いの意地の為に始めた。正体など無関係だ」

「トリスメギストス様。これからどうなされますか。生憎と私はもう身体が動きませ

ん。どうしても言うならば、死ぬ気で付き合います」

ヘルメスは腰に携えていたショートソードに手を掛けたがその手を下ろした。

「名を司る数字に従い俺は三体繰りだした。四体目を出すなどそこまで恥は晒せない。トオサカシンヤ、君の勝ちだ」

「いえ、賭は閣下の勝ちです」

真也が投げたそれをヘルメスが受け取れば、それは1ペンス硬貨だった。ヘルメスはそれを強く握りしめた。

「今宵の事は俺らだけの事だ」

「良いのですか？」

「俺もソロモンの魔道書と魔人を召喚した事は秘密にしたい」

「取引って事ですね。受諾します」

「必要なら治療と送迎を行うが」

「いえ、良いです。暫くこうして居れば治りますから。頭を冷やすためにも歩いて帰りますよ」

「そうかね」

その貴公子は敗軍の将であったが、憑き物が落ちたかのような表情で立ち去った。ほんの数分前まで激闘を繰り広げたその円形の広間は、戦いなど無かったかのような静けさ



だった。真也は右手で髪を掻き毟ろうとしたが痛みで止めた。その眩きはやるせなさ  
と悔しさが混じっていた。

「戦いに勝って、勝負に負けたか。なあランサー。俺はこの二年負けっ放しだ。勝った  
のはあの二人を守った時だけ。俺は誰かの為じゃないと勝てないんだろうな、きつと」  
真也はそのまま気を失った。



「なぜ決闘に応じましたの？ 死ねない、帰らないといけない、そう言ったのにも関わら  
ず死闘に身を投げた。矛盾してますわ」

なぜ決闘に応じたのか、実際の所真也にも良く分からなかった。ただ、ヘルメスの申  
し出を拒絶していたならば、数年後、ああ。俺はそういう理由で決闘に応じたんだな”  
と振り返ることが出来なくなる。だから応じたのだ。ただ、あそこまで苦戦した事は彼  
自身予想の外であった。

真也はロールパンに食らいつき、咀嚼しきる前にオレンジジュースで押し流した。  
コップをコンとテーブルに強く置いた。

「ルヴィア様。誤解の無い様に申し上げておきますが、決してルヴィア様の為に戦った

のではありません。閣下と私が信念、誇り、純粹、意地、そう言ったモノを誓い、それを賭けたからですよ」

「何ですか、それは」

「I ペンスです」

「……は？」

「そんな事で本気になれるんですよ。ルヴィア様はもう少し男心を勉強した方がいいです」

ルヴィアは目玉焼きにスプーンを突き立てた。溢れだした黄身を掬うと千切ったロールパンの白いところに載せてた。何とも手間の掛かる食べ方である。真也はルヴィアの出方を伺っていた。だが、その手間の掛かる食べ方がトラップだとは気がつかなかった。間を掴む、と言う意味だ。

「シンヤ」

「何ですか」

「カルサイトをお返しなさい」

このお嬢様は何も分っていない。次のおしかりを検討しつつ真紅の外套の、そのポケットを探ればそれは壊れていた。粉々だ。

(うげ)

「シンヤ？」

形勢逆転である。実に鮮やかな手並みだ。ルヴィアは破損した事を知っていて、この状況に持ち込んだのである。彼女はしれっとプチマトを頬張った。

「チューターに依頼の件で呼ばれていますが午後で良いでしょう。午前中は英気を養いなさいな」

「あの、怒ってないんですか」

「元々は私が招いた失態です。従者に擦り付けるなど私の尊厳が許しませんから」

ルヴィアから後光が差した。少なくとも真也にはそう見えた。そして彼は感極まつた。

「ルヴィア様の寛大なる――」

だが彼女は上げて落とした。

「もちろん、この分の代償は払わせますから。覚悟しておく様に」

「天引きですか？」

「当然よ」

真也はうんざりした表情でベーコンを啄んだ。収入は増えたが支出も増えた。一月後に路銀が残っているのか、不安でならなかった。それを見たルヴィアはおかしくて堪らない。華麗な逆転劇の爽快さもあつたが、真也の作る表情の落差がとても楽しかった

のである。その対価に部屋の片付けは手伝ってやろう、彼女はそんな事を考えた。彼女から不遜さが消え失せ、その笑顔が柔らかかったのは、決して朝陽だけのせいではあるまい。

つづく！

## 依頼その三 獵奇殺人鬼編

## 一話

真也は主を待つていた。その手にある書物を捲ればペラリと音を立てた。彼が居る場所はエリート寮の正門前に広がるオープンスペースだ。そこには簡素な木製のテーブルと椅子がずらりと並んでいた。生徒たちの憩いの場でもあったし、待ち合わせの場でもある。彼にとっては主を待つ場所だった。天体学部のトラップを回避する為、彼は当初毎回座る席を変えていたが意味が無い事に気がついた。

椅子の脚が折れた。熱いコーヒーが足にかかる。突風で本が飛ばされる。リスにかじられる。鳩に糞を落とされる。野球のボールが飛んでくる。椅子に貼られたペンキ塗り立ての張り紙が落ちていた。からあげクンレギュラーを頼めばチーズだった。どう考えても有り得ない確率でトラップに引掛かる。避けても効果が低いならば意味が無い。だもので彼は正門近くの席を選ぶ事にした。主の下に馳せ参じやすい、ただそれだけである。頭のとっぺんから足先まで従者根性が染みついていた。その手にある書物を捲ればペラリと音を立てた。

そして生徒はあざ啜う。曰く、エーデルフェルトの腰巾着へヴィルヘルムⅡカイテ

ル。曰く、スカートの中で吠える獵犬へドンキーホーテ。曰く、エルメロイ教室の腰抜け野郎へフアリネツリカストラート……曰く、曰く、散々陰口を叩かれた。義姉に開放される前のかつての彼ならば気にも止めなかつただろうが、3年経つた今の彼は相応に腹を立てた。だが睨み付け追い払うか、追跡し捕まえる振りに終始するのみだ。立場が微妙である以上、手荒には出られなかつた。それでも主は別格だつた。金メツキの尻軽女”と主が侮辱された時は影でボコつた。もちろん精神的な意味だ。その実行犯は無数のキュー〇〇人形に追われ続ける幻を見たそう。それを知つた呪詛学部の生徒は、術式の構築に取り組み始めた。マヨネーズが概念武装になる日も遠くない。その手にある書物を捲ればペラリと音を立てた。

もちろん真也に敵対しない生徒たちも居た。敵対しないと言うよりは、それどころでは無い生徒たちである。例えば腰掛ける真也の脇を通り過ぎていった二人組。その二人を例えれば溢れる情愛。絡め合う指は蠢き、衝動と欲求を醸し出していた。俗に言う恋人繋ぎという奴である。とどのつまりはカップルだ。

へいちゃつきやがって。余所でやれ、余所で

冬木市で大学生活を送っているA君など、彼の友人であるアルファベットブラザーズが聞けば悲憤慷慨へひぶんこうがいしそんな事を思いつつ、ページをペラリ捲ればそれに影が落ちた。

主か、と慌てて腰を浮かせれば女生徒が一人立っていた。肌の色は白く僅かに赤みを混ぜて、白人と言う事は一目瞭然だ。卵の様な丸みを帯びた顔に描かれた唇は大きく、それがフレッシュピंकカラーであれば鮮やかである。金と銀を混ぜた様な、鮮やかなブロンドヘアを左右二つに緩く三つ編んでいた。ガリーである。流行なのか、アンダーフレームの眼鏡を掛けていた。荒々しさを感ぜさせるイギリス人にしては、柔らかい印象を持っていた。

惜しむらくはその出で立ちである。デニムパンツに、プリントのロングスリーブTシャツを着て、スタジヤンを羽織っていた。足下はスニーカー。ボーイッシュというよりは、野暮つたい印象だ。誰かのお下がりのか着古した印象もあった。

(もう少し気を使えば良いのに。勿体ない)

真也はそんな事を考えた。だがそれを帳消しにする程に魅力的な特徴を持っていた。彼女はとても大きかったのである。冬木市にいるリーゼリットに勝るとも劣らない、真也はそれを意識しつつ、努めて隠しつつこう告げた。だが生憎と女生徒にはお見通しだ。女性はこの手の感覚に鋭いのであった。

「どちらさまっ。」

「トオサカシンヤ、やな？」

ハスキーは誇張だが少し低めの声だった。営業スマイルめいた、中身の無い笑みには

見覚えがあった。

「君は……あの時の」

それは真也が時計塔にやってきた一週間前のこと。因縁を付けてきた男子生徒の、傍らに居た女生徒だったと思ひ出した。

「そうや、覚えとつたなら話は早い」

「考古学部の人だっけ？」

「よう知つとるな」

「何度かすれ違つたら」

「そうだったか？」

「考古学の生徒は温和だから、話しかけた事もあるし。散歩がてら学術棟の近くに行く事もある」

“おっぱいが大きいからよく覚えていた”とは言わなかった。

「なんや、温和とか。馬鹿にしとるんか」

「してない。いきなり突つかかりなさんな。可愛い顔が勿体ない」

「ほう。顔で判断するか」

「リップサービスだから真に受けるない」

「ええ、性格しとるわ。アンタ」



帯びる空気が鋭くなる。しまったと、真也は慌てて話題を変える事にした。目の前の彼女は冗談が通じないタイプだったのである。

「実際の所、考古学部が何をしてるかよく知らないんだよ。不愉快な思いをさせたなら謝る。遺跡の発掘でもするのか？」

真也のその話題替えは露骨であつたが、彼女もそれに応ずる事にした。敢えて拗らす必要も無からう、と言う事である。

「ま、ええわ。教えたる。そういう奴もおるけれど私の専攻は地理学なん」

「地理って、あの地理か。地形とか気象とか」

「そうや。太古から自然信仰がある事は知つとるやろ？ 例えば水を神格化した存在。

アーサー王伝説に出てくる湖の貴婦人は元々ケルト神話の淡水を司る女神 “ニムエ”。ギリシヤ神話では河川のオケアノスに、地下水のテーテュース。森や林の樹木信仰にはフィンランドにタピオという神がおる。イングランドには火山があらへんからおらんけれど、アステカの火山の神 “チャンティコ” が有名や」

「ほほう」

真也の相づちにその女生徒は人差し指を突き立てた。良く聞け、というジェスチャーだ。

「ええか？ 太古人間はこれらの神々に対して従順やったが、何時の頃からか折り合い

を付ける様になった。森、山を切り開き畑を作った。治水を以て川の氾濫を抑え込んだ。湖から水を引くのもこの行為や。人間のこの行為に対し神々は噴火、洪水、飢饉、疫病など、自然災害という形で怒りを降ろした。そこで登場するのが魔術師や。作った畑に地母神を祭り上げたり、橋に人柱を入れ川の神の怒りを静めたり。火山の場合はインカのアニータという娘が贄として有名やな」

「へー。つまりそういう研究をしていると」

「まだ話は終わつたらん」

「へいへい」

さっぱりした性格だと思えば、この手にあがちな人物なんだな、と真也は付き合う事にした。自分の興味のある事を聞かれると、答えたくなくなると言うタイプだ。相手の都合お構いなしに。

「トオサカシンヤ。神々に対して最も挑戦的な行為はなんだと思うか。答えてみ」

「……昔、海は神域だったから、船による大航海？」

「違うな」

「神の領域であった天空に手を伸ばそうとしたバベルの塔、巨大なモノは人間を畏怖させ神格となる、それを狙ったピラミッド……どう？」

「良い線やが間違い」

「なら何？」

「道、に決まつとる」

「なんでさ」

「道が靈的な意味を持つことは知つとるやろ？ 食料などの必要物資を運ぶ事から交易、金銭、富を司る様になつた。逆に盗人や病などの通り道でもあつたから、そこで災いを抑える為に神を降ろした。有名所だとヘカテーやな。三重のヘカテーと呼ばれるが、その三重は十字路や三叉路の意味や。災いを抑える為に神殿を建て祀つたんやな」  
真也に刻まれたヘカテーのシンボルが疼いた。

「道の代表としてまずはこのイングランドにある “イクニールドウェイ” を取り上げたい。マーリンが作ったと言われるこの道は、ストーンヘンジから先史時代のグリムズグレイヴスを繋いどる。この線上に時計塔があることは承知やろ？ 有史以来最初であり最後の人工的な霊脈や。ま、マーリンを人間とするかは議論の対象やが……ここまできええか？」

「もちろん」

大嘘だった。知らない事ばかりである。

「切つても切り離せないのがローマンロード。ローマ街道とも言うがローマ帝国が築いた大道路は欧州はもちろん中東、この島国であるイングランドにも到達しとる。聖堂教

がなぜ一大宗教になったか、分るか？」

「道を使った」

「せや。中東で興ったばかりの聖堂教はこれに目を付け、ローマ帝国に精力的に取り入った。後は簡単や。その道を使い、短期間にあつというまに欧州に広まった。道という呪術的な通路に聖堂教の概念が通つたんやな。ケルト、ゲルマンの地方神も驚いたやろ。道という呪術的な力とそれを作つた人間に。恐らく、要の道に道祖神を立てればこゝろは行かんかつたはずや。」

この様に道が一本増え、また一本増えて、伸びて繋がつたとき、それは一つのネットワークとなつた。今やその関係は複雑怪奇。どこかの道を繋いだりすると、遙か彼方の道が影響を受ける。幹線道路が作られれば、旧線が寂れるなんて良い例や。もっとも事故といった災いも招くんやから、現代人の道作りは的を外しとる。つまり現代の道は第二の霊脈と言つても過言ではあらへん。古代の魔術師が荒ぶる自然靈に対し何をしてみたのか、人間がしでかした遺跡や地形、道路などを調査研究し真理を求めた道こそが考古学者の使命なんや！」

どれ程熱を帯びたのか彼女は握り手に力を入れていた。真也は拍手喝采である。

「うん、意外と為になつたし、おもしろい話だつた。で、話の腰を折つて悪いんだけど、ご用件は？」

彼女はぼつりと眩いた。夢から覚め、現実という厳しい環境を思い出したかの様だつた。

「フィールドワークには資金が必要。たつぷりとな」

「そうだろうね。でも資金援助依頼なら他を当たってくれ。協力はしたいと思うけれど俺も裕福じゃない」

「流れの魔術師にパトロンを依頼する程バカじゃ無いで」

「まさか。主の財布を狙ってるとか？」

「それも考えたけどな。それなら直訴するわ」

「それならなんで？」

「トオサカシンヤ。アンタと同じ様に私も依頼を熟しとる。割は良いけれど、血なまぐさそうな奴を見つけてな。相棒を探しとった、ここまで言えばわかるな？」

「なんで？」

それは何故俺なのか、と言う意味だ。

「錢ゲバで無類の女好き、そう聞いたんやけど」

「誰から」

「S. M. やけど。ちがうん？」

それは初日に難癖を付けてきた生徒だった。

(捻る。ぼきつと折る)

真也は頭の中でチューペットをへし折るとこう言い放った。

「そのS・Mに頼めば良いじゃないか。性格に何アリだけれど腕は確かだし」

「ピチピチの新入生を、新しい取り巻きにしてな。それで私はお払い箱、これでいいか？」

「なんで？」

「トリス様と喧嘩したそうやん。腕っ節はあると見たんやけど？」

「一つツツコミたい。金が無いのに分け前たら報奨金が減るだろ」

「せやからな」

その女生徒は思わせぶりな視線で、真也の肩越しに立つ人物を見た。その人物は女生徒が言わんとする事に気づいていたが、真也はまだ気がついていなかった。ここで切り上げて既に意味が無い。であるからして、その女生徒は腹を括ってこう切り出した。

「その、東洋人を相手にするのは私も初めてなん。それで手を打ってくれへんか。健康状態や呪いの類いは心配せんでええから」

「あー……」

道徳的倫理的に外れる事ではあったが、彼女の申し出は良くある話だ。強い目的はあるが自分の力が及ばない。余所から持つてくるにも金は無い。ならば身を切るしか無

い。現代でも表沙汰にならないだけで蔓延っている。寝枕営業などその一例だろう。真也は髪をかき上げた後こう告げた。

「貴女はとてつもない勘違いを二つしている。女好きだなんて心外だ」

その女生徒は指折り数えてこう言った。

「ルヴィアゼリツタⅡエーデルフェルト、グレイ、ジョナサンⅡスコット。綺麗どころを侍らして、」

「してない」

「付け加えてトリス様からの略奪愛」

「いてててて」

「違うんか」

「してません。てゆうか、スコットさんは男だろ」

「私は女説を支持してるねん。あんな綺麗な男なんて認められへんわ」

「物事の判断に私情は挟むもんじゃ無いね。もう一つ。貴女を侮辱するつもりは無いけれど、俺は金銭だけでそういう事は（崇るから）しない主義だ」

「そうか。時間取らせたな」

食い下がると思えば、彼女はあつさりと席を立った。

「悪いね。期待に応えられなくて。この場での話は誰にも言わないよ」

「気を使う必要は無いで、面と向かって言わないけれど皆笑つとる」

立ち去る彼女の背中をじつと見れば、彼は家の幸運に感謝した。魔術には金が掛かる、と言う事だ。遠坂家は不労所得、つまり所有する資産とみかじめ料が生み出す収入、ライダーと実母である千歳の稼ぎ、そしてキャスターが作る魔道具代で成り立っていた。ただ生活するなら末代まで安泰だが、当主である義姉は金食い虫なので樂觀も出来ない。予算に関しては葵、凜、桜が四半期ごとに話し合っているが、険悪になる事もしばしばだ。基本的に傍観していた真也であつたが、遠坂家の地下工房に安置してある槍を売却する、しないで義姉と揉めた事がある。そう、土郎と真也を綺礼より救い、アンリマユ誕生を阻止したあのゲイボルクだ。それは遠坂姉妹が予算で紛糾した直後のこと。

「ねえ真也。あの槍なんだけれど、私のものよね？ 当主だし姉だし。紅いし？」

と言い出した時の義姉の顔は今でも明瞭に思い出せる。それが姉弟となつてからの初喧嘩となつた訳だが遠坂家の恥部と葬られた。

(土郎のところは四次、五次のインツベルンの支度金が莫大つて話だし、郊外の城も敷地もイリヤが抑えたつて話だし、羨ましいこつた。そう言えばイリヤはどれ位成長したのかね。今頃十二〜三歳の外見か。地元の中学校行くか、県外の全寮制に行くか揉めてたけれど、どうなつたんかな)



そして背後よりプレッシャーである。ニュータイプで無くとも感じられる程に強く、ざらつとした感覚だった。言うまでも無くルヴィアである。彼の背後に立ち、両手を腰に見下ろす彼女は、不愉快そうな表情を在り在りと浮かべていた。しまったと、真也が慌てて立ち上がれば、彼女は無言で歩き出した。大きい靴音が痛々しい。彼は慌てて駆け寄った。

「おはようございます。ルヴィア様」

「……」

返事が無い。彼女は両手両足を大きく振り、進行方向にある門に向けて一直線だ。あの女生徒の意地の悪さに辟易するが、主に気づかず話し込んでいたのも事実だ。失態である。付け加えるならば女生徒だったのが頭が痛い。一瞬、主がヘルメスであったなら、と思う真也であった。彼なら笑いながら水に流すだろう。虫が良いとは思いつつ。「ところで今日はどちらに？　ロンドンへ行くと伺っていますが、荷物持ちでしょうか？」

「……」

無言である。ルヴィアと義姉の姿が重なった。意地の張り方などそっくりだった。だもので真也は主の姿を上から下へと流し見た。何時ものロイヤルブルーのドレス。金色の髪は、綺麗なカールを巻いていた。襟肩から腹部に降りるレースのあしらいは何

時もの様に純白である。側頭部で結びリボンは何時もの様にロイヤルブルー……真也はピンときた。

「そのリボン何時もと違いますね」

ピクリとルヴィアの表情が動いた。よくよく見れば青は青でもシユプリームである。僅かに色が明るい青だ。イギリスでは何事も因らず青が最高の色とされている。ナイト爵位の最高勲章も青。イギリス国教会の最高職であるカンタベリー大主教職もブルーリボンで象徴される。フィンランドもこれに倣ったのか、真也はそんな事を考えた。リボンの青い生地にブランド名が刺繍してあったが敢えて聞いた。

「プ○ダですか？ それともエ○メス？」

「ル○ヴィトンですけれど、」

「そうでありましたか。リボンを出しているのは意外ですよね」

「目敏いですわね。何時もそうなのかしら」

足を止め振り返った表情には、呆れ、困惑、羞恥もあったかもしれない。真也は主の表情が揺らいだ事に安堵した。義姉のご機嫌取りで何時もしていたから、と発言すれば爆散爆死である。

「やはりルヴィア様は偉そうに笑っている方が好ましいですな」

「シンヤ」

「はい？」

「随分と有意義な時間を過ごした様で何よりですわ」

「ごまかせなかつたか、と真也は愛想笑いするのみだ。

「彼女とは何でも無いです。少し話ただけですから」

「本当かしら」

「本当です。依頼を手伝ってくれと、断りましたが」

「何故？」

「何故って、ルヴィア様の従者ですから。許可無くできないからと断りました。実際に聞いても、いい顔はしないでしょ？ だからです。あ、ひよつとして不安にさせてし

まいま、冗談です、謝ります、この通り。ですから右腕の呪いを納めて下さい。マジ怖いです。ホホホもやめて」

小さな溜息が一つあつた。

「あの方、余り良い噂を聞きませんわね。交友を持つのは構わないけれど、気をつけなさい。敢えてトラブルを招く事も無いでしょう」

そう彼女は遠回しに釘を刺した。

「面識があるんですか？」

「希に二言三言挨拶を交わします。目的の為なら手段を選ばない、随分と、その、情熱的

な方だとか」

「成り上がるのに必死なんですよ」

「随分と肩を持つこと。生真面目そうに見えて実は妖艶、そういうタイプがお好みなのかしら」

「ヤキモチで、すCa! いひやいいいいい……」

真也は頬を抓られた。その時間たつぷり五分間。散々抓られ、気が済んだころにはパンパンに腫れていた。もちろん真也の左頬だ。

「まったく、少しは誠実になつたかと思えば」

「心外です。これほど忠義に尽くしているのに」

「姉とどちら?」

「家と、じゃないんですか?」

「シンヤ」

「はい?」

「私を褒めるのは当然ですけれど、おちやらは無しになさい。『ですな』などと言われても、素直に受け取れませんかから」

彼女は挑発めいた表情だったが、どこか艶やかさがあつた。ルヴィアは経験があるのか、彼はそんな下世話な事を考えた。



「と、言う事が先日あつた訳なんだが。心を開いて貰つた、遠慮が無くなつた、表現はどちらでも良いんだけれど暴力は良くない。スコットさんはどう思うよ。頬を引つ張るのだけは止めてくれつて、言つているのにちーつとも聞き届けて貰えない」

その場所はもはや定番となつたルヴィアの寮の前だ。ジヨナサンⅡスコットと真也の二人は何時もの様に腰掛け雑談をしていた。そしてまた二人の周りも、主を待つ生徒たちで賑わつていた。

「どのように言及するべきか悩ましいところですが。トオサカさんがそういう態度ではレディⅡエーデルフェルトも大変でしょう」

「なんで？ 付かず離れずの距離しかないだろ」

「分つているなら尚質が悪い」

「それは彼女も理解しているよ」

「理解はしているでしょうね」

「なんだ、さつきから聞いていれば思わせぶりの事ばかり。そういうスコットさんはどうなんだ」

「どう、とは？」

「そういう頼れる人は居ないのか、って事だ」

「交際相手ではなく、頼るですか？」

「気づいてない様だから言うけれど、スコットさんは他人には気が利くくせに、自分の事になると無頓着になる」

「なぜ、そう思うのです」

「人の話を聞いてばかりだ。自分の事を何一つ話さない。自分を持っていないから話す事が無い。もしくは嫌っている、だから話たくない。好きなら誇るだろうからな。違う？」

「そうでしょうね。そうかもしれません。驚きました、指摘されたのは二人目です」

「一人目って？」

「師匠ですよ」

「スコットさんこそ、そういう相手作れば良い。きっと何かの切っ掛けになる。色々な人から言い寄られてるんだから、相手に困らないだろ」

「経験上語る、ですか」

「いつててててて」

「居ますよ、そういう人」

「マジで？ 何処の誰だ」

「トオサカさんの言う様な関係ではありません」

「難しい相手、って事か。その人、女の人なんだよな？」

「何故確認する様に聞くのか、不愉快でたまらない」

「いやだって」

「私は言いましたよ、その様な恋愛的なモノを求める相手ではないと」

碧と朱。ジヨナサン＝スコットの、ちぐはぐな瞳の色が、とある人物を追っていた。真也はそれに気がついた。その視線の先にはグレイを連れたエルメロイが歩いていた。その視線が何の意味を持つのか、真也が考える事約十秒。

「……」

彼は言葉を失った。エルメロイとの健全な関係を求めるのであれば、スコットは女性であるべきだ。だが個人的感傷でスコットは男であつて欲しい、と願っている。なにせ今まで振り回していたのが女性と言う事になってしまふからだ。真也が二律背反めいた難問に煩悶しているとジヨナサンはこう言った。

「似てるんです。父に」

「スコットさんの親父さん？」

「はい。もう随分前に他界しましたが。トオサカさんは？」

「母〈葵〈義理〉、千歳〈実〉〉は健在、実父〈おやじ〉は知らない。多分死んだと思う」  
「会いたいと思いますか？」

「どうか。小さい頃、何度かお袋に聞いたけれど、一向に答えないから諦めた。ウチには従者が二人居て、知つていそうなんだけど答えない。その二人は人格者でね、その二人が言わないなら、多分知らなくて良いことだ、そう思ってる」

ふと、父の姿を思い出した。それは真也にとつて最古の記憶。稲光程度の短い映像に写るその父は赤髪だった。

(土郎も赤髪だったな……うええ)

「トオサカさん。私は非嫡出子なんです。妾どころか、住み込みメイドとの間に出来た子供だった。父の家名を名乗るところか、敷居を跨ぐ事すらできなかった」

「……恨んでる、とか？」

「ええ、とても。母は身籠もつた途端に追い出された。田舎に帰れば冷たい眼で見られた。母はそれでも私を育て上げ、心労が祟つたのか十二の時に他界しました。その後は祖父母に育てられて十五になった頃です。父は私を呼びつけました。理由は嫡男が死んだから。放置するだけ放置して、母がどれだけ苦労したのか、それを知らず、知ろうともせず、見事な手のひら返しでした。まったく。血縁関係というモノは厄介です。憎みたくとも憎みきれない。その父に認められたいと、褒められたいと、今でも思つてい



ます。トオサカさんと私はよく似ている。二流で、父がおらず、何らかのコンプレックスを抱いている。だからでしょうね、こんな事を話したのは」

「スコットさん。確かに俺は身体強化しか使わないけれど、」

「シンヤ、行きますわよ」

いつの間にか、ルヴィアが傍に立っていた。

「ミスター＝スコット。失礼いたしますわ」

そして何時になく強引な振る舞いに、二人は顔を見合わせた。真也はジヨナサンに一言詫びて、主の後を追った。真也の数歩先には、こんじきの長い髪と、青いドレスを颯と棚引させる主が歩いていて、その調子は何時もより堅いが、苛立っている訳で無かった。何故だろうか、彼には面倒を掛けた時の義姉の後ろ姿に見えた。だから彼女はこう言った。

「同じ境遇、同情、共感で秘密を話すなどおやめなさい。軽率よ」

「こういう場合は、そう言うものでしょう」

「その秘密がありふれたものなら、それでも良いでしょうが。シンヤのそれはありふれたモノかしら？ 宝具を所持していると暴露する様な物と踏んでいるのだけだ」

「確かに、それは、そうかもしれないが」

「それにジヨナサン＝スコットにも裏がありそうですし」

「ご存じなんですか？」

「スコット家の再興を願っているようですが、その家が潰えたのは第二次世界大戦の前、怪しすぎます。調べようにも戦争の影響で記録も大半が焼失。まるで調べようが無いから、その家を選んだと言わんばかり」

「師匠の同情に付け入った卑怯者です」 真也はジョナサン・スコットの自嘲めいた言葉を思い出した。

「二流で彼の一族は時計塔に入れなかった。同じ境遇の教授が権力を持ったため取り入った、理屈は合います」

「シンヤ、彼には注意なさい」

「魔術師としての勘ですか？」

「女としての、と言っておきましようか」

「その言葉を持ち出されると、男の俺に否定は出来ないですね。ですがルヴィア様。確かにスコットさんには、この島国特有のバイキング的な荒々しさが無い。どちらかと言えば、フランスかドイツの雰囲気です。個人的にも良く分からない、違和感を感じていますが最終判断は俺がします。宜しいですね？」

「まったく。主を蔑ろにするし、忠告も聞きはしない。本当に可愛げの無い従者だこと」  
「それに見合うモノは捧げているつもりです」

「そうですわね。でなくては見切りを付けていますから」

己の肩越しに魅せる彼の主は微笑んでいた。真也は悟られぬ様に溜息一つ。  
(まったく。この笑顔には困ったもんだ。どうしたらいいのか分らなくなる)

三週間後にやってくる別れの時は、それなりに重いモノとなるだろう、それを考えた真也の頭はズーンと重くなった。



執務室で机に向かうエルメロイは、目の前に並んで立つ二人を感慨深く見ていた。ルヴィアが凜を目の敵にしている事はエルメロイも知るところである。その彼女が遠坂家の長男を連れ歩くとは、世の中何が起こるか分らない。エルメロイの興味を惹いたのは、その何処がおかしいのか、そう言わんばかりの自然さだ。この光景を凜が見たらどうなるのか、エルメロイはそんな事を少し考えた。真也が帰国するのは三週間後、凜が時計塔に来る定期報告はまだ先だ。騒ぎは回避出来そうだ、そう思いつつ彼は両肘を机に立てて両手を組んだ。そしてその握り拳に鼻先を近づけた。何時ものポーズだ。威厳と威圧という意味で、効果は十分にあつた。報告書に目を通していたルヴィアは視線を上げた。その琥珀色の瞳は訝しさを隠さない。

「この依頼書の内容は、失踪した女生徒の搜索、それ以外に解釈のしようが無いのですけれど。お間違いではなくて?」

「間違いでは無い。それで合っている。その生徒の名はマリア・アジャーニ。考古学部の二二歳。彼女は塔の依頼を遂行中に行方不明になった。彼女の受けた依頼内容は猟奇殺人の調査だ」

真也が継いだ。

「なぜ塔が動いたんです」

「イギリスではこの手の事件は珍しくない。これもそれらの一つだ。被害者は若い女性のみ、遺体は激しく損傷し、臓器と性器そして生殖器官を取り出され、血を綺麗さっぱり抜かれる。手がかりは遺体の欠片のみだ。捜査は難航し、遺体の不可解さや証拠の乏しさから、警察はその手の事案ではないかと匙(さじ)を投げた。やんごとなき方々の手を渡り、時計塔に依頼として回された」

ルヴィアは呆れた様に依頼書を己の従者に手渡した。

「この方もまた随分と背伸びをしたものですね」

「ルヴィア様は知ってるんですか? このマリア・アジャーニという人」

「シンヤが先日会った方、といえば分るかしら」

彼が慌ててページを捲ればその顔写真は間違いなく、その彼女だった。エルメロイが

継いだ。

「トオサカシンヤ、聞かれる前に答えておこうか。時計塔には相対的に四種類の生徒に分けられる。

一つ。実力、資産、才能、家柄、全てが満たされた者。君の主がその一人だ。

二つ。家が裕福だが実力に乏しい者。金銭に不自由しない彼らは、時間を勉学に費やせる。

三つ。実力はあるが財力が乏しい者。彼らはその能力を活かし、依頼で報奨金を稼ぐ。また有力者に教える事もある。家庭教師という訳だ。二つ目と三つ目は相性が良い。Win-Winの関係と言う事だ。

四つ、そして財力も実力も乏しい者。才覚はあつてもそれを伸ばす環境を持たない彼らは死に物狂いだ。マリアⅡアジャーニもその一人で、危険な依頼に手を出した。恐らく、無理をしたのだろう」

真也の物言いには棘があつた。

「つまり教授は彼女が死んだと、そう仰る？」

「その証拠はまだ無い」

「例えマリアⅡアジャーニが四つ目の、乏しい者だとしても時計塔に入学出来る実力を持った魔術師です。その彼女が失踪した。この状況でも教授は、これが生徒が扱う範疇

だと判断するのですか？」

「トオサカシンヤ、君のその意見には私も賛成だ。実際、管理部でも判断が出来ず各学部  
のロードに相談という形で意見を求められた」

ルヴィアの瞳は鋭さを帯びていた。

「チューター、いえ。ロードⅡエルメロイ二世様。執行者の出番はありませんわ。私た  
ちが赴くのですから」

「そう願おう。自覚を促すため伝えて置くが、一つ目の実力と財力を持つ生徒たち同士  
がペアを組む事などまず無い。つまり、監督役でもあり王の学徒でもあるルヴィアゼ  
リッタⅡエーデルフェルト、君と対角を成すヘルメスⅡトリスメギストスと喧嘩した  
らしい」トオサカシンヤのペアで解決が出来ないのであれば、執行者の出番となるだろ  
う」

エルメロイは、何時もの手順で葉巻に火をつけると煙を吐いた。その煙もいつもの様  
に揺蕩う。

「依頼書には我々が持っている情報の全てが書いてある。不明点は現地で調べる事だ  
な。質問はあるか？」

「いえ」

「十分ですわ」

「話は以上だ。迅速かつ正確な処理を期待する」

つつく！

## 一話

目的地であるノーフォーク州スタドリコンスタブルまでは、時計塔から道なり一四四マイルへ二三二キロの位置にある。大凡東京から浜松までの距離だ。公共交通機関が無いので二人はハイヤーを使う事にした。ルヴィアの実家から従者兼運転手と自動車呼び寄せるという案もあつたが、フィンランドの自動車をイギリスで走らせる為の、手間と時間が馬鹿にならないので廃案となつた。

何より。エーデルフェルト家の従者であるクラウンと、真也を引き合わせる事にルヴィアが一抹の不安を感じた事も理由だつた。考えすぎだとは思いつつも、ヘルメスという前例は無視出来なかつた。自動車のエンジン音を聞くこと暫く。モーターウェイ、つまり高速道路を走り二五号線から十一号線に乗り換えた頃だ。流れる車窓の風景をぼろと見ている真也にとってその声は、突然であり、意表でもあり、そして辛辣でもあつた。

「マリァ＝アジャーニを気にしてゐるのではなくて？」

ルヴィアは後部座席の運転席側。右肘をドアフレームに乗せ、頬杖を突いていた。頬杖をつくことが多い人は、日常に満足していない」と言うが、ではこの主は何が不満



なのか。彼はそんな事を考えた。

「そんな事はありません。世間を知らない子供ならともかく彼女は大人だ。危険性の判断ぐらいしたでしょうし、それが求められる立場でもあった。焦っていた彼女は分不相応の危険な依頼に手を出した。懸念通りに何かに襲われ危機的状况にあつたとしても、それは彼女の選んだ結果。境遇に同情はしますが、責任の類いは感じてませんよ。なにより彼女はそれを自覚していた」

「嘘仰いな。せめて危険だと一言告げれば、結果は変わったかもしれない、どうかしら？」

「何故そう仰る」

「成り上がるのに必死なんですよ」先日のこの発言と今のシンヤのそれが真逆だから」

「先日のはただのフォロワーだった、かも知れませんが。もしくはルヴィア様の怒りを収める為の方便、これでどうです」

「何時になく饒舌、これを付け加えます」

真也は苦笑するより他は無い。

「かも知れませぬね。大人だつて間違える、大人だつて辛いものは辛い。辛いのが続けば、何かがおかしくなる。彼女はそれに気づいていたのか、気づいていても何とも出来

なかつたのか。せめて彼女にも誰かが居れば、と」

「ほんの些細なことで未来は変わる。どれほどの労力を注ぎ込んでも、変わらない事もある。その判断できるのは未来視のみでしょう。こう成る事が分っていたら、その罪悪感は当然でしょうが、その眼は違うのでしょうか」

「……種類までは、分つてませんよね」

「さあ？ それはどうかしら」

「引つ掛かりませんよ。その手には」

「足の着かなさそうなシンヤは、見ていて飽きないので、そうしておきましょうか」

「ルヴィア様もお人が悪い」

「馬鹿を仰いな。私ほど理解と寛容のある主は居なくてよ」

彼は肩を竦めるのみだ。ルヴィアは両手を膝に置くと、腕に力を入れ、背もたれに強く身を押しつけた。身体を小さく震わせるその様は、ストレッチをする猫の様だった。もちろん猫は猫でもルウエージャンフォレストキャットである。

「それにしても、迅速かつ正確な処理を期待する」とは随分と役者めいた発言です。こ  
と。チューターは俳優でも目指していたのかしらね」

「前にも言つたんですよ。スパイ大作戦の決め台詞ですね、あれじゃ」

「なんですの、それは」

「古い映画の決め台詞。『なお、このテープは自動的に消滅する』って奴です。ご存じないですか?」

「随分古い映画ではなくて?」

「相応に。義母が映画好きなんですよ。だもので古い映画もよく見ました」

休憩を一回挟み、暫く時間が流れた頃である。ルヴィアはハンドバッグを弄り、真也に鉱石を手渡した。彼はその石を陽にかざしてこう聞いた。

「これは複合結晶ですね。なんです?」

・カルセドニーへ糸で遊ぶ妖精たち：良好な人間関係を結ぶ

・スフェーンへ金剛石より輝かしき：高いレベルでのコミュニケーションを図る。

・カンポールシエロへ空から鉄の塊が降ってきた：負の存在に対する結界となる

「この三つの鉱石を組み合わせたものです。携帯電話代わり、発信器代わり、そして護符代わりといえれば良いかしら」

「宜しいのですか? 確かカンポールシエロは鉄隕石へレアメタルだったかと」

「トリスメギストス様の一件で反省しましたの。シンヤを放し飼いにすると碌な事にならない。何かあればそれに魔力を籠めなさいな、真也の居場所が分ります。それと。譲渡では無く貸与ですから扱いには注意する様に……どうかしたのかしら」

子供か犬かと、不満を溢すかと思えば真也はその石を凝視していた。

「いえ、ちよつと」

それは三年前の夜の事。彼は全く同じ物を同級生から渡されたのである。それはライダーと派手な喧嘩をする直前だ。その同級生の家に居候していた彼は出かけようとしたところ、その同級生に引き留められたのである。

《早く帰ること。アーチャーも居るけれど、真也の単独行動は危険だから。この石を持つていつて。使えば駆けつけるから。何があつても直ぐに駆けつけるから》

《悪いけれど気持ちだけ貰つておく。それは葵さんに渡してくれ。そこまでしてくれなくて良いから。俺は一人で大丈夫》

《なら行かせない。アーチャー使つてでも止める》

《何かあつても使わない、それならどう？ 意味は無いだろ》

《真也が持つ事に意味があるの》

《どんな意味がある》

《これは私たちの第一歩だから》

そう言つて手渡された石だった。その同級生とは今や姉弟である。彼はふと思う、第五次聖杯戦争のさなか、あのまま、遠坂家に居続けたらどうなつていたのだろうか。運が良ければ、生き残り、義妹はしこりを残したまま土郎の元に居続けたらどう。真也は、今や姉であるその同級生と共にあるだろうが、それは歪な結末だ。全く以て今の状況は

幸運の積み立てだ。その積み立ては富士山よりも高く聳える。もしくは無数に伸びる樹根の末梢。そのたつた一つの末端にぶら下がる、ゴールに到達する確率だ。真也は思わずその記憶に溺れていた。

「あー、いかな。歳を取るとどうも感傷的になつて困ります」

彼はポンポンと己の額を叩いた。

「どのような意味？」

「姉にも同じ様なモノを渡された事がありました」

「まさかとは思うのだけれど、姉と何かあったのかしら」

「いててててててて」

「シンヤ？」

従者の突然の奇行に彼女は目を丸くした。シクシクと痛む胃を抱きかかえ、前屈みである。

「い、いえ、同時期に盛大な喧嘩をしまして、それを少々思い出しまして。いえ、喧嘩と  
言うよりは一方的だったのですが。はい」

ルヴィアは腕を組み、不愉快さを隠さない。

「尻に敷かれている様に見えるのは気のせいかしら」

「フィンランドは存じませんが、日本での姉と弟は大体こんな関係なんです。しかも、姉

は武闘派です」

敢えてそう言う立場を選んだのも事実ではあった。彼が意地を張れば義姉も意地を張る。意地を張り続けければ窮屈だ。同じ家に居る以上、逃げることも叶わない。だがそれを思うとももの悲しい。

真也は身を起こすと、車窓を流れる風景をじっと見た。

「ルヴィア様。出会いというのは、途方も無い行動の積み立ての様です」

「……そうですわね」

真也は奇跡という言葉を使わなかった。その言葉は人間のいかなる行為をも、無意味にして仕舞いかねない恐ろしい言葉であったからだ。血反吐を吐いて成し遂げても、奇跡だと、超越的な何かのお陰だと、言われれば台無しになってしまう。



塔の依頼を受ける生徒には定期連絡が課せられる。マリアIIアジャーニの場合はこの様になる。

- ・ 1日目、調査開始、継続中という定期連絡が時計塔にFAXで届けられた。
- ・ 2日目、報告が無い。

・3日目、報告が無い。管理部が計画書に記されている宿泊先に連絡を取る。二日目にホテルを出たつきり戻っていない事が判明。

・4日目、報告が無い。管理部は異常事態と判断した。同日エルメロイはルヴィアと真也の二人を呼び寄せた。

把握している情報はマリア・アジャニーが消息を絶った事、ノーフォーク州のスタドリコンスタブルに向かった事のみである。事故か何かであれば情報がある筈だと、二人は一路警察署に向かう事にした。警察署はご多分に漏れず煉瓦造り風の現代建築であった。PoliceではなくConstabularyと書かれていた。真也が降りようとドアのノブに手を掛ければ主はハンドバッグを弄っていた。言うまでも無く支払いはルヴィアである。完全従者であれば真也の仕事であるが、期間限定故にそこまでの権限は持たされていなかった。彼女が高級そうな財布から取り出したカードは金色だ。真也はそれを見咎めた。

「ルヴィア様、それゴールドカードですか？」

「それがなにか？」

「人前で出す時は地味なカードが良いですよ。高級カードはそういう輩に目を付けられます。トラブルの元です」

「その為のシンヤでしょうに」

「そうでしたね」

真也は支払いが同い年の少女と言う事实に、もの悲しきを感じつつも事実だと思つて諦めた。リバプールと異なりこの警官たちと時計塔は無関係だ。だもので二人は友人としての立場を取る事にした。高級そうな青色ドレスを着こなし、高貴そうな立ち振る舞い。いかにもご令嬢然としたルヴィア。真紅の外套と言えば聞こえは良いが、痛みが激しく浮浪者一歩手前の真也。白いカウntaxターで二人を出迎えた警官は困惑するのみである。それでも友好的に二人を迎えたのは、彼の性質故であつた。

「ラリー＝シモンズ、巡査部長です。刑事をしています。御用向きをお伺いいたしましようか」

二人は対応した刑事に見覚えがあつた。背は高いが恰幅の良い背広姿。愛嬌のある顔立ちで、敢えて称せばビジネススーツを纏つた中年紳士である。それも、女系貴族の入り婿だ。彼はリバプールで一応の協力関係にあつた刑事と瓜二つである。

(似てる)

(似てますわ)

「今担当者が席を外しております……私の顔に何か着いておりますか?」

応えたのは真也である。

「いえ、リバプールでそっくりな方を見かけたものですから」



「ああなるほど。リバプールには弟が居ます」

「納得しました。私はトオサカシンヤです。彼女は連れのルヴィアゼリツタⅡエーデルフェルト。友人のマリアⅡアジャーニを探しています」

彼は顔写真を差し出した。

「四日前この町に向かうと言ったきり連絡が取れなくなりました。何か手がかりがないかと伺いました」

その刑事は顎をさすりつつ、その写真を物珍しそうに見ていた。

「あの何か？」

「マリアⅡアジャーニさんでしたかな」

「はい」

その刑事はカウンターに隠して置いてある端末のキーを叩いた。短い節くれだった指はカタカタと存外流暢なキータッチで真也は驚いた。

「照会しましたが特に登録はありませんな」

真也はカウンターに乗り出した。

「何でも構いません。手がかりが欲しいんです。オンラインに登録される前の、搜索願の届け出用紙、身元不明者と救急搬送者の情報。刑事さん同士の会話。そう言ったレベルのモノでも構いません」

「登録前の情報は教えられない事になってましてな」

「無理は承知でお願いします」

刑事は一つ溜息。その刑事は写真じつと見るとこう言った。

「この方の歳は？」

「二一歳です」

「成人女性が四日程度では事件性の判断は出来ませんな。男としけこんでいるかも知れませんが」

ルヴィアが言う。

「何故そう思いに？」

「経験上分りますが、このタイプのお嬢さんは影では情熱的なものでしてな。恐らくそうではないかと」

真也は更に身を乗り出した。刑事の背後に居た同僚が警戒の視線を投げた。

「刑事さん。私たち三人は級友で懇意の仲でした。彼女、マリアは気が強い反面、寂しがり屋です。いえ、寂しい娘だからこそ、殻という強い気性で自分を守っていた。そういう言う娘なんです。事実、離ればなれになると頻繁にメールを入れてきます。返信しないと不機嫌になり、怒り出し、そして泣き出します。その期間は最長で二日、最短で三時間です。そういう娘なんです。そのマリアはもう四日も音沙汰が無い。マリアの身に何

か起こつたに違いない、と私たちは確信しています。その背後に男の影があるなら尚更です。

私たちは止めたんです。一人旅は危ないと、どうしても言うなら同行すると。ですが、もう独り立ちの時だと、私たちを制止も聞かず……そしてこの状況です。私たちは居ても立つても居られず高速道路をかつとばし、こうして一四四マイル離れたこの町にきました。刑事さん。この不安と焦りを刑事さんに伝える術を持たない、私は自分の不甲斐なさが許せません。お忙しいところは重々承知しています。せめて、何か情報を頂けないでしょうか」

真也の瞳は潤みを帯びていた。そして深々と頭を下げた。迫真の演技である。その刑事は多少の誇張を見抜いていたが、案じている事もまた本物だと見抜いた。深い溜息がもう一つ。

「連絡先を教えて頂けますかな？ 何か情報が入ればお伝え致しますよう」  
「ありがとうございますっ！」

ヤレヤレと苦笑いの刑事の手を真也はガッシリと握っていた。片やルヴィアは冷めた目である。よくもまあ有る事、無い事をでつち上げられるモノだとルヴィアは心中であきれ果てた。彼女にとってこの手のパフォーマンスが出来る人物は信用が成らない。表裏がある、という意味だ。彼女が好ましいと思う人物像は飾らず素朴な男性なのだ。

遠坂真也と言う人物は今までの経緯が無ければ、警戒する人物なのである。それは警察署前でタクシーを待っている間の事だった。彼女が羽織ったシヨールとドレス、そして長い髪は風に揺らいでいた。

「シンヤ」

「はい？」

「私に見せているシンヤは何割なのかしら」

真也はその問いの意味について少し考えた。

「魔術を秘密にしている事と、口調・態度つまり主への接し方、この二つを除けばほぼ地です。個人の立場を取らせて貰えれば、大体同じになります」

「大体？」

「もちろん。ルヴィア様と姉の対応は違いますから。契約前だったりバプールでの初日には強引に手を掴んだりしたでしょう？ 今はもうしませんし」

「初日から余り変わっていない様に見えるのだけだ」

「気のせいでありましょう」

「言いなさい」

真也は秘密があるとルヴィアに告げている。言う事も出来ないとも。だものでルヴィアも、それを直接的に問い詰めない、聞きもしない。ただこのケースはそれに該当

しない、ルヴィアと真也の個人的な内容である。だから彼女は命令を持ち出したのだ。これは二人の暗黙の了解でもあった。

「……ルヴィア様のタイプは強行な態度をとると拗れる、と経験上知っていますので。リバプールは何分初仕事でしたから、なるべく穏便にと、今と同じ様な態度で望みました。のです。はい」

「それは、つまり。首尾良く事を運ぶ為に敢えて下手に出て私の機嫌を取ったと?」

「ルヴィア様。あの時は契約前です。接し方は似ていても心構えは違いますから。そこはご理解頂きたいです」

「そう。五千ユーロ分と言う事」

「もちろん、損得勘定抜いていますよ。お忘れですか? 俺は貴女を気に入っている、そう申し上げました。最近入れ込みすぎではないかと不安になっている程です」

「そう。なら、」

「姉とどちらが、などとお聞きなさいませぬ。立場上答える事は出来ませんが、ルヴィア様にとっては不愉快な回答となりましょう」

「それは早合点よ。なら、情報収集に向かう、と繋げるつもりでした。今ひとつ。その自惚れは直しなさいな」

「その様です」

「では行きますわよ。シンヤ」

彼女は鋭い笑みで身を翻した。金色の髪とロイヤルブルーのドレスが颯爽と舞った。真也は得心がいった。この仕草、有り様が彼にとつてとても好ましいのだ。

「何時でも何処へでも。今はルヴィア様の従者ですから」



町の中心であつたが静かなものだ。道は細く、それを挟む建築物同士の距離が近い。チューダー朝の建物も多く残り、古い町だと言う事が良く分かつた。雑踏とした都市を求められている訳ではないのでそれで十分なのだろう。その町を歩くのはもちろん二人であつた。真也が言う。

「ここで一度別れましょう。魔術師が人目を憚る以上その活動は基本的に夜です。とはいえ、食料を買うにはスーパーへ、食事をするにはダイナーへ。マリア・アジャニーが町を出歩いた可能性はあります。ルヴィア様は暗示か他の魔術で探して下さい。俺は聞き込みをします」

「闇雲に探しても効果は薄いと思うのだけれど？」

「相応に大きい町ですが人通りはそれ程多くない。彼女は目立ちますので可能性は十分

にあります」

「目立つ？」

「ええ」

「……」

「ええ」

「……」

「それでは夕方五時にこのカフェで落ち合しましょう」

「……」

無言の非難が痛かった。彼はそそくさと逃げた。こうして、ご安心下さい。ルヴェア様は十二分に平均以上ですよ」という核爆級戦略兵器の投入は、英断により回避されたのであった。兎にも角にも搜索開始だ。人通りの多いところと言えば大体決まっている。一つ目、スーパーマーケット。真也は牛乳ボトルを買いレジで聞いてみた。

「この人見た事ありませんか」

「五ポンドになります」

冷たくあしらわれたので冷たい牛乳をゴクゴクと飲み干した。そのキャッシャーは控えめだった。二つ目はダイナーである。彼はウェイトレスに聞いてみた。

「この人見た事無い？」

「はい、サーロインステーク」

「あの、」

声を掛けるも無視された。けんもほろろの接待だ。彼は分厚いこんがり焼けた肉にナイフを突き立てた。そのウェイトレスは控えめだった。そしてブックストア。彼は商品のグラビア集と一緒に写真を見せた。

「この人見かけた事無い？」

その店員は無言でレジを打った。そのグラビアは大きいモデルばかりだった。マリ  
アIIアジャーニの写真もそうだ。その店員は控えめだった。

駅前、バス停、図書館、公園、信号待ちの人。悉く收穫無しである。無視はまだ良い方だ。罵声を浴びせ去って行く人物も居た。真也には何が何だか分らない。だが事実は簡単である。彼は知ってか知らずか控えめな女性ばかりに聞き込んだのだ。サイズを意識していないと言えば聞こえは良いが、配慮に欠けていた。

途方に暮れた彼はとち狂った。向かったのは石造りの厳かな建物。屋根には十字のシンボルがあった。つまり修道院である。

「この罰当たりめがー!!」

老シスターに黒鍵を投げつけられた。

「アーメンハレルヤピーナツツバターツ！」



そして公園の噴水に腰掛けロダンのポーズ。己の持論を熱く語ったマリアアジャニーニを彼は思い出す。第一印象では生真面目だが、のし上がる為なりふり構わない一面も持つ。真也の見立てでは、したくは無いがせざるを得ないパターンだ。

「陽が落ちたら酒場で聞き込むか。身の不幸を嘆き、酒を呑んでいる可能性もあるし」  
彼はゆつくりと腰を上げ、空になったコーヒー缶をゴミ箱に放り投げた。外れた。しぶしぶ入れ直した。



ルヴィアとの集合時間まで余裕がある。万が一と彼は治安の宜しくない区域に足を運んだ。何処の町にでもある貧民街だ。見渡す限り荒れていた。壁にはスプレーで汚された落書きがあった。ゴミ箱はあふれかえり異臭を放っていた。廃屋の窓硝子は割れ、放置されていた。誰かが住んでいる家には鉄格子が取り付けられていた。もちろん強盗対策だ。自動車も同様だった。ハンドル、タイヤ、カーオーディオ、売却できる部品は取られ尽くされ、フレームという骨をさらしていた。

見た通りの貴人であるルヴィアが居ては話どころでは無い。危険、トラブルという意味だ。彼女が聞けば馬鹿にしているのかと怒り出すだろうが、主を意義に乏しい危険に

敢えて晒す事も無いだろう。何より真也はこの手の人種になれていた。数歩歩けば賊に当たる、と言う意味だ。事実、真也の目の前に見るからに怪しい五名が立っていた。外国人、観光客は良いカモなのである。危険意識の乏しいボンクラ外国人が、迷い込んだと思つたのだろう。彼らは背は高くグレーのジャージを着ていた。パーカーを羽織っている者も居た。五人の中で最も背が高い人物が一步踏み出した。

「お前、外国人だな」

「そうだ」

「ここは俺らの場所だ。怪我をしないうちに金をおいて出て行け」

彼らには彼らの決まりがある。正論を持ち出したところで意味が無い。十戒の石版を持ち出したところで、割られるのがオチだ。だから真也は端的に写真を突き出した。

「この人を見た奴は居ないか？ 知ってる奴が居たら話せ。五ポンドやる」

「たったの五ポンドかよ」

「ぬかせ、上等だろ。マクドナルドでランチが食える」

「ゴミ箱を漁つた事も無い外国人様はお偉いな」

「おまえらのお可哀想な話に付き合う気は無い。知っているか知っていないか、答えろ」

「お前、寿命を縮めたぜ？」

「その手の脅しは慣れてる。本当に殺しに掛かる奴は、脅しなんてしないからな」

「決めた。有り金奪う」

地に伏せうめき声を上げる彼らに、真也はこう説いた。

「そうそう。樹の中に居る幼虫はな、腹の中に木くずをため込んでるから暫く寝かすんだ。そうすると排泄されて美味しく食べられる」

暫く歩くと、少年どころか体格の良い大人まで現れた。そんな事を繰り返す事一時間。無駄足かと、帰ろうとした矢先だ。蹲っている子供に気がついた。廃屋の玄関の奥まった所だった。それも良くある話だ。親の無い子供、家の無い子供、飢えた子供、ともに認識するときにキリが無い。それは旅の途中の事。彼はかつて子供に恵んだ事がある。何処に潜んでいたのか、なら俺もと瞬く間に詰め寄られた。強引に逃げ出すと、その恵んだ金を巡って争いすら起きた。恵んだ子は大勢に殴られていた。その子供の泣き声は今でも耳に残っている。

複雑な表情で立ち去ろうとした真也は足を止めた。その子供の“脇腹に”人の顔が見えたからだ。通りすがりの見知らぬ老人が呟いた。

「あの子供に関わらん方がええ」

「何故です」

「割と小綺麗な格好しとろう？ 何名かが絡んだが、狂った様に逃げていったわ。悪魔

憑きじゃらうて」

その老人はカラカラとスーパーマーケットにあるカートを押して去って行った。真也が小走りで駆けよればその子供は腹を抱え、呻いていた。

「なるほどな」

真也はそう呟いた。その子供は金髪で十歳前後。デニムにスニーカー、ハーフコートを纏へまとい、ニット帽を被っていた。背中には少々不釣り合いな大きな鞆を背負っていた。みすばらしい恰好だが清潔感はあつた。

(迷子か、家出か、捨て子か)

彼は眼鏡を取ると指先で脇腹を突いた。その子供に憑いた悪霊を殺したのである。真也はその子供の背中を摩った。

(霊媒体質か? この子)

ぱちりと目を開いた少年の頭上には赤色の大人が居た。

「坊主。日没前に教会に行つて聖水を貰え。可能であれば洗礼済みのロザリオがいい。イギリスじゃ効果は低いかも知れないけれど粗塩つて手もある。袋に入れて持ち歩けばマシだろ」

その大人はそう言い残すと立ち去った。



真也はその子供につけ回されていた。真紅の外套を纏った一八五センチの真也の後ろを十歳前後の子供が歩いていった。周囲の視線も痛い。通報され事案とされるのも時間の問題だ。さてどうするか。それは簡単である。真也は走り出した。大人が子供を撒く事など容易い。サーヴァントとしての能力以前だ。ところがどうした事か。撒いたと聞き込みを再開すれば、いつの間にか真也の近く立っていた。その子供は真也を見上げ睨んでいた。

「何故いるし」

彼はもう一度巻いた。追いつかれた。今度こそはと逃げた。また追いつかれた。

「何故だ」

もう一度、と思ったところで思い直した。真也は渋々、しゃがみ、そして視線を合わせた。

「何か用か坊主」

「おまえ、気に入らない」

「……」

「真つ赤なコートなんてダッセエ」

「……自分の所感を偽りなく述べる事は良い事だ。だけど、もう少し言葉の意味を考え

ろ。処世術って意味。殴られても文句言えないぞ」

「そんな無意味だね」

「何でそう思う」

「おまえはボンクラだから」

真也は後日語る。この時キレ無かったのは、自制心の賜だと。

「いいか、坊主。一個教えてやる。最初に会ったら“コンニチワ”だ。お、ぼ、え、て、お、け」

真也は子供を捕らえると、その両の米神に拳をねじ込んだ。もちろん手加減はしていった。

「いってーいってーっ！」

そして気がついた。真也の魔術回路とその子供の魔術回路が反発したのである。その子供は米神を抑え涙目だ。それでも真也を睨み上げていた。

「そうか。坊主、お前はそう言うんだな」

魔術法則の一つである“類似”。その子供は己を任意の対象に似せる事が出来た。己を真也に似せたその子供は、真也をトレースする事が出来たのである。何故なら真也の居場所は真也が分っているからだ。抗魔力をもつ真也が相手では場所を追跡する程度で収まったが、一般人を相手にすれば限定的ではあるものの思考を読む事も動かす事

も可能だ。

「俺はトオサカシンヤという。坊主、お前は？」

「シンヤ？」

「そうだ」

「シンヤ……そうか、お前、シンヤか」

「日本名が珍しいか。坊主の慣例では、シンヤトオサカが正しいけれど、まあいい。そんな事より家は何処だ。親元まで送ってやる」

「……」

「そうか。それは済まなかった……気軽にその力を使うな。相手に似るって事は、乗っ取られる事でもある。未熟な坊主じやさつきみたいに取り憑かれる。そして一つ選択をやる。教会に連れて行きたいけれど俺は連中が嫌いだね。連中も俺を嫌ってる。1ポンドやる。それでどこかに行け。付いてくると言うのなら金はやらん」

「そんな端金なんか要るかよ」

「稼ぎ損ねたな、坊主」

真也は立ち上がると歩きだした。当然子供は付いてきた。出るのは溜息のみである。(どうすんだ、この状況。仕事もあるつてのに、子供が絡むと碌な事にならないつてのに)



仕事はしなくてはならないのである。警察に連れて行こうにも、この子供なら大人を出し抜く事が出来るだろう。事実、不審がり声を掛けてきた女性は、子供の一眼みでどこかへ行ってしまった。真也は渋々仕事を続ける事にした。特異な力を持つのが身体は子供。体力は圧倒的に大人に劣る。消耗させれば、諦めざるを得ない。実に姑息である。

暫く歩き回ったあと真也は公園で酒を呑んでいる老人に声を掛けた。ベンチに腰掛けるその人物はゴルフアールが良く被るハンチング帽を被り、白髪に白い髭を生やしていた。ブラウンのジャケットはヨレヨレで、シャツは黒、スラックスはグレー。色もちぐはぐである。革靴も痛みが激しい。

「何か用かね」

かつてランサーは真也にこう言った。

《辛い何かを背負い込んでしまったら、酒を呑んで、歌でも歌って、忘れた振りをするしかないんじゃないの》

それはバーサーカー第二戦目に向かう途中の事だった。老人も大変なのだ、感傷に



浸りつつ真也は言う。

「おじいさん。この人を知りませんか」

真也はマリアの顔写真を取り出した。どれどれと、その老人はポケットから老眼鏡を取り出した。

「こりやまたキレイな娘さんだね」

そして自然に呟いた。一件地味な美術品が実はオークション級だったと言わんばかりである。

「そう見えますか？」

「少々野暮つたいが、着飾ればお姫様になろうて。兄さんの恋人かい？」

「残念ながら」

子供はその写真を見ようと二人の周りをうろちよろしていたが、思いついた様にベンチに上がり覗き込んだ。

「知り合いです。連絡が取れなくなって探しているんです」

「んー、どこかで見たんだか。見てないんだか。他に特徴はないのかね？」

「おっぱいが大きいです。俺の経験上最大級です」

どれどれと視線を下げれば老人の目尻も下がる。ルーズな服で分りにくいとその膨れ上がり具合は常人の三倍だ。

「マ、マブい」

「でしょー」

二人はあははと笑い合う。そして主の登場だ。ルヴィアは腕を組んで睨んでいた。彼は「なんでここが」とは聞かなかつた。石を渡されている為だ。当然である。だもので背後の主にこう聞いた。

「あの、いつからそこに？」

「〃残念ながら〃というところからかしら」

「これはご老人との、コミュニティションの手段であります」

「シンヤ。この際です。伝えておきましょう」

・ 誠実、まじめ

・ 忠実、嘘を付かない

・ 直実、素直

「私が尊ぶのはこの三つです」

「三つとも意味は同じでは？」

「責務に服していると思えば……」

「あの。決してルヴィア様のバストサイズがどうこうという意味では——」

「シンヤ、覚悟なさい」

(あれ、なんか義姉と姿がだぶる)

ルヴィアの右袖に隠れた魔術刻印が唸り始めた。

(……マズイ)

その「マズイ」とは複数の意味を持った。一つは老人と子供に魔術を見られるという意味。一つはその二人を巻き添えにしようという意味。そして今回は本気で撃たれるという意味だ。その真也を救ったのは老人だった。ルヴィアを見た老人は写真を放り投げると、駆け寄り傳へかしづゝいた。子供は呆けた様にルヴィアを見ていた。

「お美しいのセニョール。貴女の美しさの余り、涙で枯れ果てた筈の、恋の花が咲き乱れましたぞ。頭上には恋を司る星が輝いております。今私は私たちを繋ぐ強い絆を感じました。この古いぼれが全身全霊を籠めて、星の物語を語りましょう。どうぞこの手をお取り下さい。美しい一夜を共に。私の手に」

老人が若いのか、それとも主の魔性故か。目の前の光景に歪さを感じつつも、真也はじつとその光景を見ていた。そして彼は腕を組み首を傾げた。考えるポーズである。

(そう言えば孫娘ぐらいの相手にプロポーズした偉人が居たな。誰だっけ)

「折角のお誘いですがご老体。占星術は専門ではありませんので。今ひとつ。私は男性ではありませんので。では」

「……………」これはとんだ失礼を」

ルヴィアは手慣れた様にあしらった。真也に一瞥を投げる踵を返した。『話があります』と言わんばかりである。真也は写真を掴むと慌てて後を追った。少し顔が青かった。

「おお、セニョール！ いずこへ向かわれる〜!!」

この場合セニョリータが正しい。



「そう、そうです。ルヴィア様」

真也は数歩先を行く主を見てこう言った。僅かに声のトーンが高かった。

「何が、かしら」

だが主の声は重かった。

「ゲートルですよ。ゲートル。彼は未亡人の娘ウルリーケにプロポーズしたんです。彼女は当時十九歳。ゲートルは七四歳ですよ。あのお爺さん若い頃は天才イケメンだったかも知れませんね。いやあ、流星は我が主。罪作りな方です。ですが私としても鼻が高い」

足を止め、振り返った彼の主は笑っていたが、怒つてもいた。

「シンヤ」

「なんででしょうか」

「一人の女性を娶り家庭を築く生き方と、情熱やら青春やら、なにやらと適当な修飾を付け女を渡り歩く生き方とどちらが正しいのかしら」

「あのお爺さんの亡くなった奥さんがルヴィア様に似ていたとか」

「シンヤに聞いています」

「前者かと思えます」

とてつもなく胃が痛んだが、そこは我慢する空気である。

「意図的にやっていますわね？」

「何が何のことやら。私にはさっぱりです」

「前から感じていました。まさか、とも。そこまでは、と否定してきましたが。私は確信しました」

「……具体的にお願いします」

「シンヤ」

「はい」

「〃知った〃上で私に不愉快な思いをさせている、どうかしら」

「せめて恣意的にと」

「それは弁解になつてしまして?」

「ワザとじやありませんし」

ルヴィアが天に向けた手の平には、魔力を帯びた三つの鉱石が浮いていた。真也の読み上げるその様は、賽の河原で石を積む子供たちの様。

「えーと、インペリアルトパーズは炎。エンジェライトは許しと咎人でしたね。アポフィライトは浄化でしたか。その組み合わせは“炎を以て咎人の罪を浄化する”ですか。そうですか、俺は咎人ですか。確かにルヴィア様以外の女性を褒める様な言動をしましたがちよつとぐらい良いと思うんです。面と向かつて言つた訳じや無いですし」

「シンヤ。言い残す事があれば聞きましょう」

「ルヴィア様がヤキモチ焼きだつて気づかなかつたのは俺のミスでしたねー」

「それは些細であつたが重要な意思疎通の齟齬だつた。」

「Excution〈断罪〉」

回避するべきか、逃げるべきか。悩んだ彼は防御し敢えて受ける事にした。彼の抗魔力はB。真也の見立てではルヴィアのそれはB。死にはしまい、という極めて楽観的な判断である。彼の経験上、避ければ拗れ、事態が悪化する事は良く分かつていた。その三つの鉱石が弾ける刹那、彼女は足下の人影に気がついた。その人影とは子供であり、ルヴィアを見上げ凝視していた。

「この子は？」

助かったと、素晴らしい水差しだと、真也は心中で拍手喝采だ。

「見ず知らずの坊主です。私の目立つ風貌が気に入らないのか、タゲられました」

「タゲ？」

「纏わり付かれています、という意味です」

「何を考えているのかしら。子供に構っている場合では無いでしょうに」

「いやまあ、そうなんです何が何とも成らず」

主が拳を降ろした事に安堵すれば、事態は異なる展開を擁し始めた。良くある様に、子供扱いされたその子供の怒りは怒髪天を衝く勢いだ。声変わりにはまだ数年は掛かる、子供らしい甲高い声でそう吠えた。

「子供じゃねえ！」

「早く家にお帰りなさい。子供の出番ではありませんわ」

「うるさい、ブス！」

痛い程の沈黙だった。真也は青い顔である。

(ルヴィア様をブスとか。マジで眼科行け。もしくは脳神経外科だ。認知能力を測つて  
い)

ルヴィアは暫く固まっていた表情を解すと、我に返った様に髪をふわりとかき上げ

た。

「子供のなす事に目くじらを立てるなんて、優雅さに欠けますわね」

「しつてるぜ。素顔に自信が無いから化粧するつて。厚化粧のコールタールババア」

この子供は空間を固める固有結界を持つに違いない、真也はそんな事を考えた。

「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ」

「コケコッコ」

子供は右手の平を頭に沿えて鶏冠の真似、左手を口元に沿えてくちばしの真似、多芸である。真也は目の前に繰り広げられる、何処か放牧的でありながらサスペンス的でもある喜劇に唸っていた。

（あー、居たわ。小学生ぐらいの時、こんなコトする奴）

恐れ知らずのコメディアンに彼は懐かしさを覚えた。あの時は本当に子供だったのだなど、真也は遠い目である。やむを得まいと真也は二人の間に割って入った。流石に見殺しは夢見が悪かろう。出来るだけの事はしよう、彼は子供の頭に拳骨を落とすた。

「いってえ！ なにするんだ！」

「良いか坊主。この人は一見お嬢様に見えるけれど実は魔女なんだ。グリム童話にでてくる『トウルデーの魔女』。早く謝らないと薪にされて、火にくべられてしまうぞ」



「そんな嘘つばい話なんか怖くねえ！」

真也はちらと主を見た。子供のする事だからこれで手を打てという懇願である。自尊心と行き場のない屈辱に、端正な表情を辛うじて保ちながらルヴィアは言う。

「行きますわよ、シンヤ。子供になど付き合っていられますか」

(また子供扱いするし)

そして世界は回り出す。ついと踵を返したルヴィアのロイヤルブルーのドレスのスカート、その裾が華々しく舞っていたのだった。幻想種を見ればこの様な印象を受けるのだろう、真也は他人事の様子に考えていた。そのロイヤルブルーの花びらの奥には、白いレースの妖精が住んでいたのである。

(一晩ぐらいで機嫌が治まると良いけれどナー)

そう、その子供は。ルヴィアゼリツタエーデルフェルトのスカートを捲っていたのだった。

つづく！

## 三話

スカートめくり、それは子供の悪戯である。女の子を困らせたいという、幼年期の男にありがちな困った性質だ。彼の場合はどうだったかというところ、シスコンだった為縁が無かった。というよりはシスコンだった為、何の関心も持たなかった。ただ、良い兄で在らんとした為止める立場であった。もちろん、好きなのか付き合ってるのか等々、はやし立てられた事もあったが、シスコンだった為全く気にしなかった。相当数のフラグを立てたが、全てへし折った。何故なら当時の彼はシスコンだった為である。

背後から見る彼女のそれは、シルク生地の手帕タイプだった。スノウホワイトカラーは清純で、あしらわれたレースは羽根の様な軽やかさを持っていた。生地は薄手で蟲惑的な形を強調していた。事実、腰から臀部、そして腿を形作る曲線は絵画の様に現実感が欠いていたが、それでいて生物的な肉感があった。細すぎず、太すぎず。その魅惑的な美しさは筆舌に尽くしがたい。正に神細工である。当の真也は達観の表情だ。

(そうか、ルヴィア様は白か。青じゃ無かったか)

彼は現実逃避していた。十秒以内に見舞われるであろう、未曾有の壊滅をどのように

回避しようか、それどころでは無かったのである。だが思いつかなかつた。両手でスカートの前を押さえ、その次は左手を前に残したまま、右手で後ろを押さえ、そして開いていた華は閉じた。それは宇宙的で雄大な自然現象を見終わった様な達成感である。日蝕、または月蝕。ハレー彗星でも良いし、超新星爆発もありだろう。或いは、核爆発だったかもしれない。

スカートを抑え、振り返り、長い髪を振り乱し、振り返つた主の表情には。プライドもなく、余裕も無く、威厳も無い、素の表情だった。そう表現すれば聞こえは良いが、感情が弾ける直前の表情とも言える。

「こ、このつ、無礼者っ！」

この状況は非情に危険だ。そう直感した彼は子供を脇に抱え、走り出した。その様は脱兎の如く。

「先にホテルへお戻り下さい！ 私は落とし前を付けさせますっ！」  
「お待ちなさいっ！」

公園を走り抜け、フェンスを飛び越えた。道路を横断し、そして跳躍。民家の屋根々を八艘飛び。人気の無いところを求めて、探し走り続ければ墓地である。この時間に訪れる人間は居まい。真也は適当なところで、脇で暴れる子供を放り投げた。雑草と土が、柔らかな安全な音を立てた。

「なにしやがるー！」

足下で喚く子供をどうしようかと真也は頭を掻いた。子供は子供扱いされる事を嫌う。何かに興味を持ち、手を出そうとすれば、大人のセリフは決まっている。子供の事は勉強だ、子供にはまだ早い、子供のする事じゃ無い、子供の癖に生意気だ……真也はそれを知っていた。ルヴィアもその経験がある。実際の所、無用の挑発という意味で彼女にも失態があった。だもので彼は迷った。一方的な否定は反発を生むだけだ。叱ると怒るは違うのである。

「何か言えよ！」

思案に暮れた彼はこう言った。

「あのかな坊主。子供扱いされて腹を立てたのは良い。大人は子供だった時、大人にされた嫌な事を忘れるからな。俺だって子供の頃は……俺の事はまあ良いか。でもだからって、スカートめくりはやり過ぎだ」

「やり過ぎじゃねえ。ムカつく女にはどうぜんだ」

「人に因るんだよ。笑って済ます人も居れば、深刻に捕らえる人も居る。彼女の泣きそうな顔を見ただろ。どう思った。正しい事だった、今でもそう思うか？」

「……」

「明確に言おう。坊主、お前はあの女の子を傷つけた」

真也の胃がシクシクと痛んだ。子供は俯き、黙り込んでしまった。沈黙が訪れる。「だって、」

子供なりの自尊心と罪悪感の葛藤であった。

「それを理解したなら、もう俺が言う事は無い。謝つといてやるから坊主はもう帰れ。深夜に子供を放り出すのも気は引けるが、坊主の魔術回路ならどうとでもなるだろ」

真也が踵を返すと、背後に付いていくる気配があった。その子供は付いてきたのである。何故言う事を聞かないのか、と真也は流石に苛立ち始めた。

「あんな坊主。お前は俺らに手間を掛けている。俺らは仕事で来ていてそれは危険な事だ。幾ら優れた資質を持っていても子供の出る幕じゃ無い。俺らにとっても足手まといになるし、坊主にとっても危険極まりない。この意味は分るか？」

その子供は無言で真也を睨み上げていた。付いていくとその眼は語っていた。

「頑固というか、物わかりが悪いというか。言つて分らないか。撒いても追いつかれるし、仕方が無い」

「なにがだよ」

「お前の為」なんて薄っぺらい事は言わない。トラウマになるかも知れないけれど、死ぬよりましだろ。ちよつとキツイの行くぞ」

真也は死を想起させる強い思念をその子供に打ち込んだ。リバプールに向かう時、ル

ヴィアに声を掛けた男が居た、その一つ先。リバプールの警察署に勾留されていた男がいた、その二つ前。その子供が持ったイメージは、悪霊でもなく、死でもなく親に忘れられる事だった。

その部屋は白かった。窓に掛かるカーテンは白色で、優しい風に揺らいでいた。優しい場所だった。おもちゃがあつた。犬も居た。天井には星が、壁には天使と女の子が描かれていた。そしてベッドがあつた。そのベッドには一人の子供が寝ていた。安らかで、不安と恐れとは無縁の存在だ。何故ならその傍らには一人の人物が居たから。

その人物は子供の頭を優しく撫でていた。口ずさむハミングが部屋に流れれば子守歌となる。その人物は優しい顔をしていた。その人物の事を知っているが、その様な表情をするとは知らなかった。いや、知っていた。昔はその微笑みを向けられていたからだ。だが何時の頃からか、恐れを見せる様になった。恐れは疎み、そして憎しみとなった。それはどうしてだったか。

そう、おもしろ半分でその人物の心を読んだ時からだ。飼い犬を自在に操ったからだ。その時のその人物の表情は良く覚えてる。やつてはいけない事をして仕舞つたのだと、その時悟った。だが手遅れ。だからボクはお母さんに捨てられた。

そして現実に戻った。真也が見下ろすその子供の身体は震えていた。声が出ない程だ、だがその恐ろしさは如何ほどのものか。涙が止めどもなくこぼれ落ちていた。奥底

に仕舞った忌まわしき記憶を強引に暴かれたのである。

「俺らに付いてくると、その程度では済まない。もう諦める」

真也が踵を返すとその子供は泣きながら付いてきた。声は堪えていた。意地でも出せなかった。理解出来ないと言われないと真也はしゃがみこんだ。視線の高さを合わせる。

「坊主。何でだ。なんで怖い目に遭ってまで付いてこようとする」

「シンヤを見つけてるって」

「誰に？」

「わかんねえ」

「なんでだ。誰かに言われたとしても、そこまで執着する事か？」

「わかんねえ」

「それは何時の事だ」

「さきおととい」

「難しい言葉知ってるな」

真也は端と気づいた。それはマリア・アジャニーが連絡を絶った日である。彼はポケットから写真を取り出した。

「坊主はこの人知ってるのか？」

その写真を見る子供の目は空虚だった。何かに介入され、意識を停止させられている

かの様だ。

「坊主？」

「わかんねえ」

「知らないでもなく、見覚えが無いでもなく、分らない？」

「そうだ」

「何か預かつてるか？」

「わかんねえ」

「……」

真也は写真を仕舞うところ言った。それは敢えて言及してこなかった事だが、真也の決断には必要な確認だった。

「坊主。親はどうした」

「孤児院に置いていかれた」

「なんで探そうとしなかった。お前の魔術特性なら出来たしろ」

「俺のことが嫌いだから。薄気味悪がってた。なら迷惑は掛けたくなかった」

「そうか。親に坊主みたいない力はあったか？」

「ない」

「坊主はこの事件に関係がありそうだ。だから付いてきても良い。けれど死ぬ可能性が



あるぞ、それでも良いか？」

「わかんねえ」

「ま、坊主の歳で聞くのも酷か。これから俺たちはホテルに戻る。その間に謝る言葉を考えておけ」

真也はその子供を抱きしめた。それは義母から受けた事の再現である。

「済まなかった。辛い思いをさせた様だ」

腕の中の子供は暫く身を固めていたが、じきに泣きじやくり始めた。夜空に浮かぶ雲が流れ、月が姿を現した頃だ。子供は言った。

「もぅいい」

「そうか。なら行くぞ」

二人は連れだつて歩き出した。子供は袖で涙を拭いながら。

「おい、シンヤ」

「安心しろ。泣いた事は俺らだけの秘密だ。お嬢様には言わない」

不愉快、というよりはふて腐れた顔を見ると、その子供はこう言った。

「シンヤ、お前はあのアイツが好きなのか？」

真也の目が丸くなる。

（……そつか。そう言うことか。見る目があるというか、恐れを知らないというか、マセ

ガキめ)

そして胸を張った。

「そりやもちろん。けどな、坊主。好きって一言で言ってもその意味は広いぞ。坊主の好きと俺の好きは多分違う。ついでに言っておくが、言葉で表現するのも重要だけれど行動はもつと大事だ。好かれないなら、悪戯なんてやめろ。逆効果だ。好意の基本は大切に、これに尽きる。駆け引きはその次だ」

「女に興味はねえよ。シンヤみたいになりたくないからな」

「おお。言うじゃ無いか」

「あつたり前だろ。男のクセに尻に敷かれるなんて情けねえ」

「良いか坊主。世の中を動かすのは資質を持ち、尚且つ標準の訓練を受けた正統な人達だ。そういう人材は貴重な上に、育成に時間が掛かる。俺らの様に特化した異端つてのは、その人達がつくったインフラにただ乗りしているだけなんだよ。その正統とはお嬢様の事だ。世の中の存続、維持を考えれば彼女を尊重するつてのは当然だろ？」

「おまえは保守派か」

「難しい言葉知ってるな。いいか？ 琴の弦は張りすぎると切れる、緩すぎては音が出ない、適度な中道が最も良い。これは古代インドの人の言葉だけれど全く以て同感。だもんでポリシーは中道だ。お前の言う通り保守なんだろうな。けれど覚えておけ。坊

主が尖れるのは社会に対し何も持っていないからだ。これから坊主が一つ歳を取る度に、何かを持つ。何かを持つとそれを失う事が怖くなる。そうすると好きな様に動けなくなる。今のうちに十分尖っておけよ。大人になったらそんな事出来ないからな。大人になって尖っていたら、DQNか偉人のどちらかだ。分るか？」

「ぜんぜん」

「ま、スカートめくりはNGだと分れば……」

真也は子供の頭に拳骨を落とした。

「いってえ！ なにしやがる！」

「見事と言っておこうか。ルヴィア様のスカートを捲るなんて、俺には出来ない事をやり遂げた。その偉業に敬意をしめそう。だがそれはそれだ」

「ルヴィア？」

「ルヴィアゼリツタ―エーデルフェルト。俺の主だ。主は冷静かつ合理的なお方でな、デメリツトよりメリツトが大きければ、受け入れる度量をお持ちだ」

「？」

「と、言う訳でルヴィア様。この坊主なにか因縁がありそうです。無報酬で良いでしょうし、雇ってみませんか？」

するとルヴィアが木の陰から姿を現した。腕を組む彼女は不愉快さを隠さない。

「後はお前次第だ。勇氣の見せ所だぞ、坊主」

「え、けどよ」

真也は子供の肘で押した。その子供は二、三步歩くと俯いた。

「……すまねえ」

「ごめんなさい、だろ」

「……ごめんなさい」

ルヴィアは盛大な溜息をつくど、髪を手櫛で流した。こう言った。

「もう一度私に狼藉を働けば、その時は覚悟をなさい。良いですわね」  
「分った」

「ほかり」 と真也に叩かれた。

「わ、分りました」

「ところでシンヤ」

「はい。何でしょうか」

「見ましたわね？」

「イイエ」



高級ホテルの一室で二人は打ち合わせを行っていた。今後の方針を立てる為であった。ルヴィアがソファアに腰掛けると、真也は諸々の資料を硝子製のローテーブルに置いた。

「あの子は？」

「俺の部屋で寝ています。なんだかんだ子供ですね、ぐつすりですよ」

真也も腰掛けた。彼女の正面である。

「日中の調査ですが俺の方は収獲無しです。アジャーニさんが宿泊した部屋、そして荷物も有用な手がかりはゼロ。ルヴィア様は？」

「教会の近くでそれらしい人影を見たと言う情報があります。その神父はこの町の歴史に精通しているとか。ただし目的は不明。警察署ならまだ分るけれど何故教会なのかしら」

「明日図書館に行ってみましょう」

「その根拠は？」

「彼女は魔術的な意味での地理学を専攻していました。この町の過去を調べたのかもありません。この町にはローマ街道が通っています。彼女の受け売りですが歴史があり大きい道ほど霊的な意味を持つとか。猟奇殺人の様な事件は、霊的にも重いですから。

山岳や河川、地下水、畑、そう言った自然を司る地方神と関連性を見つけたのかも知れません」

「手がかりも乏しい現状では、妥当かしらね」

「決まりですね」

「ところでシンヤ。ミスIIアジャーニの荷物とは?」

「ええ。置きっ放しの荷物です。彼女の泊まったホテルが目と鼻の先なので、坊主に協力しても、あ、いえ。そういう疚しい気持ちは一切ありません。プライバシーの侵害とは思いましたが、何分火急の事態ですので。もちろん純粋な捜査行動です。念のためお伝えしておきますが、女性モノ下着は慣れております。そもそもその手の性的嗜好は持ち合せておりません。中身が無い以上ただの布きれ……」

ルヴィアの誘導尋問であった。まんまと引っ掛かったのである。

「やはり、見ましたわね?」

「イイエ」

「シンヤ」

「不可抗力です」

「シンヤ」

「手打ちになったのでは?」

「傍にいらつしやいな」

ルヴィアは右手の平を上下に振って誘った。彼女は澄まし顔だ。真也は深い溜息が止まらない。彼はしぶしぶ頬を差し出した。その部屋に乾いた音がした。



テーブルに置いてある、ウイスキーボトルの量が半分になった頃だ。二人の酔いは良い感じに回っていた。ルヴィアの白い肌は高揚し、瞳も揺らいでいた。真也の手にあるグラスがカランと氷の音を立てた。二人は出来上がっていた。

「ルヴィア様。現代の魔術師つてのは本当に歪んでる。魔術師とは孤高であるべき存在とは言いつつも、一人では存在出来ない。山から山菜、木の実、動物を狩り、そして川から魚を捕る。そういう自然と一体化し、山奥、森の中で籠もっていた中世ならいざ知らず、世界が高速交通機関とネットワークで繋がった現代でそれをするなら確実に出し抜かれる事になる」

「それは事実でしょうが、名家程積み立てた魔術体系、つまり魔術刻印がありますもの。そう簡単に覆せるものではないでしょうに」

「俺は思いますよ。そういったテクノロジーに拒絶感を持たない若手の魔術師たちが、

ネットワークという概念を利用し相互利用する様になったら、パラダイムシフトが起こるのではないかと」

「あり得ませんわ。魔術とは秘匿が原則」

「その主な意義は一般人に対して、でしょう。その存在を広く知られると神秘性を失う、ですが世界にはアクセス権という物があつて、無関係な人間を排除する事が出来る。ないし、閉じたネットワーク世界であれば問題ない」

「中々に突飛で異端な考え方ですこと。SFの映画にある様にそのネットワークと魔術師が繋がり、互いの真髓を公開しなくともそのネットワーク自体が魔術知識を持つ事になる。ミス・アジャニーが言う、人の作った道が呪術的意味を持った様に、情報網も何らかの意味を持てば、可能性は否定出来ませんわね。どうなるかしら」

「ひよつとしたら我々は近い将来に魔術という大転換を迎えるかも知れませんね。何もしなくても衰退、革新を起こせば消滅。でも、新しい何かが生まれる」

「魔術がその力を失ったら、シンヤはどうしますの?」

「そうですね。ワインかチーズを作るってのはどうですか」

「シンヤは本当に変わっていますわね。魔術が無くなったら、それを考える事が出来るとは」

「デキが悪いですから……そうそう、忘れないうちに。あの子供の事です。 그레이さん



の話によると」

「ミスIIグレイ？」

「ええ。調べて貰ってたんです。先程連絡が、携帯電話に……言っておきませんが、この携帯は塔のモノですから」

「何も聞いていません。続けなさい」

「本名アレックスIIグーデ。孤児院、コンスタンティンホームの子供で、脱走の常習犯だそうです。捨て子で両親は魔術師ではありません、つまり」

「突発的に発生した魔術特性……」

「薄気味がられ捨てられた、そんなところでしよう。その詳細は不明ですが貴重ですよ。エーデルフェルトがお引き取りになっては？ 案外良い従者になるかも知れませんし」

「そうですね」

ルヴィアはちらと真也を見た。彼は気づかない振りでグラスをテーブルに置いた。

「それでは部屋に戻ります。明日の八時に伺います。本日はお疲れでしょう、ゆつくりお休み下さい」

「皮肉にしては良く出来ていますこと」

部屋に戻った真也は、寝息を立てる子供の額に手の平を宛がった。この子供も持った特性故に親から愛されなかった。そして自分でも分らない何かに動かされているの

だった。真也はそれを知ったのである。

「同情でも、大人の義務でも何でも良いか」

そう言うのと彼は子供の鞆に主から渡された複合結晶を入れた。そしてソファーに腰掛けると何時もの様に身体の活動状態を落とした。心拍、各臓器の活動を睡眠状態を〇、覚醒状態を一〇〇と数値化してみると、今の彼は三〇程だ。脳波も徐々に長くなり、じきにシータ波で止まる。これ以下はデルタ波と呼ばれる深い睡眠状態となり、彼は完全に寝ないのである。そして暫く経った頃、それは唐突にやってきた。

《お前の代わりにあの坊主を置いてくつてか。イケてねえな》

真也の目の前に彼が立っていた。かつてそうであつた様に真紅の魔槍を担いでいた。彼は呆れていた。ヤレヤレと。

《彼女には話してある。彼女もそれを理解もしてる》

《だから手を付けないつてか。もつたいねえ》

《黙れ。俺はお前みたいに器用じゃない。もう一杯一杯だ。これ以上背負うと潰れる》  
《分つていない様だから言っておくが、ここに残つても、帰つても背負う量は増えるぜ？

お前がああ嬢ちゃんと契約した時からな》

《久しぶりに出てくれば説教か。暇な奴》

《何処ぞの誰ぞは三年経つてもだらしがねえからな。凶体と知恵ばかり付いて中身は

ちつとも大人になりやしねえ》

《それでも努力してる》

《努力で成るもんじゃねえよ。ガキでもこさえてみる。そうすれば、馬鹿なお前でも大人に成れるんじゃないの?》

子供みたいに笑うとその槍兵は消えた。

《人生つてのは厄介だ。一つ壁を越えるとまた一つ壁がある。大地を砕いても、風より速く走っても、全く役に立たない。一体どれだけ超えれば良い。どれだけ超えればあの男に手が届く……あ、また、言うだけ言って逃げやがった。あいつ》



翌日。朝食を済ませた3人は町の図書館にやってきた。3人が向かう丸いテーブルには所狭しと文献が積み上げられていた。それを紐解き調べれば、判明するのは謎ばかりである。最初は真也であった。

「妙ですね。この町では小さい事件はそれなりにありますが、猟奇殺人の類いは起こってない。アジャーニさんはなんでこの地を選んだ」

「逆に空白の地であったから、ではなくて? 古い道が生み出す霊的な意味での歪みは、

諸々を誘発する原因となる。それに基づき彼女の視点で考えてみましょうか。今まで  
の事件を浚つてみたのですけれど、最初は歴史のある道が無数に結ばれるロンドンで起  
こつた。その後徐々に道が少ない地方に移動しています」

「つまりその首謀者は、実は歪みに基づき殺人をしている、と?」

「もしくはその歪みが目的で殺人は物の序で。警察の方々が気づかないのは無理ないで  
すわね」

二人が指さし合う文献を見ながら、子供が言った。

「なあルヴィア様、じゃなくて、ルヴィア様。歪みつて?」

「靈的に不安定な事象、場所、そう言ったモノ総称して指す言葉よ。正しく管理した上で  
扱えば益を生み出すのだけれど、その対価として良からぬ事象、事件が起こりやすい。  
アレックス・グーデ。貴方もそう言ったモノに相對するなら心得ておきなさい」

「坊主、どう思う? お前はこの土地の人間だ。なにか心当たりはあるか?」

「……泉」

「泉?」

「死んだばあちゃんが言つてた。地下水が何時の頃からか濁り始めたつて。これも歪み  
じゃないか?」

二人は見合わせた。

「何時の話だ、それ」

「大きな戦争のあとらしい」

真也が慌てて文献を捲ればその通りであった。

「記録にありました。坊主の言う通り、第2次世界大戦の前後から、地下水脈に異常が生じています」

子供は誇らしげであったが、真也は胸の不安が尽きない。

（また第2次世界大戦か。リバプールでの悪魔崇拜結社が壊滅したのもこの時期。そしてこの泉。そう言えばスコットさんの家もそうだったけれど……考えすぎか？）

ルヴィアが言う。

「昨日小耳に挟んだのだけれど、最近泉が清浄になったとか。ここまでカードが揃えば関連は疑うべきですわね、シンヤ？」

彼はげんがりしていた。

「いえ、なんか、行方不明者を探しに来たら、猟奇殺人で、道が生み出す歪みが登場して、その歪みは地下水脈に影響を与える程で、その歪みがタイミングを狙った様に動いた。話が段々変な方向に」

「禍源の渦の本領発揮ですわね。価値のある物の存在を感じます。こうこなくては真也を雇った甲斐がありません」

「嬉しくないです」

彼は机に突っ伏した。

「だらしねえ」

「うるさい」



そして昼食である。3人は街角のイタリアン・レストランに居た。ルヴィアがジャンクフードを嫌がった為であったが、その店は本格的であった。コース料理という意味だ。

暫くぶりの豪勢な食事に、子供はかき込む様に食べていた。

「坊主、急がなくても無くならないからゆっくり食べる」

「それはどういう意味かしら」

「孤児院での食事は取り合い、そういう事なんですよ。ぼうつとしてるとありつけなくなる」

「そう」

「坊主。トマトソースが頬に付いてるぞ。って、袖で拭くな！」

「シンヤはいちいちうっせえな。まるでジャンみたいだ」

「誰だそれは」

「口うるさくて女の癖に男っぽいんだ」

「女なのにジャンか」

「ジャーニー」

「その娘、年上だろ」

「よくわかつたな」

「連絡はしとけよ。きつと心配してる。坊主にとって長い付き合いになるかもしれない」

今まで静観していたルヴィアが等々指摘した。

「アレックス・グーデ（子供の名前）。食事は余裕を持って楽しむモノです。その様な作業的な食べ方はおやめなさい。テーブルマナー以前に品性が問われます。私の傍に居る以上、それは許しません」

「……分りました」

（分りやすいな、このコイツは）

客が3人だけなので、店主が話しかけてきた。黒い長袖シャツに長ズボン。白いエプロンを着けていた。対応したのは真也であった。

「お客さんがたは観光客かい？」

「ええ、そうです」

彼は躊躇う事なく自然に嘘を付いた。ルヴィアの非難めいた視線が痛い。

「親父さんはイギリス人ばいけれど、イタリアに居た事があるんですか？」

「その通りだが。何故分ったのかな」

「前菜の生ハムがとても薄かったからですよ。ここまで薄いのはイギリスでは中々お目にかかれない」

「兄さんはイタリアに住んだ事があるのかい？」

「ええ。2週間程」

「どうせ学ぶなら本場でとね、若さに物を言わせて無茶をした。ま、そのお陰で料理は何とか身についた。楽しんで貰えたなら何よりだよ」

真也はカウンターに居る中年女性をちらと見た。

「なるほど。それで奥さんも身につけたと」

「中々、目敏いな」

「見るからにイタリア人系ですし」

「シチリアで一目惚れしてね。浚う様に連れてきた。そろそろ10年だが義理の父には未だ言われる」



「あんな綺麗な人なら仕方ないですね」

「……」

(しまった)

真也のその「しまった」はもちろん他の女性を褒めた事である。人妻なら大丈夫だろうと、店主に向いたまま、主の気配を探れば堅かった。人妻とは言え30代半ばであつた。連れて歩けば疑われてもムリは無い。子供は呆れた様に呟いた。

「シンヤ、おまえ。そうやって見境無しに褒めるの止めろよな。せめて円満そうですね、とにかくしろって」

10歳の指摘が身を裂く程に痛い。だが「良いお兄ちゃん」を演じて10年。その習性はもはや身体に染みついていた。今度は子供を楯にして逃げるか、そう小賢しい事を考えていると予想外の展開だつた。もちろん悪化だ。何故なら、人の良い店主の表情には、からかいが在つたからである。

「そう言われると、嬉しい限りだが。私から見ても兄さんも十分に恵まれているがね」  
「はい？」

「綺麗な奥さんに、元気そうな男の子じゃないか」

空気が固まつた。真也は呻いた。

(ベタだ。ベタすぎる。おい、おっさん。何処に目を付けている。服装見て考えろよ。

落差ありすぎだぞ。それに俺20歳だぞ。坊主は10歳だぞ。10歳で子作りなんて有り得ないだろ)

外国人の年齢など、見て分る訳が無い。なにより東洋人が若く見えるなど有名だ。

「違うのかい?」

さて困った。3人とも赤の他人だと言えば不審がられる。ところが主も弟分も暗示を一向に使う気配が無い。ルヴィアはティーカップを持ったまま停止していた。子供は呆れた様にパスタを食べていた。

「ええ、そうなんですよ。よかった、中々そう見られなくて。ところで、トマト・ソースは自家製ですかあーっ?」

真也は笑うより他は無い。



食事は終わり、ティータイムである。真也は地図をテーブルに広げると、良く分からない緊張感を振り払うかのように言った。

「今後の方針ですが、俺はアジャーニさんが目を付けた教会に行ってみます。ルヴィア



「ばかめ」

「だまれ」

そして携帯の呼び出し音が鳴ったのである。それは真也の物であった。

「と、失礼」

店の外に出た真也は、暫くすると戻ってきた。ルヴィアは誰からの電話だ、と聞こうとして止めた。彼女の従者に表情が無かった為である。

「ラリー・シモンズ巡査部長からです。アジャーニさんが見つかりました。レッド・グレーグ王立劇場とモントゴメリー・マーケットだそうです」

その意味を悟ったルヴィアは言葉を発する事が出来ない。

「おい、シンヤ。それどういう意味だよ」

「坊主、悪いがお前はホテルに戻ってろ」

「なんだそれ。置いていくきか」

「俺らの立場を理解してくれ。坊主に死んだ人を見せられない。特に損壊が激しい場合はな」

つづく！

## 四話

この町は初めての猟奇殺人事件で大騒動だ。事実現場には野次馬やらマスコミやらが押し寄せごった返していた。二人は現場への侵入を断念せざるを得なかった。全員に暗示を掛けるのは不可能だからだ。だから二人は警察署の遺体安置室に居た。警察がマリアを収容するのを待ったのである。ルヴィア、刑事、真也が囲む、寝心地など一切考慮されていないベッドの上には、成れ果てたマリア・アジャーニがあった。ルヴィアが手にする鑑識資料にはブラック・マリアと手書きで雑多に書かれていた。刑事が言う。

「血液は綺麗に抜かれ、臓器は引き抜かれ散らばっております。引き出した臓器に唾液が付着しておりました。舐めたようです。全く以て忌々しい奴ですな」

その遺体をじつと見ていた真也は呟いた。

「倒錯もここまで来れば関心すらします」

「シンヤ」

「申し訳ありません。失言でした」

友人同士にしては妙なやりとりの、ルヴィアと真也を訝しがりつつも刑事が言った。

「それだけではありません。どうやら生きてままだ腑分けられたようです」

「ミスター・シモンズ。何故そう思いに？」

「こちらをご覧下さい」

ルヴィアの問いかけに応じて、刑事がマリアの胴体を持ち上げると首筋に血文字があつた。

「ただ印刷した様な明瞭さで、ウチの鑑識もどうやって書いたのかと頭を抱えております」

そこには “Elisabeth Bathory” と書かれていた。真也は言う。

「彼女の特性は知る事、記録する事を得手としていましたから、驚きには値しませんよ」

「それはどの様な意味ですか」

真也が目がその文字の意味に気がついた。

「エリ、ーザベト・バー……エリーザベト・バートリ？ そんな馬鹿な」

ルヴィアが継いだ。

「なるほど。それならつじつまは合いますわ。彼女は腑分けに興奮し、苦痛を見る事が何よりの娯楽だったとか。血を抜かれるのも当然でしょう」

真也が遺体の破断面に触れば魔術によるものと判明する。縄で縛り潰し切った様な跡だった。

「ルヴィア様は16世紀の魔女が今生きてると仰います?」

「いいえ。16世紀の魔女が存在している、ですわ。死徒は生きていたとは言いませんから」

二人の会話が理解できない刑事は取りあえず行く末を伺っていた。真也の雰囲気と形相が変わっていた。それは恐怖である。

「ルヴィア様」

「塔に帰れ、という話なら聞きません」

「俺は対峙した事があります。連中は危険すぎます」

「シンヤが対峙した死徒の程度は知りません。確かに死徒の上位者ともなれば、脅威でしょうが個体差がある、違うかしら?」

「それは希望的観測です。そもそも上位では無くとも危険です。お帰りください」

「くどいですわよ」

手を焼かせるなど言わんばかりに、彼女は鑑識資料を丹念に読んでいた。我慢出来ないといと彼は声を荒らげた

「ルヴィアゼリツタ・エーデルフェルト! 貴女は分かっている!」

その声にルヴィアは驚きはしなかったが、初めて見る従者の感情的な一面にページを捲る指を止めた。彼の視線は下がり気味だ。手を強く握り、身体を震わせていた。恐怖

に屈辱も混じっていた。

「俺はアレに手も足も出なかった。俺がここに立つて居るのは連中の気まぐれです。危険すぎます」

「そこまで言うのなら仕方ありませんわね」

「ご理解感謝します」

「なら急ぎ荷物を纏めなさい。塔に帰りますわよ、シンヤ」

そう言われて漸く彼は気がついた。ルヴィアは呆れを隠さない。溜息すら出る。

「シンヤが忘れていた事は、生きて帰国せねばならない身でありながら、仇を討とうと一人でその危険に身を投じようとしている事。従者の身でありながら、主を放り出そうとしている事。無茶苦茶ですわ。頭を冷やしなさい」

「どうしても、やる気ですか」

「当然」

「死ぬかも知れませんよ」

「魔術師とは歪みに相対する存在。何より死徒が関わる程のモノ、血が疼きますわね。神秘を前にして目の前にして引き下がれるものですか」

「貴女はイカれてる」

「だってシンヤが居ますもの。強気にも成りますわ」



暫く呆けていた彼はその言葉の意味を理解した。真也は腕を組んでそっぽを向いた。

「なんだって、こうも。強気で、強欲で、意地っ張りだ」

「だから私を主にしたのでしように」

「特別危険手当を希望します」

「許可します」

空気が和らいだ事を確認し、刑事は等々口を挟んだ。

「お取り込み中申し訳ありませんが、私には何が何だかさっぱりです。説明して頂けませんかな」

ルヴィアは誰をも虜にする様な、微笑みで刑事に詰め寄った。鼻先が触れ合わんばかり、呼吸の音すら聞こえそうな程だ。刑事の鼓動は年甲斐もなく強く打った。

「大人をからかうものでは在りませんぞ、レディ」

「ミスター・シモンズ。頂いた数多くのご配慮には感謝の言葉もありません。この様な非礼を以て対価とする私をお許しく下さいな」

何を、刑事がそう言う前に、彼女は暗示を掛けた。彼は魂でも抜かれたかの様に、二人を出口へと誘導した。もちろん彼は何事も無かったかの様に振る舞った。



警察署を出た二人はホテルに戻る道すがら歩く事にした。歩く事は考えを纏める事に良い効果がある。なによりマリアが死んだ事に戸惑いと後悔があった。叶うなら落ち着く時間が欲しかった。ルヴィアにとっては同じ塔の同じ魔術師という意味であり、真也にとつては協力（助け）を求められた相手という意味だった。

直に陽が落ちれば、その町は紅に染まつていた。人影は見受けられたがまばらだ。煉瓦造りの家々には明かりが灯っていた。調理の音が聞こえるならば、じきに夕食だ。それは家族団らんの時間だった。マリアの家はその団らんから一人欠けてしまった。二人にはそれが嫌と言う程に思い知らされた。真也の少し先に行くルヴィアは、軽くステップを踏んでいたが纏う雰囲気は重い。

「あの鑑定書に書かれていた『ブラック・マリア』には何か意味があるのかしら」  
真也の視線は前を向いていたが朧気だった。

「元ネタはアメリカで起こった猟奇殺人事件を、センサーシヨナルに書き立てたマスコミの悪ふざけ。その被害者が黒髪でダリアという名前だったので『ブラック・ダリア』誰かがマリアとダリアに掛けた。イギリス人の冗談は質が悪い、と言う事ですよ」

「誰かは知りませんが悪趣味なこと」

「全くですが、ルヴィア様。首謀者が死徒だったとして何が目的なんでしょう。娯楽の

為つてのも腑に落ちません。敢えて歪みを選ぶ理由にならない」

「エリーザベト・バートリは悪魔崇拝者でもあつたとか」

「ルヴィア様、それは」

「ええ、リバプールでのトマス・ニルセンも悪魔崇拝者でしたわね」

「この現代において二つも三つも存在するでしょうか」

「同じ組織、そう見るのが自然でしょう」

「あの時から始まっていた、と言う事ですか」

「何かありそうな予感がします」

「死徒以上の何か、ですか。心底愉しそうなルヴィア様を見ていると不安でなりません」

「期待していますわよ、シンヤ」

「ああもう。こう成つたら最後まで付き合いますよ」

「それはそれとして。シンヤ。これからのプランを考えなさい」

「これから犯行現場に向かいますよ」

「犯人は現場に戻ってくる、少々消極的ですわね。待たされるのは好みません」

「そう言うと思いましたが、手がかりを被害者本人に聞きます」

「何を考えたのかしら」

真也はルヴィアに一房の髪を手渡した。それは金色だった。

「……まさか」

「そのまさかですよ。先程拝借しました。この状況ですし、その髪を触媒に坊主に一働きをして貰いましょう」

「危険すぎではなくて?」

「確かに坊主は駆け出しですが、立派に従者ですし、なによりルヴィア様の手腕を信じていますから」



真也のプランとはマリア・アジャーニの降霊だ。その為の殺人現場あり、その為の遺髪だった。真也はもちろんルヴィアにとつても降霊は専門外となる。その為のアレックス・グーデ（子供）だった。子供が持つ魔術特性“類似性の複写”する能力を用いるのである。遺髪を用いマリア・アジャーニの特性を子供に複写し、この地にまだ居る、もしくは縛られているだろう彼女の魂を呼び出し憑依させるのだ。

レッド・グレーグ王立劇場はマリア・アジャーニの胴体、つまり心臓があつた側だ。下半身や腕は隣接するモントゴメリー・マーケットの屋上で発見された。その王立劇場の敷地の片隅にルヴィアは立っていた。通りからは見えない死角で、薄暗く、当然の如く

淀んでいた。彼女は六芒星を主体とした魔法陣を描くと、その六つの頂点に六つの鉱石を置いた。工程は3段階である。

・ルヴィアの魔力を籠めた宝石を解放し、それを以て霊を呼び起こす。

・子供に憑依させる。

・霊に命じ、手がかりを聞き出す。

魔法陣は霊体が離れない場合の除霊装置だ。リバプールで憑依された少女の除霊を行つたがその再現となる。相違点はただ一つ。霊体の属性を善とするか悪とするかだ。真也が左腕のガントレットを凝視していると主の声は強かった。

「シンヤは離れていなさい」

何時になく抗い難い調子だった。

「無念を以て殺された人間の魂は例外なく反転します。離脱した霊体の調伏は私が行いますから」

彼女の右腕が唸っていた。ガンドで仕留める、と物語っていた。

「それは俺の役目です」

「迷いがある、違つかしら？　引き金の引けない制圧部隊など居るだけ邪魔よ。下が

なさい」

「……分りました」

「今ひとつ、十二分に離れなさい。フォローは二人より一人の方が容易ですから。他に、質問は、あるかしら？」

「……いえ」

「シンヤの仕事は不測の事態に供える事」

「バックアップとうことですね、了解ですよ」

そして儀式の開始である。子供は魔法陣の中心に正座で座っていた。右手に遺髪を握り、瞑想状態だ。ルヴィアは魔法陣の外で、子供に向いていた。仁王立ちである。

「ところで貴方のトリガーは何？」

「……パンケーキです」

「そう。食欲、飢えと言う事。食いしん坊だこと」

ルヴィアの表情が和らいだがほんの僅かであった。事実、今やもうその声は清くも力強かった。

「アレックス・グーデ。貴方の仕事は霊体の制御と己の維持、この2点です。交渉は私が行います。余計な事は考えない様に」

「はい」

「今ひとつ。魔法陣があるとはいえ、追い出すのはあくまで貴方自身の力だと心得なさい」

「はい」

ルヴィアの右手には「カクタスクオーツ」が握られていた。霊力を上げる効果を持つが、今回は霊体に活を入れる目的で使用する。そして左手には「スコレサイト」があった。強力な浄化を司り、もちろん悪霊を祓うのに使用する。ルヴィアは右掌の石に口付けをすると頭上に掲げた。天に届かせんと言わんばかりだ。事実その手は浮かぶ月に掛かっていた。彼女の魔力が注がれ、その手にあるカクタスクオーツが光を放つ。色は淡い紫だがその光量は膨大だ。周囲一帯を照らす程である。もちろん一般人にその光を見る事は出来ない。詠唱開始。

「Call. Work using the power. (応えよ。その力を以て意味と成せ)」

腕を振り落とし、地に向かい打ち込まれたその鉱石は弾け力となった。

「Sing. (謳え!)」

力ある言葉と共に、光の粒子が舞った。その様を例えるなら夏夜に舞うホタルたちのダンスが適当だろう。一刻。足下より黒い靄が立ち上ると子供の中に消えた。子供の表情から子供らしさが消えた。女性らしくも見えた。ルヴィアが口を開く。霊の訴えを聞いてはならない、同情してはならない、人間の様に接してはならない、取引などもつての外である。その声には魔力が籠もっていた。

「問いは一つ。何を見つけたのかしら？」

「……」

ルヴィアは更に魔力を籠めた。

「応えなさい。何を見つけたのかしら」

ルヴィアたちが気づいた様に、マリアもまた首謀者が地の歪みを追っていた事に気がついた。この時点で首謀者が一般人では無い、つまり魔術師だと理解に至る。ただの魔術師ならまだいい。猟奇殺人に特化した魔術師だ。相手が魔術を使う以上、マリアの優位性は失われる。彼女が魔術戦闘に向かないならば、彼女には手に負えないと言う事だ。冷静な判断をするならここで退くべきだが、彼女は強行した。それは命と天秤に掛けられる程のメリツトを見つけた、と言う事に他ならない。

「応えないならば、このまま消滅させます」

ルヴィアは左手の鉱石に魔力を籠めた。眩い清白の光を浴びたそれは低い音を発した。例えるなら強風に煽られた電線の共振音。

『La,』

「ラ？」

『Lance』

「……槍？」



近づく気配があつた。それは大きく、濁つていて、暗く、そして非常に臭かつた。それは信じられない程の速さだつた。真也の警戒装置が敵襲だと告げた。彼が見上げる、矩形ばつたレッド・グレーグ王立劇場の屋上に女が立つていた。

その女は赤いドレスを纏つていた。大きく開けた胸元を、不釣り合いな程輝く宝石で飾つていた。整つた顔立ちで、美しいと称して良いが、肌は灰白色で血の氣が無い。その代わりと言わんばかりに、唇は血の様に赤かつた。相応に長い焦げ茶色の髪は、蟬で固めたかの様に、きつくまとめ上げていた。ほつれは一本たりとも許さない、そう言わんばかりだ。一言で言えば中世の貴婦人。だが真夜中の井戸の底を覗いた様な、真つ黒な瞳が二つ浮かんでいた。ギョロリと動けばカマキリを連想させた。もしくはガールだ。

最悪のタイミングだと真也は舌を打つた。子供は憑依中で移動が出来ず、憑依靈の管理と除靈の任を負うルヴィアも同様だ。子供が完全に乗つ取られれば面倒な事になる。つまり二人は動けない。位置関係も悪かつた。頭われた女は二人の頭上。真也は降靈の影響が無い様にとバスケットコート程も離れていた。極秘事項だと拘束術式の未解除が裏目に出た。その女が見下ろす視線の先に子供とルヴィアが居た。

「見つけました」

その女がその身を宙に躍らせた事、真也が踏み込んだ事、ルヴィアが異変に気がつい

た事は同時だった。

「ins tr u e r e (展開)！」

力ある言葉を持つてガントレットを霊刀に変え抜刀する。攻撃が間に合わない、そう踏んだ真也はありつたけの殺意をその女に打ち込んだ。その女は堪らず、劇場の外壁を蹴り、軌道を変えた。二人から離れた地点に着地した。彼の初手は囷だ、その目的は注意を自分に向けさせる事にある。その女が浮かべた表情は予定を妨害された、というよりは娯楽を邪魔されたと言わんばかりの不愉快さだった。

真也にはその女が誰か分らない。だが建物の屋上から降りてきた以上、まともではあるまい。否。真也にはそれが何か良く分かった。人の形を持ちながらも、生と魂を持たない者たち。この機は逃せないと霊刀は刺突の構え。魔力を籠められた刀身が蒼く光る。女は笑っていた。彼の目の前に鉄の処女(アイアンメイデン)があつたからである。彼はそれに喰われた。蠅取り草の様にあつけなかつた。だが時間稼ぎは十分だ。ルヴィアの声は高らかに。

「Call. Three stone dance in gorgeous. T  
o become one to coalesce, Sing!」

(三重の石よ、舞い踊りて共に成れ。謳え！)

インペリアル・トパーズは炎、エンジェライトは許しと咎人、アポファイライトは浄化

を司る。ルヴィアの掲げた右手には石三つ。その手の平にあるそれらが浮かび上がる  
と、高速に回り始め、一つと成った。その複合概念は“炎を以て咎人の罪を浄化する”  
だ。彼女の右手より撃ち出されたその石は女の前で弾けた。爆炎、灼熱、業火、焼尽。そ  
れは霊を持たない物質に干渉しかねない程の魔力の炎だった。それは広い駐車場全体  
に炸裂した。

己の作り出した火焰を結界で凌ぎつつ、ルヴィアは仕留め切れていない、と判断した。  
右腕に刻まれた魔術回路が唸りを上げる。爆炎から飛び出したその女に向けて連続射  
撃（フィンの一撃）。12.7ミリ重機関銃の様な弾幕をその女は躲し、ルヴィアに迫  
る。焼け焦げたその女は、怒りの形相であった。ルヴィアの若さと、美しさと、清らか  
さを喰らわんと口を開け、そしてやり過ぎた。何の脈絡もなく身を翻したのである。  
プロレス技をもって迎撃しようとしていたルヴィアにとつては肩すかしであった。原  
因は不明だが追撃開始だ。砲身回頭。右手を掲げた時、射軸上に子供が居た。

とつさに射撃ポイントを変えようとしたが、女の行動が早かった。子供を抱えると跳  
躍し、見上げる程の高さにある、王立劇場の屋根に舞い降りた。焼死体と言わんばかり  
のその女は、忌々しそうにルヴィアを見下ろした。足に刺さった投擲用ナイフを捨てる  
と、そのまま消えた。

呆けている暇は無い。ルヴィアが真也を確認しようと振り返り、慌てて駆け寄れば、

彼は無事だと手を掲げた。彼女にはその従者の有様が理解出来ない。真紅の外套は至る所に穴が開いていたが出血は無かった。クレーターの様に肌を露出していた。見れば見る程彼女は混乱した。あの女が繰り出した鉄の処女（アイアンメイデン）は魔術による高ランクの攻撃だった。何故無事なのか、その問いを飲込んだ。それは真也の対魔力による結果であったが、彼女にそれを問いただしている時間は無い。

「申し訳ありませんルヴィア様。し損じました」

「状況を判断し不問とします。逆にこの距離を、あの状態で、よくぞ投擲出来たものだと感心すらします。ですが厄介ですわね。アレックス・グーデを追いたくとも場所が分らなくては」

「こんな事もあるうかと、お借り頂いている複合鉱石を坊主に渡してあります。直ぐに追跡しましょう」

ルヴィアは不満ありありの顔だが、怪我の功名だと引つ込めた。文句は後だ。

「あの者の目的は不明だけれど、長時間の憑依は体に負担が掛かる筈です。消耗し乗っ取られては目も当てられない。シンヤ、足を探してらっしゃいな」

「……それは大丈夫のようです」

真也の視線をルヴィアが追えば、魔法陣の上に一体の霊が漂っていた。その霊体はヒトガタを形成していた。ルヴィアの霊体にエネルギーを与える、カクタスクオーツの効

果が残っていたのである。その霊は唇を動かすと消えた。悲しそうな表情だった。

「……彼女はなんと言ったのかしら」

「“俺を探せ” この暗示を坊主に掛けたのは彼女だったようです。手がかりを託したとも」

「他には？」

「“巻き込んでごめん”と」

「そう、ミス・アジャーニはシンヤに託していた。そしてシンヤが来た事を知った。だから反転から戻ったと言う事。最後に話した相手だったから、かしらね」

「……」

「行きますわよ、シンヤ。この報復はエーデルフェルトの銘の元に下します」

「必ず」



その町にあるスーパーマーケットは荒れ果てていた。整然と並べられていた筈の棚はドミノの様に倒れていた。整理整頓、押し並べられていた商品は床に散らばっていた。柱は砕かれ、鉄筋が剥き出しになっていた。床のタイルは引きはがされ、基部のコ

ンクリートは砕かれていた。直下型の地震が起こってもこれ程荒れ果てはしないだろう。天井の棒形蛍光灯は、だらりと電線で垂れ下がりが揺れ動いていた。タイルに落ちたヒトガタの影は忌々しそうに店内を破壊していたが、ピタリと手を止めた。

荒れ果てた店内に、規則正しい足音が響いた。崩れた柱の陰に金色の髪が見えた。カツコツと足音が響く。ハの字に倒れ支え合った柵の隙間から青いドレスと白いブーツが見えた。足音が止まった時、その女の前にルヴィアが立っていた。彼女は足を進めると、上肢のみを振り、長い髪を広げ整え直した。舞うこんじきの髪は気品であり、余裕でもあった。それは弾ける火花か、開花する華か。

「捜し物は見つかりました?」

その女は忌々しそうな表情を見せたが一転微笑んだ。左足を一步下げ、スカートの裾を掴み、身を小さく下げた。カーテシーであった。

「ようこそおいでくださいました。お客様。ご覧の通り小さな屋敷ですが、できうる限りのお持て成しをいたします。どうぞ、ごゆっくりしてってください」

「あら。見事な挨拶を頂きまして恐縮の限りですわ。流石、エリーザベト・バートリ様。御身に流れる高貴な血筋を伺えようというもの。私はルヴィアゼリツタ・エーデルフェルトと申します。お見知りおきください」

ルヴィアもカーテシーをもって返礼した。

「私の名を覚えて頂いているなんて光栄の極みです。嬉しさの余り思わず踊り出してしまいいそうです。ですが、レディ・エーデルフェルト。どこでこの名をお知りになりましたか？」

「私の友人ですわ」

「まあ。何処のどなたですか？ 私の友人だなんて、もうこの世に居ないのに。その方は何処で知ったのでしょうか」

「そうでしょうね。死徒に友人だなんて、悪い冗談にも程がありますもの」

「そう、あの小娘のお仲間、と言う事ですね」

「ええ。マリア・アジャーニと申しますわ。レディ・バートリ。貴女様はこの名すら知らなかったご様子。それは少々薄情ではなくて？」

「レディ・エーデルフェルト。貴女はユーモアに溢れる方ですね。下賤な者の名前など、覚える価値などありませんから。貴女も上に立つ身であるなら、おわकारの筈です」

「確かに私は上に立つ者ですが、宜しくて？ 上に立つ者とは、付き従う者たちを導く者でもあり、その責を負う者でもある。その義務をお忘れになるから、貴女様は人の道を外れた、そうは思いませんこと？」

「レディ・エーデルフェルト。貴女は本当に愉快な方です。魔術師が人の道を説くなど、本当に可笑しくて、どうにか成ってしまいます。まあ。ですからここに居るのですね」

「ところでレディ・バートリ。貴女の足下で眠る幼い者は私の従者。お返し頂きますわ」  
「それは困ります。子供の血は久しぶりなんですから」

「貴女も相応に愉快な方ですよ。私の者を返さないなどと。これ程に理知の知らぬ方は初めてですわ。ですが……そうですわね。こうして言葉を交わし続けても詮なき事。太古より続く方法で決める、というのは如何かしら」

「ありがとうございます、レディ・エーデルフェルト。実は出会った時からそうしたいと、うずうずしていました。貴女の美貌、若々しき、そして内包するその魔力。どれをとつても素晴らしいモノです。あの男の邪魔さえ無ければ今頃、そのお腹にある肝臓、膵臓、脾臓、胆嚢、小腸、大腸、そして子宮と膈を引き出して、苦しみに支配された貴女の姿を堪能出来たのに。今頃その鮮血を浴び、飲み干し、私のこの膨れあがる感情を満たす事が出来たのに。でも、その苦しみはもう去りました。レディ・エーデルフェルト。貴女をこの手に掛ける事が出来るのですから」

「レディ・バートリ。650人もの血を吸ってまだ満足なさらないのかしら」  
「ええ、ちつとも」

「本当に困った方。でもそれだからこそ、全力を以て打倒出来るというもの。覚悟なきいな。塵一つ残しませんから」

「それでは始めましょう」



ルヴィアが五つの宝石を持ち出すその様を、その女は笑いながら見ていた。まるで、子供がおもちやの銃を引き抜く劇を見ているかの様な顔だった。



その世界には山があつた。岩山でもなく、緑溢れる山でもない。ただ枯れていた。全  
てが枯れ尽くされていた。そして空は赤かつた。夕日かと思えばそうではない。敷き  
詰められた雲は血に染め上げられた綿の様だ。指で指せば染みだし。持ち上げただけ  
で滴り落ちそうな程だった。足下の道を眼で辿り、山の頂上を仰げば朽ちた城があつ  
た。荘厳であつたであろうその城は崩れ、岩山に隠れていた。まるで人目を憚る様だ。  
何より異質なのが、今にも倒壊しそうなその城の頂上に、絞首刑台がある事だ。

その女は地を這っているルヴィアを見下ろすと、ルヴィアの右手近くに散らばる五つ  
の石を、無造作に蹴り飛ばした。

「相応に高価なものなのに足蹴にすると、お行儀が悪いですよ」

ルヴィアは糸が切れた糸人形の様だったが、その瞳は恐ろしい程に光っていた。

「レディ・エーデルフェルト。あの子供にトレーサーを渡していた用心深さは評価しま  
す。ですが馬鹿ですね。私の正体を見抜いておいて固有結界を見落とすとは。魔術師

に向いていないと思います」

「死徒だから持つている、と言うものでも無いでしょうに」

「確かにそうですが、私程の存在でそれはありえませんが」

「ここは赤いですわね。何という心象世界なのかしら。そう……煉瓦仕立ての廃墟」というのは如何？」

「カビの生えた様な名前を付けなしてください。固有結界“チエイテの釜”と言います。貴女のように女性で、若くて、そして処女ほど効果を発する吸収の結界です」

「そう。それで魔力が尽きた、と言う事」

「それではレディ・エーデルフェルト。娯楽を始める前に聞きたい事があります。アレは何処ですか」

「アレと言われても検討が付きませんわね」

「あの小娘が見つつけ出したモノです。その子供は持つていなかった。その代わり持つていた地図を便りにこの場にすれば何処にも見当たらない」

「探し方が足りないのではなくて？」

「探知の術で見つからないなどあり得ませんから。つまりこの場には無い、と言う事です」

「魔術師なら魔術を使う、とは限りませんわよ」

「そうですか。話して頂けないなら、それでも構いません。主義に反しますが、痛みの無い様に腑分けします。ご自身の内蔵を見る機会など滅多に無い事です。その狂気に溺れなさい。その後その子供に聞く事にします」

「槍の事はお話し頂けないのかしら。もしくは牙でも構いませんが」

「レディ・エーデルフェルト。貴女は牛皮の様な顔です。厚かましいと言う意味です」

「口は災いの元、とは良く言ったものですか」

「何が言いたいのですか」

「おわかりにならない？ レディ・バートリ。貴女の目的が槍と牙だと言う事を自分からお認めになった、と言う事ですわ。つまり、貴女を打倒しそれを回収すれば万事解決」

実に腹立たしい。無様に伏せるこの女はこの期に及んでいまだ上位に居るつもりだ。全く以て苛立たしい。このまま殺しては面白くない。その美しい髪を刈り、坊主とし見知らぬ輩に穢させよう。それとも畜生の子を孕ませようか。たつぷりと絶望に浸したあと腑分けしてやる。女がその髪を掴もうと手を伸ばした時だ。ルヴィアは実に愉しそうな笑みだった。

「それでは用も済みましたし、お暇いたします。お別れですわ。ごきげんよう、レディ・バートリ」

突然、薄い硝子が割れた様な音がした。そして固有結界から手応えが消えた。心象世

界にヒビが入り、地震で砕けた高層ビルの窓硝子の様に散っていった。

「な、」

異常事態だ。こんな事はあり得ない。地に張っている小娘には魔力が残っていない。そもそもそんな芸当は出来よう筈が無い。なら、この現象の原因は何だ。右を見た、何も居ない。左を見た、何も居ない。上、前、後ろ、何も居ない。ただ、死の気配がするだけだ。何の脈絡もなく女の体を衝撃が貫いた。

「え、」

彼女の目の前に男が立っていた。腰を落とし、姿勢は低めだ。外套が舞っていた。赤い。その女と同じ赤だがよく見ると違った。真紅、鮮やかな赤だった。その男には眼が二つあった。当然だ。人間なのだから。だが、その眼が蒼く光っているのは当然か？ その男が細身の反った片刃の剣を持ち、女の体に突き立てているのは当然か？ そもそも、何時突き立てた。結界は幾重にも張っていた。警戒の術式も、防御の術式も、反撃の術式も張っていた。何時消えた。分らない。どうして力が抜けていく。どうしてこの体が薄れていく。どうして、その女という存在が死んでいく。これでは既に死が確定して、現象が追いついている様ではないか。そんな芸当が出来るのはただ一つのみ。ああそうか、この蒼い眼は。

「パロールの魔眼」

「さよなら」

それが死徒エリーザベト・バートリの最後だった。地に伏せたままルヴィアが頭のみをを起こすと、従者が霊刀を鞘に収めた所だった。死徒の姿が消えた。初めから居なかつたかの様に消えていた。知つてはいたが信じていなかった。数ある魔眼の中でも伝説中の伝説。あらゆるモノのを殺す最悪の邪眼。恐ろしい筈のその眼を見た時、彼女は何故か滑稽さを感じた。それはそうだろう。なにせ彼女の従者は今にも泣き出しそうな顔で主に駆け寄つてきたのだから。彼女はそのまま気を失つた。



ベッドと言うモノは魔物である。極論を言えば、睡眠は何も生み出さない不毛の時間だからだ。だが疎かにすると、健康を害し良い仕事が出来ない。その厄介な睡眠であったが、嫌いかと言えばそうでも無い。暖かいマットレスと毛布に抱かれ、窓から見える星を数えればそれは至福の時だ。とはいえ。

「流石に3日続くと拷問ですわね。嫌気が差しますわ」

ルヴィアはホテルのベッドに居た。魔力を吸われ切つたので休まざるを得ず、既に三日間拘束されていた。彼女の従者は意外と手慣れた手つきでリングを切つていた。軽

快な刃物捌きとは裏腹に彼の顔は優れない。不愉快は誇張だが腹を立てていたのは確実だった。事実その声は刺々しかった。

「無茶苦茶です。幾ら坊主が人質だったとはいえ、ルヴィア様が事前にダメージを与えていたとはいえ、特性も知れない固有結界に敢えて身をさらすなんて。計画の歯車が一つでも狂えば一体どうなっていたか」

彼はリングゴを手渡した。彼女の小さい口が開くとシャクリと小気味良い音が鳴った。「アレックス・グーデ（子供）を取り戻し、ミス・アジャーニの弔いをし、尚且つ情報を引き出すには相手を増長させるのが効果的。レディ・バートリはシンヤを倒したと思っていた。シンヤの『身体能力を超える現象を生み出す』という魔術特性と魔眼を考慮すれば最も適した手段。敵を打倒し全てを手に入れる、この話しは何度目かしら。もういい加減にして欲しいのだけれど」

「分っているんですかルヴィア様。俺は怒っているんです。あの切羽詰まった状況で、ルヴィア様がまったく折れないから渋々その案に乗ったんです」

「意外と根に持ちますのね、シンヤは。もっとさっぱりした性質だと思っていました」「言っていませんでしたっけ？ 俺は中道です。事が事なら執着はします」

「その執着とは私の事かしら」

「茶化しているなら怒りますよ。リングゴ、まだ在りますけれど」

「もう一つ頂戴な」

その従者は仏頂面でリングを切り始めた。

「それにしてもシンヤのその魔術特性の名前、*災厄なる翼 (cladis ala)*とは随分と捻ったものですね」

「姉が好きなんですよ、そういう名前。気取つていっているというか、前衛的というか。こそばゆいというか、なんというか」

「貴方の姉はどうしてその様な前を付けたのかしら」

「翼を力だと思なしたのでしょう。騒ぎばかり起こしますからね、俺は」

「自由が災厄ですか？」

「ええ」

彼は黙り込んだ。その意味を悟ったからだった。

「中々に弟思いの方ですこと」

「そう、ですね」

「シンヤは姉が苦手なのかしら」

「姉とは色々ありました。好きだった事もあつたし、争つた事も。彼女との関係は余りにも複雑すぎてごちゃごちゃで。自分の感情に手を焼いた俺は旅に出た」

「答えは出たのかしら」

「ええ、喜んでくれるならそれで良いと」

「前々から思っていたのですけれど、やはり良からぬ、」

「違います」

「ま、そういう事にしておきましょうか」

「ちがいます」

「それはそれとして、私はいつまでここに居れば良いのかしら。このままでは足が無く  
なってしまうそう」

「もうじきです。俺の勘だとそろそろ坊主が戻る筈です」

「ここ数日見ていないのはそういう理由？」

「はい」

「まったく。子供を使い回すとは大人失格ですわよ」

「坊主はもう大人ですよ。子供扱いするから子供は何時までも子供なんです」

するとホテルの廊下を走る人の気配があつた。

「ほら来た」

扉が開くとその子供は笑つて言った。

「おはようございます、ルヴィアさま」



「おはよう。アレックス」

「どうだった、坊主」

「ああ。見つけたぜ。シンヤの言う通りだった」

「どういう事ですか?」

真也は一枚の地図を差し出した。それはこの町を記した手書きの地図で、それには赤いバツ印が記されていた。

「アジャーニさんの残した遺産ですよ。今日は天気も良いし暖かい。ルヴィア様の顔色も良い。散歩がてら見に行きませんか?」

「その場所に何かあると?」

「いえ、その場所ではありません」

「ちがうんです。ルヴィアさま。それは謎々だったんです」

「謎々?」

子供と真也は見合うとニツカリと笑い合った。

「なー」

二人はなんとも子供じみた笑みだった。女は生まれた時から女、男は大人になっても子供、ルヴィアはその格言を思い出した。



そこは町の古い場所だった。丘陵地で樹が多い。周りに民家も無く、町の中にあつて、すこし浮いた場所だった。ルヴィアは駆けては立ち止まり、道から石を拾つては蝶を追いかける、子供の落ち着きの無さを見ながら、左隣りを歩く従者に話しかけた。

「地図の記号?」

「ええ。アジャーニさんは坊主に地図と手記を託したのですが、その地図に細工をしたんです。その手書き地図はこの町、つまりイギリスを表しているのに、その教会の記号はドイツのモノです。専門家の彼女が間違えるはずが無い。その知識が無いあの死徒は海賊のお宝地図よろしく、まんまと引つ掛かりあのスーパ―をひっくり返して、癩癩を起こしたと言つて訳です」

「そこに何がありますか?」

「神殿跡です。聖堂教会に破壊された地方神を祀つた跡」

その神殿は石畳と辛うじて壁と判断出来る石壁が残っているのみだ。当然屋根など無かつたが、壁越しに町を一望出来た。青い空に白い雲が、ゆつくりと流れていた。風はあつたが穏やかで、草たちが身を任す様に躍っていた。

「ルヴィア様」

真也の促しに彼女は鉱石を一つ取り出した。カルサイトである。それは隠された何かをあぶり出す特性を持つ石だった。

「Calli」

エルメロイは自身の執務室で報告書を読んでいた。読めば読む程その壮観な顔立ちが歪む。歪みすぎて頭も痛くなり始めた。その報告書は真也が作成し、ルヴィアが照査したモノだった。エルメロイは深い溜息を付いた。目頭も押さえた。ストレスでどうにか頑張ってしまいたい。彼が肘を置く机には赤い布で封じられた金属片が置かれていた。その赤い布とは聖骸布だった。彼の目の前にはルヴィアと真也が並んで立っていた。エルメロイが読み終わった事を察し、真也が補足の為に口を開いた。

「私の推測です。猟奇殺人犯を追っていた彼女はあの土地の歴史、つまり郷土資料に目を付けた。知識人である神父を訪れた、とはそれでしょう。そして偶然この土地の水脈に影響を与える程の何かを見つけ持ち出した。彼女の手記によると、ドイツ兵の墓がありそれに隠されていたそうです。おそらく死徒の狙いもそれです。リバプールでトマス・ニルセンが探していた槍と牙。その片方であると推測します」

「それが、この鏃（やじり）か」

「はい。追われ逃げ切れないと悟った彼女は鏃を隠した。恐らく取引しようとしたのでしょう。ですが、殺された」

「アレックス・グーデだったか。手がかりを、その土地の子供に託したのは、己の死を悟っていたのかも知れないな。トオサカシンヤ、君はこれが何か分るか」

「神殺しの槍（ロンギヌスの槍）」

「そうだ。彼を殺した槍だ。聖堂教会の彼らには聖遺物だが、我々魔術師にとって規格外の礼装だ。政治的にも扱いが難しい」

「これ程の代物であれば魔術協会も手放さないでしょうね。ですがこの聖遺物がここあると聖堂教会が知れば、奪還せんと強硬手段に訴えるでしょう。余り想像したくない展開です」

「魔術協会が仮に返すとしてもただでは返すまい。上層部は無理な要求をヴァチカンに突きつける筈だ。この価値はよく知っている、彼らも我々もな」

「リバプールで遭遇した埋葬機関のシスターは恐らくこれを追っていたのでしよう。何らかの情報を掴み、探っていた。いずれ露呈します。先手を打ち極秘に返すべきです。教授は聖堂教会にパイプを持っていないのですか？ 第八秘蹟会とか」

「有るわけが無いだろう。だがその辺の神父に預ける訳にもいくまい。もう一つの牙の行方も気になるが、また面倒な物を持ち込んだな、君は」

「俺のせいじゃないですよ」

ルヴィアが腕を組んだ。不可解だと言っていた。

「チューターは驚いていない様に見えますわね」

「何がかね、レディ・エーデルフェルト」

「その槍があのだにあってた事です。私たちが持ち帰った事には、苦惱めておられる様子。ですがあのだにあつた事は言及していませんわ。それは何故ですか？」

「スタドリコンスタブル。あの町には一つの陰謀論があつた。ナチスのかの指導者はオカルトに強い関心を持っていたそう。第2次世界大戦末期、敗戦を悟つた彼はその遺産を部下に命じ隠したという噂がある。だがドイツ国内に隠しては分りやすいだろう。敵国に隠したとは夢にも思ふまい。困難極まりない精鋭の落下傘部隊が極秘裏にあの町に隠した。ドイツ兵の墓とは恐らく彼らの事だ。『驚は舞い降りた』君はこの話を知らないか」

「くだらない作り話と斬り捨てたいところですが、その証がここにある以上、一概に否定も出来ませんわね」

エルメロイは何時ももの様に、椅子に深く背を預けた。組んだ両手を胸の前に置いていた。

「ルヴィアゼリツタ・エーデルフェルト、トオサカシンヤ。この鍬は私が預かる。口外無用だ。良いな？」

ルヴィアは「やむを得ませんけれど、従います」と不承不承の体だ。真也は一步踏み

出した。

「教授」

「君は異存があるか？」

「いえ。教授のその判断に意義はありません。お聞きしたい事はマリア・アジャーニの件です」

「魔術刻印は回収され彼女の弟に渡された。彼女は姉弟だった、と言う事だ」

「何故彼女は手を出したのでしょうか。危険だつて分つた筈なのに」

「簡単だ。力を求めた。この槍は惑わすのに十分だろう」

「彼女は馬鹿です。その結果全てを失つた。手に余るつて分らなかつたのでしょうか」

「才能なき者、持たざる者の妬みは想像以上に強い、君も覚えておくと良い。いや、覚えておかなくてはならない。常に感じる劣等感、己の不甲斐なさ、何故私はこうなのか、なぜ彼らと違うのか、どれ程望んでも、手に届かない。呪いのようにそう感じている我々が、ひっくり返せる力を目の前にした時、諦める事などできはしまい。レディ・エーデルフェルト。君もそうだが君たちはただ天才であると言うだけで、あつさり和高みへ飛び翔っていく。私がただ思い描いているだけの空を自由に飛び回る。トオサカシンヤ。君の姉はアベレージ・ワン。弟の君は直死の魔眼を持ち、死徒を一撃で屠る持つ者の側だ。馬鹿者だとなじる君のその発言は正直不愉快極まりない」

真也は感情を露わにしたエルメロイに戸惑った。暫くその意味を咀嚼した後、彼は姿勢を正しこう言った。

「確かに妬みは厄介な感情です。失言でした。ここに発言の取り消しと謝罪をします」  
ルヴィアが首を傾げた。金色の髪がざらりと揺れた。

「チュータは折り合いを付けられている筈です。何故なら妬みでは人は寄つてきませんもの、でなくては生徒に慕われる訳が無い。ふてくされる振りで説教とは大人げないですわよ」

「これ以上は聞き咎める」

「そうするとしましうか」

「話は以上だ。下がれ」



“これで私はもうお金に困ることは無い”

“見も知らずの男に身体を売らずに済む”

“下衆な奴に頭も下げずに済む”

“これで両親を、皆を見返せる”

それはマリアの手記にあった彼女の呪いだ。真也はソファアに寝つ転がり、ぼうと宙を見ていた。ローテーブルを挟んだ反対側で、紅茶を嗜んでいるのはルヴィアである。真也の分の紅茶もケーキもあつたが彼は手を付けていなかった。

「心ここにあらず、ですわね」

「俺は思うんですよ。考古学を楽しそうに語っていた彼女は嘘だつたのかつて。本当に槍が必要だつたのかつて」

「シンヤはあの槍を欲しいと思うのかしら」

「いえ。叶うなら関わりたくない。ルヴィア様はどうです。アジャーニさんの立場であつたら、どうしました。より強い力を目の前にした時、例え死ぬと分つていてもそれに手を出しますか？ 己の命、身内の命、家族の幸せ、そう言つた犠牲を払つても求めますか？」

「当然でしょう？ だつてそれは私の物なのですから」

「ならばどうして槍を諦めたのです」

「気まぐれです。従者(可愛い男の子)が泣いて縋るのであれば、そう言う事もあります」  
「またご冗談を」

「本心です。私が求めようとすれば、ミス・アジャーニの様に成るのでは無いか、シンヤはそう思うに決まっていますから」



流石にこれはない、真也はそう思った。だがそれは彼女の仕込みであった。「個人の立場を撮らせて頂いても？」

「許可します」

「レディ・エーデルフェルト、これから食事でもどう？ 尊大は結構だけれど、男のプライドを踏みにじる真似は止めた方がよい。お世辞にも良い趣味じゃない。僭越ながらこの私めが、貴女の教育係を受け持つよ。我々はどことん話し合う余地がある様だ」

「それは名案ですわ。問い正したい事は私にもありますから」

二人は立ち上がるとその部屋を後にした。

「魔眼も話した、魔術特性も話した。もう話す事は無いな」

廊下を歩き出す。

「シンヤと姉との間になにか秘密めいたモノを感じますから」

「……………」

「そう言えば坊主はどうなった？」

「先日フィンランドへ発ちました。クラウンは教育係でもありますから、良い従者になるでしょう」

「それは重畳」

「……………」

「それで姉との関係なのですけれど」

「と言うより教授にもバレたし、もう俺の命は風前の灯火だ。これ以上の心労は勘弁。もう倒れる。倒れるから」

「お安心なさい。チューターが口外しないと云った以上しませんわ」  
ルヴィアは腕を絡めた。

「ですから、もう観念して姉との秘密をお話しなさいな。ここまで来た以上観念なさい」  
「話さない。でも腕は離せ」

「個人の立場で食事に誘ったのなら、エスコートは当然でしょうに」

「……」

ぐうの音も出なかった。腕にある柔らかい感覚に抗いながら、また嵌められたと己を罵るのみである。



同時間。ロンドン郊外にあるヒースロー空港、その国際線の到着ロビーに二人の人物が現れた。ゴロゴロと旅行鞆を転がしていた。

一人は20歳前後だ。赤いタートルネックシャツの胸元に銀の十字がプリントされ

ていた。その赤いシャツの丈は長く、黒いタイトスカートに掛かっていた。完全ではなく、臀部の辺りで止まっていた。スタツズベルトをV字に止めて、腰回りを引き締め、アウターは樺色のハーフコートだった。彼女の装飾は赤を基調とし大人びた恰好だった。派手と言うよりは鮮やかと言うべきだろう。ただ惜しむらくは軽くウエーブがかった、黒い長い髪をツーサイドアップに結っていた。彼女の顔立ちは大人の領分に達しつつあり、年齢を考慮すると少し厳しい髪型だ。それは彼女も十分に承知していたが、止むに止まれぬ事情があった。

もう一人は30歳前後。彼女は重ね着が基本だった。ライトグレーの襟無しシャツと、レースとピンタックをふんだんに使ったオフホワイトカラーのティアードスカートを着ていた。その上にダークブラウンを基調としたチエツクのワンピースを重ねていた。重ねているスカートは共にマキシ丈である。ワンピースの切れ目から重ねているスカートの、オフホワイトがアクセントになっていた。アウターはライトグレーのゆったりとしたニットポンチョだ。肌の露出はなく、体の線も見せない装飾だった。シックな色合いで、落ち着いた雰囲気だった。彼女の特徴はゼニスブルーの長い髪と、エルフを連想させる尖った耳につきる。

この全く似ていない二人の共通点をあげるなら「美しさ」これに尽きた。だが誰も

注目していなかった。否、注目できないようにされていた。それは魔術による効果だ。つまりその二人とは、敢えて言うまでも無く、凜とキャスターであった。凜は組んだ両手を頭上に挙げて背筋を伸ばした。その様を例えるなら猫のストレッチであった。

「やつと着いた。13時間座りっぱなしってのはやつぱりきついわね。一向に慣れないって、キャスター。キョキョロしないでよ、恥ずかしい。閑空でもそうだったけれど、それじゃ田舎者みたいじゃない」

「お忘れですか凜様。私は冬木市以外知りませんので、何処に行っても目新しいものばかりです」

「いい加減目新しいモノに慣れろっつーの。受肉して何年経つと思ってるのよ」

「お〇つくすに右往左往する凜様に言われたくありませんわね」

「……言ってくれんじやない」

やいのやいの騒ぐ凜を余所に、キャスターは指先に唾を付けると額に付けた。その口が紡ぐ言葉はルーンである。

「馬鹿な事してないでさっさと行くわよ。あのバカを見つけてさっさと帰るんだから」

「凜様、どちらへ？」

「どちらって、ロンドンに行くに決まってるでしょ」

「ルーンの反応は、逆ですが」

「逆？ それってどこよ」

「この距離と方向では時計塔ですわね」

「御免キャスター。聞き間違いだ大変だからもう一度聞くわね。今なんつった？」

「この方向と距離ですと、マスターは時計塔におられます」

凜のその端正な表情に皺が入った。当然、苛立ちを意味していた。そして腕を組んで深い溜息を付いた。

「アイツ、自分の立場分ってるのかしらね。あれだけ口酸っぱく言ったのに」

「凜様の心中お察しします」

と言うキャスターも苦悩を隠さない。

「が、これから如何成されますか？」

「2年もほつつき歩いて1年オーバーして、その挙げ句時計塔？ どんだけ心配させる

のよ、あの……馬鹿真也っ！」

つつく！

## 外伝

## 悪魔を憐れむ愛の歌一

それは聖杯戦争が終わり暫く経った頃のこと。遠坂家の庭にある一本の桜が花開くには、あと2週間は掛かろうという何時になく寒い夜だった。いつかそうであつた様に真也はその家の屋根に居た。その頂点に腰掛け、空を見上げれば星が瞬いていた。生憎と月は見えなかつた。それは彼が遠坂の籍に入る前の事であり、二人のサーヴァントが受肉する前の事である。

「シンヤは何を考えていますか」

アメジストの長い髪がふわりと舞つた。黒い装束に目隠し。縁深きその英霊に真也は一瞥すら投げなかつた。

「何も考えてない。ただ、ぼうとしてる」

「サクラとリンが不安がつています。理由が無いのであれば、思わせぶりな態度は控えるべきでしょう」

「どういう意味で思わせぶりだ」

「俺はお前らが嫌いだ」その様に見えます」

「頼まれたのか？」

「聞かずとも見れば分りますから」

真也は初めてライダーを見上げた。

「クールなくせに人情家というか、お節介というか、気が利くというか、何というか」

彼女は真也の隣に座った。片膝を立て、もう片方は投げ出した。それは彼女が好む座り方だ。鎖を持ち鉄杭をぶら下げ、じつと見ている事もままあつた。彼はダウジングのつもりか、と聞いた。彼女は癖だと答えた。

「リンから聞きました。悩むとここに来ると」

「今とは違つて一時的にこの家に居た時そうしてた。まだ一ヶ月も経つてないのに、随分前のように感じる」

「話なさい。シンヤは何を考えていますか」

「相談する時は、相手が話すのを待つべきだろ。というかなんで命令形だし」

「相手に寄りませんが、シンヤの悩みは経験上重大です。放置する程大事になります」  
彼は溜息を付いた。

「ライダーに隠し事は無し、その決まりだったな」

「覚えていれば問題ありません」

真也はまた星々に目を向けた。

「凜と桜にわだかまがりがある」

「怨恨を持つている、と言う事ですか?」

「分らない。あの2人を恨んでいるなんて思いたくない。ただ、二人にされた事、二人にした事が、ごっつちやごっつちやで良く分からない」

「シンヤは初めて持った自由意思を扱いかねている、他者との関係に戸惑っている状態です。そうですね。英霊の座に居る本体が、サーヴァントの記憶を見る様なモノでしょうか。ただシンヤの場合、その当事者を肉として実感していますから、その記憶に実体感が混じる」

「冷静な解析痛み入るよ。でも俺が欲しいのは診断じゃなくて対処だ。どうしたら良い」

「少し離れてみるのも良いかもしれません。見つめ直す切っ掛けになるでしょうから」

「旅って事か。湯治も悪くないな。何処に行こうか」

「いずれにせよリハビリが終わるまでお預けです。一日の2/3は寝ないといけないシンヤに旅など不可能でしょうから。そもそも皆が同意するかは別問題です」

「ライダーは?」

「もちろん反対です」

「言い出しておいてそれは無いだろ」



「冬木市に居るだけでこれ程の騒ぎを起こしたのですから。一人旅など認められる訳が無いでしょう。とはいえ、確かに無責任です。そうですね。条件付きで同意しましょうか」

「条件付き？」

「キャストを供にしなさい」

「己を見つめ直すなら一人旅じゃないと意味が無い。それにキャストには凜の補佐をしてもらわないといけない。聖杯戦争の余波で冬木市はガタガタだ。立て直しに数年はかかる。彼女の助力は必要不可欠だよ」

「仕方ありません。では私が供をしましょうか」

「ライダーは桜のサーヴァントだろ。主を放っておいて良いのか」

「この家に居る分には安心ですし、桜もキャストよりはと判断するでしょう」

「逆に心配すると思うけどな、俺は」

「シンヤは私にそういう情欲を？」

「無いけれど、連れだつて旅すればどうなるかは分らない。俺は前とは違う。2週間前のあの時、ガラリと変わった。それと、せめて欲求ついでに。もしくは求めるだ、はしたない」

「シンヤは何も変わっていません。あの姉妹の為だけに突っ走った向こう見ずのまま

す。でなければ冷静で用心深いシンヤが、刻限を無視して悩む事などあり得ませんから」

「ライダーは知ったように語るんだな。まるで保護者が出来たみたいだ」

「サクラ、アヤコ、シロウから、シンヤの話は全て聞きましたし、小さい頃のアルバムも見ました。なによりチトセから教育係として委任されています。この関係は妥当でしょう」

「凜と桜が一番厄介だと思ったけれど、実はライダーがジョーカーなのかもしれないな。手強すぎだ、やってられない」

「嫌われ役のお姉さんも悪くありません」

「姉、か」

「二人ときようだいに成るか、他の関係を選ぶのかは、焦らずに納得の行くまで話し合う事でしょう」

彼は物言わずじっと俯いていた。

「もう部屋に戻るべきです。そろそろ心臓に刻んだキャスターの保護術式（タイマー）が……シンヤ？」

真也は強制睡眠に入っていた。彼女は深く溜息を付くと、彼を背負い立ち上がった。その数ヶ月後、ランサーに会いに行くという、様々な意味を含んだ巡礼の旅を発案した

真也は、全員から猛反対を受けたが、ライダーが賛成に回った事を切っ掛けに、合意を得る事になる。もつとも供付きが一人旅になり、1年が2年になる事など、彼女自身思っても寄らない事であった。



意識が休眠状態から覚醒状態に戻った。真也がもたれ掛かっている物は大岩だ。そして目の前に広がるのは荒野であった。彼は漸く其所が異国の地である事を思いだした。彼は右手の平で顔を拭いた。顔は汗と土埃で塗れていた。

「ああ、くそう。またこの（家）幻だ」

もう諦めてしまえと誰かが囁いた。それは義姉の姿であった、義理の妹の姿でもあった、教育係でもあったし、従者でも。義母もそうだ。

気がつけば左手に持つナイフが蛇の頭を貫いていた。どうしてこう成ったのか、彼は考えた。一昨日。ヒッチハイクのつもりで車に乗り込めば、着いた先はテロリストのアジトだった。彼らからしてみれば金づるである。お馬鹿で不運な外国人という訳だ。おおつびらに魔術を使う訳にも行かず、取りあえず溫和しい振りをして、牢獄に放り込まれ後ビデオカメラを向けられた。自国へのメッセージという訳だ。拒否した彼は

散々暴行された。殴る蹴るである。頃合いを見て抜けだしビデオカメラは破壊した。取り返した荷物は半分のみだ。電子機器の類いは全部無くなった。着替えやパスポートは取り返せた。国際キャッシュカードとクレジットカードは外套に隠してあったので無事だ。迷惑料と言わんばかりに水と食料、そしてリボルバー（回転式拳銃）と弾丸も失敬した。興味本位で空き缶を狙ってみた。12発で使い物になる程度にはなった。元々筋力があるので、姿勢が悪くともブレ難いのだった。

真也は蛇を捌き始めた。首を落とし、断面に切れ目を入れつるりと皮を剥いだ。鶏の様な肉を軽く水で洗い、塩と胡椒を振って炙り始めた。日本でも蛇を食べる文化があったが、もはや廃れている。焼かれる様をじっと見ていた。

「自由意思か、結構しんどいもんだ」

それは自分の意思で止める事が出来る、と言う意味だ。命令なら楽だろう。何故なら失敗しても、無茶な命令をする方が悪いと責任転嫁できる。

「俺はどうして、旅に出たんだっけ」

そもそも何故欺され続けて、何故嫌な思いをし続けて旅を続けるのか。その理由を考えようとして止めた。あの家を出発し、問い続けてきたが一向に答えが出ない。帰国してもそれは同じだ。ならどこに居ても変わらない。

日本を発ち1年と3ヶ月。真也はパキスタンに入っていた。パキスタン↓イラン↓

トルコのルートである。パキスタンとイランの国境は、退避勧告が出される区域だが、路銀が乏しいので強行する事にした。海路を検討したが、遠回りになる上、予算が少ないので断念だ。そして荒野のど真ん中で、一台の自動車が真也の元を去った。『ハイラックス』と刻印された正規のヒッチハイク車を見送り真也は、もう大丈夫だろうという距離で悪態を付いた。

「何が気をつけろだよ。危険手当で30000ルピーも追加要求しやがって。計50000ルピーなんてそれなりのホテルに止まれる額じゃないか」

足下を見られたのだった。

「何がアツサラーム アレイクム（あなたの上に平安あれ）だ。地獄に落ちろ」

国境付近は危険なので、降ろされたのだった。まっとうな土地のモノは近づかないのである。残った移動手段は徒歩のみだ。話が違々と交渉し、返金の代わりに物資を入手したが、それでも割が合わない。仕方が無いと彼は歩き始めた。荒野が続き、要素要素にある小さな町で、少しづつ休憩をするのみだ。彼は長い旅でやさぐれていた。

歩き、歩き、歩いた。気候区分が代わり、荒野に植物が混じり始めた。陽は落ち、代わりに月が登っていた。そんな時だった。真也は何の脈絡もなくそれに出会った。見上げると崖の上に漆黒の男が立っていた。その男もまた真也を見下ろしていた。その状況を例えれば、町中を出くわした二人が、その手にライフルを持っていた、これが適

当だろう。相手がどう動くか分らない。下手に動けばその結果は火を見るより明らかだ。二人はそういう存在だった。真也は呻いた。可能ならば立ち去りたい、だがそういう雰囲気でもなさそうさ。

「instruere (展開)」

抜刀はせず、鞘を左手に持ち、やむを得ないと真也は崖を駆け上がった。不用意な威嚇にならないかと、不安にも成ったが交渉に武力は必要だ。

その男は全身黒ずくめだった。ファンタジー物に登場しそうなプレート・メイルを装備していた。ただし、鎧の繋ぎ目であろう境は鋭角で、所々に吸血種の牙を連想させるトンガリがあつた。全体的に有機的な印象を想起させた。髪は黒くオールバック。意外にも肌焼けていた。英国人のように荒々しさを感ぜさせる顔つきで、30台半ばに見えたがアテにならない。何より眼を引くのがその威圧。黒騎士の銘が相応しいだろう。お世辞にも人間には見えなかつた。かといってサーヴァントでも無い。幻想種はもう消えた。残つた選択肢を考えれば、何者かは自ずと知れよう。真也右手の平を掲げた。二人の距離は十二分に距離があつた。それなりに大きな声だった。

「敵意は無い。このままやり過ぐす事を望む」

「貴公は何者だ」

それは綺礼に似た厳かな声だった。

「ただの人間だよ」

「とてもそうは見えないが」

「かく言うアンタも人間じゃないな」

「私の名はリイ、」

「ストップ。俺は名乗りたくない。だから名乗らないでくれ」

「自分を隠す者は信用が成らない」

黒騎士はカチャリと腰に携えた剣の柄に手を掛けた。

「俺を信用する必要があるか？」

「信用の無い者は仇なす者だ。斬り捨てて然るべきだ」

「そんな事はしない」

「信用が無い、とはそういう事だろう」

「とんちか」

「何でも良い」

「俺は修行中の身でアンタの剣を受ける資格は無い。尚且つ、アンタに名前を覚えられないのが怖い臆病者だ。そういう人間なんだよ。ここまで言ってまだ分って貰えないだろうか」

「何処へ行く」

「ずっと西の地だ」

「西の何処だ」

「それは言えない」

「徒歩でか」

「ヒツチハイクも使うが、基本的にそうだ」

「何をしに行く」

「ある人物に会いに」

「ご婦人か」

「師でもあり戦友でもあつた男だ」

「教えを乞うつもりか」

「違う。会いに行く事そのモノに意味がある」

「巡礼、と言う事か」

「似たようなものか、な。そう言われるのは初めてだ」

「それは修行、というよりは試練が正しいだろう」

「何でそう思う」

「修行とは己を磨く事、試練とは乗り越えるモノ。ならば、私という試練を乗り越えねば  
な」



「なんだその理屈―」

ギイン。金属同士の刃が当たる音がした。甲高いが身体を震わす程に重かった。そして異なる魔力が干渉する音もした。黒騎士のその一刀はとてつもなく重かったのである。真也は距離を取る事を念頭に後方へ跳躍していた。それでいて尚その剣圧は異常だ。踏みとどまれず、その両の足は大地に轍を刻んだ。黒騎士は構え直すと、その表情に笑みを浮かべた。

「良い反射神経、そして見切りだ」

真也が紡ぐのは解放の呪文である。

「Volo Hecateia. Liberari amore using. D  
eligandae est duas columnas. Constrai  
n  
t s c u m n o m i n e v e t u s t o, . . . : C l a d i s a l a」

(守護神ヘカテーに願い奉る。その慈悲を以て戒めをを今ここに解く。その戒めは御柱二つ也。戒める古の名は……災厄なる翼)

“Restraint legem limited release (拘束術式限定解除)”

「ほう、古い言葉だ」

「それ、ただの剣じゃ無いな」

「無論だ」

黒騎士の手にある剣は大剣だった。刀身は1メートルを悠に超えており、全長は2メートルは下るまい。幅広だがカッタラスの様に反っていた。刀身から柄まで全て黒だ。それに黒い魔力がわだかまっていた。

「魔剣ニアダーク。貴公のそれは？ 東洋を発祥とする剣だと思つたが」

「無銘だよ。そんな事より1つ聞きたい。何故無用の戦いを望む」

「試練だと言つた筈だが？」

「それは俺にとつての話だろ。アンタには無関係の筈だ」

「剣を持つ者同士が引かれ合い、この月光の下対峙したのだ。これは必然と言わずして何という」

「男に言われたくない」

「連れないものだ」

真也は構えた。切っ先を背後に向けた脇構えだった。

「寄り道している暇は無い。この一刀に全身全霊を掛ける」

「受けて立とう。来るが良い」

真也は高く跳躍すると鎚のような一撃を打ち落とした。霊刀が放つ光は、スタングレネードの様に強烈だった。だがそれは大ぶりの一撃に他ならない。

「未熟！」

跳躍し魔力と体重を乗せればその威力は絶大だが、それ故隙が大きい。パワー型の黒騎士に、敏捷型である真也が打つ剣では無い、黒騎士はそれを見抜いていた。黒騎士はバックステップ。真也の渾身を悠に躲し、着地した。お返しと言わんばかりに剣を掲げれば、足下を取られた。その原因は直ぐさま知れた。足場が崩れているからだ。黒騎士は瞬時に大きく跳躍した。彼の眼下には崩落する崖と共に墜ちていく赤い外套の男が居た。黒騎士は苦笑するより他が無い。

「してやられた、という事か」

真也の一撃は黒騎士打倒ではなく、崖の破壊を狙ったモノだった。つまりは逃亡である。初めからこれを狙い一芝居を打ったのだ。真也は崩落する岩を八艘飛びの要領で渡ると大樹の枝に着地した。その衝撃で枝が折れた。次の枝に着地し、それをまた踏み折った。また枝に着地し踏み折り、落下の勢いをその都度殺す。予想よりは大きな音を立てて、大地に着地した。急ぎ見上げれば、黒騎士の気配は感知出来なかった。

（逃げ切った……か？ 死んだとは思われてないだろうな。見逃された、と思いたいが……急ごう。気を変えられたら厄介だ）

彼は森の中を巡航速度で走り出した。全速力ではなく長距離走る速度である。走りつつも悪態が止まらない。

(まったく冗談じゃ無い、死徒と会う事すら滅多にないのに死徒二十七祖だなんて、第六位の「黒騎士シユトラウト」と偶然出くわすなんて……)

頭上には月が浮かんでいた。

「なんて運の悪さだ！」

真也には月が笑っている様に見えた。



せせらぎを辿り小川を覗けば、澄み切って底に溜った小石が見える。だがカワニナ、カタツムリが棲んでいた。それは濾過や煮沸で飲めない水と言う事だ。ペットボトルはもうじき切れる。仕方が無いと彼は自分の尿を呑んだ。

朽ち、倒れた樹の皮を剥いで幼虫を見みつけた。親指と人差し指で挟まれたそれは上下左右に、ある時は回転を織り交ぜ蠢いていた。たつぷり30分躊躇った後、口に入れた。唾内にて蠢くそれを噛んだ直後、中身が口から飛び出した。腸を連想させる内蔵が口からぶら下がっていた。溜らず吐いた。栄養価が高いとはいえとてもマズイ。鼻くそを詰めたソーセージのようだ。真也は吐き出さないよう口に手を宛がった。水分補給も兼ねて無理矢理飲込んだ。余りのキツさに涙がにじみ出た。

シカ科の動物を発見した。仕留めその血を呑んだ。口元は真っ赤に塗れていた。これではどちらが死徒か分らない、彼はそう自嘲した。そして皮を剥ぎ焼いて食った。余った肉は脂身を取り除きスライスした。食塩水に一晩漬け、岩の上において乾燥させた。干し肉という訳だ。

一週間程そんな事を続けると100人程の小さな村があつた。中央広場は井戸が目印だ。民家と村長の家が点在し、道が集まる場所には集合食堂が設けられている。それは集會会場と酒場の代わりだ。祠に神殿もあつたが宿は無い。倉庫、水力発電施設があつた。

斜面には段々畑。雪が残る岩山を背景にアンズの華も咲いていた。白と桃色が織りなすコントラストは美しかった。岩山が間近に見えて緑も多かった。流れる川は雪解け水だ。その川の水は飲む事が出来たので、真也は顔を突っ込んで思う存分飲んだ。地図を広げれば顔が傾く。小規模過ぎるのか地図に無い村だった。加えてその地は異様に歪んでいた。

(……見た目に反して真っ当な村じゃないな)

暫く歩き続けた。見上げれば空はまだ赤みがかつているが、木陰は影ではなく既に闇夜、そんな時分だ。妙な娘が立っていた。14歳の年の頃、どういった経緯か分からないが、真っ黒なドレスを纏っていた。屋外だと言う事を忘れてしまふような程、その姿に

違和感がなく美しかった。まるで野外という空間を、迎賓館に潰し変えてしまっているかと錯覚する程の存在感であった。

何より目を見張るのがその髪だ。ドレスの黒が霞む程に、その髪は黒かった。腿に掛かる程長く黒く輝いていた。雪の様な白い肌に、目尻はつり上がり気味で、瞳は血のように紅かった。その小さい口の囁る様はカナリアのよう。

「お主に死相が出ておるぞ。この村には関わらない方が良からう」

その娘はスカートを摘まむと、そのまま森の奥へ消えていった。真也は追いかけるように思った、その発言の真意を聞こうかとも思った、だが止めた。あの少女は臭かったからだ。物理的な臭いではなく、厄介ごとという意味だ。いずれにせよ物資が足りないのである。気を取り直し真也は村の縁で子供に声を掛けた。

「食料と調味料を買いたい。大人を呼んでくれるか」

真也を物珍しそうに見ていた子供たちは、互いに見合うと駆け出していった。しばしの待ちぼうけ。すると数名の大人たちがやってきた。彼らは不自然な程に微笑んでいた。強いて言うなら牧師の恰好をしているピエロである。その内の一人が言った。極めて友好的な物言いだった。旅のし始めなら真也も欺されただろう。

「ようこそおいで下さった。バックパッカーかな？」

「ええそうです。ここに売店はありますか？ 子供たちには伝えましたが、」

「ああある。食料も塩、胡椒、酒も沢山ある」

「それは助かります。パキスタン・ルビーが使えると良いのですが」

「貴方は運が良い。分けても構わない」

「無償、と言う事ですか。それは何故です」

「今日は年に一度の祭りですね。お客人は大歓迎さ」

とてもそんな雰囲気では無い、とは思ったが真也は敢えて口車に乗る事にした。案内された場所は村で唯一の大広間であつた。簡単な石造りの建物で、日頃は集会や催事に使う。彼は食事に招かれていた。敷物の上に胡座をかいて、床の上に置かれた料理はマインサフだ。それはご飯をヨーグルトで煮て羊を乗せた料理である。ヨルダン地方の国民食に類似していたが、何故パキスタンにこの料理があるのか、真也はそれに気がつかなかつた。民族衣装を纏つた数名の男女に囲まれ、真也は悟られず薬を確認しながら、ひとつ口にした。薬品の類いは問題ない。不覚にも顔がほころんだ。それは当然だろう。食文化は違えど久しぶりの真つ当な料理なのだ。

「美味しいですね、コレ」

「今日はもう夜も遅い。泊まっていくと良い」

「申し出は嬉しいのですが、先を急いでいます。お気持ちのみ頂きます」

「夜の森は危険だ。考え直した方が良い。それに客人が居れば祭りも盛り上がる」

「俺は疫病神だから止めておいた方が良いでしょう。長い事留まればどんな災厄を引き寄せ  
るか」

「それは大丈夫だ。我らには神が付いている。何より旅人を持てなさいと、アツラーは  
教えている」

「あなた方はムスリムですか？」

「そうだが？」

真也は確信した。

「であれば尚更ですよ。ニカーブやブルカはともかく、ムスリムの女性がヒジャブすら  
付けないなんて不自然すぎです。あなた方は嘘を付いている、違いますか？」

女たちは恐れる様な顔になった。男たちは笑みを消し威圧的になった。立ち上がり  
真也に詰め寄った。

「中々物知りだ」

「旅人ですから色々な人間を見てきました。だからこう言いますよ。余所者に愛想の良  
い村人は嫌いだ。その面の下に何を隠しているか分からない」

「そうか、なるべく穏便に済ませたかったが」

真也は襲いかかる全員を瞬時に叩き伏せた。

「俺は何もしない。だから俺に何もするな」



真也は荷物を背負うと立ち去った。女たちは、うめき声を上げる屈強な男たちを呆然と見るのみである。その様を例えれば悪夢か悪霊を見たかの様、が適当だろう。



その子供は黒髪で褐色肌だった。年齢はまだ10に満たないが、蒼い瞳が煌めいていた。ビーズをより合わせた様な鮮やかな衣装は、全身をすっぽりと覆っていた。月明かりの元では、表情を伺い難いがその態度から切迫している事だけは良く分かった。

「赤コートの人、頼みがあるんだ」

真也は突然木陰から出てきたその子供をやり過ぎした。それは村を出て少し離れた場所である。

「他を当たれ。お前はあの村の人間だろ。部外者に頼まなくちやいけない様なお願いは御免被る。面倒ごとは御免だ」

「タダでとは言わないよ。これでどう？」

モノサイトの暗視スコープだった。

「確かめさせろ。壊れているかも知れないからな」

その子供は依頼を受けてくれるのだと、嬉々としてそのスコープを手渡した。真也は

暫く弄るところ言った。

「ん、確かに動く。相応に立派なモノだ。これは貰っておく」

「それで頼みの事なんだけど、」

「甘いな、坊主。受けるなんて言っていない」

「なにそれ。欺したんだ！」

「世の中甘くないんだよ。お前らの様な村は初めてじゃ無い。冷たくあしらつて、その後親切心を見せる、警戒心を解いて、付け入る。黄金パターンだ。これはこの村にはそぐわないハイテクだろ？ 貼り付けられている名前は D・Grimwood。あからさまに米国人だな。ネームプレートを剥がし忘れるなんて迂闊すぎる。それともメーカー名だとも思つたのか」

「返してよー」

真也は右手のスコープを頭上高く掲げた。飛びかかるその子供を笑いながらあしらつた。その様はお世辞にも人様に見せられる笑みでは無かつた。

「お前らは旅人を襲つて身ぐるみ剥いでるんだろ？ 俺もやられた事がある。ならこれでイーブンだ。さつさと帰れと言いたいが、サービスで一個教えてやる。簡単にカード（手札）を手渡すな、授業料だと思つて諦める。じゃあな」

真也は子供の額を軽く弾くと立ち去つた。その子供は額を手で庇い、涙を流していた

が、涙の原因は痛みではない。逼迫した状況だったからである。

「お願いだよ！ お兄ちゃんが死んでしまう！」

真也は足をピタリと止め、己の肩越しにこう聞いた。

「お前は弟かそれとも妹か、どちらだ」

「……」

「ガキを抱く趣味は無い。もう一度だけ聞く。どちらだ」

「……妹」

「取りあえず話だけ聞いてやる。名前は」

「エリス」

つづく！

## 悪魔を憐れむ愛の歌二

人目を憚って行動するなら当然夜だ。エリスという村の子供と真也は一度別れて、人目に付かない場所で落ち合った。そして森の中を歩き続けた。村を迂回するのである。エリスという8歳の依頼者は、歳に見合わぬ強靱な足腰で、夜の森をザクザク歩いて行った。岩を超え、倒木を跨いだ。小さな裂け目を飛び越えて、急斜面を苦も無く登っていく。その逞しさに真也も舌を巻いた。舗装されていない道ですら慣れていないと厄介なのだ。彼女は立ち止まって、真也に向いた。

「そう。アンタの言う通り、旅人たちを襲って奪ってるんだ。でも暫く来なくて村人から選ぶ事になった」

「最近この国境付近はきな臭いからな。好きこのんで通る物好きは居ない。それはともかく喋る度に立ち止まるな。歩きながら話せ」

「それは行儀が悪い」

「地方ルールは知らないけれど、今それを問う状況か。無駄な時間を使うな。さつさと歩け」

「アンタ友達居ないだろ。そんなツツケンドンじゃボツチだ」

「……口の減らないガキだな。友好的な人間なら居る」

「上っ面だけだね、そうに違いない」

「この規模の村なら、腹を割った付き合いが必要かも知れないが町は人が多い。それ故一人当りの親密度は相対的に下がる。片っ端から深い人間関係を構築してみろ、首が回らなくなる。もう一つ、上っ面つてのは礼節とも言う、覚えておけ。そもそも中身を前提としない行為なんだよ」

「親の顔が見てみたいね。ひねくれすぎだ」

真也はその子供に拳を捻り込んだ。万力の要領だ。エリスの意見に同意だが人に言われると腹が立ったのである。

「いた、痛い！ 離せ！ この碌デナシ！ ゴーカン魔！」

「お前の人間関係感が、人情味溢れたご立派なものだと理解出来たから、話をつ、づ、け、ろ。村人から選ぶつてのは何だ」

「神様に生け贄を捧げるのさ」

「人間を、か」

「そう」

その子供は、その言葉に躊躇いが無かった。この村ではそれが普通なのだ。おかしいと指摘しても意味が無い。だもので真也はそのこと自体に言及はしなかった。そもそも

も何処の国でも昔は大なり小なりしていた風習だ。

「大体読めた。それで兄に白羽の矢が立った、と言う事か。やっぱり引き受けるんじや無かったな、宗教がらみは手に負えない」

「気になつてゐるんだけど、なんで引き受けてくれたんだい。初めは渋つていたのに」

「お前には関係ない」

「やっぱりアタシに変な事をするつもりじゃ」

「死ね。良いか、助けてやるつて言つてるんだ。理由なんか何でも良いだろ。面倒くさい」

「エリスだ。そう名乗つた以上、名前で呼んで欲しいものだね。そもそもアンタの名前を聞いてない」

「覚える必要は無い。どうせ明日には居ないし、2度と会う事も無いだろ」

「それつて虚無主義だ」

「難しい言葉知つてるな。その前にこの背負つてゐる荷物をどこかに隠したい。良い場所は無いか？」

案内されたのは大樹であつた。その根元にある、少々わざとらしい枝を退けると大穴があつた。

「ここはアタシしか知らない場所だよ」

「遊び場か」

「兄さんと喧嘩した時ここに隠れるんだ」

おもちゃや、それらしい石、木の実、食器などが置いてあった。真也はバツクバツクを降ろすと穴の内側に立てかけた。滑り出し倒れ掛けたので慌てて支えた。何度か繰り返し、面倒だと倒したままにした。倒しておけば倒れる事は無いのだ。何がおかしいのか、エリスは必死に笑いを堪えていた。真也はただこう聞いた。その得体の知れない表情に、彼女は心臓を鷲掴みされた様な錯覚に陥った。悪寒もしたし、息も呑んだ。

「一つ確認したいが助けるってのは生きる事からか？ それとも死ぬ事からか？ どちらだ」

「何を言ってるの？ そんなの決まってるだろ」

「そう、死ぬ事から助けるのか。「面倒だな」

「人を助ける事が面倒だつてのっ!？」

「分っていない様だから言っておく。助けるつてのはこの村から逃がすつて事だ。隣町ぐらいまでは付き合うがその後は関知しない。外の世界はお前が思う以上に残酷だ。ここが村の外だからつて、外の世界だなんて思うなよ。兄を犠牲にしてこの村に留まった方がマシな可能性がある。それでもやるか」

「それ、本心から言ってるの?」

「ま、大事な家族を見殺しにして生き続けるよりは、やるだけやって二人一緒に死んだ方がマシか」

「死ぬなんて決まってる」

「確かにそうだ。全てはお前ら次第」

「アンタ、とても陰湿だ」

「なんでそう思う」

「助かるなんて全く信じていない。死ぬに決まってる、そう思ってる」

「そんな事は無い。その可能性は限りなく低い、そう思っているだけ」

森を歩き続けると村の明かりが見えた。お盆をひっくり返した様な、円形の崖になっていた。

「月明かりが有るとは言えよくこの森の中を歩けるな」

「ここはアタシの庭だからだよ」

草を掴み、枝に足を掛け5メートル程の崖を登った。木々の隙間を這う様に歩くと村の裏手、つまり深部に辿り着いた。右に崖がある。左に木々があった。その先に村の灯火が見えた。エリスのそれは急かす物言いだ。事実そうであった。

「兄さんが捕らえられている牢屋はこつち」

「その前に神殿に案内しろ」



「どうしてよ」

「確認しないと。万が一本物だったら後が酷い。災いが降りるって事だ」

「アンタは神官か何かなの？」

「さてね。救世主かも知れないし、破壊者かも知れない、正義の味方かも知れないし、悪党かも知れない。今ならまだ間に合う。止めておくか？」

「代わりに兄さんを諦めろって言うの？　なんて嫌な奴」

「良く言われるよ」

その声はあの黒髪の娘だった。

「その娘に聞く事ではあるまい。止めておくべきはお主であり、退くべきは今であろう？　その娘を見捨てるが良い」

振り向けば一瞬だけ姿を捕らえた、村の陰湿な闇夜に消えた。

「エリスって言ったか。今の声を聞いたか？」

「声？　知らないね」

「この村に長い黒髪の女の子の伝承か何かあるか？」

「でんしようって何だい」

「言い伝え、お伽噺、伝説、その類いだ」

「聞いた事無いけれど」

「そうか」

彼はどうするべきか考えた。この依頼を続けるべきか、それとも不確定要素を理由に、退くか。彼は続行する事にした。

(どうなるうと知った事か。それならそれで、終わらせる事ができる)

暗視スコープを手にその神殿を見上げた。町の明かりは届かない夜の中、月明かりの下にそれは浮かんでいた。否、鎮座しているが適当だろう。片目で覗きながら真也は呟いた。

「これは、こいつは驚いた」

それは牛の顔を持っていた。胴体は人間で、天を仰ぐように両手を広げていた。下半身は外側から鍵を閉める部屋になっていた。地下室に該当する部屋もあり、そこには大量の炭が残っていた。その構造を説明すると、地下室で火を焚き牢屋の中を燻す、その煙が牛の顔の穴から抜ける構造になっていた。

「これを祀っている連中がまだ居るなんて」

「余所者のアンタがモラクさまを知ってる？ どうしてだよ」

「正しくはモレク。元々はアンモン人が崇めた豊作や利益を守る神だ。エリス。生け贄は人間だけか？ 動物とかも捧げるのか？」

「人間が一人だけだけど」

「そうか。いいだろ、兄の所に案内しろ。さっさと抜け出すぞ」

「どういう事だよ」

「この神は偽物つてことだ。靈格が殆ど無い」

牢屋に向かいながら、真也は小声で説明した。エリスの様な子供が疑問を持ちながらでは、それに気を取られる恐れがあつたからだ。

「モレクは元々7つの生け贄を要求する神だつた。小麦粉、キジバト、牝羊、牝山羊、子牛、牝牛。そして人間の子供だ。ただし権威者の第一子で、上限が6歳つて決まつていゝる。だがここのそれは少し違ふ。生け贄が一人になつていたり、年齢が上がつていたり、王子でなくても良かったり。もともとはヨルダン川の東にギレアドつてとこで祀られていた地方神なんだが、ここに伝わる過程で変わつたんだろ。もしくは権威者が都合良く変えたのか。ともかくモレクの劣化コピーみたいなモノだ」

「神様を変える？ そんな事許される訳が無い」

「伝わつた神を都合良く変えるのは良くある話だ。例えばユダヤ教のヤハウエはもともと戦いの神だつたんだよ。戦争をしていた当時の彼らにはそれが都合が良かったから。ところがイスラエルの人達は酷い目にあう。当時南北に国が別れていたんだが、北のイスラエル国はアッシリアに滅ぼされた。南のユダ国はバビロニアに滅ぼされた。何故こんな目に遭うのか。何故神は守つてくれないのか。そのうち彼らは、ヤハウエは自分

たちだけの神ではなく、世界神で我々が罪を犯したからその罰だ、そう考える様になつた。これがユダヤ教の唯一神の興り。自然という存在と共に誕生した自然信仰神以外は日が浅いから、こんな事が出来るんだな」

真也のその説明を聞いたエリスは真也の態度を硬化させていた。不機嫌さを隠さない。方や真也は呆れを隠さない。

「あのな。その神様から生け贄を奪うんだぞ、俺らは。いい加減腹を括つて信仰を捨てる。というか、お前の兄はこの事を知っているんだろ。助けに行つた途端大声を出されるとか、勘弁だ」

「……それは大丈夫だね、ちゃんと伝えてあるから」

樹木の影から顔を出すと確かに牢屋があつた。岩壁にあつた自然の洞窟に鉄格子を付けただけの質素なモノだつた。これは一体どうした事か、見張りが居なかつた。左右に視線を走らせたが、人気すら無い。どうも嫌な予感がする。

「エリス、お前の親は？」

「父さんと母さんがいる。けれど母さんは本当の親じゃ無いんだ。後から来た人」

「継母つて事ね。大体読めた、その人は本当の子供を溺愛して、お前ら兄妹に辛く当たっている。父親は気が弱くて、継母に強く言えない」

「アンタ性格が悪すぎ。人が気にしている事イチイチ説明するだなんて」

「昔から良くある話だ。ところで確認したい、お前の親に話したか？」

「話せる訳無いよ。そこまでバカじゃない。話したのはお兄ちゃんだけ」

「それは結構だ」

牢屋に駆け寄るとエリスは立ち止まっていた。真也も立ち止まった。

「……」

沈黙が訪れた。そして真也は呟いた。

「鍵は持っているんだろうな」

「……」

「おい」

「そこまで考えてなかった。どうしよう」

「目を瞑って向こうを向いている」

「どうしてさ」

「問答するつもりは無い。兄貴を助けたいならさっさとしろ」

「なんだい、偉そうに」

真也はナイフを取り出すと、眼鏡をズラし、南京錠を線に沿って切断した。

「開いたぞ」

「どうやったんだ」

「質問は無しだ。急げ」

エリスは訝しがりながらも、牢屋の中に入っていった。続いて真也が牢屋に入ると兄妹は抱き合っていた。妹のエリスは目に涙すら浮かべていた。真也は彼女を信頼する事にした。エリスの安堵は本物だ。

「お兄ちゃん、助けに来たよ」

彼女の兄は、彼女と同じ黒髪に褐色肌。12歳前後だろう。彼女と同じ様な民族衣装を纏っていた。その兄は妹を抱きしめると、彼女の髪に鼻先を埋めて、こう言った。

「ああ良かったエリス。これで俺らは助かった」

その安堵は本物だった。真也は笑みを浮かべた。忘れていた屈託の無い笑みだった。

「感動のご対面だが急げ。さっさと逃げるぞ」

真也の声にその年若い兄は警戒を隠さない。

「エリス、この人が？」

「そう。名無しの赤法師」

「なんと言ってお礼を言えば良いのか」

「話は後だ、そう言っているのが理解出来ないか」

「確かにそうですね。さ、エリス。おいで」

「お、お兄ちゃん引つ張らないですよ！」

「つたく。話を聞きやしない。これだからガキは嫌だ」

呆れた様に真也が牢屋の外に出ると、彼は心底詰まらなさそうな顔をした。



牢屋の出入り口の周りは、村の男たちで埋め尽くされていた。その数ざつと50人。何人かは松明、何人かはランタンを持っていた。兄妹は、男たちに捕らえられていた。否、正確には妹のエリスのみ捕らえられていた。彼女は展開が理解出来ず、あ、ともえ、とも。良く分からない感嘆符を繰り返すのみだ。

「さて、動かないで貰おうか。お客人」

村長らしき、白い髭を蓄えた老人が一步踏み出した。

「アンタは良い人の様だのう。この娘を死なせたくはあるまい？ 温和しくする事だ」

真也は両手を挙げた。数名の屈強な男たちが駆け寄ると、真也を殴りつけた。最初の男は右ストレートを以て真也の顎を打ち貫いた、唾内が切れ血が飛び散った。次の男は真也の頭を抱えると腹に膝を打ち込んだ、もう一発膝を打ち込んだ。3人目の男は手にした鉄の棒で真也の背中を打ち付けた。4人目の男は真也の体を掴み岩壁に叩き付けた、次に髪を掴み額を打ち付けた、額が割れて血が流れた。

「ぐうっ！」

彼は呻き声を上げるとそのまま地に伏せた。5人目の男は何度も踏みつけ蹴りを入れた。外套越し、つまり胴体へのダメージは無いが頭部顔面は別だ。痛みもあれば血も吐いた。真也は何処か他人事のように、それを受け入れていた。この5人は真也に叩き伏せられた男たちだった。両手に手錠を掛けられ、跪けさせられた。髪を掴まれ、強引に顔を上げさせられた。その様を見ていたエリスの声は震えていた。

「兄さん、どうして」

彼女の恐れは当然である。この脱走は兄にのみ伝えたからだ。必然、この展開の原因は特定出来る。

「言っただろ、これで俺らは助かったって」

「どう、して」

エリスの問いに答えたのは鼻の穴と口から血を流し、顔を腫らしていた真也であった。

「分らないか、エリス。お前の兄さんは初めからこの予定だった。妹から逃げ出す算段を聞いた瞬間、そう決めた。だろ？ 坊主」

「そうだ。村を逃げ出したところで、俺ら兄妹に生きていく術は無い。だが生け贄が別に居るなら話は変わる。それとお前。俺の妹を呼び捨てにするな」



「10歳を少々回ったところにしては、随分肝が据わったアニキだな。将来有望だ。この村にとつてのな」

「何も知らない余所者が知った風な口を効くな。これがこの村の、俺らの正義だ」

「ああそうだろうさ。アンタらにはアンタらの法がある、そういう事だろう？」

真也を殴った男の一人が、真也の胸ぐらを掴んだ。

「良い人さん。荷物はどうした」

「捨てたよ。欲しければお前らの崇める神に聞いてみる」

再び右顎を拳で打ち貫かれた、血にまみれた臼歯が一本飛んでいった。髪を掴まれ強引に引き起こされた、今度は左顎をを殴られた。鼻の穴から血を垂れ流し、顔を腫らしていく真也を見る度に、彼らの妬みという欲望は満たされる。喜びに打ち震える。正義の鉄槌を加える腕と足に鈍い衝撃が響く。骨肉を殴る感触は、彼らの暴力的な欲望をなお加速させていった。誰かの不幸が彼らの正義であり喜びなのだ。事実その様を見る誰も彼もが満足そうに微笑んでいた。これがこの村の有り様だった。

どうして良いのか分からず、ただ大粒の涙を流すエリスを真也はぼんやり見ている。意識を失っていたのか、それとも気にしなかったのか。気がつけば牢屋に横たわっていた。藁を敷いた後があつたが、わざわざ取り去つたらしい。岩の冷たさが、体の芯を冷やす。腫れた臉の隙間を動く眼球が、格子の外に佇む黒髪の娘を捉えた。声を発しよう

と唇を動かした。塞がり掛かっていた下唇が割れた、血がにじみ出る。

「そうか、アンタはこの結末を知っていたのか」

「解き放つてやつても構わんぞ?」

「借りは作らない。アンタに借りは作りたくない。関わりたくない」

「理解出来ぬな。お主ならこの格子を破壊する事もできよう。囲まれた時逃げ出す事も出来たであろう。鉄の棒を持ち出されようとも、脆弱な人間如きの力では、傷を負う事など無い筈。それがなにゆえ、あの下らぬ輩の拳を受けた。なにゆえ、囚われの身を選ぶ。なにゆえ、己の身を傷つける」

「魔術は人前にさらせない。そもそもお前には関係が無い」

それならそれで、終わらせる事ができる。

「腐った眼をしておるの。死んでも構わんと言うなら今ここで殺して見せようか。それとも、死ぬ事が叶わぬ身にしようか。不死になれば終わりなど永遠に無いからの」

「死徒は暇なんだな。流石アンデッド、時間を持って余している様だ。でも御免被る。アンタは綺麗だが、生憎とアンタは趣味じゃないんだ」

「減らず口の絶えん小僧よの」

その黒の娘は妖艶に笑うと掻き消えた。



一夜明けると雨が降っていた。大ぶりでもなく、小雨でもなく、シトシトと降っていた。ただ空は夜かと勘違いしてしまいそうな程暗かった。纏わり付く様な降り方が疎ましい。そして儀式が始まった。村中の人間が神殿に集まり取り囲むと、太鼓やシンバルの音が鳴り始めた。賛の悲鳴を掻き消す為だ。彼ら自身を鼓舞する為の物でもあった。

真也はその神殿、つまりモレクを模った釜の中だ。手と足に枷が付いていて、一応は身動きが取れない。彼が格子越しに村人たちをぼうと見ていると煙が漂い始めた。視界の端に赤い光が点いたかと思うと、釜の内壁が赤褐色の炎で揺らぎ始めた。パチパチと樹木が燃える音もする。

真也が着ている真紅の外套はキャスター謹製の礼装だ。対物理、対魔術、対呪詛、耐火、耐刃、防弾、耐衝撃、耐環境。彼女が半年掛けて作り上げた特注品である。男たちに暴行を受けても、胴体のみ無事だったのはこの為だ。この程度の火焰ではびくともしないだろう。ただし呼吸は別だ。窒息すれば終いである。そもそも頭を焼かれれば、どうにもならない。

釜が熱くなり溜らず立ち上がった、床は鉄板だった。煙が充満し、咽せてしゃがみ込

んだ。手を床に突けば、ジユウと肉の焼ける音がした。熱と煙で目が開けられない。苦しいが息を吸うと胸が焼ける。息を止めれば、当然窒息だ。

(これはキツイ)

確かに苦しいが、義理の妹に施された強制再生された時よりはマシだった。今度は義姉の声が聞えた。

“この心臓は私のモノだから。勝手に取られる事も捨てる事も駄目”

(そうだったな)

膝を突きむせ返った。涙と咳が止まらない。

(でも未だ自分が良く分らないし、この旅に出た理由が正しかったのか、それすら自信がなくなった。出会って、信じて、裏切られた。今度こそはと、信じて裏切られた。この旅はなんでこんな辛いのかと、見合うモノはあるのかと何度も考えた。ここまで来たけれど、でももう疲れた。でもあの兄妹が助かるなら、それもまあ良いかなって)

意識が朦朧としてきた。酸素が薄くなり始めたのだった。意識を失えばそこで終わりだ。

“契約せよ”

真也はカトンボでも振り払うかのように吐き捨てた。

(失せろ。こんなんでも悪魔に魂は売らない)

だが次のその声は無視出来なかった。

「何をしている、さっさと逃げぬか」

どういう事か、釜の中に黒髪の娘が立っていた。灼熱をものともしていなかった。

「お主ならこの様な壁を破壊する事など造作も無かろう」

「アンタが何処の誰かは知らない。神でも、精霊でも良い。なんだったら悪魔でも。けれど俺に関係ないだろ。死神って言うなら、好きにしろ」

「そうよの。確かに関係はない。ならばこう成ろうとも、関係なからう？」

その時咆哮が響き渡った。その気配は遠かったが、釜の中ですら聞き取るのに十分だった。咆哮は途切れなれどせず、押し寄せる津波の様に続いていた。それは犬のモノに似ていたが、その威は桁外れだった。何せ、その咆哮は地を震わしたのである。

それは白い魔犬、白銀の天狼、そうとしか形容できなかった。崖の上から村を見下ろすそれは、宙に身を投げると、大地に降り立った。何事かと目を丸くする村人たちを余所に、その魔犬は彼らを喰らい始めた。ある者は頭蓋骨の上半分を失い、大脳が抉られ脳梁を見せていた。ある者は左腕から左肩、左胸と左脇を喰われた。断面を見せる心臓は、血液を噴き出しながらもまだ動いていた。胃袋の一部と、大腸を垂れ流していた。ある者は、頭頂部から叩き潰された。背の皮膚と筋繊維を突き破り、肋骨と脊柱が飛び出していた。

それは同時に町を破壊し始めた。猛烈な突進力と、強度を誇るそれに、簡単な石造りの建築物など、障害物にすらならなかった。隠れていた親子は石壁ごと踏みつぶされた。小銃を構えた男は喰われ、砕かれ、飲込まれた。何故だろうか。その口は血に濡れていたが、白く輝く毛並みには血の一滴付着していなかった。100名ほどいた村人は30秒待たず半数になっていた。

釜の中に居た真也は余りの異常な気配に、釜を破壊、内側から飛び出した。至る所で悲鳴が上がっていた。銃声も聞えていたが直に消えた。目の前に繰り広げられるのは、惨劇であり、虐殺。そして蹂躪だ。半壊した石造りの影に白い鬘がちらりと見えた。真也は堪らず唾を飲んだ。

(……デカい)

初めて見るそれは圧倒的だった。ギルガメッシュ、バーサーカーなど比較にならない程だ。体格という意味もあったが、威圧という意味が圧倒的だった。遠目ですら恐怖を覚えるのに十分だ。それは彼が初めて感じた死の恐怖であった。本能の赴くまま逃げようとし、あのエリス(妹)を思い出した。“一緒に逃げるか?”一応確認するだけだ。ここで死なれては寝覚めが悪い。逃げるといふなら連れて行く。そう思い駆け出せば、村の中央にある井戸の傍にそのエリスは居た。

彼は慌てて駆け寄った。彼女の息が荒い。口から血を出していた。視線は焦点定ま

らず天を見つめていた。エリスは歩けなかった。歩ける筈が無かった。立つ事すら叶わないだろう。だって、下半身が無い。真也はその手を取るところ聞いた。

「言い残す事はあるか？」

彼女は、血走った目で真也を睨んだ。

「悪魔め、滅んでしまえ。悪魔め、呪われてしまえ」

絶え絶えの声で8歳の娘は息絶えた。手を振り払わなかったのは、単にその力が残っていないなかった、ただそれだけだ。怒りが真也の恐怖を打ち破ったのでは無い。死んだ子供の呪詛が、ただ恐怖を無視させただけだ。彼は歯が砕けんばかりに噛みしめると、絶叫をあげた。それはただこの状況に陥った事への怨嗟である。抜刀、そして拘束術式限定解除。

筋力B / 耐久C / 敏捷A / 魔力A / 幸運C / 宝具B

今の真也はほぼランサーと同等だ。出し惜しみしている余裕など無い。魔眼殺しを捨て全力で踏み込み込んだ。その時魔犬は一人の男を見下ろしていた。その男は尻餅をつき、後ずさっていたが上手く下がれない。両足が無かったからだ。

「いや、止めて。殺さないで。死にたくない、死にたくない、死にたくない、死にたくない、死にたくない、ぎゃああああー！」

魔犬は頭蓋を砕くとそのまま、啞え上げ持ち上げた。啞えた新鮮な死体から血を飲み

干していた。その魔犬は食事に夢中だ。啞えているなら、牙は使えまい。好都合にも大岩が傍にあつた。とっさの場合には楯に出来る。近くに森もあつた。森の木々が障害物となる程の巨軀だ、ならば脱出に都合が良いだろう。そこまで立てた算段は何の意味も持たなかつた。何故なら礼装が持つ防御結界が悲鳴を上げていたからである。受けた攻撃は許容量をオーバーしていた。真紅の外套に刻まれた術式が、自己修復を始めるが復帰には時間を要する。

(なんで真正面に空が見えるのか)

それは真也の身体が宙を浮いていたからである。空と大地がクルクル回る。どれ程回っていただろう。気がつくと目の前に大地があつた。衝撃が全身を襲つた。踏み込んだ真也は、為す術もなく弾き飛ばされたのであつた。知覚すらままならなかつた。思ひ返せば、尻尾で打ち払われたと言う事だけは把握出来た。手足を力なく振り回し、大地を転がるその様は、でんでん太鼓である。

修復もままならないうちに、大地に叩き付けられた。その為礼装が生み出す防御結界が部分的に崩壊し始めた。衝撃が体を貫き、口から血が漏れていた。転がり続け、崩れた家につつかりようやく止まつた。全身の至る所にある痛みを無視し身を起こした。敵の居場所を探れば。井戸の向こう、更に廢墟と化した家屋の向こう。その距離はサッカー場の端と端ほどあつたが、そこに佇む魔犬と眼が合つた。彼が本能に従い全力を以



てバックステップすると真紅の切れ端が宙を舞っていた。キャスターの礼装が完全に崩壊、吹き飛んだのである。魔犬の突進を喰らったのだ。魔眼など何の意味も持たなかった。

(これほど、か)

2度目の衝撃で右大腿骨は折れた。左上腕骨は砕けた。肋骨など折れていない箇所を探す方が難しい方だ。右手の指は反り返っていた。剣はもはや持てまい。それ以前に、霊刀はどこかに行ってしまった。礼装がその威を相殺しなかったならば、即死だっただろう。視界が色を失い白黒となった。それは脳の防衛本能だ。色の認識を断念し、反応速度を上げるのである。視界の端にチラと映ったそれに、真也は一縷の望みを掛けた。右腕を振り、姿勢制御。無傷の左足で大地を蹴飛ばし、それに頭から突っ込んだ。そこは泥濘んでいた。泥に似ていたが、おがくずや落ち葉が混ざっていた。とても臭い。当然だろう。そこは肥だめだったのだから。口内に侵入し、己の血と混ざり合った。不快極まりないが、それを感じる余裕が無い。ダメージが原因でもあったし、感覚が麻痺していた事も理由だ。なにより、真也の目と鼻の先に魔犬が居たからである。歯がガチガチと鳴っていた。恐ろしさの余り声が出ない。呼吸すらままならない。目の前の存在は根本的に違う。

その魔犬は鼻先を右から近づけた。今度は左側からだ。真也の臭いを嗅ぎ確かめる

と、眉をしかめ飛び退いた。大好きなハンバーグに仕組まれた大嫌いなピーマンに気がついた子供のような顔だった。首が痛くなる程に高く跳躍すると崖の上に降り立った。その隣りにはあの黒髪の娘が立っていた。その娘が魔犬の顎を撫でると、魔犬はとても心地よさそうに眼を細めた。

「よしよし、良い子じゃ。汚物に塗れたモノを喰らつては腹を下してしまふからの。何よりその美しい毛並みを汚しては叱りつけるところであつた」

そして紅い瞳が真也を貫いた。薄ら寒い笑みだった。

「死にたがりかと思えば、逃げようとするわ。あの小娘の死に怒り、剣を向けるわ。リイゾが気になると言うから、助けてやれば恩を仇で返すか。お主、死の恐怖は初めてであろう？ であるからそれに堪えきれず、糞尿に塗れてまでも生に縋った。生き汚いのう。加えて生き方が定まっておらん。これは確かに未熟者よ。ま、自覚があるだけ良いとするべきかの」

「……何者だ」

「控えよ。我が名はアルトルージュ・ブリュンスタッド。紅い月の後継者よ。見知りおけ。実のところ後継者候補だが、似たようなものじゃ。この子はプライミッツ、リイゾとは顔合わせ済みじゃったな？」

気がつけばアルトルージュの隣り、プライミッツの反対側にリイゾパール・シユト

ラウトが傳っていた

「死徒二十七祖が三人……？」

「お主、いや小僧。罪人たちの弁明はこうじゃ。我らが苦しんでいるのには理由がある、ならば堪え忍ぶべきだ。だがその苦しみを持たぬモノが許せない。それは罪、ならば罰せねばならない……大方この様などころであらうて。己の身に降りかかった不幸、苦難を帳消しにする為にこの偶像を祭り上げた。その真実は妬み。旅人を襲い、憂さ晴らしをする、この村の贄の始まりよ。その正当化の為にこの神は都合が良かった。さて。かように罪人たちは皆死んだ。それでも尚悔しいか？ 怒りがこみ上げるか？ 仇を討ちたいか？ 構わんぞ、掛かってくるが良い」

真也は動けなかった。蛇に睨まれたカエルの様に硬直していた。

「どうした。千載一遇の機会じゃぞ？ この子にもリイズにも控える様に申しつけよう。それとも私の言葉が理解出来ぬか？ ふむ、ならば、お主にも理解できるように言つてやろう。名誉ある死か、無様に生き恥を晒すか、好きな方を選ぶが良い」

生き恥を晒す、彼女が言う事は真実だろう。100歩譲つてアルトルージュに勝利すれば、連中の片棒を担ぐ事になる。何故ならこの村を滅ぼした彼女の行動は正しいからだ。逃げれば、当然「俺が間違っていた」と認める事に他ならない。戦い死ねば、少なくとも助けようとした彼らを助けられなかった、その償いはできる。恩人に仇を持った

償いも果たせる。この騒動の落としどころとなるだろう。

それを知った上で真也は逃げ出した。圧倒的なそれを目の当たりにして、死ぬ事が怖くなった。折れた足を引き釣りながら、躓き、転び、それでも逃げ出した。哄笑の音が背後から聞こえた。まるで群衆にゴミを投げつけられているかの様だ。逃げて、逃げて、そして逃げた。痛みなど恐怖でどこかに行ってしまった。屈辱など感じる余裕すら無かった。

どれ程の距離を這いつくばったのか、気がつけば村を抜け森の中だ。力尽き、転んだ。目の前にある雑草は風に靡いていた。笑っているかの様だ。それを見ると、猛烈な脱力感に襲われた。このまま全てを放り投げる。そうすれば全てが終わる……その筈だった。

『……で終わりか?』

それは見知った声だった。そんな筈は無い。居る筈は無い。あの男の魂は既にこの世に無い。だが、あの神父に魔槍を突き立てた時もそうだったようにその声は聞えた。

「ああ、もう終わる」

その男は真紅の魔槍を、肩に乗せポンポンと叩いていた。

『諦める、の間違いだろうか』

「あの時あの女の子を見捨てた方がまだマシだった。俺はまた間違えた。今度は命令

じゃない、自分の選択の結果だ。破滅を招いた責は負わないと」  
『そうか?』

「そうだ。兄は死んだかも知れないが、妹は助かった」

『それは助かったって言うのか? あの嬢ちゃんはこの狂った村において比較的マトモだった。兄を見殺しにした、重責を一生負い続けるぜ?』

「心の傷は時間と供に癒える」

『そして今度はあの嬢ちゃんの子供が生け贄になるかもな。いや、連中といつか同化する。痛めつけられるお前を、愉しそうに見物する連中と同じになる』

「何が言いたいランサー」

『助けるのも、見捨てるのも、両方に責がある。背負う事に背を向けるから辛い。そう言っただけだ。シンヤ』

「黙れ。勝手な事を言うな。お前に何が分る」

『あの死徒、なんつったっけか。アルトジュール?』

「アルトルージュ」

『そう、そのお嬢ちゃんが言う通りだ。降りかかった苦悩に目を背け、何かのせいにした。自分たちで解決出来ない連中の寄り集まり。あの村はそういう村だ。あの悪循環を、業（カルマ）を断つ事が出来た、そう考えても良いんじゃないか?』

「無様だ。無様すぎるだろ。俺は助けるつもりだった。けれど結局死んだ。それどころか全滅、皆殺しだ。たった8歳の子供が俺を悪魔だと罵りながら死んだ。俺はあの村にとって災いだった。冬木市での俺もそうだった。俺はこんな事を何度繰り返す、何度繰り返せば良い。挙げ句、死ぬ事が怖くなって、逃げ出して、その責が重くなり、今またもういいやなんて思ってる。もう、嫌だ。こんなのは嫌だ。もう、ムリだ」

ランサーは笑っていた嘲笑ではなく、デキの悪い教え子に呆れ返るかのようだった。『そんなに辛いなら止めても良いんだぜ？ 酒を呑んで、歌を歌って、忘れたふりをする。それも一つの生き方だ。だけだよ。これだけは言っておく。目を背けた事実は生涯ついて回る。地に落ちる影の様に、何時までも付いてきて消える事は無い。真綿で首を絞められる様に死ぬまで苛まれる。だが死んじまえば確かに全てリセットだ。全てな。ま、お前の人生だ。好きにしな』

気がつくとも目の前に、ルーンの石があつた。戦闘と、転倒した衝撃でベルトの金具から飛び出したのである。それをぼうと見ていたら、いつの間にか雨は止んでいた。雲も切れその隙間から青い空が覗いていた。真也はその石を握ると、泣きながら立ち上がった。終わってしまうならともかく、終わらせる訳にはいかない。諦めるなんて出来ない。何よりあの槍兵に言われっぱなしは腹が立つ。

「また、言いたいだけ言つて勝手に消えたか。ああくそう。首を洗つて待つてろよ、この

お節介槍兵。今度は俺が追い詰めてやる」

体の修復を済ませた真也は身なりを整えた。堂々とその村に戻り、回収出来た遺体を心に刻みつけ全て弔った。そして村に火をつけた。煙が天に届いたのを見届けるとそのまま立ち去った。この一件は時計塔を訪れる9ヶ月前の事となる。

おしまい。

## 依頼その四 リバーズチャリス編

## 一話

「子よ、これは牙だ。私にとって救世の牙、お前にとっては何の牙。この父の願いを成し遂げた暁は、家名を名乗る事を許そう」

そのレストランは少し違っていた。例えば天井が高く、息苦しさを感じさせなかった。例えば窓側にのみ席があった。この二つは数より質を重視していると言う事だろう。事実その窓は大きくロンドンの夜景を一望出来た。他にもテーブルクロスは純白で、亜麻100%、つまりは高級品だった。ウェイターは黒いスーツと蝶ネクタイを着こなし格調高く、その体捌きは、素早さと正確さと礼儀さがあった。十分に訓練されている事が良く分かった。照明を巧みに使い、瀟洒な雰囲気醸し出していた。実に快適で、客に満足して貰おうというシステムの集大成だ。人はそのレストランを高級レストランと呼ぶだろう。実際にその通りだった。味という意味であり、サービスという意味であり、もちろん料金という意味もある。事実真也が周囲の席を見渡すと誰も彼もが高級そうだ。彼らは僅かに暗い特別仕立ての空間で、思い思いの時間を楽しんでいた。と



ところが彼は言葉が出ない。

(……)

主の挑発にまんまと乗り、食事に誘ったのは良いものの、主の「今晚は楽しみにしていますわね」というセリフで彼は主の金銭感覚を思い出した。頭頂からつま先までブルジョアジーな主である。赤コートは難があるだろう、であるから着替えに戻ると申し出て、ならば待ち合わせる事にして、携帯電話でグレイに店を紹介して貰った店であった。師匠に連れて行つて貰いたいと思つてもう3年目の店です」という彼女の切ない言葉は既に真世の頭から消えた。何故ならそこはロンドンでも屈指の五つ星レストランだったのだ。

(……)

誘つた手前、割り勘など流石に無様すぎる。財布には死徒の一件で申請した危険手当である2000ポンドが収まっていた。十分な額であつたが、この手の店の経験など皆無の彼は「足りるだろ、足りるかな? 足りると良いな」とそれどころでは無かつた。だものでその言葉は辿々しい。

「ナカナカ良い店だな。倫敦ノ夜景モ綺麗ダシ」

「そうですね。料理は4点ですけれど、立地条件、演出、調度品、ウェイターの質で5点満点を上げましょうか」

「氣ニ入ツテ貰エタノナラ何ヨリダヨ」

「なんですの？ そのしゃべり方」

「別ニ」

彼は前菜であるスープを啜った。人間用に調理されたモノなら何でも美味しいという、味覚が完全に壊れている彼には、高級フランス料理の味など分るはずもない。拷問なのか仕事なのか良く分からない時間が過ぎれば、食事も終盤だった。向かいの主はアールグレイを手に食事の余韻に浸っていた。満足げに眼を細めていた。主の趣味であるプロレスなど全く知らない真也にとって、共通の話題は無粋なモノばかりだ。無理して話す事も無かろうと、同じ様にその雰囲気を楽しむ事にした。隣の席のカップルがプロポーズしていた。多少気まずさを感じつつ、目の前の主は一通の封書を彼に差し出した。

「招待状？」

「そう。今朝届きましたの。あの時計塔高級寮の、更に私が術式を施した部屋の結界を破り、机の上に置いてありましたわ」

ルヴィアから手渡された手紙には宛名と差出人が書かれていた。もちろん宛名はルヴィア、差出人はR・クロムウエルとなっていた。

「かっこいい名前だな。イケメンそうだ」

「呆れましたわね。クロムウエル家を知らないとは。イギリス屈指の名門ですわよ」

「そう言われてもね、知らない事はある。何系の術師？」

「降霊魔術の大御所でした」

「でした？」

「第2次世界大戦末期。大規模な召喚の儀式を執り行おうとし、失敗。それが零落の原因になったとか。それが原因で亡くなった、とも」

「レディ・エーデルフェルト。質問がある」

「シンヤの言いたい事は分りますわ。何故私がこの話をしたのか。潰えた魔道の家からなぜ招待状が届くのか」

「話が早くて助かるよ」

「当時の当主であつたりチャード・クロムウエルは、天使を召喚しその知識を得ようとしたとか……なんですその不愉快な顔は」

彼女は不愉快と称したが、面白くもないコメディを永遠見せられた様な顔、が適当だろう。

「いやだつて。堕天使ならともかく、よりにもよつて天使が人間に。預言者や聖者ならともかく魔術師に知識なんて」

「そうですわね。私もそう思いますし、チューターも同意見ですわ」

「教授にも届いたってことか。それでもこれを気にする理由があると」

「天使は眉唾だとしても、クロムウエル家の遺産ともなれば無視出来ませんから」

「それ程の名門に加えて、結界を突破した術師が控えている、か。実は本人が生きていた、もしくはその後継者が居る」

「それだけではなくてよ」

「分ってる。どこかの誰かがエーデルフェルトに挑戦状を叩き付けた、そういう事だろ？」

ルヴィアは満足そうに頷いた。

「チューターは参加を渋っていますけれど、ならば代理を立てると、圧力が掛かっているとか」

「ふーん。中身を見ても？」

「許可します」

封筒の中には高級そうな紙が二つ折りで入っていた。

「第2次聖杯戦争にご招待いたします」

そう書かれていた。

「なるほど。天使の知識となれば聖杯と呼んでも過言では無い、か。少なくとも魔術師にとつてはそうだろ。事実なら根源にたどり着けずとも、大幅に近づける」

「とても嫌そうな顔ですわね」

「複雑な思い出なんだ」

広げると貴族の紋章と7つの十字が刻まれていた。

「その紋章はオルレアン公のものですわ」

「フランスの？　ならこれは開催地つてことか。十字マークは不明だけれどこれは思わ  
せぶりだ。了解だお嬢様。出発は何時？」

「明後日です。今回は遠出ですから相応の準備をします。鉱石も補充しませんと」

「そうか。この7つの十字は招待客が7人つて訳だ」

「恐らく、魔術師たちが集まるのでしよう」

「聖杯戦争ね、誇大広告じゃないかと疑いたくなる。もしくはおとり広告だ」

「日本だけが特別ではなくてよ」

「そういえば、日本嫌いの日本人の遠坂嫌いだつたな。今でもそう？」

「そうですわね。なんにでも例外はある、と答えておきましょうか」

「それは光栄だ。なら次のステップは観光かな。いつか時間が出来たら冬木市を訪れて  
くれ。案内するから」

「本当にそう思つて居るのかしら」

「お嬢様なら二つ返事で大歓迎だよ」

「それは結構。ではその好意に期待し聞きたい事が二つあります」

「なんなりと」

「そのスーツは？ 初めて見ましたのだけれど」

それは駆け引きだ。適当な話題でワンクッション置いた。

「トリス様に会いに行く時に調達した」

「心構えの違いについて説明を求めますわ」

「流石にこの程度のレストランドとあれは奇抜すぎるし、エリーザベト・バートリのせいで穴だらけだ。それにトリス様とはマイナスからスタートだったし」

「私の時もそうではなくて？」

「あの時はどうしようもならなかっただろ。いきなり『同行する！』とか言うし」

「そう、気を使う必要も無かったと」

「あの時はお金が無かったし、そもそもトリス様とお嬢様の立場が逆だったら同じ事をしてた。だから拗ねないで欲しいんだけど」

「拗ねてなどいけません」

「それは残念。もう一つの質問って？」

「シンヤが召喚したサーヴァントとは？」

引っかけだとは彼も悟っていた。流石に連続では引つ掛からないと、余裕ぶった顔で

ある。彼はティーカップを掴んでこう言った。

「秘密」

「何故レディ・バートリの魔術を無効化出来たのかしら」

「秘密」

「限定武装（霊刀）の入手先は？」

「秘密」

「あの拘束術式は誰が施したのかしら」

「秘密」

「姉の事なのだけれど」

「秘密だ」

「馬鹿にしていますの？」

「スリーサイズを教えてくださいたら答えてもいい」

「上から、」

「止めろ！ はしたない！」

「仮面を被り平気で嘘を付くシンヤならアサシンかしら」

「失敬な事を言うな。キ、」

ウエイターがやってきた。騒ぎを聞きつけたのである。

「お客様。問題でも?」

真也は営業スマイルで答えた。

「なんでもありません♪」

何事も無かった様なルヴィアの態度を根拠にウェイターは退いた。危うく引つ掛かるところだったと、目の前の従者は無言を貫いていた。

(騎士か、騎兵か、弓兵、狂戦士と。御三家のトオサカなら騎士か弓兵と言ったところかしら。まあまだ2週間ありますし、遠出の旅ならば機会も相応にできる。攻勢を仕掛けて全て剥くとしませんか)

彼女は静かな笑みでそんな事を考えていた。



それはライダーとキャスターの受肉が済んだ頃の話だ。そして全員分の部屋の用意はしたが、ベッドの事を忘れていたという、当主の爆弾発言が漸く収まった頃の話でもある。当主から宛がわれた部屋をぐるりと見渡した真也は溜息を付いた。そこは蒼月の部屋より随分広かった。そして彼が一時身を置いていた部屋でもあった。その部屋にクローゼットの類いは無かったが、ベッド、勉強机、本棚、洋服ダンスを置いても空



間に余裕があつた。否、空間に余剰感があつた。

更に時を遡り第5時聖杯戦争終結直後、未だ戦争の影響が、歪な高揚感として残つていたそんな頃だ。彼はまだ蒼月の家に居た。キャスターの命令権を委譲するとは言つたものの身体が満足に動かず、回復まではキャスターに身の回りの世話を頼もうか、そんな事を考えていた矢先、義理の妹は己のサーヴァントを連れてやってきた。すると彼女はさしあたり必要になる荷物を纏め始めた。そう、これから彼女は本来の家に帰るのだ。嬉しくもあり寂しくもある。そう思つていたら彼女は真也の荷物も纏め始めた。

“これからみんな一緒です”

その言葉は今でも良く覚えている。早いものでそれから4週間が経つた。同級生と同居する、といえれば聞こえは良いが実際は大変だつた。生活規範が異なる以上当然であろう。私生活ではだらしくなく、義妹に全て任せつきりだつた彼の生活態度は、当主にとっては許しがたい事だつた。

“髪を十分に乾かさず出歩くな、下着姿で出歩くな、インターネットを自室に敷設する事は禁止、携帯電話もダメ、ゴミは溜めない分別しろ、靴下・下着・洗濯物の分別を怠るな、ゲームは1日1時間、スケジュールボードは正確に書け” 小遣い帳の提出だけは断固拒否をした。

役割分担に異存は無い。洗濯の任からは外されたのは当然だろう。料理はからきし

だった彼は必然的に掃除の分担が多くなった。リハビリを兼ねて廊下や庭の共同部分の清掃に勤しんだ。だが自室の清掃にまで言及されれば辟易もする。新しい家の当主は厳しかったのである。

新しい部屋をじっと見ていると溜息が出た。この生活スタイルに慣れるにはまだ時間が掛かるだろう。ふっと同級生の姿を思い出す。戦時中身を置いていた時との、態度の違いに想いを馳せれば切なくなつた。溜らず持参したガラクタを適当に弄くつた。気が紛れたのか一時間経っていた。時計は午後9時だ。

キャスターが彼の心臓に施したブレーカーが落ちるにはまだ時間があるが、そろそろ寝る事にした。寢床に入り部屋の明かりをベッドライトに切り替えれば毛布を被る。ぼうと天井を見ていれば扉をノックする音がした。何事かと扉を開ければそこに当主が立っていた。どうした事か。夜遅いはずの彼女はすでに寝間着を着ていた。いつか見た白いネグリジエである。ショールも同じ様に羽織っていた。彼女の声は何時になく張りが無い、付け加えれば視線も泳ぎがちだ。

「ごめん、寝るところだった？」

その髪は乾ききっていないのか湿り気を帯びていた。

「なにか用？」

「少し良い？」

真也は就寝直前の部屋の状況を見渡すと、こう言った。

「急ぎか？」

「そう。今晚しかないから」

「なんだ、それ」

「私たちは明日から姉弟になるでしょ？ だから」

「……どうぞ」

「電気はそのままが良い」

真也はスイッチに伸ばした手を止めた。理解出来ないとその当主を見れば彼女は慌てふためいた。

「その、すっぴんだし」

「そう」

前に居た時はそれを気にしなかった、彼はその指摘を飲込んだ。同級生は一拍の躊躇いののち彼のベッドに腰掛けた。ギシリと音が鳴った。掛け布団は跳ね返ったままだ。生々しさを感じながらも、彼は机から椅子を持ってきて、少し離れた所に腰掛けた。

「随分と遠くに座るんだ」

「近いのは色々マズイだろ」

「マズイ？」

「すっぴん、そう言ったのは君だぞ」

「そっか」

それを最後に会話が止まった。同級生は羽織ったシヨールを落ち着き無く弄っていた。伏せ眼がちで頬は紅く、小さな唇をせわしなく動かしていた。閉じた腿も落ち着きが無い。彼女の行動の意味を察した彼は頭を掻いた。

「あー、あのだな、」

「桜だけずるい」

「そういう問題じゃないだろ」

「そういう問題じゃない」

「どっこが」

「きようだいに成るなら繋がりが要るでしょ？　桜だけパスが繋がっているのはずるいじゃない」

真也は本気か、とは聞かなかった。その質問は無粋である。

「好意は無いかも知れないんだぞ」

「もう好きじゃ無くなった？　桜が居たから、好きだけど私を拒絶したそう思ってた」

「白状すると今持っている凛への感情が何か分らない」

「それでも良い。初めては真也が良いから」

「今の自分は間違っているかもしれない、そうは思わないか」

「そんなの今更。それにこうしないと動けないから」

真也は立ち上がった。

「俺は理由無くそういう事はしない主義だから」

「そう、ごめん。迷惑かけた」

見るからに消沈し、立ち上がった凧を真也は止めた。

「話は最後まで聞く。だから対価を用意する」

「対価って何よ」

「そだな、凧の剣になるってのはどうだ」

「なにそれ、セイバーじゃないんだから」

「信用ないか」

「当然でしょ。嘘ばかりなんだから」

「いてててて……ならもう少し俗物的にいこう」

彼は左の握り拳から親指を突き出すと、左胸に突き立てた。

「この心臓は凧が再構築した。これでどう？」

「決まりね。勝手に取られる事も捨てる事も駄目」

「映画であったな。こんなネタ。なんだっけか」

「パイレーツ・オブ・カリビアンでしょ。シリーズの最後、海賊となったブラックスミスは、心臓を納めた箱を恋人に渡した」

「どういう風の吹き回しだよ。映画なんて興味なかったろ」

「真也と話が出来ないじゃない。母さんとばかり話してさ」

「気にしてたのか」

「気にしてないとも思ってた?」

その部屋に一つしか無いベッドは、トサリと何かを倒した様な音がした。それは真也が遠坂の戸籍に入る前日の夜のことである。翌日のみであったが義妹は妙に余所余所しかつた、その意味に気がつかなかつたのは彼のみだ。この事実は真也の拘束術式を構築するのに必要なファクターとなった。



夢から覚めた。何時もの様にソファで目が覚めた。被っていた筈の毛布は足下に落ちていた。両手で顔を擦った。

「なんで今この夢を見た」

出立してから2年間、家の夢は幾度となく見たが、これは初めてだった。何かの予兆

なのか、不安と戸惑いを洗面台で洗い落とそうと、立ち上がればその声は突然だった。  
『マスター』

彼は息を呑んだ。それは2年ぶりの従者の声だ。彼の左手の甲にある、念話用の符陣が発動していた。それは聖杯戦争時のこと、キャスターを新都のホテルに送り出した際に刻んだものだった。彼は慌てた。それは魔力さえあれば地球の反対側でも届く。つまり、相応の魔力を費やしても必要な連絡、と言う事だ。

「キャスター?! 何があつた! 状況を教えろ!」

『ご安心下さい。冬木市は静かなものです。私は近くのホテルに居ます』

「近く? 時計塔の近くと言う事か?」

『はい』

体に走った緊張が一気に解けた。

「……どうしてイギリスに居る。どうして冬木市を離れた。家を守れ、そう命じた筈だ」  
『あら酷い。主の身を案じ馳せ参じたというのに。私どもは手紙に書かれた住所とランサーの刻んだルーンを辿りました。ご心配には至りません。冬木市は落ち着いていますし、その兆候も観測されておりませんから。なによりセイバーとライダー、そしてあの剣製の坊やが居ます』

「何故だ。俺が根を上げるまで、連絡は御法度だろ」

『1年の旅程が2年。これから帰ると言われて、はいそうですかと我々が、我が遠坂の当主が納得するとお思いですか?』

ぐうの音も出ない。諦めきれずオーバーしている事は承知で続行したのだった。この日は覚悟していたが、2週間の慌ただしきで完全に失念していたのだった。だももの彼は謝るのみである。

「……すまん。心配掛けた」

『申し上げたい事は尽きませんが取りあえず棚に上げましょうか。ご無事で何よりです』

「ん。俺もキャスターの声を聞いて嬉しい。今どこだ。会いに行くよ」

『そのご心配には及びません』

頭に浮かんだ2年ぶりの従者の顔はとても明瞭に、意地が悪かった。彼は恐る恐るの体である。

「一つ確認したい。私どもって、なに」

『当然でありましょう?』

「……この場所をトレースしてないのか」

『しましたが、聞く耳持たずと飛び出して行かれましたので。今頃は時計塔に到着しておられるかと』



その意味を考えること暫く。彼は慌てて家を飛び出した。逃げ出している訳ではないのにも関わらず、脱兎の様だった。



エルメロイは椅子に深くも垂れかけた。腹の上で組んだ腕は、祈りの仕草に見える。彼の目の前の机に置いてあるモノはルヴィアと同じ招待状だ。頭が痛い。この招待に応じるか、否か。天使の知識など信じてなどいないが、どうも気に掛かる。そもそも何故自分なのか。知識に自信はあるが魔術の行使は2流だ。

彼は招待状の隣りに置いてあるファイルの表紙をじつと見た。それは今の今まで目を通していた時計塔の記録である。第2次世界大戦末期、リチャード・クロムウエルが「天使を召喚する」と有力術者を招待し、失敗した経緯が記録されていた。その一件は時計塔も関わっていた。

次に彼は真正面にある扉を凝視した。それは物理的、魔術的に保護されたロード個人用の保管設備である。埋め込み式の金庫と言えれば分りやすい。その中にはあの槍が保管されていた。槍と招待状の関連性。その問いが過ぎった。

「面倒事が立て続けだな」

思わず口に出た。槍の扱いは今以て保留だ。だが何時までもこうはして於けまい。彼は幾つかの方法を検討した。

・ 辺境に投棄する。それは管理の放棄に他ならない。保管施設の建築を前提にするにしても、それには資金が居るうえ相応の規模となるだろう。人目に付いては意味が無い。

・ 信頼出来る魔道の家に保管を依頼する。その後継者が私的に利用しないとは言いきれない。

・ 直死の魔眼を以て破壊する。

それを考えたエルメロイは頭を振った。宝具、それは限定武装の一種であるが人類の遺産でもある。破壊が可能かどうかは別にして魔術神秘に携わる者がこれを破壊するのは避けたい。いずれの選択も問題がある。あるべき所に戻すのが一番だがその手段が大問題だ。ルヴィアと真也がリバプールで出会ったという、埋葬機関のシスターに手渡せばベストだろう。だが生憎と住所も電話番号も知らなかった。

ルヴィアと真也の報告書では理知的な人物と評されていたが、それでも埋葬機関の人物と対峙などしたくは無い。機関銃を突きつけられている様なものだからだ。万が一その展開となった時は彼にも武力が必要だろう。彼にはグレイが居たが手札は多い方が良い。その追加の手札には幾つか心当たりがあった。真紅の外套を風に靡かせ

る、軽薄な笑みの少年を思い浮かべた。

「直死の魔眼、か。トオサカもとんでもないカードを隠し持っている」

あの黒縁眼鏡はその為の物だったのである。脅威と言えば脅威だが、制御される力は如何に強大だろうと、必要以上に恐れる事は無い。安全運転者の自動車は安全だが、運転手がとち狂えば自転車であれ危険だ。万物の死を見る事が出来る事、それに常時晒される事、心理的負荷は相応の筈だが、エルメロイの見立てではその不安は見られなかった。クー・フリーンが刻んだルーンの石、それを子供の様に自慢していた彼を思い出せば当然かもしれない。病んでいる者は笑いなどしないのだ。もしくは。

「何に挟まれているか、何を背負っているか知らないが、それどころではないのかも知れないな」

すると人の気配があつた。それはドドドというよりはスタタが適当だろう。それを知った彼は苦虫を噛んだ顔である。執務室は彼にとつて憩いの場だ。各ロードからの突き上げもない、不愉快克つ生意気な生徒のあしらいもない、あの義理の妹(ライネス)もやってこない、諸般の煩わしきから解放出来る唯一の場所なのだ。

その聖地が冒さされたのは2週間前。突如やってきたその人物はノックもせずに入る事がままあつた。全く以て厄介だ。時計塔でトラブルを起こす、仕事を回せばトラブルを起こす、ロード・エルメロイ二世の公私を引っかけ回す。唯一の功績といえ

ルヴィアの矛先を受け持った事のみだ。いや、トラブルの発覚では無く、発見と考えればまだ前向きだろうか。トラブルを発見すればあとは解決するのみだ。彼は前のめりに、両肘を机に立てた。司令官のポーズである。短くもあり長くもあるその気配が到着するのを辛抱強く待った。扉が開いた。ババーンと盛大な音だった。

「師匠！」

グレイであった。何時もの様にライトグレーのパーカーを目深に被っていたが、影から見えるその端正な表情は焦燥であった。有り得ない、とエルメロイは呻いた。彼女が息を切らしていない事か？ それは違う。彼女はそう言う血筋でありそういう存在だった。この程度で息を切らす事など有り得ないのだ。だが。彼女に勝てる存在などそうは居ないだろう、と思っていたのは彼の完全な誤算であった。それはシエルと真也の二人である。身体能力を正確に比較した事は無いが、戦闘訓練を受けていない事は泣き所だ。真也の滞在中に模擬戦でもさせてみるか、彼はそんな事を考えた。話を戻し、では何が有り得ないのか。答えは明瞭だ。少なくともノックもせず、走り込む様な娘では無かった筈だ。

「レディ。まさかとは思うが彼に感化されたのでは無いだろうか」

「大変なんです師匠！ トオサカさんが時計塔にいます！」

「何事かと思えば、そんな事は知っている」

「姉の方です！」

「ガタツ！」 それは彼がいきり立った音だった。その表情は深刻そのものだ。

「レディ。君にエルメロイ教室の生徒を指示する権限を限定で与える。レディ・エーデルフェルト、ミス・トオサカどころでも構わない。総力を持って二人が鉢合わせする事を阻止しろ。私は弟を呼ぶ。急げ」

「分りましたっ！」

彼女は血相変えて出て行った。迂闊、彼はそう己を罵った。あの長男が家に一報を入れる、この展開は十分に考えられたのにもかかわらず、何故こんな簡単な事を。

「何故見落とした！」

彼は机に拳を打ち下ろした。今の彼は、敵の奸計に嵌まってしまった司令官そのものだった。

つつく！

## 一一話

凜は真也の居場所を知らなかったが、それは大した問題ではなかった。あの恰好（真紅の外套）であれば、どこに居ても目立つだろう。適当なところで、適当な生徒を捕まえて聞き出せば其れで済む。1人目が知らなければ、2人目を捕まえれば良い、根拠は無いが3人目で見つかる、そう樂觀視していた。遠坂の当主である凜はそう思っていた。

何の因果か、正面ゲートをくぐった彼女が最初に見た人物は、ロイヤルブルーのドレスを纏っていた。人の表情が見分けられない程に離れていたというのに、二人は視力強化の術を使っていた訳でもないのに、浅葱色の瞳と琥珀色の瞳は確実に交差したのである。

それは一瞬でもあり、永遠でもあった。一瞬で頭に血が上がった二人は、肩を大きく振りそのまま歩み寄った。何もかもがどうでも良くなった。立ち止まり対峙する距離は自動車1台分である。二人は優雅な笑みを持ち出した。つまりは小手調べ、ジャブとも言うおう。先手は凜であった。

「奇遇ですね。レディ・エーデルフェルト。相変わらない痛々しい青、お変わりないよう

で何よりです」

「ええ、ミス・トオサカ。朝の清々しい気分が、濁流に吞まれてしまいましたわ。情熱の赤もここまで台無しに出来るのかと、驚きを隠せません」

ざわり。異質な雰囲気に登校途中の生徒たちが戦慄いた。ある者は時間が止まったかの様に、踏み出した直後の姿勢で固まっていた。ある者はコーヒー牛乳のパックを加えたまま固まっていた。ある物は急激な腹痛に見舞われた。

「ミス・トオサカ。貴女が何故いらっしやるのかしら。カトンボの季節にはまだお早いのでは無くて？ 虫除けの石はまだ準備していませんの。尻尾を巻いてお帰り頂けません事？」

「全くです。蛭の如きその振る舞いでは管理部の人達も大変そうです。毎日駆除剤を撒かなくてはいけないのですから。そうそう、良い駆除剤が日本にありまして、塩なんて如何ですか？ 日本ではお祓いにも使える万能品です」

何という刺々しい雰囲気か、もはや瘴気と言っても過言ではあるまい。生徒たちは逃げ出し始めた。ある者は悲鳴を上げて、ある者は這いつくばる様に。見よ、人がまるでゴミの様だ。

「まあなんと言う事でしょう。まだその髪型をしていらっしやるのね。ツーサイドアップと言ったかしら。お歳を考えるべきではなくて？ それともその頭の中は未だ稚児

のままなのかしら。お気を付けなさいな、時間の流れという変化に対応出来なくば、太古地上を支配した生き物たちの様にお滅びにならましてよ」

「レディ・エーデルフェルト。その黄金のカールはいつ見ても感服します。解体工事現場でのご活躍が目につかびます。お持ちのご気性と相まって、鉄板どころか分厚いコンクリートですら、ものともせず穴を開けられるでしょうから。採掘される岩盤の心中を察すれば私の心は悲嘆に支配されてしまいそうです」

二人の周囲にいる生徒たちは逃げ遅れた者たちである。否、恐ろしさの余り逃げ損なつた者たちだ。ある者は絶望し泣いていた、家族を大事にするべきだったと、己の人生を悔いていた。ある者は神に祈っていた、その恐れは如何ほどか、よりにもよつて聖堂教の神であつた。そしてある者は仲の良い娘に愛していると告げていた、その娘も涙ながらに応えていた。凜とルヴィアはお構いなしだった。

「下水坑道に勝るとも劣らない、見事な振る舞いですわね。見るに堪えませんか。ああ、おぞましい」

「今度手鏡を贈呈しましょう。きつと気に入つて頂けると思います。なにせ象が踏んづけても割れない代物ですから。貴女にうつつつけです」

二人から笑みが消えた。

「結構。準備体操程度の時間程度なら、待つて差し上げて宜しくてよ？」



「不要よ。貴女こそお手洗いに رفتら？ 怖くて粗相をしたら末代までの恥にするから」

生徒たちは遠目から見守っていた。木の陰、椅子の影、花壇の影に身を潜め、思い思いの術式で結界を結んでいる。そこは時計塔のメインストリート。正面ゲートから中央本棟を繋ぐ大通りだ。何をするにしても都合の良い広さだった。それが例え戦闘行動だとしても。

二人は同時に鉱石を取り出した。互いの魔力生成量は同等だが属性差があった。凜は五大属性だがルヴィアは土属性だ。鉱石魔術を行使する者は、己が持つ属性に縛られず、鉱石が内包する属性を顕現できるが、それでも相対的な影響を受ける。土属性のルヴィアは水属性に強く、風（木）属性に弱い、と言う事だ。魔力生成量が同等であれば、その差は無視出来ないのである。その為凜はルビーを持ち出した。それは炎属性系最強の退魔力を内包する、彼女が最も好む鉱石だ。風（木）属性の鉱石、本翡翠（ジェダイト）も所持していたがそれは姑息だと取りやめた。

ルヴィアが持ち出したのはオニキスだ。土系最強の退魔力を内包する鉱石である。単純な力比べで打ち拉ぐ、それが二人の好みであった。奸計など力なき物が縋る下等な策、二人はそれを地で行っていた。なにより互いが互いに退ける訳がない。2人がその手にある鉱石を頭上高く掲げれば、その声は高らかに。

「Leben. Power ist ein Schwert. (応えよ! その力を以て剣と成せ!)」

とは凜であり。

「Call. Work using the power. (応えよ! その力を以て意味と成せ!)」

とはルヴィアだった。互いの殺意が交差する。

「Schiesen. (放て!)」

「Sing. (謳え!)」

ルヴィアが生み出した物は3人の大人でようやく一抱え出来る程の巨石だ。凜の生み出した物は同サイズの火焰球である。二人が発動させたそれらの力はアストラルに對して有効であり物理現象とは異なる。あくまで魔力がその属性を持ち顕しているにすぎない。例えば物質世界に於いて、岩は2000度程に加熱すると溶け出すが、その温度まで加熱する時間と温度を加味する必要がある。熱容量とも言い方が、岩を2000度の炎に晒したところで、直ぐに溶け出すという訳ではない。

だが凜の灼熱は即座にルヴィアの岩を溶かし始めた。ルヴィアの岩も抗う様に岩を結び続けていた。それは異なる属性を持つ魔力の押し合いだ。押し潰そうとする力と、燃やし尽くそうとする力が衝突し拮抗。そして互いに消滅した。

熱砂が二人の間を吹き荒べば、その様は荒野のガンマンである。その凄まじさに観客（生徒）たちは声が出ない。なぜなら二人の行使した魔術が無機物にも影響を与えていた為である。無機物にもアストラルに類する物がある。例えば石。それに宿る霊的な準位が上がれば石の精霊になる。つまり、晒される力が強大であれば影響を免れないのだ。事実、メイנסトリートの舗装道路は、凧の火焰によって焦げ、一部は軟化していた。ルヴィアの質量を受けて、ヒビが入り砕けていた。それは二人の魔力が尋常では無い事を意味していた。次弾装填。互いは互いに鉈石を取り出し、そして放り投げた。

「無粋」

ルヴィアは袖を取り払った。この為に取り外しが出来る様になっていた。

「謝るなら今ですわ」

「は、何の冗談」

ゴングが鳴った。



凧は両腕をかみ合う歯車の様に一つ回すと脚を開いて腰を落とした。八極拳の構えである。方やルヴィアは、臆する事無く歩み寄る。勇姿を世に知らしめん、そう言わん

ばかりだ。体重など大して変わらないのにも関わらず重量感がある。一見、無防備に見えるがこれが怖い。型は無いが隙が無い。否、油断が無い。ルヴィアに掴まれると厄介だ。凜は前回、つまり3戦目は其れで敗北した。

過去の戦いを振り返ってみれば第1戦目。二人が初めて出会った日でもあるこの戦いは、ルヴィアの勝利に終わった。令嬢然としたルヴィアの振る舞いと、プロレスが繋がらなかったのである。凜は意表を突かれた、と言う意味だ。第2戦目は凜の勝利で終わった。武術という意味で八極拳が有利なのは当然だ。第3戦目はルヴィアが勝利した。彼女は八極拳の対策を練ったのである。手捌きを練り上げ、大技へと繋がった。もちろん凜の演出格闘技など恐るるに足らずという慢心もあつた。そして二人は4戦目をここに迎えたのである。

堂々と距離を詰めるルヴィアの一挙手一投足を、凜の瞳は追っていた。リーチはルヴィアが長いが、それは体格では無く流派によるものだ。八極拳はシフトウェイト、つまり基本的に体重と脚力を威に転じ攻撃とする。威を吸収してしまふ手足の長い打撃方法は存在しない。従つてその方法は二つだ。肩もしくは背中を使う靠撃（こうげき）、そして肘を使う肘撃（ちゅうげき）だ。大砲の様な威力を引き替えに、その有効射程は非常に短い。

ところがルヴィアにはその制限が無い。もちろん攻撃力の差は存在するが、腕の長さ

がそのままリーチとなる。何より警戒するべきは、3戦目に於いてルヴィアに勝利をもたらした手捌きだ。彼女は見世物のプロレス技を、実用レベルに昇華させ、其れの前に凜は敗れた。それ故手で捌かれる事は予期積みだ。それが分っているならば問題は無い。陸の船とも揶揄されるこの拳法は、懐に潜り込む術に長けている。

対峙はこれで4度目。凜にとってルヴィアのその間合いは見きり済みだ。それは間合いの一步外、彼女の肘の狙いは構えも見せず、悠々と歩み寄るルヴィアの腹部だ。凜には待ち受けてカウンターを狙う方法もあったが止めた。

(待つのは趣味じゃないのよね)

震脚を以て凜は踏み込んだ。ズダンと地を振るわす踏み込みの音が後からやってくる。如何ほどの踏み込みだろうか。その威が乗った彼女の肘はルヴィアの右足裏に蹴り止められていた。凜は目を剥いた。

「な、」

ルヴィアの其れはフロント・ハイキックだった。相手が走って向かってきたところにタイミングをあわせて、片足を大きく上げ顔面に打ち付ける、足の裏を用いたプロレスの打撃技だ。体を捻らず真正面から蹴り上げる為フロントという修飾が付く。ルヴィアは本来攻撃に使う技を用い、凜の踏み込みをキャンセルしたのである。足の振り上げが震脚に間に合う筈が無い。凜の体重と脚力が乗っているならば尚更だ。つまりル

ヴィアは読んでいたのである。加えてルヴィアのブーツは相応に厚い皮底だ。如何に凜の肘撃が強大だろうと足へのダメージは無い。ルヴィアはそのまま蹴り押した。凜は堪えきれず、尻餅をついた。ルヴィアのロイヤルブルーのロングスカートが舞い踊れば、幻想種の羽ばたきだ。ペガサスかそれともフェニックスか。

「「おおおおおおお！」」

歓声が2人を包み込んだ。言わずと知れた時計塔の生徒たちである。格闘技なら巻き込まれる心配は無いと集まつてきたのであった。賭博にも成っている事を2人は知るよしも無い。



凜を見下ろすルヴィアは直立不動で悠々と、王者と言わんばかりの笑みである。二人が居る場所は時計塔のメインストリート、つまり舗装された平面だ。だがルヴィアはリングの上に立つて居た、凜はリングから落ちていた。生徒（観客）たちにはそう見えた。凜は忌々しさを隠さない。追い打ちを掛けないところが腹立たしい。

（パフォーマンスって？ 上等じゃない。その余裕ぶつた顔、台無しにしてあげるから）  
凜はゆっくり立ち上がるとタイトスカートの裾を掴み切れ目を入れた。サイドにス

リットが走る。そう、タイトスカートという性質で凧の震脚に陰りがあつたのだ。これで枷は無い、つまりは全力だ。

凧のターンである。彼女は静かにかつ堂々と歩み寄り、ある距離で足を止めた。その様はリングのロープを飛び越える闘士であつた。彼女は脚を開き、腰を落とし、両の腕を、肩を中心に大きく回す。実のところ八極拳に決まつた構えというモノは無い。強いて言うなら、肘打しやうすい様に肘を曲げる、ムエタイの様な構えが有るのみだ。凧が敢えてそうするのはフエイントである。事実、凧の腕の動きに合わせてルヴィアの気配が揺らいでいた。ピタリと凧の腕が止まれば凧の脚は大地を打ち貫いた。

凧には二つの手段があつた。一つ、ゆつくりと歩み寄る手段。距離を少しずつ詰めルヴィアの腕もしくは蹴りを捌き懐に潜り込む。だがこれはルヴィアの距離でもある。八極拳に於いて相手を掴む事はあるが、それは打撃に繋げる中間的な技だ。多彩な投げ技、絞め技を持つルヴィア相手では分が悪い。そもそも一撃必殺こそが八極拳の真髄だ。

だから彼女は走り寄る事にした。頭部をガードする様に両腕を掲げた。当然肘は曲げている。ルヴィアもそれに応じて距離を詰めた。凧の間合いを崩す為である。ルヴィアが両手の平を突出し迎え撃つその様は正に阿吽像。両腕、両手の平を以て闘牛士の要領で凧の踏み込みを捌き、捕らえ、投げ技に持ち込むつもりだ。凧が靠撃（こうげ

き) を用いルヴィアの防御を崩すならば、彼女は敢えて受け、堪えず、受け流す。もつれ込めばそれはルヴィアのペースである。だがそれは凜の狙いであった。凜は曲げていた腕を伸ばしたのである。

「っー」

ルヴィアの表情に焦燥が走った。凜が右肩を引けばその左肩は自然更に押し出される。凜のその左腕、その肘はルヴィアの右腕を捌いた。その懐に達しルヴィアの腹部に触れた。

「もらったっー」

凜の震脚が迸る。その威が乗った左手はルヴィアの腹、つまり重心を捕らえた。凜の狙いは肘撃による打撃ではなく、強く押す事だった。つまりは仕返しである。ただし、読みと読みが交差する高度な思考戦闘の結果だ。ルヴィアは踏みとどまらず、蹈鞴を踏み、転倒した。それを見届けた凜は肩に掛かった、長い髪を背後に流した。これからのように、終わらせようか。追撃を掛けたいが流石にダウンしては、気が引ける。何より彼女の矜持がそれを許さない。そうだ、見下ろしながら罵倒する、これが良い。そう考えていたところ。

「「おおおおおおお!!」」

腹の底を震わす様な歓声に襲われた。



(……あれ?)

数メートル先にルヴィアは仰向けでダウンしていた。二人の周りには歓声を上げる観客(生徒)たち。男女問わず拳を振り翳し、二人の健闘と凜の逆転を称え、そして興奮していた。凜は何となく右手を挙げてみた。

「「おおおおおおおっ!!!」」

少し気分が良い。否、とても気分が良い。憎き金の獣を討ち倒し、観衆から褒め称えられる。その達成感、高揚感は何ほどのものか。

(あ、やば。ハマリそうこれ)

凜は澄まし顔であったが、その表情が緩むのを抑えるのに手一杯だ。パフォーマンスの真似事でもしてみようか、凜がそう思えば歓声の色が変わった。ルヴィアが立ち上がったのである。怒濤の様な歓声は大地を震わさんばかりだ。誰も彼もが最終ラウンドだと確信した。



取り囲む観客(生徒)は100人を下るまい。その様は正に円形闘技場(コロッセウム)だ。二人は最初は歩み、次に早歩き、そして共に駆け出した。間合いを詰めた。

プロレスでも拳を使った攻撃、肘を使った攻撃は存在する。ルヴィアはピーカブスタイルから右手刀を内から外に撃ち出した。チョップと言えばイメージしやすいだろう。凜は左手でそれを払う様に流すと右手を掲げ……それはフェイントだ。凜の右手はフオローであるルヴィアの左手を押さえた。

凜はルヴィアの手刀を受け流した左腕を曲げ、脚力と背筋を用いて肘を打ち込んだ。ルヴィアはそれをフリーの右腕で払った。ラリアットの要領だ。凜の肘撃は威力が凄まじい、その為闘牛士の要領でルヴィアは体を捻ると、凜の左側に回り込んだ。ルヴィアに掴まれると厄介だ。凜は瞬間的に背でルヴィアを押しした。タイミングを崩された彼女は踏鞴を踏み、数歩離れた。睨み合う。

二人のこれらの一連の動作は決め技（止めを刺す）為の予備攻撃に過ぎない。一手、三手先の読み合いと、緻密な体捌きはもはや芸術（アート）である。誰も彼もが歓声を上げていた。陶醉し感極まっていた。もはやそれは戦の勝ち鬨であった。ただそれがどちらにもたらされるのかは、神のみぞ知るだ。ルヴィアは己の金の髪を、凜は己の黒の髪を、手で櫛流し、背へと流す。まるでマントを翻すかの様だ。『ルヴィア』だと『トオサカ』だと観客は二人の闘志を称え二人の名前を叫びだした。それに応えるかの様に二人は組み合った。互いの指を絡め、掌を握り合い、渾身の力を籠める。技の応酬は飽きた。今度は力比べだ。二人は一步も引かなかった。

「「おおおおおおおつ!!」」

暴徒寸前にまで興奮した観客（生徒）たちの環を分け入り現れたのはグレイであった。何故だろう彼女は一人だった。答えは簡単だ。彼女が援軍を募ろうとエルメロイ教室に及んだ時もぬけの殻だったのである。凜が時計塔にやってきた、この噂は瞬く間に広まり、彼ら彼女らは全員逃げ出したのだ。当然だろう？ 巻き込まれては叶わない。巻き込まれ無事な人間は数える程しか居ないのだ。

組み合う二人を見たグレイは青ざめた。逃げたい、と言うのが彼女の偽りなき本心である。何故ならば。力比べをする二人は、弾き合う二つの竜巻そのものだ。近く付く事すら危険極まりない。加えて100名に達する生徒たちの視線が集中する二人に、飛び込むのも気が引ける。実際に、歩み寄れば水を差すなどヤジすら飛んできた。どうしてこんな事に、彼女はそう嘆いた。そして根拠は無かったが真也を恨んだ。勇気を振り絞りこう告げた。その距離は自動車1台分で、随分遠い。

「二人とも止めてくれませんか。時計塔が壊れます」

二人は無視をした。

「というか壊れ掛かっています。いえ、壊れてませんかここ」

時計塔のメインストロートの一面は魔術戦の余波で焼け焦げていた、コールタールの様に真っ黒だ。蜘蛛の巣の様にヒビも入っていた、砕けた場所もあった。よく見れば、

近くにあつた椅子やテーブルがひっくり返つてゐる。焼け焦げ、砕かれてもいた。二人は無視をした、というよりはグレイなど眼中に無かつた。グレイは迷つた。これ以上は御免だと、逃げるべきだと、本能がひっきりなしにアラームをかき鳴らしていた。

(ヒヒヒ！ おい相棒！ 本当に突つ込むつもりか!?)

袖の中の相棒が喚くが、師の命とあつては退く訳にも行かないのだ。彼女は更に近づいた。手を伸ばせば届く距離だ。彼女の心境は爆弾解体に他ならない。

「あの。二人とも止めて下さい。止めるべきです。やめて頂けませんか？ 止めた方が良いと思います」

グレイの必死の懇願(制止)は全く届かない。余りの歓声にグレイの声は掻き消されてしまつていた。それ以前に二人は二人以外完全に忘れてしまつていた。

「飽きた」

二人は再び手技の応酬を始めた。互いが互いの手を弾き続けた。そのうち手技では埒があかぬと凜は右脚を上げ、倒れる力と蹴り出しを併用し、ルヴィアの左脚を狙つた。読んでいたルヴィアは左脚を引いて凜の腕を掴もうと右手を差し出した。それを読んでいた凜はそのまま倒れ込み間合いを崩した。そして肘を打ち込んだ。それを読んでいたルヴィアは手の平で捌いた。読み、読み、読み、読み。思考戦鬪の連続である。

二人の其れは演舞の如く。流石のグレイも見とれていた。だがそれは隙である。あ

と言う間もなく近づかれ、グレイは弾き飛ばされた。踏鞴を踏み、躓き、突つ伏した。顔面を打ち付けとても痛い。起き上がったグレイは鼻先を真つ赤にして涙目だ。だがその心中、船を翻弄する嵐の様に怒りが轟いていた。海洋神も逃げ出す勢いだ。

「嫁入り前なのに傷が残つたらどうしてくれる」

下手に出ていれば調子に乗る二人に怒り心頭だ。もういい。サーヴァント張りの身体能力を解放し、それに物を言わせ武力鎮圧する……それは辛うじて踏みとどまった。ギャラリーが多すぎだ。不特定多数の人目に付くのは避けねばならないのだ。何か無いかと思案に暮ればピコンとグレイの頭上に電灯が瞬いた。それは2人に共通のキーワード、彼女は胸を張り息を吸った。

「いい加減にして下さい！ シンヤさんに言いつけますよ！」

二人はピタリと止まった。それは二人にとつて無視出来ない名前であつたからだ。グレイのセリフがどれ程の重みであつたのか、彼女に首を向ける凜の動きは石臼のよう。なぜ義弟の名前が出てくるのか。なぜ言いつけるのか。なぜグレイは義弟の事を知っているのか。なぜ呼び捨てなのか。そもそも、なぜ「二人とも」なのか。凜はルヴィアと義弟の関係を知らないがルヴィアは二人を知っている。従つて我に返るのは早かつた。凜のそれは隙である。ルヴィアは凜の背後に回り込むと、彼女の腰に取り付き、腕を回し、胴体を抱きかかえた。

「っー」

凜は藻掻いたが手遅れである。ルヴィアは凜の「身長159センチ、体重47キロ」の身体を持ち上げるとブリッジの姿勢を取り、後頭部から地面に叩き付けた。それは「ジャーマン・スープレックス」プロレスに於いて投げ技の一つであり、カール・ゴツチを祖とする派手さ、美しさを満たす高度な技だ。ルヴィアはそのままホールドに繋がた。

「ジャーマン・スープレックス・ホールド！」

誰かが叫んだ。そしてどこからともなく現れた生徒が地面を三つ叩きスリーカウント。その生徒はルヴィアの手首を掴むと高々と掲げた。

「勝者！ ルヴィアゼリッタ・エーデルフェルト！」

「「おおおおおおお!!!」」

戦歴はルヴィアの2勝1敗だった。次は凜が勝つ、誰もがそう思ってた居た。誰がこの結末を想像できただろう。その意外性、そして激闘。観客たちは惜しみない歓声を上げていた。ルヴィアもまた両手を掲げ観客の声援に応えていた。疲労感の中にある充実感。その満たされた喜びはゴールドメダリストそのものだ。そして真也は現れた。

「うげ」

思わず声が出た。彼の視線の先には開脚前転をし損ない、途中で止めた様なポーズで

失神していた義姉が居た。敢えて表記するならばま〇ぐり返しのポーズである。手紙を出したなら居場所が知れる。1年の旅程が伸びに伸びて2年かかったのだ。誰かが迎えに来るだろう事は容易に想像できた。誰かなど義姉に決まっている。ルヴィアは己の従者に気が付くところ言つた。その表情は満面の笑みだ。

「シンヤ、お姉様がいらしてますわよ。もつと嬉しそうな顔をしなさいな」

「無茶言わないで下さい」

真也は慌てて駆け寄つた。下着が見えていない事に安堵と感心をしつつ、義姉を起せば怪我はない。それはルヴィアの手加減であり、凜の礼装の効果でもあり、凜の魔術刻印の効果でもあった。流石遠坂の当主だ、彼はそう思いながら彼女の頬をペチペチと叩いた。

「ん……」

ぼんやりと開いた瞼から覗く義姉の瞳は、焦点定まらずぼんやりとしていたが、義理の弟を捕まえるとピタリと止まった。

「……」

一刻。その瞳に採光が戻れば、表情に宿るのは険しさである。義姉は義弟の胸ぐらを掴むと激しく前後に揺さぶつた。シエイカーもびっくりな勢いだ。

「漸く見つけたわよこのバカ真也！ 今の今まで何処ほつき歩いてたのよ！」

「あーうーあー」

「私言ったわよね!? 十分気をつけなさいって! なんになんで時計塔をのうのうと歩いているのよ! バカなの!? バカならバカって言いなさいよ! 諦めるから!」

「うーあー」

「心配しなかつたわけ?! 心配してないと思つたわけ?! 私たちがどれだけ気を揉んだか分つてるの?! 分つてないでしょアンタ!」

「あー、あー」

前にもこんな事があつた、そう思いつつ彼は揺さぶられ続けていた。

「しかも1年の旅程が2年! しかも音沙汰無し! 釈明有るなら言つてみなさい! 聞くだけ聞いてあげるから! その後はきっちり落とし前つけるからさ!」

「手紙だしてたろー。ちゃんどー」

「定期的に出せつて言つたでしょ! 最長3ヶ月も間を開けて、どういうつもりよ!」  
「いや色々あつたもんだからー」

「なによ色々つて!」

「もちろん定期的に出せない理由ー」

「その理由を言えつて言つてるのよ!」

真也は胸ぐらを掴む義姉の手を解くと立ち上がった。襟首を正す。



「そりや予定外の出来事（トラブル）に決まってる」

彼女は詰め寄った。義姉はこれ程小さかったか、と言うのが彼の印象だった。義姉は159センチと殆ど変わっていないが、方や真也はランサーと同じ185センチになっていた。その印象は当然の結果でもあった。

「そういう事が起きたら中止って言わなかった?！」

「遅れた事は謝るさ。でも仕方ないだろ。もし失敗したらランサーに会う資格がないって事になるから、簡単に諦める事なんて出来なかった。どこかの誰かが再チャレンジを認めてさえくれば話は違っていたけれど」

「姉の言う事を無視するなんていい度胸してるじゃない!」

「本音はそれか」

「何よ文句ある!？」

「ないよ。文句言っても聞きはしないからな。言ったところで意味が無い」

「へえ、そういう態度取るわけ」

義姉の左腕が唸りを上げだした。真也は腕を組んでうんざり顔だ。

「そうやって直ぐ武力行使に訴えるところ、変わってないな、相変わらずだ」

「口で言っただけなら仕様が無いじゃない? 聞き分けのない弟なら尚更」

「訂正。横暴さは拍車が掛かってる」

「分っているなら十分よ。覚悟しなさい」

逃げれば、或いは防ぐと拗れる事はあの1年で身に染みていた。甘んじて受けるしか無い。キャスターが居るなら死にはしまいと彼は達観の体である。だが救いの手は彼の従者では無く彼の主であった。

「その辺にしておきなさいな。姉弟仲が良いのは結構ですけれど、魔術まで持ち出しては品格が知れようというもの。何より負けた腹いせと区別が付かなくては、見苦しいだけですよ」

義姉はルヴィアを睨み付けた。

「遠坂家の事に口出ししないで貰いたいわね、レディ・エーデルフェルト」

「ミス・トオサカ。知らなくて当然でしょうが、シンヤは私の従者なのですから。口出しは当然ですよ」

「じゅ、う、しゃ?」

義姉の視線がルヴィアから真也に向いた。義姉の首は、油の切れかかったロボットの様。加えて言うならば、その表情は引きつっていた。笑おうと思うが、笑えない、そう言わんばかりである。

「あー、まー、そうだな。取りあえずこう答えようか。久しぶり、元気そうで何よりだ。姉さん」

この期に及んで三人はグレイに気がついていなかった。晩ご飯を集ろうと彼女は誓ったが、誰がそれ責められようか。否、誰も責められまい。

つづく！

## 三話

真也は主に断りを入れ、立ち話も何であるからと義姉を家に招いた。ここだけの話だが、主があつさり認めた事に、意外性と僅かばかりの落胆を彼は感じていた。取り合いと言う展開を僅かだが期待していたりもした。セイバーとイリヤが士郎を取り合うという状況を、遠からず羨ましく思っていたのである。有るかな、無いかな、無かった、と言う訳だ。愚かしくも、哀れである。

義姉は主と同じ様に7階建にも関わらずエレベーターが無い事に不平を言った。言い回しは異なっていたが指摘内容、そしてその順番は同じだ。

(ほんと、そっくり)

部屋に入った義姉はぐるりと見渡し開口一番詰め寄った。

「何で化粧台があるのよ！」

「前の住人の置き土産だ。同棲とかそう言うのじゃ無いから」

「あの洋服ダンスの中は？」

「開けてない」

「へえ、見ず知らずの女の人が使ったベッドで寝てる訳。我が家の長男がこんな変態だ

なんて母さんになんて言えば良いのよ。頭が痛いわ」

「俺はソファアで寝てるから。ベッドは使つてない」

「ソファア？　ベッドがあるのにどうしてよ」

「長旅でそういう癖が付いた」

「良くないわよそれ。寝ている様で寝てない、疲れが取れないんだから」

敢えて今話すことでも無かろうと話を打ち切る事にした。彼の指が示した先はそのソファアである。

「その辺に座つてくれ。キャスターは呼んだからその内来る。コーヒーで良いか？　インスタントだけで」

義姉は何も言わずソファアに腰掛けた。文句が有れば言う、ないなら何も言わない、それを思い出した真也は黙つてコーヒーを淹れ始めた。

「なんで夜逃げ同然の家を選んだのよ」

「この部屋はそういう場所だね、障りやすいんだ。だから安かつた、そう言う理由」  
「そう」

「どうぞで」

義姉の前に置かれたのは陶器の白いコーヒーカップだった。ソーサー（皿）にスプーン、フレッシュも添えてあつた。

「……ソーサーを持ち出すなんてどういう心境の変化よ。何でもかんでもマグカップ使っていた真也が嘘みたい」

「色々あったから」

2人そろってソファアに腰掛け向かい合った。義姉は手にある白いコーヒーカーツプに口を付けようとしてその手を止めた。

「背、伸びたわね」

「うん、少し」

「結構伸びたと思うけれど」

「そう？ 計った事は無い。どれ位だろ」

「ランサーと同じ位はありそうね」

「そうか、ランサーと同じぐらいか。えへへ♪」

ランサーに似ていると言うと、途端に機嫌が良くなるのであった。

「ふん。これで士郎とのいざこざも終わりだな。圧倒的勝利だ男として」

「衛宮君も伸びたわよ」

「ほう。どれ位かね」

「アーチャーぐらい」

ランサーは185センチ、アーチャーは187センチだ。つまり士郎の方が背が高い

と言う事である。

「ふん、男の価値は身長で決まらないもんね。中身で勝負してやる」

「……軽くなったわね、アンタ」

「メリハリが大事だつて長旅で気がついた」

「メリハリというよりはランサーを意識している訳？　ランサーの様になりたいとか」

「意識していいと言えば嘘になるかな。心底辛い状況でも笑つて乗り越え様とするタフさ、その場その場で悔いを残さない生き方は良く覚えてる」

「そう」

「そう」

悪いところまで似なければ良い、そう願う義姉であつた。

「で？」

「で？　とは？」

「ならそのハリは？　つて事」

「冬木市にはセイバー、ライダー、キャスター、そして剣製の魔術師がいるんだ。真祖でも裸足でにげだすさ、」

無言の義姉が差し出したのは手紙だつた。

「何これ」

それに書かれていたのは2年開けた家族からのメッセージであった。

「早く帰って下さいね。じゃないと泣いちゃいますからね。桜」

「元気な姿で安心させて下さい。皆も私も待つてます。葵」

「私が怒るかどうかはお土産次第だ。綾子」

コーヒーカップから立ち上る、湯気越しに見える義姉の瞳は鋭く光っていた。義姉は物静かであったがキレる寸前である。大幅にずれ込んだ旅程。諦めきれなかったと言えば聞こえは良いが、相談もせず強行したとも言える。彼は彼女らを蔑ろにしたのだ。言葉が出なかった。

「真也。アンタが何をしたのか、漸く理解出来た？ 不安を強いたのは私だけじゃ無いのよ？」

義弟は深々と頭を下げた。

「済まなかった。心配掛けた」

「皆への謝罪を考えておきなさい」

「そうする」

「ランサーの事となると目の色変えるわよね真也つて。ま、無理も無いんだけどさ」

「3年前よりは落ち着いた、と思いたい」

「それで答えは見つかった？」



「言うよ」

彼は居住まいを正した。

「二人にされたこと、二人にしたこと、あの行動は俺がした事だったのか、散々考えて、喜んでくれたならそれで良い、って」

「そこに自分があるの？」

「もし無いなら、不特定多数を相手にするだろうな。けれど違うだろ。そだな、誤魔化しは無しだ。俺の姉と妹の二人が喜んでくれたならそれで良い」

「そう」

「ごめん、2年掛かった」

「その手紙の裏を見なさい」

ペラリと捲ればその中央に簡潔な一文があった。ご丁寧に古代ギリシャ文字である。

「覚悟しておくように」

当然その筆跡はライダーの物であった。真也はたちまち硬直した。散々抓られ捻られた左頬が痛み出した。ゆっくりと頬を摩れば、その確認は石橋を叩いて渡るかの如く。

「……怒ってた？」

「とても。おしかり5時間コースね、あれ」

そして今度は青ざめた。3年前にライダーは真也の教育係となったのである。それは筋力という意味で他に適任が居なかった為だが、千歳の申し出でもあった。ライダーライセンス（教育許可証）と言う訳である。彼は脂汗を垂らし、呆然とその文字を凝視するのみだ。金縛りというよりは見えない彼女の鎖で拘束されているかの様だった。

「ふん、いい気味なんだから」

呼び鈴が鳴り、真也が扉を開ければそこにゼニスブルーの長い髪が流れていた。真也は宝箱の中の宝石を見つけた様な顔である。

「2年ぶりだキャスター。相変わらずの美人さんで何より……なんだよ。じろじろと」

真也の姿を見たキャスターは、その瞳を大きく見開いていた。絶句とも言うだろう。彼女の瞳に映るのは真也が纏う真紅の外套だ。色は問題ないが、大きな違いを彼女は見つけたのである。真也の従者である彼女にとつて、それは大問題であった。

「いえ。実り多き旅であった様で何よりです」

「背なら伸びたぞ?」

「その様です」

「まあ良いけれど。その辺に座ってくれ。キャスターもコーヒーで良いか?」

真也がその場を後にすると、キャスターのその発言は追いかける様であった。

「気づいておられますか?」

「もちろん。姉さんの髪型が変わってない」

「なによ、文句ある？」

「いや、少し驚いたってだけ。相当気に入ってるんだな」

「マスターが一目見て分る様にと、」

「うっさい！」

「そうか。そうだったのか」

コーヒを淹れていた真也の手は止まり、振り返れば、彼は義姉に向かって歩き出した。その表情を表せば感無量の一言である。ソファーに腰掛けていた義姉は思わず立ち上がり、後ずさった。

「違うって言うてるでしょ！ 真に受けるなこのバカ！」

「姉さん、俺は感激している。この喜びをどのように表現しようか悩ましい位だ」

「しなくて良いからね、あれ」

真也は義姉を抱きしめた。

「リンデニオン補給ー♪」

「それ止めなさいっていつてるでしょ！」

「おお、そうかそうか♪」

義姉がその顎に掌底を打ち込めば、彼は思わず仰け反った。その顎を腫らしつつ、涙

目になりつつも、腕の中の義姉に笑いかけた。

「その様子じゃ未だカレシ無しか。弟としては心配でならないよ」

「いけしゃあしゃあと言ってくれんじやない。遠路遙々地球を半周すれば、よりにもよつてエーデルフェルトのご令嬢といちやついてさ」

「そんなんじや無いよ。言つたろ。姉さんと桜が片付くまではそんな気は無いつて」

「は、どうだかね」

「おろ？ ヤキモチか？」

「死になさい。つーか、アンタ本当に軽くなつたわね」

主の物言いが軽薄になつた、それはキヤスターも同意だったが今はそれどころでは無いのだ。

「いえ、私が申し上げた相手はマスターでは無く凜様で、その言及はマスターの出で立ちの事です」

義弟の腕の中で暴れていたその義姉は、彼が纏っている真紅の外套に気がついた。しまったと真也はまた青い顔である。彼はゆっくりと義姉を解放すると背を向けた。

「コーヒ―淹れるから」

そして義姉は義弟のコートを掴んだ。時が止まった。義姉の表情は、ルヴィアの弱点を見つけたかの様な悪い顔だった。隠していたテスト用紙を見つけたとも言うだろう。

「ねえ真也。私の思い違いかしら。そのコート出発時と違う気がするのだけれど」  
「気のせいじゃないかな」

「出発する時に装備していたコートは？」

「今来ているコレ」

「真也」

「……壊れたので捨てました。でもちゃんと、殺しておいたから大丈夫」

「あれがどういう代物か覚えてる？」

「ええ、まあ」

「キャスターが6ヶ月掛かって作った礼装を壊した？」

「はい」

「何があつたのよ」

「あ、うん、ちよつと」

「怒らないから素直に話なさい♪」

可憐な微笑みだったが、迫力があつた。

「えつと」

「早く言え。まどろっこしい」

「それは旅の途中の事でした。その旅人はとても強い死徒に襲われて、ああ、なんと言う

事でしょう、大事なそのコートはその時に壊されてしまったのです」

「死徒?」

「そう。真つ白な犬のような狼みたいな奴でさ、プライミッツ・マードーって言ってた」

「死徒二十七祖第1位の?」

「うん。直感でヤバイって思ってた、とつさに肥だめに突っ込んだら喰われずに済んだ。う○こ塗れなんて喰いたくない、触りたくないだろうしね。あはは。そしたら中学生ぐらしいの女の子に“誇り有る死か、生き恥を晒すか、好きな方を選ぶがよい”と聞かれて、」

「誰?」

「アルトルージュ・ブリュンスタッド、そう自分で言ってた」

「死徒二十七祖第九位の?」

「そそ」

「それでどうしたのよ」

「いやもう、尻尾巻いて逃げちゃった。てへぺろ♪」

義姉はキレた。

「ガンド! ガンド! ガンド!」

「痛い、痛い、痛い」

手加減していたとはいえフィンの一撃を連射すること暫く。義姉は肩を怒らし、髪を振り乱し、そして息を切らしていた。義弟は床の上でひっくり返っていた。その表情は腹痛に苦しむかの如く。

「俺は姉さんに殺されそうだよ」

義姉は馬乗りになるとその胸ぐらを掴み上げた。そして前後にシエイクである。

「あーうーあー」

「アンタね！　なに死徒に目を付けられててるのよ！」

「大丈夫だつてー。連中不死だからー、気が長いからー、思い出した頃には俺死んでるー、”リイズ。そういうええばあの小僧どうしたかの？”　”100年経っております、

アルトルージュ様”　こういうノリー、問題ない、大丈夫、大丈夫ー」

「そういう問題じゃない！　遠坂の子孫が目を付けられる事だつて考えられるじゃない！」

「え、」

「え、」

真也の”え”とは自分も結婚出来るのだろうか、という意味であつた。凜のそれは少し違つていた。真也が不在の冬木市で、とある大イベントが起きたのだが、その影響であつた。キャスターは聞いているだけで恥ずかしい。義姉はコホンと一つ、仕切り直

し。

「死徒に遭遇するのだから希なのに死徒二十七祖に遭遇するってどういう事よ!」

「良い質問だ。俺も不思議」

「帰るわよ」

「いやそれがだな」

「うっさい、もう帰るから。やっぱり一人旅なんてさせるんじやなかった。金輪際、家からいっつ歩も出さないからね、覚悟しなさい!」

「んなむちやな」

「なによ。私の言う事が聞けないわけ?」

うふふ、と義姉は笑い始めた。そして左腕の刻印がエライ勢いで回り始める。電動ドリルもびつくりの勢いだ。〃帰ると言うまでぶつ放す。言う事聞くまでぶつ放す〃

そういきり立てば、どうした事だろう、彼女の義弟は見るからに消沈していた。胡座をかき、背を丸め、視線は落ちていた。それは後悔と屈辱である。余りの落差に義姉も戸惑った。

「……なによ。突然盛大に落ち込んで」

「ごめん、家名もこの色も汚した。姉さんとの心臓の誓いも破り掛けた。本当に済まない」



「……」

彼女は義弟の頭に腕を回すと、そのまま胸の中に納めた。頭に鼻先を埋め、髪を軽く握った。

「ばかね、生きていてくれた方が嬉しいんだから。家名の為にと死んだら逆にとつちめるところだったわよ」

「ごめん」

「もういいのよ。荷物を纏めなさい。ここの家財は備え付けでしょ？ キャスター、私は時計塔で手続きしてくるからこのバカ見張ってて」

義理の弟は立ち上がった義姉の腕を掴んだ。

「ちよいまち。いま雇用契約を結んでる。直ぐ帰るのは無理」

「雇用って何よ」

「ルヴィアゼリツタ・エーデルフェルトは雇用主だ。従者ってそういう意味」

「なによそれ」

「手紙で書いたろ。親切な人って」

「へえ、どのぐらい親切だったわけ？」

「契約金50000ユーロに加えて、住宅補助を初めとして、各種手当て付き」

「たった50000ユーロでホイホイ尻尾を振ったって事？」

「いや、5000ユーロって70万だぞ」(※2015/06/12現在)

直死の魔眼を持つサーヴァントを一月雇って5000ユーロは破格ではないだろうか、キャスターはそんな事を思った。

「というか、尻尾振りだなんて随分嫌な言い方するな」

「それだけ?」

「それだけ」

「本当にそれだけ?」

「多少入れ込んでるけれど、帰国する事は伝えてあるし、その意思は変わらない。ただ一ヶ月間って期間があるから中途半端は避けたい。残りは2週間だ。それまで待つてくれないか」

義姉は彼を睨むとこう言った。

「キャスター、留守番お願い。真也と少し外歩いてくる」

「なんだ、急に」

「なにぼさつとしてるのよ。さつさと来なさい」

「ぜんぜん分つてないじゃない」その心の独白を聞いたのはキャスターのみであった。



時計塔を出た二人はそのまま川沿いに歩き始めた。その川は南イングランドのケンブル村からオックスフォードを通り、更に時計塔を介しロンドン、そして北海へと続いているテムズ川である。ロンドンとは異なり時計塔周辺では公園の様相を見せていた。川の兩岸には歩道と道路が走っていたが、自動車の通りは殆ど無く静かなものだった。ガス灯と思わしき電灯と街路樹が川に沿って等間隔に立っていた。明かりが灯るにはもうしばらく時間が必要だ。川を泳ぐボートと白鳥はのんびりしていた。水面は静かであったが、川辺を走る風はまだ寒い。空は良く晴れていたが紅がかった。直に今日も終わるだろう。

凜はその川に沿う塀の上を歩いていた。両手を広げバランスを取り歩く様は、綱渡りでも出来そうな程の安定さであった。まず無いだろうとは思いつつ真也は言った。

「落ちるぞ」

凜は答えた。

「桜と違って鈍くさくないから」

2人が歩く道は真つ直ぐで、その先は木陰に塗れていた。暫くぼうと歩くと、切り出したのは真也である。

「話があるんだろ？」

「あの部屋に化粧台があつたでしょ」

「さつきも言つたけれど、前の人が置いて、そのままにしてあるだけ」

「分つてる。そういう雰囲気は無かつたから。私が言いたいの、ああそうなんだな、つて思つた事」

「らしくなく要領を得ないな。はつきり言つてくれ」

「家族を維持するのは大変で、意思、気持ちだけじゃダメだつて事。住む場所を用意して、それを維持して、食費や光熱費などのお金も工面して、税金もそうよね。そう言つた物質的な事と、住む人達の生活行動とか、人間関係から見えていかないと。逆に言つと、そう言つた活動から家庭と家族ができる。家を作るつてそういう事だから。私が真也に言う事でも無いでしょ？」

「……何かあつたのか」

凜は少しバランスを崩した後こう告げた。

「セイバー、赤ちゃん産んだわよ」

真也は左隣でバランスを取りながら歩く凜を見上げた。顔を上げ、瞳は真つ直ぐだが、その視線は未来が見えていない。当然だった。真也は彼女に括られているが、凜もまた彼に括られている。2人の歩む未来は定まっていな、というより見えないのだ。

「ほら、セイバーって古い人だし、見た目私たちと同年代だけど実際は年上で、早めに欲しかったみたい。真也が出発したその年の6月に挙式して、去年の8月に出産。プロポーズは真也が発つ直前だつて」

「……そう」

「驚かないのね」

「そんな気はしてた。どことなくぎこちなかつたし」

「セイバーは真也の不在を気にしてたけれど」

「いいさ。こう言うのは勢いだつて聞くし。俺のせいで時期を逸してもらつても困る」

凜はポケットから写真を出すときそれを真也に手渡した。その写真の中では幼子が笑っていた。畳の上に敷かれたタオルケットの上に寝そべり、父と母に挟まれていた。何の不安も恐れも無い無邪気な様だ。金髪碧眼。見るモノ聞くモノ全てが珍しい、そのようなクリクリの瞳をしていた。イリヤが撮つたらしい写真に写るセイバーは聖母の如き慈愛を見せ、子を挟み笑う士郎には頼もしさの様なモノが見て取れた。

真也が感じた事は三つだ。一つ目は祝福。二つ目は不安だ。オセとヘルメスの語つた言葉が脳裏に響き渡る。この子も俺の様になるのではないか、その根拠など無かつたが不安になるには十分だ。

「その、大丈夫だったのか。受肉した英霊と現代人の子供って、存在的な格差がありすぎ

るだろ」

「キャスターが事前に手を回してたみたい。セイバーに聞かされて、私も後で知ったのだけれど随分神経質だったみたいね」

「まあ大事だしな。無理もないか」

「ヘカテーって出産の神様でもあるから上手くやったんでしょ」

凜はセイバーの微妙な表情を思い出した。言いたくても言い出せない、その様な気遣いの現れである。セイバーはキャスターから真也の出生について聞かされたのであつた。もちろん凜に伝える事など出来なかつた。凜は写真を見つめる真也の、他人事で無い表情が気になつたが、

(……まさか、ね)

とその荒唐無稽な考えを一蹴した。

「男? 女?」

「男の子。名前は一郎、衛宮一郎。皆はイチローって呼んでる。日に日にセイバーに似てきてセイバーは立派な騎士に育て上げるって息巻いてる。この間一人で立つたつて大騒ぎ」

「つまり何か。土郎みたい料理が上手くて、投影が出来て、セイバーみたいに剣の腕が立つかもしれないって事か?」

「おまけにセイバー似の美少年。ペンドラゴンの血を引く由緒ある血筋とくればモテるでしょうね」

「何故だろ、女の子的な意味で未来が見える。未来日記張りの確信付だ。俺は結婚しても娘だけは作らない」

「もって行かれるわね、絶対。それより今のうちから唾を付けておこうかしら♪」

「この子が年頃の頃、姉さんは立派なおばちゃんだよ。ごめんなさい、その左手の呪い仕舞って下さい」

「つとに一言多いんだから」

「野球のバットでもプレゼントするか。大リーガーも悪くないだろ」

若い夫婦が2人を通り過ぎていった。若い父親が押すベビーカーには1、2歳の子供が眠っていた。真也の感じた三つ目とは焦燥である。

「友人が結婚して子供を産むって、なんかおいていかれた気分だな」

写真に写る父親となった同級生の顔を見れば、己との漠然とした違いに、焦りと嫉妬を禁じ得ない。

「私が協力してあげても良いわよ？」

「そーね、今度頼む。明後日ぐらい」

「つまらないリアクションね」

「意地の悪いお姉ちゃんだってもう身に染みてる」

「何が言いたいかって言うと、真也が旅している2年間は、私たちにとっても2年間だったって事」

「……契約解除が出来ないか聞いてみるよ」

「ん」



一夜開けたルヴィアの朝はエルメロイの言葉から始まった。

「ルヴィアゼリツタ・エーデルフェルト。毎年の事だが言わせてくれ。メイנסトリートはこの時計塔に所属する全員の財産だ。確かにこの時計塔には公共物保全に関する規則は無い。それは改めて用意する必要が無いと言うだけであり、暗黙の了解と言う形で存在する。この時計塔がイギリス立法から独立しているとは言え、規範、法令、全ての決まりを時計塔用に設けてはキリが無いからな。使用されない決まりなど、管理・維持を考える手間を考えるだけ無駄極まりない。そう、確かに生徒が実験に失敗し施設を破壊する事はままある。それを大目に見るのは魔術協会の、魔術師の、魔術の発展に寄与すると言う活動方針を有するからだ。魔術の発展に危険はつきものだ。施設の損壊



を恐れ、魔術の研究を抑止しては本末転倒。つまりは生徒の良識と技量に委ねられている。だが今回の君の場合は極めて個人的な理由から損壊に至っている。例えばそれが目的で無いとしても、損壊が副次的なモノだったとしても、見過ごす理由にはならない。たしかに君が持つ財力ならば修繕など造作も無いだろうがそういう問題では無い。理解しているのか。私は君の“行動を”咎めている」

ルヴィアの背中を見送るとその扉は思いの外強い音を立てた。エルメロイは執務机に肘を置き両手を組んだ。目を瞑り口を瞑れば、瞑想しているようにも見えたが、眉を寄せていては台無しだ。彼はおくびにも出さなかったが、躊躇いを籠めて電話を取った。ルヴィアに説いただけでは終わらないのだ。

『はい、管理部ですが』

それは甘く、刺激があり、何とも耳をくすぐる声だった。はてな。エルメロイは首を傾げた。管理部の応対をする女性はもっと平凡なはずだ。答えは簡単、別人だからだ。付け加えれば、彼はその声に聞き覚えがあった。

「なぜ法務部の貴女がそこに居る。ミス・アダシノ」

『偶々、です。フロアも同じですし電話も近い。担当者が偶々席を外していただけ。それよりもエルメロイ2世様。出会って3年目。そろそろ“ひしり”と呼んでも良い頃だと思いませんか?』

「話を逸らさしないで頂きたいのだが」

『貴方の苦惱めいた声をお聞きしたかった、と申し上げれば喜んで頂けるかしら』

「貴女と駆け引きをするつもりは無い、そう申し上げている筈だ」

『連れない方。身を粉にして尽くしているのに貴方は一向に振り向いて下さらない。それほどグレイさんが大事?』

「貴女には関係の無い用件だ。言及は謹んで頂きたい」

『確かに彼女は手放すには惜しい駒ですから。ロードという立場を考えれば致し方ないのかしら』

「この話を続けるならば打ち切らせて貰う」

『昨日の騒ぎを知らない者はこの時計塔にいませんもの。その様子ですと方々から突き上げられているのでしよう。貴方の苛立ちを堪える声、好意に値しますわ。体の芯をくすぐられる様』

「化野菱理（あだしの ひしり）」

エルメロイのその声は何時になく重々しい。

『次回は是非、ひしりと呼んで下さい。それでは管理部代理としてお答えいたします。ルヴィアゼリツタ・エーデルフェルトとリン・トオサカのいざこざは想定範囲内。いえ、そのメリットを考慮すれば些細な事ですから。不問とします』

「そうだろうな。抑止力としてのルヴィアゼリツタ・エーデルフェルト、これの良いパフォーマンスとなった。刃向かおうという者はそうそう現れないだろう」

『彼女に建前の注意をしたならば、この一件はクローズです』

「新入生が入ってくる来年もまた繰り返し返す、というのは消極的だ」

『仕方ありませんわね。彼女程強力で、目立ち、人目を憚らず魔術を行使する風変わり  
は居ませんから』

「建前上、感謝を述べさせて頂く」

『お食事に招いて頂ければ、これ以上望みません』

取引にしては格安だ。

「……私の趣味につきあえるなら、ご招待しよう」

『今からお誘い頂くその日が楽しみです。ところでエルメロイ2世様。最近良い駒を追  
加で入手されたとか。それも、組織の存続維持を前提とする扱いやすい良く切れる刀。  
一ヶ月というのは勿体ないですね。期間延長を考慮する価値が有るのでは無いかし  
ら。なんと云ったかしら。そう、遠坂真也』

「ミス・アダシノ。今の貴女の言及はロードの権限を侵すものだ。これ以上は聞き咎め  
る」

『単なる噂話ですわ、ロード・エルメロイ2世が最近何かを手に入れ、それをひた隠しに

しているという話も。もし本当なら私にだけお話し頂きたいもの。その程度のご褒美を期待しても罰は当たらない、そうは思わない?』

「その様な事実は無い」

『そういう事にしておきましょうか』

「長話をしすぎた様だ。それでは失礼する」

『ごきげんよう私のロード』

耳をくすぐる艶声を最後に、エルメロイは受話器を置いた。彼は深々とソファアーに身を預ければ、保管施設に存在するそれ（槍）を意識した。

「早い」

彼は叫びた。幾ら聖骸布で封印されているとは言え、これ程の歪みを完全に隠す事は難しい。この時計塔には秘密を知る術に長けている者も多い。その存在を知るだけなら尚更だろう。化野菱理（あだしの ひしり）のあれは警告だ。早い内に手を打て、という彼女なりの気遣いだった。トオサカに触れてはならない事になっているが槍は別なのだ。

「まったく、頭が痛い」

その執務室は彼の苦悩で飽和しているかの様に何時までも重苦しかった。



エルメロイ教室のソファアで向かい合うのはグレイとルヴィアである。ルヴィアが手にするティーカップのその水面、走る波紋も苛立ちを隠さない。

「まったく。朝一番の呼び出しに何事かと思えば。お喋りな殿方というのは見るに堪えない、聞くに堪えませんわね。しかも何度も同じ事を執拗に繰り返すなど、その性質を疑いますわ」

ルヴィアはあの大騒動を駆けつこでもしたかのように扱っていた。それに呆れもすれば畏怖も感じるグレイであった。

「レディ・エーデルフェルト。師匠への批判は聞き咎める立場なんですけれど」

だが彼女は全く聞いていなかった。

「やはり殿方というのは素朴で飾らない方が良いですわね。ミス・グレイ。貴女はそうは思いません事？」

遠坂の長男は一体どうやってこのご令嬢と意思疎通を図っているのか、グレイにはそれが不思議でならなかった。引いて押す、真也はそれを繰り返しているだけだが、彼女は知るよしも無い。

「シンヤさんは素朴でもありませんし、見栄を張る人だと思えますけど」

「いつからシンヤと?」

「お姉さんが居るなら、紛らわしいかと思えます。気になりますか?」

「それは品の無い勘ぐりというものですわよ」

品が無いと言われてムツとするグレイであった。

「繰り返しますけどシンヤさんは真逆です。どうして側に置いているんですか」

「従者ですから」

「それだけですか?」

「それだけですわよ。ミス・グレイ。貴女は本当にこの手の話が興味を持っていらつしやるのね。そろそろご自身の話をなさっては?」

更にムツとするグレイであった。エルメロイと進展したのか、してないだろう、オホホ、とルヴィアは言っているのである。実際の所グレイにもそう聞えた。

「恋人候補も居ないならレディ・エーデルフェルトは人の事言えないと思います」

「……私がその気になれば2人や3人造作もありませんから」

「良く聞く言い訳ですね、聞いていて恥ずかしいです」

今度はルヴィアがムツとした。

「どこで良くお聞きになさったのかしら」

「り〇んです」

「○ぼん？」

「少女漫画です」

鼻で笑うルヴィアであった。

「フィクションで恋を語ろうなどと程度が知れますわよ」

「誰もが受け入れて、憧れる正統なお話です。それを知らないなのでレディ・エーデルフェルトは道を逸れていることに気がつかなくて失敗するんです」

「……その真意を伺いましょうか。返答次第では覚悟なさい」

「シンヤさんが帰る時が来た、という事です」

「何を言い出すかと思えば。一ヶ月の契約がありますから」

「シンヤさんは常々家に帰る、と公言しています。それを引き留めるんですか？」

「契約とはそういうものでしょうに。ミス・グレイ。契約は魔術に於いても重要な概念ですわよ。それを忘れるのは余りにも不出来なのではなくて？」

「二つ聞きます。昨日の喧嘩にシンヤさんが居合わせたら、どちらの味方をしたと思いますか？」

「それはもちろん、」

「……一つだけ。姉の敵は俺の敵ですから。その時は覚悟して下さい」

リバプールでの会話が何の脈絡も無く浮かんできた。そしてルヴィアは言葉に詰まった。

そう言ったことを念頭に主従契約を結んだのだ。遠坂真也がルヴィアの隣から離れ、凜の傍らに立つ。遠坂真也がルヴィアに敵対する。そのイメージは彼女にとつて、戦力という意味以上に重い事実であった。流星に言い過ぎたと思つたのかグレイの口調は随分と温和しめだ。

「シンヤさんが帰りたと言つたら、どうするんですか？」

「そんなこと、」

ルヴィアが言葉に詰まっていると、エルメロイ教室の扉をノックする音がした。扉が開き現れたのは真也であった。彼は主を見つけると歩み寄つた。何時ものわざとらしいまでの鷹揚さは無く、その言葉も重々しい。

「ルヴィア様。お時間を頂けないでしょうか。折り入つてご相談が」

その表情を表せば、断腸の思い、そして苦渋の決断である。その態度で何を言おうとしているのかルヴィアは気がついた。だから彼女は立ち上がり、優雅な笑みを浮かべこう告げた。

「トオサカシンヤ。2週間という短い間でしたがご苦労様でした」

その沈黙は短くも長くもあつた。聞きたくない言葉は先延ばしにしたい。だが死神の様に無情に素早く訪れる。

「本日、この時間を以て契約終了とします。後日振込先を連絡なさい。残金は褒賞金と



して振り込みますから」

「いえ、この場合は俺が違約金を払うべきで、」

「貴方との2週間は存外充実したものでした。ささやかながら私の報いです素直に受け取りなさい」

「……ありがとうございます」

「家族を大切になさいな。それではごきげんよう」

カーテシーを以て挨拶とすると彼女は背を向けた。真也は彼女が出て行った扉をずっと見ていた。不完全燃焼と言わんばかりである。



そしてヒースロー空港である。メインロビーの床はグレーだが光沢を帯びて、照明を受ければ反射していた。見上げる天井は緩やかな弧を描くドーム状だ。高く息苦しさが無い。この開放感であれば、多少の雑踏はモノともしないだろう。その雑踏溢れるロビーを歩くのは遠坂家の3名だ。

真也はバックパックを背負っていたが凜とキャスターはハンドルを手に旅行鞆を転がしていた。底にキャスター（車輪）の付いたありふれたものだ。〃キャスターがキャ

スターを転がすとはこれ如何に” 彼はそんな馬鹿なことを考えたが、キャスター（従者）の目が怖かったので言うのを止めた。義姉は上機嫌だった。声のトーンも高く、笑みを絶やさないう。バストネタを持ち出してみようか、彼はそう考えたがもちろんしなかった。どういった理屈か、心でも読んだかの様なタイミングで、振り返った義姉の笑顔が怖かったのである。

「忘れ物は無いわね？」

「ない。荷物は殆ど無いからな。集合住宅（フラット）の解約は教授に頼んだ」

「挨拶はちゃんとした？」

「出来る分は」

「ロード・エルメロイ2世とヘルメス・トリスメギストス、そしてミス・グレイ。他に誰か居る？」

「スコットさん。数日前から顔を見てなくて挨拶が出来なかった。エルメロイ教室にも顔を出していないってさ」

「ああ、あの子ね」

「あの子は無いだろ。俺らの年上だぞ」

「だって、見るからに中学生じゃない」

「だってじゃない」

「真也つて変なところで堅いわよね」

「堅くない、礼儀の話をしてる」

「レディ・エーデルフェルトは？」

「話聞けよ。最後に一言言いたかったけれど、昨夜フランスに出発したらしくてそれきりだ。クラウンさんと上手く合流出来れば良いけれど」

「誰よ、それ」

「会った事は無いんだけどエーデルフェルトの従者らしい」

「あきれた。未練たらたらじゃない」

「うっさいな。一ヶ月の腹づもりだったから調子が狂ってるんだよ」

「やさしいお姉ちゃんが慰めてあげても良いわよ？ レディ・エーデルフェルトは性格に難ありだけれど見た目は悪くないし。ま、私には及ばないけどさ」

「なんだ、そのにやついた顔は」

「マスター。凜様は“うっさい”が染った事が嬉しい、」

「うっさい！」

暫く歩けば空港内のお土産売場が目止まる。彼は自然に呟いた。

「あー、お土産買っていかないか。ちよつと待っててくれ」

「皆は気にしないわよ。真也の姿が一番のお土産なんだから」

「そう言う訳にも行くか。お菓子でも買ってくる」

「甘い物で、批判を躲そうって姑息ね」

「そんなんじゃないやい」

一件コスメショップと勘違いしそうな店にお土産がずらつと並んでいた。テーブルの上には山のように積まれ、壁に沿う棚には詰め込まれていた。びっしりと隙間が無い。義姉は手に取った石けんを見定めつつ呟いた。

「何が良いだろ」

義理の弟は答えた。

「マカデミアアンナッツ」

「アンタね」

「姉さん、これこれ」

「なんでマールライオンがここで売ってるのよ」

「コスメとか」

「肌に合う合わない有るから止めておきなさい」

「英国電車網を記した……タペストリー？」

「誰が部屋に飾るのよ」

「ライダー」

「流石に怒ると思うわよ」

「良いんだ、彼女は俺が何やっても怒るから」

「優しい教育係なんて存在価値無いわよね。衛宮君たちは？」

「美綴家と衛宮家はお菓子の詰め合わせで良いだろ。イチローにはクマのパディングトン君のぬいぐるみを追加する。母親がブリテン出身だし丁度良い。士郎にはスマイルマークの缶バッジを贈ってやる」

「嫌がらせにしては浅はかね」

荷物番をしていたキャスターの元に戻ってきた主とその姉は、パンパンに張れた紙袋をぶら下げていた。キャスターは呆れを隠さない。

「随分と買い込まれましたわね」

何故か主は意気揚々と。

「見てくれキャスター。紅茶の茶葉とチョコレイト。Nestle、Mars、Cadburyはチョコレイトの老舗メーカーなんだ。あとFox's Biscuits社とMcVitie'sのビスケット。スコットランドのショートブレッド、ブレッドだけドクツキーとは謎だ。後はぬいぐるみとか嫌がらせとか」

「マスターももう20歳。不用意な挑発は控えるべきかと」

「もちろん自重したさ。これでもな」

「そうだ。真也。働いて稼いだ分ちゃんと家に納めなさいよ」

「……えー」

「なによ、文句有る訳？」

「えー」

「榮譽有る遠坂家長男の初稼ぎじゃない」

「ちゃんと残してくれるんだろうな」

「褒賞金の振込金額は？」

「10000ユーロ」

「通帳確認するけれど？」

「……30000ユーロ」

「財布の中は？」

「10000ポンドぐらい」

「なら1000ユーロを小遣いとして渡してあげる」

「1000ユーロって一万円少々なだけけれど」

「何かご不満？」

義姉の晴れやかな笑顔に対し、義弟のうんざりさは筆舌に尽くしがたい。その対比に堪えきれずキャスターは楚々と笑っていた。彼はこのままこの地に残るべきではなか

ろうか、義姉の徹底ぶりにそんな事を考えた。思わず遠くを見ると、そこにグレイが立っていた。見送りが、忘れ物か、見定めようとすれば彼女の表情は「深刻」それに来た。

「トオサカさん！ トオサカシンヤさん！」

事実その声は重大さを語っていた。重大さとは魔術師という意味でもあり、遠坂家長男という意味も持っていた。



真也が立ち尽くすのはエルメロイの執務室である。執務机に対面する様に設置された、その設備のことは真也も知っていた。金属を以て物理的なシールドとし、魔術的な守りが重ねられていた。金属とコンクリートを用い、相応に丈夫な構造であったが、一般社会に存在する網膜や指紋認証などのテクノロジーを駆使した鍵では無かった。南京錠レベルの簡単な鍵のみだ。保護術式を解いてしまえばそれで終わりである。ただその保護術式は相応に高度なものだ。その設備の扉が開いていた。真也には地獄に通じる蓋か扉が開いている様に思えた。

「槍が盗まれた」

そうエルメロイは簡潔に伝えた。

「この金庫にはタナトスの加護（呪い）が施され、正式な手順を用いず開けようとすれば死に至る、その筈だった。だが見ての通りだ」

「他に盗まれたモノはありますか？」

「槍のみだ。金銭、書類などには一切手を付けていない。あの槍の存在を知っている者はレディ・エーデルフェルト、そしてトオサカシンヤ、君だけだ」

エルメロイは執務室に居る人間を見渡した。

「いや、ミス・グレイとミス・トオサカも新たに加わったか以上、だった、が正しいか」  
眼力鋭いエルメロイにキャスターを会わせる訳には行かないと、彼女は時計塔の外で待機中だ。

「奪うならわざわざ渡しはしません」

「彼女はそれなりに執着していた、また気が変わったことも考えられる」

「この保管設備は相応の物です。幾ら彼女でも無理です」

「確かにそうだ。君の魔眼でも使わない限りな」

「つまり教授は俺らを疑っていらっしやる？」

「私とて教え子を疑いたくは無い、だが状況はそれを許さない。いずれにせよ確認はしなくてはならないだろう。事が事だけに他人に任せられない問題だ。あの招待状を名目に私は彼女を追いフランスに向かう。トオサカシンヤ。私は君への干渉を禁じられ



ている。帰国を止めることは出来ないが、どうする」

真也は隣りに立つ義理の姉を見た。先程の朗らかな雰囲気から一転、態度を硬化させていた。彼女は彼の選択を不安がっていた。一晚悩み、漸く折り合いを付けたというのに。

(なんでこうなる)

彼は選択を突きつけられたのである。彼に課せられた役割を考えれば、このまま帰国するべきだ。だが心に刺さった棘が鈍く痛む。彼は己に問いかけた。



善悪とは認識の結果でしかない。悪であった者が力を持てば善となる。勝てば官軍負ければ賊軍とうことだ。転じて、強い善性と強い悪性、どちらでも構わないが傾くと危険が大きい。強い善悪は多くの敵を作るという意味だ。

己の正義を掲げ、己の信条を貫く事は美しいだろう。だがそれは危険なことでもある。事実。多くの英雄たちが散り伝説となった。家族の存在を前提にする彼はそれ故に中道・中庸を選んだ。軽薄な態度と笑みを作る事も手段の一つである。ムツスリと陰湿にしていれば、不用意なトラブルを招く。それ故無理に笑っていた。それは仮面で

あつたが多数の人間が気がつかないのであれば問題は無い。

彼は誰かを助けた事もあつたが、手に負えないと判断すれば見捨てる場合もあつた。虐待されている子供を助けたとする。その後はどうする。成人まで面倒を見るのか、出来る訳が無い。一人目を助けたら、二人目を見捨てる理由は何だ。相応の財力と権力があれば別だが、生憎と持ち合せていない。限られた孤児院など何処も一杯だ。結局見捨てることになる。そんな子供たちは知らないだけでごまんと居る。

それを非難する人間は得てして対岸の火事を見る人間だ。自分に火の粉が掛からないと、好き勝手なことを言う。現実を知っていれば、非難など出来よう筈が無い。誰かが「訴えるのが仕事だ」と言った。違う誰かが「その訴えで何人救われたのか証を立てろ」と反論した。「答えられるモノでは無い」「何人助かったか、何故それが気にならぬい」つまり彼らは救う事が目的では無いのだ。己を正当化し悦に浸ると言う目的のために、誰かを非難したいだけの連中に他ならないのである。

真也はその行動が公明正大さを欠くと知りつつも、現実的な手段を選択する事もあつた。悪代官が居ようとも経済が回っていれば端の人間にまでパンが届く。正義を掲げ、悪代官を倒したところで頭が入れ替わるだけ。経済、官僚機構といった町の仕組みを根本的に作り直すには莫大な労力と時間を要する。その間に町が止まれば飢える人間が生じる。印籠を見せれば心を入れ替えるなど、現実には有り得ない。正しい権威者が存

続すれば、或いは力を持てば、間接的に助ける事が出来る。ルヴィアやヘルメスの様な正統な貴人を尊重するのはその反動でもあった。

善と悪の間をメトロノームの様に言ったり来たり。その範疇で出来るだけ出来る事をする。全ては存続と現状維持の為だ。彼はその生き方を選んだ。サーヴァント並みの力を誇ろうとも何の役にも立たない。一人の力などたかが知れているのだ。例え消極的であろうとも全ては、死ねない、帰らないといけない、という目的に帰結する。

目の前に突きつけられた一つの選択。義姉の憂いた表情が重くのしかかる。真也は顎を締め、拳を震わせた。だめだここで退くべきだ。手を切るべきだ。これ以上はダメだ。ルヴィアは従者を呼ぶと言っていたから大丈夫だろう。これ以上の我が儘は出来ない。ルヴィアと契約したのは家に帰るといふ目的の手段。それ以上は無い。無い筈だ。遠坂という家の為、家族の為、今まで幾度となく誰かを見捨ててきた。目を瞑ってきた。それと同じだ。だが答えが出せない。

(ランサー、お前ならどうする)

『帰国しても良いんだぜ？ ああのルヴィアお嬢ちゃんにどのような結末が降りるのか、それが背負えるならな』

出来る訳が無い。彼は義姉に向き直り、こう告げた。

「ごめん。このまま帰国するのは後味が悪すぎる」

「レディ・エーデルフェルトが心配？」

「もう少しだけ時間をくれ」

「そう」

彼女の抑揚の無い言葉は、落胆と失望の顕われであった。

つづく！

## 四話

オルレアンの外れにあるその場所は少々特別であつた。ローマ時代よりの慣例で、遺体は郊外に土葬されていたが、聖堂教の広がりと共に、聖別された地にのみ埋められるようになった。死者復活という教えの元、火葬は避けられていた事もあり、聖別の地には収まりきらなくなつた。飢饉、疫病、そして戦争がそれに拍車を掛けた。だがその地の権威者は現実的だつた。その地の教会を説き伏せた上で死者の移転を決断したのである。もちろん極秘裏にだ。その人物が歩く地下はその移転先だつた。死火山に潜り込む、溶岩洞を利用したその場所は歴史から忘れられた地下納骨堂（カタコンベ）である。その地下坑道に明かりは無く無明の道だ。

（光あるところ影あり。光なくして存在できない影と、光を必要としない闇は似て非なるモノと言うことか）

その人物はその無明とも言える、真つ暗な坑道をものともせず歩いて行つた。その目は闇夜に強い、というよりは初めから光が無くとも見えるかの様である。要所要所、壁の様に高く積み重ねられたしやれこうべは黙して語らず、ただその人物の歩みを見つめていた。

その人物が歩く坑道は、翼を取ったジェット旅客機が収まる程に大きかった。そこを抜け、広大な広間を通った。最奥の間に到達すれば、死火山に相応しく火口ほどに広がった。陽の光が届かないその場所に魔術の明かりが一つ灯る。街灯程の高さにある光源は青白い明かりを放っていた。

その明かりの下に、佇む一人の人物が居た。背は低く、薄い紫色のゆったりした衣類を纏っていた。そのゆったりした衣類を膨らませる程にゆったりした体格をしていた。白いフードを纏い、それから覗く表情は年期を帯びた女性のモノだった。丸みを帯び、鼻筋浅く、肥えた仏像が適当だ。ただし。備える瞳は全てを射貫く様に、鋭く大きかった。

その場にやってきた人物が、その中年女性の事を知ったのはつい先日だ。彼女は訪問販売でもしているかのように同盟を持ち掛けたのである。彼女は能力的にも因縁的にも驚くべき同志であった。ヒト同士で無かったとしても何の問題があらう。その人物にとつて彼女はそれに見合う存在なのだ。彼女の横に並び立つところ言った。

「ミセス。招待状は全員に行き渡りましたか」

「ああ、きつちりとね」

その声はしやがれていた。

「7名全員がこの町に集結しつつあるよ。余計なものも多いが」

「構いません。7人分有ればいい、そう言ったのは貴女です。余った分は予備となる。貴方にはその実力があるのだから」

「だがね、ご主人様よ。どうして聖堂教会まで招待したんだい。私にはそれが理解出来ないね。繰り返すが私はいづらが嫌いなんだ」

「召喚しようとしているモノは天使では無い、それはいずれ露見します。それを禁じている魔術協会が知れば介入するのは必至。それは困りますから」

「魔術協会と聖堂教会を互いに牽制させる、と言うことか。効果はあるかも知れないが危険が大きすぎると思うがね。代行者ならともかく、埋葬機関が動くと厄介だ。私は大戦末期に殺されかかったんだからね。思い出しただけでも、木槌で潰された足の甲が疼くよ。まったく、嫌みな連中さ」

「ミセスが死という言葉を口にするとは驚きです」

「生者と死者ではなく消滅という意味だよ」

「聖堂教会のネットワークは大きい。極秘裏に動いても、いずれは知れるでしょう。事前に話を通し介入を前提とした方が良い。それに大丈夫ですよ。この一件は魔術協会も注目している。聖堂教会が大部隊を動かせば、魔術協会も黙ってはいない。利権とはそう言うモノですから」

「ま、その辺は得意そうだから任せるが。私が気がかりなのはバートルを倒したのは誰

なのか、と言うことさ。ルヴィアゼリツタ・エーデルフェルトとシンヤ・トオサカが槍を時計塔に持ち込んだ以上、どちらかが倒したとみるべきだ。それが今持つて判明していない」

「彼は2流です。冷静沈着・合理主義は結構ですが、用心も過ぎては欠点ですよ。人はそれを怯えと言います」

「多少は出来る様だがフィンランドの小娘がバートリを倒せたとは思えないね。いや、小娘だからこそだ。バートリは生娘の天敵だった、それは言つた筈だよ。私はそれが気に掛かつてならない」

「ロード・エルメロイ2世の金庫を、威ともせず破つた魔術師とは思えない怯え方だ。消去法で考えれば、結論は決まっている」

「いいかいご主人様よ。情報を軽んじては足下を掬われる、これを頭に刻みな」

「そうでしたね。かつてミセスの同業者が捕まり、それから足が付いて貴女は捕まった。良いですかミセス。確かに不確定要素はあります。ですがもう4月も半ばで、じき白羊宮（火星）の季節が終わる。それを確かめる時間が惜しい。今はこの流れに乗るべきですよ。聖堂教会を招いたのは保険でもあるのです。魔術協会側が多い中、埋葬機関の間なら良いカウンセラーとなる。そうは思いませんか、ミセス・モンヴオワザン」

「その名をもう一度口走つて見るといい。その時は二度と出来ないように舌を引き抜い



ちまうからね」

「それは気をつけましょうか。それではミセス。槍をここに」

その中年女性は応じるかの様に、懐から鍬を取り出した。

「Liberation (解放)」

力ある言葉が反応し、その鍬が光を放つ。どれ程の年月を経てきたのか、現代技術では除去することが出来ない程にこびり付いた汚れが飛散すれば、美しい光沢を持った刃が表れた。有機的な曲線は無く、力強い直線で作り出されていた。装飾は無く、例えるなら両刃の包丁である。太陽に向かって伸びる若葉の様に、鍬の根元から木製の柄が顕われると一筋の槍となった。その美しさは機能美、これに尽きた。形が織りなす混じりけの無い直線、素材と製法が生み出す幾何学的な文様、そしてそれに落ちる影。それらが組み合わされば神々しさすら醸し出す。人によつては妖艶とも称するかも知れない。

中年女性からそれを受け取ったその人物は、それを物珍しそうに眺めた。それは一級の限定武装であり、一級の聖遺物だ。中年女性が紡ぐ呪文が洞窟に流れれば、2人の足下に魔法陣が浮かび上がった。それは召喚の術式だ。刻まれる力のシンボルは、アザゼル、サタナキア、アマイモン、そしてルシファー、墮天使たちである。そしてその人物は槍を足下に広がる魔法陣の中央に突き立てた。槍の力によつてその地の歪みが鳴きだした。うねる大海の様だ。

召喚術式によって *Gechinnom* (ゲヘナ＝地獄) より呼び出された一体目は、ゲヘナの炎を司る *Ukobach* (ウコバク) だ。一言で言うなら、こうもりの翼を持った、ヒトガタトカゲである。槍が謳うとそれは血肉を持った。耳に障る笑い声を立てると、羽ばたき、そして洞窟の壁面に取り付いた。暫く経ち頭われた2体目は *Olivier* (オリヴィエル) だ。食欲を司り、そしてそれもまた血肉を持った。手足の付いた豚が適当か。否、過度に太ったオークが相応しい。

中年婦人が構築したその召喚術式は、長年隠された霊脈の溜まりを使い、下級霊を呼び出し、槍の概念を以てそれを実体化させるモノだった。その槍は *He* (彼) を殺した槍だ。それが持つ概念とは死であり復活なのである。

「ミセス。数を揃えるのにどの程度掛かりますか？」

「一体で1, 2時間と言うところさね。下級だから扱いは楽だけれど、受肉しても力が弱い。過信はしないほうがいいね」

「これはあくまで補助に過ぎませんが、カードは多い方が良い。個が弱くても数を揃えれば威となる、できうる限り揃えて下さい」

その槍は彼にとって武器では無い。重要ではあるが、ただの道具に過ぎないのである。その人物が両手を重ね胸に置けば、その胸の奥に埋め込まれた牙が蠢いた。

「父上。今しばらくの辛抱です」

その端正な表情に宿る感情は狂った恋慕であった。



フランス中部の町にやってきた魔術協会に属するグレイ、凜、エルメロイ、真也の4人は早々にルヴィアを探す事にした。この地は招待会場でもあるが、人通りもそれなりにあり、人目を憚る魔術師ならば面倒毎にはなるまいという判断もあった。もつとも過信は禁物と言う事で三つのグループに分かれた。グレイ・エルメロイペア、凜、そして真也である。日没前にホテルに戻ると取り決めて、搜索を開始した。それは別れ際の義姉の態度だった。

「真也は私と別行動するの嬉しそうね」

「どうしてそうやってマイナス方向に解釈するかな。俺だつて2年ぶりの再会に姉さんとゆっくりしたいのに」

「ふん、どうだかね」

「レディ・エーデルフェルトと仲良くなりたいたいか、唾を付けたいたか、そういつた俺に下心は無い。いつも『最後まで見届けるのが筋つてもんじやない?』とか言う姉さんは何処に行った」

「覚えてない」

「あのな」

「なによ」

「機嫌直してくれると助かるんだけど」

「イヤ」

義姉はそう言い捨てると立ち去った。彼もまた立ち去った。早めにケリを付けなくては、と焦燥も募る。ルヴィアが槍を盗み出すことなど有り得ない、それを確認するだけだ。槍が何処にあるかなど、別に気にならない。多少はあるけれど、それは知らない。「俺はそこまで関知しない」

敢えて言葉に出した。町並みをさらつと流せば、歴史のある石造りの建物が現代風にデコレートされていた。広告という意味だ。デザインもあつた。そして右を見てもヒト、左を見てもヒトである。人通りが多かつた。欧州らしからぬ、東京張りの人の多さだ。今日は何かのイベントかしらん、そう思いつつも真也は町を練り歩いた。キャスターはエルメロイを警戒し別行動だ。別のホテルに陣取り、4人をトレースしている。ルヴィアと槍の情報はキャスターに渡してあるが、これほど人が多ければ見つけるのも時間が掛かる。キャスターがルヴィアと直接接触していれば別だったが、生憎とその機会は無かつた。彼は左手甲の呪符に念を込めた。

それは魔術の法則の一つ “類似” を応用したものだ。その小規模魔法陣には中核となるシンボルが一つある。それはプログラムで言えばラベル、ネットで言えばアドレスに相当し、まったく同じ物がキャスターの体内にも存在する。

真也が思念を送ればそれは音叉の様に反応する。離れた場所にある別の音叉が、同じ物であるならばそれも同じ様に反応する。共鳴とも言えよう。その術式を構成する他の要素は、手の甲に術式を定着させる基礎であつたり、シンボルが思念を伝えられるようにする変換であつたり、トオサカシンヤという個人が持つ魔力を術式に合わせる調整であつたりと、副次的なモノに過ぎない。

「キャスター。他の3人に異常は？」

『ありません。何かあればお伝えします』

「おお……」

『何か問題が？』

「いや、キャスターがこれ程ありがたい存在だとは。依頼中に居てくれればどれだけかどつたのだろう、そう思うと残念でならない」

『そう言えば探偵紛いの事をされていたとか』

「こそ」

『次からは計画性のある行動をお願いします』

「気をつける」

『それにしてもこの町は変な方が多いですわね』

「まあフランスだから。色々な意味で革新的なんだよ。個人主義と自由と芸術性が合わさると結構奇抜なモノが出来上がるんだ。例えばぼら、そのGストリングスを着た若者とか、SMレザーファッションのおっさんとか……うげ」

気がつけばそういう人種ばかりなり。真也の口は開いたまま塞がらない。

『マスター?』

「今日は Gay Pride (ゲイパレード) だったのか……迂闊。レインボーフラッグ (上から赤、橙、黄、緑、青、紫で配色されたカラフルな旗) に気がつかないとはどうかしてる」

『その言葉は初めてです。どのような意味を持つのですか?』

真也は大ぶりで歩き始めた。もちろん逃げ出す為だ。個人の自由だと尊重はしているが、関わりたくないというのが本音である。

「ゲイ・レスビアン・バイセクシャル・トランスジェンダーたちのお祭り。その旗はその証だ」

『それはまた、人類の終焉を感じさせます』

「ギリシャの神々も随分と激しかったって聞けりゃどう?」

『マスター。それより先はご容赦のほどを』

「わかった。そういえばライダーはバイセクシャル（両刀）だったな。綾子は無事か？  
ライダーは綾子を随分気に入っていただろ」

『……』

「……キヤスター？」

『ご本人に直接お尋ね下さい。私からは申し上げかねます』

「そう」

真也が向かう先に曲がり角があった。石造りの建物が死角となつてその先が見えない。気配は読んでいるが、これ程人が多くてはとてもやりにくい。直接殺意をぶつけられればその限りでは無いが、気配を抑えた魔術師には気がつかないかも知れない。

「きゃっ！」

そして真也は誰かとぶつかった。曲がり角、それは永久に約束された遭逢（そうほう）なのだ。

「失礼しました。急いでいたもので……」

ベタだと思いつつ、美人さんだと良いな、と思いつつ、尻餅をついた人物に手を差し出せば。

「まったく。どこを見ているのかしら。気をつけて頂戴」

その声は低い地の声を高く作った声だ。真也の手を握ったのは男だったのである。つまり、そういう人種であった。おくびにも出さなかったが、心底うんざりする真也であった。

(ベタ、仕事しろ)

握られた彼の手は妙に肌触りが良かった。

(これは握手だ。握手。握手。握手)

そう念じながら彼を引き上げれば、努めて笑顔でこう言った。だが口元の歪さは収まらない。

「あー済まなかった。怪我はないか」

「大丈夫よ」

その彼でもあり彼女でもある人物は、カーキ色のカーゴパンツにブラウンのブーツを吐いていた。薄桃色のシャツに、アウターはカバーオールジャケットと服装は至って普通だ。どちらかと言えばワイルドさを感じさせる程だが、その仕草は過度に女性的であった。事実上にはアイシャドウ、唇には紫の口紅である。イヤリングも装備だ。切れ長の目元には泣きぼくろ。細い金の髪はショートカットで額と耳を明瞭に表していた。ジヨナサン・スコットの様に少女的ではなく、広い肩幅に筋肉質の体にして、中性的な顔を持った、紛う事なきオネエ系である。普通にすればイケメンだろうに、と微妙に残



念がる真也であった。

「私はクレトス・メルクーリ。魔術師よ」

「……真つ向勝負でくるとは思わなかつた」

「流石にお肌のふれあいをすれば、分るわよねえ」

「嫌な言い方をするな。握手で魔術回路が反応した、と言え」

「ごめんなさい。気に触つたなら謝るわ」

「オカマの魔術師が誠実か。色々価値観が壊れそうだよ」

「オカマだなんて止めて欲しいわね。ただ美しさを求めているだけなのよ」

「どうとでもするさ」

その美しい彼は物言いたげに真也を見た。

「言いたい事は分る。名乗れって言うんだろ」

「貴方もクロムウエルの招待状で来た、そう踏んでいるのだけれど、違つたかしら？」

「その質問は半分正解と答える。確かに関わっているが参加はしない。えーと、メルクーリだつて。アンタの誠実さは好ましい。けれどこちらにも都合があるから、答えられない。急いでるからこれで失礼させて貰うよ」

「まっつて」

「なに」

「貴方は凶星持ちね。今まで大変だったんじゃないかしら」

「何で分る」

「育ち柄その手の事を沢山見てきたの、だから分っちゃうのよ」

「占い師か」

「占星術師よ。貴方ほどの禍々しきは滅多に見ないわ。もし次に会ったら占ってあげる」

「結構だ。良くない方角が分つたとしても、行かなくちやいけないパターンが多いんでね。知ったところで意味が無い。それに万が一次に会ったら敵同士だ」

真也は背を向けて、歩き出し、足を止めた。己の肩越しに振り返れば、その表情は苦渋の選択を表していた。義理と人情という判断である。

「トオサカシンヤ」

「あら、良いわね」

扱いに困る程の好ましい彼の笑顔を見た真也は、これが最後になると良い、と願わずには居られなかった。勝てないという意味では無く、死なせたくないという意味だ。



そして夜。エルメロイが陣取ったホテルの一角、つまり彼の部屋にて報告会が行われた。エルメロイと凜はローテーブルを挟み向かい合っていた。グレイはベッドの端に腰掛け、真也は壁の華となっていた。エルメロイはソファーに深くもたれ掛かる。何時もの様に組んだ両手を胸の上に置いていた。

「全員手がかり無し、か。トオサカ弟が遭遇した、そのメルクーリという魔術師も気になるが」

凜が言う。

「ロード・エルメロイ」

「2世を付けてくれないか。ミス・トオサカ」

「それでは2世」

「それでは名前としての機能を果たさないだろう。君の弟は教授と呼ぶ。言い難いならそう呼んでくれ」

「では教授。明日は北部の高級ホテルを中心に搜索するべきかと」

「推測はできるが、一応根拠を聞こうか」

「この町は東西を流れる川で二分されています。賑やかな北部と比較的静かな南部。私たちは運悪く祭りに出くわし、搜索はままならなかった訳ですが、高価なホテルは北部に集中しています。レディ・エーデルフェルトは安宿を相手にしませんから」

「レディ、意見はあるか」

「いえ、何もありません」

「トオサカシンヤ、君はどうだ」

「そのプランに追加を」

「なんだ」

「高級ホテルは南部にも幾つかあります。二手に分かれましょう」

異論の声を上げたのは義姉であった。

「どうしてよ。北部が圧倒的に多いのよ？」

「レディ・エーデルフェルトは確かに派手で高級志向だけれど、落ち着いた雰囲気も好む。特に夜は」 そうなんだ」

義姉の眉がピクリと動いた。

「騒がしさを避けた可能性もあるか」

エルメロイが一つ唸れば、それは決断の証でもある。

「トオサカシンヤ、君は暗示が使えなかったな？」

「生憎と」

「レディと私は引き続き北部でホテルの捜索を行う。トオサカ姉弟は南部を当たつてくれ。異存はあるか」

「「ありません」」

「方針が決まったところでこれから皆にクロムウエルについて話しておく」

「教授、私たちに参加の意思はありません。不要です」

「ミス・トオサカ。この地の聖杯戦争に参加する魔術師が居る以上、知っておいた方がいい。予備知識は彼らの行動を予期する材料となる」

「……分りました」

義姉は不承不承だ。

「今から話す事は非公開資料に基づく。強い罰則が適用される程の機密では無いが公言は禁ずる」

全員が無言を以て同意したことを確認するとエルメロイは一口水を飲んだ。

「かつてリチャード・クロムウエルという魔術師が居た。イギリスを本拠地とする降霊の名門だ。第2次世界大戦末期、彼は天使の召喚を行うと指折りの魔術師を招待した。その中には日本人も居たそうだ。招待の目的は天使を召喚し、その知識を得ることだ」

「天使の、ですか」

「ミス・トオサカ。知つての通り天使が知識を与える事など無い。せいぜい抽象的なコメントを天使と同じ清廉な者に降ろすのみだ。理論上聖人で無くとも良いが、清廉な魔術師など居はしないからな。事実上使徒に限られる。当時の我々、つまり魔術協会もそ

の見解をもち、誰も相手にしないだろうと考えていたが、それがクロムウエル家ともなれば話は別だった。そこで協力し合いその知識を共有しようとした、その流れだ。ところが戦況が悪化し、集合途中の魔術師が死亡し、失敗と終わった。当主であったリチャード・クロムウエルも死亡し、嫡男もWWIで死んでいた為、クロムウエル家は取りつぶしとなった。イギリスの霊地、遺産は魔術協会が接収したが、その儀式に関わるモノは得られなかった。ナチスの妨害を受けたらしい」

「ナチスですか」

その声は真也であった。あの槍がスタドリコンスタブルにあった、この原因もナチスが絡んでいたという不確定情報だ。

「招待会場はドイツだった、これから考えれば恐らく絡んでいたのだらうな。幾ら執行者とはいえ、戦時中のイギリスからドイツに渡るなど、困難極まりなかっただらうから、搜索に手落ちがあつたとしても無理は無い」

「なるほど。辞退するならば代理を立てる、教授が魔術協会にせっつかれたのは、取り残しを回収する為だった、と。ですが教授。R・クロムウエルが隠匿のために、ナチスの協力の下フランスで儀式を行おうとした、これは納得が出来ます。しかし何故ナチスが協力をしたのでしょうか。天使の知識を使って兵器作ろうとした、とも考えにくいです。そもそも大戦中の不安定な状況で儀式を決行した理由が分かりません」

「かの指導者の目的は把握できていないが、時期の予想は付く。これは私の予想だが戦時中のどきどきさを利用したのではないか、そう考えている。魔術協会も聖堂教会も上手く動けなかっただろうからな」

「その儀式に隠す何かがあつたと言う事ですか」

「繰り返しですが根拠の無い私の予想だ。頭の片隅にでも置いておけ。その暫く後にクロムウエルの後継資格を持つ者が現れた。適合が認められたため魔術刻印はその人物に引き継がれた。その人物をジョセフ・クロムウエルと言い、当時15歳。その後の彼の消息は分っていない。今生きていれば70歳だな」

「その彼は嫡男以外の後継者、つまり非嫡出子だったと」

「恐らくそうだ。記録によるとR・クロムウエルという人物は激しい人物だったらしい。情熱的とも言おうか、恋多きとも言おうか、その後の調査で複数の非嫡出子の存在が確認されている。レイディたちには不愉快な話だったか」

凜が言う。

「子を多く残すことのメリットはありますから、理解は出来ます。もちろん、デメリットもありますし、R・クロムウエルがそれを考慮の上、行動に至ったかまでは判断できませんが」

凜の遠回しな手厳しさに、エルメロイは肩を竦めるのみだ。無論おくびにも出さな

かった。

「話を続ける。ここまでが魔術協会の記録だ。公式情報は無いが儀式失敗の原因は聖堂教会の介入らしい。事実かどうか、その議論は棚上げにするが、彼らにとって天使の力とは神の力でもある。彼らが強く反応したのも無理は無いだろうな」

真也が言う。

「では今度も彼らが介入すると?」

「それはもう数日経てば判明するだろう」

「教授は度胸が据わっていますね」

「まあな」

含みを持たせたエルメロイに真也は不愉快そうだ。二人はこのままなし崩し的に、関わることを予期し合ったのである。それを見た凜は漠然とした不快感を感じていた。二言三言の言葉で意思疎通を図る、男同士はこう言う事がままあるのだが、生憎と彼女にその知識は無かった。それはもちろんグレイも同様だった。



彼らが取った部屋はツインが二つだ。ロードであるエルメロイの準備金はそれなり



にあり、敢えて相部屋にする理由も無かったが、エルメロイは保安の問題がある為、グレイトと同室であった。彼女がいくら内弟子とはいえ問題があるのではと、遠坂姉弟は思ったが本人が良いなら敢えて追求しまし。そして遠坂姉弟は別室を希望したが、エルメロイの無駄金が出せるか、という鶴の一声にてツインルームである。騒いではそろそろ近所迷惑になる時分、バスルームを出たのは義姉である。彼女はクリームイエローのパジャマの上に、白いシヨールを羽織っていた。浴室と寢室を隔てる扉と彼女の肢体からは湯気が出ていた。

「先に頂いたわよ」

「ん」

彼女の義弟はソファアの前で背を向けていた。真紅の外套を脱げば、上下黒の長袖長ズボンが現れる。そのの至る所に穴が開いていた。

「前から気になってたんだけど、その穴どうしたのよ」

「塔の依頼で死徒と遭遇したんだけどその時にやられた」

「ちよつと、大丈夫だったんでしょね」

「それなりの魔術でも俺は防げる体質だから。何時もガンドを撃つ姉さんがそれを忘れたのか」

「セイバーよりーランク下相当の対魔力だったわね」

「姉さんの見立てではそうだったな。風呂入る。先に寝ててくれ」

「ソファアで寝る訳？」

「そう」

バスルームを出た真也はライトグレーのスウェットだ。灯火はベッドの脇にある弱い光のみで、部屋は既に就寝状態だった。義姉が陣取る窓際のベッドには、毛布が作る小柄な山があった。その枕元からは義姉の黒く長い髪が広がっていた。義弟はガントレットを左腕に付けると、廊下側のベッドから毛布を引っぺがし、ソファアに向かった。薄目の義姉が紡ぐ言葉は呪いの様。

「変な事しないでよ」

「しない。安心して寝てくれ」

のそり、と義姉が作る毛布の山が動いた。

「前科があるから」

「それを持ち出すか、このお姉様は。というか前科ってなんだ。アレはお互い同意だろ」

「真也が悪い」

「へいへい、分っておりますとも」

「さっきの話なんだけどき。何でそんな事出来るのかしらね」

「対魔力の話？」

「そう」

「何度も言つたろ。俺だつて知らないんだ、お袋に直接聞いてくれ。もしくはキャスターかライダーだ」

「蒼月家の過去に興味を持つてはならない、その決まりでしょ」

「なら聞くな」

「謎が謎のままつてのはスッキリしないわ。サーヴァント相当つてどういう事なのかしらね」

「リバプールでくわした埋葬機関の人も強かつたよ。世に彷徨う死徒もサーヴァントより強い。つまり世の中は広いつて事。不思議な全部に気を取られたら、ストレスで胃に穴が開くぞ」

「同じ家の弟の事じゃない」

「それを知つて俺がバケモノだつたとしたら姉さんはどうする。バケモノと罵るか？俺としてはかなり辛い展開だ」

「前にも言つたでしょ。私にとつて真也はもう確定してるの。例えアンリマユだつて言つても何も変わらないわ」

「それは俺が遠坂家に入る前の話だろ。今は君の弟だ」

「だから私にとつて変わつてない。真也の名前が蒼月から遠坂になつたとしても」

真也はソファアに腰掛けると毛布をたぐり寄せた。その毛布は意外と肌触りが良かった。

「オセつていう魔神（デーモン）と戦った事がある」

「は？ ソロモンの悪魔が召喚されたって事？」

「義理を欠くから詳細は言えないけれどそいつが変な事を言っていた。イリヤもだ。聖杯戦争中に、アインツベルン城で神託がどうか変な事を言っていた。確証は無いけれど推測できる材料を持つてる。聞きたいか？」

「真也はどう思ってるのよ」

「ただの状況証拠だから否定してる。けれど成長したイチローが対魔力を持つていたら、それが回答になるかもしれない。それは少し怖い。今までそうだって信じてきたモノが壊れそうだ」

「なら良いわよ。本人が纏まってないなら聞けないし。でも何時までもそのままでは行かない、これだけは覚えておきなさい。あの子は毎日大きくなってるんだから」

「もう良いだろ。寝るぞ」

「イタズラしないでよ」

「余りしつこいと本当にするから、寝ろ」

「レディ・エーデルフェルト」

ベッドの上の義姉の膨らみを見ること一刻。その意を悟った彼は何事も無かったかの様に、それがどうしたと言わんばかりの様相で毛布にくるまった。

「彼女とは何も無い。手を掴んで引つ張ったぐらいだ」

「静かな夜を好むって何よ」

「二日の終わりに報告検討会、そして晩ご飯。そういうシチュエーションでそういう好みなんだろう、そう悟っただけ。出先のホテルでも別室、泊めたり泊まったりもしてない。これで胸の問えが取れたならもう寝てくれ」

「別に気にしてないから」

「ふん、ヤキモチやきめ」

「真也は良いわよね。ヤキモチ焼かずに済むんだから」

「その話は3年前に済ませたろ」

「知ってるわよ、ばか」

「もう寝よう。姉さんも時差ボケがある筈だ。おやすみ」

「おやすみ」

そして数刻。暗闇の中、ソファーに腰掛ける真也の目の前に気配があつた。その気配とは空気の流れでもあつたし、空間を通して伝わってくる熱、輻射熱もあつた。そして何より、苛立ちの気配は強烈である。ゆっくり目を開けて見上げれば、そこに腕を組み、

見下ろす義姉が居た。

「おやすみ、そう言つたらろ」

「おやすみしてないじゃない」

「俺のおやすみはこれなんだ」

「ちよつと。2年間ずっとそうしてきたわけ?」

「そうか、教授が無理矢理相部屋にしたのはこれか。お節介というか、気が利くというか、ツンデレ先生だな」

「誤魔化すな」

「ここ1年と10ヶ月ぐらいかな。寝ることが怖くてさ、熟睡出来ないんだ」

「何がどうして、そうなったのよ」

「沢山だ。多すぎて話せない」

「礼装が壊れたのは?」

「勘が良いな。旅の途中。ある娘に兄を助けてくれとせがまれた。その村では生け贄の風習があつたけれど、呪術的に意味が無い事が分つたから助ける事にした。だが、それは紛れもなく呪いだったんだ。その娘の兄は裏切つた。違うか、俺を生け贄にして兄妹助かろうとした。その娘を人質に取られて、逆らえば殺すと。やさぐれていた当時の俺は、まあいいかと。死にかかつたところを関わりのあつた死徒に助けられた。この間

話した死徒ってそれ。村人全員死んだよ。100名の命を引き替えに俺は生き延びた。悪魔め、滅んでしまえ、悪魔め、呪われてしまえ、助けようとしたその娘は、俺を呪いながら死んだ。信じては欺かれて、寝首を搔かれて。笑ってしまいたい、冗談にしたい目に何度も遭った。そんな事ばかりで寝られなくなった。夢に見るんだよ」

腕を組んだ義姉は溜息一つ。呆れを隠さない。

「だから旅なんて止めときなさいって言ったのに」

「いずれ知らなきやいけない事だった」

「早すぎたのよ。アンタの身体は20歳でも、経験と知識が20歳でも、自己は3歳なんだから。全ての嫌な事に対して無防備にぶつかっただけでしょ。そんな事してたら歪んで当たり前。まったく。これじゃランサーに文句言えないじゃない」

「お見通しか。ランサーには夢と現の間でしょっちゅう説教された」

「ほら、暑苦しいスウェットなんて脱いで、楽な恰好でベッドで寝なさい。ガントレットもね」

「人の話を聞いているのか。俺はこれで良い。少なくとも家に帰るまでは」

「結界も張つてあるし、お姉ちゃんが添い寝してあげるって言ってるのよ」

「あのな。んな恥ずかしい事できるか」

「前に一度してるでしょ」

「意味が違う」

「同じよ。あの時の真也も胸の中だったし、赤ちゃんみたいに丸まると良いわ」

「あーのーなー。何時も思うんだけど、そうやって人を馬鹿にする真似は止めろ」

「人じゃないわよ、真也だから馬鹿にしているの。それともなに？ 真也のそう言うだらしない所も受け入れてる心の広い私になにか文句でもある？」

睨み合うこと数刻。義姉のそれは絶対折れないパターンだと義理の弟は気がついた。頭をクシヤリと搔いて立ち上がった。

「姉さんの匂いは家の匂いだ。その、気が緩む」

「だから言ってるのよ。ほら、いらっしやい」

「……手を離せ」

彼は羞恥をしかめ面で隠すも、手を引かれるがままだった。人肌の温もりは相応の癒やしなのである。義姉のそれは事実そうであった。

つづく。



## 五話

真也が目を覚ませば、見慣れぬ天井である。それが異国のホテルであるならば当然だろう。生活環境が一定しない、というのは相応の疲労となるが、真也にとつては些細な事であった。天井など見慣れなくても当然だった。それどころか屋根が樹木であったり、屋根そのものが無い事もままあった。だがどうした事か、その日は何かが違っていた。ぼんやり天井を見つつ感じた違和感は三つ。一つ目の疑問は仰向けだと言う事だ。何時もはソファアで目覚めると言うのに何故かベッドの上だった。二つ目の疑問は、窓から差し込む光が妙に濃いと言うことだ。清々しさが無かった。三つ目。なぜかしら、彼の感覚に靄の様なものが掛かっていた。

(はてな)

顔を捻れば枕があった。その枕には黒く長い髪がたゆたっていた。

「あー、退室時これ片付けていかないとな……」

彼は独りごちた。髪は魔女にとつて重要であり、義姉にはそういった手間があるのだ。視線を更にはらせば数字が視界に映った。その4桁の数字は“16:38”と示していた。

「はてな」

昨日寝たのは日付も変わった頃だ。〃04:38〃なら理解出来るが、何故12時間分加算されているのか。時が刻むこと更に5分。真也は悲鳴を上げ、飛び起きた。今は夕刻。つまり寝過ぎしたのだった。義姉の温もりに溺れてしまったのである。

「キャスター、何故起こさなかった！」

真也は慌てて着替え始めた。

『凜様が起こすなど、休んでいろと』

「そう言う訳にいかないだろ！」

『凜様らに任せただ方が宜しいのでは？』

「だからそう言う訳にも行くか！ 槍には俺も噛んでるんだからさー！」

バスルームに駆け込んだ。口を濯ぎ、顔を洗って鏡を見た。寝癖が付いていた。撫でた。跳ねた。撫でた。撥ねた。直らない。放置した。ガントレットを左腕に付ければ、従者の声は多少の非難を含んでいた。

『ルヴィアゼリツタ・エーデルフェルトは女性なのでしょように』

「なんだキャスターもヤキモチか？ デートなら大歓迎だぞ」

『Master』

届いたのは声のみだが、その声は恐ろしくそしておどろおどろしい。神代の魔女に相

応しい声であつた。彼女に冗談は通じないのである。

「冗談だつてば。謝るから笑つてくれ。キャスターは葛木先生に一途だつて分つてる」

『マスターは彼女に入れ込み過ぎていて、そう判断します』

「だから言つてるだろ。そういう関係じゃ無いし彼女もそれを理解している。追いかけて実は好きだーなんて話にはならない」

『多少は考えておられるのでは？』

「まあ少し位は。そうだつたら良いな。そうだつたらどうしようかなつて。ちらつと悲しい妄想をした事はあつた」

『そうなつたらどうなさるおつもりですか』

「そんな訳ないから。俺は彼女の好みの真逆だし」

『だと良いのですが』

「相変わらずの心配性だな。キャスターこそ程々にしないと胃に穴が開くぞ」

『マ、ス、ター』

真也がホテルを飛び出せばカーニバルのど真ん中である。祭りも終盤だ。テンションの高い、おしり丸出しのマッコイなマダムに捕まり唇を奪われた。泣きながら走れば腹が減つた。手近なカフェに入ったは良いものの何故か食欲がない。チクチクとする顎ひげの感触が原因かと思つたがそうではなかつた。今日は何時になく温暖だと言う

のに、身体はコールドドリンクを受け付けなかった。だものでホットココアを飲み干した。100メートル程駆ければその足が止まった。真也の焦点は空中で止まっていたのである。彼は白昼夢でも見ているかの如く立ち尽くせば、道行く老婦人が気遣った。彼は謝意を述べると立ち去った。

『問題が起りましたか』

「眼球の焦点が合わせにくい。感覚にノイズが入ってばやけてる。それどころか身体に淀みがある」

『その地の歪みは一般レベルです。呪詛も観測されていませんので、他の原因が考えられます。状態の程度を仰って下さい。平常のブレを超える状態であれば、診断の必要があります』

「どの道1時間程度で集合時間だ。このまま様子を見る」

『マスター』

「キヤスターは本当に心配性だな。気遣いはありがたいが、多少おかしい位で学校は休めないよ」

『学舎に実戦はありません』

真也は予定通りに南部に向かったが、それらしい影はなかった。ただ静かな町並みが続くのみだ。

「キャスター。情報はあるか？」

『凜様より宿泊先のホテルを見つけたとの連絡がありました。ご本人は未だ発見できておりません』

「わかった」

この地の調査など、ルヴィアが積極的に動いているならば、戻るのは夜半過ぎであろう。見上げる空は既に藍色で、星も見えていた。ぴゅうと吹いた風が異様に堪えた。思わず襟首を立てた。身震えもする。

『マスター。ホテルに戻ってください。伺います』

「なんでもな、あ……馬鹿か俺は」

懐に手を入れ、取り出したそれは複合結晶である。それはかつてルヴィアから渡されたコミュニケーションタであった。突然の別れだったゆえ返却を失念していたのである。これがあれば連絡が取れるが問題が一つある。鉱石魔術の属性を持たない彼でも、発動させる事が出来るのだが、真也の側からは呼びかけのみである。ルヴィアが着信拒否をすればそれまでだ。ただ無視はしないだろうという確信があった。握ってしまえば完全に隠れてしまう大きさだ。彼は鉱石に魔力を籠めた。鉱石が青白く点滅すること数回。

「シンヤッ!？」

聞えてきた声には、苛立ちと、焦りが混じっていた。走っているのか、息も切れてい

た。緊急事態だと判断した彼は、場所は何処だと端的に聞いた。

『ヴィクトル・ユゴー通りとサン・マルタン通りの交差点を西に向かってい、くっ！』

「キャスター！ 誘導頼む！」

『町の南西方向です。右手の通りを真っ直ぐお進み下さい。エーデルフェルト様を補足しました。戦闘中、劣勢です』

「んな事は分ってる！」

彼は一般常識レベルで駆け出し、町の死角に入ると高く跳躍した。そして屋根から屋根へと渡りだした。その様はバツタと言うより水切り石である。同時に拘束術式限定解除。

『確認できた敵は一体、人間ではありません。死徒です。この距離では私は影響力を行使できません。凛様に連絡を入れましたが、最も近い方はマスターです。お急ぎ下さい』

「Instruere！（展開）」

真也は返事代わりに霊刀を展開させた。敏捷Aを以て、陽が落ちたばかりの町を跳ねていった。



「クラウン、しっかりなさい！」

「お嬢様……私はお捨ておき下さい」

二人が居る場所は連絡した交差点から、幾らか離れた巨大な倉庫の中である。広大で天井も高く、ジェット旅客機が収まるハンガーの様だ。そこには小麦粉の袋が高く積み上げられていた。整然と並べばそれは壁に他ならない。高さもあり視界が悪い。照明は灯っておらず、窓から差し込む、町の明かりが見えるのみだ。地下迷宮と言っても過言ではなからう。

ルヴィアはその薄暗闇の中を歩いていたが、その足取りは心許ない。方肩に担ぐ従者が重くのしかかれば無理もないだろう。その従者をクラウンと言い、屈強な魔術師であったが息も絶え絶えだ。100キロは下らない彼を、引き摺りながらも移動できるのは、筋力強化の術に他ならない。

クラウンが引き摺る脚からは血痕が続いていた。手で庇う脇腹からは血が止まらないのだった。その指の隙間から伸びる一本の短刀には呪詛が掛かっていた。ソクラテスを殺した「コニウム・マクラトウム」である。抜く事が出来ず神経毒を有す。それが手足の末端から、身体を這い上り、心臓に達した時に死に至る。致死に至る時間は1分から1年と自由自在だ。即死されては困ると、2人を襲った死徒は1時間に設定した

が、余計な手間を掛けられ機嫌が悪い。

「何を馬鹿な事を！ 従者を見捨てる主などありますか！」

「……礎にするとお考えください。もはや左半身に感覚がありません」

迂闊、彼女は己を罵った。優れては居るものの、クラウンを真也と同じ様に扱ってしまつたのだ。そして彼は主を庇い、負傷したのである。

思い出しても苛立したい。イギリスを出た彼女はフランスに入り、クラウンと合流した。この町のホテルにチエックインし、競争相手を探しがてら町を調査すれば、招待状が反応したのである。その導きに従うまま、十字路に至れば死徒と出くわしたという寸法だ。魔術師ではなく死徒と出くわすなど、冗談にしては笑えない。あの男の悪運が染つてしまつたのだ、彼女はそう吐き捨てた。

ルヴィアがそれと対峙した時十分な距離があつた。飛び道具を扱う敵だと、直感した彼女が持ち出した鉱石は「インペリアル・トパーズ」火属性の鉱石だ。敵の攻撃が物理なら真也に弾かせる、魔術なら霊刀をもつて打ち消させる。カウンターを以て鉱石を打ち込む、瞬時の判断が求められたその条件で、彼女はそう考えてしまつた。

優れてはいるものの魔術師という枠を出ないクラウンは、死徒の投擲に対応できず負傷した。ルヴィアはとっさの判断で、攻撃用の鉱石を牽制とし戦場を離脱したが、状況はお世辞にも良くない。その死徒は見逃すつもりはないらしい。



クラウンは右足も鈍くなり、そして滑らせた。ルヴィアはバランスを崩し、小麦粉袋に肩をぶつけた。痛んだが、気にならなかつた。彼女の内を暴力的なまでに満たす感情は、苛立ちと憤り、ただしそれは己へのものだ。今に至るこの屈辱的な状況はすべて彼女のミスによる。気分の入れ替えが終わらないまま、気晴らしにと戦闘に及んでしまった。背後に心配があつた。忍び寄る狩猟者そのものだつた。そう悟つた彼女はクラウンを座らせると、小麦袋にもたれかけさせた。

「……でお待ちなさい。直ぐに終わらせます」

「申し訳……」

彼はそう言うと言意識を失つた。今行ふべきはこの状況打破である。死徒に見逃す気が無い以上、振り切る事が出来ない以上。倒すか、敵が撤退する程のダメージを与えるより他は無い。あの男が間に合うかどうかは不透明だ。それを当てにするには愚かすぎる。そもそも。

(狩猟者とは私の事ですわ)

その琥珀色の瞳に、鋭利な光を宿し彼女は歩み始めた。その様は軍人であつた。



カツコツとブーツを鳴らすこと暫く。ルヴィアは倉庫の中央に位置する十字路に立った。フオークリフトが行き交いするのであろう、床には轍が二組見える。積み上げられた小麦袋は障害物代わりだ。四方にあるどの「積み上げ」までも約10歩。中央に居てはどの方向に逃げるかは推測できまい。但しそれは、四方から狙われる事も意味する。

本来であれば最寄りの「積み上げ」を楯にしたいが、どこから攻撃されるのかが読めない以上意味が無い。なにより死徒を前にしては楯の機能を有するか疑わしい。だが攻撃に転じる際に於いて、その隠密性は威を失う。ルヴィアの狙いはそのカウンターだ。

痛い程の静けさだった。それでいてルヴィアを狙う思念だけはその倉庫に満ちていた。粘性を持ち、纏わり付く。蚊に集られているかの様で非常にうっとうしい。

(今から、引き摺り出して差し上げますわ)

右手より放った鉱石はルヴィアの頭上の高くに舞い上がる。

「Call!」

言葉の力に応じそれは弾け、不可視の光を放つ。その鉱石の名はタイガーアイ。有する概念は視力の強化である。転じて隠れた敵を見つけ出す。気配があつた。ルヴィアの右斜め後方、小麦粉袋のビルの上だ。次弾装填。右手には「シャーマンナイト」と

カンポ・デル・シエロ”だ。

「Call. Two stone dance in gorgeous. To  
become one to coalesce, Sing!」

(二重の石よ、舞い踊りて共に成れ。謳え！)

シャーマンナイトは因果的な独立と防御。カンポ・デル・シエロはマイナスエネルギーからの守り、神聖さも帯びている。それらが生み出す効果は、負の存在に対する因果レベルでの防御だ。神聖さは死徒に対する割り増し強化(ボーナス)にもなっていた。因果の意味を帯びるシャーマンナイトは扱いが難しい。成功するかはルヴィアの運次第であったが、ツキはあった。運に関する鉞石を三つ目として持ち出す手段もあったが、3手目を考慮すると使えなかったのである。

ルヴィアが振り返りきる前に発動させたのは死徒との敏捷差だ。死徒のそれはルヴィアを大きく上回る。振り返り、敵を見定めた後、発動させては間に合うまい。事実、投擲された短刀の着弾と、ルヴィアが振り返りきったのは同時だった。彼女を狙った短刀は不可視の楯に防がれていた。そして本命の3弾目。ルヴィアの左手にあった鉞石が魔力を注がれ光を放つ。

「Call. Two stone dance in gorgeous. To  
become one to coalesce.」

(二重の石よ、舞い踊りて共に成れ)

カーネリアンは幸運、ゴールドルチルは雷撃である。彼女の声は高らかに、岩をも切り裂く弦の様だ。

「Sing. (謳え!)」

一つとなった石は眩いばかりの稲妻となった。広大な倉庫内を埋め尽くす程に雷光が迸る。雷は伝う蔓の様に倉庫内の鉄骨を走った。小麦を納めた袋を焼き、穴が開いた。サアと滝の様に中身が流れ出した。

ルヴィアは攻撃が成功したかどうか、それを見定めようとし、左に跳躍した。根拠はなかった。ただ直感に従った。そして着地する前に捕まった。追従できる速さではなかった。全身を鈍い衝撃が襲う。彼女は首を掴まれ、小麦粉袋に叩き付けられていたのである。

「ぐ……く……く……」

上手く呼吸が出来ない。薄目の視線の先には、白い頭巾から覗く、小太りの中年の女性の顔が在った。それは笑っていた。唇の端が歪めば蛇の様だ。それは嘲笑だった。その声質は忌々しいという表現では収まらない程にルヴィアの感情を逆なでした。

「惜しいところまで言ってたんだけどねえ、最後の最後でドジったねお嬢ちゃん。この建物は金属だらけだよ、どれ程強い雷撃だろうと流れやすい方に行っちゃまうさ。インカ

ローズ（炎）かペリドット（風）にしておくべきだったねえ」  
ルヴィアは苦悶の声を上げるのみだ。

「ま、二重の二連撃には少し驚いた。この分なら、儀式、触媒無しでも三重ぐらいは行けそうか。なるほど、これなら（バートリガ）倒されてもおかしくは無い。あいつは慎重つて言葉をまるで知らなかったからね。大方、調子に乗った所を掬われたんだろうさ」

「く……か、は」

のうのうと喋る死徒に対してルヴィアは喘いでいた。空気を食ろうとするも、死徒の手が緩む事はなかった。

「さて、ここまで手間を掛けさせてくれたんだ。楽には死なせないよ。連れて行く間、存分に苦しむと良い」

その死徒が取り出した短剣には、クラウンを襲ったものと同じ呪詛が掛かっていた。息苦しく、ルヴィアは口を金魚の様に何度も開閉させていた。だがその琥珀色の瞳は諦めていなかった。この期に及んで何かを狙っていたのである。興味が出たのか、その死徒は少し力を緩めた。ルヴィアの肺に空気が流れ込む。埃っぽい気がならなかった。

「けほっ、」

「呪詛に掛かればマトモに喋れなくなる、言いたい事があつたら言ってみな」

「……散り際は美しくと決めておりますの。配慮は不要ですわ。ラ・ヴォワザン」

「ほーう、どうしてその名を出したんだい」

「毒物を司る呪詛、鉱石の知識、そして魔女とくれば他に思い当たりませんから。貴女の夫は宝石商だった、そうでしたわね」

「よく勉強しているじゃないか。正解だよ。ま、分ったところで意味が無いけどね」

「そんな事ありませんわよ。風向きが変わる前に、お仕留めになさったら？」

「まだ石を持つている様だが私のナイフが早い。試してみるかい？」

「いいえ、その必要ありませんわ。もう必要ありませんもの」

「負け惜しみかい、これは意外だ。あれはどう見ても失敗だろうに。美しさとやらはど  
うしたのかね」

「お分かりにならないのかしら。既に陽は落ちている。その為にヘタマイト（勝利）ではな  
くカーネリアン（幸運）を組み合わせたのですから。シンヤはそうは思わなくて？」

「ああ。稲光は良い目印となった。あの追い詰められた状況で、幸運を組み込んだのは  
流石、と言わざるを得ないよ」

ラ・ヴォワザンがその声の主を探せば、そこに真紅の外套を纏った男が立っていた。  
その右手にある剣は魔力を帯びて青白く光っていた。

「そうか、この小娘のお仲間か。丁度良い、魔術師なら……」

ラ・ヴォワザンはその違和感に眉を寄せた。その存在は人間でもないし、魔術師でも

ない。

「お前は何者だ」

「お前が何処のなんだかは知らないが俺は怒ってる。人間でないなら、死ぬ」

ラ・ヴォワザンの頭上に真也が投げた小麦袋が浮かんでいた。支えがないなら落下するのは道理である。ラ・ヴォワザンのフリーな左手には短刀が二振りあった。一振りで放たれた二つは、一つは頭上に、もう一つは真也に向けられた。頭上の小麦袋は、くの字に曲がりどこかに落ちた。真也を狙った短刀は倉庫の奥に消えていった。真也が居ない、ラ・ヴォワザンが慌てて視線を走らせれば。ルヴィアを捕らえていたその右腕が飛んでいた。二人の距離は中型トラック2台分程だった。彼は短刀を躲し、一足飛びにその距離を詰めたのである。

ところがどうした事か、真也は不本意さを隠さない。続けて打った二撃目は、ラ・ヴォワザンの腹を浅く断つたのみだった。距離感が狂っている、加えて身体も鈍い。彼の予定では腕ではなく、首を斬り落とすつもりだったのである。感覚も身体も濁っていた。ラ・ヴォワザンは大きく飛ぶと、小麦袋の屋上に立っていた。そのふくよかな体型に見合わぬ軽快さであったが、大きく丸い目は忌ま忌ましさを隠さない。左手で庇う右腕の断面からは血が滴っていた。

「そうかい、そういう事かい。その顔とそのシンヤと言う名前、覚えたよ。夜に気をつけ

な」

「言っておく。夜は俺の時間だ。それでも来るなら覚悟を決めろ」

ラ・ヴォワザンの気配が消えるとその倉庫に静けさが戻った。あの手を逃すと後が面倒だ、真也は討ち取れなかった事を悔やんだが、今となつてはどうにもならない。真也は納刀し、ルヴィアに歩み寄った。彼女は首を押さえ、咳き込んでいた。緊張が解け、喉の痛みがやってきたのであった。

「怪我はある？」

「わ、私は大丈夫で、す。けほっ」

「私は？　他に誰か居るのか」

「クラウンが呪詛に冒され、て、シンヤの、その眼を貸してくだ、さらない？」  
「分った。その人の所に案内してくれ」

真也はクラウンを蝕む呪詛を殺すと、ナイフを引き抜いた。ぐうと呻き声上がる。続けてルヴィアが治療を施すと出血は止まった。真也は脂汗を絶やさないうクラウンの額に手を宛がい、そして首筋に宛がった。

「顔色が良くないな。たぶん血が足りてないんだろ。救急車を呼んでくるから彼を見てやってくれ」

ルヴィアは無言でクラウンの手を握っていた。彼女のよく知る大きく力強い手は、力



と暖かみを欠いていた。

(キヤスター、あの死徒の追跡はできたか?)

(申し訳ありません。見失いました。アサシンに匹敵する隠形です)



搬送された病院の一室でクラウンは身を横たえて居た。輸血を受け、顔色は良くなっているが、呪詛の影響が残っていた。暫く魔術回路に影響が残るだろう。ベッドの傍らで彼の手を握っているルヴィアは、終始沈痛な面持ちだ。真也は白く清潔な病室の壁にもたれ掛かっていた。親しい人の一大事だ、心中は察したいが生憎と真也にも予定が合った。

「その人がクラウンさんか。白人だと思ってた」

「クラウンは代々エーデルフェルトに仕える一族ですの」

「信頼してるんだな」

「少なくともシンヤよりは」

彼は頬を掻いた。確かに隠し事は多かったが、このタイミングで言わなくても良いだろうにと悲しくもなった。ただルヴィアの心情を考慮すれば今は我慢どころだろう。

真也は摘まれた花の様に白い壁から離れると、こう言った。

「とにかく二人とも無事で良かった。急ぎの用件があったけれど、その空気じゃないから今は止めておく。アパート・シティってホテルに居るから明日中に連絡をくれ。それじゃ」

「お待ちなさい。急ぎ、と言ったかしら」

「そう言った」

「外に公園がありましたから、そこに場所を変えますわよ」

その公園は幹線道路と大型病院に挟まれていた。木々が多く、公園と言うよりは林が適当だ。電灯の足下にベンチがあった。真也はハンカチを差し出した。彼女は一瞬躊躇った後それを受け取り敷物とした。彼女が口を開いたのと、真也が脇の樹木にもたれ掛かったのは同時であった。その声には、苛立ちが籠もっていた。

「別れを告げた筈のシンヤが何故ここに居るのかしら」

「追いかけてきたからに決まっている」

「姉を時計塔に置いて？」

「一緒に来てる。そんな事より、」

ルヴィアの表情が揺れると険しさが募った。姉と一緒に来ている、この言葉は禁句であったが、真也が知るよしも無い。『そんな事』という発言も配慮を欠いていた。ル

ヴィアに苛立ちが募る。だが真也の、

「槍が盗まれた」

という発言は、流石の彼女も無視できなかつた。余所を向いていた視線が真也を捕らえた。

「チューターの金庫が破られた?」

「そう。それで俺らが疑われている」

「シンヤは私を疑っているのかしら」

「それを確かめたくてきた。ルヴィアゼリツタ・エーデルフェルト、貴女は盗んでなどいないな?」

「なぜその様な事を聞くの」

「貴女の口から聞ければ良い。俺はそれだけで安心できるから。教授に大手を振って啖呵を切れる。これ以上疑うなら、そのロン毛を切るぞって、ね」

「私の言葉を信用すると言うのかしら」

「もちろん」

「チューターには私から話しておきます。トオサカシンヤ、貴方はもう国にお帰りなさい」

「返答は?」

「答えるとも？」

「答えて欲しいのだけれど」

「誰が応えるものですか」

「何を拗ねてる」

「拗ねてなどおりません」

「なら返答を拒否する理由は無いだろ」

「答えたくありません、早く私の前から立ち去りなさい」

「気がかりで帰るに帰られない、と言っている」

「なら気がかりのまま居なさいな。私だけが辛い目にあうなど不公平です。いい気味ですわ」

「俺も疑われている。付け加えれば何を意固地になっている」

「自惚れも大概になさったら？」

「意味が分らない。なんだその展開。槍など持っていない、そう答えるだけで済む話だろ」

「大事な事を全て答える間柄だと思っっているならば、それは自惚れだと言っています」

「槍の一件は俺らが共有した出来事だ、違う？」

「もう結構ですわ。お帰りなさい」

「結構の意味が分らない」

「ならばこう言いましょう。トオサカシンヤ、私は貴方が嫌いです。ですから答えたくなどありません」

「……それは中々に堪える発言だけれど、」

「それも虚偽ですのね。堪えてなどいないのでしように。私に執着しているというのも嘘なのではなくて？」

「何を言ってる。してないなら帰国を延期して、わざわざフランスくんだりにまで来る訳がない」

「それも嘘に違いありませんわ」

「あのな。嘘なら今ここに居る俺は何だ」

「ですから虚偽なのでしよう？」

「まだ混乱してるんだな。やっぱり明日もう一度来るよ」

「それも嘘なのでしように」

「あのな」

「そして嘘を付かない綺麗なシンヤを連れてくると良いですわ」

「それで必ず嘘を付く俺と、必ず正しい事を言う俺に “外にでる扉はどちらですか” とでも聞くのか」

「面白いですわね、それ」

「言っておくけれど、隠し事はしたけれど嘘を付いた覚えはない」

「国に帰ると発言したにも関わらず、私の目の前に居るじゃない」

ベンチに腰掛けるルヴィアは、背筋を張り姿勢正しく、両手を腿の上に重ねて置いた。ご令嬢らしい居住まいだったが、その表情は険しい。今までと異なるルヴィアの反応に手を焼いた彼は思わず本音を溢した。

「……め、めんどくさい」

「なんですって?」

「面倒くさいと言った。理性と信条、そして誇りを重んじるルヴィアゼリッタ・エーデルフェルトは何処に行った」

「ここに居ます」

「嘘を付け。それこそ嘘だ。少なくとも俺の知っている彼女はそんな事言わない」

「ではシンヤのルヴィアゼリッタに言えば良いでしょうに」

「分った」

「何を理解したと言うのかしら」

「取りあえず寝て、あした朝食食べてくれ。その後もう一度話す。今会話が出来る状態じゃない」

「明日なら会いませんわよ。迷い犬の様に追い返します」

犬扱いか、と腹も立ったが辛うじて飲込んだ。

「……クラウンさんがあんなになつて責任を感じているのは分る。平時の精神状態じゃない、つて事だ。だから仕切り直しをしたい」

「私がこう成っているのはシンヤのせいです」

「無茶苦茶だな」

「ええ、そうですね。私は滅茶苦茶にされた。叶うなら2週間前の私に『トオサカシンヤに関わるな』そう忠告したいぐらい」

「随分と勝手な事を言う。避けようとしたのは俺、突っかかってきたのは貴女だ」

「違います。シンヤが時計塔にさえ来なければ、そう言っています」

盛大な溜息一つ。

「あー、もう。分った。言いたいだけ言え。その間えと鬱憤を全部吐き出せ。罵られるのは慣れてるからな、遠慮する事はない。その代わりその後は話を聞いて貰うからな」

「吐き出せですつて？ よくもそんな恥知らずな事を言えるものですね……この恥知らずー！」

「言え。ここまで我が儘を言つてゴネるな。悩みを聞いてやる、と言っている」

「今我が儘と？　もう一度言つてご覧なさいな。二度とその様な事が言えぬ様にします」

「へえ。どうするつもりだ。顎でも砕くか、舌でも抜くか」

「全身の神経を麻痺させます、そうすれば私の生活も穏やかになるうものですから」

「我が儘だろ。恩に着せるつもりはないけれど、俺が間に合わなかつたら死んでいた」

「頼んだ訳ではありませんから」

「嘘つけ。ならなんで場所を俺に伝えたんだよ。気づいていないなら言うけれど、今の君は無茶苦茶だ。ほら、お兄さんが聞いてやる。悩みを打ち明けてみる。誰かに話せば楽になるから」

「誰が兄ですか。嫌悪しますわ」

「はん。素質と財力に物を言わせて自分以外を強いてきたお嬢様に言われても説得力無いね。悔しかつたら、一人で旅でもしてみるといい。自分が如何に世間知らずか、理解出来る」

「トオサカシンヤ。その発言は致命的ですわね。そこ直りなさい。せめてもの情けで看取つて差し上げますから」

「二人には限界があるつて言っている。それを認める事は欠点じゃない。俺ですら何回こてんぱんにされたことか」



「それがどうかしまして？　ただ運が無いだけでしょように」

「ここまで言つて、この状況に至つてまだ分らないか。言つておくれけど、俺がその気なら貴女は為す術がない。〃 Shake it up Baby! 〃 って言いながらそのスカートもめくれる。でもない。俺は誰かを頼るし、誰かの傍に居ようとする。ルヴィアゼリッタ・エーデルフェルトを尊重して。これを証とは考えてくれないか」

その端正な表情から険しさが消えれば、溢れるのは苦悩である。

「ほら、その間えをお兄さんに言つてみ。〃希望なら頭を撫でて進ぜよう」

「言いたくありません」

「ほんとーに頑固だな。ここは素直になるところだぞ」

「お断りします」

「他の誰かなら良いのか」

「誰であろうと言えません」

「なら、その間えを一生抱えるつもりか」

「誰が抱えたいものですか。吐露できればどれ程楽か」

「敢えて言うけれど、言いたい事が言えないなんて臆病以外何物でも無い。ルヴィアゼリッタ・エーデルフェルトは臆病者だ、それを我慢できる性格でも無かろうに」

「ええ、我慢など出来ません。我慢できないのに、恐ろしくて踏み出せない。私の内にあ

る臆病という矛盾、2週間とはいえ付き従ったシンヤが、ここまで言つて分りませんの？」

懇願。それは無防備な感情だった。二人の間にしばしの沈黙が訪れた。真也の内に彼女の言葉が徐々に染みいった。苛立ちに支配されていた彼の表情が徐々に緩んでいった。ルヴィアも同様である。但し真也の表情は、驚きと少々の頼りなさが混じっていた。真也はそれに気がついた。真也が気がついたことにルヴィアも気がついた。腕を組み、睨み上げるルヴィアの視線は落ち着かない。視線が絡み合うと、彼女は明後日の方向を見た。ふて腐れていていたが、恥じらいもあった。彼のその声は全く足に付いていない。

「い、いつから？」

「自覚したのはスタドリコンスタブルですわ」

「そんな一大イベントあったっけか」

「あのご老体とアジャーニさんの胸の話をしていたでしょうに。大きいとか、あの時です」

「あの痲癩はてつきり、従者が主の意向に沿わない云々って話だとばかり、思つてた」

「あれ程腹を立てたのだから、気づいても良さそうなものじゃない……」

「んな事言つたつてな。帰るつて何度も言つたろ。誠実とか素朴とか、散々罵倒された

し。そんな訳無かろーと……すまん。全く気がつかなかった」

「一体何処が鋭いのかしら。鈍すぎですわ」

「面目ない」

「それで、それを知ったシンヤはどうするのかしら」

（マスター）

（今取り込み中だ）

真也は散々頭を掻き毟った。天を仰げば星が瞬いていた。辛い。叶うなら彼女の想いを叶えさせたいが、生憎とそんな自由はなかった。そもそも相手は既に決めていた。その人に想いを伝える事は、許されていないがそれは別問題だ。

「分った。槍の事は聞かない。ただし教授の所まで送り届ける。それは堪えてくれ」

「それが、シンヤの返答？」

「心より申し訳ないと思う。でも俺はこれ以上の答えを持たない」

「そう。私を物か何かだと思っっているのなら覚悟をなさいな。刺し違える覚悟ぐらいありますわよ」

「一刺しぐらいなら譲歩する。けれどその前に聞いてくれ。俺らは疑われている。教授から見ると俺らはマイナスの位置にいる。捕まって釈明するより、」

「捕まる？ 釈明するですって？」

「容疑者の如く扱いは嫌いだろ？ 俺らのいざこざは教授には関係の無いことだ。この状態のまま教授に会うと、どんな判断をされるかわからない。なら威風堂々といこう。言っておくけれど、俺を無視してこのまま聖杯戦争を続けてもいつかは教授と鉢会うぞ？ 教授も参加者だからな」

「良いでしょう。チューターと会う事にします」

「おお、助かる」

「ただし、シンヤはここで帰りなさい。一人で赴きますから」

「だから俺も無関係じゃないんだが」

「繰り返すのだけれど私はシンヤが嫌いです。傍に居たくありませんから……なんですの、その不愉快な眼差しは」

「いや、ツンデレって本当に居るんだなって」

「どういう意味？」

「何でも無い。忘れてくれ。どの道現地で会うことになるし危険だ」

「危険などありません」

「さつきヤバかったろ。だから俺の呼び出しに応じた、違う？」

「この私をどれ程侮辱すれば気に済むのかと」

「笑ってなんかいない」

「私が無力だ、そう言っていますわ」

「どうしてそう消極的に解釈するかな。繰り返すけれど、どれ程の技量をもってしても、必ずとも勝利に繋がらない。俺も、貴女もだ。俺の2年の旅は負けつ放しだった。死徒にはこてんぱんにされたし、普通の人間に殺され掛かった事もある。何が言いたいかというと、力量問わず一人は危険だ、と言う事。いま貴女は一人だ。それは良くない」

「シンヤの経験はシンヤだけの物、必ず他者に適用できるものではなくてよ」

「確かにそうだ。ならこう説明するか。聞いてくれ。俺だけでは失敗していたし、貴女だけでは死んでいた。リバプールではどちらが欠けていても、あの教会にたどり着けなかった。スタドリコンスタブルも同じだ。俺一人でも、死徒バートリを倒せたかも知れないけれど、貴女が居なければあの坊主は殺されていた。そもそもバートリに遭遇できなかったかも知れない。どれ程強い力を持っていても、一人が出来る事なんてたかがしれている。もう一度言う、そして俺は貴女を気に入ってる。死なせたくないからホテルまで送り届ける。それでも嫌だというなら好きにするという。俺は勝手に付いていくだけだ」

「シンヤは私とどう在りたいのかしら」

「好き嫌いなんて聞くなよ。同じだ。契約した時と出会った時と何も変わらない。俺は家に帰る、貴女は成果、実績、経験、荣誉、神秘を得る。貴女は主であり俺は従者だった。俺はその関係を望む」

「ならば、こう聞きますわね。シンヤは私をどう思っていますの?」

(マスター)

(話は後)

真也はもたれ掛かっていた樹木から離れると、ルヴィアに傳いた。

「しつこいな。言つたら執着してるって。死んで欲しくないし、傷ついても欲しくない。叶うなら笑っていて欲しいと思う。そういう感情、配慮、心配、憂慮はしていけない」とか

「私を惑わしている、それに気づいているのかしら」

「それに関しては謝るしかない。運が悪かったと諦めてくれ」

ルヴィアの溜息は、天が落ちてしまいそうな程に重かった。

「こんな酷い男に弄ばれたなんて。男性不信に陥ってしまいそう」

力なかつたが笑みは戻っていた。

「何を言ってる。貴女が俺に難癖を付けた、これが始まりだろ」

「私を拒絶しなかつたじゃない。強く言えば、引き下がりました」

「嘘つくな。散々ゴネて意地になって付いてきたに決まってる。そんな状態で依頼なんてこなせるか」

「だから下手に出たと。事なかれ主義なのか、チャレンジ精神に溢れているのか良く分

かりませんわ」

「だから俺は中道だ」

「チューターの構えるホテルはどちら？」

「ご理解頂けて恐悦至極。こつちだ。案内するよ」

「念を押しますが、私は理解などしていませんから。私に優しくない意地悪なシンヤは嫌いです」

「ならなんでホテルに行く気になった」

「体調不良を押して、懇願されればその様な気まぐれもします」

「体調不良？」

「顔が赤いですわよ」

額に触れた手はひんやりしていたが柔らかかった

「気づいていませんでしたのね」

「どーりで、体が重いはずだ。風邪なんて何年ぶりだろ」

「体調管理を疎かにして、仕事云々を語るとは片手落ちですわ。それとも姉に会って緊張の糸が切れたのかしら」

「それは秘密だ」

「嘘仰いな。凶星でしょうに」

終わりよければ全て良し。屈託のない笑顔が見られれば、些細な事だと彼もまた笑った。

(キャスター。用件は?)

(凜様が先程までその場所におられました)

(……聞かれてた?)

(恐らく)

何を口走ったのか反芻した。真也の発言を纏めれば、家に帰ると言っている、ルヴィアにも応じていない。

(大丈夫だ、よな)

(私にはお答えしかねます)

漠然とした不安が残るのみである。

つづく!



## 六話

ルヴィアがエルメロイと向き合えばその展開は案の定であつた。エルメロイの部屋には丸いローテールを挟み、向き合うソファが一組あるのだが、火花を散らせば向き合う砲台に他なるまい。ルヴィアは姿勢正しく腰掛けていたが、彼女の放つ意識の線は刺々しい。それどころか。言葉の応酬を交わす度に鋭くなり、今では殺意の一步前だ。

「私どもは槍を持っておりません。盗んだなどと、冗談にしては度が過ぎましてよ。チューター」

エルメロイは加えていた葉巻を手に持つと煙を吐いた。彼にとつて葉巻は趣味でもあつたが、交渉事の小道具でもあつた。間を取る、と言う意味だ。

「レディ・エーデルフェルト。君はそれを立証できるか」

「持つて居ないものを持つていないと証明せよ、悪質ですわね。この場合盗んだ証拠を見せるべきでは無いかしら？」

ルヴィアの琥珀色の瞳が鋭利に光る。

「お疑いなら、チューターの血を以て潔白を晴らしますわ。槍を盗んだという謂われ無

き屈辱に堪え忍ぶより、侮辱を晴らさんが為の師殺し、この銘の方が栄えると言うもの」ルヴィアは立ち上がると鉞石を取り出そうと右手を構えた。ベッドに腰掛けていたグレイが立ち上がる。抜刀こそしていないが真也も同様だ。もちろん彼はルヴィア側であった。予定外の何かが起きれば、なし崩しの惨劇が起きる、その場に居る4人がそう覚悟した程の静寂だった。

カチャリ、と音がした。グレイ、ルヴィア、エルメロイ、そして真也がその音源を見れば凜が紅茶を嗜む音であった。音の主はティースプーンである。彼女は威ともせず、おくびにも見せず、澄まし顔で地のペースだ。グレイは再びベッドに腰掛け、真也は頭を掻いた。ルヴィアは幾分表情を緩めこう告げた。それは彼女の最大の譲歩である。

「それとも肌を晒せばご満足頂けるかしら。対価としてその眼は潰させて頂きますが、死ぬよりは良いと思いますわ」

継いだのは凜である。

「ここが落としどころではないかと思えます。このまま押し問答を続けても得るものどころか失うものの方が大きいでしょう」

「良いだろう。この場は納めよう」

エルメロイを継いだのはグレイであった。目深に被ったフードの影にある彼女の表情は、夜間照明のほの暗さと相まって更に読みにくかったが、争い事を避けられたと安

堵していた。

「師匠。これからどうするんですか？　行き詰まりが確定かと」

「厄介払いが出来た、と言いたいが。槍の搜索は続けたいとならないな」

真也が「ですが手がかりがありません。一度、時計塔に戻るべきです」と言えばルヴィアが「戻りませんわよ。戻ったところで槍が見つかる訳でも無いでしょうに」と堂々と答えた。真也は「いや、それどころじゃないと思うんだけど」呆れを隠さない。そうしたらエルメロイは「いずれにせよ聖杯戦争に参加する、と時計塔に伝えここに來ている。適切な理由無しに戻る事は出来まい。槍の存在は塔にも秘密にしている。盗まれた槍が無かったから、と言えない以上続けるより他は無いだろう」と至極尤もなことを言う。

「しかし」と真也が喰らい付けばルヴィアは「シンヤはもう帰りなさい。後は私たちが対応します」と一転穏やかな笑みである。すると真也は「……お手数掛けました」と答えた。その声は安堵と心残りであった。彼の心中、知ってか知らずが義姉の「いえ、最後まで付き合います。少なくともこの聖杯戦争までは」という発言は皆を驚かせるものだった。もちろん義弟の驚きは如何ほどのものか。

エルメロイの瞳はその真意を探ろうと「それは助かるが、良いのか。万が一遺産が本当だったとしても、招待されていない以上、君たちが遺産を手にする資格は無いが」と

言えば、義姉はあつけらかなとしたものだ。

「構いません。こちらも拾えるものは拾いますから」

「姉さんちよつと」

義理の弟は義姉の腕を掴むと強引に引つ張った。

「教授、少し時間下さい。身内の話です」

「5分程で済ませてくれ」

「ちよつと、何よ。痛いじゃない」

義弟は強引に招いたバスルームの扉を閉めるところこう言った。

「どういう風の吹き回しだ」

「腕に跡が付いた」

「それは済まなかった。だが答えてくれ、どう言うつもりだ」

「最後まで見届けるのが筋ってもんでしょ？」

「槍が何時見つかるかなんて、分らないだろ」

「だから言ったでしょ。この聖杯戦争までだつて」

「お嬢様に言った事を気にしてるなら、何を間違えていたか言ってくれ。改める」

「真也は十分に正しいと思うわよ」

「なら何を考えての意趣返しだ」

「正しい未来が見えたかも知れない、つてこと。それを見極めたいの。可能なら拾い上げたい」

「何の話だ、それは」

「今は言いたくない」

ソファーに腰掛けるルヴィアは、貝殻の音を聞くかのように通信用複合結晶を耳に当てていた。ルヴィアは悪いとは思いつつも盗み聞きである。はてな。彼女は首を傾げた。関係がうつつかわつて冷めている、というよりはぎこちなくなっている事が伺えた。だが不可解なのがその会話内容である。姉が弟に、弟が姉に向けるモノには思えなかった。

（姉弟喧嘩と言うよりは……）

「レディ・エーデルフェルト。盗聴とは君らしくない行為だ。意外だ」

「これ位構わないでしょう。弄ばれた対価としては格安ですわ」

「君がか。余程のプレイボーイか、悪質だと見える」

「悪質ですわよ、本当に」

フードに隠れた 그레이の瞳がキラリと輝いた。恋バナに興味津々なのだった。

「話しませんから。ミス・ 그레이は自分のを追いかけなさいな」

今の彼女はショーウィンドウ越しのおもちゃを羨望する子供である。カチャリと扉

が開けば現れたのは遠坂姉弟であった。エルメロイが問えば答えたのは凜であった。

「話は済んだか」

「ええ。取りあえず」

その姉弟は少し離れて壁にもたれ掛かった。

「では話を続ける。この聖杯戦争に対する我々の立ち位置だが、」

真也が手を上げた。

「なんだ、トオサカ弟」

「そんな不愉快そうな顔をしないで下さい。その話の前に知っておかなくちゃいけない話なんですから」

「前振りが良い。端的に話せ」

「レディ・エーデルフェルトが死徒に襲われました」

「……聞こうか」

「シンヤ、もうその呼び方は終わりにしませんこと?」

「どこかおかしい?」

「それは始めて会った時の呼び方ですわよ」

「ならルヴィア様?」

「もう契約は終わっているでしょうに」

彼はちらりと義姉を見た。

「良いんじゃない？ 本人が言ってるし」

「正直抵抗があるんだけど、」

「シンヤ」

ルヴィアの期待の眼差しに洩々応じた。

「……ルヴィア。襲われた時の状況とあのおばさんが誰か教えてくれ。察しは付けてるんだろ？」

これ位はと満足そうに微笑んでいた彼女であったが、一転、その表情は鋭い物に変わった。

「招待状の導きに応じましたのよ」

ルヴィアのその言葉に思い至ったエルメロイは自身の招待状を広げ、唸った。

「手の込んだ事だな。新たなメッセージが浮かんでいる。〃七つの鍵を以て、天の扉を叩け。鍵を持つ者のみが資格を有す〃 文章の下に浮かび上がるピースは大印章（アエメト）の一部分だな」

「師匠？」

「レディに教えた事はなかったか？ 大印章（アエメト）とはジョン・ディーが天使から授かったと言われる天使召喚の術式だ。その構成言語はラテン語と天使語（エノク語）。

7 芒星と7 天使の名が書かれ、その図章がピザの様に切られているが、これは七等分という所だろう。 “七つの鍵を以て、天の扉を叩け” とは参加者から招待状を奪いこれを揃えろ、大方そんなところだろうな」

「チューター。先程の侮辱は棚に上げ、倒すのは最後にして差し上げます」

「そうしてくれると助かる。私としても教え子に手を掛けたくない。極力な」

ルヴィアとエルメロイのやりとりを聞いていた真也は、離れたベッドで腰掛けるグレイをちらと見た。

（教授の切り札はグレイさんか）

先程の一触即発の空気。ほんの一瞬膨れあがった彼女のそれはサーヴァント級であった。彼女はフードを目深に被り相変わらずだ。ルヴィアが続けた。

「この町に何かあるだろうと探り歩いていけば、突如この招待状が反応し、羅針盤が浮かび上がっていた。それに従い歩けば、ラ・ヴォワザンに遭遇したという訳ですの」

「レディ・エーデルフェルト。その名前に間違いないのか」

流石のエルメロイもその事態を重く見たのか顔色を変えた。

「ええ、あの姿は資料そのものでしたわ。ご本人もそうだと言っておりましたもの」

凜が「17世紀の魔術師が生きている？」と驚愕すれば、ルヴィアと真也は「存在する」とツツコミを入れた。真也の「死徒って事なんだろ。あの手応え、感じ、間違いな



「い」という発言をすれば、凜は「まあ真也が言うなら信憑性があるわよね」と疑うべくもない。かつて彼は死徒二十七祖のうち3体と遭遇しているのだから。エルメロイが「僅か2週間足らずで2体の死徒と遭遇か。運が良いと言うべきか、評価に困る事象だな、これは」とぼやけば、ルヴィアと凜は真也を睨んでいた。

「俺のせいじゃない」

「トオサカ弟、思い当たる節でもあるのか」

「アリマセン」

「ラ・ヴォワザンが我々と同じ参加者なのかどうか、それも気になるところだ」

真也が「リチャード・クロムウエルが幾ら名門でも、死徒と繋がりはあるとは考えにくいですね。連中の目的は理解しにくい。人間と思考が異なります」と言えば、凜は「でも、偶然というのも気に掛かるわね。私たちみたいに参加者の協力者とか」と呟いた。ルヴィアが「魔術師上がりの死徒なら何らかの欲望を持っている筈。その為に死徒になつたのですから」と繋げた。

そうしたら凜が「死徒が天使の知識、と言うのも考え難いわよ。不死者であれば時間という制約から解かれるんだから。町中に現れて狩られる危険を冒してまでも参加するとは考えにくい。ただでさえ聖堂教会の目の届かないところは少ないのに」との発言を聞いた真也は黙り込んだ。

(いや、関係があつたから、クロムウエルの第1次聖杯戦争は、聖堂教会に襲われたのか?)

エルメロイは言う。

「今の情報では判断が付かない。判明している事実はこの町に死徒が居ると言う事のみだ。それを注意、いや警戒事項として各位心にとめておけ」

グレイが言った。

「師匠。これからどうなりますか?」

「当然この儀式に参加する。積極的にな。二手に分かれる。私とレディ、後残りだ」

「教授、俺らを囮とか思つてませんか?」

「君たち3人は3人が目立つ。なによりラ・ヴォワザンは、トオサカ弟。君を目の敵にしているだろう。その場に私が居ては足手まといだ」

「しつかりやりなさいよ、真也。魔術師は引き受けた、死徒は任せただから」

「へいへい」

エルメロイは腰を上げた。

「それでは本日は解散とする。レディ・エーデルフェルト、君はどうする?」

「ホテルに戻りますわ。荷物もありますし」

「トオサカシンヤ、」

「送り届けですね、了解です」

「そのまま向こうに泊まったら？ 戦力分担的にも都合が良いし」

「……教授、申し訳ないですけど、送迎は謹んで辞退します。姉さん、女の人同士なら気兼ねないだろ。ルヴィアの警護は任せた。今後もケンカばかりじゃ困るから、これを機に親睦を図ると良い」

「なに、それ」

「言ったままの意味。それとも余計なお世話だと言った方が良いか？」

「なによ、姉の言うことが聞けないって言うの？」

「それは姉の範疇を超えている。誰を選ぶかは俺が決める」

「決められないくせに良く言うわよ」

姉弟間に火花が走った。良く分からない空気にグレイは戸惑っていた。それはルヴィアも同様であった。

「私は真也と同じ部屋が嫌、こう言えば良い？」

「なら俺は野宿で良い。手慣れたもんだ」

「トオサカ姉弟は喧嘩でもしたのか」

「そんなところですよ」

とはいう真也であったが凜の思惑に、ぼんやりとだが当りを付け始めていた。エルメ

ロイのその表情は余計な手間を掛けさせるなど言わんばかりだ。

「レディ・エーデルフェルト。君はこのホテルをどう思う」

「そうですわね、讓歩の範疇内と言ったところですよ」

「しかし教授。この時間ではカウンターも受け付けませんよ？ 日本ならともかくここはフランスですよ」

エルメロイは凜の意見に聞く耳持たないと言わんばかりにこう言い捨てた。

「トオサカシンヤ、君は荷物をこの部屋に持ってこい」

「了解です」

さすれば 그레이が異議を申し立てるのは当然だ。

「師匠、それは困るんですけど。シンヤさんと同室なんて」

「レディは彼女らの部屋だ。これを機に親睦を図ると良い。得るものもあるだろう」

「……え」

その反応は彼女にとって珍しいものだった。先の異種格闘戦騒ぎを思い出せば無理もない。そして 그레이は、凜とルヴィアを見た。そこに並び立つ金と赤はとても大きなものに見えた。噂に聞く金剛力士像とはこういうものなのだろう、彼女はそんな事を考えた。ルヴィアは腕を組み、凜は手招きし、満面の笑み。哀れ 그레이は怯えるのみだ。そしてその夜。勃発した争いは必然だ。 그레이には身を挺し制止する以外の手段をも

たなかった。そのホテルには「師匠の馬鹿」という嘆きの声が高らかに響き渡ったという。

「師匠のばか……っ！」



シエルが立つその場所はその町の病院だった。規模が大きく、高度な医療設備も備えていた。無論警備システムも相応だ。暗示を使い警備員を誤魔化しても警備システムはそうはいかない。そこで彼女はその病院に属する信者に手引きを依頼した。暗示を使いつつ地下に降り扉を開ければ、吐く息が白い。霊廟であり冷廟というわけだ。その部屋には黒い遺体袋に収められた死者が所狭しと押し込まれていた。強いて言うなら寝台列車の下等客室だ。遺体袋に取り付けられたプレートにはバーコードと、アルファベットと数字から成る識別番号、そして名前が刻印されていた。記号が大きく名前が小さい。生前の名前は予備の識別名だと言わんばかりである。彼女は聖職者という意味では余りにもかけ離れた存在であったが、それでも死者がこの様な扱いを受けることに憤りがあつた。

シエルは手元のリストとネームプレートを見比べた。外れである。次の遺体を見比

べた。外れだ。それを数度繰り返し、とある遺体で手を止めた。リストとネームプレートの名前が一致していた。彼女はその遺体袋を持ち上げて、多目的ベッドに乗せるとチャックを降ろした。現れた彼は眠る者とはほど遠い形相だ。死に際に余程恐ろしい目に遭ったのだろう、事実彼の首筋には、二つの穴があった。頸動脈に達するそれは、まるで吸血鬼にでも吸われた様に見える。事実、その通りであった。シエルは聖堂教会のネットワークが捕らえた情報に従い、彼の処置をしに来たのであった。

彼女は指で十字を切るとその遺体に手を翳した。死徒に血を吸われた人間が、リビングデッドに成るには数年かかる。ただ例外もある以上、放置する訳にもいくまい。左手にある聖書を読み上げれば、その姿は聖職者に相応しかった。

「天に居ます父よ、御名が崇められ、御国が訪れ……」

その死体は燃えだした。火災警報器は無効化したので騒ぎにはならない。換気扇も動いているので、煙も暫く経てば消える。何も問題は無い。事実その遺体は浄化されていく。それでもシエルは憂鬱さを隠さない。この地に死徒が居る、と言う事だ。浄化され切った事を見届けると、彼女の携帯電話が鳴った。発信者はシエルの知る人物であった。もつとも知り合ったのはほんの数日前である。応答すれば携帯電話から聞えるその声は軽かった。

『シスター・シエル。タレコミが入ったよ』

「シスター・アーシア。何度も言いますけれど、もう少し品のある言葉を使って下さい。それに私は仕事中です」

『仕事ではなく、使命と呼ぶべきじゃないかな。シスター・シエルは誠実だけど、使徒としての意識に欠けるって』

「シスター・アーシアに言われたくありません。そもそも、その使命を邪魔する程の事なのでしょね」

『槍の情報、これどうかな』

シエルの態度が変わる。その回収は彼女の使命であった。

「その場所は何処ですか？」

『正確には誰か。トオサカシンヤだって。日本人みただけだけど、知ってる？』

「すぐ教会に戻ります。良いですかシスター・アーシア。万が一遭遇しても交戦は控えさせていただきます」

『ふーん。シスター・シエルが慎重になるぐらいの相手なんだ。何処で知り合ったのかな？』

「ちよつとした偶然の出会いですよ」

『名前から男の人っぽいけれど、少し楽しみなかな。どんな人なんだろ』

「シスター・アーシア」

『冗談だつてば』

次のアーシアの声色は変わっていた。彼女の公私は際立っていた。

『これは我らにとつて福音となりましょう。聖槍を取り返し、我らが父を恐れない愚かな者どもも、儀式も、一切を砕く。シスター・シエル。これは父が与えたもうた聖なる使命です』

「分つています」

『それでは急ぎ戻つて下さい。父と子と聖霊の御名によつて、AMEN』

「AMEN」

シエルは携帯を切ると溜息を付いた。『彼』があゝの姫にどのような目に遭わされているのやら、気が気でないというのに、三咲町に帰るのは暫く先になりそうだ。宮仕えのこの身を恨むのみである。シエルはもう一度深い溜息を付いた。



陽も落ちた時刻9時。そろそろ町も落ち着く頃、ルヴィアのチームは競合相手を求めて彷徨っていた。その町のその地区は街灯もなく、信号も見当たらない。通る車道は辛うじて2車線を維持する程度の細い道だ。走る車両もなく、僅かばかりの店もシャツ



ターを下ろしている。各家の窓から溢れる灯火だけが、その闇夜を照らしていた。静かなものだ。カツコツと靴音を鳴らせば、先鋒はルヴィア、次鋒凜、真也が殿である。真也が言う。

「グレイさんが酷い身なりだった理由が気になっただけだ。煤けていたし、あちらこちらがほつれていたし、憔悴していたようにも見えた。なにがあつた？」

ルヴィアはしれつと答えた。

「何でもありません。レデイ同士の秘め事に興味を持つなど悪趣味ですわ」

「そんな可愛げのある話なら、気にはしないんだけどね」

義姉は義弟に答えず、その代わりこう言った。

「レデイ・エーデルフェルト。昨日向かっていた場所とちがうのよね？」

「ええ、そうですわね。町の中心を基点にすれば、時計と逆方向、大凡7時の位置と言えば良いかしら」

「キリング・フィールドに意味はあるのかしらね」

「わざわざ誘導してるんだ、それはあり得る」

義姉は己の肩越しに、義弟を一瞥すると、何事もなかったかの様に歩き始めた。

（無視か。どうしろってんだ、ほんとにもう）

ルヴィアの思わせぶりな視線は二人の関係に向けられていた。『何かがおかしい』

彼女の印象はそれに尽きた。きょうだいの居ないルヴィアには、きょうだい喧嘩の経験はもちろん見た事すら無い。その不可解さを上手く表現できないが、目の前の二人が作り出す雰囲気、それではない事だけは漠然と知れた。真也は戸惑っていた。凜は意固地に見える。

ルヴィアは、凜と同質だという自覚があつたが、その凜に対する真也の接し方が随分異なる。ルヴィアに臆面と言いつつ昨日の真也にはとうてい思えない。そう、強いて言えば慎重、配慮、恐れ。血を分けた長年ともに育ってきた間柄の姉に、ここまで気遣うモノだろうか。

3人が3人の思惑を抱えたまま十字路を越えれば、ルヴィアの招待状が音を奏で始めた。彼女の手に在るそれには羅針盤が浮かび上がる。針の向きは方向を、その長さは距離を示していた。近づく程短くなる仕掛けだ。暫く歩き、針の縮み具合から、真也は距離に目処を付けた。

「なるほど、戦場を知らせるリーダーみたいな物か。この距離と方向なら少しあるな。ロアール川の向こうだ。急ごう」

真也が2人を急かせば、女性2人はマイペースであつた。

「少し待たせるぐらいが丁度良いですわ」

「気があうわね、同感だわ」

「相手より先に到着すれば、現地の状態とか色々調べられる、と思うんだけど」

「二人は菌車をかみ合わせたかのような見事な同期で振り返ると満面の笑み。」

「お願い致しますわね」

「任せた」

「……先行する」

彼は駆け出すと跳躍。夜空に消えていった。それを見ていたルヴィアは期待せずに聞いた。だもので眩く様だ。

「ミス・トオサカ。貴女の弟は何者なのかしら。身体強化と聞いていますが、詠唱はありませんでしたわよね？」

「私も知らないわよ」

「それはどういう意味ですか？ 貴女はトオサカの当主で、シンヤは弟なのでしょくに」

「真也には心当たりがあるみたい。聞いてみたら？ 気に入っているなら答えるかも」

「なんですの、その投げ捨てる様な言い方は」

「関係ないでしょ」

「そう、立ち聞きとはお行儀が成っていないですこと。勘違いの無い様に言っておくけれど、シンヤは家も貴女も大切にしていますわよ。それがご不満なのかしら」

「だから、辛いんじゃない。真也は割り切ってるみたいだけれど、永久に交わらないレ」

ルの様な関係なんてどうすれば良いのよ」

“姉弟であれば当然でしょうに” ルヴィアのその問いに凜は答えなかった。



三つ目の道路を飛び越えた。14個目の屋根を踏み抜いて4つ5つの家屋を飛び越した。真也は左手甲に刻まれた符陣に魔力を籠めた。

「キャスター」

『状況は把握しております。その線上にはサン・プリヴェ・サン・メマン地区の教会があります。招待状が指し示した場所は恐らくそこかと』

「聖堂教会がこの儀式に参加している、ってのは考えにくいけれど」

『その教会には……使徒であろう人物が一人います。大規模な戦力は確認できません』  
「分った。こちらは程々で良いから教授の方をトレースしてくれ」

『マスター。軽率な行動はお控えください。いたずらに凜様を煽るべきではないかと』

「なんだそれ」

『シスター（修道女）です』

「だからなんだ」

『僭越ながら、何らかの關係を持つのではないかと危惧しております』

「……あのな。しない。そもそも聖堂教は嫌いだ」

『手当たり次第の見境無しは、道徳上問題がありますし、私としても看過できません』

跳躍中の彼は、思わず姿勢を崩し、着地し損なうところであった。凶らずとも、屋上で四つん這いだ。蛙の様である。

「……なんだそれは」

『同じ服装のいかかわしい書籍をお持ちでした』

「あー、そうだよ。俺が遠坂になったって聞いたAが、預かってたモノを返しに来ましたよ」とわざとらしく送りつけてきた一件だな。思い出しても頭が痛いぞ、こんちくしょう」

『お忘れですか？ 隠匿を凶った事が、事態炎上の原因です』

「隠匿じゃない、極秘裏に処分しようとしただけだ」

『3冊目を取り出すとブザーが鳴る、この仕掛けは感服せざるを得ません。開梱した時点でマスターは投棄しない、これを見抜いたA様はなかなかの策士です』

「……ちよつと位いいじゃんか。あんな美人さんズに囲まれたら、折り合いを付けるのだって難しいんだからさー」

その教会には建物という意味での教会と、使徒が住んでいるだろう住宅があった。住

宅街の中にありつつも広大な敷地があり、その敷地には墓石が並んでいた。真也が潜むのは教会を見通せる、街路樹の枝の中だ。いつか手に入れた暗視スコープで教会内を覗いていた。従者のその声は苦惱めいていた。

『葵様にお伝えしたくない状況です』

「なんて伝えるつもりだ」

『街路樹に身を隠し、シスターが居を構える夜の教会に望遠鏡を向けていた』

「任務上必要な偵察って言えよ。なんだその悪意ある表現は」

『マスターは全く以て従者泣かせのお方です。3年前も、今も変わりません』

「……昨夜連絡を袖にした事を根に持つてるな」

『いえ。このフォローをどうするべきか、それに苦慮しているのみです。マスター。進言をしても宜しいですか?』

「どうぞ」

『あれから3年です。経緯事情は理解してはいますが、これ以上の先送りは酷かと存じます』

「……そっか、やっぱりそういう事か。わかった。この件は俺が受け持つ。キャスターは手出し無用だ」

教会の敷地に沿い走る舗装道路は、2車線ある相応のものだ。敷地内には樹木が多数

あった。その向こう側にはハイウエイが走っており、この時間でも交通量は絶えなかった。真也は身を躍らせ、着地した。そのまま堂々と歩き、その舗装道路に立った。門の前には教会に通ずる門である。黒い鉄パイプを交差させた柵の様な門が聳えていた。

『どうなさるおつもりですか』

「教会の敷地内で戦うのは避けたい。だからおびき寄せる。先方は戦う気があるから、敵とおぼしき俺がこうしてずっとガン飛ばしていれば気になるものだ。我慢が出来ず出てくるか、それとも俺をおびき寄せようとするかで大凡の性格も分る」

『マスター』

「なんだ」

『時々我が遠坂家を覗く不届き者が居るのですがご存じ?』

「ま、まあ。アレだ。あれだけ美人さんが揃えば仕方が無いんじゃないかな」

『その不届き者と行為が同じです』

「うっさい、っと。お出ました。消極的な性格では無いって事か」

暫くし一人の女性が出てきた。門をくぐり現れたその人は、黒色の修道服を纏っていた。ワンピースで頭巾はなく、襟、肩に短く白いケープをあしらっていた。パープルの髪は短かったが耳が隠れる程には長かった。ショートカットと言うよりは前下がりポブだ。見るからに若い。15, 6歳で、女性という寄り少女が適当だ。その少女は真也

「が纏う真紅の外套に面食らい目を丸くしていた。

「うわ、こりやまたど派手な人だ」

中身も若かった。

（マスター）

（大丈夫だって。俺は冬木市のテンナインって呼ばれた男だぞ）

（それは初耳です。どのような意味があるのですか？）

（ナンパ成功率99.99……と9が十個並ぶ確率で失敗すると言う意味だ。ルヴィアの時みたいな奇跡は何度も起きない）

冬木市ではシスコンと蔑まれていたが、生憎とフランスなのだった。先入観は無いのである。

「お兄さん辛そうだね。あ、ひよつとして告解に来た？ それとも入信かな？」

「色々違う。そして色々の前に確認したい。シスターさんはクロムウエルの招待客か？」

「そうだよ。と言うことはお兄さんもそうなんだよね？」

「俺は関係者で参加者は少し遅れてくる。斥候という所」

「のぞきこー」

「ちがうわ！」



どいつもこいつもと、頭を痛める真也であった。彼の反応に面食らい、何を思ったのかその若いシスターは身を屈め真也の顔を覗き込んだ。

「ふーん」

その眼差しは値踏みする様であり挑発しているようにも見えた。やりにくい、と言うのが真也の率直な感想だ。

「あのだな。そう無防備に距離を詰めるな。警告するぞ。今の君の場所は俺の間合いの内だ。つまり俺がその気なら君は為す術がない」

「キス、しちやうとか？」

「天然だ、って言われないか？」

「時々言われるかな。酷いよね、そういう決めつけて」

「気にしたなら謝るけ、れ、ど。もう少し敵らしく振る舞ってくれとありがたい」

「ふうん」

「なんだ」

「お兄さんは思っていたのと違う。聞いていたイメージに近い」

真也の警戒レベルが一つ上がった。

「俺について聞いた事がある、ってどういう事だ」

「本隊のご到着かな」

シスターの視線が真也を通り越し、その背後に向けられた。その背後にある気配は二つ。例えるなら紙やすりでもあったし、ナイフでもある。いずれにせよ、お世辞にも心地良い感覚ではなかった。端的に言うなら刺々しい。

「シンヤ」

「真也」

「話していただけ」

シスターは関心した様にルヴィアと凜を見ていた。

「へえー綺麗な人。お兄さんの恋人？ 両手に花なんてやるね」

「ちがう。友人と姉」

「なら今フリー？」

「何でそんな事を聞く」

そのシスターはにんまり笑うところ言った。

「私、お兄さんを気に入ったかも」

「……は？」

（マ、ス、ター）



「はい、はい。まずは自己紹介からかな。ご覧の通り修道女やっています。アジアって呼んでね。よろしくおねがいします」

彼女は舞踏会にでも居るかの様に一つ回ると、仰々しく真也に手を差し出した。握手を求められた。

「……」

戸惑うのは真也ばかりなり。だが敵意はともかく殺意は無い。彼は渋々それに応えた。手を上下に振りながらも、彼の言葉は苦悩に満ちていた。強いて言うならば高速道路。インターチェンジにある標識が理解出来ず、てんで違う方向に向かってしまい、困惑するドライバーである。

「聖職者にあるまじき軽い娘だな」

「あー、それって偏見!」

「礼拝でもそんな態度なのか」

「まっさかー。TPOは遵守するよ」

今がそういう態度で良いのか、真也はそう思ったが言うのを止めた。彼の苦悩を知らず、アジアは招待券をびつと取り出した。

「で、招待券を持っている人はどちら様? まさか3人がかりなんてしないよね?」

真也の言葉はとても重かった。威厳のあるという意味では無く、距離が掴めず、どう接しようか悩んでいる、と言う意味だ。

「シスター・アーシア」

「アーシアで良いよ」

「……シスター・アーシア」

「堅いんだね、お兄さんは。んーでも嫌いじゃないかな。お兄さんみたいなタイプ」

（モテ期到来？）

「……」

背後の威圧が痛い。

「不用意な発言は慎んでくれると助かる。ていうか、シスターは神と結婚してるんだろ。浮気は良くない」

「古いなー、堅いなー、でもいいな」

（それで良いのかカトリック）

「ね、その後ろのお姉さん方。私が貰っちゃっても良いよね？」

「ダメだ。主は自分で決める」

「主？ 恋人じゃなくて？」

「どうでもいいだろ」

「主だなんて惜しいー。それにちゃんと自分で言うところが良いー」

「あんなシスターが見てる俺は一面に過ぎないぞ。そんな簡単に決めるな」

「ああ、ますます惜しいー」

「どこがだ」

「一見軽薄に見えるけれど根は真面目だね。表面に囚われるなつて気遣うところもマ  
ル。魔術師なんか止めて、聖堂教会に来ない？ 大歓迎するよ」

「……」

「ん？ ひよつとしてお兄さん、誰かに良いところを褒められた事がないのかな？ そ  
れで戸惑ってる？」

事実であった。調子に乗らせじと罵倒された事なら事欠かない。

（マスター。注意してください。そのシスターは恣意的な振る舞いで何かを狙っていま  
す）

（分ってる。でも今の状態じゃやりにくいから、本音を引き出そう）

真也は腕を組んでムツスリと。

「軽薄な振る舞いと、根の真面目さで損をしているね」

「……シスター・アーシア。真面目な話をしたい」

「今まで真面目な話だったんだけどな」

嘘だと叫びたいのを真也は必死に堪えた。

「なぜ聖堂教のシスターがその招待状を持っている。何で受けたのか、と言う意味」

「決まってるよ。魔術師如きが天使様と話すなんて許せる訳無い。神秘、聖なる父は我らにのみ恵まれる、許される」

「なるほど。それは道理だ」

アーシアのその口調は軽いままだが、その言霊は重かった。

「もう一つ。この町に居るのはシスター・アーシア、貴女だけか？」

「それは秘密だよ」

真也は組んでいた腕を解いた。ここからは戦闘活動に突入だ。

「シスター・アーシア、一つ謝る。確かに貴女は神に仕える者だ」

「どうして？」

「嘘をつけないってこと。居るんだろ？俺ら3人を前にして余裕で居られる程の仲間

が」

アーシアから陽気な表情が消えた。彼女は数歩分飛び退くと、どこからともなく黒鍵を取り出した。構えた。右手に4振り、左手に3振り。アスファルトに落ちる影は十字を結んでいた。

「聖堂教会 第八秘蹟会所属 アーシア。我が使命は、神の御姿を見ず、神の御言葉を聞

かず、神の御心に背き、罪を重ねる一切の愚か者どもに、神の威を知らしめること」

「そうか。それが君の本当の姿か。代行者でもあるんだな」

「滅ぼす」

「シンヤ、下がりなさい」

ルヴィアが歩み出た。何時もの様にロイヤルブルーのドレスだというのに、その歩調はローマの重装歩兵を彷彿とさせた。

「そのシスターは私の相手です」

（マスター！）

キヤスターの警告と何かが光ったのは同時だった。その脅威はそれ程の速さであった。真也はルヴィアを抱きかかえると跳躍した。ルヴィアが立っていたその場所に雷が落ちたのである。事実そのアスファルトには4本の黒鍵が突き立てられていた。真也は抱えたルヴィアを降ろすと、義姉とルヴィアと、2人を同時に守る様に立ちあがった。彼の口調は皮肉そのものだ。

「久しぶりだ。また会いたくはなかったよ、シスター・シエル」

その埋葬機関の代行者は月を背後に立っていた。

つづくー!



## 七話

月光を背に道路に落ちるシエルの影は長かった。その様な些細な現象が非常に気に掛かる。それほどまでにシエルの放つ殺意が強かったのである。ルヴィアと凜はシエルを警戒したい本能を抑え、アーシアに向いていた。真也は2歩進み、そして止まった。「宣戦布告無し」の攻撃とは、シスターにしては気が荒い」

「貴方の実力を踏まえた上での警告です」

アスファルトに突き立てられた黒鍵が倒れた。威力の余りアスファルトが砕けたのだった。シエルは真也を目で捕らえつつ、こう告げた。

「シスター・アーシア。私を待て、そう言った筈です」

「異教徒を目の前にして待つ事など出来る訳が無い」

「後で話があります。遠坂真也さん。槍を渡して下さい」

「しやらん」と堅く乾いた音がした。真也は霊刀を展開、抜刀、構えていた。

「持っていない」

「それが返答ですか」

「そうだ」

「あの時は退きましたが、今度は見逃せません」

「姉さん」

「こっちのシスターは任せられた。そっちのシスターは任せられた」

（ねえさん、とは。私など心にないと言わんばかりですわね）

ルヴィアは人知れず落胆をした。一瞬きの間にシエルと真也の姿は消えていた。二人がどの方角に消えたかなど分かりはしないというのに、凜は月を見つめていた。その眩きは呆れとやるせなさだ。

「あれがシスター・シエルか。真也みたいなのが二人も居るなんて世の中広いわ」

「全くですわね。さてシスター・アーシア。今この状況は聖杯戦争から逸脱していると判断します。槍の争奪は無関係である以上、互いに退くことを提案いたします」

「神に背く者を目の前にして退く理由などない」

右手に4振り、左手に3振り。黒鍵を構えるアーシアの殺意が膨れあがった、その瞬間だ。彼女を無数のガンド、フィンの一撃が襲った。射撃時間はどれ程の時間だったのだろう。一分だったかも知れない。それとも10分ほど有ったかも知れない。或いは、ものの数秒か。射撃が収まった時、アーシアの足下にあるアスファルトは至る所に穴が開いていた。数メートル後ろにある石の扉も、見るに耐えない有様である。ルヴィアは右腕を、凜は左腕をアーシアに向けていた。

二人はその腕に最大級の威力を籠めていた。片方が威を落とし連射・牽制とする、そしてもう片方が本命の重い一撃を撃ち込む、そのような連携事は一切考えず、力の赴くまま撃ち込んだ。二門のガンドが生み出す総合火力は25ミリチーリングンガンなみだ。A君がこの場にいればM242ブツシユマスターと叫んだかもしれない。つまりルヴィアと凜は臨戦状態（アサルト・モード）だ。凜の態度は猛々しい。高慢かつ尊大だ。「聖杯戦争と無関係なら、私も相手にする事になるけれど？」

ルヴィアも似た様な物である。

「シスター・アーシア。今の貴女の使命はなにかしら。私たちを倒す事か、それとも槍を回収する事かどちら？」

アーシアは不承不承の体である。

「分かりました。その口車に乗ってあげます」

「今ひとつ。シンヤからは手を引きなさい。聖堂教会に引き渡す位ならエーデルフェルトが優先権を持ちます」

「……あれは作戦だよ。本気にしちゃって馬鹿みたい」

そう言うときアーシアは教会の中へ消えていった。二人が腕を下ろす様はリボルバーをホルスターに納めるガンマンそのものだ。凜は腕を腰に添えて胸を張る。その表情には不平不満が現れていた。

「逃がす理由は無かったんじゃない？」

「シスター・シエルは槍を探していた。それにも関わらずこの町にいる。つまり聖堂教会は聖杯戦争以外にも目的があるようです。今は事を荒立てる時ではありませんわ」

「レディ・エーデルフェルト。真也と何やった訳？」

「リバプールの一件です。気になるかしら？」

「別に。真也から直接聞くから良いわよ」

「今は喧嘩中なのでしょうに」

「嫌な性格してるわね、アンタ。逃げ道が無い事を知って、聞くなんてさ」

「家族を捨てられないと拒絶されたのだから、これ位の報復は可愛いものですわよ」

ルヴィアは手短かに、掻い摘まんで凜に話した。

「と、言う訳です」

「聖堂教会と悪魔崇拝者が繋がるとは思えないけれど、どこで槍の事を知ったんだろ」

「それは同意ですわね」

「真也を待つしか無いか」

「ミス・トオサカ。シンヤを追いかけますわよ」

「どうやって？」

ルヴィアはキャスターの存在を知らないのだ。

「シンヤに通信用の鉱石を渡してありますからトレースできます」

「そう、仲良いのね」

「それなり、にですけれど」

「ねえ。真也が遠坂という枷から外れて、アンタと共にありたいって言ったらどうする？」

「それは、どのような意図を持った発言かしら」

「別に言ってみただけよ」

「ミス・トオサカ。良い機会ですから伝えておきます。貴女を前にしたシンヤは私を氣遣いもしない。これの意味に気がついていきますの？」

「分かっているわよ」

「ならば今後それに類する発言は今後慎みなさい。不愉快です」

（そう。まんざらでもない、って事か）



シエルの目的は槍の回収である。無益な殺生は望むところではないが、真也を殺してしまっても問題は無い。その時はルヴィアを問い直すだけだ。そのシエルと真也の二

人は、夜の住宅街を、一定の距離を保ったまま平行に駆けていた。目の前に民家があれ  
ば跳躍した。屋根を踏み抜き、次の屋根に渡った。申し訳ないとは思いつつ、自動車の  
ボンネットに着地し凹みを付けもした。シエルが見る真也は身を宙に躍らせ、民家と民  
家の間に消えた。誰かの庭に降り立ったのだろう。事実、直後に再び姿を現した。シエ  
ルの速力は全力ではないがそれでも一般人を遥かに凌駕する。強化した魔術師でも辛  
いだらう。ところが真也にも辛さは見えない。

さてどうする。シエルにとつて真也は初めての相手である。日本刀を持っている事  
から剣を使う事は分かるが、果たしてそれだけか。何よりあの黒縁めがねが妙に気にか  
かる。万が一「彼」のアレと同じだとしたら接近戦は危険だ。厄介きわまりない。言  
い換えれば、近づけさせなければ問題ない。

真也がコンクリートで作られた住宅、その屋上に着地した時、その足下に黒鍵が突き  
立てられた。ゆっくりと顔を上げれば、屋上の中心を挟んだその対面にシエルが立つて  
いた。彼女の背後に広がるのは夜の町である。灯火は点々としており、幻想的な地下都  
市を彷彿とさせた。

「遠坂真也さん。もう一度聞きます。槍を渡してくれませんか？」

「持っていない、さつきそう言ったぞ」

「いいえ。貴方は持っている筈です。普通は「槍とは何のことだ」そう聞きますから。

リバプールで会った時、私は槍だと一言も言いませんでした。私たちが槍を探している事を何故知っているんですか？」

それは敵対関係が避けられぬ物だと確定した瞬間だった。

「シスターが槍を探しているなんて初めて知った。俺らも持つていない。だけれど、」

「それ以上の発言は慎んでください。一度失った信頼を取り戻すのは困難です。貴方は嘘を付いたのですから」

「そりゃ、ごもつとも」

夜の町を駆ける真也とシエルは同期していた。シエルが着地していれば、真也も着地していた。シエルが跳躍していれば、真也も跳躍だ。真也の足が地に付いている状態で投擲したところでその効果は限定的だ。地を蹴り躲すか、弾くのみである。であるからして彼女は、空中で右手にある黒鍵4振りを撃ち放った。地に足をつけないと投擲の精度が落ちる、空中で投擲はできない、真也はそう踏んだのだろう。驚いた顔こそ見せなかったが焦りは窺えた。生憎とその程度では埋葬機関は務まらないのだ。

シエルが放った4振りは真也の頭と胸と腹と脚を狙っていた。最初の黒鍵は刀で弾いたが大きく体勢を崩した。彼女の筋力はA。その投擲は重かったのである。真也は即座に回避方法を変更した。彼は飛来する2刀目を柄で受け止め、その重さを利用し、跳躍の軌道を大きく変えた。もちろん回避の為だ。その結果3刀目は躲した。4刀目

は躲せない、だから脚の裏で刀身を蹴飛ばした。反動で彼はそのまま頭から落下した。暗い住宅街に真つ逆さまだ。ガサリと樹木の葉を散らす音がした。バキリと樹木の枝が折れる音がした。仕留めてはいない、その確信があつたシエルは、三階建ての民家の屋根に立ち、落下地点を見下ろした。左手の3振り、そして追加装填した右手の4振りを構え、そこに撃ち込んだ、その直前だ。

「Restraint legem limited release! (拘束術式限定解除)」

目下の暗闇から現れたその人物は、シエルに刀を打ち下ろしていた。それは彼女の予想を大きく上回る速度であつた。地上から3階建ての屋上に一瞬で跳躍、到達したのである。できる事ならば手の内は明かしたくない、化け物ならともかくシエルは生きている人間だ。可能なら殺したくはない。だがその願いは甘い事だと、彼は悟つたのである。当然だ。真也が倒されればシエルはルヴィアを狙うに決まっている。我が身可愛さに、ルヴィアを見捨てる義姉ではない。あの二人の力を持つてしてもシエルには勝てない。槍を持つていないと否定してもシエルは聞き入れない。彼女が退かないのであれば、倒すより他はない。だが真也の表情は苦渋に満ちていた。

真也の打つた一撃はシエルが追撃の為に構えた7振りの黒鍵を砕いた。黒鍵はそもそも斬る為の武装ではない以上それは当然だ。だが役目は果たした。真也の霊刀がシ



エルの黒鍵を砕く反動を利用し、彼女は彼の間合いの外に出たのである。跳躍中にシエルは次弾装填、一振りだけ打ち込んだ。流石に7本揃える余裕はないがそれで十分だ。打ち振るつた直後の真也に追撃の余裕はない。体を振るより刀を振るつた方が早い。シエルの一振りを弾いた時、彼女は7本の黒鍵を構えていた。その距離は真也の間合いの外である。忌々しいは過剰だが、シエルの丁寧な戦い方に真也は嫌気を隠さない。

シエルもまた険しい表情を見せていた。彼女の警戒レベルは完全な戦争準備態勢（デフコンー）だ。その瞳に映る男はどこの誰かは知らない。だが手を抜いて勝てる相手ではない、そう判断したのである。強い風が吹いた。シエルの修道服が風になびき、真也は首を小さくかしげた。騒ぎを聞きつけた住人が、バットとパイプとナイフと、思い思いに武装し屋外に現れた。二人の姿は消えていた。

真也が踏み込めば、そうはさせじとシエルは黒鍵を撃ち出した。シエルより真也の方が速いが剣の間合いは短い。真也は近づけなかった。古き石造りの家を飛び越え、近代的なマンションの屋上を走り抜け、車道を降りては、また跳躍。二人はそれを繰り返していた。互いに決め手を欠いていた。真也はシエルの弾切れを狙っていた。だがそれはシエルも承知である。彼女として仕留めたいが真也はすばしっこすぎた。広い町中というフィールドは分が悪い。紺藍のシエルの髪がなびき、その前髪の隙間から覗く青い瞳はハイウエイを捕らえた。

彼女の背後に真也の気配が迫る。シエルはアパルトマンの屋上を蹴りつけ、大きく跳躍し、空中前転。頭を地に向けて、足先は天に向け、右の4振り、左の3振りを真也に打ち込み牽制とした。ウルトラC級の荒技だ。彼女はそのまま前転しきると小規模の公園に着地し、再度跳躍した。彼女の跳躍は樹木を掠め、枝と葉を鋭く揺らした。彼女が降り立った先は、その町を走るオートルート（高速道路）である。真也が遮音外壁を乗り越え、その上に立った時、シエルはトレイラーの上に着地したところだった。

そのトレイラーは貨物輸送用の大型コンテナを運ぶ車両だった。セミトレイラーである。運転席とエンジンがある自動車がトラクター、その荷台がトレイラーである。定員数が乗車し、最大の荷物を積みめば、トラクターが25トン、トレイラーは28トンに達する大型の牽引車両だ。

真也は即座に跳躍しSUVの上に降り立った。トレイラーよりは速いだろうという判断である。屋根から聞こえた異音にドライバーは右往左往していた。それを知ってか知らずか、真也が見上げればシエルはコンテナの上に立ち、静かに見下ろしていた。彼がちらりと周囲を一瞥すると走行車両はそれなりにあった。後続車両の搭乗者がシエルと真也に気づき目を白黒させていた。じつとして、写真に納められても面倒だ。真也はSUVの天井を蹴飛ばすと跳躍した。凹みに申し訳なさを感じつつも、シエルの乗るトレイラーに取り付いた。コンテナの屋根に降り立った真也はゆっくりと立ち上

がった。自家用車5台分は離れたその前方にはシエルが立っていた。彼女の両手に黒鍵が光っていた。強い女性は好みだが、こும்並外れていると流石に手に負えない。彼は苦笑しつつこう言つた。

「跳躍中に迎撃すると思つた」

「トレーラーから落ちた場合は、後続車両を足場にするつもりだつた、違いますか?」

「ゴ名答」

真也は切つ先を下に後方に脇構え。シエルは黒鍵を構えた。

「それよりも私の誘いに応じた事が意外です」

「そう?」

「ここは広くありません」

「そだな、足場が狭い分避け難い」

「そうですか。何かを狙っているんですね」

「簡単。確かに躲す程の足場はないけれど、飛び跳ねる必要はないんだ。これだけ大きな車両なら、多少踏ん張つても不安定にはならない。何より逃げ場がないのは、シスター・シエル、貴女も同じだ」

シエルはトレーラーの前部、真也は後部に立っていた。トレーラーが橋げたを潜る、それを合図に真也は踏み込んだ。さて、二人はどう攻める。真也が回避の為に跳躍すれ

ば格好の的だ。コンテナから落ちた場合、足場となる都合よく後続車両・併走車両も期待できない。真也は真つ直ぐシエルに向かうしかない。事実真也はその方法をとった。シエルの敏捷はB、真也はA。彼を補足する事は難しいがそれは条件次第である。二人が立つコンテナを真上から見れば長方形の足場だ。ならば面で攻撃すれば良い。

シエルはまず右の4振りを地面に対し平行に、扇状に放った。距離が離れていた事もあり、真也は体捌きを以てその隙間をかくぐつた。シエルはその4振りの隙間を埋める様に、左手の3振りを撃ち放った。つまりは間撃である。真也は躲しきれず弾いた。だがここは踏ん張りがきく。真也の踏み込み、突進力も有効打となる。シエルの黒鍵の刀圧で、威は削がれるが前には進む。シエルの切り返し速度より、真也の斬撃速度が上回る距離となった時勝負が決まる。投擲しては躲し、投擲しては弾き、そして距離を詰める。その応酬を繰り返した。

目の前のシスターはずいぶんと消極的だ、真也はそう思ったが、そのまま追い詰める事にした。なにか切り札を持っていようと、この状況において、真也には他の手段が無いのである。彼は踏み込み、斬撃を打ち込むのみだ。シエルが放ち、真也は躲し、シエルが放ち、真也は弾いた。放ち、弾き、放ち、弾き。シエルの敗北を意味する間合いの1歩外、弾いた黒鍵には魔術が付与されていた。

「聖職者が魔術?!」

「驚きましたか？」

どのような魔術か知らないが、シエルは目と鼻の先だ。発動しきる前に仕留める。ダメージを覚悟で真也は踏み込んだ。時間が惜しいと真也は突の構えで突進だ。続けてシエルが撃つたのはゼロ距離投擲。その黒鍵は真也の左二の腕を貫いた。それにも魔術が付与されていた。ここにシエルが付与し、撃ち込んだ黒鍵は2振りある。それぞれには別の種類の魔術が掛かっていた。

真也の突はシエルの左肩を切り裂いた。つまり真也の一撃は外れた。なぜなら、彼の前にカラスが居たからである。シエルの一つ目の付与はカラスを呼ぶ。鳥葬式典。だった。その鋭いくちばしは彼の左頬を切り裂いた。それは隙に他ならない

「っー」

至近距離での死線が交差する。シエルは足下のコンテナを踏み抜いた。真也は185センチ、シエルは165センチ、懐に潜り込むには好都合だ。シエルの掌底が真也の鳩尾を貫けば、彼の横隔膜が一瞬止まり、呼吸が強制停止させられた。続くはシエルのコンボである。流れる様な動作で、刀を掴む真也の右手首を掴み、更に踏み込み、体を捻り半回転、そして密着。一本背負いの要領でコンテナの天井に真也を叩き付けた。その威力は如何ほどのものか、鋼板の天井を突き破り、彼はコンテナの中へ落下した。その衝撃で霊刀は真也の手を離れ、車道に落ちてしまった。

シエルが追撃の為、開いた穴に飛び込むと真也は仰向けでひっくり返っていた。彼女に打たれた鳩尾へのダメージが残り、喘いでもいた。シエルはそのまま追い打ちを掛けようと、体重を乗せて蹴りを打ち込んだ。真也は転がり躲した。彼は背中を駒の軸とし、全身を回転。脚を猛烈な速度で振り回した。逆さ竜巻旋風脚である。荷物である家電製品の箱を蹴り飛ばした。その様は竜巻に翻弄される諸々の様だ。シエルは箱を叩き続けた。最後の箱を受け止め、放り投げた時、竜巻が収まっていた。狭いコンテナの両側面に積み上げられた家電製品の箱、それが作るその細い通路の先に真也は立っていた。

彼は左二の腕に突き刺さった黒鍵を引き抜くと放り投げた。ダメージは鳩尾を打たれた分と、左二の腕の穴、そして霊刀だ。彼の言葉は悪態の権化であった。

「ああもう、わかった。聖職者は格闘技が必須科目なんだな」

真也が吐き捨てた唾には血が混じっていた。

「そんな訳ありません。大多数の聖職者はこの様な荒事とは無縁ですから。遠坂真也さんが知っている聖職者が誰かは知りませんが、偶々そういう人だっただけです」

シエルは思い至った様に、合点いった様に、鋭く真也を見定めた。

「……そうですか」

「勝手に納得するな」

「我々の敵なんですね」

「その敵というのは槍限定だよな？」

「いえ、聖堂教の敵、という意味です」

「確かに刃を交えた事はある、聖堂教も信じてはいない、けれどそれだけで敵扱いは単純すぎないか？ 単純に、仕事上のライバルと言ってもらえると助かるんだけど」

「その左腕の傷はもう治っていますから」

「治癒は大半の魔術師ならできる」

「その傷を作った2刀目の黒鍵には、土葬式典、つまり石化の意味を乗せていました。一流魔術師はおろか、並の死徒ですら免れない神の罰ですよ？ でも貴方は生きています」

「何者ですか？」

「秘密」

「いずれにせよ、神の摂理から反する存在は見逃せません」

「それで化け物扱いするならいいさ、慣れてるし。けれど、その化け物と逼迫してるシエルさんは一体何だ。その摂理に反していいいとも言うのか」

「秘密です」

「どうせ、教義にある矛盾に目をつぶってるだけだろ。ほら、神様が完全なら化け物なんて居るはずがない。それでも存在するなら、化け物は神に認められた存在だ。でも化け

物は信者を苦しめる。親を、子を、姉弟を、恋人を、妻を殺す。神が信者を苦しめる、それは人々に罪があるからだ……この殺し文句は聞かないわな。幾ら何でも愛する家族の死が当然だと、それを認める神を信じるわけにはいかない。つまり、神は完全などではない。或いは信者の絶対の味方などではない。太古から存在する、善性と悪性をもつ地方神と同じだ」

「聞き咎めました」

それは真也の挑発であつた。可能なら魔眼の使用は避けたいのである。真也は積まれた家電の箱を蹴飛ばしてシエルが放つた4振りの黒鍵を逸らした。テレビやら、ビデオレコーダの成れの果てが碎けて舞つていた。シエルは左手の3振りを携え真也に肉薄する。

（右手に黒鍵の補充をしない、そろそろか）

シエルの狙いは障害物のない至近距離から黒鍵を放ち、真也をコンテナに縫い付けろ。霊刀を失つた真也の驚異は格段に落ちてゐる以上そう難しくはない。だがどうした事か、真也は跳躍するとコンテナの内壁を蹴り飛ばした。コンテナの質量に対する真也のそれは格段に小さい。だが筋力Bが生み出す運動力は膨大だ。跳躍し、小舟の縁を蹴ればどうなるか、その想像はたやすいだろう。トレーラーはバランスを崩し大きく揺れた。高速機動中であつたシエルもまた大きくバランスを崩した。それは隙である。



真也は彼女の頭部に回し蹴りを撃ち込んだ。シエルはコンテナの内隔壁に叩き付けられた。頭部への衝撃でその左手に持っていた黒鍵を落とした。手応えはあった。仕留めたか、真也が脚を緩めると、コンテナの隔壁をなす鋼板はその衝撃で凹んでいた。その凹みから覗く、シエルの片方の瞳は真也を捕らえ鋭利に光っていた。ドクンと真也の鼓動が一つ大きく打鳴った。つまり、肉弾戦の開始という事だ。ゴングが鳴った。



フランスの高速道路を疾走するのは、地方自治体に所属する地方警察である。// 高速道路を走行する車両の上に人が居る” その通報に応じ駆けつけたのであった。しばらく走ると妙なトレーラを補足した。そのパトカーには二人の警官が乗っていたが、何が妙なのか具体的に分からない。ただ、漠然とした不安を感じ取っていた。一拍。ハンドルを握る警官が口を開いた。不安を払うかの様である。

「おい、アレじゃないか?」

助手席の警官が備え付けの端末を叩いた。

「ナンバーは合ってる」

「とにかく、停止させよう」

その時だ。トレーラーが運ぶコンテナの左側面が何の脈絡もなく膨れあがった。まるで内側からどでかいハンマーで殴られたかの様だ。経験に無い、常識の外の現象に警官たちが目を丸くする。その衝撃でトレーラーは蛇行を始めたが、その意味に気がつかなかった。続けて反対側の右側面が膨れあがった。その二つの衝撃はトレーラーの安定しようとする能力を超えた。姿勢が大きく乱れ、くの字に曲がった。ジャックナイフ現象だ。

本能的にパトカーは回避行動に入る。急減速、二人の警官がフロントウインドウ越しに見えるトレーラーは片輪が浮き上がり傾いていた。横転する直前、コンテナの後部ハッチが爆発した様に吹き飛んだ。目の前にバキキュラ（空中を飛ぶ板状の障害物）が迫る。緊急回避。パトカーのサスペンションが悲鳴を上げる。タイヤがグリツプ力を失い、スリツプする。バキキュラがパトカーを掠め天井にあるパトライトを破壊した。まさに生死を分けた一瞬である。

神業的なハンドル捌きと幸運で、バキキュラと横転したトレーラーをやり過ぎた警官二人は一拍の後無線で応援を呼んだ。逆走するわけにもいかず、路肩にパトカーを止める事にした。助手席の相棒が伝える通信は、訓練通り正確であったが、その声調は激しかった。九死に一生を得たのだ、無理もない。

「こちら765号、重大事故発生！ 至急応援求む！ 場所はオートルート71号線

……」

運転席の警官はハンドルを何度も握り直し、己の精神を落ち着けると、あの一瞬を頭の中で何度も再生した。

（人が飛び出した様に見えたが、気のせいかな？）

もちろん、気のせいなどではなかった。



時を遡る事一刻。シエルに襟首を掴まれ、コンテナ内で投げ飛ばされた真也は後部内壁に叩き付けられた。ハッチをぶち抜き、空中に投げ出された。真也は手足を振り、姿勢制御。アスファルト道路が頭上に見える。右手を差し伸ばし、時速110kmの速度で流れるアスファルトの道路を弾き支えとした。エアホッケーでもするかの様である。空中で一回転。脚での着地に成功したが、勢いを殺しきれず、バランスを崩しそのまま転倒し、転がり続けた。長い階段を転がり続ける段ボール箱の様だ。

シエルはコンテナより跳躍。宙を舞うバキュラに両足の裏をつけると、道路に着地し滑っていった。サーファーそのものである。ただし、弾くのは水飛沫ではなく、アスファルトと鋼板との摩擦によって生じる火花であった。

真也が転がり、弾け、ようやく落ち着けば、高速道路のど真ん中だ。高速道路はすでに高速の意味を持たず、自動車は、あちらこちら、てんでばらばらに停車していた。照明灯を持たない高速道路で、明かりは自動車のヘッドライトのみだ。指向性を持ったその光は満遍なく照らす事はなく偏っていた。子供の部屋でももう少し片付いているだろう。中年男性がセダンから飛び出すと駆けだした。怪我人を見つけたのだ、放置はできない。その怪我人は赤いコートを纏い、手足をだらりと伸ばし、うつ伏せに倒れた。た。

「こりゃいかん」

慌てて駆け寄ればその怪我人はむくりと起き上がった。

「……思い出した。この展開はファンムービーのターミネーターVSロボコップだ」

意味不明な事を口走っていた。事故による衝撃で冷静さを失っている、もしくは頭を打ったのかも知れない。その中年男性は怪我人の顔をのぞき込んだ。その人物はハーブだ。北欧系に何かが混じっている。

「おい。大丈夫かね」

「ええ、何とか」

その怪我人はそうは言うものの、酷い身なりであった。真紅の外套は穴が開き、裂けていた。口には血を吐いた後があった、左腕には出血の痕も見られる。体を痛めたの

か、立ち上がるその姿勢は歪だ。つまり、よろめいていた。

「事故で自動車から飛び出したんだな。痛みは麻痺しているだけで骨折しているかもしれない。救急車が来るまでじっとしていなさい」

「お気遣いには感謝の言葉ありません。ところでこの辺りに大規模に工事している場所はありませんか？」

「この先のロアール側の橋で大規模改修をしているが、それがどうかしたかね？」

応援のパトカーと救急車のサイレンが彼方より聞こえ始めた。サイレンに気をとられたていた中年男性が、その怪我人を思い出せば忽然と消えていた。



その橋は海面から橋げたまでの高さが、50メートルはあろうかという巨大な吊り橋であった。その橋は車道の下に複数のフロアを持つていた。階層構造である。元來持つ鉄骨に、鋼板の床や鋼板の壁、改修従事者の事務所、詰め所。安全柵や、工事車両走行用の道路が設けられていた。最外殻には壁はなく、外を見る事ができた。言い換えれば吹き抜け構造で、川の水面を走る川風で吹き曝した。陽も落ち数時間経過すれば作業員はおらず、最低限の照明が灯るのみである。

その雰囲気为例えるならホラーゲームであろう。例えるなら、北海に浮かぶ油田プラント、深海基地、南極基地、はたまた巨大な宇宙船。主人公は何故か基地に点在する火器を駆使し、モンスターを倒しながら基地から脱出するのである。その、のつぴきならない基地風橋げたの中で、身を潜めるのは真也であった。手にあるのは鉄パイプ、心許ないが素手よりはマシだ。

それよりも問題なのは魔眼使用の判断である。使わずに済むならそれに越した事はない、というのが彼の新たなポリシーだ。特に攻撃において、殴って殺せば遺体は残るが、魔眼を使えば跡形なく消える。死徒、悪霊、ならともかく、通常人間にはその人を知る誰かが居る。忽然と消え、何の手がかりも遺品も残さず、永遠に行方不明という事実は、精神的に相応の負荷を与える。事故で死んだのか、殺されたのか、浚われたのか、誰かが悪いのか、自分が悪いのか、回答のない状態は酷であろう。

何より幾度となく魔眼を使い、それに慣れてしまうのが恐ろしかった。ただ突けば消える、血も出さず、苦しむ事もなく、死の恐怖を感じる事すらなく消える。殺しの罪悪感が薄れる事だけは避けたかった。

この状況に至る真也の言い訳という自己弁護は次の通りだ。魔眼の威力は桁外れだが、線を斬るか点を突くより他はない。剣士である真也には近づくのみだ。住宅街での戦闘はシエルの黒鍵により近づけなかった。ハイウェイを走るトレーラ、つまりコンテ

ナの上でも同じである。

そしてコンテナの中。可能なら拳骨で黙らせる、それは誤りだと悟った。シエルの身体能力は油断ならない。真也の見立てでは、敏捷は1ランク勝るものの、耐久は同程度、筋力はシエルが1ランク上だ。信じられない事だが事実であった。霊刀が手にない今、魔眼を使わずに勝てるかどうか、非常に判断が難しい。

「キャスター。シスター・シエルの位置は追えるか」

戦闘をトレースしていたキャスターは胃の痛みを感じていたが真也は知るよしもない。

『マスターより200メートルの位置です。真っ直ぐそちらに向かっています。武装は黒鍵ではなく鉄パイプです』

「離れていても敵の位置と状態が分かるってのはありがたいよな」

『何故マスターの位置が追えるのでしょうか』

「彼女もそういう人間だつて事なんだろ。血の臭い、戦場の雰囲気、殺意、そういったモノに対する嗅覚があるつて事だ。ある程度近づけば、彼女も俺の気配を悟るだろ。いや、俺がやる気である以上、ここで待ち構えていると踏んだんだろうな」

『厄介な相手です』

「確かにな。ところでルヴィアと姉さんは？」

『自動車を調達しそちらに向かっています。トレーラーの横転により、高速道路が通行止め。下道が渋滞しております。霊刀の回収には成功しましたが、そちらへの到着時間は1時間は掛かると推測します』

「自動車の調達ってタクシーか？」

『いえ、奪いました。悩ましいポーズで自動車を止め、暗示で強奪です』

「あ、そう」

『因みにルヴィア様が運転しておられます。どちらがハンドルを握るかで揉め、時間を浪費しました。全く、近頃の魔女ときたら。まだあのラ・ヴォワザンの方が……』

「キャスター」

真也の指摘にキャスターは一つ咳払い。

『これより如何なされますか』

「当然迎え撃つ。魔眼を使うからしばらく通信できなくなる。それを前提に動いてくれ」

『凜様らを待つべきでは？』

「シスター・シエルは気配遮断の術を持っているけれど、使わないって事はその術と攻撃は併用できないって事だ。つまりある程度近づけば俺だけでも敵の位置は探れる。援軍はシスターも想定済みに違いない。このまま逃げたら、またどんなタイミングで強襲



されるか分かった物じゃない。ここでケリをつける。質問はあるか？」

『マスター。その魔眼は強力ですが、性質を考慮すれば対応手段を講じる事が可能です。奇襲をもって一撃で仕留めてください』

「分かつてる」

『……………武運を』

真也が眼鏡を取ると、左手甲に刻んだ術式が沈黙した。魔眼の神秘が重すぎ、他の術式を喰らってしまうのだった。世界に黒い点と線が現れた。人間の全身に走る血管を透かして見えている様でとても不快だ。その線が赤ではなく黒いところがまた気分を陰鬱なモノとする。真紅の外套の袖にはナイフが仕込ませてある。魔眼の存在を知らず、格闘術に秀でる彼女であれば、真也の接近を歓迎するだろう。鉄パイプを打ち込み、シエルの鉄パイプを弾き、シエルの死の点を突く。それが段取りだ。

“俺は彼女の死の点を突く”

それを何度も繰り返した。3年前の彼ならあり得ない躊躇いだ。彼の心中知ってか知らずか、シエルがその場に達した時、彼女もまた真也の気配を察知した。少し歩けばおおよその場所も探り当てた。彼女はぴたりと足を止めた。シエルは通路の真ん中だ。真也は十字路のコーナーに隠れていた。しばしの沈黙が流れる。根を上げたのは真也であった。その声は苦笑じみていた。

「互いに互いの場所が分かるってのは面倒だな」

「諜報、潜伏、向いていませんね、お互いに」

「そだな。ならこれから仕掛ける。三つ数えたらでよろしく」

「姿を見せたらどうですか？」

「手品のタネは隠すものだ。とっておきを見せるよ。シスター・シエルの驚いた顔つても興味がある」

「楽しみにしています。私もその考えに賛同ですから」

「1」

「2」

「3」

真也が飛び出し、シエルの鉄パイプを弾こうとすれば、目の前に消火器があった。彼女はしてやったりの顔で、消化剤を真也の顔に向けて吹き付けた。彼女が手にする物は鉄パイプではなく消化器であった。キャスターはその事実を伝えたかったが、通信ができなくては伝えようもない。シエルが思い至ったタイミングと、魔眼殺しを外したタイミングが明暗を分けた。



橋げたは吹き抜け構造だ。加えて川を走る風もあり、消化剤はすぐに吹き飛ばされたが、真也の目に入った分はそうはいかない。目を潰された真也にシエルの気配が迫る。彼は彼女の右拳を、左腕で捌いた。次にシエルは真也の右拳を、左腕で捌いた。シエルは身をかがめ、踏み込み、迎撃の真也の左腕を躲すと右肘を打ち込んだ。真也は打撃を諦め、左肘を以て、シエルの右肘を受け止めた。

そのシエルの右肘は、肩、胴体、脚、床へと力学的に支えられていた。彼女の筋力Aが加わり真也は弾き飛ばされた。彼は宙を舞い、シエルは追撃を掛けた。真也は空中で姿勢制御。背後にあった鋼板の壁に着地すると、そのままシエルに向かって跳躍した。身を捻り、回転、追撃途中のシエルに蹴りを打ち込んだ。体重と脚力、そして回転力を乗せたローリング・スバット、カウンターである。

シエルは直撃を喰らい吹き飛ばされた。真也は着地、ふらりと立ち上がる。ハイウエイで受けたダメージが残っていた。地に伏せていたシエルは、むくりと起き上がり、口から垂れた血を腕でぬぐった。

「随分アクロバットに戦うんですね」

「筋力で負けてるから、体重を使うしか無い」

真也の目は閉ざされたままだ。

「一つ聞きたい。何故魔眼の事を知っていた」

この地で知るものは、ルヴィア、凜、キャスター、エルメロイの4名のみだ。

「その眼鏡が魔眼封じだと言う事は分かっていましたから。格闘戦に於いては私に分があります。互いに決め手を欠き、狭いコンテナ内でダメージを受け、追い詰められた遠坂真也さんは奥の手を使う事にした。どうですか？」

ぴつと人差し指をさすシエルの態度は先生である。真也は瞼を閉じたまま頭を掻いた。

「こりゃ参った。経験はシスターが上だ」

呆れもあつたが、尊敬の念も沸いた。勝負は別にして、目の前のシスターが一枚上手だと彼は認めざるを得なかった。

「これでも一児の母ですのぞ」

そのシエルの発言に彼は肩を落とした。

「どうかしましたか」

「いえ、最近そういう話が身近にあつて」

「そういう話とはどういう話ですか？」

「友人が結婚して一児を儲けまして」

「他人の幸せが悔しいだなんて感心しません。祝福するべき事ですよ」

「分かってます。ただその父親が同級生で、長年敵視してきた人物なので、何とかその、素直に祝福できないというか」

今度はシエルが失笑した。その様を例えれば、目下の恥ずかしい過去を知った、年上の女性である。

「これは困りました。遠坂真也さんは真也くん、だったと言う事ですか。年配だと分かったとたん口調も正す。礼儀正しい迷える子羊に、手を掛けるのは少々気が引けます」

だがそれは真也も同じである。彼は目を瞑りすまし顔だったが、内心悪態を突きまくっていた。

（くそ、なんてこった。聞くんじゃないかった。子供が居るなんて、そんなのインチキダ……どうすればいい）

ランサーならどうするか、彼はその問いを無意識に封じた。決まっている。あの槍兵なら敬意を以て、シスターであり、代行者であり、誰かの妻であり、誰かの母である目の前の女性を殺すだろう。真也はそれを無意識に拒絶していた。



真也に対峙するシエルは神妙な態度であったがそれは演技である。真也は靈刀を失った。それなりに場数は踏んでいるものの、体術は自己流だ。魔眼も封じた。圧倒的にシエルが有利だ。加えてシエルには黒鍵が一振り残っている。へそくり、という意味だ。

「ふー」

真也のあからさまな一息。胸につかえでもあるのか、シエルはそう思ったが敵ならば仕方が無い。それを合図に二人は踏み込んだ。真也はシエルの右拳を左の肘で捌いた。踏み込んだ直後のシエルの右拳の威は欠いていた。であるからして筋力に劣る真也でも対応する事ができた。

次の左拳がシエルの本命である。その左拳はシエルの下半身に支えられていた。彼はそのシエルの左拳の威を割くため、シエルの脚を狙い、踏み込みつつ蹴った。シエルが慌てて脚を退けば、彼女の左拳は威を失った。シエルは小さく真上に飛び、真也の脚を狙った。彼女のそのローキックは真也のあげた片足で受け止められた。

空中では踏ん張りが効かない。１ランク上の筋力を以て蹴りを打ち込んでも、彼女は後退するのみだ。真也の狙いはただ一つ。いかに筋力があるうと、空を飛ばない以上、踏ん張らねばその拳は威を持たない。それを読み、それを崩し、シエルの打撃を大幅に殺していた。繰り返す技の応酬の中において、見事なモノだとシエルは素直に賞賛し

た。だが一つ、気に掛かる。真也から感じていた威圧が目に見えて弱くなった。あからさまに真也の攻撃が減っている。シエルはバックステップ、乱れた髪を整えた。

「目も見えずによく捌けるものです」

「小さい頃は目を封じられていまして、そのお陰で気配を読むのはお手の物です。相手の手の位置、脚の位置、呼吸、筋肉の収縮、骨のきしみ、エトセトラ」

「魔眼は小さい頃から？」

「ええ」

「なるほど、それで私の下半身を無力化している訳ですか」

二人の姿が消えると攻防が続いた。シエルは同じように右拳を打ち込み、真也は左腕で内側から弾く様に、捌いた。シエルの左腕が迫る。真也の捌こうとした右腕は宙を切った。

「でも、詰めが甘いですね」

真也に捌かれたシエルの右手は真也の左手を掴んでいた。捌かせた一手目の右拳が本命であり、左手はフェイントであった。シエルの脚の位置、つまり下半身を崩す積もりであった真也にはシエルの変則に対応できなかつた。

「っ！」

彼女は真也の左腕に体重を乗せ、彼の姿勢を崩した。しゃがみながら、関節と逆方向

に、回せば投げ技である。真也の左肘関節が悲鳴を上げる。堪えきれず、真也はその身を宙に投げた。シエルの目の前には無防備な真也が舞っていた。彼女は左足で足下の鋼板を蹴りつけ、右脚で真也の腹を打ち抜いた。トラス・キックである。宙を舞っていた真也には為す術がない。筋力Aの蹴りを喰らい、彼は鋼板の壁を突き破った。一層下に落ちていった。その衝撃と音は正面衝突した自家用車の如く。

1フロア下で大の字に寝っ転がるのは真也である。息が荒い、体も痛い、めんどくさい、体を動かしたくない。腹の底から逆流物の反応があつた。彼は体に鞭打ち慌ててうつぶせになった。血を吐いた。落下のダメージは無視しても良いが、鋼板を破る程に蹴られ、叩き付けられたのは効いた。腹の臓器に蹴りのダメージがあつた。よろりと立ち上がれば、左腕の関節が逝っている。投げられた時の影響だ。

「痛う……」

痛みが遅れてやってくる、堪らず蹲った。彼は嗤うしかない。

「……毎度毎度、何やってるんだか、俺は」

誰かの為に体を張り、幾度もなく痛い目に遭った。//死なずに済んだ//だがそれはまた死ぬ様な目に遭う事と同義だ、そう己を嗤った事もある。こんな目に遭わされたあのシスターの身を案じている。常軌を逸している。おかしい。矛盾している。家に帰る、その筈だった。



エルメロイから槍が盗まれたと聞いた時、何故あんな英雄的な行為を選択した。あの時ルヴィアを見捨てていればこんな事にはならなかった。そうすれば義姉もこの聖杯戦争につきあうとも言い出さなかっただろう。喧嘩もせず、シエルに滅多打ちされる事も無かった。あの選択の時ランサーの影がちらついていた。ランサーならどうするかと考えた。ランサーなら、ランサーなら、とそう考えた。

「お前がここに来なくてはルヴィアは死んでいた」  
それは正しい行動だ。

(ならどうして。こんなに空しく、厳しく、寒い)

誰かに与えた分、誰かから貰わないと減ってしまう。減り続け無くなってしまうお終いだ。

「……誰かって誰だ」

彼はその考えを強制的に止めた。それは願ってはならない事だ。義理を欠いてしまう。許されていない。せめて見届けられれば、それだけで十分だと決めた。決めたのにも関わらず。

「これは、辛い」

真也は何かを削り、欠いた分を埋めた。気合いを入れ、その場を離れた。影に身を隠せば、風が吹きすさむ。橋げたは階層構造で外壁はなく、容易に町の明かりを見る事が

できた。視力も回復していた。死の点も線も見える、しかし殺せない理由も見てしまった。

「……」

「どうする、と何度も反芻を繰り返した。彼女は敵だ、敵であれば倒すしかない。だがその彼女に子供が居る。何か手はないか。その時、ポタリと水滴が真也の頬の落ちた。見上げるそれはコンクリートに使う貯水タンクだった。彼はその作戦に掛ける事にした。

真也の反撃を警戒し、シエルは階段を使って一つ下の階層に降りた。足下には鋼板が広がっていたが、その一枚下は何も無い。50メートル下に川があるのみだ。真也の気配があった。死角を殺す為の工事現場用のミラーがあり、それに真紅の外套が映っていた。彼は鋼板と鉄骨を背に待ち構えていた。黒鍵で鉄骨を貫くのは難しいが鋼板なら容易だ。脚を貫けば勝負は決するだろう。シエルは最後の一本を取りだした。投擲。彼女は真也が盾にしている鋼板毎真也の脚を貫いた。

「ぐっー！」

呻き声が聞こえる。シエルがその十字路に達し。

「本当に詰めが甘いですよ、真也くん」

チエックメイトだとその死角を覗けば、立っていたのは真紅の外套を着せた工事用の

人形だった。呻き声は演技であった。そしてそこは細い通路だった。加えて左右が鋼板で覆われていた。真也は左右の鋼板に脚を突き立て、つかえ棒の要領で天井に張り付いていた。真也の腰には鎖が巻き付けてあった。彼の手にあるのは外套に隠し持っていた小型ナイフだ。シエルには何が何だか分からない。真也の直下にある鋼板には水溜まりがあった。ドクンとシエルの心臓が一つ強く打った。真也はその蒼い目で上層と隔てる鋼板を切り裂いた。その上に存在するのは貯水タンクである。底が抜ければ当然怒濤の様に水が流れ出す。二人はその抗いようのない大砲水に襲われた。流された。



シエルが見る物は己の左手である。その左手は最下層からぶら下がる一本のパイプを掴んでいた。足下には何も無い。遙か50メートル下に川があるのみだ。彼女は心許ないパイプでぶら下がっていた。ポタリポタリと水が落ちてくる。その水がパイプを伝わり、手を滑らした。右手でパイプを掴めばその反動でパイプがさらに歪む。登る行動に耐えられまい。彼女は死に難さに自信があったが、この高さを落ちれば流石に分からない。脚から落ちれば即死は免れるかもしれないが、人間の頭は重い。頭から落ち

ればその確率は増す。運良く体から落ちた場合、水面との衝撃により手足は折れるだろう。ならば泳ぐ事もままならない。その結末は想像したくはない。グニヤリとパイプが針金の様に曲がった。手が滑り、残りは最早拳一つ分無い。

「ごめんなさい」

シエルが夫と子に謝れば、彼女の目の前に鎖が垂れた。見上げれば真紅の外套を脱ぎ、上下真つ黒の真也がシエルを見つめていた。その左腕は力なく垂れていた。動機が理解できないがその若者には殺すつもりはないらしい。彼女はその鎖を手を取った。登り切ればシエルは横座りで通路に腰掛けた。真也はそれから離れたところで大の字に寝つ転がった。

「何故助けたんですか」

「勘違いしないでください。敗者の弁なんて通用しない、ただそれだけです。確かに俺らは一度槍を回収をしました。その後極秘裏に塔に持ち帰り、そして誰かに盗まれた。俺が聞きたい事はただ一つです。何故聖堂教会がそれを知っているのか、という事」

「本当に持っていないんですか」

「持っていません。今手元にあつたらシエルさんに叩き付けてます。教授、ロード・エルメロイも俺と同じ意見です」

「なぜこの聖杯戦争に参加したんですか？」

「俺個人の立場ならクロムウエルの遺産なんてどうでもいいし、ついでに天使の知識にも興味ありません。槍が盗まれ、見つけたルヴィアと俺が疑われた。参加したのは身の潔白を晴らす為の、成り行きです。シエルさんのその言いぶりだと、槍とこの聖杯戦争が絡んでいるって聞こえます。知っている事を教えてください」

(……私たちは利用された?)

シエルは立ち上がるとそのまま歩き出した。彼女は何も言わなかったが、撤退する雰囲気を実に放っていた。当然それを悟った真也の声は非難めいていた。

「質問に答えてないです」

「真也くんの勝利ですよ。ですから答えません」

「意味が分かりません」

「遠坂真也が槍を持っている、私はもう信じて居ませんから」

「それ、アリですか」

「気に掛かる事がありますのでこれで失礼します」

数歩歩くとシエルはぴたりと足を止めた。

「我々が先の聖杯戦争に関与した、私はそれを知っています。ですが私にも知らない事がある様なのでそれを調べます。それではまた」

カツコツとシエルの足音が消えきった頃。天井を見る真也の瞳は朧気だ。その表情

には喜びも、悔しさもなくただ虚無めいていた。

「俺の勝利、か。初勝利なのに、ちつとも嬉しくない」

真也は眼鏡を掛けた。

「キヤスター」

水晶玉でトレースしていた従者の声は何時になく固い、否。深刻そうだ。

『……今ルヴィア様と凜様がその橋に到着しました。あと10分程でマスターの元にたどり着きます』

人の気配が近づけば、ほんの少し辛さが軽くなった。

「何故きようだいを選択したんだろうな、俺」

その眩きは吹き曝しに掻き消された。

つづく！

## 八話

目が覚めれば葉巻の臭いがあった。ゆっくり目を開ければ、いつものようにソファアに腰掛けていた。ベッドにはエルメロイが身を横たえていた。オルレアンに位置するホテルの一室である。義姉と喧嘩しエルメロイと同室になった、彼はそれを思い出した。のそりと立ち上がり、適当に身繕いすればそのホテルを後にした。キャスターの声はホテルのロビーを出た頃であった。

『おはようございます』

「おはよ。早いな」

『マスターの動向は常時監視しておりますので。起床と同時にアラームが鳴る術式です』

「まだ声が寝ぼけてるぞ。朝の身繕い時間なら作るけど？」

『お気遣いだけ頂きます』

「もう済ませたってか」

『いえ、寝間着のままですが』

「それはアレか。私に化粧など不要ですか、そういうの。ライダーもそうだったけれ

ど、遠坂家人間側レディーズからは不評だったな。肌も髪も体重もケアが要らないなんてインチキだった」

この話題は御法度である。遠坂家ではこの話題が出るたび、遠回しの非難が爆撃されるのだ。嫌な事を多い出させるなど、キャスターは不機嫌さを隠さない。

『マ、ス、ター』

「ん。キャスターも回転数が上がってきた」

深いため息があった。目頭を押さえている従者の姿が如実に浮かぶ。事実その通りであった。

『もう少し誠実な手段を選択して頂けると私としても心安まるのですが』

「例えばどんなのだ」

『怒らせるのでは無く、喜ばせる、など』

「何を言ってる。デートに誘うと怒るじゃないか」

『……』

「悪いな。ひねくれてて。でもアレだ。キャスターはもう少し物事に対して揺らぎを持たせた方が良いと思うぞ。まじめすぎ、って意味だ」

『性分ですのうで』

「俺としても、キャスターの負担は望むところじゃないから、お望み通り誠実にいこう



か」

『……生け贄でも捧げてくださるのかしら』

キャスターは己の主が何を言い出すのかと戦々恐々だ。

「キャスターのホテルから月は見えるか？」

『ええ。それが何か』

「キャスターならそれをどう言葉で表現する？」

『午前6時47分。西方向、地平線の際に月が浮かんでいます。月齢は20.9』

「うん。事象を的確に説明している。とても、らしい」

『説明と表現の違いをおっしゃっているのかしら』

「花朝月夕（かちようげつせき）って言葉がある。春秋のいい季節のこと、その楽しい一

時を言う」

『随分と情緒的です』

「うん。もう一度月を見てみてくれ。なんと表現する？」

キャスターは部屋の、水晶玉が置いてある簡素な机から立ち上がると、窓の際に立った。高層建築物は無く彼方まで見通せた。その地平線の如く民家の屋根が連なり、その上に月が浮かんでいた。彼女の眼は月に焦点が合っていたが、意識の焦点が合わない。細かい指が唇に触れれば、ゆっくりと摩り始める。定量的に評価するのは慣れていたが

定性的にと言われれば、ほとんど経験が無い。神秘の集合である月であれば尚更だ。彼女の紡ぐ言葉はたどたどしい。

「西の空に、地平線、青い空、欠けて、薄く……」

『わずれな草色の空。去りゆく月は、淡くたゆたう。そよぐ春風に踊るのは、山桜。朝月のイメージとしてはこんな感じか』

「山桜、ですか」

『普通桜といえば染井吉野なんだけど、昔は山桜を指したんだ。早朝の澄んだ空に山桜が掛かって、月が浮かんでいれば絶景じゃないかな』

「具体的にお願います、マスター」

『籠もつてないで外の空気を吸うと良い。フランスに来てから籠もりつきりだろ。窓越しじゃ無くて直に朝月を見れば気分も変わる』

「花朝月夕……私は魔女ですから籠もる事に負担はありません。ですが、月の見方が増えた事には感謝します」

『それは結構』

「それはともかく、無断外出は控えるべきかと考えますが」

『昨夜のシエル戦の報告はしたし、やる事は変わらない。最後までつきあう』

「それが理由ですか？」

『おかしいか？ 遠坂当主の方針だぞ』

「マスター。進言をしても？」

『予想はできるけれど、どうぞ』

真也が信号待ちをしている時である。キャスターは啞えていた一本の髪を背に流すと、ベッドに腰掛けた。ぎしりとマットレスが鳴けば、枕元に置いてあったリボンを手にとった。ゼニスブルーの髪を手でまとめ、リボンでくくれば左胸に流れた。背筋を伸ばし両手を膝の上に置いた。目を瞑り、僅かに俯く。その部屋は彼女一人のみで誰かが居る訳では無い。ただ秘める意思は彼女にとつても重要な事であり、相応の態度で望まなくてはならない。彼女の姿勢はその表れだった。

「帰国するべきです」

『それは俺に言うべき事じゃ無い。進言するなら姉さんに言え』

「凛様には申し上げました」

『で？』

「続けると」

『だろ。姉さんは何かを狙ってる、相当重要らしい』

「マスターに戦闘行動は無理です。眉一つ動かさずイリヤスフィールを斬り付けた3年前ならいざ知らず、打つべき時に打てない剣士に存在価値はありません。これを機に剣

を置くべきです」

『もう少しオブラートに包め。死徒とか化け物なら容赦はしない』

「シスター・シエルは人間ではありません」

『なら例外つて扱いつて事で』

「私は冗談を申し上げているではありません。マスター。危険すぎます」

『気遣い心配は死ぬほど嬉しいよ。泣き出しそうだ。キャスターの言うとおりで、今の俺には向いていないのかもな。だが、今の俺にできる事はこれだけだ。それは分かるだろう？ 打てなかつたら、手持ちのカードでやりくりするしかない。大丈夫だつて。シスター・シエルとはもう戦わずには済みそうだし、強いて言えばラ・ヴォワザンだけれど、あのおばさんならどうとでも成る』

「しかし、」

『命令するぞ、続行だ』

「……分かりました」

言い過ぎたかと気になった真也は和ませる事にした。キャスターは深刻にとらえる傾向があるのだ。彼はそれを知っていた。

『宇宙から来た戦闘種族は女子供を殺さないんだよ』

「どなたの事ですか？」

『プレデター』

「彼らが殺さないのは、妊娠した者、病気持ち、戦闘能力のない者です。シスター・シエルは該当しません」

『詳しいな』

「葵様から教わりましたので」

『はは。状況が思い浮かぶ。葵さんは映画が絡むと性格が変わるからな』

「マスターが2年留守にした、しわ寄せは私が引き受けました。帰国次第引き継ぎをお願いします」

『了解だよ。何か新情報は？』

キヤスターは立ち上がると水晶玉に手を翳した。登録した場所の映像が次々と浮かぶ。映し出されたそれを見た彼女の声は事務的であった。

「先日のシスターが死んでいきます。場所はあの教会です」

念話の符陣越しに伝わってくるのはマスターの戸惑いである。

『……シスター・アーシアだな？ 現場は押さえられたか？』

「いえ。ただ不可解な事に子宮が抉られています」



その教会は賑やかだった。昨夜の静けさとは打って変わり、警察、マスコミ、野次馬にあふれていた。敷地内に居るのは当然警官のみだ。その教会の墓地を兼ねる庭にアシアの亡骸が横たわっていた。彼女の周りに、忙しなく動いている男たちが居た。背広姿も居たが、制服組も居た。彼らはフランスの警官たちである。背広組は刑事であろう。Keep Outのテープ越しに覗くのは真也であった。キャスターは言う。

『教会が警察の立ち入りを許したのは、いま教会に責任者が不在だからです』

「シエルさんは調べ物だとか言ってたな。聖堂教会と警察でいざこざが起こらなければ良いけれど」

真也はKeep Outのテープを潜ると堂々と歩き出した。

『マスター?』

「直接シスター・アシアと会う」

数名の警官が真也の姿を認めたが、あまりにも堂々としていた為、声を掛けるか戸惑った。真也の足下で身を横たえるアシアに、衣服の乱れは無かったが下腹部に穴が開いていた。穴は修道服と、彼女自身の肉体に開いていた。目立った外傷も無い。ただ、その表情は不自然なほどに穏やかだった。死を悟った彼女は、神の御許とへ旅立つと悔いは無かったのだろう。真也はさも当然の態度で、現場検証中の刑事に声を掛け

た。

「招待状の様な物は遺品にありましたか？」

「いや、そんな物は無かったが……君は何者だ」

「文屋ですよ。トレンドであるSNSのネタにするんです」

もちろん大嘘である。彼はご丁寧にメモとペンを持つていた。怪しきは満タンだ。

「刑事さん。犯人像を教えてください。やはり精神異常者でしょうか。人間はまじめすぎると、考え方がおかしくなりますからね。哲学者も同様ですけれど。シスターが猟奇殺人に狙われたとなれば、センサーシヨナルです。やはり捜査も気合いが入ろうものですか」

その刑事は真也を囲んでいる複数の警官にこう言った。

「つまみ出せ」

一人の警官は真也のペンとメモを取り上げると放り出した。突っ伏し、転んだ。真也は衆人たちの視線を浴びる。

「報道の自由の侵害だ！ 知る自由を守れ！」

真也はとりあえず異議を唱えた。すると衆人たちの目が警官に向き、同じように異議を唱えだした。その騒ぎに乗じて真也は逃げ出した。手足を大ぶりに振りながら真也は言う。

「キャスター。シスター・アーシアを殺したのが参加者だでしょう。殺してしまつたのも、まあ目を瞑る。臓器を抉つたのは何故だ。生け贄にはよくある手だけれど、今時の魔術師がやるとは思えない。そもそも参加者が奪うのは招待状だけだろうに」

『異常者の可能性も考えられますが、判断はできません』

「自己顕示、サインか」

『肝臓、心臓ならともかく子宮とは随分と倒錯的です』

「シスターに子宮、か。聖母マリアに掛けている、としたらますます思わせぶりだな」

『どなたですか？』

「……ああそうか、紀元前に生きたキャスターが知っている訳無いな。聖堂教における“彼”を産んだ人だよ。聖杯も実は彼女の胎盤を意味しているって説もあるぐらいだ。それより殺害時間の特定は出来るか？」

『1時間の誤差はありますが、恐らく凛様とルヴィア様がその場を離れてからです』

「……キャスター」

『はい。タイミングが良すぎます。まるで見ていたかの様です。その地の残留思念を調べる事も可能です』

「いや、敵が何だか分からない。キャスターはそのまま情報収集に徹してくれ。ラ・ヴオワザンと出くわされても困るし、聖堂教会にキャスターの存在が知られたら事だ。犯人は



犯行現場に戻るって言うしな。愉快犯なら尚更だ」

場所を変わりカフェである。朝食代わりに真也は左手にあるホットドッグに食らいついていた。右手にはカフェオレだ

『凜様がマスターはどこかと聞いていますが。どうなさいますか?』

「朝飯中だ、と答えればいい」

ホットドッグにくしやりと噛みついた。

「俺はしばらく単独で動く。姉さんたちが得た情報と、俺が得た情報は適宜やりとりしてくれ。ただし俺の居場所、行動を推測できる情報は伝達禁止とする。理由はルヴィアにしろ、姉さんにしろ、並の魔術師では太刀打ちできない目下最大驚異のラ・ヴォワザンが俺を狙っていること」

『それが別行動の理由ですか?』

「そうだ。不意な遭遇、戦闘からの離脱、諜報活動、一人の方がやりやすい。キャスターは早々に脱落した聖堂教会にも注意してくれ」

『ルヴィア様の招待状に刻まれた十字記号、その一つが赤くなったそうです』

「キルマークね、本当に手が込んでる。アーシアが死んだから残りは6人か。話は以上か?」

『マスターは凜様を避けているように思われます』

「姉さんが何を言い出すか分からない。こう言えばこの話は打ち切ってくれるか？」

彼は何食わぬ顔でホットドッグに食らいついた。

『トレースの優先順位は如何いたしましょう』

「嫌がらせにしては度が過ぎる質問だぞ」

『重要な事ですから』

「姉さんを最優先にしてくれ。他は余裕があればいい。姉さんの身に何かあれば遠坂が終わる」

『マスターが、の間違いでは？』

「黙れ」



元来占星術とは天体魔術とも呼び、天体の魔力を利用する物であった。天体の動きが万物に影響を及ぼす、この考え方の元に体系化された術式である。ところがそれは運命性を強く持っていた為、聖堂教における唯一神の領域を侵すと排斥された。彼らは生き残りの為に、神の領域を侵す物では無いと、星の動きより吉凶を占う物へと変わった。現存する西洋占星術の姿である。

メルクーリもその一つ。マルクス・マニリウスを祖とし、ギリシャを本拠地とする西洋占星術の家だ。彼らもまた根源を目指す者であったが、古式の占星術、つまり天体魔術の復興を当面の第一目標としている。もちろんヘルメス・トリスメギストスがその技術を有してゐるなどとは思ひ知るよしも無い。

そのメルクーリは女性がその家督を継ぐ家系であつた。ところが先代は女兒に恵まれず、断絶させる訳にはいかないと男児の継承者を決断し、素質に優れた5男を後継者とした。その人物をクレトス・メルクーリと言う。当主は彼を女として育て、後継日も間近に迎えた頃。神の悪戯か、悪魔の采配か。何の因果か長女を儲けた。当主は方針を改め、長女を後継者と変更したが、一族より反発があつた。その長女は不義の子であつた為である。当主は長女の類い希なる資質を理由に断行したが、当主が死亡した直後からその長女は命を狙われる様になつた。

その結果。先代の指示に従う派閥と、それに反発する派閥で争いが起こつた。当初でこそ、大義名分はあつたが、争いが続くにつれ泥沼化した。憎しみの連鎖である。長女タリーアを可愛がつていた5男であり、後継者候補であつたクレトスはその実力を持つてどうか沈静したが、反対派は報復行動を行つた。秘術と資産を持ち出し、メルクーリ家の破壊活動を行つたのである。その結果メルクーリは疲弊し、その地位を大きく落とした。かつての威光はすでに無く零落寸前だ。クレトスは家を建て直す為、天使の知

識に一縷の望みを掛けたのである。

クロムウエルの聖杯戦争は魔術師同士の争奪戦だ。危険が伴う儀式であり、本来であればタリーアは家に残したかった。だが使用人もおらず信頼できる人間も数少ない。なによりタリーアの暗殺を恐れたクレトスは、やむなく同行させる事にした。そう、クレトスは兄であり、タリーアは妹、つまり異父兄妹なのである。

町のそれなりに広い通りにあるレストランで夕食をとるのはその二人だ。予算に余裕はない為、町中レストランだったが味はよかった。四角いテーブルにはアイボリーのクロスが掛かり、清潔感と暖かみがあった。椅子は竹細工だ。日本のキョウト製とクレトスはウエイターから聞いたが随分と座り心地が良い。面するガラス窓は大きく、通りを行き交う人が見える。空は紅色でじきに日が沈む。誰も彼もが家路に向かう、そんな頃だ。クレトスがグラスに注がれた赤ワインを口にすると、対面に座るタリーアが見咎めた。

「お兄様。これからお仕事だというのにお酒なんて」

「これは気付けよ、酔う程飲まないわ」

タリーア・メルクーリ、白人の少女で十一歳。腰にまで掛かるその髪はブラウンで、軽くカールを巻いていた。その髪が若苗色のスモックワンピースに掛ければ、初夏のガーデニングを連想させる。隆盛的な若葉、という意味だ。彼女はブロンドの兄と異なるブ

ラウンの髪に寂しさを感じているが、その前髪の隙間からセルリアンブルーの瞳が輝けば、可憐と評価するには十分だ。11歳のルヴィアを想像すれば良いだろう。変質者が彼女に良からぬ思いを持ったところで無理は無い。かもしれない。

彼女は足下を飾る黒のロングブーツを忙しなく動かした。それは言いたい事を言いかねる時の、彼女の癖だ。もちろん兄である彼にはお見通しである。

「言いたい事があるなら、言いなさい。謙虚は良いけれど、意思は明確にしないと駄目よ」

「あの、お兄様。今晩は止めませんか？」

「昨日もさつきも言ったわね、それ。駄目よ、私たちは戦いに来ているんだから」  
「でも、」

「でもじゃないの。覚悟を決めなさい。メルクリーの将来をしょって立つアンタがそんなんじゃない」

「……私はお兄様が傷つくのを見たくありません」

「まったく、困った子ね。守ると言えば喜んで、戦うと言えば気落ちして」

「ですが、お兄様。昨夜の教会の一件が気になります。あのシスターの殺され方、7教会の内の一つ“エフェソス”を準えたものに違いありません。エフェソスには聖母マリヤの家がありますから。マリア様は“彼”を産んだ、つまり胎盤であり子宮を、」

「およしなさい。魔術師がオカルトなんて」

「オカルトではありません」

「さしたる根拠も無いならオカルトよ。まったく、素質は私を上回るのに、そんな調子じゃ、いつまでたつても手が離せないわ」

「私はお兄様とずっと一緒が良いです」

タリーアは頬を染め、俯く。上目遣いのセルリアンブルーは潤みを帯びていた。今の彼女を一言で表すならば、恋する乙女である。幼い頃より傍らに立ち、必死に守られれば無理もない。タリーアは忙しくなく脚を動かした。膝に掛けていたナプキンが床に落ちた。クレトスは嬉しさもあつたが、呆れと困惑を隠さない。

「ほんと、困った子」

食事もそこそこに、クレトスは夜の町に繰り出した。彼の手にある招待状の指し示す向きは、町を時計と見立てれば、おおよそ5時の方向だ。彼は今までそうであつた様に、天から降りしきる星の囁きに応じて夜空を見上げた。雲一つ無い星空であつた。一般人が見れば綺麗と評するだろうが、幾つかの星が異様に強く輝いていた。クレトスはそれが気になった。眉を寄せれば、その顔立ちに懸念の一言だ。

「タリーア、まだ白羊宮の季節だつたわね？」

「はい、お兄様。それがどうか致しましたか？」

「この招待状の方向気になるわ」

「ですがこの季節、火星が頭上にあるのは日中のみです」

「12星座と10惑星はそれぞれ関連し合っているのよ。天球とは円盤、頭上に見える星々はその半分ではない。見えない半分も私たちに影響を与えている、それを覚えておきなさい」

「はい、お兄様」

クレトスは鞆からノートパソコンを取り出した。起動し立ち上げるのは西洋占星術のソフトである。特殊な物では無く、パソコンショップで入手できるありふれたものだ。彼は手際よくキーを叩くと現在位置と時刻を入手した。表示されるのは彼のその時間におけるホロスコープである。

それは一つの円盤と一つの輪で構成されていた。円盤は12当分され、それぞれの仕切りはハウスと呼ばれる。そのハウスは本人、仕事、金融など人生に関わる項目が当てはめられていた。その円盤の、外周を走る輪も同様に12に分けられ、黄道12星座が当てはめられていた。そして円盤上に表示される太陽や月のシンボルは感受点と言い、これらをつなぐ線をアスペクトと呼ぶ。これら一連の図章をホロスコープと呼び、西洋占星術師の始まりであり唯一、そして最後でもある。

西洋占星術は星座と惑星、そして被術者（占い対象）で決まる。人は生まれ落ちた時、

星座と惑星の属性を持ち、生涯その影響を受ける。そして任意の時間における、星座と惑星の位置で、仕事なり、健康なりの吉凶を占う（予測）するのだ。

魔術師ではない占星術師と占星魔術師の、異なるところはその読み取り精度に尽きる。彼らは頭上より降り注ぐ、天体の意思を直接感知できるのだ。もつとも、地球が宇宙に浮かぶ球体である以上、反対側の星を知覚する事はできない。それゆえ、占星魔術師ですら確率から逃れられないのである。転じて、同時に全ての星を読み取る方法さえ有れば、その確率はほぼ100%になるがその様な行為は不可能なので、補助、補完としてホロスコープを書き起こす。ただし、仮に100%にできたとしても、事象の発生確率を知る確率が高いという意味であり、術者の解釈によつてその占い内容には誤差が生じる。

例えば。事故が起こると分かっている、自動車にはねられるのか、飛行機が落ちるのかまでは確定できない。それは術者のもつ基本概念、知識に依存する為である。林檎という存在を知らない人、知っている人。この二人に林檎を見せても、認識に差が生じるのは当然である。知らない物を正しく認識する事はできないのだ。星々の声は占星魔術師にも手が余る。

ノートパソコンのディスプレイに浮かび上れば、クレトスの魔術回路が動き始める。ホロスコープと、リアルタイムで天体から降りてくる星々の声をクレトスは読み上げ



た。

「白羊宮（アリエス）、金牛宮（タウルス）、双児宮（ゲミニ）……太陽、月、水星……」  
夜とも成れば液晶ディスプレイの光量も相対的に強くなる。その青白い光を浴びて、夜の暗がりに浮かび上がる兄の表情は深刻だった。つられてタリーアも憂を見せた。

「お兄様？」

「やっぱり良くないわね、この方角。タリーア、ご覧なさい」

彼はディスプレイを妹に見せた。

「12個あるハウスの内二つ、仕事と社会的地位に冥王星と海王星が入ってるわ。両方とも凶星よ。加えて、火星と土星。この4つの凶星が描くアスペクトはグラント・クロス、大凶星だわ」

タリーアが不安を隠さず兄を見上げていた。彼は口元に手を添え、そのホロスコープをじっと見ていた。この星の囁きは兄妹の命運を決めるのだ。彼は一つの決断を下した。

「止めるわよ」

兄の声にタリーアは一転明るい表情だ。花が咲いたとも言えようか。

「ではホテルに帰りましょう」

「早合点しないの。これらの最悪の中で唯一の吉星がある、ここに向かうわ。場所は招

待状の示す位置と真逆、町を時計の中心とすれば10時の位置ね」

「どのハウスですか？」

「タリーア。天秤宮と火星の関係を説明しなさい」

「金星は吉星で天秤座はその支配力を強めます。では、金星が天秤宮にあると言う事ですか？」

「そう。そしてそのハウスは“友人”よ」



それは石造りの家であった。2階建てで、屋根裏を含めれば3階建てだ。壁は煉瓦色、屋根はコバルトブルーであっただろう。過去形なのは、色はくすんでいるからである。石は欠け、窓ガラスは割れ、閉じられた木の扉は腐っていた。扉も、その門も同じである。庭は雑草が我が物顔で伸び、石畳は砕けていた。手入れなどされていない事は明白だ。その屋敷を陽も落ちた夜半に見れば、誰もが良くない雰囲気を感じ取るであろう。そのものずばり幽霊屋敷である。錆び付いた門が歪な音を立てて開けば、現れたのはメルクローリ兄妹であった。

彼はクロスボウを構え庭を見渡した。何も居ない。危険性が無い事を確認すると一

歩踏み出した。タリーアは兄から離れない。その表情は不安と怯えである。

クレトスは矢に星のシンボルを刻んでいた。幸運にもその時間は凶星である冥王星が人馬宮に掛かっていた。冥王星はハーデスを意味し、言わずと知れた冥府、つまり死と再生を司る神である。人馬宮と冥王星に相生効果は無いがマイナスも無い。彼の手にある矢は星の力を受けて、命中率（人馬宮）と致死率（冥王星）が向上していた。

クレトスは場数を踏んでいたが戦士では無い。訓練は受けていたものの身体能力は並、敵の知覚も並より良い程度だ。彼はあくまで占星術師なのである。それでも、すべき事をしなくては成らないならば致し方ない。障害物、脱出経路を頭に入れ、できうる限り慎重に進んだ。この幽霊屋敷がクレトスにとって吉星である以上悪くは無い筈だ。目の前に屋敷が聳える。彼の妹は恐怖のあまり泣きそうだ。

「タリーアはここで待っていなさい。私は屋敷の中を搜索するから」

「いえ、どこまでも一緒です」

「危険だと言ってるの、分からない？」

「お兄様と一緒に死すら厭いません」

「ああもう、日頃もこれくらい強気でいてくれたら良いのね」

その声は突然だった。

「また会ったな」

タリーアが身をすくませた。クレトスが反射的にクロスボウを向けた。すると錆びた鉄製ポールの上に真紅の外套を着た男がいた。旗を掲げるであろうポールの上面は、釘の様に平らになっており、その人物はつま先を置いてしゃがんでいた。クレトスは器用なものだと、どのようにその場所に至ったのかと、疑問に思いそして呆れもした。その外套の男はメルクーリ兄妹を一瞥する事も無く、あらぬ方向を詰まらなさそうに見つめていた。右手には霊刀があった。納刀状態で、鞘は右肩の上だ。ポンポンと軽く叩いている。それは苛立ちとやるせなさ、そして葛藤の表れだ。事実、彼のその顔は子供の様にふてくされていた。例えるなら、TVゲームをやる為に勉強に努めなくてはならない子供である。タリーアは兄にしがみつき、その様は怯えるウサギだ。

「お兄様」

「黙ってなさい」

クレトスは鏃を向け一つ息をのんだ。

「トウサカシンヤ、だったわね？」

「そ」

「やっぱりまた会ったわ」

「そだな」

「約束通り占ってあげてもいいけれど、どうする?」

「要らない」

「どうしてここに居るのかしら？」

「参加者を探して彷徨っていた。見つからず、静かな場所だったから少しここで休憩していた。そして、アンタたちが現れたって訳だ」

「夜の幽霊屋敷が好きだなんて良くない傾向ね。辛い事でもあったの？」

「どうでも良いだろ。それより」

真也はクレトスの腰にしがみつく少女をちらと見た。びっくりとタリーアは身を震わせた。真也のまなざしは非難めいていた。

「クレトス・メルクーリだったな。その奥ゆかしい娘はアンタの妹か？」

「ええ。ほら、挨拶なさい」

「……タリーア・メルクーリです」

「私の妹が気になるわけ？ どうこうしようって言うならまず私に話を通す事ね」

「ならそうさせて貰う。なんで妹をこんな戦争に連れてきた。危険だって分かってるだろ」

「そういう意味？」

「そういう趣味は無い」

「話せない事情があるのよ」

「そ。まじめなアンタが言うならそれで良い」

「知った様な口をきくのね」

「初対面の魔術師に名乗る馬鹿正直者なら、そういう判断もできる」

真也は髪を掻きまくった。どうやっても解けないパズルに手こずる様だ。

（この町をさんざん走りまくって、ようやく見つけたら、あの人当たりの良いオネエ系で、妹もちか。仲の良い兄妹、なんでこうなる……）

「次に会ったら、敵同士、だったわよね？」

「ああ。そう言った。襲って、招待状を奪おうかと思った、んだけど。やめた」

「私に見逃す理由は無いわ」

「叶うなら誰かに倒されてくれ。俺はしたくない」

「そんなの偽善よ」

「直情的というか、正直というか、若いな。真っ直ぐな人はは見ていて心地良い。でもぶつかってばかりだと摩擦するぞ」

「そう、そう言うことね」

「なんだ、その見透かした様な、不愉快な微笑みは」

「別に。持っている武器は怖いのに随分と可愛らしいって思ったのよ」

「ふざけんな、可愛いなんて男にも女にも言われたくない」

「でもね。こちらはやり合うつもりなの」

クレトスはボウガンのトリガーに指を掛けた。そのクレトスの眼差しに真也は経験者だと悟った。真也が二人を見下ろせば、彼と彼が乗るポールの影が二人に落ちていた。

「やらない、そう言ってる」

「敵が何の理由もなく退くなんて、信じられないわね」

「俺にも妹が居る、だから戦いたくない。これは理由にならないか？」

クレトスは険しい表情を少し緩めた。

「どんな妹さん？」

「料理してよし、掃除してよし、洗濯してよし、家事万能のスーパー妹だ。温和しくて、気が利くけれど、ちょっと思い込みが激しいところが玉に瑕。いや、かなり思い込みが激しいかな」

「歳は？」

「19歳」

「そんなお年頃に恋人は居るんでしようね」

「困った事におにいちゃん娘で困ってる」

「アンタが構い過ぎた、その結果ね」

「お見通しか」

「こちらもそうなの」

クレトスは腰にしがみつくとタリーアの頭を撫でながら、ふっと笑った。

「いいわ。見逃して貰える代わりに良いこと教えてあげる。参加者の情報よ。悪くないわよね？」

「誠実な人からの情報なら大歓迎」

「この聖杯戦争に聖堂教会が関わっているのだけれど、知っているかしら？」

「知ってる」

「耳が早いのね。ならシスターが死んだってのは？」

真也の目の色が変わった。眼鏡越しに灯る蒼い光は月より蒼かった。

「アンタがああシスターをやったのか」

「ピリピリしてるわね。先日の穏やかさ嘘みたい。辛い事でもあったなら、いまアンタが持つものは武器じゃなくて誰かよ。そういう人は居ないのかしら」

「今はアンタの人の良さが障るんだ。事務的に頼むよ」

「恐らく参加者ね。身長は150センチほど。華奢で髪はプラチナブロンドのショートカットヘアー。抱きしめたくなくなるほど可愛い娘よ。歳は15, 6歳かしら」

「オッドアイだったか？」



「夜で距離もあったからそこまで分からないわよ。血にぬれた美少女なんて、ぞわぞわしちゃう」

「質問。どうしてその現場を目撃したのかってこと」

「馬鹿ね。私は占星術師よ？ 危険な場所ぐらい見当は付くわ」

「それじゃお返しに俺からも一つ。この聖杯戦争に関わっているかどうかは分からないけれど、この町で死徒と出くわした。十分に注意しろ、可能なら手を引け」

「忠告は承っておくわね。それじゃ私たちは行くけれど、アンタも気をつけなさい」  
「気をつけてな」

異国の妹は軽くお辞儀をすると、異国の兄に付いていった。その兄妹は夜の町に消えた。

「キヤスター、五人目だ。ルヴィア、教授、死んだアーシア、クレトス・メルクーリ。そしてどこかの誰か。あと2人。容貌だけ皆に伝えてくれ。正体は不明だがアーシアの招待状を奪った以上参加者に間違いない」

『分かりました』

「今の兄妹をトレースでできるキャパはあるか？」

『位置を追うだけならば常時可能です。ですが状態把握は周期的になります。加えて、今後追跡対象が増えるに従い、追跡度合いを調整する事になります』

「それで頼む」

真也は飛び降りると、夜の町に消えた。

(シヨートカットでプラチナブロンドの美少女、か。スコットさんの容貌そのままだけれど、まさかな。あの人が代行者に勝てるなんて考えにくい)



町を中心とした2時の位置に巨大な吊り橋がある。その橋に向けて、住宅街を歩く人影が二つあった。一人は10代の少女、一人は20代女性だ。その少女の名はエミリーア・フォン・アウフレヒト、ドイツを拠点とする錬金の魔術師だ。癖はあるものの鮮やかな金髪を、肩の辺りで三つ編みに結っていた。整った顔立ちだが、温和な表情を持っていた。事実温和な性格である。上質のツイードコートを羽織り、足下は黒のロングブーツ。身長は160センチと年齢にしてはやや低い。それを意識し一見大人びたコーデイナートだが、可愛らしさを捨てきれず腰にはリボンベルトを巻いていた。

もう一人はヘルマ。風変わりな服装で、白と黒のツートンカラーのワンピースを着ていた。フェミニンと言うよりは質実剛健な出で立ちである。頭巾をかぶり露出は顔のみだ。修道服にも女中服にも見える。背は180センチと高く、肌は作られた様に白

く、瞳は赤い。銀髪で、猛禽類の様にその目尻はつり上がっていた。彼女の手にあるモノは「ハルベルト」。大型の、相応に重量を持つ武器だがそれを持つ彼女は意ともしていない。彼女の体格、骨格、腕の細さを考慮するとあり得ない光景だ。

二人は聖杯戦争の参加者である。数歩先を行くエミーリアは振り返ると、ヘルマに向き合つたまま、歩き始めた。後ろ向き歩きとも言う。ヘルマの右肩に預けられているハルベルトには、不可視の術が掛けられており、人目は問題が無い。だがそれ以前にメイドの様な姿は人目に付く。事実声を掛けられ、その都度エミーリアは暗示を使わねばならなかった。着替えも検討したが礼装でもある為泣く泣く断念だ。エミーリアは温和にこう言った。気にはしつつも、大した問題にはしていない、その表情はそう語っていた。

「ねえヘルマ。本当にこの方向で良いの?」

エミーリアの声は少し低めだ。ヘルマなど宝塚の男役である。

「ああ間違いない。招待状は、町を時計と見立てれば2時の方向、ロアール川に掛かる吊り橋を示している」

つい先日、シエルと真也が戦つた橋である。

「そつか。なら急がないとね。あ、ヘルマ。見てみて。あの家可愛いね。バルコニーを支えるアーチが尖塔じゃなくて、半円形だ。という事はロマネスク建築かな」

「あのようなエミリーア様よ。ロマネスクは10〜13世紀だ。この20世紀に、實用レベルの建築物が残ってるかよ。アインツベルンの城だつて19世紀に作り直してるつてのに」

「ヘルマは夢が無いね。それと僕はエミリーアだよ。いつになったら覚えてくれるのさ」

「この仕事が終わればおさらばバイバイだ。名前なんてどうだつて良い」

「ひよつとしてヘルマつてツンデレ？」

「どうしてこうなんでも好意的に考えるつーか、独自のペースなのかね、この暫定主人様はよ」

「ねえ。ヘルマ。この仕事が終わつても従者を続けない？ 僕はヘルマのことを気に入ったんだ」

「そりゃー、どーも、ありがとうよ。けれどそれを決めるのは我がアインツベルンの当主様だ。俺にそんな権利は無いんだよ」

「ヘルマはもう少し自己意識を持った方が良いと思うな」

「ホムンクスに何を言つてやがるか」

ヘルマはアインツベルンのホムンクスだ。そのアインツベルンから依頼を受けたエミリーアは、援軍としてヘルマを借り受けたのだった。その依頼内容はクロムウエル

の聖杯戦争の調査である。

二人は招待状が示す吊り橋に到着した。片側2車線の、計4車線あるその大型吊り橋は閑散としていた。22時という時間を考慮しても、自動車一台通行する気配が無いのも気味が悪い。見上げれば数名の大人でようやく抱えられそうな程に太く、針金をより合わせた様な金属のロープが橋を支え弧を描いていた。そのロープに川風が纏わり付き、低い呻りを上げていた。魔牛でも居るのかと錯覚してしまいそうだ。

ヘルマはハルベルトを構えた。それは全長3.5メートル、重さ3.5キログラム。先端にある刺先（スパイク）は鋭利で、台形状の斧刃（アクスブレード）が牙を向いている。斧刃の反対側には鉤爪（フック）が付いていた。裝飾の施された刃と事なり、ポールはウォールナット製でシンプルだった。槍と異なり先端が重い。従ってどの方向の強襲でも応じられる様に柄の斧寄りを持った。静かであった。ただ風が鳴るのみである。ただ、そこが戦場だという事はヘルマはおろかエミーリアにも分かっていた。そして特殊な感覚を持つエミーリアにはその存在を知覚していた。

「……妙だな。招待会場を間違えたか？ それとも早く来すぎたか？」  
と言うヘルマの呟きにエミーリアは懐から一本の短刀を取り出した。

「ヘルマ。仕掛けるよ」

「居るのか」

「うん」

「任せた」

ヘルマの同意を合図にエミーリアの手から短刀が消えた。投擲である。すると誰かが落ちてきた。ポタリ。まるで木の上の毛虫が落ちてきたかの様だ。その誰かは、薄い紫色のゆつたりとした衣類を纏っていた。そのゆつたりとした衣類を、膨らませる程にゆつたりとした体格をしていた。釣縄の上から飛び降りた身軽さとはどうてい結びつかない。ただ者ではなかった。ヘルマの警戒レベルが上がる。知ってか知らずかエミーリアは通常運転だ。

「こんにちは。おばさん。集合場所にいるって事は聖杯戦争の参加者かな？」

その声はしやがれていた。

「良い月だ。こんな月夜はいろいろ起きるさね」

その飛び降りてきた中年女性は薄気味が悪い程、友好的な笑みを浮かべていた。

「例えば私の居場所がバレるのもその一つ。お嬢ちゃん、なぜ私の居場所が分かったんだい？ 上手く隠れていたと思っただけだね」

「僕はね、」

「たわけ。手の内を晒す馬鹿が居るか」

「ああそうだね。ヘルマありがとう」

エミリーアは直感に優れるのだ。特に、敵意を持った者に対しては強い効果を持つ。ヘルマは柄の中程をもち、斧刃を背後に向けた。一撃を加える構え、臨戦態勢だ。

「さて、ばあさまよ。もう一度確認するが俺らは参加者だ。アンタもそうなんだな？」  
「お前たちが欲しいのはこれだろう？」

中年女性の手にあるのは一枚の招待状だ。それはアジアが持っていた物である。ヘルマは笑う。

「話が早くて助かるぜ」

「これは随分と大きな得物だ。そんな華奢な身体で振り回せるのかね？」

ヘルマは左に難いだ。その太刀筋は9時から3時である。その斧風で起した風は突風に他ならない。10メートルは離れているというのに、中年女性の衣類が激しく打つた。強風に煽られる旗の様だ。

「気合い入れな、ばあさまよ。死に損なうと痛えぞ」

その中年婦人は目を細めた。古い記憶を探る様である。

「その白と黒の女中服、どこかで見た事があると思えば……そうかい。アインツベルンの戦闘型ホームンクルスカ」

「だったらどうだってんだ」

「ユーブスタクハイトの小僧は元気かね」

「ああん？ ウチの当主様を小僧扱いとは良い度胸してるじゃねーか」

「200年程度なら小僧と呼んでも差し支えはないだろうが……だつたらどうするんだ  
さ？」

「決まってる。死んで貰うぜ」

「わかりやすい。人形だ」

（このババア、あの斧旋風で臆しやがらねえ。それどころか眉一つ動かさない、という事は場数は相当踏んでるって事か）

ヘルマの警戒レベルは最大級である。

「おい、エミリーア様よ。下がってな。ちーとばかり荒れそうだ」

「エミリーアだよ」

彼女は不満を言いつつ下がる。ヘルマの足下にはアスファルトが広がっていた。障害物は無く、人よけの術を掛けており、自動車が走り寄る気配も無い。川に沿って走る風が、吊り橋のロープを通り抜け、低い音を立てていた。退治するヘルマは涼しい顔であつたが、その心中思案に暮れていた。

（ビビると思つて振つたのはしくじつたか？）

ヘルマの持つ武器は長物だ。そのポイントは間合いの長さにあるが、その間合いに届くには、踏み込まねばならない。ヘルマから見るとその中年婦人は無手。アスファルトの



上に記された道路標示の上に立っていた。ヘルマは見た事は無かったが、もし柳を見た事があれば風に揺れるそれを連想しただろう。

(暗器使いの可能性もあるな、どうする)

敵の出方が読めない、という意味だ。暫定マスターの声が背後より聞こえる。

「ヘルマ、手伝うよ」

「つつく。お節介のお嬢様だぜ」

ヘルマは石突を相手に向けながら踏み込んだ。石突を中年女性に向けている。つまりフルスイングの姿勢だ。高所から飛び降りた事実から、身軽さに秀でるとヘルマは踏んだ。逆に考えれば防御に劣るに違いない。外れてもアスファルトを砕き、礫を受ければダメージは期待できる。大ぶりの一撃を用意する隙は、背後のエミーリアがカバーだ。

3人の位置関係は中年女、ヘルマ、エミーリアと一直線だ。つまり中年女性からはヘルマが影となりエミーリアの姿は見えない。ヘルマの速度がピークに達する。常人はおろか強化された魔術師でも追従できない動きだ。ただその動きは一直線。動きを読み、カウンターを打つ事も可能だろう、サーヴァント級の存在であれば。

ヘルマの威嚇で間合いを読んでいたその中年婦人は、その間合い一歩外で投擲をしようとして慌てて下がった。ヘルマの背後より短刀が飛来してきたのである。その2本

の短刀はヘルマを避ける様に、中年女性に襲いかかった。その短刀はミサイルの様に誘導されていた。それは中年女性の隙に他ならない。

「おせえ！」

ヘルマは最大の力で袈裟、つまり1時から7時の方向に打ち込んだ。刺先が掠めただけであつたが、その斧刃はアスファルトを砕き、爆弾でも爆発したかの様な礫を巻き上げた。川風が粉塵を流す。その影から中年女性が現れた。

「ヘルマ！」

エミリーアの声は焦燥と警告だ。

「下がってろ！」

粉塵が流れきつた時、中年婦人の両手には短刀が握られていた。何らかのダメージを負わせた、その筈だつた。どれ程の素早さなのか。無傷であつた。そして中年婦人の足下に落ちていたのは、エミリーアが投擲した2本のナイフである。中年女性は薄気味悪く笑つた。ただ僅かばかりの賞賛も混じつていた。

「なるほど、短刀に見えるがゴーレムの一種か」

その中年婦人は刀身に刻まれた“emeth”の“e”を斬り付け無力化したのであつた。“emeth”は真理であり“meth”は死である。

「おばさんは器用だね。でもまだまだあるよ。幾つ躲せるかな？」

「流石錬金術の名家。エミーリア・フォン・アウフレヒトだ」  
「お婆さんはどうしてそれを知っているのさ」

温和なエミーリアの表情に緊張が宿る。流石に聞き捨てならない。

「僕は名乗ってないよ」

僅かな緊張の後、突然ヘルマが膝を突き、呻き声を上げた。

「ヘルマ！」

エミーリアが慌てて駆け寄るとヘルマの肩に短刀が突き立てられていた。

「待ってて、抜いて癒やすから」

ところがその柄に触れると、バチリと弾かれた。エミーリアの目が丸くなる。

「……この短刀は」

「もちろん呪詛付きだよ。クレオパトラを殺したというアスプの毒呪だ。ほら、解呪するなら急いだ方が良い。致死時間は一分だからね」

言われなくとも。エミーリアは急ぎ解呪を試みるが、徒労に終わった。それはエミーリアより中年婦人の呪力が上回っている事を意味していた。

「に、にげろ」

「え、やだよ。ヘルマも一緒じゃないと嫌だ！」

ヘルマはもう一度逃げろと言った。その「逃げろ」を最後にヘルマは動かなくなっ

た。エミリーアに怒りと悔しさと悲しみ、そして憎しみが募る。だが彼女の理性が勝てないと訴えていた。彼女は名残惜しそうにヘルマの頬に唇を添えるとそのまま逃げ出した。彼女の表情にあるのは悔恨と悲嘆である。情動的な現代の魔女に、その中年女性  
は呆れを隠さない。

「エーデルフェルトといい、この娘といい。やれやれ、最近の魔女は皆こうなのかね」  
その中年婦人は逃げるエミリーアの背中に、右手を掲げると呪いを吐いた。走っていたエミリーアは突如、なんの前触れも無く転倒した。意図せぬ現象に目を白黒させていると、彼女の身体は魔力で編んだ針金で拘束されていた。全身を幾重にも巻かれれば、ボンレスハムである。あり得ない、エミリーアはそう呟いた。

魔術による攻撃は大きく二つ。外部より影響を与える物と内部より影響を与える物である。呪詛は後者であるが、被術者が持つ結界を突破する必要がある為その難易度は高い。それが強固な結界をもつ魔術師なら尚更だ。エミリーアの驚愕とはそれであった。

「そんな、僕の抗魔力を上回ったってこと？」

「単純さ。お嬢ちゃんの抗魔力より私の呪力が強いだけ」

「僕だって並の魔術師じゃ無いのに……針金の拘束、そうか。ラ・ヴォワザン。死人になつていたなんて」

「正解だよ。ただ最近の魔女は頭でつかちばかりだね。呪いは基本、覚えておきな。次があればね」

そしてその声は突然だった。

「ご苦勞様でした。ミセス」

倒れているエミリアが顔を起すとそこに一人の人物が立っていた。プラチナブロンドの少女であった。彼女はその人物が直感で聖杯戦争の関係者だと理解した。付け加えればその発言はラ・ヴォワザンの仲間だと自白している様な物である。

「死徒が関係してるとってどういうこと？」

「父の因縁、と言っておきましょうか」

「分かったよ。僕の負けだ。招待状を渡すから解放して」

「レディ・アウフレヒト。雇い主であるユーブスタクハイト・フォン・アインツベルンから聞いていないのですか？ これは儀式なのです。彼は知っていた筈なのに。気の毒に」

彼は心底気の毒そうな顔を見せた。驚いた事にそれは本心でもあった。

「気の毒？」

「分かりませんか？ 貴女は担がされたという事です。ですが仕方ありません。形骸化しています、儀式なので始めさせて頂きます」

その人物は厳かに唱え始めた。

「第19節。わたしは、あなたの行い、愛、信仰、奉仕、忍耐を知っている。更に、あなたの近ごろの行いが、最初のころの行いにまさっていることも知っている。」

第20節。しかし、あなたにたいして言うべきことがある。あなたは、あのイゼベルという女のことを大目に見ている。この女は、自ら預言者と称して、わたしの僕たちを教え、また惑わして、みだらなことをさせ、偶像に献げた肉を食べさせている。

第21節。わたしは悔い改める機会を与えたが、この女はみだらな行いを悔い改めようとはしない。

第22節。見よ、わたしはこの女を床に伏させよう。この女と共にみだらなことをする者たちも、その行いを悔い改めないなら、ひどい苦しみに遭わせよう。

第23節。また、この女の子供たちも打ち殺そう」

元来高い声質なので、威厳はそれなりだが得体の知れなさは十分だ。エミールアは恐怖を飲み干そうと、一つ息を呑み、確認する様に問いかけた。

「ヨハネ黙示録、ティアテイヤ教会への手紙？ 君は一体誰なの？」  
「詳しいですね。J. C. と名乗っておきましょうか」

「君は僕を殺すつもりなんだね。お願いだよ魔術刻印は家に届けて」  
「出来るだけの事はしましょう」

それがエミリーアの最後の言葉であった。絶叫の様な悲鳴が響き渡る。ラ・ヴォワザンがエミリーアの遺体を、吊り橋の釣縄に括り付けると、二人はその場を後にした。J・C・の背後に控えるのはラ・ヴォワザンである。

「意外と魔女らしい最後だったが……主人様よ、これからどうするね」

「体制を整えます。予定を変更して、レディ・エーデルフェルトは最後に回します。準備をし、力をため、脅威を排除する」

驚異と聞いたラ・ヴォワザンはかぶりを振った。その意図は落胆である。

「まったく。首尾良く相打ち、悪くても片方は倒せると踏んでいたんだがね。最近の輩は根性がない。シエルとトオサカシンヤの対戦は肩すかしだ」

「ミセス。完全回復にはあとの程度掛かりますか」

「あと10人吸えばつてところだよ。斬っただけではなく、斬撃に大量の魔力を撃ち込んできやがったからね、忌々しい小僧だ」

彼女は真也に切り落とされた右腕の事を言っていた。身体の他の部分を削り、急ぎ腕を再生させたのである。削った分ダメージが残っていた。

「参加者の誘導はくれぐれも慎重にお願いします」

「ああ、分かっているさね」

J・C・はその端正な表情を険しくさせた。

(2流などとよくもぬけぬけと……)

つづく！



## 九話

ルヴィアの招待状に刻まれた7つの十字マーク、その二つ目が血に濡れた様に赤く  
なった。キャスターの連絡を受けた凜がルヴィアを引き連れ、町を中心に2時の位置に  
ある釣橋に向かえば、一層下の人目の付かない場所に二つの遺体があった。それは釣り  
下げられていたエミリーアと、道で蹲り息絶えていたヘルマである。真也が運んだの  
だった。

二人を覆っていたシートをルヴィアが剥ぐと二人は顔をしかめた。ヘルマは眠る様  
に死んでいたが、エミリーアの状態は酷かった。皮膚や筋肉、骨などにゴムの様な腫瘍  
があつたのだ。美しいと評して良い容貌も見ると影もない。キャスターから事前に聞いて  
いた凜に、ルヴィア程の心理的負荷は無かった。だもので凜の発言は医師の様であ  
る。

「酷いわね、この姿」

「心当たりがありますの？」

「症状だけ見れば梅毒に似てる。感染後3〜10年経った第3期の症状ね」

「ならば呪詛の類いですわね。治癒できる筈ですし、末期の魔術師を派遣するとは考え

にくいですから」

「コイツも問題か」

凜はメイドの遺体をじっと見た。

「アインツベルンのメイド服に見えますわね」

「多分その通りよ。銀の髪、紅い瞳、アインツベルンのホムンクルスだわ。武器を持つているなら恐らく戦闘型」

「何故断言が出来るのかしら」

「見た事があるから」

ルヴィアはしやがむと、エミリーリアの手にある指輪を見た。

「アウフレヒト家の紋章ですわね。ドイツで有名な錬金術の家です。この方の死因は呪詛によるものでしょう」

「メイドはなんだろう。肩に刀傷があるけれど、この程度で死ぬとは考えにくいわ」

ルヴィアがカルサイトを取出すとメイドの遺体に翳した。その光を浴びて微かに浮び上るのは呪いの痕跡である。

「呪詛ですわね。抗魔力を持つ魔術師に成功する程の、それもかなり強力なもの」

「二人に違う呪詛を使った。意味がある、ってことか」

「シスター・アーシアは子宮を抜かれた。この方は性病。引っ掛りますわね」

ルヴィアは右手薬指にある指輪を抜くと立上がった。

「ミス・トオサカ。彼女の魔術刻印を回収します。協力しなさい」

「分かつてるわよ。遺体は燃やすしかないか」

ルヴィアが人避けの結界を張ると、凜は火属性の鉞石を取出した。人を完全に燃やし尽くすには相応の手間が掛かるのだ。それはローズクォーツ、愛と美の女神アフロデーテに縁のある石である。ただ燃やすのも気の毒だろうという、凜なりの気遣いという意味だ。徐々に灰になる二人を弔えば二人の瞳に炎が揺らぐ。暫く黙し、口を開いたのはルヴィアであった。

「ところでミス・トオサカ。何故この場所が分かったのかしら」

「真也から連絡あったのよ。町の偵察中に偶然、参加者の遺体を見つけたってね」

「相変わらずの歪み具合ですこと。死に対する知覚が並外れていますわ」

「死神の様な扱いは止めてくれる？ 不愉快」

「ならシンヤを一人にするのはお止めなさいな」

「勝手に単独行動をしているだけよ」

「それは貴女に原因がある、そう読んでいるのだけれど、どうかしら」

「私に関係ないでしょ」

「シスター・シエルに対してシンヤは冷徹に成り切れなかった。それにもかかわらず続

行している貴女に言われたくありませんわね。偶々上手くいったから良い様な物の、分かっていいのかしら。ミス・トオサカ。貴女はシンヤを追い込んでいます。それを覚えておきなさい」

「アンタに関係ないわ」

「ありますわ。死んで欲しくない、そう思っていますもの。貴女はどう思っているかは知りませんけれど」

「本気で言っているのなら、この場でケリ付けるわよ」

「望むところ、と言いたいのですが。そう言われたくないならば態度で示しなさいな」  
凜は黙し、火葬を見詰めるままだ。ルヴィアもそれ以上言わなかった。

（参加者は教授と、レディ・エーデルフェルト。クレトス・メルクーリに正体不明のプラチナブロンド。死んだシスター・アーシアとアウフレヒトの魔術師。あと一人、か……キヤスター、イリヤに確認をしてくれる？ ヒキコモリのアインツベルンがクロムウエルに興味を持ったというのも不可解だわ）

（畏まりました。国際電話の許可を申請します）

（手短かにね。真也の居場所は？）

（お答えできません）

（キヤスター、アンタの意見を聞きたいのだけれど）

（凜様の欲求はありふれた当然のものです。ですが正しい行動が正しい結果を生むとは限らない、これだけはお忘れなき様）

（どっちの味方よ）

（マスターに決っています）

（ふん。二人は真也の味方ってこと。モテるじゃない、あの愚弟は）

（私は女ではなく従者の立場ですのぞ）

（分ってるわよ）

（今ひとつ。マスターは凜様の味方です。でなければルヴィア様に応じていたでしょうから）



凜たちが居るフランスから東へ向かうこと約9600キロ。そこは冬木市の武家屋敷、衛宮邸である。家主であり当主である土郎は、この危機をどのように回避するか、心底追い詰められていた。見慣れた和式の居間。彼が向かうちやぶ台は黙して語らず、質実剛健なモノだ。沈黙は美德なり、だが生憎と彼の義姉はドイツ出身であった。土郎は胡坐を掻き、右手には湯呑み。左腕に傳くのはその義姉である。

初めて会った頃、10代前半の姿だった義姉は3年も経てば相応である。出るころは出てきた、と言う意味だ。ちらと見ればフレツシユピンクの唇が、雪の様な白い肌に浮んでいた。濡れ、しっとり輝いていた。白銀の髪の一雫が、その唇に含まれば妖艶である。義姉の友人、もちろん彼より年下だが彼女ら曰く、「エロすぎるJc」。

それは好ましくないと思う彼であつたが、義姉のパーソナリティを否定する事も良くないと強く言い出せない。遠回しに言及すれば、姉が大人っぽいのは当然だと取合わなかつた。微妙に論点が異なると彼は感じたが義姉には頭が上がらないのである。

その義姉は横座りで身じろぎした。長袖で丈は踝まである薄手のワンピースは、乳白色を基調とし、コーラルピンクの横ストライプが入っていた。肢体を強調している、見せ付けんばかりだ。頬、顎、喉元のラインは無駄がない。胸から腹部、腰、股の谷間に連なるラインは洗練されていたが、目眩のしそうな柔らかみがあつた。その薄い一枚に隠されているものを妄想させるには十分だつた。義姉はすまし顔であつたが臨戦態勢である。そして予言者の様でもあつた。

「シロウ。セイバーばかりじゃ無くておねえちゃんも可愛がりなさい。いつもセイバーばかりなんだから」

彼はまたこの会話かとうんざりした。勿論おくびにも出さない。ただむつすりとお茶を飲むだけである。もちろんその心意は困惑だ。

「俺は十分に大事にしてる」

「口先だけなんてそんな子に育てた覚えは無いわ。あの男の様になるわよ」

「姉さん。言つて良い事と悪い事がある」

「なら良いわよね」

「良くない。どういう理屈だよ、それ」

「ほら。見なさい」

イリヤは髪をかき上げた。

「湯浴みも十分だし髪も肌の艶も完璧。もうカラダは14歳相当。不満も無いわよね」

「不満とかそういう問題じゃなくて」

「知っているかしら。世の中にはj s, j c, j k, j d, O L, 人妻色々居るけれどj

cが一番人気なの」

「どこの俗世間だ」

「理解した？ したなら今からわたしの部屋に行くわよ。イチローも兄妹が欲しいって

きつと言わわ」

「俺の話を聞いてくれ」

「いつものドレスがいい？ セーラー服もあるし、お望みならヴァイオレットカラーの

コートも出すけれど？」

裸コートなのか、そう言い掛けた口を嚙んだ。二人が居る場所は衛宮家の居間である。廊下と仕切る壁のその影に正妻の気配があつた。直視できないが確実に存在した。口では言い表せない気配である。強いて言うならエクスカリバーを喉元に突付けられている、が適当か。彼女は義姉との契約により干渉できないのだ。結婚に同意した事もそうだが、〝どこかの騎士王様は姉と子作りしたわよね〟と言われれば言い返ししようも無い。土郎のこめかみに、汗が一雫。

「よく分からないけれど、それをすると俺はピンチ。なんていうか、社会的に、友人的に。正妻的に。制裁が」

「リーゼリットとセラ、シロウがあのと懇意にしてるってわたし知ってるの」

彼は茶を吹いた。

「押し切られたなんて良い訳は聞かないから。あまり駄々をこねると強攻策に訴えるわ」

「それは困る」

「なら。いいわねシロウ」

救いの手は意外なところからさしのべられた。廊下であつた。それは呼び出し音であつた。

「……あ、電話だ。ごめん姉さん。この話は今度」



彼はそそくさと立上がり、電話のある廊下に出れば、頬を膨らませ拗ねる妻が居た。彼女が腕に抱く長男も非難している、流石にそれは気のせいだろう。



イリヤが次の捌め手を考えていると士郎が居間に戻ってきた。

「誤魔化した積もりなら、甘いんだからね。シロウ？」

焦燥を浮べるかと思いきや、彼の表情は固かった。深刻は誇張だが、明らかに懸念の相を浮べていた。

「姉さんに電話だ」

「こんな時間に電話を掛ける礼儀知らずに心当たりは無いけれど。美遊（みゆ）？ それともクロエ？」

「キャスターだよ」

ぴくりとイリヤの眉が動いた。それは警戒の印である。

『久し振りね、イリヤスフィール』

イリヤが受話器を取れば聞慣れた声だ。嫌悪はしていない。ただキャスターから連絡をする場合は大抵厄介ごとだ。警戒するな、と言う方が難しいだろう。

「キャスターがわたしに用件なんて珍しいものね。いまイギリスに居ると聞いたけれど……何かがあった、と言う事かしら」

『ええ。リチャード・クロムウエル、この人物とアインツベルンの関係を教えてくれないかしら?』

イリヤはその名前を知っていた。だが思い出すには少々骨の折れる、使用頻度の低い記憶だった。キャスターの要領の良い説明を聞いたイリヤは言葉に詰まった。

「あの男はまた厄介ごとに関わったということ。キャスターは相変わらず、あの男の世話を焼いているのね。コルキスのメデイアが物好きだわ」

『地獄の底まで供をする、それが主との契約なのよ。雪のお嬢さん』

「いいわ。答えてあげる」

『あら、私の主に優しいのね。意外だわ。実の所、難色を示す物とばかり思っていたのだけれど』

「わたしはあの男に二度も殺されかかった。でも、あの男が居なければ今はなかった。セイバーも受肉せず消えていた。イチローを見る事も無かった。私も小聖杯の運命に従い死んでいた。シロウと和解できていたかも怪しい。これらのプラスがあるなら多少の事は目を瞑れるわ」

イリヤは脇に居る衛宮夫妻に向くところ言った。

「二人とも席を外しなさい」

もう弟夫婦が関わっていい話では無いのだ。訝しがりながらも立去る二人を見届けるとイリヤはこう告げた。

「アフレヒトはドイツを本拠地とする錬金の魔術師だった筈。キャスターの話を聞く限り、アハトお爺さま、つまり本家の依頼を受けたという事ね。そしてその依頼内容なのだけれど、恐らくクロムウエルの儀式的の調査。」

アインツベルンは悪魔崇拜結社ラ・ヴォワークと取引をしたの。第3回聖杯戦争の前のことよ。冬木市の御三家トップでありながら一回、二回、と勝利が得られなかった私たちは勝利に目がくらみ反英霊に目を付けた。私たちが得たモノはアンリマユの召喚媒体である。偽り写し示す万象（ヴェルグ・アヴェスター）“彼らに渡した物は第3魔法を除く英霊召喚と令呪の術式。冬木市の聖杯システムの設計図よ”

『つまりこの聖杯戦争は冬木市聖杯の縮小版ということ』

「ええ。でもこれには巨大な霊脈が必要だし、邪法の悪魔崇拜者如きでは再現どころか解析すらできない、そう考えた。背後にクロムウエル家が居ると知っていたら話は別だったでしょうね。」

実際にクロムウエルは冬木市聖杯システムの解析に完全とまではいかなくとも、応用できるレベルには成功したのだと思うわ。だからこそ第一回の聖杯戦争を、天使の知識

を求める儀式だと偽り、開催し魔術師を呼び寄せた。でもどの部分を流用したかまでは分からない。牙だったかしら。それを召喚媒体として使うならば、召喚システムは流用したと言えるわね。魔力源は疑うべきね。冬木の聖杯システムは霊脈から魔力を集め、それを使い7騎の英霊を複写・再現するのだけれど。そこフランスのは違うのでしょ？

冬木のシステムとは事なり、構築したシステム以外のソースから魔力を持つてくる。なら魔術師たちの魔力（魂）を利用し堕天使を召喚する、こう考える方が自然だわ。ならばキャスターの言う参加者たちの思わせ振りの死に方にも意味を考えるべきね」

『神に対する侮辱、という事ね』

「もしくは降霊させる堕天使への供物。キャスターの言う神がどの神を指しているのか分からないけれど、堕天使と謳う以上聖堂教の神が妥当ではないかしら。太古の神々を堕としたのは彼らなのだから。招待された魔術師たちは聖杯に目が眩んだ体の良い生け贄と言う事ね。天使の知識は魔術師にとって聖杯に等しいから無理もないけれど。繰返すのだけれど、取引した後それを知った私たちはその儀式を見定める為、そちらの第一回到魔術師を派遣した。今回アウフレヒトを派遣したのは同じ理由だと思うわ」

『リチャード・クロムウエルが召喚しようとしている堕天使の名前を知っているかしら』

「そこまでは知らない。でも気をつけなさい。アザゼルは人間に剣という知識を与えた堕天使の石柱。そしてそれは全ての罪の原因を持つ悪魔。サタンとは魔王たちの総称

と言われるけれど、その一つとも言われるわね。7つの大罪である強欲を司る悪魔マンモンもそう。この悪魔は過去と未来の知識を与える墮天使アモン。墮天使の知識とは破滅でもある。清廉は期待しない方が良いわね。話は以上よ」

『有益な情報に感謝するわ。イリヤスフィール』

「ねえ、キヤスター。リチャード・クロムウエルの嫡男であるエドワードは資質に優れ、鍛錬を怠らず、父に従順で、愛し、敬つていた。後継者として申し分なかった。そのエドワードをリチャードは溺愛していたそうよ。実子である筈の次男、三男ですら冷遇されていた。

ところが第一次世界大戦でエドワードが死んで、リチャードはそれを痛く嘆いた。リスクの大きい墮天使の知識を求めてまでも、エドワードを蘇らせようとした。こう考えでも不思議じゃないわ。でもリチャードと縁を切っていた実子は言う事を聞かず、彼は長年放置していた非嫡出子に手を付けた。魔術刻印を継いだという非嫡出子のジョセフはどんな気持ちだったのかしらね。従つた以上、父リチャードに何らかの想いを持っていたとは思うけれど、素直にエドワードの復活を願うのかしら」

(父と子……)

キヤスターの危惧はイリヤにも伝わる程だった。



真也が居るのは町中のカフェである。キャスターの誘導を受けて、参加者を捜していたエルメロイを捕まえたのであった。キャスターの存在は秘密の為、真也は誤魔化した。エルメロイは何らかの疑問を持った。だが今問うべきことでは無いと不問とした。知ってか知らずか真也は興奮気味だ。一大事、という意味である。

「つまり教授。天使つてのは大嘘で、ジョセフの子か孫か分かりませんが、クロムウエルの残党は参加者の魂を狙い堕天使を召喚しようとしている、と言う事です」

「消去法で考えればあの牙は、冬木市聖杯システムの英霊召喚に用いる召喚媒体か」  
「危険です。即刻中止し、時計塔に戻り執行者を派遣するべきです」

エルメロイは葉巻を一つ吹かした。

「それは同感だ。だが槍も放置出来まい。我々が手を切ったところで別の魔術師を呼び、襲えばそれまでだ。根本的に手を打つ必要がある」

「あの槍はこの儀式に関わっている、そうおっしゃる？」

「それだけでは無い。この儀式は聖堂教会も注目している。魔術協会が大々的に動けばどうなるか、それが分らないのか」

「あ」

「いつになく頭の巡りが悪いな。一体何に気をとられている。第一次聖杯戦争はクロムウェル家が首謀だが、ナチスがその儀式に関わっていた。だが失敗しナチスは槍を隠した。悪魔崇拜結社のラ・ヴォワークのトマス・ニルセンはリバプールで槍を探していた。スタドリコンスタブルで槍を発見したのがマリア・アジャーニ。君らが倒したエリーザベト・バートリは槍を追っていた。当然バートリには仲間がいる。その仲間は君らの事を知った、そう考えるべきだろう」

「魔術協会を探り、教授の金庫に辿り着いた。その仲間とは強固な結界を破るほどの術者……ラ・ヴォワザン？」

「そう考えるのが自然だろうな。つまり主催者はラ・ヴォワークと見るべきだろう」  
「ではあの槍の目的は召喚した墮天使の受肉ですか」

「だろうな。リチャード・クロムウェルから見れば知識だけで良かったはずだ。受肉を計画に持ち込んだのは、ラ・ヴォワークとナチスへの取り分だろう。ナチスは墮天使を戦力として、ラ・ヴォワークは降臨自体が目的だった」

「納得ですよ教授。聖堂教会は第1回も今の第2回も槍を追っていた。儀式の参加者としての振る舞いをしていたのは、この儀式の首謀者が所持しているかもしれない、そう考えていた」

「シスター・シエルが君を襲ったのは、彼らが情報を与えたからだろうな。槍を取り返し

たか、後生大事に持っていると考えた。いや。或いはシスター・シエルと相打ちにしよ  
うとしたのかもしれない。それに失敗した以上、ラ・ヴォワザンは別の手を打ってくる  
筈だ。十二分に気をつけろトオサカシンヤ。おそらく彼らは戦術を変えてくる筈……  
なんだその眼は」

真也は半眼で膨れっ面だ。組んだ腕を後頭部に置いて、そのジエスチャーは「やって  
いられない」という意味である。エルメロイは葉巻の煙を吐いた。今頃気付いたのか、  
その煙はそう言っていた。

「教授は初めっから、そう踏んでいたんですね。それならそれで何で言わなかったんで  
す」

「それでも言わなければ君は帰国したかも知れないだろう？ 戦力は多い方が不測の事  
態にでも対処出来る」

「ご、このタヌキ……」と言うのが真也の偽りざる心の声である。

「教授。謹んで姉弟喧嘩に巻き込みます。責任とつてください。 그레이さんに呼び止め  
られなかったら、今頃帰国して家族団らんだったんですから」

珍しい事にエルメロイは固まっていた。彼にとって真也の発言が余りにも予想外  
だった為だ。そしてクククと笑い出した。喉も身体も震わしている。余程おかしいの  
か、能面のエルメロイが相好を大きく崩していた。同席の 그레이も同様だ。笑っては悪



いと、必死に殺そうとしていた。目深に被ったフードで隠そうともしていたが、隠しきれぬものでも無い。益々不愉快になる真也である。

「笑うところじゃないですよ」

「20にもなつて姉弟喧嘩をし、その仲裁を師に頼むか。ま、直視の魔眼持ちを雇つたと思えば格安だな。いいだろう、できるだけの事はしよう」

エルメロイはいつまでも笑っていた。真也は左手甲の呪符に念を籠める。

（聞いている通りだ。キャスターは接收されたクロムウエルの屋敷へ行つてくれ。当時なにかあそこであつたのか、それを知りたい。タイミングは任せる。石の残留思念を読むのはお手の物だろう？）

（シスター・アーシア、アウフレヒトの錬金術師。既に二人目です）

（そだな）

（マスターは脱落者と立て続けに関わりました。今すぐにも帰国するべきです）

（またその話か。俺の2年間ずっとこんな感じだ。今更だ）

（マスター。お願い申し上げます。ここで手を引いてください）

（サーヴァント級のラ・ヴォワザンが墮天使の復活の儀式に関わっている。それを知つた以上無理だ。ここでアンリマユ復活が再現されるなら阻止する）

（マスターが正義を掲げるのですか）

(そんな大それたモノじゃ無い。教授にグレイさん、そしてルヴィア。ここまで関わったなら最後まで付合うのが人情だ。ランサーならきつとそう言う)

(あの時と違いランサーは居ない、これをお忘れですか。これ以上の英雄まがいの行動はお控えください)

(ここが正念場という事なんだろうな。うまい事やればあの槍兵に手が届くかもしれない)

(クー・フリーンの子、コンラの結末をご存じですか?)

(死ぬほど悔やんだ、そう思ってる。それに歴史上の人物の良いところしか見ないのはお約束だろ?)

(マスター。英雄は非業の死を迎えます。いえ、壮絶な生き方、散り様が英雄の条件でしよう。ランサーの後を追う事、特定の誰かを望む事は相反します。このままあの槍兵の影を追うのであれば、避けえぬ死の選択が訪れましょう)

(メディアの予言、か。今迄キャスターに色々言われたけれど、今程怖いって思った事は無いな)

つづく!

## 十話

スタドリコンスタブルでのロンギヌスの槍争奪戦に於いて、エリザーベト・バートリを倒したのはルヴィアだ、そう予想していたJ・C.はその脅威を除去しようと、最大戦力のラ・ヴォワザンを投入したが失敗。予定を変更し他の参加者を襲う事にした。戦力を整える為である。手始めはアーシアであった。シエルが街を離れた為それは容易であった。鍊金の魔術師エミリア・フォン・アウフレヒトの場合は先の通りである。

その街の5時の位置にある建築物は相応の高さがあるビルだった。ロンドン市外で見られる様な一面ガラス張りではなく、窓毎に凹みのある作りだった。郵便の仕分台を思い浮べれば良いだろう。周囲に高層建築物は無くその景観に於いて際立っていた。招待状の導きに応じ、其の場に現れたのは占星術師クレトス・メルクーリである。

時刻は午後11時。そのビルに連なる窓に、明りは無く、人影も無く、ただ黙している。彼には集合墓地に見えた。勿論一つ一つの窓が納骨堂と言う訳だ。そのビルを見上げるクレトスは警戒を隠さない。招待状はそのビルを指していたが、ビルの根元にある広場に誰も居なく、何も無い。つまり試合会場は聳えるビルの屋内以外無い。試合会場は屋上だ、彼はそう直感付けた。だがそれは逃場が無い事も意味していた。どうす

る、クレトスは己に問いかけた。逃げるばかりでは埒が明かない。だが敢えて穴倉に手をつたみ囁まれるのも面白くはない。妹のタリーアが見上げていた。その端正な表情は不安を隠さない。彼は三つ目の選択肢を作る事にした。

「タリーア。飲物と簡単な食べ物を買ってきてちょうだい。何かあれば暗示を使いなさい。良いわね？」

「お兄様？」

「持久戦よ。試合会場がこのビルの何階かは分らないけれど、先客なら待ちくたびれて出てくるでしょ。私たちが先客ならお相手はここを通るはず。敢えて不利な状況に甘んじる理由はないわ」

「流石ですわお兄様」

「それ止めて。なんとというかこそばゆいから。私はココアとスコーンを御願いね。タリーアは好きにきなさい」

「では私もそうします」

彼の妹は花が咲いた様に笑うと、ビルの敷地にある植木、それ越しに見える小売店へと駆けて行った。兄はため息が出るばかりなり。

「まったく。波風立てないと言えば聞こえは良いけれど、自立性が無いのは困ったものね。小さい頃から大人の顔色ばかり窺ってきたから、仕方が無いのだけれど」

彼は思わずそう口にした。妹をこの時間に一人にするには不安もあるが、彼女は次期当主だ。独り立ちの訓練は欠かせないのである。



低層樹の影に身を潜めるクレトスの手にはクロスボウがあつた。そびえる高層ビルに視線を走らせれば何かがあつた。何時現れたのか。隠れる枝影越しに、中年婦人が揺らぐ様に立っていた。時代錯誤の格好だ。17世紀のフランスに時間移動すればこの様な人物に会えるだろう。その距離10メートル。視線が合った。

「まったく。幾ら魔術師が人目を憚る存在とは言えコソコソと、これじゃ盗賊と変わらないね。最近の若いのと来たら本当に根性がないね」

耳に障る程にしゃがれた声だった。隠れ場所が知られているなら、隠れていても意味は無い。クレトスは一つ深呼吸。クロスボウを構え立上がった。向けた鍔が鋭く光る。

「おばさまは参加者ね?」

「そうだと言つたらどうするんだい?」

「なら招待状を渡して欲しいのだけれど」

中年婦人は招待状を手に取り翳した。

「欲しいなら力尽くで奪いな」

妙だ、クレトスは目の前の中年婦人に違和感を感じていた。まるで大凶星の権化、そう思えてしまう程に禍禍しく、恐ろしかった。勝てないと本能的に悟ったクレトスはボウガンを降ろした。悔しい事この上ないが、死ぬよりマシだ。妹が独り立ちするまでは死ねないのである。

「おや、どうしたんだい」

「分つて聞いているなら嫌みも極みだね。降参よ、招待状は渡すわ」

「潔い判断というべきか、腰抜けと言おうか迷うが。まあ、殺しきれない中途半端よりはマシかね」

「誰のこと？」

「こちらの話さ。でもそう言う訳にはいかなくてね。申し訳無いが死んで貰うよ」

何時取出したのか、中年女性の両手に短刀が握られていた。教会で殺されたシスターの姿が脳裏に浮かぶ。殺すことが趣味なのか、殺すことが必要なのか。理由はどちらでも構わないが絶体絶命だ。だが生憎と彼は死を甘んじて受入れられる立場でも無かったし、性分でも無かった。攻撃すると見せ掛け、それに乗じて離脱。彼はそれに賭けるより他なかつた。今この場に妹が居ない事が幸運だ。だが彼に運は向いていなかった。

「お兄様？」

中年女性の視線がクレトスを通り過ぎ、背後に投げられる。タリーアが戻って来てしまっていた。

「妹に用は無かったんだけどね、見てしまったのなら仕方が無い」

見知らぬ中年婦人に睨まれタリーアは怯えるのみだ。

「何の事ですか？ お兄様。この方はどなたですか」

「こういう事さね」

中年婦人の右手がブレたかと思うと、妹の前に兄が立っていた。だがどうした事か、向き合う兄の様子がおかしい。いつも微笑んでくれる端正な表情が歪んでいた。口から血も吐いていた。脂汗も吹出している。どうして死にそうな程つらい顔をするのか。その兄の背中には短刀が突き立てられていた。彼は妹の盾となったのだ。彼女の兄は精一杯の笑みを浮かべ、こう告げた。

「タリーア。俺がほんの少し時間を作るからその隙に逃げろ。今の時間なら金牛宮（タウルス）か獅子宮（レオ）、そして天秤宮（リブラ）が吉星だ。タリーアの星空に良い星が輝きます様に」

「お、に、い、さまっ！」

何が何だか分らない。まるで今生の別れの様な言葉はなんなのか。その兄は渾身の力を揮い、クロスボウを持上げ、振り返り、そして妹に背を向けた。背に突刺さる二本

の短刀が、墮とされた天使の翼に見えた。そしてそれが生きている兄の最後であった。心臓に短刀を突き立てられ兄は事切れた。タリーアは呆然と立尽していた。理解が追いつかないのである。

その中年女性の物言いは兄の死に全く動じず、気にも止めていなかった。それどころか意味の無い介入をした主に、不満をありありとぶつけていた。

「主人様よ、それは意味が無い行動だね。余計な御世話と言う奴だ」

何時現れたのか。プラチナブロンドの人物が、中年女性の背後に立っていた。その手にあるのは黒鍵である。クレトスが命と引き替えに放った矢は、その黒鍵によつて打ち落されていた。それはアーシアの技だ。

「申し訳ありません、ミセス。ただ得たスキルの試験はしておくべきですよ」

「ま、試し打ちには悪くない、か。どうだい力の具合は」

その人物は右手を数度握り直すと最後にきつく手を結んだ。その手に宿るのは羨望し、一時は諦め、渴望した、己の意思を形にできるエネルギー、力である。

「人生とは詰まるところ他者との折衝、この連続です。己の考えを主張する事、己の望みを成し遂げる事、弱ければ拉がれ潰える。力がこれほど素晴らしい物とは。50年、地を這っていた苦渋が嘘の様だ。ミセス。力とは恐ろしい物ですね。不謹慎ながらも心が躍る。自制しなくてはならないというのに、その自制が疎ましい。私は今狂おしい程に



高揚している」

「この程度で満足して貰っちゃ困るんだがね」

「ええ。分つています。我が父、リチャード・クロムウエルの復活こそが我等の悲願」

（父、ねえ。牙の呪いとは言え、その拘り替えに疑いすらしはないとは滑稽だ。だがそうでないと困る）

「いや、いやです！ お兄様！ 目を開けてください！ 開けて！」

異国の妹は兄の軀に縋り付いていた。だがどれ程呼掛けようと、揺さ振ろうと、その兄が妹の名を呼ぶ事は無かった。ラ・ヴォワザンは顎を小さく振り促した。

「そら、ご主人様。ぼやぼやしていると占星術師の魂が抜けちまうよ」

「分つています」

J・C・が歩み寄ると兄妹に影を落とした。涙に濡れる妹が見上げれば、プラチナブ  
ロンドの瞳は碧と朱だった。



父、リチャード・クロムウエルの遺産である墮天使召喚の儀式から考えれば、タリーアは勘定外である。フィラデルフィア（アラシエヒル）が司るのは兄妹なのだ。どちら

か一人で良い。彼の目的は儀式の再現ではなく、あくまで墮天使の復活なのだ。だが父の遺産である儀式は極力尊重しなくてはならない。タリーアは予備として確保し、兄の遺体は儀式に則って高層ビルの屋上に捧げた。

残る参加者は密教退魔師である「慈誠」と呪詛の魔術師「レオナルド・ルチアーノ」この2名。J・C・は計画に基づきこの参加者らに手を付けようとして止めた。ラ・ヴォワザンが呼んだ慈誠の実力はルヴィア、凜に匹敵する。彼は一計を講じる事にした。戦術的な意味を見出さず事は可能だが、士官学校なら落第点だ。それでも実行したのは、真也に対する個人的な感傷だった。倒せば好都合、そうでなくとも一泡吹かせれば良い。俗な言い方をすれば、一発カマす。J・C・は真也に怒りを覚えていたのである。

J・C・が慈誠とレオナルド・ルチアーノに接触出来たのは簡単である。招待状の導きはリーダーなどではなく、ラ・ヴォワザンの誘導だったのだ。ルヴィアがラ・ヴォワザンと遭遇した様に、全ては初めから仕組まれていた。

町を時計と見立て10時の方向にある建築物は幽霊屋敷である。メルクーリ兄妹と真也が遭遇した場所だ。その荒れ果てた庭に二人の男が対峙していた。一人は黒の法衣を纏っていた。法衣と言っても聖堂教の聖職者ではなく仏教徒である。その証として白の袈裟を肩に掛けていた。長身だったが法衣越しにも鍛え抜かれた肉体が覗える。

短めではあったが頭髮は伸び、顎と鼻下に髭を生やせば、僧侶と言うより破戒僧に見える。法名を慈誠といい、彼は正規の僧侶だ。但し表舞台には現れない高野山を御山とする密教真言宗の退魔師である。それに対峙するイタリア人の男は軽薄な笑みを浮かべていた。

「漸く参加者とお目に掛かったと思えば、髭面オヤジとはツイてないぜ」

その男はレオナルド・ルチアーノと言い、呪詛を専門にする魔術師だ。イタリア人らしく背はそれほど高くなかったが、無駄の無い体付きであった。彼が纏うスーツはジャケット、パンツともグレーがかつたベージュだ。白を基調とし紺のチェックが入るシャツは胸元を大きく見せていた。鍛えた胸板と胸毛があれば紳士的であり、ワイルド的である。ブラウンの革靴が輝けば清潔感もバツチリだ。嘲笑にも挑発にも見えるレオナルドの態度に慈誠は眉一つ動かさない。

「おい、おっさん。何か言ったらどうだ」

「話すのは苦手だな」

二人とも相応に低い声だったが、抑揚口調が異なれば随分と印象が事なつた。二人は共に30歳であったが、互いが互いに同い年だとは夢にも思ふまい。慈誠は懐に手を入れると招待状と独鈷杵を取出した。レオナルドの瞳が鋭く光る。

「それは礼装だな？　見た事がある。たしか古代インドの武器だ」

「正確には『煩惱を滅ぼし菩提心を得る』この想念を形にしたものだ。最も、お前の言うとおり俺らは敵を打倒す武器として扱う」

レオナルドは右手の指を、ボウリングの球を掴む様に動かすと、糸がたゆたった。一本であったが、首をもたげる毒蛇の顔に見える。

「東洋の魔術師と遣り合うのは初めてだ。だが分りやすいのは良い。俺の招待状はジャケットの胸ポケットにあるから欲しけりや倒せ。レオナルド・ルチアーノ、アンタは？」

「慈誠」

「ジセイ、か。なら始めようぜ、俺は待ちくたびれた」

慈誠は左手に持った独鈷杵に右手を添えた。刀印である。

「無口なおっさんだ！」

それは二人が後戻りできない直前だった。

「お待ち下さい」

その唐突な声に二人は同時に飛び退いた。二人の視線の先にプラチナブロードの人物が立っていた。朽ちた庭に立つ姿は廃墟に咲くスズランに見えた。もちろん毒花という意味だ。J. C. である。3人の位置関係は丁度正三角形となっていた。慈誠は静かにJ. C. を凝視していたが、その表情には不満が見て取れた。水を差されたと言

う意味だ。レオナルドは不意な役者の登場に目を剥いたが、直ぐに好印象な笑みを浮かべた。J. C. の容貌を一目見て気に入ったのだ。

「こいつはとんだ観客が居たもんだ。美しい御嬢さんはどこから忍び込みましたか？ 確かここには人避けの術を掛けた筈なのですが」

レオナルドの人を小馬鹿にした様な相好も、礼儀正しくば魅惑的に見えた。大半の女性は一ひとたまりもないだろう。事実そうでもあった。

「私は参加者ではありませんが魔術師です」

一転J. C. は深刻そうな表情を見せこう言った。

「御二方に折入ってお願ひがあります。仇を取って頂けないでしょうか？」

慈誠とレオナルドは互いに見合った。その言葉が余りにも予想外だった為である。

「とても腕の立つ魔術師が一人居ます」

そう言うJ. C. の前には二人の魔術師が居た。慈誠は玄関へと続く数段の階段に腰掛けていた。両膝の上に両肘を置いて前屈み。だがその眼は警戒を隠さない。レオナルドは玄関にある屋根、その柱に腕を組んでもたれ掛かっていた。J. C. が男だとも名乗り、愛想の良い態度はどこかに消えた。話を聞いて貰える態度を確認したJ. C. はこう切出した。

「参加者であったエミリーア・フォン・アウフレヒトとは恋仲でした。私はその人物のや

り方に怒りを覚えています。その強い力を我が物顔で振るい、他者の尊厳を踏みにしっている。私はそれが許せない。ここに招待状があります。これはエミリーアが受取った分と、勝取った分。仇を討つてくださればお渡しします」

J. C. の嘘には真実が混じっていた。エミリーアと恋仲である、これは当然虚偽だ。真也が力を我が物顔で奮っている、これはJ. C. から見れば事実であり、真也に對する憤り怒りも本物だった。嘘に真実を混ぜれば真実味を帯びる。二人の魔術師はその動機を疑わなかった。慈誠は身を起こすと背筋を伸ばした。

「なぜ、この場所が分かった」

「私は占星術師です」

それは嘘では無い。先日その魔術特性を手に入れたのだ。

「危険な場所の位置は追えます。確率の話ではありませんでしたが、ツキは向いているようです。あなた方とこうして出会う事が出来たのですから」

だがJ. C. が実際にこの場所を突止めたのはラ・ヴォワザンの誘導である。

「お疑いなら貴方の吉凶を占いますが」

「所属星座を明かすほど間抜けではない」

「それは残念です」

慈誠が「どれ程強い」と低い声で聞けば、J. C. は「戦闘型ホムンクルスを倒す程

の腕前です」とコマージュの様に答えた。当然反応したのはレオナルドである。

「おい、マジかよ」

「ですが、私は占星術をもつてその人物の動きを追う事が出来ます」

「奇襲が可能と言う事か。やり方次第だな」

「依頼を受けては頂けないでしょうか」

「魔術師にしては生真面目だが前払いなら受けよう。レオナルド・ルチアーノ、お前はど  
うする」

「降りる、と言いたい情報が情報も欲しいし、ここで逃げても埒が明かないしな、いいぜ。付  
合う。少々格好は付かないが、強いなら数で当たるのが順当だ。乗った」

慈誠の黒い瞳が鋭く光る。それは彼の最終確認だ。人物の見定めという意味だ。

「決りだな。お前の名前は？」

「ジヨナサン・スコットです」



そして翌日の朝である。町の4時の位置にある公園のベンチに座り込むのは真也であつた。清々しい朝だというのに気分が優れない。義姉の件もあつたが、三つ目のキル

マークが問題だ。あの仲睦まじい兄妹の姿が脳裏に浮かぶ。クレトスは頭が良い、上手く切り抜ける筈だ、そうは思うも不安は募る。

「キャスターの心配が過剰になるのも無理は無いな、いつから俺はこうなった」

決っている。3年前のあの時だ。踏ん反り返り見上げれば、青い空に雲が流れていた。ポツリポツリと浮ぶ様はマンボウである。のんびり、という意味だ。僅かに湿り気を帯びた朝風と共に従者の声がそよぐ。

『マスター。ルヴィア様が招待されました。凜様も同行です』

「分かった。位置を教えてください。ラ・ヴォワザンが動く筈だから追跡する」

『もう一つ、凶報です。先日のクレトス・メルクーリですが死亡を確認しました』

真也は一瞬身体を止めた。

『場所は5時に方向にある高層ビルの屋上です』

「遺体の損壊状況は？」

『刀傷があります。恐らくホームクルスと同じ殺害方法と推測しますが、今までと状況が異なります。クレトスに刀傷が胸と背中に一カ所ずつ、他に目立った呪いは見受けられません』

「猟奇的ではないと言う事か。妹のタリーアは？」

『不明です。マークはクレトスに付けていましたので、タリーアの追跡は出来ません』



「分かった。殺され方に意味がある、それが気に掛かるが今は二人が優先だ」

凜とルヴィアが招かれた場所は町から離れた森の中であった。足元には踏固められた十字路があつた。自動車が辛うじて一台通れる小道だ。虫の気配も、鳥の羽ばたきも無い。ただ静かである。

見渡し凜が「なんか、今までと毛色が違うわね。市街地からもすこし外れているし、この場所に意味があるのかしら」と呟けばルヴィアは「逆に、今までの場所に意味があるのかも知れませんか」と答えた。凜は右手甲に刻まれた符陣に念を籠めた。

(キャスター。真也の居場所は?)

(お答えできません)

(ならこう聞くわね。何してる?)

(マスターの居場所、行動を推測できる情報は伝達禁止、そう命じられています)

(私たちの周囲に人は何人居る?)

(凜様、ルヴィア様を除き3人です)

(敵性人数は?)

(……居ません)

(そ)

グレイとエルメロイは凜とルヴィアから少し離れた車の中だ。レンタカーである。

エルメロイは使い魔で招待場所を監視していた。真也は二人を見下ろせる崖の上に居た。伏せモノスコープを覗き、二人とその周囲を警戒している。奇襲を警戒し霊刀は展開済みだ。並の魔術師ならルヴィアか凜のどちらかで十分だ。一流であっても、片方が目を光らしていれば万が一もあり得まい。問題はもちろんラ・ヴォワザンである。二人にもっと近付くか、真也がそう思った矢先にキャスターの声が聞こえた。

『マスター。競合相手の様です』

彼がその方向を見れば、凜とルヴィアに続く道を一人の僧が歩いていった。僧は僧でも法衣に袈裟を着た中年男生が表現としては適当だ。もちろん慈誠である。

『仏教僧の様です、が。魔術師と言う事でしょうか』

「密教退魔師だ」

『どの様な術者なのですか？』

「冬木市に住む前に一度会った事がある。一時的に古の神々と一体化してその力を振るう、一種の憑依者、シャーマンだ。系統の異なる魔術理論をもつ魔術使いの連中だよ」

二人と慈誠がいくわすにはまだ距離があった。

『マスター』

(分ってる)

真也が野球ボール大の石を掴むと、今まさに真也を襲おうとしていた糸に投げ付け

た。石は、切断されたがその軌道を変え風に舞った。凧と切離された糸の様であったが、直ぐさま力を取り戻し引いていった。その様は蛇に他ならない。その糸はジャケツトを着た男の腕に沿い回転していた。らせんである。真也はふらりとと立上がれば、忌まましそうな顔でレオナルドを睨み付けた。ラ・ヴォワザンがどこで目を光らせているのか分らないのである。

「糸、紡錘の魔術……運命の糸『モイラ』に基づく魔術か」

「まあね。付加えれば茨姫を呪ったあの糸だ」

「糸術が呪詛系だとは初めて知った」

「授業料は高いぜ？」

「俺は参加者じゃないが、タダなら受けてやる。そうで無いならどこかに行け」

「確かに、金回りは悪そうだ」

「黙れ。払う金は無いという意味だ。多少ならある」

「抜かしやがるが、世の中タダ程怖いもんはねえぜ？」

「その呪詛『糸（師）』が何の用だ」

「お前。参加者に紛れて暗躍してるっていうじゃねえか」

「協力はしているけれど、暗躍とは聞き捨てならないな。そもそも、どこで誰から知った」

「認めたな？」

「だつたらどうする」

「殺す」

「どうしても殺りたいと言ふなら応じる。けれどイタリア人なら生き急ぐ事も無いだろ。この儀式について伝えたい話がある、それを聞いてからにしたらどうだ」

「俺は気が短い。付加えれば顔色一つ変えず嘘を付く奴は信用ならない」

「いててて」

らせんを刻んでいた糸が繰り出された。ミシンの糸車の様だ。真也は踏み込めば、崖下から駆上ってくる誰かの気配がある。

『マスター。退魔師がそちらに向かっています』

騒ぎに注意を引いたのだろうか、だが問題は無い。それならそれで順繰りに倒すのみだ。レオナルドが繰出した3本の糸。躲した一本目の糸は真也の背後の岩を砕いた。続く二本目の糸は、波打つ糸の腹と節、その節を打ち弾いた。三つ目の糸はレオナルドを守る様に渦巻いている。

「腕の一本は覚悟しろ！」

真也が吠えれば、反応しきれないレオナルドのその表情は攻撃態勢のままだ。その時分。

「ka:n」

突如結ばれた発動の呪文と共に、真也の足下に光が起こった。それは円と梵字で構成された魔法陣、曼荼羅だ。強い火属性を持っていた。呪術で強化したのか、崖下を歩いていた慈誠が姿を現していた。〃しゃりん〃と慈誠は錫杖を曼荼羅に突き立てた。両指を複雑に組み、印契〃普賢三昧耶（ふげんさんまいや）〃を結ぶ。その低い声が唱えるのは炎の化身への加持祈祷である。

（激しい大いなる怒りの相（すがた）を示される不動明王よ。迷いを打ち砕きたまえ）

曼荼羅がこの場所に予め描かれていた、真也はその事実を頭の片隅に押し遣った。慈誠が発動させようとしている術の規模は大きい。目の前の退魔師はルヴィアと凛に匹敵する、一流だ。そう瞬時に判断した真也は狙いを慈誠に変え霊刀を翳した。鞘から抜く時間が惜しい、だが詠唱を止めるのみならば問題は無い。鞘打ちで十分、その筈だった。

二本の短剣に襲われたのである。ミサイルの様に誘導するそれは真也の右股に突刺さり、もう一刀は左ふくらはぎを抉った。その刀身には真理を意味する〃emeth〃と刻印されていた。草むらに仕掛けてあつた短剣型のゴーレムである。トラップ、と言う意味だ。当然殺意など無い。脚にダメージを受け真也の移動力が落ちる

「狙いは俺か！」

「気づくのが遅えよ。たかが魔術師と慢心したか？ それとも美女二人に気が取られたか、このスケベ野郎！」

（障りを除きたまえ。所願を成就せしめたまえ！）

慈誠の詠唱を背後に、レオナルドの嘲笑と糸が真也に絡む。最初の3本の糸は、攻撃ではなく初めから真也の拘束を狙ったモノだった。

「kanma:n」

慈誠の祈祷「不動明王火焰大呪」が成就する。一切浄化の炎の化身が顕現すれば、その炎が真也を襲った。彼の対魔力と火焰呪力がせめぎ合い、そして対魔力が作る防壁を突破した。その呪のレベルはランクAだったのである。炎にまみれる真也は、拘束するレオナルドの糸を強引に千切りると、そのまま跳躍し崖下の川に身を投げた。水柱が立上がる。レオナルドと慈誠が急ぎ崖際に駆寄ると、川から這い上る真也の姿があった。全身に強度の火傷だ。動いてはいるがダメージは確認できる。

「追撃するべきじゃないのか」

レオナルドの言葉に慈誠は首を横に振った。

「機会を逸した」

凜が真也に駆寄れば、ルヴィアは二人を睨み上げていた。凜は左手に鉞石三つ、ルヴィアは右手に鉞石三つ、臨戦態勢だ。二人が内包する魔力量は甚大、死徒といえども

三重の2連撃は流石に避ける攻撃量だ。真也も火傷を負いながら二人を睨み上げていた。無理をすれば戦闘は可能の様だ。

「ならどうする」

「機を待つしかない」

「女に待たされるのは我慢できるが、男に待たされるのはごめんだ」

「行くのか」

「俺は降りた。金目の物は欲しいが、あんな化け物の相手はごめんだ。ジセイ、アンタも大概だしな。俺の招待状はやるよ」

レオナルドが差出した招待状を慈誠が掴んだ時、しゃがれた声があった。

「大の男が揃いに揃って全くだらしないね」

二人が振り向けば中年女性が立っていた。何時現れたのか、まったく気配を感じなかった。その距離は普通自動車3台分だ。尋常では無い、それを悟ったレオナルドは、反射的に離脱を図り、慈誠は手に持つ錫杖を突付けんと踏み込んだ。二人が同時に攻撃していたら、どうなっただろうか。少なくとも意表を突く事は可能であっただろう。二人揃って離脱する事も可能だったかもしれない。だが二人は異なる選択をした。彼女から見れば、迫る慈誠を仕留め、その後レオナルドを仕留めれば良い簡単な順作業となったのである。

彼女の足元に慈誠とレオナルドが横たわっていた。二人には短刀が突き立てられていた。二人を蝕むのは麻痺性の呪詛だ。エーデルフェルトの従者クラウン、戦闘用ホームクルス、ヘルマを襲った物と同じだ。まだ死んではいけない。ここで死なせては折角の贄が無駄になる。腰を曲げ、その腰に両手を添え、二人を見下ろす彼女の仕草は子供を叱り付ける様であった。

「せめて戦闘不能にして欲しかったが、ま、それは酷かね。スミルナ（レオナルド）、ペルガモン（慈誠）がまとめて入手できたのだから良しとするか。あわよくば倒させる、倒せなくばダメージを負わず、私が追撃を掛ける機会が無くとも二人の贄が手に入る……フェイル・セーフか。ご主人様の慎重さには頭が下がるが、失敗を前提とする考え方は少々気に入らないね」

レオナルドは自由の利かない身体に鞭を打ち頭を上げた。睨み付け、吐捨ててもしなくて気が収まらない。

「おい、バーさん。これはどういう事だ」

「おや、流石呪詛の魔術師だ。意外と抵抗力が強いね。これからあんたらをご主人様の下に運び、その後指定した場所に運ぶんだ、温和しくしておくれよ。少ない人生を精々謳歌しな」

「誰だ、お前。呪詛師である俺を蝕む呪詛なんぞ、聞いた事が無い……」



レオナルドの頭にかつて学んだ呪詛師の資料が浮ぶ。その姿の特長は瓜二つだ。彼はごくりと唾を飲んだ。ラ・ヴォワザンは瞳が、ぎよろつく程に笑っていた。

つづく！

## 十一話

「あーっ！ くやしいっ！」

それが凜の最初の言葉であつた。彼女は両手を広げ大の字にベッドの上で顔をしかめていた。そしたら、むくりと起き上がり枕を振り始めた。エアークヤップを雑巾絞りにしている、といえれば分りやすからう。当然凜のそれは癩癩であり、八つ当りである。その彼女を生暖かい目で見るのはグレイとルヴィアであつた。

「はしたないですわよ」

そうは言うルヴィアであつたが彼女も不機嫌さを隠さない。凜は「がーっ」と熱り立つ。威嚇する猫のようだ。

「こんな屈辱初めてだわ！」

先の戦闘を簡単に説明すれば罨を仕掛けようとし、仕掛けられたのである。招待状はレーダーなどではなく誘導体だつた。ルヴィア達はそれを逆手に取ろうとしたが、相手が一枚上手だつたと言うことだ。吐出すモノを吐けば落着いたのか、凜は胡坐をかいた。抱えた大きな枕に顔を埋めれば、ルヴィアとグレイはソファアに腰掛け紅茶を啜っていた。

「ミス・トオサカ。招待状のキルマークが増えましたわ。これで5つ目です」  
「だから何よ」

「いえ、別に」

キャスターの存在を見透かした様なルヴィアの発言に、嫌みを籠めて睨めば、彼女は右手甲に刻んだ呪符に念を籠めた。

（キャスター、真也を襲った二人の魔術師の足取りは追えた？）

（お待ち下さい……死亡しています。場所ですが、退魔師は12時の方向にあるスーパリーの屋上です。糸使いは10時の、マスターがメルクーリ兄妹と遭遇した幽霊屋敷です。退魔師は斬殺、糸使いは餓死の様です）

（それに至るプロセスは分る？）

（あの森でマスターを襲った二人の魔術師は捕われ、その直後に姿をくらしました）

（ラ・ヴォワザンね）

（はい。推測ですが麻痺させた状態で指定の場所に運び、呪詛により殺害したかと思われます）

（やっぱり場所、殺し方に意味があるって事か）

「新情報はありませんか？」

「本当に性格が変わる、」

「リンさん、ルヴィアさん、話を続けてください」

グレイのタイミングは匠の技だ。彼女は凜とルヴィアのコツを掴みつつあったのである。嫌みを返すタイミングを、キャンセルされた凜は、懽然とするのみである。

「ねえ、この殺し方にどんな意味があると思う？」

凜が暫定同居人二人にそう言えば、答えたのはルヴィアであった。

「そうですね。何かに準えている、と見るべきですわね」

「教会、橋、スーパー。建築物自体に意味は無さそうだけれど、色々な場所で魔術師が殺されてる。冬木の聖杯システムを流用したとしても、巨大な霊脈は無いから魔術師たちを生け贄にする事にした」

「殺害した場所に魂を捕らえ、どこかに転送する術式がある、と言う事かしら」  
「たぶんね」

二人の会話を聞いていたグレイは何を思い至ったのか、地図を持ち出した。それはホテル備えつけの、オルレアンの観光地図だった。フードの奥にあるグレイの瞳が鋭く光る。

「これ七教会に似てる気がします。トルコにある七教会は円形配置じゃないですけど、右回りに辿ると聖母マリアの家があったエフェソとシスター・アジアが殺された教会は8時の方向と似てます」

グレイが地図に殺害現場に印を付けければ、それは円形であった。規則性があつたと言  
う事だ。

「どうかしてましたわね。こんな事を見落すなんて」

「7教会……エフェソス、スミルナ、ペルガモン、ティアテイラ、サルデイス、フィラデ  
ルフィア、ラオディキア、これらに掛けていたのか」

七教会とはヨハネ黙示録に登場する7つの教会である。ヨハネはそれらの教会に手  
紙を送つたが、魔術殺害はその手紙の内容に準えていた、と言う訳だ。凜は続けた。

「エフェソスには聖母マリアの家があつた。だからシスター・アーシアは子宮を抉られ  
た」

次はルヴィアである。

「スミルナはローマ帝国に迫害され、貧困に喘いでいた。レオナルド・ルチアーノの家は  
破産していますから、餓死の呪詛で殺された」

「ペルガモン。エフェソ6章17節に聖堂教の彼は……霊の剣、すなわち神の言葉で  
取りなさい」とあるわ。聖堂教の敵なら異教徒。剣だから慈誠は斬殺された」

「ティアテイラ。存在した女性預言者は性的に放蕩だつたと言われています。ですから  
エミリア・フォン・アウフレヒトの死因は性病、梅毒で殺された」

「フィラデルフィア。これはギリシヤ語で兄妹を意味する。メルクーリ兄妹ね」

凜は意地の悪そうな顔でルヴィアを見た。

「栄誉あるラオディキアはルヴィアね。ラオディキアは経済的繁栄があつた、つまりお金持ち。ヨハネ曰く、＼そこで、あなたに勧める。裕福になるように火で精錬された金をわたしから買うがよい」だつてさ」

「つまり私の殺され方は私は焼死、という事かしら」

「外面だけ美しい金張りの鉛の外套に身を包み、ひたすら歩くつてのはどう？」

ダンテ・アリギエーリというイタリアの詩人がいるが、神曲とはその人物が書いた叙事詩である。著者である彼自身が地獄、煉獄、天国を旅するのだが、凜はその地獄篇に書かれる地獄の罰の事を言っていた。彼女は身形は立派だが中身が成っていない、とルヴィアをからかったのである。

「第八圈 悪意者の地獄。第六の囊 偽善者？ 生憎とダンテは嫌いですの。自分の作品に己を登場させ、その作品の中で復讐を成すなど陰湿ですわ」

「魔術師7人を生け贄に地獄の門を開き、堕天使を墮ろす。神に対する侮辱つて事ね。確かに陰湿だわ。サルデイスは？」

「サルデイスは没落した都市（者）だった。没落した、つまり力を持たぬ者と、残つた者という意味がありますわ」

「力を失う、つまり教授は手か足を切り落とされるのね。そしてエルメロイ2世は第4

次聖杯戦争に於いて唯一生き残った一人」

「こじつけ感が拭いきれませんが、宗教解釈はこんなものでしょう。7教会はそもそもトルコ地方です。フランスという時点で無理がありますから。ただ黙示録に準えた程度では十分とは思えませんわね。なによりここが歪みの地ではない事が気に掛かりますわ。オルレアンと言えば聖女ジャンヌダルク。旗を持ち戦場を駆けた地ですけれど歪みとしては弱いですもの」

「すつきりしないわね」

それは二人の話を聞いていたグレイが「確証は無いんですけど、あの人たちの動き方に二つの意思がある気がします」と言えば凜は「ラ・ヴォワザンの他に誰か居るって事？ そんなの決ってるじゃ無い。連中は組織なんだから」と突っ込んだ。そしたらグレイは少しムキに成り「いえ、ラ・ヴォワザンって昔の魔女です。ならその退魔師と呪使いを普通に呼出し襲うと思うんです」と反論した。応じたのはルヴィアである。

「敢えて罫を仕掛け、シンヤを狙ったのは個人的な判断であり、ラ・ヴォワザンと同等、もしくは目上の存在がいると言う事かしら。クロムウエルの関係者とは断定できませんが、ラ・ヴォワザンと異なる方針を持つ人物が居る、そう考えるべきですわね」

凜ははつとした表情だ。

「ちよつと待った人数が合わない。グレイと占星術師の妹タリーア・メルクーリを除外

して……ルヴィア、教授、占星術師クレトス・メルクーリ、シスター・アーシア、鍊金術師エミリーア・フォン・アウフレヒト、退魔師慈誠、呪詛師レオナルド・ルチアーノ。これで7人だけれど8人目が居る。その8人目が、クロムウエルの関係者？」

「なるほど。暗躍するには持つて来いの役職ですわね」

「陰湿な性格だわ。賭けてもいい」

グレイはほつりと呟いた。

「聖杯に解決方法を聞ければ楽ですけど」

一拍。凜とルヴィアは笑いあつた。

「拙は何かおかしな事を言つたんですか？」

グレイは慥然とした表情だ。

「いえ、発想が素晴らしいと。なかなか考え付く事ではありませんわよ」

ルヴィアは年相応の表情で笑い、凜が目尻に浮んだ涙を拭えばこう言った。

「ルヴィアは招待状を捨てておきなさいよ。それを持つているとこちらの動きが筒抜け、今後は教授の招待状で一本化するんだから」

言われずとも、と招待状を取出せばルヴィアはそれをじつと見ていた。

「どうしたのよ」

「いえ。随分な騒動に成つたものだ」と



ルヴィアの放出した方向性のある魔力を受けたそれは炭化し塵と成った。  
(凜様、マスターが目を覚ましました)



凜の義弟が小聖杯であった桜の魔力供給を受けていたときの事。彼はセイバーを上回る再生力を有していたが、今ではその恩恵もなく数ランク落ちている。欠損の再生は部位によるが、怪我程度であれば騒ぐ必要は無い。ただ部分的であったが火傷は3度まで至っていたので、また痛みはあった。3度の火傷とは炭化を意味する。

凜がホテルの屋上に至ると、その義弟は包帯まみれで寝っ転がっていた。彼は左腕を以て腕枕とし、右手を空に向けていた。浮かぶ星を掴もうと藻掻いていた。掴もうとしているものは、なんなのか。彼女の持った印象は呆れである。掴もうとし

「何よそれ、思春期みたいじゃない」

「(トト)はよく星が見える」

彼女も見上げれば、確かに星が瞬いていた。

「冬木は曇空が多かったな」

「日本海だから」

星がよく見える冬は雲が多いのである。彼女は義弟の横にぺたりと座った。彼は姉を一瞥する事もなく、空を見たまま呟いた。

「快活、奔放、神経質、温和。憐れみ、慈愛、貞潔、善行、謙虚、知恵。星の一つ一つが人のパーソナリティとすると、それがより集まって形づくる星座つてのは人そのものだな。俺にはどんな星があつて、姉さんにはどんな星があるのか。重なつて星はあるかな」

「なにそれ。口説いてるの?」

指摘され気がついた。彼は苦笑するより他はない。

「はは、姉に言う言葉にしてはクサ過ぎるか」

「どつちよ」

「言える訳ないだろ。そういう関係じゃないんだから」

「ならどういふ関係よ」

「姉弟」

「確かにそうね。戸籍上そうなつて。ねえ、どうして『そんな訳ない』じゃなくて、『言える訳ない』な訳?」

「そういう話はもうしない、そう取り決めたろ。俺らが姉弟なる前の夜に、俺ら3人がきょうだいになるからって、最後だから、けじめだからってわざわざあんな事までした

んだ。そう切り出したのは姉さんだぞ」

「真也がそう言う態度だからじゃない」

「言つたら。俺の事は気にしなくて良い。良い奴を見つけてくれ」

「この際だから言つておく。3年間ちゆうぶらりんにされて、分つただけど結構つらいのよ。真也はこれからどうしたいのか。私たちどうなりたいのか、それを教えて。10年後も曖昧な関係は御免被り」

真也が顔を動かせば義姉と目が合った。3年前の彼女は17歳だった。あの時の義姉は大人では無かったが子供でも無かった。だがその面持ちと雰囲気は大人の領分に入りつつある。彼女の浅葱色の瞳は安心が欲しいと言っていた。具体的な行動で記述を示すなら、凜、桜、綾子、3人の誰かを選べ、そう言っていた。彼は起上るとあぐらを組んだ。向き合った。

「ごめん。俺はこたえを持たない」

「真也が居ない2年間で、衛宮君が結婚して、セイバーが赤ちゃんを産んで家族になって、時間は動いている事を知った。私たちは3年前のあの時から止まったまま。この意味は分るわよね？ 真也に3人は縛られて、真也も3人に縛られてる。でも互いが互いにほっぴり出す事が出来ない。」

真也がルヴィアゼリツタ・エーデルフェルトと共にあるならそれはそれで良い。あの

娘はまだその気だし、私たちも安心出来るし、真也がお嬢様の下に行ってくれば、私たちは歩き始める事が出来る。真也、アンタが居ると私たちは何時までも宙ぶらりんのよ」

「二つ確認したい。姉さんは俺のせいで立ち止まってるんだな？」

「そう」

真也は俯いた。凜の弟であり桜の兄である、その答は3年前に出していた。だが現状に甘えていなかったと言えれば嘘になる。彼女らに特定の誰かが出来れば、家に帰ったところで彼は一人だ。どれ程時間が過ぎたのか。測ればものの数分だろう。だが二人には数時間にも、数日にも思えた。真也は口を開いた。ただ見上げる事は出来なかった。

「わかった。その案を受け入れる。俺は姉さんの弟だ。それ以上でもそれ以下でも無い」

「それ、エーデルフェルトに行くって事で理解して良いのよね？」

「そうだ。ただし条件がある。姉さんはもう日本に帰れ」

「その意図は？」

「姉さんの実力、戦力は認める。だが姉さんは遠坂の当主だ。何かあれば本末転倒、姉さんを気に掛けながら戦うなんて出来ない」

「二つだけ聞かせて。真也にとって私ってなんだった？」

「だから姉」

「遠坂に入る前のことよ」

「3年前のあの前後で俺は繋がってない。遠坂に入る前の姉さんは俺の昔だ」

凜は立上があった。

「分った。明日の朝に発つから」

「見送りはしない」

「要らないわよ」

「キャストはもう少し借りる」

「アンタが連れて行ったら？」

「馬鹿だな。葛木先生の墓は何所にあると思う。それは酷だろ」

「そうね。それじゃ、しっかりやりなさい」

「元気でな」

凜はリボンを解き、ストレートにすると其の場を後にした。彼女を見送ると彼は甲にある符陣に念を籠めた。

「聞いての通りだ、キャスト。こうなつた」

『本気ですか。今なら止められます』

「あれから2年経つた。俺さ、実は3人に恋人が出来るかもって思っていた。そうでな

くとも一人ぐらい。でもそんな事は無くて、3人は俺を待っていた。ところが俺は全員に義理がある。3人への答えを持たない。この関係はあの家に帰っても変わらない、いたずらに彼女たちの時間を無駄に出来ない。台無しにしたくない。なにより俺が遠坂家断絶の原因なんて、目も当てられない。かといって3人ともなんてムリだし、俺が旅先で女を作った、この事実が彼女たちを一步踏み出せる切っ掛けになるなら、願ったり叶ったりだ。なら、そうするより他ないだろ」

『では本当にルヴィアゼリツタ・エーデルフェルトの元へ？』

「トリスメギストス様に義理があるから、それはない。この一件が終わり次第、家には戻らずそのまま旅を続ける」

『一つお聞かせ下さい。義理では無くマスターの本心は？』

「それは言えない、口にしてはダメだ」

『今この場にライダーが居ない事を心底悔やみます』

「確かにそうだ。彼女が居れば拳骨落としてでも連れて帰るだろう。でも俺にとっては僥倖だ」

『結局こう成りましたわね。あの時、あの学舎の屋上で、葵様に叱られなければこうなっていたでしょう』

「馬鹿を言うな。同じ時間を生きている、それだけで十分だ」

真也は力無く仰向けになった。降注ぐ星の光は太古の光だ。必然思い出すのも過去である。それは義理の妹の声だった。

“兄さんって姉さんの事好きでしょ”

それは冬木市の聖杯戦争が終結し暫く立った頃のこと。入浴を済ませた彼は、前の家の癖でその髪は滴っていた。適当に拭ったのみである。目聡く見付けたのは彼の妹だ。仕方が無いと言いつつ、自室に連込むと彼女は兄の髪を拭った。10年間そうであったように、彼女は兄の面倒を率先して焼いた。それは遠坂に来ても変わらなかった。髪をもみくちやにされる彼の声は、妹の力加減に応じて揺れていた。喉を軽く叩きながら話す、その抑揚に似ていた。

“勿論”

“私は?”

“勿論好きさ”

“私と姉さんどっちが大事?”

“両方”

“それずい”

“姉と妹、どちらが大事ななんて聞いちゃいけません”

“私は姉さんが嫌い”

“なんで”

“私たちだけだったのに割込んできたから”

“そう言う見方もあるか”

“そう言う見方しかないの”

義理の妹の拭い方は荒つぽくもあり丁寧でもあった。10年染付いているならばそれは当たり前となる。だが当たり前が何時迄も続くものでもない。

“なあ桜。俺らは間違えた。間違えて取り返しの付かない事をした。失ったモノは戻ってこない。でもそんな中、ほんの一握り残った事がある。この家があつて、葵さんが居て、姉さんが居て、俺が居る。またやり直そう。それは都合が良すぎるか？ 許せないか？ あ、ライダーとキヤスターもか”

“ねえ、兄さん。私たちが離れたらどっちに付く？”

“その質問には、どちらも選ばないという回答をせざるを得ない。二人が嫁いだのを見届けたら二人から離れる。どこかで見守るよ”

“なら私が兄さんの側にずっと居るって言ったら、兄さんはどうする？”

その回答は一度していた。真也にとつてはキヤスター戦一回目の後、士郎ら他の者にとつては二回目の後。凜に別れを告げた後でもあり、怒りを買った前でもある。その時、その妹は兄の世話を死ぬまで続けると告げた。彼は拒否をした。その後の展開は忘



れようがない。彼の妹に聖杯の呪いは最早ない。同じ問いでも状況が違う。同じように答えても良かった。だが同じ回答は出来なかった。

“……桜がそれを望むなら”

彼女は黙って拭いていた。彼はなすがままだ。俯いていた妹は、ベッドの上で腰掛け、本を読む姉にこう聞いた。

“姉さんはどうするの？”

“決まってるでしょ。この馬鹿な弟は私が責任を持つて幸せにするから”

それは彼の3年前の記憶だ。あの時はずっと続くとそう思っていた。だが永遠なんてものは無い。

「仕方が無いか、仕方が無い。ま、しようがないよな。他に方法は無い」

真也は両手を星空に向けた。何かを掴もうとする手は宙を切った。

「一番欲しい物は手に入らない、か。サーヴァントの力がこれ程無力とは思わなかった。お袋ももう少し気を利かせてくれれば良いのに。力なんて要らないから、あの時普通の心が欲しかった。いや、普通じゃ駄目か。彼女の横に立てない。ならこの結末は必然だ」

星々は何も語らなかった。ただ瞬くのみである。星座は何も応えない。どれ程問いかけても何も応えはしない。

「なら死人と何が違う。一見綺麗に見える分だけ質が悪い」

星空に向けたその手は何も掴めなかった。物思いに耽る真也は、その人影に気がつか  
なかつた。カールを巻いた金色の髪が流れていた。



何時になく真剣な様相だ、それがルヴィアを見たエルメロイの率直な感想だった。席  
を外すよう 그레이 に命じ、ルヴィアをソファアーに誘えば、

「チューター。あの二人の関係をご存じかしら」

彼女は座りきる前にそう聞いた。彼はウイスキーグラスを口にするところ言い捨て  
た。

「語ることは禁じられている」

「私が調査することは構いませんわね？」

「確かにそうだ。では調査すれば分る範囲を答えよう。あの二人は義姉弟だ」

「偽りの姉弟、ですの？」

「その表現は少し的を外している。トオサカシンヤはもともとアオツキシシンヤだった。  
彼の母アオツキチトセは13年前に一人の子供を引き取った。彼女をサクラと言い、養

子に出されたトオサカの次女だ」

「異なる魔道の家だった、と？」

「そうだ」

「では第5時聖杯戦争時。トオサカリンとアオツキサクラ、シンヤは別陣営として参加し、戦ったという事かしら」

「それに関しては答えられない。役所で調べられる事ではないからな。そして聖杯戦争は終結、アオツキはトオサカに取り込まれた。何があつたかは魔術協会側も把握していない」

ルヴィアは唇を触り、思案に暮れること約6秒。深いため息を付けば、強い脱力感に襲われた。

「成る程、納得ですわ」

「それがどうかしたか」

「いえ。何でもありません」

「レディ・エーデルフェルト、詳細を話してくれないか。あの姉弟に何かあつたのだろうか？」

「ええ。ミス・トオサカは帰国するそうです。シンヤは帰らないそうですわ」

エルメロイは能面だったが、面倒くささの雰囲気放っていた。しゅしゅと重い腰を

上げた。

「仲裁は私の務めだ。彼との約束がある。君は手を引いてくれ」

ルヴィアはエルメロイを制止すると立上がり、背を向けた。

「部外者はすつこんでいてくださいな。幾らロードでも手を出しては馬に蹴られましてよ」

「何をするつもりだ」

「棚ぼたは趣味ではありませんの」

翌日は不愉快な程に清々しい朝であった。その街のバスターミナルに立つのは、凜、グレイ、そしてルヴィアである。見送りと言う事だ。凜は旅行鞆のハンドルを握ると、二人にこう告げた。

「ここまでで良いわ」

「ミス・トオサカ。私の2連勝です。次も頂きますわよ」

「馬鹿ね、ここから逆転よ。観客も盛上るつてもんだから」

「人々の心に残る戦いというのは、かくあるべきだと思わなくて？」

「そうね。プロレスも満更じゃない、そう思うわよ」

バスが到着し扉が開いた。人々が列を成し乗込んでいく。それにはシャルル・ド・ゴール国際空港行きと表示されていた。凜はルヴィアに向かうと努めて笑った。

「弟の事を任せた。あんな面倒な奴だけども根はまじめだから」

彼女の神妙さに対し、ルヴィアのその口調にからかいたが、あった。

「そうですね。敵に塩を送られた感が強く、あまり気分は良くありませんが。ですが、まあ。シンヤが本当にエーデルフェルトに来ると言うなら、受入れます」

「なにその言い回し。真也に好意は無いの？」

「ありますわよ。主従関係的な意味ですけれど」

「なによそれ」

「欲しい物は己の手で掴み取る質ですの。与えられたモノに然程興味は持ちませんわ。なにより私は拒絶された、それをお忘れかしら。その事実を無かつた事にする程、都合の良い女ではありませんわ。でもまあ、落し所としては妥当な線ではなくて？ サーヴァント級の身体能力に直死の魔眼。エーデルフェルトの従者長であるクラウンに匹敵する、或いは上回る従者になるでしょう。なにより見習い従者のアレックスも喜ぶでしょうし」

「ちよつと。召使いにするって事？ そんなんなら、」

「理解していませんので明覚に言いますが。シンヤがトオサカに帰れば皆が不幸。でもエーデルフェルトに来れば皆が歩き出せる。もつとも損のない選択ですわ。ただシンヤが私の何分の一になるだけ。」

トオサカリン。貴女は自分の幸せが欲しかった、誰かの何分の一は嫌だった。その感情とその考えは間違っていますわ。私でもそう判断するでしょう。であるならば、これ以上の問答に意味はありません。早くお行きなさい。お望み通り私は私なりの方法でシンヤを幸せにしますから。乗客の皆様を待たせるものではありませんわ」

非難めいた運転手の視線を浴びながら凜はバスに乗り込んだ。ルヴィアはステップを踏み凜の脚に、僅かな躊躇いがあった事を見逃さなかった。バスはエンジンを震わせれば、そのまま小さくなった。見送り続けるのはグレイである

「これで良かったんでしょうか。言い過ぎだと思えますけれど」

「後は彼女次第ですわね。まったく、この私が選りにも選ってトオサカリンの背を押すなど」

「……え？」

「申上げた事は無かったかしら。価値あるモノとは奪い取るからこそ意味を持つ。私は与えられたモノに満足などしませんわ」

「発破だったんですか？ アレがですか？ もう少し言い方と言うか、なんとと言うか」

「これでトオサカリンと条件は同じ、仕切り直しと言うこと。このまま終りにするなど許すものですか」



接収されたクロムウエルの屋敷は魔術協会に篡奪され尽された。魔術的な意味で無害化されたあと、競売に掛けられホテルとなったのである。だがそれはキャスターにとつては好都合だ。客を装えば堂々と侵入できるからだ。タクシーを降りた彼女の目の前に、白い三階建ての建物があった。白いと言ってもライト・グレイが適当だろうか。いずれにせよ、豪華で洒落たホテルだ。薄暗いイギリスよりは太陽溢れる地中海が相応しい建築物である。

キャスターがカウンターに向かえば40代であろうフロント・クラークが出迎えた。彼はキャスターの容貌に我を忘れたが、生憎とホテルマン人生を送った猛者だ。直ぐさま職務を思い出せばその笑顔は紳士的である。

「ようこそ、ホテル・レンブラントへ。御客様のお名前をお伺いしても宜しいですかな？」

「予約はしていませんわ」

「これは困りましたな。当ホテルは予約制でして、」

「御気遣いなく。用を済ませればフランスにトンボ返りですから」

「用件、ですかな？」

「ええ。この館の前の持主であつたりチャード・クロムウエルの書齋はどちらかしら？」

キヤスターは微笑みながら、そのフロント・クラークに暗示を掛けた。クロムウエルの書齋はスイート・ルームであつた。広い空間、豪勢な調度品、見晴らしの良いバルコニー。多少心惹かれたが生憎と御役目があつた。キヤスターは右手を10時から4時の方向に流すとロープを躓した。その目深に被つたフードは桔梗色、3年ぶりの正装である。続けて取出したのは杖だ。その先端には月を象つた細工があつた。彼女のマスター曰く、駐車禁止の道路標識、もしくは特大ペロペロキャンデーである。彼女の脳裏にその時の状況が再生された。多少の憤りを感じつつ、彼女は杖をカーペット越しの石床に突き立てた。

万物すべからく靈的な意味を持つが石はその代表でもある。石は土から生まれゆつくりと成長し、時間に抗い永く存在する。その概念は永い成長と存在。その石に死を持たせたのは人だ。太古、人が初めて手にした武器は石である。石は人の墓標となつた。生物と石は相転移の関係だ。だからこそメドゥーサの魔眼は人を石に変えられるが、人はそれを死と呼んだ。人は石に死という概念を有史以来与えてきた。何時の頃からか石は、死と言うモノに率先的に関わるようになった。つまり石は人の死に近い。キヤスターが杖から手を離し、ボールを抱えるように手を広げれば、杖は自立した。彼女が唱える言葉は石言葉。



石たちよ教えておくれ

ヒトの死について謳っておくれ

その様について語っておくれ

棒に叩かれたのか

火に焙られたのか

毒を盛られたのか

刃を突き立てられたのか

時に押潰されたのか

それとも

お前たち（石）が打ったのか

この地で眠りに就いたのは何処の誰？

私はメデイア

太陽神ヘーリオスに連なる者

石たちが語る言葉は、捨てられつつも父を求めた子であった。第2次世界大戦末期。

一回目の墮天使召喚の儀式を失敗し、聖堂教会の代行者に追われたリチャード・クロム  
ウエルは妾の子であった。ジョセフを呼び寄せた。

彼はリチャードがフランス人メイドとの間に儲けた子供である。当時の彼は15歳、

髪は茶色がかった黒で、肌は赤みを帯び、両の瞳は碧かった。眼、鼻、口、各部位は整っていたが、全体としてバランスが取れていなかった。美形では無かったが醜悪でもなかった。取立てて特徴の無い顔立ちだった。体力健康は並だ。

彼は魔術回路を持っていたが、生成量は少なく基礎術を扱うのが精一杯だ。リチャードにとって、エドワードに大きく劣るジョセフは執着するに値しなかった。ただどこから聞付けたのかジョセフは手紙をリチャードに送り続けた。目を通したのは最初の一通目のみだ。毎年一回、復活祭の時に送られてきたがりチャードは無視をした。内容など分っている。父を慕い、請う文面だ。

最初は自己紹介だった。母親とフランスで暮らしていると彼は書いた。町の事、学校の事、友人の事、彼は自分の事を書き続けた。知って貰いたいという願望である。そして会いたいと書き続けた。そして時は経ち、彼が14歳の頃である。彼の母が心労で倒れ、それを契機にジョセフは手紙を書くのを止めた。

身を寄せた祖父母には父を嫌悪していると答えたが、その実報われぬ想いを持ち続ける事が辛くなったのだ。何より。待ち焦がれた父からの手紙が、断絶の言葉であったならば悲しみ所の話ではない。ならばいっそのまま忘れよう、彼はそう思ったのである。

それから一年後。リチャードから一通の手紙が届けられた。彼は眼を疑った。開封

を恐れもしたし、期待に胸も膨らませた。それには面会に応じる文言があった。彼は歓喜の声を上げ、舞い踊った。

ジョセフが渴望した父は中年期を迎えていたが、背が高く強靱な肉体を持っていた。髪は黒く、混じり気の無い程にまつすぐだ。眼光鋭く、全ては威圧する物と言わんばかりである。ジョセフが望んだ最初の父の言葉は、彼自身に關してではなかった。それどころかエドワードの事のみであった。リチャードは牙をジョセフに渡すと、嫡男であったエドワードを復活させること、エドワードに尽し家を再興させる事を命じた。牙を握り締め見上げる父は軍隊の教官そのものである。

「お父様。お願いがございます。我が子と呼んで頂けないでしょうか。成し遂げた暁には、クロムウエルを名乗っても構わないでしょうか」

「つけあがるな。お前如きがこの家名を名乗れるとも思ったか。所詮、端女の血を引く2流の出来損ないよ。クロムウエル再興の礎となれるだけ光栄だと思え」

代行者に追われているリチャードはジョセフを追い払うとそのまま自害した。己を囮にした訳だが、それはジョセフの為ではない。ジョセフの存在が聖堂教会に知られるとエドワード復活の道が閉ざされる、ただそれだけだ。

父の軀は異母兄弟であるエドワードとジョセフの違いを見せ付ける権化でもあった。その父はエドワードの為だけにあった、と言う意味だ。父に見放されたジョセフは、頼

を涙で濡らしながらその牙を己の心臓に突き立てた。身体に喰い進むそれは彼を作り替えた。

髪は白銀に、瞳の色はちぐはぐに。その容貌は少女のようだ。事実、男でも無くなった。その牙と縁のある「イザヤ書」の第56章には「あなたがた女魔法使いの子よ」と記されているが、これは巫女を示唆している。つまり依り代は女でなくてはならないのだ。

その瞬間にジョセフという存在は消え、彼はジョナサン・スコットとなった。彼はヒトですら無くなった。半世紀に及ぶ長い旅の始まりである。牙の影響を受けた彼は、何時しか父と墮天使の区別が付かなくなった。その親子を見ていたキャスターは嘆息のみだ。

「そういうこと。本当に血の繋がりとというのは厄介なもの。親離れできていない子は分つていても親に背けない。マスターに伝えるのは気が引けるわね。ジョナサン・スコットに入れ込まなければ良いのだけれど……いえ、入れ込むに決まっているわね」

彼女は沈痛な面持ちでフランスに居る主を呼び出した。

「マスター」



ルヴィアと共に召喚魔法陣の調査に赴いた真也は、エルメロイにその報告をした。ソファアーに腰掛け、エルメロイが噴かす煙草の煙には、苛立ちもあつたが、首謀者の用心深さに感嘆すらしていた。

「そうか。召喚術式は欺瞞と言う事か」

「はい。この町の中心、つまり各参加者たちが殺された場所の中心には何もありませんでした。魔法陣の中心は重要な意味を持つ。力の集まる場所に何も無いとはあり得ません」

「チューター、私たちは前提を間違えていますわね。敵の術中に嵌まっていた、と言う訳ですわ。忌ま忌ましい」

「こうなると敵の出方を待つしか無いな」

「消極的なのは好みません」

「レディ・エーデルフェルト。君は好戦的すぎるが確かに先手は打ちたいところだ」  
真也はローテール越しのエルメロイにこう言った。

「教授。情報があります」

「何時もの誰かからの情報だな」

真也は苦笑いするより他はない。

「あの牙には二つの使い方があったんです。一つは召喚媒体、もう一つは任意の誰かを依り代にする予備媒体。どこかの誰かは儀式に見せかけ、魂を抜き喰らっていた。7人の魔術師はその贄だったんですよ。つまり彼自身が墮天使となる」

「勿体振るな。彼と言っている以上、目星を付けているのだろう」

「首謀者はリチャード・クロムウエルの子、ジョセフ・アッカーソン。この儀式の8人目にして、俺らの知るジョナサン・スコットです。偽名だったと言う訳です」

「腑に落ちんな。ジョナサンが依り代となるのはいい。だがアインツベルンの術式を使わないのであれば令呪に相当するもの、つまり制御方法がない。墮天使を復活させればそれどころではあるまい」

「はい。それどころではありません」

「墮天使の正体を掴んだのか」

「彼らが召喚しようとしている墮天使はモレクです。アンモン人の神ではなく、聖堂教のモレクです」

「不味いな」

「マズイです」

エルメロイは平静を装っていたがその声はいつも以上に固かった。ルヴィアも言葉を失っている。ベッドの端に腰掛けているグレイが問うた。

「師匠。アンモン人と聖堂教でそのモレクはどう異なるんですか？」

「アンモン人のモレクは、生け贄と引換えに豊作や利益を守る神だ。聖堂教はそれを墮天使に墮とした。旧約聖書のレビ記18章21節に『自分の子を一人たりとも火の中を通してモレク神にささげ、あなたの神の名を汚してはならない。わたしは主である』とある。この時モレクは悪魔となった。問題はここからだ。ミルトンの失樂園には『彼こそは、天において戦った天使のうち最も強く、最も獰猛な者であつた』とある。この天使とは4大天使のガブリエルだ」

天使には九つの階級があるが、ガブリエルとはその最上位『熾天使』に属する天使である。最も神に近いとされ、他にミカエル、ラファエル、ウリエルが存在する。つまり天使の中でもつとも強い。

「……ガブリエルと匹敵する墮天使と言うことですか？」

継いだのは真也だ。

「ミルトンはイギリスの詩人で失樂園とは彼の著作。樂園を追放された墮天使たちが主神ヤハウェに対し蜂起する叙事詩だ。モレクは天使たちと戦った墮天使の石柱で、この時に初めてガブリエルに匹敵するとされた。この失樂園は17世紀に書かれて、信仰期間が浅く本来であれば無視をしても良いのだけれど、聖堂教の悪魔（墮天使）を支える信者は世界に20億居ると言われる。正直無視できない」

「トオサカさんは信者が悪魔を信仰するって言うてるんですか？」

「逆説的になるんだけど、神の強い善を信じるには、それに相応する悪が必要なんだ。散らかっている部屋が存在するからこそ、整理整頓された部屋が栄える事と同じ。彼らの信仰力を受け、受肉したモレクがどの程度の脅威なのかは想像できない」

「言いたい事は分るが、もう少しまともな例えは無いのか」

「シンヤの部屋は散らかっていますのね」

「少しだけだよ」

「ところでトオサカシンヤ。予想は付くが何故シスター・シエルがいる」

「偶然鉢合わせた、そう言ったら信じて貰えますか？」

シエルがホテルを捜し当て、待ち伏せしていただけである。壁の華となっていた彼女は一步踏み出すと満面の笑み。

「そう警戒しないでくださいロード・エルメロイ2世。別に取って食べたりはしませんから」

「私としては大砲を突きつけられている気分だ」

「このメンバーの中なら、真也君は私よりロードが優先ですから不安がる必要はありません」

「用件をお伺いしようか。シスター・シエル」



「取引の契約に来ました。槍を渡してください。その代わり私という戦力をお貸しします」

「共闘、と言う事か」

エルメロイは異を唱えない若輩たちの同意を確認するところ言った。

「条件をそれに一つ付加えたい。この件で起こった事は全て貴女の内に仕舞って頂きたい。レディとトオサカシンヤに関しては特にだ」

「分りました」

「随分と物わかりが良いが、それは何故だ」

「カードが無いと言う事です。まったくロードの教え子さんたちは優秀ですね。情報を引換えに有利な条件をと思っていたのですが自力で、そこまで辿り付かれては台無しです」

「我々が知らない情報をお持ちなら頂きたいが」

「私が話せる情報はおまけです。大戦末期に彼らの企みを察知し私たちは武力介入をしました。魔術師が戦争で死んだというのは、もちろん欺瞞です。埋葬機関（私たち）が殺しました。ラ・ヴォワークを壊滅させたのもそう。ラ・ヴォワザンとエリザーベト・パトリ、2体の死徒を取り逃がしたのは失策でした。片手落ち、と言う意味です。ジョセフ・アッカーソンを見落したのは彼が非嫡出子であったからです。槍も追ったのですが

見失いました。ドイツ国防軍は優秀だったと言う事ですよ」

真也の口調には慰労と呆れがあった。

「シエルさんたちは半世紀以上も槍を探していた、と言う訳ですか」

「そしてナチス経由で槍を渡したのも私たちです」

「……は？」

「ヴァチカンも一枚岩では無いと言う事です。急進派が居て、墮天使を墮ろし、使役し、神の威光を知らしめようとした」

エルメロイが「悪無くして善は無い、か」人間の業に達観していると、真也は「人間は比較しないと評価が出来ませんからね」と身も蓋もない事を言う。そしてグレイを見た。

「教授。こちらの戦力を確認させてください。前から気になっていたんですがグレイさんはどういう人なんですか？ 見たところかなり凄そうなんです」

「例えばラ・ヴォワザンに匹敵するほど、かしら」

ルヴィアと真也の進言にエルメロイはグレイの名を呼んだ。彼女がフードを降ろせば、真也は目を剥いた。瞳、髪の色こそ異なるが土郎の妻そっくりだ。真也の反応を見たエルメロイは、そうなのだと確信した。

「彼女は先祖返りのサーヴァント級の能力を有している」

「宝具を持つているんですか？」

「聖槍ロンゴミアドだ」

「アーサー王が持つていたって、アレですか」

「ただし発動させるには膨大な魔力が必要となる。期待はしない方がよい」

「次から次へと卒倒しそうな事ばかりです」

シエルはそうぼやくと踵を返した。エルメロイが言う。

「可能なら現時点を以て、行動を共にして頂きたいのだが」

「相応な荒事になりそうなので装備を手配しておきました。それを取りに行きます」

真也も言った。

「シエルさん。シスター・アーシアの事なんだけど」

「真也君が気にする必要はありません。神威（しんい）の代行に喜びを感じつつも、天に

召される事を望んでいた、彼女はそういう人でしたから」

シエルを見送った真也は紙袋を取り出した。

「装備で思い出しました。教授にこれを渡しておきます」

真也がテーブルに置いたのは、小型の回転式拳銃とその弾が収まった小箱である。

「S&W M36 38口径 チーフスです」

グレイは呆けていた。ルヴィアは目頭を押さえていた。エルメロイは何時ものよう

に真顔だったが、呆れの気配は隠す事はない。

「何故拳銃を持つている」

「旅の途中にテロリストに拉致られた事があって、脱出するどきくさでガメました。今これが最も必要なのは教授です」

エルメロイが手にと取れば、空のシリンドーがスライドされた。再びパチリと収め、空のシリンドーを回転させる。咎め口調であったが、まんざらでも無かった。

「撃った事など無いが、持っているだけで効果はあるか」

「一発撃っておくだけでだいぶ違いますから、人よけ、音を遮断する結界などを使って練習をしてください。セーフティを解除して引き金を引けば弾は出ます。刑事映画みたいに片手打ちなんてダメですよ」

「一言多い。私とてダーティ・ハリーに憧れた事はある」

「古いですね。せめてマーティン・リッグスに」

「それも古い。そもそも君の場合ジョン・マクレーンが適当だな。運という意味だ」

「それ言い過ぎです」

会話について行けないルヴィアが「どなたかしら」と問えば、真也は「刑事物映画の主人公」と答えた。彼女が「シンヤはともかく、チューターにもそう言う一面があるとは」と呆れを隠さずに言えば、真也は「男の根本は幾つになっても大して変わらない」と

何故か自慢げだ。エルメロイは同類扱いされたくない。「事実ではあるが、トオサカ弟に言われると複雑な心境だ」とぼやいた。彼がTVゲームに興ずるなど極秘事項だ。

「トオサカシンヤ、ちょうど良い機会だから聞いておこう。君は何故ここまで付合う」

「感傷です。俺はかつて妹の為だけに存在しました。駄目だと分つていつつも抗えなかつた。抗う事すら考えなかつた。俺は妹の為、彼は親父さんの為、スコットさんはかつての俺と同じです。それに俺も父親を知りませんから。もし俺の父親が目の前に現れて、スコットさんと同じ事を言われたら牙を拒めるか自信がありません」

「そうか」

「狙いはでかく困難に、ランサーもそう言います。俺からも教授に聞きたい事があります。何故スコットさんを弟子にしたんですか？ 以前ルヴィアから聞いたのですが、スコット家の情報は殆ど無いとか。それでも調べなかつた訳ではないのでしょうか？」

エルメロイは葉巻を噴いた。過去を吐き出すようだ。

「初めて会つた時のジョナサンの眼はギラ付いていた。己の不甲斐なさに憤り、世の中の何かに憤り、それでもひっくり返してやろうと、そういう眼をしていた。それはかつての私と同じだ。同情はしなかつたが、チャンスは与えたいとそう思った」

「ギラつくですか。とてもそうは見えませんか」

「ジョナサンは日に日に穏やかになっていったからな」

「以前、教授が親父さんに似ていると聞いた事があります。教授の傍に居る事が彼の求めていた事なんでしょう」

「そうだろうな。だからこそ私は動けなかった。ジョナサンの父になど成れはしない。私を責めるか」

「まさか。俺にその権利はありませんし、こうなる結果が分つていれば、きちんと考えて居たのでしょうか？　ただ気になります。スコットさんの目的は腹違いの兄、エドワード・クロムウエルの復活です。本当にそうなんでしょうか」

「本人に聞きた出すより他あるまい」

「はい。彼を止めないと」

つづく！

## 十二話

その日はお開きと相成った。単独行動は禁じられ、最低でも二人で行動する事を義務付けられた。ツーマンセルと言う訳だ。死徒ラ・ヴォワザンはアサシンに匹敵する気配遮断を有し、真也ですら察知するのは難しい、ならばその部屋割は必然とも言えよう。つまり休息もツーマンセルである。ソファーに腰掛ける彼の目には、ベッドの上に旅行鞆を広げる元主の姿が写っていた。彼女が衣類を取り出せば、カールを巻いたこんじきの髪がさらりと揺れた。困惑気味の真也に対し、ルヴィアは涼しい顔だった。

「二つ聞きたい。何故俺はこの部屋になった」

「私の警護が必要でしょうに」

「 그레이 さんで良いだろ。男同士、女同士」

「無粋ですわね。ミス・ 그레이 の意中とする殿方が誰だったか、忘れたのかしら」

「それはそうだけれど、状況を考えるならここは堪えどころだろ」

「明日が無いかも知れない、この状況を知った上でその発言は随分と冷酷ではなくて？」

「ルヴィアに異論は無いのか」

「仕方ありませんわ。幾ら私でもラ・ヴォワザンは厳しいですもの。そもそも一人には

限界がある、そう言ったのはどなただったかしら」

ぐうの音も出なかった。彼はすつくと立ち上がった。

「分った。俺は廊下で良い」

「他の御客様に迷惑ですわよ」

「お姫様は城の中、ナイトは城壁で門番」

「騎士という柄ではありませんわね。シンヤはどちらかというと衛兵よ」

「放つて置いてくれ。格好良くないって自覚はあるんだ」

「念の為言っておきますが、ペランダからラ・ヴォワザンが侵入した場合、廊下に居ては一步遅れますわ」

「なら4人同室」

「チューターに寝顔を見られるのは不愉快です」

「俺はいいのか」

「もう見ているでしょうに」

トリスメギストスと喧嘩した次の朝の事である。看病していた彼女はソファアで寝てしまったのだが、真也が先に目が覚めたのであった。彼は渋々ソファアに腰掛けた。ただ同室、それだけだ。何時ものようにソファアに腰掛けて、夢と現の間を彷徨うのみである。彼は霊刀を展開すると繯る様に掴んだ。義姉と別れ凹んでいるその直後に、選



りにも選つてルヴィアと同室だ。悪魔の悪戯なら質が悪すぎる。// 当たらなければどうという事はない”と己に命じ続けた。

「入浴しますので、覗かないように」

真也の心中何処吹く風、ルヴィアは平然としたものだった。

「どうという事は無い」

「なんですの？」

「なんでもない」

当たらなければどうという事はない

当たらなければどうという事はない

当たらなければどうという事はない

延々繰返せば、目の前に湯上り姿のルヴィアが立っていた。白いネグリジエの上に、ナイトガウンを着ていた。見慣れた髪にカールは無く、緩やかなウェーブを打っていた。それが湿り気を帯びれば、何時もとは違った艶やかさがあつた。迂闊にも見惚れたが、言うべき事は言わねば成るまい。

「俺としては普段着でいて欲しいのだけれど」

「シワが付きます」

これ以上の指摘は無駄だと悟りそのまま押し黙る事にした。ルヴィアは机に手鏡を

置くと身繕いをし始めた。ドライヤーを使い髪を乾かし、櫛梳いて肌のケアをし始めた。幾つかの化粧品瓶を扱った後である。彼女の声は唐突だった。

「シンヤは北欧諸国に行った事はあるのかしら」

「ないよ。寒いのは苦手だね。いや、一回だけある。まだ日本に落着く前の話……」

仕舞ったと慌てて口を噤むが後の祭である。だが生憎と意味は無かった。

「養子だともう知っていますの」

「そう。それは良かった」

「なぜ？」

「隠し続けるには少し辛いと思っていた。俺の一番古い記憶はイギリスだけど、雪国の記憶も少しある。あと黒いソーセージ。赤いジャムを付けて食べた」

「ムスタマツカラですわね、それ。フィンランドの料理ですわよ」

「そう。なら行った事があるのかもしれない。お袋は北欧出身だから可能性はある」

「日本人ではありませんのね」

「多分ハーフだ。冬木に落着く7歳まで世界中を彷徨っていた。多分というのは親父の事を殆ど覚えてないから」

「気になるのかしら」

「前は全く気にしていなかった。冬木の聖杯戦争が終わって少し気になるように成つ

て、今は結構気になる。スコットさんが殆ど面識のないリチャード・クロムウエルをあそこまで追い求めたのはなんなのか……やっぱり親は気になるよな」

「シンヤのお父様……どんな方かしら」

「飄々としていても信念と義を重んじ、悪態を付きつつも面倒見が良い。苦況の中でも笑って切抜ける。そんなだったら言う事は無いな」

「随分と具体的ですわね」

時計を見れば既に1時だった。

「そろそろ寝てくれ。休むのも仕事のうちだろ」

「シンヤは横になりませんか？」

「俺は番をするからこれで良い」

「いつもそうやって寝ているのかしら」

「いや。今日だけ特別」

「嘘ですわね」

「どうしてそう思う」

「知られたくないから嘘を付く。真也の知られたくない事とは何かしら。以前はトオサカの長男としてだった、でも今は異なりシンヤと言う個人があるのみ。今のシンヤは私との距離を縮めたくない。だから嘘を付く、違うかしら？」

「讓歩はしない。この距離だから俺はこの部屋に居られる」

彼女は無言でベッドに潜り込んだ。数刻が経てば彼女の言葉はまた唐突だった。

「フィンランドの名所というと、定番ですがロバニエミかしら。サンタクロースの村があります。私の家は古都トウルクにありますの。アウラ川ではゆっくりした時間を過ごせますし、確かに冬は厳しいですが慣れるでしょう」

「あのだな。俺は」

「知っていますわ。トリスメギストス様に義理があると言うのでしよう？　ですからシンの御望み通り、リバプールとスタドリコンスタブル、あの騒がしくも充実した日々続きをと言っています。そして私と一緒にフィンランドにいらっしやいな。シンの人生に私の火を焼べてあげますから。返事はこの聖杯戦争が終わった時に聞きます。もう寝ますわね」

何時もの様に言い返せず、真也は黙するのみだ。

「そうでした。Lihapullatです」

「なに？」

「ミートボールと言えはご理解頂けて？　私の得意料理の一つ。エーデルフェルトに来るなら腕を奮いますわ。不寝番はしっかりとなさい。お休み、シンヤ」

「……お休み」

暫くすると寢息が聞えだした。真也はソファアに居続けた。

「ルヴィアお嬢様。トリス様にはさ、一ヶ月で居なくなるって言つたんだ。俺がずっと隣に居ること自体約束違反なんだよ。トリス様への義を欠けるなら、3人への義だつて欠けるだろ。なんなんだろうな、この役回り。好いてくれるのは死ぬ程嬉しいのに、一緒になれない娘ばかりだ」

彼はそう言うとう目を瞑つた。

「なあランサー。義つて本当に重いな」



それは影だつた。ホテルの一室に現れたそれは、何の気配も立てずベッドに近づいた。その影が見下ろせば、エルメロイが寢息を立てていた。その部屋はツインルームであつた。廊下側のベッドにグレイが寝ているならば、彼は窓側と言う事になる。その影にとつて強襲にも脱出にも都合が良い。

その影が揺らぐとヒトガタになつた。多少脂肪を帯びた腕が伸びると、それには短刀が握られていた。掲げた刀身は黒色で、闇夜に混じればよく見えない。その短刀は金属性だつたが、表面に微細かつ鋭利な凹凸があつた。それは光を乱反射させ、視認を難し

くしていた。固いものを斬る、もしくは血に濡れれば、その凹凸は破損し、隠密性は失われる。だが一太刀で仕留めれば何ら問題は無い。

グレイは気がつかない。その影は間拔けな護衛だと嘲笑ったが酷だろう。影に二つの目玉が現れれば、ぎよろりとエルメロイを睨み付ける。それは影が隠密から攻撃に切替えた瞬間でもあった。短刀をエルメロイに打下ろす事と、壁が切崩され真也が現れた事は同時であった。影とはラ・ヴォワザンである。所有する気配遮断を用い忍び込んだが、攻撃に転じる瞬間を真也に悟られたのであった。

眼鏡越しの眼球が蒼く光る。このタイミングならば、エルメロイは殺せるが、真也に殺される。ラ・ヴォワザンは即時撤退を選んだ。バックステップ、それと同時にエルメロイに使う筈だった短刀を真也に打ち込んだ。その気配にグレイとエルメロイが目覚めます。瞼は半開きだ。真也は霊刀で短刀を打ち落した。ラ・ヴォワザンはベランダから跳躍すると闇夜の街に紛れていった。

「追います！ グレイさん、二人を頼んだ！」

真也も続いた。つまりは追撃戦である。エルメロイは深追いはするなど叫んだが、真也には届かなかつた。ホテルから飛降りたラ・ヴォワザンは、4階建ての民家、その屋根に着地するとそのまま屋根伝いに駆けだした。背後に迫る真也が見える。その手にある霊刀は蒼白く光り、言葉で聞かずとも殺意は満タンだ。

駆ける度にその距離は縮まった。彼女の敏捷はB、真也はA、ならば追い付かれるのは時間の問題だ。そうなれば戦闘型ではない彼女に為す術は無い。だがそんな事は彼女も承知である。真つ向勝負などハナからする気は無かった。彼女には別の目的があった。

夜を駆ける真也の先に死徒の姿があつた。彼は三角の黒い屋根を踏抜いた。平らな屋根、台形の屋根を一瞬で駆け抜ければ、4車線はある道路を飛び越えた。目の前に飛来する4本の短刀を叩き落す。その投擲の威は軽く、シエルと比べれば1ランクは落ちる。真也には脅威にすらならないが、魔術師を含む普通の人間は別だ。5人の魔術師たちは、為す術もなく死んでいっただろう。怒りと悔恨が満ちた。

「あの時仕留めてさえいれば―」

あと10秒経たず追い付かれる、その算段を立てたラ・ヴォワザンは裏路地に降りると街の暗かりに混じった。続き着地した真也は、周囲を探るがラ・ヴォワザンが辿れない。真也の五感から死徒の気配が完全に消えていた。ただ静かだ。ネズミも息を潜める程の静寂である。真也は黙って眼鏡を取り去った。

幾ら気配遮断とは言え。その場所にそのスキルを行使する者が存在する以上、殺せる存在がある以上、魔眼の前では無意味だ。点と線が織成す世界に、胎動する群体があつた。真也は踏み込んだ。ラ・ヴォワザンも悟られた事を悟った。彼は刺突の構え。その

切っ先が狙うのは死徒の死の点だ。

だが彼女は用心深かった。真也の切っ先がピタリと止っていた。その先に見知らぬ誰かが

立塞がっていたからである。その誰かとは運悪くラ・ヴォワザンに見初められた、何の関係もないOLだった。ラ・ヴォワザンは投擲すると、真也はバックステップして回避した。彼は脇構えを取った。

「どうだい斬れるかね魔眼持ち。見ての通り人質と言う事さ」

「ならお前が反応する前にその首を落とす」

「勘違いしないように言っておくが、一歩でも動けばこの娘の命はないよ」

ラ・ヴォワザンは背後から短刀を突きつけていた。

「ああ確かに辛い選択だ。けれど斬る。お前が居なくなれば、ジョナサン・スコット一人のみ。そうなればラ・ヴォワークは事実上瓦解だ」

「それは一体なんの魔眼かねえ、透視か、それとも未来視か。どうだいお若いの。それを明かせば、この娘を解放しても良い」

「嘘吐けよ。解放すると見せ掛けて、その彼女を呪詛で冒すつもりだろ？ その隙に逃げれば俺は追跡できない。その人を助けようとする俺なら放置できないからな。引っ掛るか」



「良いのかい？」

「やれよ。但し言っておく。その人を解放すれば普通に殺す、その人を殺したら魂ごと消滅させる」

「……そうかい、これは驚いた。まさか実在するとは思わなかったね」

「形勢逆転だ、好きな方を選べ。ラ・ヴォワザン」

数刻経ったがラ・ヴォワザンは沈黙を保っていた。何かがおかしい。ラ・ヴォワザンは悪魔崇拜結社の最大戦力、真也は魔術協会側の最大戦力だ。このカードは順当だが、目の前の死徒が勝てない事は十分承知している筈。追詰められているにも関わらず、何かを待っている……ならば、それは陽動に他ならない。

「……っ！」

「タイミングとしてはボチボチか。もう少し引つ張りたかったが、ま、ご主人様の事なら大丈夫かね」

真也は忌ま忌ましそうにその場を後にした。



時を遡る事数刻。真也を見送ったエルメロイたちは急ぎ準備を整えた。騒ぎに駆付

けたホテルクルーは暗示で黙らせホテルを出た。動いたのは真也を追跡する為である。彼はルヴィアの通信用複合鉱石を持つているため追跡は可能だ。

ラ・ヴォワザンの襲撃が陽動だとエルメロイは予想していた。エルメロイに差向けられるのが本命だ。だがその場合に想定される敵戦力は微々たるものとなるだろう、そう考えた。死徒級の戦力を今まで隠す理由が無いからだ。雑魚ならばルヴィアとグレイで十分に対応できる。

あのジョナサン・スコットの割には見通しが甘い、そうは思いつつもエルメロイがその判断をしたのは「そう考えたくなかった」からだ。それ故。2流魔術師であり、彼の教え子でもあるジョナサン・スコットが、彼の目の前に現れた時、その事実を受入れざるを得なかった。彼は初めて指導に失敗したのである。エルメロイと同じように、ジョナサンは克服できなかつた、そう言う意味だ。

彼の前に立つルヴィアとグレイは臨戦状態だった。ルヴィアはガンドの右腕を向けていた。グレイはホテルで拝借したデッキブラシを構えていた。その脅威にジョナサンは涼しい顔だ。

「お久しぶりです、師匠」

「久しぶりだ。正体不明の8人目にして、ラ・ヴォワザンの仲間であり、この聖杯戦争の首謀者」

「そこまで到達してましたか。流石師匠です」

「私だけの力ではない、教え子たちの成果だ」

「それは酷い。まるで私がもう教え子では無いような言い方に聞えます」

「それはお前次第だ。ジョナサン・スコット。時計塔のロードとして命ずる。全ての活動を停止、所有している力あるモノを放棄し、投降しろ。この聖杯戦争の実体は魔術協会も把握していない」

「つまり私の命運は師匠の指一つ、と言う訳ですか」

ジョナサンはさて困ったと思わせ振りがちな仕草だ。

「師匠の命とあれば私とて尊重をしたい。ですがその命には従えません。師匠より父の方が重要ですから」

「では何をしに来た。レディ・エーデルフェルトと私を殺すか」

「ええ、ルヴィアゼリッタ・エーデルフェルトはこの場で仕留めます。心苦しいのですが師匠にはご同行を願います。私の成果を是非ご覧に入りたいので」

ルヴィアが歩み出した。頭を軽く振り、肩に掛かった長い髪を整えた。

「先程から聞いていれば気分が悪くなりますわ。ミスター・スコット。暫く見ないうちに随分と横柄になったものですわね」

エルメロイは直ぐ様ルヴィアを制止した。

「レディ・エーデルフェルト。話しているのは私だ。下がりました」

「チューター。話なら引つ捕えた後でもできませんよ」

不味い、エルメロイは内心で焦りを感じていた。ルヴィアはジョナサンの変化に気がついていない。だがそれを言及すればジョナサンの動機となるだろう。目の前の教え子「だった」人物が動けば、その後の状況が予想できない。

「頭は私だ。下がっている」

「良いではありませんか。師匠。女性の我が儘、癩癩を受け止めるのも紳士の務めであり、資質ですよ」

「大した自信なこと。最後にお目にかかったのは何時だったかしら。まるで別人のようですよ」

「先程の質問に答えましょうか。横柄だ、に関してです。それは当然近親憎悪だからですよ」

「何がおっしゃりたいのかしら」

「レディ・エーデルフェルト。貴女も横柄ですから、私の横柄が鼻に掛かるのです」

「結構。その挑戦受けますわ」

「トオサカシンヤが居ないにも関わらず随分と強気だ」

「それは貴方もおなじではなくて？ ここにラ・ヴォワザンは居ないので。今ひ

とつ。確かにシンヤより戦闘能力は劣るけれど、緋つた事は一度もなくてよ。契約中も、今も変わりませんわ」

「これは妬けます。バケモノの彼とは対等であり支えあう関係だ、そうおっしゃる。私  
が知らない貴女の一面だ。レディ・バートリ、ミセスを前にした時もその様な調子だつ  
たのでしょね。彼が気に入るのも分ろうモノです」

ジョナサンは小さく笑つた。

「なるほど。これは良い。貴女に何かあれば彼は酷く嘆くに違いない。姉と迷いました  
が、良いでしょう。十分だ。貴女にする事にします」

「その女を物扱いする、歪んだ魂を叩き直しますわ」

ルヴィアは既にジョナサンの5歩前だ。エルメロイの見立てでは、ルヴィアは敵わな  
いだろう。グレイでも不安が残るが、やむを得まい。グレイをけしかけようとしたその  
瞬間だ。ジョナサンは、最悪の言葉を吐いた。

「しかし、レディ・エーデルフェルトも随分と変わられた」

「何がおっしゃりたいのかしら」

「彼は姉妹を非常に強く想っています。貴女としてその事実は変えられないでしょう。彼  
女らの次席に甘んじるなど、これが自尊心の高いあのルヴィアゼリツタ・エーデルフェ  
ルトとは信じられません」

その侮辱を切っ掛けにルヴィアが動いた。彼女の眼差しは鋭く、怒りに満ちていたが、己は失つていなかった。ただ手心は加えまい、そう決めた。目の前の男は2流の魔術師である。体術の訓練に参加したという話も聞かない。事実、あと一步でルヴィアの間合いに入るというのに、ジョナサンは微動だにしない。油断か余裕かは知らないが、その慢心と高慢を叩きのめす。

だが何を何処で間違えたのか。ルヴィアは拘束されていた。ジョナサンに右手を背に回され背後を取られていた。彼のそれは熟練したものだった。鮮やかですらあった。資質と膨大な訓練を経なければ得られない技、それは密教退魔師 慈誠のモノだ。ルヴィアは悔しさを隠さず、背後に居るジョナサンを射貫かんばかりに睨んでいた。エルメロイは確信した。

「魔術師の魂を喰らう、とはこういう意味か」

「そうです。私の中には、シスター・アーシア、錬金術師エミリア・フォン・アウフレヒト、占星術師クレトス・メルクーリ、呪詛師レオナルド・ルチアーノ、密教退魔師慈誠、彼らの魂がある」

「成る程、鉱石魔術を使うレイ・エーデルフェルトの魂はさぞ魅力的だろう。2流である私など魂を喰らう必要すら無い、か」

「とんでもない。最後の一人は師匠と決めていました。師匠は洞察力、分析力に優れ、才

能を開花させる力を持つ。そのお陰で私は其れなりの魔術を使えるようになりましたが、能力はどうでも良いのです。師匠だから、私は選んだ」

「どうだ。ジヨナサン・スコット。力を手に入れた感想は」

「ええ。とても素晴らしい。灰色の世界に色が付いた様です」

「私はお前の指導を誤ったようだ」

グレイの眼が鋭く光った。彼女にとつてそれは聞き流せない発言だ。

「一つ聞こうか。レディ・エーデルフェルトは喰わずではなく殺すと言ったな。7人以上喰えるのか？」

「鋭い。流石私の師匠です」

「答えろ」

「そうです。私は6人を喰らいました。ですからキャパはあと一人分のみです」

「ならばなぜタリーア・メルクローリを喰らった。占星術師の魂は二人も要らないだろう」

「それは、」

突風が吹いたと思えばエルメロイの前に真也が立っていた。背を向けて、纏う真紅の外套の裾を揺らしていた。

「遅い」

「申し訳ありません。陽動に引つ掛りました」

エルメロイの叱責に、真也はその手にある霊刀を以て答えた。抜刀状態だ。ジョナサンは今尚余裕を崩さない。

「意外と早かったですね。トオサカさん」

「暫く見ない間に変わったな。まさか、と思つた。信じたくは無かつた。そうだろう？

ジョセフ・クロムウエル」

「私はまだその家名を名乗れません。今迄通りジョナサン・スコットとお呼び下さい。慣れないのであればジョセフ・スコットでも構いません」

「ジョセフ・アッカーソンはどうだ」

「その家名は捨てましたが、お好きな様に」

「なら、ジョナサン・スコットと呼んでやる。そして、ボコつてふん縛つて全部終りだ」  
「終りなどではありません、寧ろここからが始まりです」

「悪いが教授をサルデイスにはさせない、ルヴィアをラオディキアにもさせない」

「さてこれはどうするべきか。師匠を渡せばレディ・エーデルフェルトはお返しますが、拒めば彼女を殺します」

「三つ目の選択。ジョナサン・スコット、お前をボコる」

「言うのは自由です。丸い三角、言葉は矛盾を表現できますから。ですが現実とは異なります」



ジョナサンはレオナルドの糸を手繰るとルヴィアの首に巻き付けた。

「魔術刻印を持ち、死に難い魔術師とは言え、首を落とされては為す術はありません。どうなさいますか？ 私は師匠一人で良い、そう申上げています」

鉄板すら射貫きかねない眼光で真也がジョナサンを睨むと、エルメロイにこう告げた。

「教授」

「良いだろう」

「あっさり決めましたね」

「違うものと同じようには扱えない。俺の中では教授よりルヴィアが上、それだけ」

「私は責を負うものだ。これの意味が分るか、ジョナサン」

「私に責を感じてくださいるとは、この上ない喜びです師匠。だが彼女は違うようです。師匠の方が上だ」

ジョナサンはエルメロイを直ぐには殺さない、エルメロイと真也は機を待つべきだと、同じ結論に至った。だがグレイにとっては看過できない話である。彼女は踏み込むと鉄パイプを撃ち込んだ。

ジョナサンはルヴィアを抱えてバックステップ、20メートルの距離を一瞬で飛んだ。如何に鍛えていようと、ルヴィアが軽かろうと、強化の魔術では不可能な芸当だ。

そもそもサーヴァント級のグレイをあしらうなど、シエルか真也以外に出来よう筈が無い。

考えるのは後だと真也は踏み込んだ。いずれにせよこの機は逃せない。彼にとつてその距離はゼロ近似。ジヨナサンが反応出来ない速度で、拳骨を打ち込む。ところがその真也の目の前によく分らない生き物が居た。

一言で表せばコウモリの羽と槍を持ったヒトガタトカゲ。翼を持ち宙を舞うモノ。Ukobach(ウコバク)だ。小太りのオーク、そう称するより他はない。Olivier(オリヴィエル)も居た。太い脚を持ち地を這うモノたちである。ウコバクは空を飛び、オリヴィエルは下水を通り此処に現れた。

その100体が真也たちを襲った。

真也は右薙ぎでウコバク5体を屠った、脚に取り付いたオリヴィエルを蹴り払い、他のオリヴィエルを吹飛ばした。グレイもデッキブラシを手に応戦している。デッキブラシでオリヴィエルを唐竹、つまり12時から6時の方向に打ち抜きぬけば、それは凹形状になり果てた。手刀を入れた粘土のようである。

グレイが守るエルメロイの心配は無い。一体一体も弱い。数が多し。下級悪魔を全滅させる時間を待つジヨナサンではあるまい。下級悪魔を屠りつつ強行する、真也がそう考えた瞬間だ。

4本と3本の黒鍵が天から落ちると15体の悪魔たちを斬り裂いた。その黒鍵の主は街灯の上に立つシエルであった。黒い修道服が風に揺らいでいた。ジヨナサンを見る彼女は汚物でも見るかのような目である。

「貴方がジヨナサン・スコットですか。なるほど、悪魔に魂を売ったモノたちの典型ですね、鼻を摘みたくなる臭いです」

「おやおや、まさか埋葬機関と手を組むとは」

「悪魔がヒトの言葉を話すなど不愉快です。その口を閉じなさい」

シエルは黒鍵を再装填、2次爆撃。シエルの援護で道が開いた。真也がその小道を踏み込めば2本の短刀が飛んできた。苛立ちを籠めて叩き落せば、ジヨナサンの隣にラ・ヴォワザンが立っていた。ラ・ヴォワザンに抱えられるルヴィアは眠らされていた。ジヨナサンは全メンバーを確認できた事を確認すると、こう告げた。

「師匠。この町の北東にあるカタコンベでお待ちしております」

「見せたいモノと言っていたな。それは何だ」

「私の成長と、成果ですよ」

ジヨナサンは指を鳴らすと残った下級悪魔を一斉に突入させた。無数の翼音と、大地を蹴る音の中でさえ、その声は明瞭に聞こえた。

「トオサカシンヤ、貴方も来て頂きたい。レディ・エーデルフェルトを殺したくはないで

「しょう?」

真也はマス目の様な斬撃を以て10匹の下級悪魔を斬り裂いた。細切れになった悪魔たちの肉片が降注ぐ。その様は土砂降りだ。

「俺にとつての人質はルヴィア、そしてお前だ。ジョナサン・スコット。手間掛けさせやがって」

ジョナサンは余裕めいた表情を消し、忌ま忌ましきを見せると吐捨てた。

「戯言を」

「助けてやる」

ジョナサンは闇夜に消えた。真也は襲い来る悪魔を斬りつつも、その背中を追っていた。



その騒がしい場所は外国に向かう人、外国から帰ってくる人で賑わっていた。恐らくバカンスかビジネスだろう。移民もいるかも知れないし、帰郷かもしれない。なぜその様な人たちが居るのか、それは空港と呼ばれる場所だからだ。その証として窓越しにジェット旅客機が飛び立っていった。

私も海を渡るその一人だ。これから日本に帰るのである。この手にある日本行きの手ケットがその証拠。これで良い。これが正しい在り方だ、そうに決っている。そう念じれば、なんの嫌がらせか、目の前を若い夫婦が歩いて行つた。2人の間には5歳ぐらいの女の子がいて3人は笑つていた。

ルヴィアなら幸せに出来る、本当にそうか。ルヴィアなら申し分ない、本当にそうか。それで済ませられるのか、納得できるのか。その役が自分ではない他の誰かで納得できるのか。真也の言葉は本当か、また嘘では無いのか。あの時、弟を幸せにすると決めたのに。心は渦巻き、マグマのようにどろどろだ。

「あー、やめだやめ。こんなの私らしくない。もう賽は投げられたんだから」

そうだ。暫くは陰鬱かもしれない。でも美味しいものを食べて、一晩寝れば落着くだろう。そうで無くとも、一日、一週間。最大でも一ヶ月もあれば十分だ。ルヴィアとの仲を取り持った、そう考えれば幸せにしたとも解釈できる。これでよし。

重くて深い、桜と綾子はそう簡単に割切れないだろうが、真也は家族、親子と言うものを強く意識している。流石に家庭を持てば諦めざるを得ないだろう。

ルヴィアは主従関係だ、そう言つたが、面倒見の良い彼女の事だ。従者を何時迄も独り者にはしまい。誰かを紹介するならそれで良い。問題はあの義弟が幸せになること。それに絶えず近くに居るなら、ルヴィアの考えが変わる可能性だつてある。私は近

くに居なかつたから変わった。それと同じだ。

誰がそうするかはこの際問わない。問えば動けなくなる。だから私は蓋をした。その代わりに止っていた時計は動き始めるのだ。

彼女は立上ると国際線の出国ゲートに向けて、旅行鞆を転がし始めた。行く人、去る人の中を通り過ぎた。その心中にあるのは後悔と、躊躇いと、ささやかな希望があった。その凜を待っていたのはキャスターである。彼女は旅行鞆を持っていなかった。

「凜様。御挨拶に参りました」

何時になく神妙な態度に凜は戸惑った。

「御挨拶？」

「これよりマスターの元に戻ります」

「真也は帰国しろって言ったと思うけれど」

「ええ。ですが契約に基づきその義務を果たします。凜様の指導を途中で投げ出す事を御許し下さい」

「そう言うことか。生真面目ね、アンタ」

「性分ですので」

「良いわよ、1から10まで教わる気は無いし。後は自分で何とかするわ。葛木先生の墓は見てあげる。真也に付いていく積もりなんでしょ？」

「ご配慮感謝致します。葵様、桜様、ライダーに宜しくと。では」

キャスターの背中が気になった。それは慌ただしき。そして深刻さと悲壮さである。凜はキャスターを呼止めた。

「ちよつと待った。契約に基づきってどういう事よ。真也を勝たせるって解釈して良いのよね?」

「お答えできません」

「地獄まで供をする、これがあの時真也と交わした契約よね。これとの関連を話しなさいよ」

「お答えできません」

「真也が死んだら後を追う、これを想定しているんじゃないでしょうね」

「お答えできません」

「ちよつと。それがアンタの従者道? 主を生かすのが従者じゃないの?」

「活かすのが従者です。勝利とは多様な意味を持ちます。主が望み、相応しいモノであればその意に従います」

「話せ」

「そうですね。親しい誰かが何の痕跡もなく、ある日突然消えるというのは辛い事ですし、それが遠坂家に不和を持込んで本末転倒。桜様にも説明責任があるならば……」

いいでしょう。お話しします。凜様。この聖杯戦争の黒幕はリチャード・クロムウエルの非嫡出子、ジョセフ・アッカーソンです。マスターたちはそのジョセフが待ち構える本拠地へ向かっている、つまり決戦です。ですが父と子のしがらみを知ったマスターは冷徹に成り切れません」

「幾ら真也でも会った事も無い誰かに、戸惑うとは思えないけれど」

「ジョセフとはジョナサン・スコットの事です。父に愛されなかつた子。彼を救う為に、シエル戦と同じ様な際どい戦いに殉じるはず」

「殉じる?」

「お忘れですか? マスターはランサーに深い思い入れがあります。ジョナサン・スコットを助ける事に、ランサーの姿を重ねています。左手甲の符陣を殺す程の覚悟です」

「……ジョナサン・スコットの救済の為に英霊になるっての?!」

「今迄のマスターはランサーと遠坂とそのバランスで成っていました。遠坂という枷が無くなった以上マスターにあるモノはランサーのみ。今一つの選択を成そうとしていきます」

「な、ふざけるんじゃないよ! ルヴィアの家に行くって言うから、そうしたんだから!」



「マスターがどういふ立場であつたか、それは十分承知していたはず。今更言うべき事ではありません」

「一緒に行くわ。真也のところに案内して。連れ帰るから」

「お帰り下さい。遠坂真也の従者として申し上げます。これ以上我が主を振回すのは看過できません」

「アンタね。真也が幸せになれるなら、これが前提なのよ。それが成立しないならこんな事をする意味は無いわ。あのとき聞いてたんでしょ？ 英霊なんて、ランサーの様な結末なんて、冗談じゃない」

「それがマスターにとつての幸せです」

「アンタ、本気で言つてる訳？」

「私は付従う者、並び立つ者ではありません。主の意向に従うのみです。お帰り下さい」  
「くだいわよ」

「この場で眠らせる事も出来ませんが」

「桜も駄目、綾子も駄目。アンタが真也を幸せに出来るなら、それでもいい。できないで  
つよこ。」

「凜様にもできません」

「できる」

「凜様はそれを放棄しました。その事実を前にどうやって信用しろと？」

「キャスターは、英霊になる結末が本当に幸せだと思って思う訳？　ならなんで葛木先生の元に身を寄せたのよ」

「ならばルヴィア様に頼む事と致します。真実を話せば、二つ返事で受入れるでしょうから」

「無駄ね。真也はルヴィアじゃなくて私を選ぶ、そう決ってる」

「何故ですか？」

「真也は私の事が好きだから。『言える訳無い』真也の口癖よ。そして私もそう」

「何故今言うのですか。ルヴィア様をラ・ヴォワザンから助け出した後、この聖杯戦争に付合うなどと言い出さなければこの様な事態には成りませんでした」

「2年間もほっとかれたのよ、不安にだつてなるわよ」

睨み合う事数刻。折れたのはキャスターであった。彼女を指導し3年間、これは是が非でも折れないパターンである。ここで魔術を以て組み伏しても、3人が歩き出せないならば、真也の決意が無駄になる。それはキャスターには受入れられない事実だ。深いため息が出た。

「マスターは今あのランサーを追っています。いかに凜様とは言え、追い付いただけでは解決になりません。それはどうお考えです」

「大丈夫よ。愚弟は根本的に寂しがり屋だし、それにキャスターとの会話で最終兵器（とつておき）を思い付いたから♪」

目の前の主の姉は、人差し指を天に指し満面の笑みだ。確かに真也を思い止まらせる可能性を持つのは凜か、或いはルヴィアだが、キャスターは釈然としない。

「ヒトが持つ魂の激しい起伏と、強い流動が神代を終わらせた訳ですが……幾ら何でも現金ではありませんか。マスターに必要とされていると確信した途端手の平返しとは。ライダーならば10年、20年刻が経つてもその意思が揺らぐ事はありません。少しは見習うべきです」

「あのね。太陽神ヘーリオスの孫であるメディア、そして地母神メドゥーサと一緒にしないでよ。不死性を持つアンタたちと違って、私たちは精々80年、短い時間の中でどうやって生きようか齷齪（あくせく）してるんだから、間違える事だつてあるわよ。それとライダーだけは駄目。神代ならともかく、人間の男の子を地母神に取られるなんて、人間代表女の子としてはそんな屈辱的なこと看過できないわ。神族は神族とイチャ付いてろっの」

「まったく。別れる別れる詐偽に付き合わされる、身にもなつて頂きたいものです」

「悪かったわよ」

「そうと決ればお急ぎ下さい。間に合わねば意味がありません」

キャスターは急ぎ足だ。凜もそれに続いた。

「あのさ。キャスターは真也に求められた事はある？」

「それはマスターへの侮辱と判断しますが」

「答えなさいよ」

「ありません。ライダーも同じです。自由意志を持ったマスターが受入れたのは凜様のみです」

「そうよね……ってなんで知ってるわけっ!?!」

「……知らないのは御二方だけです」

つづく！

## 十三話 突入

人里離れた街の北東部。ジョナサンの指定したその場所には横穴があった。それなりに大きく、セスナが優に収まる程だ。火星を彷彿とさせる赤褐色の岩肌で、その奥に門があった。木材で作られていただろうそれは砕かれ、そこいら辺に散っていた。

「溶岩洞のようだな」

エルメロイの観察に、驚いたのはグレイである。

「フランスに火山があるんですか？」

「カンタル火山、モンドール火山、多くはないが存在はする。大半は役目を終えた死火山だが、ここもその一つのような」

門の成れの果てである木片。真也が足で引つ繰り返せば、とあるシンボルが刻まれていた。

「教授。これを見てください」

「クロスか。つまりここは地下教会、いや違うな。隠す必要があったと言う事は地下納骨堂（カタコンベ）か」

「それなりの規模のようですが、こんなところにカタコンベですか」

「教会が死者を賄いきれなくなるのは中世によくあつた話だからな。ここもその一つなのだろう」

「歪みの地、と言う訳ですね」

「その通りだが、それはそれとしてトオサカシンヤ。それを足で扱うのは止めた方が良い。彼女が睨んでいる」

真也の背後に立つのはシエルである。彼女の表情は笑っていたが、漂う気配は怒りの形相に他ならない。十字を足蹴にされては無理もなからう。

「失敬」

それはともかく戦闘準備だ。この奥にジヨナサンとラ・ヴォワザンが控えている事は確実である。エルメロイは使い魔を放ち、溶岩洞内を偵察する事にした。そこは円形の大きな空洞が三つあり、それらを洞窟が繋げる構造だが、彼らは知る由も無い。ストレッチをする真也はぼやくようである。

「また洞窟か。人目を憚るなら当然なんだけれど」

「それはどういう意味ですか？」

そう問うたのはグレイであった。

「冬木の聖杯も洞窟にあつてね。それよりグレイさん。言いたい事があつたら言つてくれ」

「どうしてです」

「言いたい事があるけれど、言うべきか迷う、その仕草は妹とそっくりだ」

暫く押し黙っていたグレイは意を決しこう聞いた。

「シンヤさんの優先順位を教えてください。でなくては拙の行動が決め難いです」

「教授を見捨てようとした昨夜のこと根に持つてるな」

「レディ、今して良い問では無い」

エルメロイの配慮に、真意はあつげらんとしたものだ。

「いいよ、答える。ジョナサン・スコット、ルヴィア、教授。この順番」

「ルヴィアさんが2番目なんですか？ それは酷くないですか？」

「ジョナサン・スコットの目的は教授と俺だ。俺がここに来た時点でルヴィアに興味は

無くなる」

「なんか釈然としません」

「忘れた？ 俺は彼を救いに来た。ジョナサン・スコットをモレクから救出する、これで

全て片が付く」

「そんなんだからお姉さんを怒らせたんですよ」

「グレイさんは時々辛辣だな。誰か一人だけを想う、それが許されれば良かったんだけ

れだね。生憎とそうじゃない」

真也はポケットからスキットルを取り出すとウイスキーを一口飲んだ。

「教授も如何ですか」

「頂こうか」

彼もまた同じように一口飲んだ。呆れを隠さないのはシエルである。

「これから一仕事だというのに」

「気付けです。シエルさんもどうですか?」

「遠慮しておきます。回し飲みはしたくありませんし。それがアルコールなら尚更です」

真也がちらとグレイを見れば彼女は目を逸らした。目は口ほどにものを言う、と言う事だ。彼は肩を竦めるより他はない。エルメロイは言う。

「洞窟を進むと大きな空間がある。下級悪魔、*Ukobach*（ウコバク）」と *Olivier*（オリヴィエル）の魔窟だ。使い魔はそこで仕留められた」

霊刀のチェックをしていた真也は納刀。パチンと音がする。

「シエルさんと俺で露払いします。教授はここで待つていてください。グレイさんは教授の護衛」

「トオサカシンヤ。知つての通りジョンサンのモットーはフェイルセーフだ。二重三重の予防線を張っている事は間違いない。捕らえる余裕などはない。ジョンサンを殺せ」



「ご心配なく。捕らえる必要なんてありません。この眼を用い墮天使の呪いを殺す、一刺しで済みます」

「それすら勘定に入れておる筈だ。だからこそこの場所を明かした」

「伊達に何度も死に掛つてないですよ」

「刺違えるつもりか」

「まさか。命を懸けるに値する、つて事です」

「ジヨナサンは一人で済む筈の占星術師2名を喰らつておる。十二分に注意しろ」



洞窟に入り5分も歩けば、出入り口は背後の彼方である。直に全ては暗闇に閉ざされるだろう。それでもモノが見えるのは、シエルの魔術であり真也の夜目だった。真也の右隣を歩くシエルは、何時もの修道服とは事なり随分と軽装だ。強いて言うならエジプトシャンブルーのチアリーダーである。ミニスカートにニーソックス、ハイネックのノースリーブ。露出が際どく、目のやり場に困る。それよりも気になるのが彼女の担ぐ大型の兵装である。彼女はモノともしていかないが、見るからに重量感たっぷりだ。思わせ振りの真也の視線に気づいたシエルはこう言った。

「第七聖典です」

「武器なのに聖典なんですか」

「詳しくは話せませんが転生体に強い効果を持ちます」

「なるほど、魔術によつて生れ変つた死徒に効果は抜群ですか。頼りにしています」

「私は頼れませんかけれど」

「なんですか、それ」

「向いていない、そう言っています。あの橋で真也君と戦つた後に気が付いたのですが、私が子持と分つた途端に割切れなくなつた。違いますか？」

「聖堂教会の人に心配されるとは凹みます」

「出来ない人が無理をして成そうとするならば歪みが生じます」

「生憎とこういう騒動に巻きこまれる体質です。なら手持のカードでやりくりするしか無いでしょう」

「歪みが騒動の元凶だと気付きなさい。家に帰つて武器を置いて別の生き方を捜すべきだと言っています」

「帰る家はありません。作るにしてもまだまだ時間が掛かりそうです。第一、それを言うならシエルさんですよ。子供には親が必要なんですから、叶うならこれを最後に引退してください」

真也の発言に二一の句を失うシエルである。ため息も出た。

「魔眼も身体能力も生れ付きでしたか」

「はい」

「力を持つて生れた人が、どうしてこの様な性格になったのか、不思議で成りません」

「前はイケてたんですよ。これでも」

「昔はやんちゃだった、そう自慢する困った中年男性の様に聞えます」

「例えば80年代風です」

「……私が中年だと？」

「そんな事言つてませんつてば」

そこは第一の間である。洞窟は完全な暗闇であつたが、二人の眼には意味が無い。事実、夥しい数の下級悪魔が視認できた。暗闇に浮かぶ二つの赤い双眸、それが大地、壁面、天井にと無数に存在すればプラネタリウムである。但し全てが凶星となれば悪趣味だ。真也が黙つて抜刀すると、シエルは第七聖典を背負つたまま黒鍵を取り出した。火葬式典付与。そして戦いの幕は今切つて降ろされた。



敵は空舞う“Ukobach(ウコバク)”と、地を走る“Olivier(オリヴィエル)”の群れである。真也が突入すれば白刃が閃いた。地を這うオリヴィエルは相応な体格を持つ故に、その首を狙った。斬り落とされた首が飛んでいった。空を舞うウコバクは飛翔型のため華奢である。上半身と下半身が泣き別れになった。

前後から迫るオリヴィエルが豚の様に吠ええると、腹を震わせながら真也に飛び掛る。彼はコマのように回転し、前後の首を刎ねた。続いて上空より3体のウコバクが強襲だ。その手にもつシャベルを槍の様に突き立てている。

シフトウエイト。真也は綾取りのようにシャベルを躲すと、1体目の首を斬り落とす。2体目は胴、3体目は袈裟斬りである。ウコバク三体分の肉片が地に落ちる間も無く、オリヴィエルが真也の右足に取り付いた。同時にウコバクが迫り来る。

彼は左足を軸に、一回転。取り付かれた脚を高く上げ、襲い来るウコバクに脚のオリヴィエル毎叩き付けた。その衝撃でその2体はひしゃげ地を転がった。足元を確保する為、真也が肉塊を足で払えば、無数、これは誇張だがそう思えてしまう程の下級悪魔たちに取り囲まれていた。

走り抜ける隙間も、飛び越える空間も無い。幾重にも、緻密なまでに取り囲まれていた。鷹の団、団長が転生した時の状況と言えば適当だろう。羽ばたくウコバクは、ケケケと軽々しく笑う。重鈍なオリヴィエルがゲフゲフと笑えば、肉塊のような腹が揺れ

る。醜悪であり苛立たしくもある。

一斉に踏み込めば真也に為す術はない、そう確信した目であった。確かにそうされれば、少々厄介だ。死ぬ事は無くともダメージは負うかも知れない。この先の展開が読み切れないならば、それは避けるべきである。だがそれは百も承知。真也と「シエル」は敢えてこの状況を作り出した。

二人の目的は露払い、つまり殲滅だ。ウコバクにしろ、オリヴィエルにしろ、一体一体は弱いがとにかく数が多い。刀剣を持つ真也に弾切れはないが、シエルには黒鍵の弾数に制限がある。効率よく倒すにはなんとする。そこで二人は、敵を誘き寄せ、纏めて叩く事にした。マップ兵器の運用方法と言えば分りやすいだろう。

跳躍し宙を舞うシエルから見れば、下級悪魔たちは真也という撒き餌に誘き寄せられた魚の群れである。彼女はその山の様な群がりに黒鍵を撃ち込んだ。右に4振り、左の3振りは等間隔の軌跡を以て、斬り裂き、そして焼き尽した。

50柱以上の悪魔たちが肉片となり、焦げれば異臭を放つ。投網から溢れたのはウコバクだ。半死半焼でのたうち回るそれを、シエルは頑丈なブーツで踏み付けた。頭蓋が割れ、目玉と脳漿を撒き散らした。彼女の背後に立つ人影はもちろん真也である。

「見事な囷でした。真也君」

「ありがとうございます。でも出来ればもう少し加減をお願いします」

彼に火葬式典の影響は無かったが、真也の装備は別だ。焦げて異臭を放てば眉をひそめた。化学繊維の延焼臭は鼻に付くのである。ところがシエルは気にしない。そんな事は織り込み済みであり、敢えては言わないが彼女は信頼していたのである。

「トカゲ型（ウコバク）はダメージが少ないですね」

彼は話を聞けよと思つたが言うのを止めた。人使いの荒い上官に従う一般兵の気持ちがよく分る。彼は不貞腐れさを極力隠しつつ。

「ウコバクは地獄の鎌炊きとも言われます。火を司る悪魔でもありますので、火属性の魔術は効果が減ります。それでも燃やすシエルさんの魔術は破格ですよ」

「褒めないでください、魔術は仕方無く使っているだけですから」



そして悪魔たちの第2波攻撃である。シエルを狙う5匹のウコバク（トカゲ型）を、真也が跳躍し斬り落とした。真也の着地点で待構えるオリヴィエル（オーク型）に向けてシエルが黒鍵を撃ち込んだ。二人は互いに跳躍すると、合流。背を向けあい、取り囲む悪魔たちに目を光らした。真也の背後にシエルの気配があつた。こてんぱんにされたのはつい先日だが、今となつては頼もしい事この上ない。真也は思わず呟いた。

「このシチュエーション、懂れていました」

「男の子ですね。漸く五合目（残り半分）と言ったところです」

「このまま押し切りましょう」

「部屋の片付けは手際よくがモットーです。真也君にできますか？」

「確かに掃除は苦手ですが、幾ら何でも子供扱いしすぎです、それ」

二人は同時に駆け込んだ。真也の間合いは近距離である。近付かなければ攻撃出来ないが、この数に捕まられると厄介だ。ある時は敵を斬り、またある時は斬ると見せ掛け、遣り過ごした。敵陣を駆け抜けた。真也の方針はかく乱第一、討伐は二の次だ。それはシエルに集中させない為であったが、下級悪魔も頭を使い始めた。真也という囷を理解し、小賢しくも群団を二つに分けた。シエルと真也の連係を断つ戦術に切替えたのである。真也は跳躍すると、霊刀を大きく奮った。5体のウコバク（飛翔トカゲ）を斬り捨てる。これで何体目か、それが分からなくなった頃に、シエルに向けてウコバクとオリヴィエルの複合部隊が突進していった。

シエルの黒鍵は貫通力がある。囲まれ掛ければその威を以て、5匹のオリヴィエルを肉片と化した。作つた道を駆け抜けた。跳躍し砲塔回転、180度。彼女の視線の先には、彼女を押し込もうとした下級悪魔の群れがあった。シエルから見ればそれは、餌に群がる害虫である。ならば駆除をするのみだ。着地。黒鍵装填、右に4振り、左に3振

り、水葬式典付与。

斉射。

亜音速で撃ち出されたそれは30柱の悪魔たちを滅ぼした。上空から飛来するウコバクの群れは、渡り鳥の様。大地から押寄せるオリヴィエルは、サバンナを疾走するバツファロードだ。

「次から次へと！」

シエルを貫かんとウコバクがシャベルを構える。シエルを喰らわんとオリヴィエルが唾液で紛れた牙を剥く。シエルは極力引寄せ、殲滅する事にした。放射状に放たれた黒鍵は、距離に比例し、拡散する。ならばその判断は当然である。拡散すれば、黒鍵の隙間を潜り抜ける事も可能となろう。

シエルが選んだのは、取り付かれる一步前。羽ばたくかのように両手を広げ、黒鍵を撃ち出そうとすれば彼女の目の前に、飛来する短剣があった。それは下級悪魔とは比較にならない威を持ったラ・ヴォワザンの脅威である。

彼女の身体は既に射出体勢だ。防御も回避もままならない。仕方が無い、中途半端を選ぶよりはそのまま投擲し、目の前の下級悪魔を滅ぼす事にした。前髪の隙間、下級悪魔たちの隙間に、うすら笑みを浮かべる死徒が居た。死にませんように、そう祈りながら黒鍵を撃ち出した。甲高い金属音がする。シエルを狙った短剣は霊刀に弾かれてい



た。回転しながら、どこかの壁面に突刺さる。黒鍵によつて碎かれた悪魔たちを背景に、真也が背を向け立っていた。カチャリと霊刀が音を鳴らす。

「夾撃は面白くない。数もだいたい減らしましたし、あとは俺だけでも大丈夫です。シエルさんはラ・ヴォワザンの討伐をお願いします」

「お願いします」

「お願いされました」

シエルはラ・ヴォワザンの後を追ひ、洞窟に消えた。それは第一の間と第二の間を繋ぐ道であった。下級悪魔の残兵力は2割程。彼は左手に鞘、右手に霊刀を持ち、踏み込んだ。独楽（コマ）のように身体を回し――回転剣舞――悪魔たちを斬り刻んだ。

舞い散る肉片を尻目に真也は思案に暮れていた。ジョナサンの意図が読み切れないのだ。下級悪魔の群れが居てはエルメロイが危険だ。それ故敵兵力を割く意味でも、シエルと真也は殲滅戦を選んだ。問題は何故あのタイミングでラ・ヴォワザンが仕掛けたのか、だ。

下級悪魔をけしかけ、隙をうかがっていたならば問題は無い。だが何かが気に掛かる。如何にジョナサンが魔術師たちの魂を喰らい、その力を得たとしてもラ・ヴォワザンがジョナサンの最大戦力である事に変わりは無い。この前提が正しいならば、その死徒は城壁に他ならない。それを突破すれば玉座に座する王を捕らえるのみ。そし

てシエルはその専門家（プロフェツショナル）だ。問題は無い、だが。漠然とした不安を胸にしながら、その数刻後、真也は第一の間を制圧・殲滅した。



シエルが第二の間に到達すれば死徒ラ・ヴォワザンが待ち構えていた。シエルがラ・ヴォワザンと対峙するのは初めてだったが、彼女は膨大な実戦経験に基づき己が優勢だと見通しを立てた。実際にそうであった。

ラ・ヴォワザンの（筋力B）／耐久C　／　敏捷B）に対し、シエルは（筋力A）／耐久C　／　敏捷B）である。だが彼女はこの後を考慮し“福音書”を発動させた。それは聖堂教会が構築した魔術システムであり、真祖とも渡り合える対アンデッド用の強力なものだ。この時シエルのステータスは（筋力A+）／耐久A　／　敏捷A）となる。対価として魔力消費は相応だが、魔術師100名分の魔力量を内包する彼女ならではのとも言えよう。

つまりシエルが圧倒的に有利だ。数合、投擲しあえばラ・ヴォワザンがそれを悟るに十分であった。彼女は肩に突き立てられた、黒鍵を抜き捨てた。至る所に短剣と黒鍵が突き立てられていた。二人が投擲しあった名残だが、まるで何処その誰かの心象世界で

ある。その死徒は掃き捨てた。

「50年前を思い出してしまったよ。全く忌ま忌ましい」

「あの時の埋葬機関（私たち）は見逃しましたが、今度は確実に滅ぼします。ですが一応確認します。七教会に準えた事にどのような意味が？」

「術式自体に意味は無い。ただそうやって生け贄を捧げれば、ご主人様は喜ぶからね」

「少し意外です。ジョンサン・スコットはもつと効率的だと思っていました」

「そのご主人様とはジョンサン・スコットではなく当然モレク様の事さ。でなくば60歳そこそこの若造に頭を下げるもんかい」

七とはシエルにとって馴染みの言葉だ。黙示録に登場する七つの門、七つの大罪、七大天使、そして七夜。死徒に紡がれれば不愉快な事この上ない。

「その不浄なる口を閉ざせ。滅ぼす」

「我らの罪を許し給え、我らが神の代行者、父と子の聖霊の御名において……滅ぼす。まったく、お前らは揃いも揃って同じ事しか言わないね。50年前もそうだったよ」

「それを永遠不変の教義と言います」

シエルが黒鍵を構えればどうした事か。ラ・ヴォワザンはその手にある短剣で己の胴を斬り付けた。

「……」

理解できない行動に眉を寄せるのはシエルである。目の前の死徒が己にダメージを与えているならば、無理もない。また一つ斬り付けた、そしてまた一つ。4回斬り付ければ、ラ・ヴォワザンの身体が一瞬赤く光った。5回、6回、その赤色光が強くなる。「代行者よ、その疑問に答えてやろうじや無いか」

そして7回斬り付ければ、それは始まった。7回と言う数字に根拠は無いが、その判定が為された7回目に因果はあったのだろう。ラ・ヴォワザンの狂化スキルが成ったのだ。

中年女性だった身体は膨れあがった。それは筋肉の膨張である。袖は破け、丸太のような腕があらわになる。顔面に血管が浮かび上がり脈動する。丸まった背筋が伸び、威圧すら醸し出す。巨軀を支えんと、踏み締めた脚は岩盤を砕いた。筋力、耐久、敏捷がワンランク上がる。その姿は正しく狂戦士（バーサーカー）、赤く光る全身がその証である。

「――！」

魔獣のような咆哮が空洞内に響き渡る。その音量は爆発的で、響く木霊は音響兵器のようだ。シエル（筋力A＋／耐久A／敏捷A）に対し、ラ・ヴォワザン（筋力A／耐久B／敏捷A）だ。ラ・ヴォワザンの姿が消えるとシエルは斜め後ろに黒鍵を放った。右手の4振りはラ・ヴォワザンに追従できず、そのまま暗闇に消えた。

敏捷は同格だ。事実シエルが追い付く事は難しくなった。ただし狂化は圧倒が前提である。シエルに対し筋力、耐久が劣れば意味は無い。二人が第二の間を並走するれば、先手はラ・ヴォワザンだった。彼女は短剣を正確に投擲した。理性は失つても技術は身体が覚えていたのである。

黒鍵はあくまで刺突型の投擲兵装。短剣、剣のように斬り付け、弾く事は出来ないが迎撃する事は出来る。黒鍵を持ってその短剣を撃墜すれば、死徒が撃つ短剣の威はB相当だと当たりを付けた。ラ・ヴォワザンの筋力はAだが投擲スキルはB、その威はIラック落ちるのである。耐久Aのシエルはカウンターを狙う事にした。直撃を受けたところだダメージは無い。飛来するラ・ヴォワザンの二本の短剣を敢えて受け、それと同じ時に7本の黒鍵を撃ち込んだ。シエルの筋力A十、投擲Bが生み出す威力は小銃（ライフル）ではなく砲（カノン）に等しい。ラ・ヴォワザンはカウンターで喰らい、その余剰威力で外壁に叩き付けられた。

ラ・ヴォワザンの短剣はシエルの衣類を切り裂いたのみだった。叩き付けられた壁面がガラリ、ガラリと崩れる。土煙が収まれば死徒が磔刑にされていた。首、胸、腹、二本の足と、二本の腕で計7つだ。まだ息がある。実にしぶとい。シエルは背負っていたパイルバンカーを手にし、構えた。ならば完膚無きまでに滅ぼすまでだ。彼女が唱えるのは聖霊賛美の文言である。

「天に坐す我らが父よ。御名が崇められ、御国が訪れ、御心の天地にならん事を。日々の糧を与え、人を許す如く」

彼女はボルトを引き、パイルバンカーの炸薬を薬室に装填する。

「殺害の王子よ、彼に道を譲れ。全能の神の前に汝は有罪。神の子の前に有罪。人類の前に有罪。主が汝を追放する。主は火によって生者と死者を裁きたもう」

シエルは第七聖典を死徒の心臓に突きつけた。

「父と子と聖霊の御名よつて。AMEN」

彼女が引き金を引くその直前、二本の黒鍵が飛来し彼女は飛び退いた。シエルが其の方を見れば、第三の間へと続く洞窟にジヨナサンが立っていた。

「或いはと思ったのですが、ミセスの狂化をもつてしてもシスター・シエルには敵いませんでしたか。流石、音に聞えし代行者。埋葬機関第七位。弓の称号は伊達では無い。ですが良しとします。段取りが変わるだけですから、都合が良いと言えば都合が良い」

その黒鍵はシスター・アジアの物である。間合、タイミング、投擲の軌跡、瓜二つだ、否。その物だった。まるで彼女が操られている様で、それが非常に腹立たしい。ジヨナサンに冷かし、挑発の類いは見受けられなかったが、皮肉、嫌み、嫌がらせにしては度が過ぎる。シエルは無表情なまでに怒り、その形相をジヨナサンに叩き付けると黒鍵を構えた。



## 十四話 再会

エルメロイが使い魔を行使し、第1の間に及び至った時、真也もまたシエルを追い第2の間へ向かっていた。アンデッド専門家のシエルならラ・ヴォワザンに遅れを取る筈が無い。そうすれば黒幕をぶん殴るのみだ。そう思いつつ、その間に辿り着けば、何か柔らかい物が、固い物に衝突した様な音が響いた。例えば粘土を粘土台に叩き付ける音、或いは牛肉の塊をコンクリートの壁に叩き付けるような音だ。その後、岩壁が砕け散る音、砕けた岩が地に落ちる音が続き、最後に濡れた雑巾が落ちる音がした。グシャリ、それは真也にとつて聞き慣れた音だ。誰かが叩き付けられた音に他ならない。それも岩が砕ける程の力である。焦燥に駆られ、音源を見ればシエルが蹲っていた。慌てて駆寄れば酷い怪我だ。右腕、左足、肋骨も何本か折れている。臓器へのダメージもあつた。口元、コメカミから流れる血が痛々しい。意識は無い。息も浅い。

「う……」

だが死んでいなかった。内包する魔力もまだ余裕がある。その身体には高度の治癒術が掛かっていた。安静にすれば直に目を覚ますだろう。問題はこうなった原因である。



「ラ・ヴォワザンと相打ちになったのか？」

真也の呟きに応えたのはジョナサンであった。

「いえ、相打ちなどではありません」

真也が振り返れば10メートル程先にジョナサンが立っていた。何故だろう、嫌という程にその表情が目が付いた。顔の作りは何一つ変わっていないというのに、人相が異なつて見える。穏やかな少年ではなくギラついた眼だ。野望、野心、そして狂気。彼のもう一つの顔だった。

「ミセスは私が助けた、シスター・シエルは私が倒した。随分とお早いお着きだトオサカシンヤ。お陰でシスター・シエルに止めを刺し損ないました」

どうやって倒したのか、それは重大な問題であったが、どの道目の前の男を倒す事に変わりは無いのである。幸いにして6人の魔術師の手の内は判明している。ならば対応は可能だ。

「よう。来たぞ、ジョナサン・スコット」

真也はふらりと立上がると睨み付けた。

「ボコる前に聞きたい事が二つある。何時、悪魔崇拜結社と手を組んだ」

「貴方が帰国する間際ですよ。槍が時計塔に在るとミセスから聞きました」

「それで同盟を組んだと言う訳か」

「ええ。私も探してみましたし利害も一致です」

「もう一つ。依り代となる、この意味が分っているのか。ジョナサン・スコットという人物が消える。墮天使を復活させたところでエドワード・クロムウエルの復活をどうやって実行する。制御されない墮天使がどう行動するか、分らないお前でもないだろ。死者復活の知識なんて手に入らない」

「トオサカさん。貴方は勘違いをしている。腹違いの兄など興味は在りません。私は父上を復活させる、それだけで良い」

「父？ 墮天使だぞ」

「何を馬鹿なことを。私は父上を復活させる為だけに50年歩いてきた。父上の復活が今日の前にある。父上の復活、その暁にはクロムウエルを名乗る事が許される。そう、そして私はジョセフ・クロムウエルとなる。これこそが私の望み」

真也はトントンと鞆で肩を叩いた。その表情は呆れである。

「なるほど聖杯とはよく言ったもんだ。死者の復活なんて聖杯の範疇だからな。いや、墮天使の復活なら反聖杯（リバーズ・チャリス）が適当だろ」

真也は抜刀する。『しやらん』とガラスの様な音色が響いた。

「話を通じないなら仕方無い。お前を蝕む墮天使の呪いを殺して、正気に戻してやる。いいか、ジョナサン・スコット。親父さんは死んだ。死んだ人間はどれ程求めても応え

ないし、死んだ人間を追い続ければ黄泉に引き摺られる。それをボコって教えてやる」

真也に答えたのは彼がよく知るジョナサンであった。温和で礼儀正しい彼である。

「残念ですよトオサカさん。貴方は私と同じだと思っていたのに。貴方は持つ者の側だった。私を影であざ笑っていた」

「笑ってなんていない、と言っても説得力は無いよな」

「でももう良いのです。これで屈辱に塗れた日々から解放される。憧れるだけだった天空に羽ばたける。私は力を手に入れた」

「俺は俺のエゴでお前の50年に連なる狂った願いを台無しにする。恨むなら好きにしろ」

「誰がそれを許すのですか?」

「決ってるだろ。お前に対し唯一責を持つ存在、教授だ」

真也は霊刀を掲げ刺突の構え。その魔眼が狙うのはジョナサンの心臓に、巣くうモレクの呪いだ。それを殺せば片が付く。万が一正気に戻らずとも、力を失うなら、後は周囲との折衝だ。周囲の環境と折り合いを付けるしか他はない。それは誰もがしている事である。

だがどうした事か。対峙するジョナサンはゆるりと立ち尽すのみだ。その距離自動車5台分。緊張も見せず、何がおかしいのかも分らない程に穏やかに微笑んでいた。ま

るでデート相手を見ているかの様だ。ジョナサンは真也の能力を知っている。6人の魔術師を喰らった程度では歯が立たない事も分っている筈だ。強襲を掛けるならまだしも、ここは見通しの良い、岩で出来た空間である。

「フェイル・セーフか」

「はっ」

どの様な安全策か知らないが、真也に出来る事は魔眼を用い、その呪いを殺すだけだ。ならばそれに従うのみである。真也の姿が掻き消えれば、彼は転がり地を這っていた。地を這うのはジョナサンではなく真也である。それは一秒に満たない駆け引きだった。霊刀の切っ先が、モレクの呪いを捕らえる瞬間、ジョナサンは真也の右腕を掴むと足を引つ掛け、いなした。まさに闘牛士の要領だが真也の敏捷はA、常人では捕らえきれない速度領域に、少女と見間違うばかりの男は余裕を持って追従したのだ。

むくりと起き上った真也は平静を保っていたが、その事実困惑するより他はない。何よりジョナサンが放つ威圧に覚えがあった。それは3年前の事。アインツベルン城で対峙したバーサーカーのそれと酷似していたのである。強大という意味だ。

3年前に自己が途切れた真也にとつてそれは経験では無い。だが実体感を持つ情報でもある。必要以上に恐れはしなかったが、目の前の状況が理解できなかった。直接攻めるのは芳しくない。ならば間接的に狙うか。それとも来ているであろうグレイと合

流するのを待つか。真也がそう考えれば、ジョナサンはその場で、軽く跳躍し始めた。片足ずつ大地を踏み、ステップを刻むようにも、踊っているようにも見えた。信号待ちをしているランナー、これが表現としては適當だろう。お見通しと言わんばかりである。

「トオサカさん、貴方は勘違いをしている。贅を喰らうとは父上が力を付けるという意味です。いえ、この世界における影響力を増しつつある、と言う表現が正しいでしょうか。私は父上の化身、喰らった魔術師のその術の再現など、ただの付随効果です。私は父上の加護を受けている」

ジョナサンが消えたと思えば真也の懐に潜り込んでいた。

「っー」

知覚はしていた。だが追従できなかつた。真也の敏捷はA、ジョナサンはA+だ。真也は心眼（偽）Bを以て上肢を逸らす。真也の首があつた空間をジョナサンの指が空を切つた。鉤爪のような指の形であつた。喰らえば抉られていただろう。ジョナサンのスペックを一瞬で悟つた真也は、円弧の様に身体を回すと踏み込んだ。離れては主導権を取られる。

真也は182センチ、ジョナサンは149センチ。やりづらい事この上ないが、せねばならぬのである。真也はシフトウエイト。踏み込めばジョナサンは笑つていた。敢

えて踏み込む事を読まれていた。だがそれは真也の読み通りだ。真也は右手に持っていた霊刀を掲げ打ち下ろす、それを受け止めようとジョナサンが華奢な左手一本を翳せば、真也はそのまま遠心力を用い霊刀を放り投げた。突然の状況にジョナサンは霊刀に意識を取られた。真也のそれはフェイントである。

真也は跳躍し右膝をジョナサンの顎に撃ち込んだ。プロレス技の一つ“ニー・バット”である。筋力はあれど体重の無いジョナサンは呆気なく仰け反った。その華奢な身体が宙に浮く。真也の膝は直撃だった。ダメージを追わせたか分らないが、この機は逃せない。ジョナサンが敏捷で上回る以上、動きを止めねば魔眼は使えない。なにより攻撃するのみである。宙を舞っているジョナサンの足を掴むと、一本背負いの要領で足元の岩盤に叩き付けた。

これで2撃目。そう見込みを立て、ジョナサンの腹に“ストーンピング”つまり踏み付けようとすれば、蹴り飛ばされたのは真也であった。彼の身体は宙を舞い、弧を描き、壁面に叩き付けられ落下した。ジョナサンの筋力はA+、真也の耐久はC。3ランク差の攻撃を受けた真也は、一蹴りで戦闘不能に陥った。真也の攻撃は全く効いていなかったのである。ジョナサンがふらりと立上がれば、真也を見下ろした。

「みつともないですね、トオサカさん。いえ、しぶといですか。まるで生ごみに集る黒い虫のようです」

四つん這いの真也は見上げると笑みを浮かべた。当然空元気である。口元から血を流しては説得力など皆無だろう。

「……これでも地を這うのは慣れている。お前には想像できないだろうけどな」

「成る程、先程のフェイントと良い、相当な実戦経験をお持ちのようだ。ですがこの実力差は致命的です。貴方の攻撃は一切私に届かない」

ジョナサンは真也の土手つ腹に蹴りを入れると、真也は再び岩盤に叩き付けた。

「がつー！ あ、ぐ、」

真也は追加ダメージにより戦闘不能どころか行動不能に陥った。崩れ落ちようとすればジョナサンは蹴りを以てそれを支えた。彼の左足の裏が真也の右二の腕を砕いていた。否、押し潰していた。

「……っ！」

「さて、これで貴方は霊刀を握る事すら叶いませんが、念には念を入れます」

ジョナサンは左手で真也の右肘を、右手で右肩を掴むと、筋力A+を以て引き千切った。骨折していた右腕の上腕骨は、割れる煎餅の様な音を立てて、千切れた。上腕二頭筋はゴムの様に伸ばされ、伸びきれなくなると、筋繊維が一本、また一本千切れ、最後は全て千切れた。心臓から肩を通り指先まで繋がる腋窩（えきか）動脈、上腕静脈も破れ、千切れた。ジョナサンは真也の右腕を引き千切ったのである。それは痛みの範疇を

通り越し、脳髓を焼く程の刺激であった。

「ぎやああああああああああああああ!!」

余りの痛みに動けない筈の真也はのたうち回った。だが暴れど、藻掻けど、ジョナサンは微動だにしなかった。彼は真也の首を掴み岩壁に押し付けた。

「分りますよトオサカさん。圧倒的力で打ち拉がれる悲嘆、そして圧倒的力で打ち拉ぐ快樂、私はその両方を知っている。さぞ辛いでしょう」

激痛に苛まれ、身を震わせる。口腔と鼻孔から血を流し、左手で右肩を押さえた。直接断面に触れないからだ。その声は震えつつも明確だった。

「……k、この馬鹿が、御約束をやりやがって。ジョナサン、お前の頭でも分る様に言つてやる。分不相応の力は破滅のみだ。お前は力に使われてるんだよ」

「随分と見苦しい負け惜しみだ。格を疑う発言です」

「人として生きる事に強い力なんて何の役にも立たない」

「この期に及んでヒトの振りですか。バケモノだというのに」

真也は血を吐きながら続けた。

「お前はゲームかアニメばかり見て、現実を知らない連中と同じだ。敵だから殺すべきだ、これは戦争だから殺すしかない。格好良く聞こえるだろうが、中身が成っていない。聞こえの良いところしか見ていない。敵にも嘆く身内がいる。それに目を背け続けられ



ば、それが当然だと考える様になる。その時人間では無くなり、真正正銘バケモノとなる。目を覚ませ、麻薬と同じように後戻りできなくなる」

「失礼しました。トオサカシンヤ、貴方は確かに2流だ。レディ・エーデルフェルトを助けようとした事、シスター・シエルもそうだ。強い力をもつモノは純粹でなくてはならないと言うのに、揺れ動く力など争乱の原因でしか無い」

「その不純さ、均衡を取ろうとするのが人の世だ」

「率先してその様な物を知ろうとするなど、不可解にも程がある」

「だから純粹を選ぶか。墮天使の力を以て一切を打砕き、全てを無に帰すか。確かにそうだ。何も無ければ争いも嘆きも無い。心もな。だからお前は馬鹿だと言っている。親父さんだけを求めるなら分る、ならどうして教授に執着する。それは揺らぎの証だ。だから俺はお前を助けに来た」

「確かにそうです。だからこそ私は師匠を喰らい、殺し、父上を復活させる。その時純粹となる。トオサカシンヤ。純粹とは余分な物を削ぎ落した存在。貴方のこの右腕が持っていた日本刀もその権化であるというのに、貴方は余分なモノが多すぎる。それこそ分不相応だ」

ジヨナサンは真也の右手を放り投げると、右手で真也の首を絞め、更に壁に押しつけた。そして腹に左拳を打ち込んだ。壁に押しつけられているというのに、真也の身体が

くの字の曲がった。その威力推して知るべし。臓器破裂。食道から血液や体液が逆流し、大量の血を吐いた。眼球も反転する。

「……………」

最早悲鳴すら出せない。藻掻く事すら叶わない。その飛沫がジョナサンの頬と唇に付着する。ジョナサンが感じているのは、はち切れない程の高揚感そして至福感である。反撃されない安心、ダメージを受けない満足。圧倒的な力による一方的な蹂躪、虐殺。笑みが堪えきれない。どの様に止めを刺すか、ジョナサンが考えていると、彼はブロードソードを左の腕で受け止めた。その剣はグレイが魔力放出によって強化した鉄パイプである。

グレイは奇襲を企てたが彼女の筋力はB、ジョナサンの耐久はAだ。ダメージは与えられなかった。ジョナサンは強固な岩盤に右脚を立て支えとし、左脚でグレイを蹴り飛ばした。ジョナサンの筋力はA+、グレイの耐久はB、それは2ランク差である。直撃を喰らえばダメージは甚大が、彼女は直感を用いて辛うじて低減させる事に成功した。だが元々と戦闘向きでは無い性格だ。岩壁に叩き付けられた衝撃で彼女は失神した。その内弟子を気遣うのはエルメロイである。彼女の無事を確認すると彼はすつくと立ち上がりジョナサンを見据えた。

「それがお前の言う成長と成果か。なるほどサーヴァント級、それも最上位だろうな」

「ええ。貴方の弟子はこれ程に強くなりました。如何ですか、師匠」

「もう、お前は人間でも弟子でもなくなってしまった、と言う事か」

「どの様な意味ですか？」

「もがき足掻き、答を求め続ける存在が人間だ。到達してしまえばその存在意義を失い、後は消滅するのみ。墮天使の復活、これは是非に関わらずお前に師は必要ない」

「ジョナサンは一瞬、表情を消したが再び笑みを浮かべた。それは嘆きを隠す無理矢理の笑みだったが、もはやエルメロイに氣遣う理由は無いのである。」

「ではこう呼びましょう。ロード・エルメロイ2世には父上の復活にご協力頂きます」

「良いだろう。その代わり二人は置いていく」

「ミス・グレイか、トオサカシンヤ、どちらを選んでください」

「私が赴くと言っている」

「困った方だ。ならば私が選んで差上げましょう」

エルメロイがシエルに言及しなかったのは狙いである。事実、真也を圧倒し増長したジョナサンはシエルを見落した。彼はレオナルドの糸を繰り、真也がフェイントで放り投げた霊刀を手繰り寄せると、意もなく真也の心臓を貫いた。瀕死の状態であった彼は小さく痙攣するのみだ。ジョナサンが口付けを躲せばその唇が血で濡れる。彼は意識の無い真也にこう告げた。

「貴方の力、実を言うと少し惜しい。その身体能力とその魔眼を取込み、我が物としたい。ですが既に6人を取込んでいる。貴方を圧倒する為、予備に手を付けてしまった」  
「その為のタリーア・メルクーリ、6人目か」

「ええ、5人分では彼と同程度でしたから。最後の一人はエルメロイと決めていましたし、なにより貴方の魂で父上を穢すなど我慢なりません。さよならです」

漸く解放された真也であったが、崩れ落ちる事すら許されなかつた。心臓を貫く霊刀は岩壁に達し、固定されていたからだ。磔刑と言わんばかりである。

「師匠、ではこちらへ」

ジヨナサンはラ・ヴォワザンを抱えると歩き出した。弟子だった男の背を見るエルメロイの懐には拳銃があつた。それは勿論彼自身に使う物である。真也は絶望的、グレイは戦闘不能。発砲したところで当りはしまい。当つたところでダメージは期待できない。シエルとグレイが回復し、合流できるかが全ての鍵だ。



岩壁に磔の真也は首を垂れていた。瞼は開いていたが、その焦点は合っていない。動向は開き掛かつていた。身体に力は無く、心臓を貫く霊刀で強引に立たされているだけ

だ。千切られた右腕からの出血は止めた。腹部にある大動脈、大静脈の破裂は応急処置で塞いだ。胃、腸、消化器官の修復は後回しだ。肝臓もダメージを負っているが、もとと丈夫な臓器なのでこれも後回しとする。左肺は出血により機能停止。右肺に異常は無し、呼吸の確保はできた。心臓は微細動状態だ。血流自体は魔術によつて成しているが、根本的に治癒せねば遠からず完全に停止する。そうなれば真正銘死亡だ。左腕を動かし、霊刀を抜き、心臓の蘇生を最優先にする。これ以外に戦闘復帰する方法は無いが、生憎と身体は動かない。左腕を動かし、霊刀を抜くには生命維持の分を回さねばならない。それでは本末転倒だ。

“契約せよ”

世界の声が聞こえる。シエルではジョナサンに勝てまい。モレクが復活すれば考える必要も無くお終いだ。彼女が死ぬ事だけは避けなくてはならない……彼女？ ジョナサン・スコットを助けるのでは無かったのか。

“契約せよ”

“……彼女を悲劇的な死から救え。これを対価に死後を捧げ、”

“馬鹿な事考えるんじゃないわよ”

それは肉声では無い。言語ですら無かった。空気が伝える音、水が伝える音、レールが伝える遙か彼方の音。パスを介し魔力を媒体に伝わった思念である。グレイが壁に

張付けにされた真也を降ろそうとすれば「触らないで」その声が響いた。第2の間に現れたのは凜とキャスターである。グレイは初対面のキャスターに違和感を感じたが、凜の連れなのだと取り敢えず気にしない事にした。

「リンさん。シンヤさんが」

グレイの声は震えていた。

「まだ死んでないわよ」

凜の声には焦りはあつたがしつかりとしていた。

「真也は強運持ちだから」

「狂運?」

「強運よ。私と繋がってるんだから」

手を翳しキャスターの唱える呪文は一小節。霊刀が生き物の様に抜けたが、血が噴き出す事は無かった。彼女の呪文は霊刀の抜き取りと止血である。ふわりと真也の身体が浮ぶと、ゆつくりと地に降りた。凜が真也の胸に手を翳し呪文を唱えれば、心臓のステータスが彼女の脳裏に表示された。それはキャスターが3年前に刻んだ術式である。主機能はタイマーだがモニタリングも可能だ。コンディション「レッド」 停止寸前であつたが右心室の外壁に鋭利な穴が開いているのみだ。これならば3年前より遙かに楽である。何より精神構造への干渉は不用で塞ぐだけで良い。

「キャスター。真也の心臓を治癒するから進行を遅らせて」

「凜様。私が直接治癒します」

「だめよ、この心臓は私のなんだから。キャスターの成分を混ぜたくない」

「ではどの様になさるおつもりですか」

「真也自身に治させる」

凜は真也の左側にしやがみ込む。揃えた両膝は彼の左二の腕に触れていた。黒い髪を手櫛で背に流す。彼女が結ぶのは古の力ある言葉であった。

Obscura luna dea maledictionem. Dicit  
Hecate.

(其は闇月の女神に基づく呪いなり。その名をヘカテー)

Princeps Colchidem Hecatomaledictio  
nem. Est Media.

(其はコルクスの王女が織りなす呪いなり。その名をメデア)

Iussit amet. Veteri aperire ostium a  
met.

(我が右手に鍵一つ、その鍵を持ち古き戒めを解く)

Old constraint quam feci. Clavem est  
meum.

(その戒めは我が刻む呪いなり。その鍵とは我である)

拘束術式限定解除。申請コード“Lindension”

“災厄なる翼 (cladis ala)” を縛る最後の拘束が解け、心臓の穴が急速に塞がり始める。その様子に安堵すればキャストが転がっていた右腕を持つてきた。繋ぐのは心臓が動き始めてからだ。グレイはキャストの持つ切断された腕に、目を白黒させていた。ところが。心臓は一向に動き出さない。呟くキャストは苦惱めいていた。

「……マスターには迷いがある様ですわね」

凜はキレた。

「ああもう。世話が焼ける!」

凜は左腕の魔術刻印にアクセスすると、その左手を真也の胸に押し込んだ。心臓を鷲掴み、数度掌握を繰返せばそれは鼓動を打ち始めた。循環系を優先に修復され、臓器も逐次回復していった。キャストが千切られた右腕を繋げれば彼は仰け反り、咳き込んだ。数度口から血を吐いたが、肺の修復が終わればそれも収まった。血液がまだ足りな



いが、魔力で補った。程無くして目を開けば、彼は義姉と従者の姿を確認した。

「そう、ルーンの石を追ったのか」

「ちよつと、最初の一言がそれ？」

真也は己の指が作り出した指と、眼に映る指の数を確認すると、こう言った。

「助けてくれた事には感謝する。このまま帰ってくれ」

「今度死んだら助けないわよ」

「この状態（フルパワー）なら何とかなる」

彼は立ち上がると身体の状態を確認した。右腕に痺れがあるが、数分で消えるだろう。体力は回復させたが、残りの魔力量は30%程だ。真也はそのまま背を向けた。

「ありがとう」

そう言うのと歩き出した。霊刀と鞆を拾えば義姉は追い掛けてきた。

「待ちなさいよ」

「急いでる」

「話があるのよ」

「今度にしてくれ」

「聞けつての。私の言う事が聞けない訳？」

背を向けたままの真也は足を止めない。振り返りすらしなかった。凜にあるのは躊

躊躇いと後悔と。僅かに目を背けてこう告げた。

「ごめん、私が間違ってた」

「間違つてない。姉さんは正しい」

「なら」

「けどな。数年後、またそう思わないって、それが断言できるか？ 気持だけではどうにもならないと言つたのは姉さんだ」

「だつたらまた私が我が儘を言い出さないように、ちゃんと掴んでおいて」

「もう、賽は投げられたんだよ。だから帰れ」

「いや」

義弟は振り返ると左手の平を義姉の額に宛てがった。

「なら実力行使だ。これから姉さんのオドを乱す。暫くここでじっとしていてくれ」

「恨むから」

「好きにしろ」

「耐えられないくせに」

「姉さんは選べと言つた。俺は選んだ。これが全て。お休み。目が覚めた時全部終わってる」

「私ね、真也の事を愛してる」

彼の手が止まった。彼は無表情だったが、込上げる感情を必死に抑えていた。

「私だつてもう真也有りきなよ。真也は私の事どう思つてる？」

「それはこたえられない」

「答える？ 応える？」

「こたえられない」

「ほんと意地っ張り。これ以上は聞かないから」

「こたえられ、」

彼の口は彼女の唇で塞がれた。

「聞かない、つてこういう意味」

「……帰れ」

義理の弟が背を向ければ、義姉は腕を組みため息を吐く。睨み付けもした。

「アンタのランサー好きは筋金入りだわ。私と桜の為ならあつさりと手の平を返した3年前が嘘みたい」

「もうあの時の俺じゃ無い。姉さんに開放された時にこうなった」

「そうね。素直に言う事を聞くのは楽だけれど、それじゃ面白くないわ」

義理の弟はシエルを背負い、第七聖典を手につと、心許無い足取りでエルメロイの後を追った。最後の間へと続く洞窟に消えていった。

「キャスター、アンタはここで待機してて。後は私たちでやるから」

「何をなさるつもりですか」

「困難な英雄的行為を成し遂げる、これがランサーへの道だつて信じてるのね。信奉している人間を改めさせるには言葉じゃ駄目、事実をキツく見せ付けないと。親（ランサー）離れも兼ねて二石二鳥」

「気付いておられましたか」

「当然でしょ」

「分かりました。弟子の試験にちょうど良いですし、切開の御手並拝見といきましょう」

「卒業試験よね？」

「もちろん中間試験ですわ」

二人の会話について行けないのはグレイである。

「あの、私には何が何だか。リンさん。この人だれですか？ その、随分綺麗な人ですけれど」

凜とキャスターは見合ふと思わず吹出した。今それを気にするところなのか、と言う意味だ。

つづく！

## 十五話 反撃

最奥にある第3の間に魔法陣があつた。円筒形の、広大な空洞の中にあるそれはへりが収まる程に大きく、淡い光を放っていた。その魔法陣の中心に突き立てられるのは、神の子を殺した槍である。エルメロイは葉巻の煙と共に吐き出した。

「成る程な。天使召喚術式であるジョン・ディーの大印章（アエメト）を墮天使使用に書き換えた。下級悪魔を呼び出し、槍を使い受肉させた。ここまでは予想通りだが、これ程の霊脈が発見されずに残っていたとは驚くより他はない」

「父上の遺産です」

「争うに価値のある霊脈だな」

「ただの付随物です」

エルメロイが周囲の確認を行えば、空洞の縁にルヴィアの姿があつた。ラ・ヴォワザンの針金拘束の呪により拘束されていたが異常は無い。事実彼女は射殺さん程にジョナサンを睨んでいた。さすればエルメロイも睨みだす。

「随分と遅いご到着ですこと。授業に遅れる生徒はもう叱れませんわね」

「これでも割増料金を払い、急がせたのだから」

「出し惜しみをしたのではなくて？」

「私は君ほど裕福では無い。それは無理な相談だ」

「妹御に頼めば良いでしょうに。チューターが頭を下げれば彼女は二つ返事で応じますわよ」

「彼女の話はするな」

「ところでチューターは一人ですね」

「そう言う事だ」

ジョナサンが割って入った。

「さて、ロード・エルメロイ。感動の再会はそこまでにして頂きます。どうぞこちらへ」

槍の元へ誘うジョナサンは姫をエスコートする騎士の様だ。ジョナサンの後を続くエルメロイは不愉快極まり無い。

「二世を付けろ。何度言わせるつもりだ」

「もう良いでしょう。あまり卑下されては、貴方の教え子たちが気の毒というモノです。生徒には責を持つ、そうおっしゃったのは貴方だ」

ジョナサンが背を向けている事を確認し、エルメロイは懐の拳銃に手を掛けた。突然振り向いたジョナサンの表情には余裕が消えていた。見抜かれたのかとエルメロイは覚悟を決めたが、そのちぐはぐな瞳は、エルメロイを通り越し、少し離れた所に立つ真

紅の外套に注がれていた。凜と真也である。悠々と歩くその様は隊列を成す騎士のよう。

「やはり戻ってきましたわね……」

凜の姿を認めたルヴィアは思わず悪態を付いた。多少は申し訳なさそうな態度をしると、言う意味である。



ジョナサンは抱えていたラ・ヴォワザンを魔法陣の中央に置くと、まず話し掛けたのは凜であった。ワンクツション、心の苛立ちを落ちつかせる為である。

「ミス・トオサカ。とうに帰国されたと思っていましたか」

「質の悪い奴に捕まった、それを思い出したって事よ」

彼女は挑発的な笑みを以て返答とした。そして本命である。彼女の横に立つ男を睨みつける。

「トオサカシンヤ。貴方の姉上は随分と強力な治癒術をお持ちの様だ。ですがあんな目に遭っていないながら、性懲りも無く現れるとは。理解に苦しみます」

「死ぬのは慣れてる、ギルガメツシユ様に一回、バカシロに一回。楽勝楽勝」

「ギル？ バカシ？」

「こちらの話だ。けどな。ジョナサン・スコット。半殺しにされた落とし前は付けるぞ」  
「漸くその気になりましたか」

「ああ。ジョナサン・スコットを殺す。そうすればジョセフ・アッカーソンは帰ってくるからな」

笑みを浮かべていた、ジョナサンの表情が再び鋭くなった。怒りよりは苛立ち、憎しみすらあつた。

「貴方という人は、未だ私を見下ろすのですか。私に圧倒されておきながら、それを理解できないとはどれ程の愚かさだ」

「笑えよ、ジョナサン・スコット。そんな蔑めしいツラだと、追い詰められた馬鹿ツラにしかみえないぜ？ ああ？」

「……良いでしょう。その高慢かつ愚かな魂もろとも挽き肉（ミンチ）とします」

二人が精神的な剣戟を繰り反せば、エルメロイの口調は苦惱めいていた。隣の凜にこう呟いた。

「ミス・トオサカ。君の弟はゴロツキの様に見えるが、それは何故だ」

「昔の話です。その手の連中を相手に、止む無く喧嘩ばかりしていましたから。あの手のパフォーマンズが必要だっただけです。それだけです」



困ったものだと言ふ。凛は言う。思わずため息も出た。

「そうか。パフォーマンスならば良い」

そうは言うエルメロイであつたが、噴かす葉巻の煙はうねりまくつていた。不審感は拭いきれない。ジョナサンは仇でも見るかの様に歩み寄る。それに応じて真也も一歩踏み出した。凛が言う。

「真也。強化の術は？」

「要らない」

「なに？ この期に及んでまだそう言う事を言う訳？」

「ジョナサンとは肉弾戦（ガチンコ）だ。ボコつてぴーぴー泣かせて、その後 ゆっくり たつぷりと時間を掛けて、散々いびつた後にモレクの呪いを殺してやる」

「ひよつとして根に持つてる訳？」

「持つてない」

「気付いていない様だから言うけれど。今の真也の顔はすごい陰湿よ。2流の悪役みたい」

「俺は中道だ。こういう事だつてある」

「まったく。なら霊刀寄越しなさいよ。預かるから」

彼は躊躇つた後手渡した。真也の背を見送るエルメロイは言う。

「ミス・トオサカ。今度は能力の話だ。君の弟は今までと随分と印象が異なる」  
「そうでしようね。今は無制限ですから」

「サーヴァントが受肉すればあの様な印象なのだろうな」

「生憎と正体は私も知りませんが、もう一度サーヴァントだつて言つたら幾らロードでもガンド撃ち込みます」

「それは気を付けるとしよう」

彼が葉巻を咥えれば灰が落ちた。



二人は円弧を描きながら徐々に間合いを詰める。まるで渦巻きに落ちるかの様だ。激しくガンを飛ばしあえば、それは静かに始まった。仕掛けたのは真也であった。身長差から間合は真也の方が広い。加えて敏捷も真也が上だ。真也の右ストレートはジョナサンの頬を打ち抜いた。真也の筋力とジョナサンの耐久は共にAである。今度はダメージが通った。

だがそれはジョナサンにとって織り込み済みである。彼は仰け反りつつも、その腕を掴み、関節を逆に決め、一本背負いの要領で投げた。足元に広がる岩盤に叩き付ける腹

積りだ。真也はそれに逆らわず跳躍すると、叩き付けられる直前に、脚を振り回しジョナサンの頭部に蹴りを打ち込んだ。その蹴りはジョナサンの腕によつて防御され、ダメージとならなかつたが、その対価として真也は自由となつた。

ジョナサンの筋力A+によつて、砲弾並みに勢いの付いた真也の身体は、勢いが止まる事を知らず、岩壁に向かつて射出された。真也は手足を振り、姿勢制御。見上げる程に高い壁面に着地すると、爆発的な音を立てた。まさに砲弾が壁面に撃ち込まれたかの様だ。噴煙が渦巻き、岩の破片が飛び散つた。その煙の中から真也が飛び出すと、すわやと着地した。会話すら難しい距離をジョナサンと真也は睨み合つていた。二人の応酬は一秒に満たない。ジョナサンの物言いは、不審と苛立ちである。

「何をしたのですか。先程と全く違う」

「少年漫画で良くあるだろ。キレてパワーアップするつて奴。ほら、戦闘民族サイ、」

「巫山戯ないで頂きたい。その様なデタラメなどフィクションだ」

「そうか？ 先日まで2流だったお前が今じゃサーヴァント並み。デタラメはどつちだよ」

「二流などと言わないで頂きたい。そうでは無いから私はここまで辿り着いた」

「自分の思い通りにならないからつて、カツカするなジョナサン・スコット。あまり熱くになると足を掬われるぞ……俺にな？」

この場に綾子もしくは桜が居れば懐かしむ程に、真也は悪い顔であった。初めて見るその姿に凜とルヴィアは苦悩するより他はない。ジョナサンはギリと歯を食い縛り、その端正な表情を歪ませた。二人に圧倒されつつも冷静に解析するのはエルメロイだ。彼は葉巻を嘖かしつつ。

「敏捷は君の弟が上、筋力はジョナサンが上。耐久はジョナサンが上だな」

凜が聞く。

「追従で来たんですか？」

「強化した視力と、状況判断だ。いずれにせよ小手調べはここまでだ。互いのルールの押し付け合いになるだろうが、君の弟が不利だ。ジョナサンから一発受けただけで致命打になりかねない」

エルメロイの発言通りに二人の姿が消えた。二人は空洞内を縦横無尽に駆け始めた。大地を蹴り、壁面を蹴り、天井を蹴った。それこそピンボールの様だ。互いに素手である以上、近付かねば攻撃はできない。だが真也は敏捷を活かし、擦れ違い様に、微妙な攻撃をしてくる。攻撃を仕掛けると思えば遣り過ぎし、遣り過ぎすかと思えば、微妙なダメージをジョナサンに与えた。

ジョナサンは擦れ違い様に小石をぶつけられ、着地に失敗した。さすが真也は体重と敏捷を掛け合せた蹴りを打ち込んできた。文字通りドロップキックと言う訳だ。着

弾。岩盤が砕け、爆弾の様にそれらが巻き上る。当然ジョナサンは回避していた。姿勢を整え、警戒する。飛礫が収まれば真也の姿が見えない。どこだ？ 訝しげに見渡せば突然、大小様々な飛礫が再度巻き上った。現れたのは真也である。彼は自分の開けた穴に隠れていたのだった。

(小細工を……！)

ジョナサンがそう踏み込めば真也はぴつと天井を指差した。2度も3度もフェイントに引つ掛らない、そう真也を打ち抜こうと踏み込めば、ジョナサンに影が落ちた。彼の頭上に直径一メートル程の岩があった。真也は飛礫の巻上げに紛れ、放り投げたのである。ジョナサンは押し潰された。プチ、まるで虫が潰されたかの様だ。事実ジョナサンはそう思った。彼は筋力と耐久に物を言わせ、その岩を疎ましそうに打ち払う。真也に向けて砲弾の様に飛び出した。

「トオサカシンヤアアア！」

筋力A+に加え魔術師たちの体術を得ているジョナサンであったが、空中戦は未知の領域である。足腰の踏ん張りが効かねば、打撃技の大半は無効化される。ミサイルの様に空中を飛び、運動量に物を言わせ、真也に殴りかかろうとすれば、その拳を脚ではたかれた。体操選手の様子に器用なものである。

ジョナサンは文字通り飛翔できれば、と悔いたがどうにもならない。だがそれは真也

も同じである。負ける訳にはいかないのだ。二度目のアタック。ジョナサンは真也の軌道を読み、ほぼ向い合う軌道で跳躍した。レール上を向い合って走る電車といえば良いだろう。

空洞の端と端から全力に近い速度で衝突すれば、如何にいなそうとも、その衝撃は甚大だ。もつれ込み、捕らえられれば、それはジョナサンのペースになる。目の前に真紅の外套が迫る。それは衝突する直前だった。当の真也は手足を振り回し躲したのである。手足の質量を利用した姿勢制御。散々飛び跳ね、投げられ続けてきた真也にとつて、空中戦は庭だった。擦れ違ったジョナサンはそのまま、弧を描き大地に着地する。擦れ違い様見た真也は笑っていた。微笑みという種類ではない、侮蔑、愚弄、腹に据えかねる笑みだった。

それを繰り返す事しばらく。真也が天井に着地すると、眼下に広がる空洞を一望できた。エルメロイ、凜、そしてルヴィアを助け出すグレイの姿も見えた。視界の端には、壁に着地しているジョナサンの姿が見える。戦いの最中に余所見をされては、腹立たしい所の話では無い。

「ちよこまかと。まるでハエの様です」

「それを追えないお前はハエ以下だな」

悔しいが、嫌み、皮肉、性格の振れ具合。魔術師戦闘はともかく超人戦闘は真也が上

だ。

「日本に來いよ。ハエ取り紙をプレゼントしてやる。ぶら下げるだけの、とっても簡単な道具だ」

「……複雑な道具を扱えないというのか!」

「実際に内包している力を使い切れてないだろ。ま、ハエすら捕らえられないなら仕方が無いけどな」

ジョナサンは癩癩の一步前だった。このままではどの様なミスを冒すか分らない。故にジョナサンは一計を案じた。素直に経験した事を応用するのだ。彼は天井に着地すると見せ掛け、その岩盤を砕いた。天盤が崩落すればその岩たちが、真也の予想軌道上に降り注ぐ。

「っー」

真也は弾けるものは弾き、そうで無いものは、足場にし遣り過ごした。浮遊石の八艘飛びである。それがジョナサンの狙いだった。彼は天盤に手を付くと、その筋力を活かし、落下途中の、最も手前にある岩を蹴り飛ばした。それはビリヤードのキューボールに他ならない。キューボールとは、唯一突く事の出来る白いボールの事だ。落下する岩の一群に突っ込んだそのキューボールはある岩に当り、その岩はまた別の岩に当る。連鎖的に繰返し、全ての岩の落下軌道が変わった。当然、その余波を受けるのは真也であ

る。足場にしていた岩と、足場にする予定の岩が踊り狂い、為す術がない。

有限ではあるが、数えるには困難な数の岩が大地に落ちる。空洞どころか山自体を震わす程の地響きが起これば砂塵が巻上る。高速で落下するジョナサンが着地すれば、それに耐えきれず足場の岩盤が砕けて割れた。

彼の前に落下した岩々が広がっていた。落下軌道から岩山には成らなかつたが、平均5トンの岩が組立体操程度には積み重なっていた。総重量は30トンは下るまい。例えサーヴァントでも致命的な重さだ。

ジョナサンが用心深く当りを搜索すれば、岩の影に真紅の切れ端があつた。迂闊に近付いては危険だ。彼は2トン程の岩を持ち上げ、投げ付けようとすれば、何の前触れもなく投げ付けられた。岩陰に隠れていた真也はジョナサンの頭を脚で挟み、空中で一回転、ジョナサンを頭部から強固な岩盤に叩き付けたのである。右ストレートに続き、真也の2撃目が入った。

「フランケン・シュタイナー！」

ルヴィアは拳を握り、思わず叫んだ。岩を持ち上げていた為、ジョナサンは反応が遅れたのであつた。真也はジョナサンが持ち上げていた岩を、地に這うジョナサンに叩き付けた。追加ダメージ。通算3撃目だ。

「……」



凜とグレイは声が出せなかった。迂闊にも、ジョナサンに同情すらしてしまった。パイプ椅子で攻撃するプロレスラーと脳内変換したルヴィアのみテンションが上がりつつあった。

真也の目の前にある岩が揺らげばごろりと転がった。耳障りな音と共に、現れたのは俯せから立ち上がる途中のジョナサンである。真也はふらつくジョナサンの立てた膝を踏み付けると、後頭部を踵落としにした。それは武藤敬司を祖とするプロレス技の一つ「シャイニング・ウイザード」の亜種技だ。真也の攻撃はこれで4度目。ジョナサンは戦闘不可能状態に陥った。うつ伏せのジョナサンが見上げれば、黒い長袖長ズボンの真也が腕を組んで見下ろしていた。脱いだ外套を囫としたならば当然である。真也は言う。

「やっぱりか。魔術師たちの魔術は盗めても戦闘経験は盗めていない。そりやそうだな。人格が経験によって形作られる以上、他人の経験を自分の物にすればその影響を受ける」

「なぜ」

「この空洞には障害物もないから、岩を応用する戦い方を見せれば真似すると思った。お前が撃ち込んだ岩に紛れて、連鎖する前の小ぶりな岩に外套を包ませ、放り投げた。それをお前は誤認したって事だ。つまり仕掛けた罠が逆に、お前自分の首を絞める罠に

なった。ただ俺にとつても無茶なタイミングだったから、着地に失敗して頭から突っ込む羽目になったけれど……ま、その甲斐はあった」

「そうか。その外套の真紅は視線誘導も兼ねていたと」

「いんや。ただの姉の趣味だ。葵さんは若葉色だし……そうそう葵さんって俺の母親だ。凄い美人だぞ」

「……巫山戯るのもいい加減にしろー！」

「やかましい」

渾身の力を揮い上肢を起したジョナサンの顔を真也は蹴飛ばした。

「ぶっー！」

「やかましい」

そしたら今度は踏み付け始めた。何度も何度も踏み付けた。

「ぐっー！ がはっー！」

「やかましい」

踏み付けるに飽足らず、踵をねじ込みもした。顔どころか、腕、手、腹も踏み付けた。真也のブーツは軍用のモノだ。靴底にある滑り止めは、ヤスリと見間違うぐらいに、頑丈で鋭利である。その靴を以て美少年（ジョナサン）をいびる大柄の男（真也）。それが如何に凄惨な光景か、誰が想像できようか。

「やかましい、やかましい、やかましい」

踏み続ける真也の陰険さに凜は頭を抱えた。エルメロイは黙って葉巻を嘖かしていた。殺され掛かったのだから無理は無かろうが。戦意喪失という意味で、多少は味方の心証も考慮はして貰えないものか、彼はその様な事を考えた。ジョナサンに遺恨のあったルヴィアですら呆けていた。と言うよりは、今までの真也と目の前の真也のギャップが激しすぎたのである。

「最低」

グレイの好感度――である。踏まれ続けたジョナサンは顔半分埋めていた。見ればルヴィアも奪還されている。形勢逆転だ。クククク、彼は笑い始めた。それは嘲笑だ。己への、世界への。つい、ほんの一刻前まで彼は圧倒的なまでに有利であった。それが理不尽なまでに引つ繰り返された。これが笑わずには居られるか。

「この展開だ。漸く手に入れた力も無力化される。打ち拉がれる」

腕を組み、首を傾げ、見下ろす真也は侮辱の体だ。馬鹿にしているとも言えよう。

「理解していない様だから言ってる。強いる強いられるのは、誰かの影響を受ける、誰かに影響を与えるって事だ。上司には上司が居る。酒、八つ当り。性格の弱い奴は更に弱い対象を見付け出す。学校、職場、軍隊、家庭。何処でも誰もが経験するありふれた事だ。お前は自分を2流だと言ったがな、一般の人から見ればお前は力を持つモ

ノだ。魔術師が魔術を行使する動機は、某の問題に直面するからだ、暗示、使い魔、これ等を使うお前は誰かを強いていた。強いる奴が許せない？ 馬鹿も休み休み言え。自分が強いのは良い、自分が強いられるのは嫌だなんて、ただのガキの戯言だ」

「生を受け20年間、一瞬たりとも強い事がない、酔い痴れた事がないとも言うつもりか。どの口で説法を垂れる」

「確かに俺は他者に強い事があつた。昔の俺は人情的な意味での善悪に欠けていてね。ただ妹の爲つてそれだけだつた。それが治つたのは3年前。国と家を飛び出した俺は正直に言うとお前の様に感じた事がある。勝てない癖に仕掛けてくる連中を、馬鹿な奴だと心の何処かで笑つていた。けどな。世の中には俺らより強い存在が居る、事実俺はそいつらにボコボコにされた。

旅で学んだ事は二つ。強い力を手に入れても、より強い何かに対峙すれば愚図りだす。最も欲しいモノは腕力では手に入らない。それどころか扱いきれず逆に壊すだけだ。お前が教授の近くで得た安らぎは、力を得る前だつただろ。その悩みは所詮その程度だ。お前は昔の俺だ。だから俺はお前を負かして、その代わり助けてやる」

真也は眼鏡を取ると人差指を立てた。その眼が狙うはジヨナサンの心臓に巣くう呪い、牙である。

「負け？ 助けてやる？ 傲慢もここまですれば哀れみすら浮ぶ……自分の道すら選べ

ぬ男が、戯言を！」

翼音が響き渡れば。何処に隠れていたのか、下級悪魔である無数のウコバクが現れた。その群れは二手に分かれ、片方は真也を襲ったが、エルメロイらにも向かった。それは陽動である。ウコバクにまみれた真也の隙を突き、ラ・ヴォワザンがジヨナサンを抱え跳躍、助け出した。その死徒は戦闘続行スキルを持っていたのである。

「良いタイミングです。ミセス」

助け出したは良いものの、彼女は疲労・損耗が激しい。

「それは良いが。ご主人様よ。これからどうするつもりだい。言っておくが私はもう動けないよ」

「私のモットーはフェイル・セーフ、それをお忘れですか？」

「……………え？」

真也は左手のウコバクを振り回し、異なるウコバクに叩き付けた。右手でウコバクを掴み、他のウコバクに投げ付けた。その時だ。七人目はいない、そう思っていた真也の心臓が、強く打った。彼が見るジヨナサンはラ・ヴォワザンの胸に手を埋め込むと、白いモヤの様な固まりを取り出した。死徒の絶叫が聞こえる。

「これで7人目！」

彼はラ・ヴォワザンの魂を喰らった。シエルに襲わせたのは手を煩わせない為の安全

策であった。真也は強引に踏み込んだが下級悪魔の数が多い。群れではなく最早固まりだ。取り付かれれば、タツクルを受けるラグビー選手に他ならない。真也の視界の先にジョナサン・スコットが槍を己の心臓に向けていた。真也の声はありつただけだ。

「やめろ！ 戻れなくなる！」

ジョナサンは真也を一瞥した。迷っている、ならばまだ間に合う。

「あそこに立つ男を見ろ！ お前は教授を乗越えたくないのか！ ジョナサン・スコット！ お前はロード・エルメロイを諦めるのか！」

エルメロイを見たジョナサンは、泣きながら己の心臓を貫いた。その涙の意味はなんだったのか。

「父上、お待たせしました」

心臓に牙を突き立て依り代（巫女）となる。これは聖杯の欠片を埋め込まれた、かつての桜と一緒に。魂（魔力）を喰らって内包する、冬木市における聖杯システムの小聖杯と同じ。サーヴァントか魔術師かの違いである。ただこのままではジョナサン・スコットと言う巫女をモレクが乗っ取っているのみだ。モレクそのものは依然霊体のままであり、依り代がヒトのままではその影響力は限定的。それ以上を望むならばモレクは本来の肉を持つ必要があるが、冬木の聖杯の様に第3魔法、つまり受肉に相当するシステムが無い。それを補うのが槍だ。死と復活の概念を持つそれは、ジョナサンを殺

し、転生する。ここに墮天使モレク復活の儀式が成ったのである。  
それはぎよろりと彼らを見下ろした。

つづく！

## 十六話 死者との別れ

槍が貫くジョナサンの胸がひび割れる。グレイが下級悪魔たちの迎撃をする中。

「真也！」

凜はガンドを打ちつつ霊刀を投げれば、真也はそれを受け取った。ルヴィアの右手に鉱石（いし）三つ。一つはラリマー、水系最強の浄化力を有する。そしてエンジェライトは許しと咎人、アポフィライトは浄化。その複合概念は、清らかな水を以て、咎人の罪を浄化する。火属性悪魔（ウコバク）に対する彼女の最大攻撃だ。

「Call. Three stone dance in gorgeous. To become one to coalesce, Sing!」  
 （三重の石よ、舞い踊りて共に成れ。謳え！）

ルヴィアの行使した魔術は青の色。彼女のリボンと同じ、最高位の色である青だ。その輝く青に晒されたウコバクたちは、砕け、霧散していく。真也は踏込み、抜刀。マスの目の様に走る剣閃がジョナサンと隔てる最後の群れを断ち切った。

最大速度を持ち、ジョナサンを貫く槍を引き抜いた。華奢な身体は宙に浮き、仰け反った。心臓の亀裂が広がり、その隙間から赤黒い光を放つ。それは夜空を走る、イル



ミネーション用のレーザーに似ていた。空洞全体を赤黒い光りが満ちる。それは血で満たされる杯のよう。

もはや槍に意味は無く、ジョナサンの巫女としての役割は終わった。彼の身体はただの起点である。その概念を殺そうとすれば、ジョナサンの身体は竜巻の様な炎に包まれた。赤黒い光りの中にそれはぼんやりと立っていた。

それは雄牛の頭を持っていた。角は二つで有機的な曲線を描く、それは天使たちを買いた。屈強な上半身を持ち腕は4本あった、それは天使たちを引裂いた。下半身は生け贄を喰らう青銅の釜だ。釜の奥に見える炎は、地獄（ゲヘナ）の劫火に違いない。

曰く、人身御供の血にまみれ、親たちの流した涙を全身に浴びた恐るべき王。

曰く、天において戦った天使のうち最も強く、最も獰猛な者。

人は忌み嫌う。

涙の国の君主

空中に浮かぶその頭は高さ20メートル以上。想像以上であった。正に認識の外。かつてサーヴァントと対峙したエルメロイですら、恐怖するには十分であった。そう。目の前の墮天使は英霊のデッドコピーなのでは無い。聖槍によって復活した英霊そのものだ。

ここで倒さねば成るまい。完全に復活する前に倒さねば成るまい。仮に世に解放た

れば被害がどれ程広がるか見当も付かない。幸いにしてそれは復活の途中。完全に実体化したのは頭部のみ。首から下は未だ霊体だ。ならばその力も不完全の筈。エルメロイは霊刀を持ち背を向ける真也にこう言った。

「トオサカシンヤ、」

「駄目です教授。死の線・点が見えない。俺よりこの悪魔の方が格上です」

真也の母である千歳は聖杯によつて復活した英霊だ。つまりモレクと同格。人間とのハーフである真也は1ランク落ちる。第5次聖杯戦争の折、真也がバーサーカーのゴッドハンドを殺せたのは、冬木市のサーヴァントが劣化コピーであった為だ。

「ならば正攻法でいくしかあるまい。シスター・シエル。休憩はここまでにして頂く」

「ロード・エルメロイ。貴方は人使いが荒いです」

「苦情なら後ほど伺おう」

彼女は第七聖典を構えていた。

「レディ・エーデルフェルト、ミス・トオサカ」

二人はグレイと真也に強化呪文を施した。凜の支援魔術を受けた真也は（筋力A+

／耐久A）／敏捷A++）となるが、魔眼は使えない。シエルは（筋力A

／耐久C）／敏捷B）とそのままだ。強化の二重掛けが出来ないのである。その手にあ

るのは第七聖典（セブン）。グレイはルヴィアの支援魔術を受け（筋力A）／耐久A

／ 敏捷B) となった。

3人の戦力は一軍に相当するだろう。逆にこれで倒せねば後がない。死徒27祖は何を考えているか分らない。よしんば倒そうとするにしても連係などしないだろう。真祖も同様だ。魔法使いたちなら或いは、だが。エルメロイの苦悩をよそに、凜は悪態をつく。

「くっそー。こんな事なら宝石剣もって来るんだったわ」

凜は受肉しつつあるモレクを睨み付けた。

「ねえルヴィア。モレクって火属性でしょ？ 水属性の石を分けてくれない？」

「アクアマリンとブルートパーズのみですわ。私にも余裕はありません」

「なによ、用意が悪いわね」

「そういう貴女はどうなのかしら」

「ラピスラズリだけよ」

「呆れた。貴女こそ準備が成っていないじゃない」

「うっさい。こうなる事が分ってたら私だってフル装備してきたわよ」

意外と呑気な魔女二人にエルメロイも腹を括った。

「シスター・シエルとトオサカシンヤは斬り込み隊だ。レディは遊撃。レディ・エーデルフェルト、ミス・トオサカは支援とする。防御・攻撃の判断は任せる」

彼は葉巻を一つ噴かした。

「掛かれ」

凜とルヴィアは偉そうにと思ったが、いま言う事ではない。



モレクが吠えた。まさに魔牛の咆哮だ。余りの強さに地が奮えた。洞窟を貫き、山を貫き、天を突かんばかりである。

シエルと真也が踏み込んだ。舌を垂らすモレクは二人の人間もどきを見た。掴み喰らいたいが生憎と腕はまだ肉となつていなかった。口から炎を吐けば二人は消えていた。散開、左右からの夾撃である。

真也は三角飛びの要領で、壁を蹴り、霊体の腕をすり抜け、モレクの首に斬り付けた。彼はその首を落とすつもりであった。だがその刃は薄皮を切ったのみである。モレクは首を振り回し真也を弾き飛ばした。ハエを払う馬の尾そのものだ。その隙に乗り、シエルが辛うじて霊体である胸部に取り付いた。トリガーを引く。

第七聖典は転生批判。そして霊体に強い効果を持つ。彼女はそれを狙ったのだ。炸薬音。撃ち出された杭は確かにダメージを与えたが数%にも満たないだろう。2発目

を狙う前にモレクの胸は肉となり、同じく肉となった肩にシエルは振り払われた。

「くっ！」

岩盤に叩き付けられる直前の、シエルを受け止めたのはグレイであった。モレクを見上げる真也は、何を思ったのかエルメロイに歩み寄る。彼はモレクを横目に見ながらこう言った。

「教授。駄目です。文字通り歯が立たない。第七聖典を50発以上撃てば何とかなるかも知れませんが、その間に受肉が終わる」

「絶望的な進言だが、代案がありそうな顔だな」

「グレイさんのロンゴミニアド使用を具申します」

「発動させる魔力が無い、そう伝えた筈だが忘れたのか。そもそも担い手ではないお前に扱う事は出来ない。パスを繋ぐにしても、」

「ええ。連戦に次ぐ連戦で、俺ももうガス欠です。宝具を発動させるほど残っていない」  
モレクは鳩尾まで肉となっていた。直に腕を持つだろう。

「何を考えた」

「リバプールでトマス・ニルセンが使った術式を使います」

「馬鹿を言うな。理屈には沿うが人間の魂一人分を魔力に変換したところで、」

エルメロイがそこまで言うのと口を閉ざした。

「他に方法がありません。この状況に持込んだのは俺であり教授だ。最後までつき合ってください」

聞き咎めたルヴィアの声は慌てていた。

「シンヤ、お待ちなさい。その意味を理解しているのかしら」

「もちろん。俺の魂を魔力に変換し宝具の燃料にあてる。サーヴァントの魂なら人間の比じゃないからな」

ルヴィアと凜が息を呑んだ。そうかもしれない、とは考えていた。だが言葉として突きつけられれば動揺はする。

「魔力の収集効率を考えても宝具ぐらい何とかなる。上手くいけば二発ぐらい撃てるかも知れない」

「真也、アンタ」

凜は震えていた。真也は近い彼女に向き合うと笑って言った。

「姉さんは知りましたがよな。白状するよ。オセはオーディーンの墮落した悪魔なんだけど、そいつが俺を眷属だって言ったんだ。イリヤは真たる聖杯の降臨を示唆していた。お袋はおそらくワルキューレの一人。強いのもどこか変なのも道理だ。これが蒼月の魔術の秘密。もう分ったろ。俺は人間じゃなかった。お別れだマスター。一緒に居たのは一年間だけだったけれど楽しかった」

真也は上着を捲り上げると、人差指を靈刀に押し付けた。指の血で左胸に魂喰いの術式を描く。彼のその手を握り、止めたのは凜である。

「なによ、それ。格好つけのつもり？」

「俺があのととき生き延びたのはマスターのおかげだ。それを返す。それにマスターを死なせたとあつては、ランサーに何を言われるか分からない」

「私をマスターだなんて呼ばないで。言つた筈よ、真也がアンリマユだつたとしても私にとつては真也だつて。真也はどう？　サーヴァントだから、私がマスターだから、私を好きになつた訳？」

「俺は、」

「俺は？」

この状況で何を呑気にしているのか、エルメロイは苛立ちを籠めてこう言つた。

「お取り込み中済まないが、水を差させて貰う。ミルトンの失樂園第6巻。モレクは天使ガブリエルに腰のあたりまで斬切り裂かれて殺された。このモレクが聖堂教信者の信仰力を受けた結果ならこの概念武装が使えるはずだ。白羊宮は火星（凶星）ではあるが、熾天使（セラフイム）の月でもある。ガブリエルは熾天使（セラフイム）の一人だ」

エルメロイは腕時計に目を通した。

「今日は4月20日だが直に日が変わる。白羊宮の季節が終わる前に片を付けろ。迷っている時間はない、さっさとやれ」

凜と真也が見合うと、二人はモレクに対峙した。モレクの咆哮が響けば巨石が飛来してきた。シエルがそれを蹴りで碎く。モレクの左腕が受肉し、投げ付けたのである。右腕の受肉は間もないだろう。

「凜。腕があつては失敗する恐れがある。キャスターに頭を下げよう」

真也のキャスター発言にエルメロイのコメカミが引き攣った。正直頭の血管が切れそうだ。

「冗談。試験は突破するわよ」

「勝算があるって顔だな」

「私が隙を作るから、真也は安心してガブリエルの真似事をしなさい」

彼女は振り返り、エルメロイを挑発する。

「教授。ここからは遠坂家のオンステージです。下手に手を出されると、邪魔ですので脇役はすつ込んでいてください」

「状況に応じて判断を下す」

凜は真也に向き合いその胸板を拳で叩いた。活を入れである。

「私がぶつばなすから真也は牽制」



「分つた。その後には斬り付けければ良いんだな」

そう言うとは真也は踏み込んだ。彼を見送る凜の黒く長い髪は、モロクから吹き出すゲヘナの熱風で、はためていた。

「モロクだかモロクだか知らないけれど派手にいくわよ」

彼女が取り出したのは五つの石だ。

「Fretus (応じよ)」

五つの石が魔力を帯び宙に浮く。手の平に踊るそれは円軌道で回転し始めた。彼女の視界には倒すべき敵と、大地と壁と天井を蹴り、矢のように空を駆ける彼の姿があつた。凜は既にモレクの間合の内だが不安は無い。ふと思えば並び立つ共闘はこれが初めてだ、彼女はそんな事を考えた。唱える呪いは古の言葉。

Confracta est terra, dignum. (地は碎けて、一となる)

Aqua in ignem, et erit. (水は燃えて、一となる)

Flamma Frigidus et erit. (炎は凍り、一となる)

Ventum evasit, et unus. (風は淀み、一となる)

Sic aelum est Ochire, partem fieri. (空が

落ちれば、一となる)

Et ludat ac ludat. (回れ。回れ)

Redeo ad omnesque trahant. (然れば、全ては渦に帰す)  
 ルヴィアどころかエルメロイすら、呆気にとられた。魔術刻印も回路も使用しない、言語にのみ構成される魔術。凜の唱えたそれは高速神言だったのである。彼女の手にあるのは五つの石。

土属性の黒曜石。

水属性のラピスラズリ。

火属性のロードナイト。

風属性のムーンストーン。

空属性のシトリン。

それぞれ異なる属性の鉱石が崩壊し、混ざり合えばそれは第一質料（プリマ・マテリ  
 ア）に遡る。それは万物を構成する元素であり、転じてそれに触れた物質は崩壊するの  
 みた。アベレージワンの真骨頂である。

「Last Whirl! (最も深い渦)」

彼女の撃ち込んだそれはありとあらゆる光りが混ざっていた。称せばホワイト・ノイズが適当だろう。それがモレクを包込む。天井に取り付き退避していた真也は呆れを隠さない。キャスターに師事し、彼女は3年でそれを体得したのだ。教え方が上手いの

か、凜の資質が並外れていたのか、どちらでも良いが、天才とは彼女の様な人物を指すのだろう。

閃光が収まる際。真也の眼下に左半身を白色化させたモレクが立っていた。凜の魔術は極短時間のみ行使に止まったが効果は十分だった。シエルと真也ですら受け付けなかったその身体はダメージを負っていた。特にその左腕は損傷が激しい。片目を失っては遠近感は掴めまい。真也は天井の岩盤を砕く程に踏抜くと跳躍した。

モレクの咆哮が響く。それは人間への怒りか、敗北への苛立ちか、それとも。熾天使（セラフィム）の一人であるガブリエルの加護を受けた真也は、モレクの左肩から脇腹まで斬り裂いた。悪魔の絶叫はそれこそ呪詛の様だ。モレクが崩れ落ちると、その衝撃で第3の間の底が抜けた。墮天使は再び墮とされたのである。

モレクと共に落下しつつある真也の眼はジョナサンの姿を認めた。それはモレクの鳩尾であった。致死の傷がモレクの全体を冒しつつあるが、その死がジョナサンに到達する前であれば助けられる。そうするべく真也が崩落する岩の一つに着地、跳躍する直前だ。

「きゃあー！」

忘れえぬ声が聞こえた。彼は目を疑った。朽ちかかったモレクの左手が凜を掴んでいたのである。魔術を行使する為近付いていた彼女は崩落に巻きこまれたのだった。

力を使い果たしたのか、彼女は藻掻くのみである。真也は選択に迫られた。

大丈夫だ。ジョナサンを斬り抜いた後に凜を助ければ良い。墜落までまだ時間はあ  
る。二人とも助けられる。ただ凜の救出確率が10%ほど落ちるだけだ。いや、数%に  
満たないだろう。そう、たかが数%だ。それを我慢すれば、認められれば、あの背中に  
手が届く。彼はその僅かな確率を許容できなかった。

一閃。

モレクの左腕を断てば、それは威を失う。解放され宙を舞う凜を抱き抱えると、斬り  
落とした腕を踏み台にし跳躍。真也は壁面に霊刀を突きつけ、取り付いた。凜の命の重  
さを左腕に感じつつ、振り返ればモレクが落ちていった。それは3年追い掛けた槍兵の  
背中でもあった。今真也は一つの選択を成したのである。

ランサーには成れない、今まで誤魔化し続けてきたが今度ばかりは誤魔化しようが無  
い。シエルは殺そうと思えば殺せた、ただ殺さなかつただけ。ルヴィアを見捨てようと  
思えばできた、ただしなかつただけ。凜を見捨てようと思えば……出来なかつた。考え  
る事すら出来なかつた。それは最後であり、決定的であつた。夢にまで見た槍兵との決  
別である。凜は真也の涙を指で拭うと彼を抱き締めた。



モレクの落下した空洞の底、それから戻った真也の両腕にはジョナサンが居た。正確にはジョナサンだったモノだ。モレクの依り代であり、核であった彼はモレクの死に飲まれた。ただモレクの復活が途中であつた為に、その影響は中途半端に終わった。彼は死んでいない、いや。死に損なつたが正しいだろう。

手足は溶け辛うじて四肢の痕跡が見受けられるのみだ。顔も同じだ。鼻、耳は溶けて無い。顔の凹凸すら見分けにくい。眼球はなく、その代わりに膜が覆っていた。唇の上下には破れたストッキングの様な膜が張っている。人間のなり損ないの様な生物である。凜は念話を使いキャスターを呼び出した。

『一応聞くけれど、何とかなる?』

『ジョナサン・スコットという存在自体が欠損しています。私の魔術でもマスターの魔眼でもロンギヌスの槍でも欠けたモノを補う事は出来ません。補つたとしても、それは別の誰かです』

真也は彼をエルメロイに渡した。その物体は蠢き、よく分らない音を発していた。エルメロイはそのイキモノを地に降ろすと、拳銃を額に突きつけた。エルメロイの存在を辛うじて覚えていたそれは、良く分らない音を出した。皆には理解できなかったが、エルメロイにはそれが聞き取れた。

“あー、先生、先生だ”

「済まない。他に何か、方法があつたかもしれない。それに気がつかなかつたのは私のミスだ」

“先生ごめんなさい”

エルメロイは引き金を引いた。

「シスター・シエル。資格も立場も無い事は分つているが彼を弔つては貰えないだろうか」

身を起した彼は教鞭を奮う何時もの彼であつた。ただその心中を代弁するかの様にグレイは師の手を握っていた。

「分りました。銃声が鎮魂歌など寂しすぎますから」

戦場であり祭壇でもあつた地の底に、弔いの炎が燃えていた。エルメロイ、グレイ、ルヴィアらが葬儀の列を成している。シエルは厳かに鎮魂の歌を響かせていた。離れて見るのは真也だ。彼は岩に腰掛け無言だつた。凜は彼の隣に腰を下ろしていた。彼女もまた葬儀の列を見詰めていた。葬儀に参列など出来ない。二人は彼を殺した張本人だ。

助ける筈だつた。助けられなかつたのでは無い。助けなかつた。二人を助けられる可能性があつた。ただ彼女を助ける可能性がほんの少し落ちるだけ。そのほんの少し

が受入れられなかった。なぜだ。決っている。真也の声は懺悔のよう。それはジョナサン・スコットであり、ランサーであり、彼自身に向けたモノだった。

「焼付く程に強烈な生き方に当てられて、腕っ節だけは競っていたから、手に届く、そう思った。多分届きかけた。でも諦めた。俺もジョナサン・スコットと同じだ。越えるべき背を諦めた」

「馬鹿ね。諦めたんじゃないかって私を選んだって事でしょ。彼は教授じゃなくてお父さんを選んだだけ」

「ならこの結果の差はなんだ。どうして彼は死んで、俺は生きている」

「母さん言ってたわよ。どれだけ願っても父さんは応えてくれなかったって」

「それで？」

「死んだ人に頼るのは止めた」

「そうか、俺は死んだ人間を追い求めたのか。夢を見ていたんだな。ごめん」

「別に怒ってないわよ。でも少し疲れたわね」

凜は彼の肩に頭を置いた。

「ああ」

吊いの煙は天に昇る事はなく、そのカタコンベにたゆたい続けるだろう。

つ  
づ  
く  
!



## エピソード

聖杯戦争終結後。真也たちは事後処理のため時計塔に戻った。事情聴取が待ち受けていたがエルメロイの配慮で事なきを得た。誤魔化すのに難しい点はシエルの名前を持ち出し押し切った。聴取できるモノならしてみろ、と言う事だ。シエルが関わっていた事実は魔術協会側も把握していた為、それ以上の追及はされなかった。ロンギヌスの槍は契約に従い彼女に引き渡された。別れ際にシエルは三咲町に遊びに来いと真也を誘ったが彼は判断しかねている。トラブルと言う意味だ。

クロムウエルの遺産である霊脈は未解決のままだ。真也は執着しなかったが凜は取り分を主張した。順当であれば正規の参加者であるルヴィアかエルメロイがその権利を有するが、天使の知識という聖杯戦争は偽りであった為に、その所有権を巡り審議中だ。何より解決したのは凜と真也に寄るところが大きい。

それから1週間が経った。奇しくも、真也の書いた手紙の通り、予定通りの一ヶ月である。そこは時計塔の正門前。初めて時計塔を訪れた時と何一つ変わらないと言うのに、真也には少し小さく見えた。そして集いしはここに残る者たちと帰る者たちである。真也はいつか買ったスーツ姿だ。真紅の外套はもう衣類としての機能を有してい

なかつた為である。

真也がグレイとヘルメス、そしてエルメロイに別れを告げれば、目の前にルヴィアが立っていた。彼女は伏せ眼がちで神妙な態度で畏まる。何時になくしおらしい。これが彼女の本質なのかもしれない、真也はそんな事を考えた。

「あの時の返事をするよ。ルヴィアゼリッタ・エーデルフェルト、今度こそお別れだ」

彼は預かつていた通信用複合鉱石を差し出した。彼女は黙って受け取った。その手にある鉱石を暫く見詰めた後、彼女は顔を上げた。それは彼女の精一杯の笑顔である。

「シンヤ。ちゃんと気持ちを伝えなさいな」

「何のこと？」

「姉とは義姉弟で、その前はそういう関係だった。腑に落ちましたわ。シンヤの姉に對する言動はどこか違和感がありましたもの。臆病ですわよ」

「いつぞやの仕返しと言う訳か。けどな。俺は怖くて言えないのでは無く、3人に義理がある」

「サクラさんとアヤコさんだったかしら。であれば尚更ですわね。かつて誰かを傷つけた悔いた真也は誰かを選び傷つけるのが怖い。だから皆の前から立ち去ろうとした。ですがシンヤ。それをされた彼女らが傷つかないと思っっているのかしら」

反論できなかつた。

「はつきりしてくれないと私も立ち止ったまま。シンヤは犠牲者をもう一人増やすというの?」

継いだのはエルメロイだった。

「トオサカシンヤ。我々の知恵と認識、他者に対する影響力、そして理解力に限界がある以上間違いは免れない。私の選択の結末は君が知る通りだ。私は生涯を掛けてジョナサン・スコットという男を背負うだろう。悔いはあつて当然、重要な事はそこから何を見出し、掴み取るかだ。表層の悔いに囚われ、本質的な悔いに目を背ける事は、愚かだとは思わないか」

「年長者の経験ですか」

「もつと単純だ。間違いを犯したくなくなければ何もせぬ事だ。引籠もり何もせず誰とも関わらない。だがそれは生を持つモノとして余りにも不毛であり、命に対し侮辱的だ。この星には60億の人間が居る。君一人の幸、不幸など誰も関知しない。どうせ間違えるなら好きにするべきだろう」

一拍。真也は二人に頭を下げた。

「それでは失礼します」

「この結果を知らせなさいな、でないと押し掛けますから」

「出来の良い生徒より、出来ない生徒を指導する方がやりがいがある。君ほど手間の掛

かった生徒に覚えはない。近くに来る事があるなら顔を出せ」

真也は3週間過ごした時計塔を後にした。



時計塔とヒースロー空港を繋ぐバス停に、凧とキャスターは立っていた。意気軒昂と旅行鞆に腰を下ろすのが凧であり、その傍で嫺やかに立つのがキャスターである。二人が話し合うのはモレク戦に関するアフター・ミーティング、つまりは反省会だ。弟子の話聞いたキャスター思わず目眩を起した。倒れていてもおかしくはない程だった。

「……つまり凧様は敢えてモレクに捕まったと」

「ああでもないしと理解しないじゃない。真也は馬鹿なんだから」

「凧様。魔術師は運という要素を極力排除するべきです」

「勝負の掛けどころだったって事。いつも万全な体勢が取ればベストだけれど、現実はそのじゃないでしょ?」

キャスターが指南を始め3年経つが、目の前の若い魔女は根本的に何か異なる。これでは魔術師と言うより率いる者に近い。今までに無いタイプであり、少なくとも彼女は知らなかった。だからこそキャスターは凧の指導役を買ったのだ。彼女はこの魔女

の行く末に興味を持ってるのである。安定さえすれば、一皮剥けるだろう。だがそれはそれだ。言うべき事は言わねばならないのである。

「成功率3割以下のあの術式を実戦投入する、マスターのランサーへの想いを打ち砕く。偶々上手くいったから良い様なものの、一歩間違えば最悪の結末を迎えるところだった。これを理解しておいでですか」

「確証はなかったけれど、確信はあったわよ。真也と繋がってからポカミスは綺麗になくなったから」

「凜様の不運をマスターに押し付けた、と解釈できますわね」

「そうとも言えるかしらね」

「凜様は良い魔女になりますわ」

「止めてよ。メディアに言われると自信ついちゃうじゃない」

暫くすると真也がやってきた。凜の前に立つ彼は随分と神妙な態度である。ゴタゴタが続いたが、彼にとっては凜と決別した状態のままなのだ。

「凜。俺は、」

やはり帰りたい、そう繋げるべく絞り出したその決意は。

「なら帰るわよ」

とキャンセルされた。訳が分らない。

「……なんですか」

「名前で呼ばれるのは3年ぶりだから」

「それがどうその発言に繋がる」

「レディ・エーデルフェルトの元に行くのは真つ赤な嘘。ほつぱり出してライダー辺りと落ち着いても腹が立つし、桜と綾子の二人が根を上げるのを待ちましょ。ほら、バスの運転手が睨んでるから。早く乗りなさい」

「凜の説明は足りていない。はいそうですかと納得できるか」

「もう、良いって言ってるのよ。しつこいわね」

「ふざけんな。どれだけ悩んだと思ってる。あんな追い込む様な真似されて、なんの説明も無いまま取り消しとか、こんな馬鹿げた話があるか」

「四の五の言わず、言う事を聞けっつーの」

ブロロ。付き合いきれないとバスは立ち去ってしまった。

「キャスター、何か言ってくれ」

そう言えば彼の従者は楚々と笑っていた。

「……二人ともグル？」

キャスターがそれを認めれば、凜はあははと笑い出す。

「私がキャスターと合流した時点で気がつきなさいよ」

怒りが込み上げる。それは噴火直前の火山の如く。

「あら、いやだ。涙目じゃないこの子ったら」

止めが彼女の挑発だ。不遜。慣れた筈のその性質が今日という今日は我慢できない。彼は踵を返した。振り返つたのは日本とは逆方向である。

「さよならだ。お元気で、お姉様。この地球の何処かで幸せを祈っている」

彼は手足を大きく振って歩き始めた。黙つてその後を追う凜は、勿論ニヤ付いていた。この期の展開など、彼女にとつて手の平の上だ。

「さつさと家に帰れ。付いてくるな」

「真也を連れ帰る、みんなにそう言つて来たのよ。手ぶらで帰れる訳無いじゃない」

「だったら何であんな事言いだした」

振り返つた真也の顔はマジ怒りであった。凜はそれに屈する事無く言い返した。怒りにも見えた、拗ねているようにも見えた。

「なによ。他の娘といちゃついている真也が悪いんじゃない。宙ぶらりんにしておいて、2年間帰りを待つて、家を守つて、余所の娘が心配とか。ふざけるなっつーの」

「言つて置くけれど、俺はなにもしてない」

「前から思つていたんだけど、イヤらしい事しなければ、何してもいいとか、許されるとか思つてる?」

「コミユニケーションってそんなモノだろ。いちいち目くじら立てられたら、おちおち会話もできない」

「私が居るのに他の娘に一生懸命。そうね。例えば私が衛宮君に一生懸命だったら、真也はどう感じる？」

それは誰もが持つ当然の感情だった。嫉妬と不安である。

「……悔しかったか」

「辛かったわよ、当然じゃない」

「……そう」

「真也は聖杯戦争中も、一緒に暮らしてからも、いつも私から一步離れてそれ以上近付いてこなかった。アンタは私を不安にさせてばかりで全然安心させてくれない。それでも私は戻ってアンタの面倒見て、これだけ譲歩してあげたんだから逆に感謝してほしい位ね」

彼は凜を見た後に空を見上げた。それは二つ目の選択である、否。選択は既に為されているならば、単に胆力の問題だ。

「スコットさんは本当は教授を選びたかっただと思っただけだ。だから喰うのを先延ばしに続けた。俺と彼の違いはほんの少しだ。教授は教授でしか居られなかったけれど、凜は手をさしのべてくれたからな」



「なによ、何時になく要領を得ないわね。言いたい事があるなら明瞭に言いなさいよ」  
彼は丹田に力を込めると彼女に向き直った。その手を握り締めれば凜は戸惑うばかりなり。

「あのさ、凜。どうせだからロンドン観光していかないか。ここまで遅れたんだから3、4日構わないだろ」

「なにそれ」

「デートのお誘い」

彼女は呆けたが直ぐに何時もの挑発的な笑みを浮かべた。

「今頃手の平返しても、そうはいかないんだから。相応の対価は要求するわよ」  
「分った。プラチナリングでどう？」

凜は今度こそ固まった。一拍。彼女は真っ赤となった。

「あ、え、と。そのの、意味分ってる訳？」

鮮やかな逆転劇に、キャスターは吹き出した。

「ほら。俺が誰かとくつつけば、諦めが付くつてやつ。それを凜に頼みたい。財布に危険手当て入手した残金が1000ポンドぐらいあるから買いに行こう」

思いも寄らない急展開に凜は絶句していた。キャスターが凜の背中を押した。

「凜様。マスターは腹を括ったという事ですね。停止していません、気の利いた返事を

するべきです」

「あ、あのね。そんな急な話、受け入れられる訳無いでしょ。第一、心の準備だってあるんだから」

「勢いも大事だってね。俺、凜の事が好きだ” 3年前はこう言った」

「……良く覚えてるわね」

「今度はこう言う。凜、俺と死ぬまで一緒に歩いてほしい」

「回りくどいし、随分と素っ気ない」

「お望みならシエイクスピア調にもできるけれど」

「良いわよ。嘘ならどちらでも同じだから」

「んー、ならこうするか」

彼は凜の肩を掴むと引寄せた。彼女が最後に見たのは、彼の蒼い眼であった。どちらかが一方的ではなく、足りない者同士が、漸く向き合い、噛み合った瞬間である。二人の空は晴れていた。



そして遠坂家。その台所で忙しく動くのは桜である。揺らすのはもちろん桜色の

エプロンだ。これから帰るといふ兄からの手紙が届いたのは三週間前。その後、姉が迎えに行き、帰国が遅れるとキャスターから連絡があったのは2週間前だ。トラブルでは無いのか。そう問いつめれば何時もの事だと、キャスターは言ったが相応に違いない。姉も居る、なによりキャスターも居る。聖杯戦争級のトラブルでも無い限り大丈夫だ、そう己に言い聞かせたが不安は募る。

それから暫く経ち、兄が何処かへ行つてしまふ、根拠のない不安に駆られた彼女はライダーを連れて迎えに行こうとした。その矢先であつた。トラブルが終わつたとキャスターから国際電話があつた。それが一週間前。これから飛行機に乗ると電話があつたのは昨夜である。溜飲が下がつた。時計を見ればもうじき兄が帰ってくる時間だ。食卓に並ぶ桜お手製の一品はそう言う事である。ズラリと並ぶそれを見た葵は呆れを隠さない。

「カレライスに鶏の唐揚げ。味噌田楽にペペロンチーノ。そしてハンバーグ……桜。意図も気持ちも分るのだけれど少し落ち着きなさい。幾ら真也さんの好物でも食べられないわ」

「だつて母さん。二年ぶりなんです。我慢できなくて」

（真也さんに料理を作るのが、二年ぶりだと言いたいのだろうけれど。世話焼き好きもここまで来ると感心するやら、呆れるやら、困るやら）

葵はため息を吐くより他はない。

「ところで桜。綾子さんは？」

「連絡したから、もうそろそろ来ると思う」

そして呼び鈴が鳴った。遠坂家の玄関が開けば現れたのは凜と真也であった。勿論背後にキャスターも控えていた。凜は呆れを隠さない。

「なんで自分の家なのに呼び鈴鳴らすのよ」

「ほら、この家に居たのは一年で、二年間ふらついて。だから新鮮みたいな」

「自分の部屋は覚えてるでしょうね」

「もちろん。階段上がって奥から2番目だ」

「間違えて隣の私の部屋に入ったらただじゃおかないから」

「間違えたりはしませんよ」

「そう。堂々としてくるって事」

「ノックぐらいするさ」

パタパタとスリッパの音がすれば義理の妹が立っていた。シフォンワンピースはゆったりとしていて尚、エレガンスさがあった。最後に会ったのは17歳。2年経てば19歳。変わって当然である。努めて陽気に手を振れば。

「タダイマー」

「兄さん！」

彼女は駆けより飛び付いた。彼は義理の妹を軽く抱き締め、頭を撫でた。腕の中の妹は泣きじやくつていた。

「ごめん桜。遅くなつた」

「お帰りなさい真也さん」

その声の方を見れば義母が立っていた。柔らかい笑みに、何時もの楚々とした立ち振舞いである。

「ただいま戻りました。葵さん」

「一年オーバーした事についてお話しがあります、と言いたいですが取りあえずゆっくりして下さい」

然すれば頬を抓られた。

「い、いひやいいいいいいいっ！」

粘土を摘み、引き千切るかの様である。じんじんと痛めば、真也は涙目だ。

「無事で何よりです、シンヤ」

その指の主はライダーであった。何時か見た様に、かつて見た様に、デニムと薄紫のチュニック姿である。活動的な中にも知的さと艶めかしさを感じさせる着こなした。た。

「……帰宅を迎える挨拶が先じゃないのか」

「2年もほつつき歩いてきた、放蕩長男にはここが落としどころでしょう」

「おしかりなら今度にしてくれ。今アレをされると倒れる」

「それは残念です。密室で一晩中の濃密な時間を期待していたというのに」

桜は兄から離れると目尻の涙を拭った。

「兄さん。ご飯の用意が出来ますから、手を洗って来て下さい」

「ん。直ぐ行く」

突っ込みを入れたのは凜であった。

「私の時と再会の態度が違うわね」

「桜と同じようにしてくれれば同じように接する。2年ぶりの再会がルヴィアと喧嘩な

んでどうすれば良いんだか」

「冗談。私は桜じゃ無いんだから」

「知ってる。だからそのままがいい」

「ねえ兄さん。姉さんの左薬指にあるモノって何ですか」

一転。底冷えのする義妹の声である。真也がギリギリと錆びたロボットの様に首を動かし、凜を見れば彼女は左手で髪を背に流していた。朗らかな笑顔であったが、あから様である。髪を手櫛で梳く振りをし、あからさまに見せ付けていた、と言う意味だ。

勿論その見せ付ける対象は桜である。

「ねえ兄さん。指輪に見えるのは気のせい？」

彼は文句の一つでも言いたくなくなった。どの様に説得するか、説明するか、練っていた段取りが台無しである。葵とライダーも呆けていた。

「隠す事は無いわよね？」

無慈悲な凜の促しに彼はもう一度腹を括った。括らざるを得なかった。

「……桜。実はな」



「桜、綾子、濟まない！」

彼は深々と頭を下げた。そこは遠坂家の二階、黒皮のソファとローテーブルが置かれた部屋だ。リビングとも言うが、その部屋に千歳を除く、遠坂家の全員と＋アルファが揃っていた。今までに何度か開かれた家族会議であるが、今日に限っては裁判の様相を見せていた。

真也の隣に居る凜は「ごめん。コレもらっちゃった」とあつけらかなとしていた。二人の神経を逆撫でする行為は控えるべきだ、と心底思う真也であった。矛先は己に向く

と決っている。事実真也の前には、不倶戴天の敵を目の前にした様な二人がいた。葵とライダーにも思うところがあるが、二人が優先だろうと、とりあえずは静観している。キャスターは元より干渉するつもりはないらしい。

「これはどういうことよ……」

悪魔も逃げ出しそうな剣幕なのは綾子である。真也が身を起せば、綾子の瞳は、刃物の様に光っていた。まるで魔眼を持つ両儀の御嬢さんのよう。デニムのミニにパーカーと。彼女は普段着であったがメイクは相応だ。2年ぶりの再会に、さりげなさど気合いを両立させようと苦心した後が窺える。それがとても心苦しい。

「凜にプロ、」

「聞きたくない!」

「あ、いや、聞いて欲しい」

綾子を継いだのは桜だ。

「ずるい! 姉さんばかり! 妹だからダメ、ダメって言ったのに!」

「ごめん。桜。本当にごめん」

「姉さん! その指輪を渡して!」

「イヤ」

「私に渡しなさい!」



「イヤ」

「やっぱり私も迎えに行くんだった！」

桜は泣きながら部屋を飛び出した。桜は取り敢えず済んだ。言うべき事を伝えたと言う意味であり、この後の事は取り敢えず棚上げだ。差し当たりの問題は目の前の綾子である。彼女は怒り収まらんと、怒髪天を衝く勢いだ。事実髪が逆立っている、様に見えた。

「真也。聞きな。私怒ってんのよ」

「綾子の怒りは尤もだと思う」

「なら撤回して」

「ごめん、それは出来ない」

「撤回しろ」

「ごめん」

パキポキと綾子が指を鳴らせば真也は観念し立ち上がった。綾子は右腕をかざし踏み込んだ。彼女の拳は真つ直ぐな線を描き、つまり右ストレートが真也の顎にヒットした。彼は逆らう事無くひっくり返った。避けるつもりはなかった。堪えるつもりもなければ、この結果は突然である。仰向けの真也を見下ろすのは勿論綾子だ。

「ねえ、真也。真也が私に何て言ったか覚えてる？」

「俺に気にせず他の奴を捜してくれ」

「その前」

「美綴を選んだ」

「それっていつ？」

「12年前。8歳の時」

真也が冬木にやってきたその一年後である。

「色々してあげたわよね？」

「ああ。色々助けて貰った」

「確かに、真也は私に何もしなかったし、私に気づいてからも他の奴を捜せって言い続けた。でも真也には3人しか居なくて、その内2人はきょうだいで、なら何時か私が、そう思っても責められない、そう思わない？」

「責められない、そう思う」

「私は12年待ったから、もう10年ぐらい待つつもりだった。その報いがこの仕打ち？」

「ごめん」

「こ、この最低野郎！」

綾子は馬乗りになると再び右拳を打ち込んだ。続いて左拳を打ち込んだ。右、左、右、

左。真也はただ殴られ続けた。その様はまるでメトロノーム。彼女自身、手も痛いだろうに、それでも泣きながら殴り続けるならば、真也に為す術などない。甘んじて受けるのみだ。

「帰せ！ 私の12年間かえしてよ！」

「ごめん」

タタタと廊下を走る気配がする。近付いてくる。誰だろうか。桜に決っている。葵、キャスター、ライダー、凜の4名は、桜が包丁を持ち出したのだろうと予想した。殴られ続ける真也もそう思った。一刺し位なら甘んじて受けると覚悟すれば。義妹が持ってきたのは包丁などではなく、真紅の魔槍ゲイボルクであった。

「ちよ、」

流石の真也も青ざめた。

「兄さんなんか殺しちゃうんだから！」

「桜、遠慮はいらないからな！」

「ゲイ、」

「やめ、それは洒落になら無い！」

「ボルク！」

真名解放、は成らなかつた。桜の構える槍は沈黙していた。

「ま、気合いで宝具が発動できれば苦労はないわよね」

凜は指摘したが、手助けする気は無いらしい。ならばこの魔槍を突き立てるのみだ。桜が踏み込めば、流石に困ると真也は逃げ出した。一人と二人はその部屋をグルグルと駆け回る。そして部屋を飛び出し、遠坂邸を舞台とした逃走劇、否。追跡劇が繰り広げられた。

「ゲイボルク！ ゲイボルク！ ゲイボルクーツ！」

「殺すから逃げるな！ この乾屎けつ（かんしけつ）野郎！」

修羅場に圧倒されていた葵であったが、嵐が去った事を契機に呟いた。

「キヤスターさん。真也さんは大丈夫でしょうか」

「心臓さえ突かれなければ問題はありません。3, 4刺しで桜様も綾子様も落ち着かれるでしょう」

緊急の問題はクリア。次の問題は上の娘である。彼女は凜を睨み付けた。

「どうしてこうなったの。理由を話しなさい」

流石に気まずいのか、経緯を話す凜はしどろもどろである。それを聞いた。葵とライダーは言葉を失った。ライダーは軽蔑の眼差しだ。

「リン、人はそれをゴネ得と言います」

「駆け引きって言って欲しいわね」

鬼の居ぬ間にも言うだろうが、凜は3人の中では最も現実的な感性を持つ娘だった、葵はそれを思い出した。凜が迎えに行くこと決った時点でこの展開は予想するべきだったのだ。

「他に隠している事はないわね？」

「それが、その」

「言いなさい」

「ごめん、母さん。やっちゃった」

葵の娘は下腹部にそつと手を添えれば、嬉し恥ずかしの体である。再び沈黙。葵もまた腹を括った。選択を先送りした3年前、来るべき時が来たと言う事である。

「また役所の人に白い目で見られるわね……」

そう零せば、突然人差し指を顎に添えた。

「あら。長男が長男のままなのだから、今のままでも良いのかしら」

「葵様、お茶でも如何ですか」

「兄さんなんか死んじゃえー！　ばかー！　つ！！」

「死ね、このロクデナシッ！」

彼の悲鳴は衛宮家まで届いたと言う。



梅雨の前である5月は最も過ごしやすい季節だ。暑くもなく寒くもなく。雲は無く、頭上には澄んだ青空が広がっていた。正に五月晴という言葉が相応しい。それを仰ぐは衛宮邸である。ピンポンと呼び鈴が鳴った。余りの清々しさに応じたセラの振る舞いも軽快だ。だが彼女が玄関の扉を開ければ台無しである。何故ならそこに包帯男が立っていた。

「何かご用ですか、遠坂真也。ミイラ男が歩いて良い時間ではありませんが」

その言葉の節々も刺々しい、否。刺々しさを隠してすらいない。セラは柔らかなブラウスと、ふわりとしたロングスカートを纏っていた。露出も少なく、ブラウンのエプロンを着ければ、喫茶店の女主人とも、若奥様とも称せよう。

「久しぶりだセラ。3年も経つのにまだ根に持つてるのか」

「根などに持つておりません。ただ疎ましいと思っっているのみです。今ひとつ。馴れ馴れしく名前で呼ばないでください」

「士郎に用があつてきた」

「シロウ様に用などありません」

「士郎、様？ 前はフルネームで抑揚無くエミヤシロウと呼んでなかったか？」

「遠坂真也に関わり合いのない事です」

「まあ良いけれど。とにかくバカシロはどこだ」

セラのコメカミが引き攣った。土郎を馬鹿呼ばわりとは聞き捨てならないが、生憎と目の前の男には魔術は効かないのだ。だもので合法手段に訴えるのみである。

「警察を呼ぶとします。それとも大声が適当でしょうか」

「強制排除できないからって、それは陰湿すぎるだろ」

一触即発の雰囲気のをらげたのはリーゼリットである。彼女はセラの背後からひよっこりと顔を出した。

「シンヤ、こんにちわ。おかえり」

彼女は肩を大胆に見せる半袖シャツを纏い、ボトムはショートパンツで、美脚を惜しげも無く見せていた。相応に色気を醸し出していたが、勿論彼女にその自覚はない。真也は努めて朗らかに。

「よー。リーゼリット。家主はいるか？」

「居間が上がって。呼んでくる」

彼女がトタトタと家の奥に向かえば、真也は意地の悪い顔だ。

「リーゼリットの方が人間できてるな」

「殺され掛けた相手に愛想良くなどできるものですか」

「やっぱり根に持つてるじゃん」

衛宮家の居間は相変わらず風通しの良い家だった。何一つ変わっていない様に見えたが、よく見れば少し変わっていた。真也の記憶という意味に於いて、この家には無かった物が置いてあったのである。例えば育児雑誌、例えばおむつ。その家には若葉の匂いがあった。

襖が開けば現れたのはセイバーである。淡い黄色のワンピース。襟のない長袖は白を基調としたブルーの横縞が入っていた。顔立ちは何も変わっていないが、その表情は随分と柔らかい。長くなった金の髪はうなじで簡単に結いられていた。その彼女が赤子を抱けば、どの様に解釈しても幼妻が適当だろう。セイバーの青いリボンにちくりと心が痛んだ。ルヴィアのリボンも青だったと言う意味である。

「シンヤ、久し振りだな」

「2年ぶりだ。セイバー。アルトリアの方が良いか」

「好きな方でいい」

母に抱かれるその幼子は真也を凝視していた。真也は紙袋を漁るとぬいぐるみを取り出した。

「はい、セイバー。これはイチローへの御土産だ」

「これは、熊か？」



「パディントン君。ブリテンで話題沸騰のぬいぐるみだ」

「そうか。それはありがたく頂戴する」

「そのしゃべり方、結局そのままか」

「正そうかとも思ったが、シロウがそのままで良いと、な」

士郎がお茶と茶請けを持ってくれれば。

「士郎、お前にはこれだ」

真也が袋からスマイル缶バッジを取り出せば、士郎の額に叩き付けた。だが受け止められていた。士郎とて真也の動きは追えない。ただ、そうするだろうと読んだのである。真也は心底悔しそうだ。

「……相変らず腹の立つ洞察力だな。セイバーの直感スキル級だろ」

「お前は単純だからな。そんな大層なモノは要らない」

士郎はそのバッジをじつと見ると胸に付けた。気に入った様である。

「不意打ちを見抜く、嫌がらせを気に入る。相変らず嫌な奴」

「お互い様だろ。ところで真也。おまえ包帯だらけだな」

「桜と綾子が怒つてな。未だ口をきいてくれない」

「帰国して早々喧嘩したのか。何したんだ」

「その事なんだが……実は折り入って二人に話す事がある。お土産はついでだ」

「なんだ畏まって。気持ち悪い」

「下手に出ればこのバカシロが……」

「シロウ」

「分ってる」

「済まないシンヤ。続けてくれ」

阿吽のやり取りに毒気を抜かれた真也は居住まいを正した。

「実はだな」

「あー」

「あー?」

何事かと視線を下げれば、胡坐をかく真也の前に幼子が立っていた。一郎である。目が合った。

（見てる、めっさ見てる……）

その瞳を例えれば純真無垢。己の汚れつぷりを、自覚させられている様で、落ち着かない真也であった。幼子が言う。

「あー」

真也が答えた。

「……あー」

士郎は言い捨てた。

「馬鹿か。おまえ」

「うっさい。未知との遭遇なんだ」

「あー、うー？」

「言っておくが、イチローよ。幾ら俺でも赤ちゃん語は話せないぞ」

その子は真也の脚の上に登ると、きやつきやと笑い出した。セイバーと士郎が見合うと、彼女はこう微笑んだ。

「シンヤを気に入ったようだ。抱いてやってくれ」

「え」

彼が恐る恐る抱き抱えれば頬を引つ張られた。

「い、いひやい」

その子はきやつきや、と笑い出す。一郎と真也を見る士郎は難しい顔だ。拗ねているとも言えよう。

「なんか、俺よりイチローの機嫌が良い気がするの、は気のせいかな？」

セイバーは士郎を諭すよう。

「男児は父に反発するものだ。何より、イチローにとってはシンヤは兄の様なものだからな」

「……俺が真也の親父って？ 冗談は止めてくれセイバー」

真也は何か嫌みを言ってくる、そう士郎が身構えれば、彼は存外真摯な顔だった。

「なあ士郎。父親になった時、どんな気分だった？」

彼は戸惑いつつも自信を持ってこう言った。

「ほんの少しだけ大人になれた、そう思う。この子の父親は世界中を捜しても俺しかないから」

「そうか、そうだよな……イチロー、いひゃい」

「きやつきや」



私たちは帰国したその半年後に式を挙げた。純白のドレスに身を包む私のお腹は半年分だ。まごう事なきデキ婚である。真也は士郎に散々茶化され、その都度言い争っていた。

桜は一人暮らしを始めた。社会勉強が建前だが、その実恋人探しである。兄よりいい男を見付けるのだそう。私が言うのも何だが切にそう願う。心配だと桜に付いていったライダーであるが、帰るべきか悩んでいる。大半がライダーに心移りをしてしまう為

だ。彼女は世の中の男共の不甲斐なさに痛く嘆いていたが、それも酷だろう。彼女の容貌に心移りしない男が最初のステップだと私は思う。そのライダーには未だゴネ得だと嫌味を言われる。駆け引きだと当初は言い返していたがもう止めた。

綾子は3人娘と合コンをして知り合った人とよく遊びに行くと言っている。ルヴィアにもそう言う人ができたらしい。何の因果か二人の相手は赤毛だそうだ。

死んだ人は応えない、この答を求めてキャスターは旅に出た。真也が暇をだしたのであるが、その資金は千歳さんが渡したものであつた。ヘソクリに憤りもしたが、従者への報いと言われれば、文句も言えようも無い。その旅程は1年の計画であつたが、キャスターはハワイで豪遊し早々に帰つてきた。結局彼女は葛木先生の墓を守つてゐる。

帰国して暫く経つたころ、真也は工房に籠もつた。霊刀に向い剣を置くべきかと瞑想してゐたのだが、数時間経たず工房から出てきた。腹が減つたから、だそうだ。適当に食べさせたら突然働き始めた。新都の食堂でアルバイトだ。調理補助から始めたが、今ではそれなりに任せて貰つてゐるらしい。もともと器用ではあつたが、素質があつたのだろう。それでも料理長に毎日怒鳴られ、不満を零している。不思議な事に、士郎と味付けが似てゐた。

その真也は何時か店を開くと息巻いてゐる。もう店名は決つていて、その名も沈黙のレストラン。一線から離れた軍人が経営する店という設定で、いつか「こんなところで

燻ぶつていやがったか”と誰かが戦いに誘いに来るシチュエーションを期待しているとか。全く以て馬鹿な夫である。真也はわざと馬鹿を演じていると母さんは言うが私は信じていない。私がリビングに腰掛け、その子をあやしているとその母さんがやってきた。

「真也さん遅いわね。もうそろそろ帰ってくる筈なのに」

私の部屋には大きめのベッドと格子付きのベッドが二つある。それはあれから変わった事の一つだ。この家から家族が二人減って、一人増えたのである。その格子付きのベッドには蘭(Run)と刻まれている。

「ねえ、母さん。父さんが今の私を見たら嘆くわね。きつと」

「そうかもね。でもあの人は10年間、私がどれほどお願いしても助けてはくれなかったわ。だからこれからも黙って見ててもらいましょ」

私の腕で眠る、私たちの娘は、槍兵の刻んだルーンの石がお気に入りだ。

おしまい。

なあキャスター、ライダー。今でも俺は父親を知らない方が良いと思うか？

私は問題ないと考えます。ライダーはどうかしら。

今ならば問題は無いでしょう。キャスターに賛同します。

何故その判断が今出来る。

今のシンヤであれば父という存在を客観的に捕らえられるでしょうから。

マスターに自覚はありませんでしたが、マスターはランサーに父親像を求めています。強く、正しく、子を守り、導く存在。それは子が父にもつ理想そのものです。

シンヤ、子は親を神格化します。成長し、親を個人として認めるとき親離れとなりま

す。

マスターがランサーという個人を認め、尚且つ己の道を歩み始めた今なら、その資格を有するでしょう。

……言ってくれ。何所の誰だ。

マスターのお父上は、別の世界の、この世界に居る方とは別の可能性を持ったお方です。お名前は――